

茨城県教育財団文化財調査報告第73集

一般県道西小埜真岡線道路改良
工事地内埋蔵文化財調査報告書

裏山遺跡

平成4年3月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第73集

一般県道西小埜真岡線道路改良
工事地内埋蔵文化財調査報告書

うら やま
裏 山 遺 跡

平成 4 年 3 月

財団法人 茨城県教育財団



裏山遺跡全景



第125号土坑遺物出土状況

序

茨城県は、産業、経済の発展に伴い、交通量の著しい増加による交通渋滞の緩和と地域の活性化を図るため、県内の道路の整備を進めております。一般県道西小埜真岡線道路改良工事もその一環として計画されたものです。その予定地内には、埋蔵文化財の包蔵地である裏山遺跡が確認されておりました。

このたび、財団法人茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査について委託契約を結び、平成2年4月から平成2年7月にかけて一般県道西小埜真岡線道路改良工事地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

本書は、裏山遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な資料として、また教育、文化向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査および整理にあたり、委託者である茨城県はもとより茨城県教育委員会、岩瀬町教育委員会をはじめ、関係各機関および関係各位から御指導、御協力を賜りましたことに対し、深く感謝の意を表します。

平成4年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 礒 田 勇

例 言

- 1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成2年度に発掘調査を実施した茨城県西茨城郡岩瀬町大字磯部字裏山539-25番地ほかに所在する裏山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 裏山遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	磯田 勇	昭和63年6月～	
副 理 事 長	小林 元	昭和63年4月～平成3年7月	
	角田 芳夫	平成3年7月～	
常 務 理 事	小林 洋	平成元年4月～平成3年3月	
	本田 三郎	平成3年4月～	
事 務 局 長	一木 邦彦	平成元年4月～	
埋 蔵 文 化 財 部 長	石井 毅	平成2年4月～	
企 画 管 理 課	課 長	北沢 勝行	平成2年4月～
	課 長 代 理	水飼 敏夫	平成2年4月～
	主 任 調 査 員	小山 映一	平成2年4月～平成3年3月
	主 任 調 査 員	根本 康弘	平成3年4月～
	係 長	園部 昌俊	昭和63年4月～平成3年3月
	主 事	飯島 康司	平成3年4月～
	主 事	吉井 正明	平成元年4月～
	主 事	大貫 吉成	平成2年4月～
調 査 課	課長(部長兼務)	石井 毅	平成元年4月～
	調 査 第 二 班 長	中村 幸雄	平成2年度
	調 査 員	鯉淵 和彦	平成2年度調査
	調 査 員	黒沢 秀雄	平成2年度調査
整 理 課	課 長	沼田 文夫	平成2年4月～
	調 査 員	黒沢 秀雄	平成3年度整理・執筆・編集

- 3 本書に使用した記号等については、第4章第1節の遺構・遺物の記載方法の項を参照されたい。

目 次

序

例 言

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査方法	8
第1節 地区設定	8
第2節 基本層序の検討	8
第3節 遺構確認	9
第4節 遺構調査	9
第4章 遺構と遺物	10
第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法	10
1 遺跡の概要	10
2 遺構・遺物の記載方法	10
第2節 縄文時代の遺構と遺物	17
1 竪穴住居跡	17
2 土坑	29
3 屋外炉	96
第3節 弥生時代の遺構と遺物	97
1 竪穴住居跡	97
第4節 古墳時代の遺構と遺物	100
1 竪穴住居跡	100
第5節 平安時代の遺構と遺物	195
1 竪穴住居跡	195
第6節 その他	209
1 土坑	209

2 塚	215
3 道路跡	216
4 掘立柱建物跡	218
5 遺構外出土遺物	221
第5章 考察	224
第1節 縄文時代	224
1 土器について	224
2 遺構について	225
(1) 竪穴住居跡	225
(2) 土坑	226
第2節 弥生時代	234
1 土器について	234
2 竪穴住居跡	234
第3節 古墳時代	234
1 遺物について	235
2 竪穴住居跡と集落について	242
第4節 平安時代	247
1 土器について	247
2 竪穴住居跡と集落について	248
結語	252
写真図版	

插图目次

第1图	裏山遺跡周辺遺跡分布图	6	第38图	土坑出土土器実测图(縄文 3)	64
第2图	調査区呼称方法概念图	8	第39图	土坑出土土器実测图(縄文 4)	65
第3图	基本土層图	8	第40图	土坑出土土器実测图(縄文 5)	66
第4图	遺跡全体图	15~16	第41图	土坑出土土器実测图(縄文 6)	67
第5图	第6号住居跡実测图	18	第42图	土坑出土土器実测图(縄文 7)	68
第6图	第6号住居跡出土遺物拓影图	18	第43图	土坑出土土器実测图(縄文 8)	69
第7图	第15号住居跡実测图	19	第44图	土坑出土土器実测图(縄文 9)	70
第8图	第15号住居跡出土遺物拓影图	19	第45图	土坑出土土器実测图(縄文 10)	71
第9图	第21号住居跡実测图	20	第46图	土坑出土土器実测图(縄文 11)	72
第10图	第21号住居跡出土遺物実测・ 拓影图	21	第47图	土坑出土土器実测图(縄文 12)	73
第11图	第37号住居跡実测图	23	第48图	土坑出土土器拓影图(縄文 13)	77
第12图	第37号住居跡出土遺物実测・ 拓影图	23	第49图	土坑出土土器拓影图(縄文 14)	78
第13图	第38号住居跡実测图	24	第50图	土坑出土土器拓影图(縄文 15)	79
第14图	第38号住居跡出土遺物拓影图	25	第51图	土坑出土土器拓影图(縄文 16)	80
第15图	第41号住居跡実测图	26	第52图	土坑出土土器拓影图(縄文 17)	81
第16图	第41号住居跡出土遺物拓影图	26	第53图	土坑出土土器拓影图(縄文 18)	82
第17图	第44号住居跡実测图	27	第54图	土坑出土土器拓影图(縄文 19)	83
第18图	第45号住居跡実测图	28	第55图	土坑出土土器拓影图(縄文 20)	84
第19图	第45号住居跡出土遺物実测・ 拓影图	28	第56图	土坑出土土器拓影图(縄文 21)	85
第20图	土坑実测图(縄文 1)	46	第57图	土坑出土土製品実测图(縄文 22)	90
第21图	土坑実测图(縄文 2)	47	第58图	土坑出土石器・石製品実测图(縄文23)	91
第22图	土坑実测图(縄文 3)	48	第59图	土坑出土石器・石製品実测图(縄文24)	92
第23图	土坑実测图(縄文 4)	49	第60图	土坑出土石器・石製品実测图(縄文25)	93
第24图	土坑実测图(縄文 5)	50	第61图	土坑出土石器・石製品実测图(縄文26)	94
第25图	土坑実测图(縄文 6)	51	第62图	土坑出土石器・石製品実测图(縄文27)	95
第26图	土坑実测图(縄文 7)	52	第63图	第1号屋外炉実测图	96
第27图	土坑実测图(縄文 8)	53	第64图	第30号住居跡実测图	98
第28图	土坑実测图(縄文 9)	54	第65图	第30号住居跡出土遺物拓影图	98
第29图	土坑実测图(縄文 10)	55	第66图	第36号住居跡実测图	99
第30图	土坑実测图(縄文 11)	56	第67图	第36号住居跡出土遺物実测・ 拓影图	99
第31图	土坑実测图(縄文 12)	57	第68图	第1号住居跡実测图	101
第32图	土坑実测图(縄文 13)	58	第69图	第1号住居跡出土遺物実测图(1)	102
第33图	土坑実测图(縄文 14)	59	第70图	第1号住居跡出土遺物実测图(2)	103
第34图	土坑実测图(縄文 15)	60	第71图	第4号住居跡実测图	106
第35图	土坑実测图(縄文 16)	61	第72图	第4号住居跡出土遺物実测图(1)	107
第36图	土坑出土土器実测图(縄文 1)	62	第73图	第4号住居跡出土遺物実测图(2)	108
第37图	土坑出土土器実测图(縄文 2)	63	第74图	第4号住居跡出土遺物実测图(3)	109
			第75图	第7号住居跡実测图	112
			第76图	第7号住居跡出土遺物実测图	113

第77図	第9号住居跡実測図	115	第111図	第25号住居跡出土遺物実測図(1)	167
第78図	第9号住居跡竈実測図	116	第112図	第25号住居跡出土遺物実測図(2)	168
第79図	第9号住居跡出土遺物実測図(1)	117	第113図	第27号住居跡実測図	171
第80図	第9号住居跡出土遺物実測図(2)	118	第114図	第27号住居跡出土遺物実測図	172
第81図	第10号住居跡実測図	120	第115図	第28号住居跡・竈実測図	174
第82図	第10号住居跡出土遺物実測図	121	第116図	第28号住居跡出土遺物実測図	175
第83図	第11号住居跡実測図	122	第117図	第29・35号住居跡実測図	178
第84図	第11号住居跡出土遺物実測図(1)	123	第118図	第29・35号住居跡竈実測図	179
第85図	第11号住居跡出土遺物実測図(2)	124	第119図	第29・35号住居跡出土遺物 実測図(1)	180
第86図	第12・20号住居跡実測図	126	第120図	第29・35号住居跡出土遺物 実測図(2)	181
第87図	第20号住居跡竈実測図	127	第121図	第29・35号住居跡出土遺物 実測図(3)	182
第88図	第12・20号住居跡出土遺物 実測図(1)	128	第122図	第31号住居跡実測図	185
第89図	第12・20号住居跡出土遺物 実測図(2)	129	第123図	第31号住居跡竈実測図	186
第90図	第12・20号住居跡出土遺物 実測図(3)	130	第124図	第31号住居跡出土遺物実測図(1)	187
第91図	第13号住居跡・竈実測図	134	第125図	第31号住居跡出土遺物実測図(2)	188
第92図	第13号住居跡出土遺物実測図	135	第126図	第33・34号住居跡実測図	190
第93図	第14号住居跡実測図	137	第127図	第33号住居跡竈実測図	191
第94図	第14号住居跡出土遺物実測図	138	第128図	第33・34号住居跡出土遺物 実測図(1)	192
第95図	第16・40号住居跡実測図	140	第129図	第33・34号住居跡出土遺物 実測図(2)	193
第96図	第16・40号住居跡出土遺物実測図	141	第130図	第42号住居跡実測図	194
第97図	第17号住居跡実測図	143	第131図	第42号住居跡出土遺物実測図	194
第98図	第17号住居跡竈実測図	144	第132図	第2号住居跡・竈実測図	196
第99図	第17号住居跡出土遺物実測図(1)	145	第133図	第2号住居跡出土遺物実測図	197
第100図	第17号住居跡出土遺物実測図(2)	146	第134図	第3号住居跡・竈実測図	199
第101図	第18・19・32号住居跡実測図	150	第135図	第3号住居跡出土遺物実測図	200
第102図	第18・32号住居跡竈実測図	151	第136図	第5号住居跡実測図	202
第103図	第18・19・32号住居跡出土遺物 実測図(1)	152	第137図	第5号住居跡竈実測図	203
第104図	第18・19・32号住居跡出土遺物 実測図(2)	153	第138図	第5号住居跡出土遺物実測図	204
第105図	第18・19・32号住居跡出土遺物 実測図(3)	154	第139図	第8号住居跡実測図	206
第106図	第22・26号住居跡実測図	158	第140図	第8号住居跡出土遺物実測図	206
第107図	第22・26号住居跡出土遺物 実測図	159	第141図	第23号住居跡実測図	207
第108図	第24・39号住居跡実測図	162	第142図	第23号住居跡出土遺物実測図	208
第109図	第24・39号住居跡出土遺物 実測図	163	第143図	土坑実測図(その他 1)	210
第110図	第25・43号住居跡・竈実測図	166	第144図	土坑実測図(その他 2)	211
			第145図	土坑実測図(その他 3)	212
			第146図	土坑実測図(その他 4)	213
			第147図	土坑出土遺物実測図(その他)	214

第148図 第1号塚実測図	216	第166図 裏山X V期(鬼高3期)土器群(2)	241
第149図 第1号塚出土古銭拓影図	216	第167図 古墳時代住居跡分布図	242
第150図 第1号道路跡実測図	217	第168図 裏山X期(五領期)住居跡 長軸方向	243
第151図 第1号道路跡出土古銭拓影図	218	第169図 裏山X I期(和泉1期)住居跡 長軸方向	243
第152図 第1号掘立柱建物跡実測図	219	第170図 裏山X II期(和泉2期)住居跡 長軸方向	244
第153図 第2号掘立柱建物跡実測図	220	第171図 裏山X III期(鬼高1期)住居跡 長軸方向	244
第154図 遺構外出土遺物実測図	222	第172図 裏山X IV期(鬼高2期)住居跡 長軸方向	245
第155図 土坑の形態規模分類	228	第173図 裏山X V期(鬼高3期)住居跡 長軸方向	246
第156図 時期と断面形	230	第174図 裏山X VI期(平安時代)土器群	248
第157図 縄文時代住居跡・土坑分布図(1)	231	第175図 平安時代住居跡分布図	249
第158図 縄文時代住居跡・土坑分布図(2)	231	第176図 裏山X VI期(平安時代)住居跡 長軸方向	249
第159図 裏山X期(五領期)土器群	235		
第160図 裏山X I期(和泉1期)土器群	236		
第161図 裏山X II期(和泉2期)土器群	237		
第162図 裏山X III期(鬼高1期)土器群	238		
第163図 裏山X IV期(鬼高2期)土器群(1)	239		
第164図 裏山X IV期(鬼高2期)土器群(2)	240		
第165図 裏山X V期(鬼高3期)土器群(1)	240		

表 目 次

表1 裏山遺跡周辺遺跡地名表	7	表4 土坑形態分類一覧表	229
表2 縄文時代土坑一覧表	42	表5 平安時代住居跡一覧表	251
表3 土坑一覧表	209		

写真図版目次

PL 1 裏山遺跡全景	住居跡
PL 2 遺構確認状況・遺跡遠景	PL14 第20号住居跡遺物出土状況・竈遺物出土状況, 第12・20号住居跡出土遺物
PL 3 第1号住居跡・遺物出土状況・出土土器	PL15 第13・37号住居跡, 第13号住居跡竈・遺物出土状況
PL 4 第1号住居跡出土遺物, 第2号住居跡・竈	PL16 第13・37号住居跡出土遺物, 第14号住居跡・遺物出土状況
PL 5 第2号住居跡出土遺物, 第3号住居跡・出土遺物	PL17 第14号住居跡出土遺物, 第15・16・40・41号住居跡, 第16号住居跡遺物出土状況
PL 6 第4号住居跡・遺物出土状況・出土土器	PL18 第16・40号住居跡出土遺物, 第17号住居跡
PL 7 第4号住居跡出土遺物	PL19 第17号住居跡遺物出土状況・出土土器
PL 8 第5号住居跡・竈・出土遺物	PL20 第17号住居跡出土遺物
PL 9 第6・7・8号住居跡, 第7号住居跡遺物出土状況, 第7・8号住居跡出土遺物	PL21 第18・19・32号住居跡, 第18号住居跡竈, 第19号住居跡遺物出土状況, 第18・32
PL10 第9号住居跡・竈・出土遺物	
PL11 第10号住居跡・遺物出土状況・出土遺物	
PL12 第11号住居跡・遺物出土状況・出土土器	
PL13 第11・36号住居跡出土遺物, 第12・20号	

	号住居跡遺物出土狀況, 第 32 号住居跡竈		・ 80 ・ 95 ・ 127 号土坑, 第 23 号土坑遺物
PL22	第 18 ・ 19 ・ 32 号住居跡出土遺物		出土狀況
PL23	第 21 号住居跡・出土遺物, 第 22 ・ 26 号住居跡	PL42	第 39 ・ 40 ・ 41 ・ 42 ・ 43 ・ 44 ・ 45 ・ 46 ・ 47 ・ 48 号土坑, 第 37 号土坑遺物出土狀況
PL24	第 22 ・ 26 号住居跡遺物出土狀況・出土遺物		況
PL25	第 23 ・ 42 号住居跡, 第 23 号住居跡竈遺物	PL43	第 57 ・ 58 ・ 59 ・ 60 ・ 61 ・ 66 ・ 137 号土坑, 第 46 ・ 52 ・ 59 号土坑遺物出土狀況
	出土狀況・遺物出土狀況・出土遺物		
PL26	第 24 ・ 39 号住居跡・遺物出土狀況・出土遺物	PL44	第 65 号土坑遺物出土狀況, 第 68 ・ 77 ・ 78 81 ・ 139 号土坑
PL27	第 25 ・ 43 号住居跡, 第 25 号住居跡遺物出土狀況・出土土器	PL45	第 88 ・ 90 ・ 91 ・ 92 ・ 94 ・ 95 ・ 99 ・ 119 ・ 149 号土坑
PL28	第 25 号住居跡出土遺物	PL46	第 120 ・ 121 ・ 122 号土坑, 第 121 ・ 125 号土坑遺物出土狀況
PL29	第 27 号住居跡・遺物出土狀況・出土遺物	PL47	第 103 ・ 104 ・ 105 ・ 106 ・ 110 ・ 114 ・ 115 号土坑, 第 109 ・ 115 号土坑遺物出土狀況
PL30	第 28 号住居跡・遺物出土狀況・出土遺物	PL48	第 123 ・ 124 ・ 125 ・ 126 ・ 141 ・ 142 ・ 144 ・ 145 ・ 151 ・ 161 号土坑, 第 1 号屋外炉
PL31	第 29 ・ 35 号住居跡, 第 35 号住居跡遺物出土狀況	PL49	土坑出土土器(1)
PL32	第 35 号住居跡出土土器, 第 29 ・ 35 号住居跡出土遺物	PL50	土坑出土土器(2)
PL33	第 35 号住居跡出土遺物	PL51	土坑出土土器(3)
PL34	第 30 ・ 31 号住居跡, 第 31 号住居跡遺物出土狀況	PL52	土坑出土土器(4)
PL35	第 31 号住居跡出土遺物, 第 33 ・ 34 号住居跡・遺物出土狀況	PL53	土坑出土土器(5)
PL36	第 33 ・ 34 号住居跡遺物出土狀況	PL54	土坑出土土器(6)
PL37	第 33 ・ 34 号住居跡出土遺物	PL55	土坑出土土器(7)
PL38	第 38 号住居跡・出土遺物, 第 45 号住居跡・出土遺物	PL56	土坑出土土器(8)
PL39	第 1 ・ 4 ・ 5 ・ 6 ・ 7 ・ 10 ・ 12 ・ 13 ・ 14 号土坑, 第 7 号土坑遺物出土狀況	PL57	土坑出土土器(9)
PL40	第 14 ・ 15 ・ 16 ・ 17 ・ 19 ・ 20 ・ 21 ・ 22 ・ 73 ・ 74 ・ 153 号土坑	PL58	土坑出土土製品, 土坑出土石器・石製品(1)
PL41	第 25 ・ 26 ・ 28 ・ 29 ・ 30 ・ 31 ・ 35 ・ 36	PL59	土坑出土石器・石製品(2)
		PL60	土坑出土石器・石製品(3)
		PL61	第 1 号塚・出土遺物, 第 1 号道路跡・出土遺物, 第 1 ・ 2 号掘立柱建物跡
		PL62	時期不明土坑出土遺物, 遺構外出土遺物

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

一般県道西小埜真岡線は、岩瀬町と栃木県真岡市とを結ぶ主要な道路である。本路線は、近年、50号国道と真岡市を結ぶ道路として交通量が増加しており、さらに、岩瀬町磯部地区付近は狭隘で危険である。そこで、茨城県は、道路網の整備を図るために、この付近の道路の改良工事を計画した。

工事に先立ち、昭和63年10月31日、茨城県は、道路改良工事予定地内における埋蔵文化財の有無について茨城県教育委員会に照会した。同年11月8日に、茨城県教育委員会は、道路改良予定地内に所在する遺跡の現地踏査を実施した。その結果、茨城県教育委員会は、工事予定地内に裏山遺跡の存在を確認し、同年11月9日にその旨を回答した。茨城県教育委員会は、文化財保護の立場から裏山遺跡の取り扱いについて、平成2年2月7日、茨城県と協議を重ねた結果、現状保存が困難であるとし、記録保存の処置を講ずることとなり、調査機関として茨城県教育財団が紹介された。茨城県教育財団は、茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を結び、平成2年4月1日から6月30日まで、裏山遺跡の発掘調査を実施することとなった。

調査進行に伴って、多数の住居跡や土坑の存在を確認した茨城県教育財団は、期間内での調査終了が困難と判断し、茨城県及び茨城県教育委員会と協議し、調査期間を7月31日まで延長し調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

裏山遺跡の発掘調査は、平成2年4月1日から同年7月31日までの4か月にわたって実施した。以下、調査の経過について、その概要を記述する。

4月前半 6日に現地踏査を行い、9日から発掘調査を開始するための諸準備をし、10日から作業を開始した。事務所用地の整地や調査区域内の清掃、除草、整地等の作業を実施しながら、発掘調査の円滑な推進と作業の安全とを祈って、13日に鍬入れ式を挙行した。

4月後半 トレンチによる試掘を行い、遺構の確認された部分については、拡張して試掘を続けた。

5月前半 重機による表土除去、遺構確認作業を実施し、14日から住居跡の掘り込みを調査区域南側から北へ向かって進めていった。15～16日に、基準杭打ち（茨城県技術公

社)を実施した。

5月後半 調査区域南側東辺より北へ向かって調査を継続し、29日から塚、土坑、道路跡等の調査を開始した。

6月前半 多数の住居跡や土坑の存在が確認され、当初予定した6月30日までの期間内では調査終了が困難であることが確認されたので、4日に茨城県、茨城県教育委員会及び茨城県教育財団の3者による協議が行われた。その結果、7月末日まで調査期間が延長された。

6月後半 住居跡や土坑の掘り込み、実測及び写真撮影を行った。

7月前半 5日で住居跡の調査をほぼ終了させ、引き続きフラスコ状土坑の調査を行った。

7月後半 16日から写真測量を行い、同時に土坑の掘り込み、実測及び写真撮影を行った。21日に、現地説明会を開催し、180名を上回る参加者があり、裏山遺跡発掘調査の成果を広く一般に公開した。25日に航空写真を撮影した後、補足調査及び資料整理を行い、30日には、埋め戻し等の安全対策を行い、4か月にわたる裏山遺跡の調査を一切終了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

裏山遺跡は、西茨城郡岩瀬町大字磯部字裏山 539 - 25 番地ほかに所在している。

当遺跡の所在する岩瀬町は、茨城県の中西部に位置し、県都水戸市から町の中心部までは約 30 km である。町域は、東西約 14 km、南北約 11 km、面積は約 86.83 km²で、人口は 23,599 人（平成 3 年 12 月現在）である。町の東は羽黒山を境として笠間市に、西は平野がひらけ協和町に、南は加波山及び雨引山を境として八郷町及び大和村に、北は富谷山、雨巻山及び高峰山があり、栃木県真岡市、益子町、茂木町及び二宮町に接しており、三方を丘陵性の山地で取り囲まれた盆地をなしている。当町を取り囲んでいる八溝山系は、八溝山塊、鷲の子山塊、鶏足山塊及び筑波山塊の四つの山塊群から成り立っている。これら山塊の地質は、中・古生代の地向斜に堆積された地層とこれを貫く花崗岩類からできている。鶏足山塊と筑波山塊の境界付近である当町東部周辺は、広く花崗岩が分布している。町の北東部に位置する楯柄峠の山間、鏡が池に源を発する桜川の清流が町の中央部を東西に貫流している。平地は、桜川、大川、築輪川などの流域と山間部に入り込んだ谷状の低地等である。当町には、町の南部を横断している JR 水戸線の岩瀬駅や羽黒駅があり、駅を中心に市街地が形成されており、その鉄道に平行して国道 50 号が走っている。

当町は、昔から自然に恵まれ、産業の中心は主に農業と石材業である。町の総面積の 3 割近くは農地で、主要な作物は米と葉タバコで、特に葉タバコは古くから岩瀬町の特産物として知られてきた。最近はこれらに露地やハウス栽培の野菜も加わり、豊かな農業経営を目指している。

また、花崗岩と粘土瓦も特産である。花崗岩は筑波山系の地に多く産出し、明治中期に鉄道工事用材として切り出されたのをきっかけに石材業が発達した。その中心は山口地区と上城地区である。山口地区のものは大目石と呼ばれるキメの粗いもので、主に建築用材として用いられている。一方、上城地区産のものは糖目石といって、キメが細かく、墓石等に用いられる高級品である。粘土瓦は、いぶし瓦と呼ばれる黒色の瓦で、日立、常陸太田、久慈川等の地域から原材料を運び、加工している。近年は、工業団地の整備や区画整理事業による宅地の造成等、徐々に変貌を遂げている。

裏山遺跡は、岩瀬町の北東部にあり、鶏足山塊と筑波山塊に囲まれた盆地のほぼ中程に舌状に張り出した台地縁辺部に所在している。台地は、標高 69 m 程で、東側を除いてその周囲は桜川やその支流によって開析された底湿地で、水田となっている。水田との比高は約 5 m であり、現況は、畑である。

参考文献

(1)『岩瀬 30』岩瀬町秘書企画課 1985 年 3 月

(2)『岩瀬町史通史編』岩瀬町史編さん委員会 1987 年 3 月

第 2 節 歴史的環境

裏山遺跡の所在する岩瀬町は、平安時代の歌人紀貫之によって「常よりも春べになれば桜川波の花こそ間なく寄すらめ」「風吹けば波も幾重の桜川名の流れたる水のはるかな」と詠まれているように、自然に恵まれ、人々が生活する場所として最適だったようであり、『桜川』の地は国指定名勝となっている。

『茨城県遺跡地図』⁽¹⁾によれば、当町には 55 の遺跡を数えることができるが、町教育委員会等の調査によると、その他にも 13 の遺跡の存在が確認されている。⁽²⁾

先土器時代の遺跡については、明確ではないが、尖頭器（上野原地内）と石槍（富谷地内、高幡地内）が発見されているだけである。

縄文時代の遺跡は、当町域で 60 余か所を数え、桜川流域に数多く分布している。⁽³⁾磯部遺跡〈5〉は複合遺跡であるが、阿玉台式、加曾利 E 式、称名寺式、堀之内式及び加曾利 B 式等の土器が出土している。⁽⁴⁾宮下遺跡〈18〉からは中・後期の、⁽⁵⁾とみや遺跡〈6〉からは関山式の、⁽⁶⁾ひろおか遺跡〈7〉からは加曾利 E 式の、⁽⁸⁾かかも遺跡〈29〉からは阿玉台式及び加曾利 E 式の、⁽⁹⁾そね遺跡〈28〉からは関山式、諸磯式及び阿玉台式等の土器が出土しているが、未調査で詳細は不明である。

弥生時代の遺跡については、⁽¹⁰⁾みなみいだ遺跡（完形土器・後期）、⁽¹¹⁾ばんしょうめん遺跡（完形土器・後期）、磯部遺跡（石包丁・中期）及び⁽¹²⁾おおいずみ遺跡（完形土器・中期）から弥生時代の遺物が発見されている。

古墳時代の集落跡等は、明確にされていないが、当町には 115 基の古墳が確認されている。その分布状況は、町内の北部から東部、そして南部にかけての山麓から延びる台地縁辺に多く所在している。⁽¹⁴⁾きつねづか古墳〈47〉は、全長 44 m の前方後方墳で、後方部頂上に長さ 7 m、幅 1.1 m の粘土槨が発見された。副葬品は、銅鏃 4、直刀 1、剣 1、刀子 1、ヤリガンナ 1、短甲 1 及び小玉 14 個が発見され、⁽¹⁵⁾県内の出現期の古墳と考えられている。⁽¹⁶⁾ちやうへんじ古墳〈3〉は、全長約 120 m の前方後円墳で、円筒埴輪片が数点採取されている。⁽¹⁷⁾あおやぎ古墳群〈49〉の第 1 号墳は、主軸全長約 45 m の円墳で、墳頂部に検出された粘土槨に 2 体合葬が確認され、直刀、小玉、鉄鏃、鉄鎌などが副葬されていた。又、第 2 号墳は、主軸全長約 42 m の円墳で、埋葬施設は粘土槨 1、木棺 1 及び箱式石棺 5 が墳頂と裾部で検出されている。遺物は、管玉、丸子玉、刀子、鉄鏃などが出土している。⁽¹⁸⁾はなぞの古墳〈19〉は、一辺が 22 m の方墳で、周溝を加えると一辺が 30 m になる。この古墳は、南に開口する横穴式石室を持っている。石室壁面は、奥壁及び両側壁の 3 面には約 70 cm の靱（ゆぎ）、側壁の一面には武器、武具群（槍、環頭大刀）、もう一面には丹線及

び黒帯で具象的な図文を描いている。3面とも顔料は、赤、黒及び白である。側壁の一部は、白色粘土を塗り込めてもいる。副葬品としては、短直刀、金銅製柄拵、須恵器提瓶等である。その他稲古墳〈4〉のような全長70mの前方後円墳もある。

奈良・平安時代の遺跡としては、郷の窯跡〈24〉、堀ノ内窯跡群、上野原瓦窯跡などがある。堀ノ内窯跡群〈32〉として、花見堂窯跡、花見堂東部窯跡、柳沢窯跡、扇山窯跡及び角釜窯跡の5か所が確認されている。花見堂窯跡は、坏、高台付坏、盤、高盤、壺、甕、円面硯などが出土し、その操業時期は、8C後半から9C後半と推定され、これらの製品は、新治郡衙を中心に古代の新治郡内に供給されたと考えられ、現在、県指定史跡となっている。上野原瓦窯跡〈50〉は、戦前の調査により、新治郡衙や新治廃寺などの屋根瓦や埴(せん)などを製作した窯であることがわかり、国の史跡に指定されている。昭和50年の調査により、工房跡や掘立柱建物跡が確認され、土師器や須恵器が多量に出土した。

中世の遺跡としては、南北朝時代の中郡城といわれている羽黒山城跡〈25〉、結城氏の家臣加藤大隅守が築いた富谷城跡〈34〉、小宅高国が築いた坂戸城跡〈36〉や、その他棟峯城跡〈37〉、松田城跡〈40〉、岩瀬城跡〈42〉など11か所の城館跡が確認されている。

岩瀬町には、このように多くの遺跡が存在し、原始、古代及び中世にかけて、人々が生活を営んでいたことが窺えるのである。

※文中の〈 〉内の番号は、表1、第1図中の該当番号と同じである。

註・参考文献

- (1)・(20)『茨城県遺跡地図』茨城県教育委員会1990年
- (2)「岩瀬町の遺跡分布調査」『岩瀬町史研究第8号』岩瀬町史編さん委員会1985・3・31
- (3)・(5)～(12)・(14)・(19)・(23)～(28)『岩瀬町史通史編』岩瀬町史編さん委員会1987年3月
- (4)『磯部遺跡』茨城県岩瀬町教育委員会1972年3月
- (13)「岩瀬町の古墳概要と分布」『岩瀬町史研究第8号』岩瀬町史編さん委員会1985・3・31
- (15)西宮一男『常陸狐塚』、鴨志田篤二他「中央地区の発掘遺跡について」『常総の歴史第3号』崙書房1989年1月
- (16)『日本の古代遺跡36茨城』保育社1987年
- (17)註14書、鴨志田篤二他註15論文、岩瀬町文化財調査報告第6集『青柳2号墳調査報告』岩瀬町教育委員会1983-3
- (18)岩瀬町文化財調査報告書第7集『花園壁画古墳(第3号墳)調査報告書』岩瀬町教育委員会1985年3月、鴨志田篤二他註15論文
- (21)註14書、『茨城の須恵窯跡』茨城県立歴史館1986年
- (22)鴨志田篤二他註13論文



第1図 裏山遺跡周辺遺跡分布図

表1 裏山遺跡周辺遺跡地名表

図版 番号	遺構名	時			図版 番号	遺構名	代			図版 番号	遺構名	時			代
		縄文	弥生	古墳			奈・平以降	縄文	弥生			古墳	奈・平以降	縄文	
1	猪窪古墳群			○	20	松田古墳群				39	池亀城跡				○
2	大神田古墳群			○	21	稲荷塚古墳				40	松田城跡				○
3	長辺寺山古墳			○	22	庚申塚古墳				41	谷中城跡				○
4	稲古墳群			○	23	南長方古墳群				42	岩瀬城跡				○
5	磯部遺跡	●	●	●	24	郷の窯跡			○	43	磯部城跡				○
6	大岡古墳群			○	25	羽黒山城跡			○	44	中里古墳群			○	
7	篠沢古墳群			○	26	長辺寺遺跡			○	45	ますみ古墳群			○	
8	平沢古墳群			○	27	猪窪遺跡			○	46	飯淵古墳群			○	
9	野合古墳群			○	28	曾根遺跡			○	47	狐塚古墳			●	
10	富谷古墳群			○	29	加茂遺跡			○	48	遠越古墳			○	
11	塚本古墳群			○	30	花園遺跡			○	49	青柳古墳群			●	
12	二門塚古墳			○	31	松田遺跡			○	50	上野原瓦窯跡				●
13	森山台地古墳			○	32	堀ノ内窯跡群				51	西小埜遺跡		○		
14	布着山古墳			○	33	長辺寺弥生遺跡			○	52	諏訪古墳			○	
15	内山古墳			○	34	富谷城跡				53	木植古墳群			○	
16	加茂古墳群			○	35	橋本城跡				54	坂戸古墳群			○	
17	曾根古墳群			○	36	坂戸城跡				55	山居台遺跡 (益子町)		○		
18	宮下遺跡			○	37	棟峯城跡				56	裏山遺跡			当	遺跡
19	花園古墳群			●	38	門毛城跡									

●は発掘調査等を実施した遺跡である。

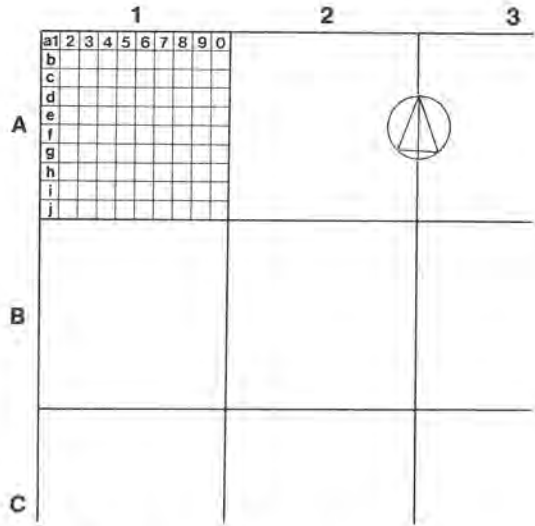
第3章 調査方法

第1節 地区設定

発掘調査を実施するにあたり、遺跡及び遺構の位置を明確にするために調査区を設定した。

調査区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を使用し、X軸（南北）+40,900 m、Y軸（東西）+28,100 mの交点を基準点として40 mの方眼を設定し、この40 m四方の区画を大調査区（大グリッド）とした。さらに、この大調査区を東西、南北に各々十等分して4 m四方の小調査区（小グリッド）を設定した。調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、大調査区において北から南へA、B、C……西から東へ1、2、

3……とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は北から南へa、b、c……j、西から東へ、1、2、3……0とし、小調査区の名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a区」、「B2e区」のように呼称した。



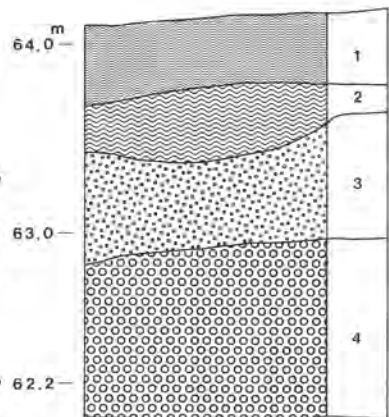
第2図 調査区呼称方法概念図

第2節 基本層序の検討

裏山遺跡の基本層序は、第3図のとおり、4層に分類できる。

第1層は、30～40 cmの厚さを有する耕作土（表土）で、暗褐色を呈している。ローム粒子やローム小ブロックを多量に含み、粘性の弱い土層である。

第2層は、褐色のローム層で、20～40 cmの厚さを有し、締まりは強いが粘性は弱い。当遺跡の遺構は本層を掘り込んで構築されている。



第3図 基本土層図

第3層は、黄橙色の鹿沼パミス層で、50～70 cmの厚さを有し、締まりは強いが粘性は弱い。

第4層は、暗褐色の粘土層で、締まりが強く粘性がある。

遺跡の立地する台地は、表土から約1.5 mで粘土層になる。台地上は北側が比較的高く、南側になだらかに傾斜し、その比高差は3.5 m程である。

第3節 遺構確認

当遺跡の遺構確認は次のような方法で実施した。まず、東西に幅1 mのトレンチをほぼ20 mおきに6本、次いで、南北に幅1 mのトレンチを3本設定して、試掘を行った。その結果、住居跡や土坑と思われる落ち込みが多数確認されるとともに、縄文式土器片、土師器片、須恵器片等が出土した。そこで、発掘調査が速やかに進められるよう、重機を導入して調査区域の表土を除去することにした。重機（バックホー）で表土除去を実施したあと、人力による遺構確認を行い、住居跡（38軒）、土坑（65基）、道路跡（1条）等を確認した。

第4節 遺構調査

住居跡の調査は、平面プラン確認後、遺構の中央部で直交するように土層観察用のベルト2本を設定して四分分割し、それぞれを掘り込む四分分割法で実施した。それぞれの地区の名称は、北から時計回りに1～4区とした。土坑の調査は、長径方向で二分分割して掘り込む二分分割法で実施した。道路跡の調査は、必要に応じて数か所の土層観察用ベルトを設けて掘り込みを実施した。塚の調査は、4本のトレンチを設定して土層断面を観察し調査した。

土層については、色相、含有物や混入物の種類や量、粘性や締まり具合等を観察して土層分類の基準とした。色相の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著、日本色研事業株式会社）を使用した。

遺物の取り上げは、住居跡や土坑等の名称と出土地区の名称、取り上げ番号、レベル等を記録して収納した。

遺構や遺物の出土状況の平面実測と遺構断面実測は、写真測量を導入した。土層断面実測は、標高をもとに水平にセットした水系を基準にして実測した。

調査の記録は、土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土位置図作成→遺構平面写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行った。

第4章 遺構と遺物

第1節 遺跡の概要と遺構・遺物の記載方法

1 遺跡の概要

裏山遺跡は、岩瀬町の北東部に位置し、桜川の南、標高65～69mの台地上に立地している。今回の調査区域は、道路建設予定地内のため幅20～36m、長さ100mの範囲で、面積は、2,458㎡である。現況は、畑であり、調査前から縄文時代中期の縄文式土器片及び古墳時代の土師器片を中心に遺物が散布していることが確認されていた。

今回の調査によって検出された遺構は、縄文時代中期から平安時代にかけての竪穴住居跡45軒、土坑148基、屋外炉1基、塚1基、道路跡1条及び掘立柱建物跡2棟である。

縄文時代の遺構は、中期の竪穴住居跡8軒、土坑98基（フラスコ状土坑50基を含む）、屋外炉1基が検出されている。住居跡のうち2軒には地床炉が認められる。

弥生時代の遺構は、後期の竪穴住居跡2軒が検出されている。

古墳時代の遺構は、前期の竪穴住居跡3軒、中期の竪穴住居跡6軒、後期の竪穴住居跡21軒が検出されている。住居跡は、調査区全域から検出され、このうち炉をもつものが2軒、竈をもつものが17軒である。

平安時代の遺構は、竪穴住居跡が5軒で、このうち4軒の住居跡から竈が検出されている。

遺物は、遺物収納箱（60×40×20cm）で82箱程出土している。縄文時代の遺物は、縄文式土器の深鉢形土器、浅鉢形土器及びその破片、石器の石鏃、尖頭器、打製石斧、摩製石斧、磨石等が出土している。弥生時代の遺物は、弥生式土器の甕及び壺の破片が出土している。古墳時代の遺物は、土師器の坏、埴、高坏、甕、甗、壺、器台、埴及びその破片、土製品の勾玉、球状土錘及び紡錘車、石製品の紡錘車及び管玉、石製模造品（剣及び鏡）が出土している。平安時代の遺物は、土師器の甕、甗、坏及び高台付坏、須恵器の坏、高台付坏、甕、円面硯の破片等が出土している。その他、古銭の「寛永通寶」、「開元通寶」が出土している。

2 遺構・遺物の記載方法

本書における遺構・遺物の記載方法は、下記の要領で統一した。

(1) 使用記号

名称	竪穴住居跡	土坑	道路跡	掘立柱建物跡	塚	ピット	土器	土製品	石器・石製品	金属製品
記号	SI	SK	SF	SB	TM	P ₁	P	DP	Q	M

(2) 遺構・遺物の表示方法



(3) 遺構番号

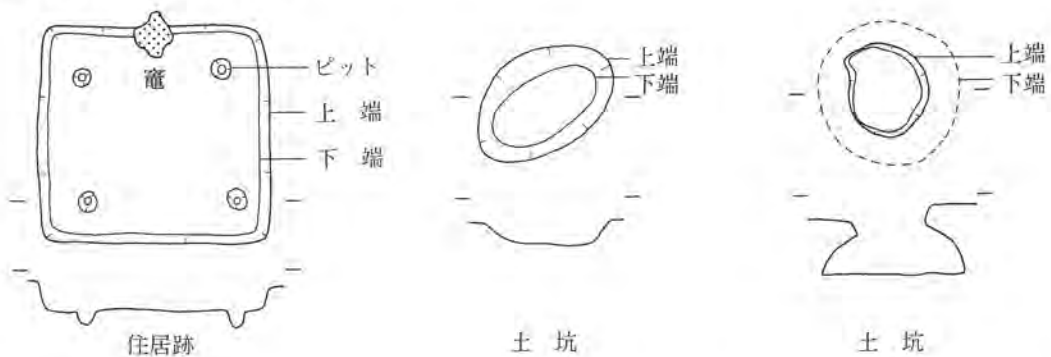
遺構番号については、調査の過程において遺構の種別毎、調査順に付したが、整理の段階で遺構でないと判断したものは、欠番とした。

(4) 土層の分類

各遺構における堆積土の土層については、調査時に、含有物、色調、粘性、締まり具合などを観点として線引きし観察記録を行った。色調については『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著、日本色研事業株式会社）を使用し、図版実測図中に土層解説を記載した。

なお、攪乱層については「K」と表記した。

(5) 遺構実測図の記載方法



- ① 住居跡は、縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし、それをさらに3分の1または4分の1に縮小して掲載した。しかし、遺構の大きさにより異なる場合もある。
- ② 土坑は、縮尺20分の1の原図をトレースして版組みし、それをさらに3分の1に縮小して掲載した。
- ③ 竈、炉は、10分の1の原図をトレースして版組みし、それをさらに3分の1に縮小して掲載した。
- ④ 道路跡は、縮尺20分の1、100分の1の原図を4分の1に縮小し、トレースして版組みし、それを適宜に縮小して掲載した。
- ⑤ 実測図中のレベルは標高であり、m単位で表示した。

また、同一図中で同一標高の場合に限り一つの記載で表し、標高が異なる場合は各々表示し

た。

⑥ 本文の住居跡の記載について

- 「位置」は、遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。
- 「重複関係」は、住居跡の切り合い関係を記した。
- 「平面形」は、壁の上端部で判断し、方形、長方形の場合は下記の分類基準を設け、そのいずれかを明記した。なお、〔 〕を付したものは、推定を表す。

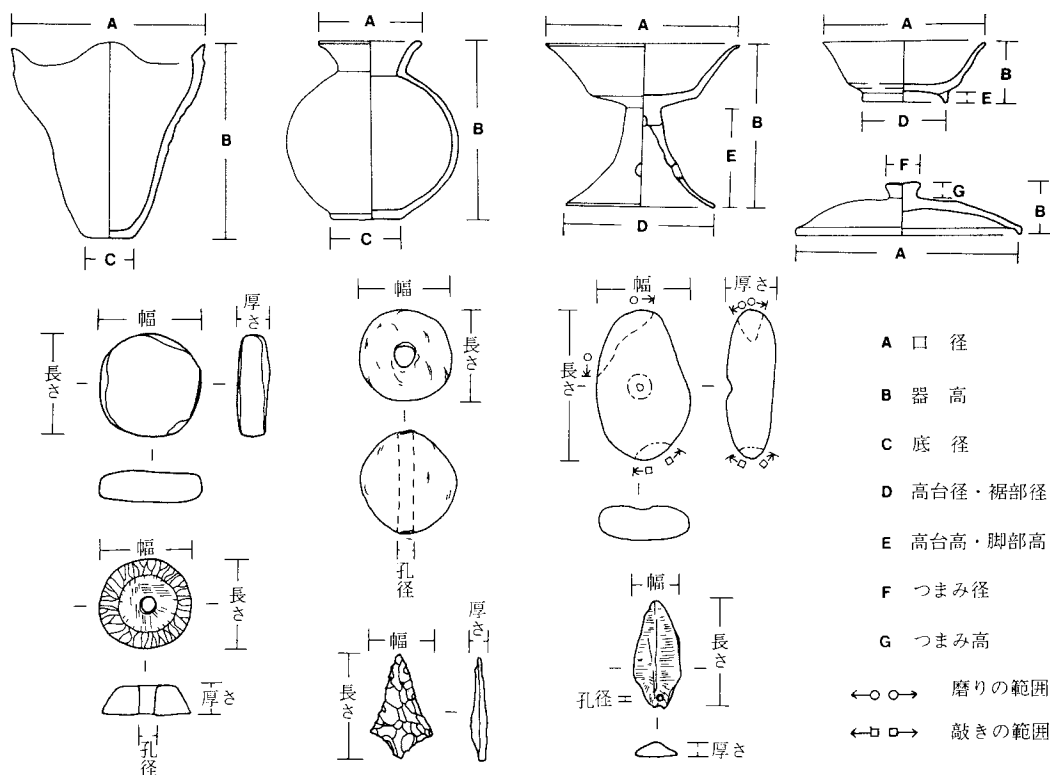
方形（短軸：長軸＝1：1.1未満のもの）、長方形（短軸：長軸＝1：1.1以上のもの）

- 「規模」は、壁の上端部の計測値であり、長軸、短軸の順に m 単位で表記した。壁高は、残存壁高の計測値である。なお、（ ）を付したものは現存値を示す。
- 「長軸方向」は、長辺で炉、竈を通る線を長軸として、その長軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ傾いているかを角度で表示した。なお、〔 〕を付したものは、推定を表す。
- 「壁」は、床面からの立ち上がり角度が $81^{\circ} \sim 90^{\circ}$ を垂直、 $65^{\circ} \sim 80^{\circ}$ を外傾、 65° 未満を緩斜さらに 90° 以上を内傾とした。
- 「壁溝」は、その形状や規模を記述した。
- 「床」は、傾斜（「平坦」、「緩い傾斜」）や床質等を記載した。
- 「ピット」は、その住居跡に伴うと考えられるピットを P で表示し、P₁、P₂ はピット番号を表し、さらに、ピットの直径と深さを記述した。
- 「貯蔵穴」は、その形状を記述し、数字は長径（軸）、短径（軸）及び深さを示した。
- 「覆土」は、堆積の状態が自然堆積の場合は「自然」、人為堆積の場合は「人為」、攪乱を受けている場合は「攪乱」と記した。
- 「遺物」は、遺物の種類と量、さらに出土遺物や状態を記述した。
また、遺構の平面図中に②で示した記号を用い、出土位置をドットで表示し、接合できたものは実線で結んだ。出土遺物に付した数字は、遺物実測図及び拓影図の番号と符合する。
- 「所見」は、当該住居跡についての時期やその他特記すべき事項を記述した。

(6) 遺物実測図の記載方法

遺跡から出土した遺物については、実測図、拓影図、写真等により掲載した。

- ①土器の実測は、原則として中心線の左側に外面、右側に内面と断面を図示した。
- ②土器拓影図は、右側に断面を図示した。
- ③遺物は、原則として実測図を浄書したものを3分の1に縮小して掲載した。しかし、種類や大きさにより異なる場合もある。



(7) 表の見方

① 住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	主軸方向 (長軸)	平面形	規 模		床面	柱穴数	炉・竈	覆土	出土遺物	備考
				長軸 (m) × 短軸 (m)	壁高 (cm)						

○位置は、遺構が占める面積の割合が最も大きいグリッド名をもって表示した。

○主軸方向は、座標北をN-0°とし、東(E)・西(W)に何度傾いているかを表示した。

(例 N-10°-E, N-10°-W) なお、[] を付したものは推定である。

○平面形は、現存している形状の上端面で判断し、方形及び長方形の場合は下記の分類基準を設け、そのいずれかを明記した。

方形(長軸:短軸=1.1未満:1) 長方形(長軸:短軸=1.1以上:1)

○規模の欄の長軸・短軸は、上端の計測値であり、壁高は残存壁高の計測値である。

○床面は、平坦、凹凸、皿状及び緩い起伏に分類して表記した。

○柱穴数は、平面図中に表示されたピットの中からその住居跡に伴うと思われる柱穴の本数を記した。

○炉、竈は、その種類を記した。

○覆土は、自然堆積のものは「自然」、人為堆積のものは「人為」と表記し、不明のものは空欄とした。

○出土遺物は、実測固体数を除いた遺物の種類と、出土土器片の数を記した。

○備考は、重複関係等について記した。

② 土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (m)			壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
				長径	短径	深さ						

○土坑番号は、発掘調査の過程で付した番号をそのまま使用した。また、整理の過程で土坑でない判断したものは欠番とした。

○平面形は、掘り込み上面の形状を記した。

円形 (短径:長径=1:1.1未満のもの) 楕円形 (短径:長径=1:1.1以上のもの)

○規模の欄の長径及び短径は、上端部の計測値 (m) で表した。フラスコ状土坑については、底面部とに分けて表した。

○壁面は、坑底からの立ち上がりの状態を簡潔に記した。

○その他の項目については、住居跡一覧表の記載方法に準じた。

③ 出土土器観察表

ア. 縄文式土器・弥生式土器

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考

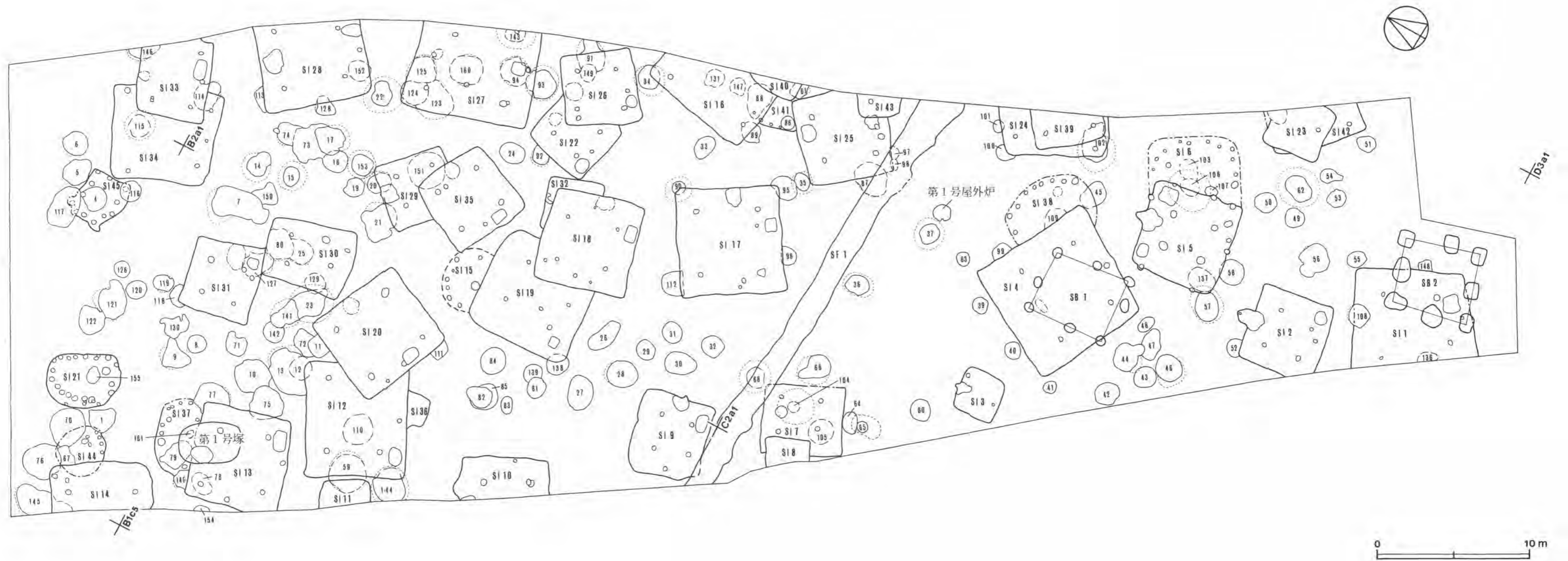
イ. 土師器・須恵器

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考

○図版番号は、実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。

○法量は、A-口径 B-器高 C-底径 D-高台径・裾部径 E-高台高・脚部高、単位はcmである。なお、現存値は () で、推定値は [] を付して示した。

○胎土・色調・焼成の欄は、上から胎土、色調及び焼成の順で記した。色調については、前節の土層の分類と同じ土色帖を使用した。焼成については、良好、普通及び不良に分類し焼き



締まって硬いものは良好、焼成があまく手でこすると器面が剥落するものを不良とし、その中間のものを普通とした。

○備考の欄は、土器の残存率、実測（P）番号、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。

④ 土製品観察表

図版番号	器種	法 量				出土位置	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		

○図版番号は、実測図中の番号である。写真図版の番号にも用いた。

○重量の欄で、() を付した数値は、一部を欠損しているものの現存値である。

⑤ 石器・石製品観察表

図版番号	器種	石質	法 量				出土位置	備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

当調査区から検出された縄文時代の住居跡は、8軒である。これらの住居跡は、調査区の北部に多く（5軒）、その他中央部や南部からも検出（3軒）されている。遺物は、阿玉台式や加曽利E式の深鉢形土器の破片を主に出土している。第37号住居跡からは、阿玉台IV式の深鉢形土器が床面に埋められた状態で出土している。

第6号住居跡（第5図）

位置 調査区の南部、C2f₈区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の西部は、第5号住居跡の東部や第107号土坑に掘り込まれ、第103・106号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 重複部分が多く確認できないが、長径〔7.20〕m、短径〔6.24〕mの隅丸長方形を呈するものと推定される。

長径方向 [N-28°-W.]

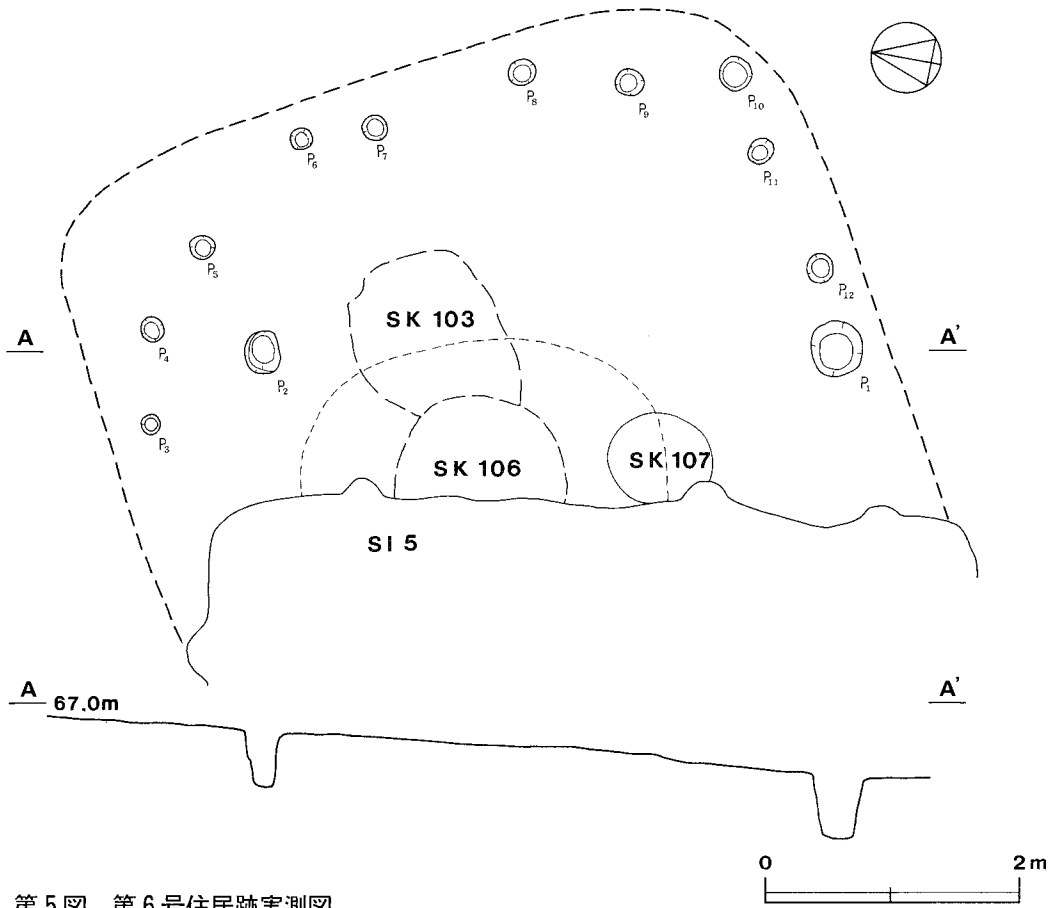
壁 西壁は第5号住居跡，第107号土坑によって削平され，他の壁は流出している。

床 硬く平坦である。

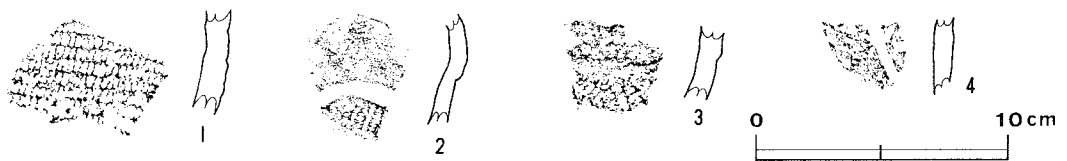
ピット 12か所（P₁～P₁₂）検出されている。P₁，P₂は，径34～46cm，深さ46～52cmで，支柱穴と思われる。P₃～P₁₂は，径18～28cm，深さ26～68cmで，補助柱穴と思われる。

遺物 縄文式土器片が少量床面から出土している。

所見 本跡は，第5号住居跡や第107号土坑より古く，第103・106号土坑より新しい。遺構の形態や遺物等から縄文時代中期後葉の住居跡と思われる。



第5図 第6号住居跡実測図



第6図 第6号住居跡出土遺物拓影図

第6図は、第6号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。1は胴部片で、単節LRの回転縄文が施されている。2は頸部片で、沈線によって無文体と縄文施文帯とに区画し、施文帯には単節LRの回転縄文が充填されている。3は口縁部片で、隆帯によって無文体と縄文施文帯とに区画し、施文帯には単節RLの回転縄文が充填されているが、磨滅している。4は胴部片で、沈線によって無文体と縄文施文帯とに区画している。

第15号住居跡（第7図）

位置 調査区の中央部北寄り、B2f区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南部は、第19号住居跡の北部に、北東部は第35号住居跡の西部にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 第19号住居跡に掘り込まれているため確認できないが、長径〔5.17〕m、短径〔3.85〕mの楕円形を呈するものと推定される。

長径方向〔N-87°-E.〕

壁 南壁は第19号住居跡によって削平され、他の壁は流出している。

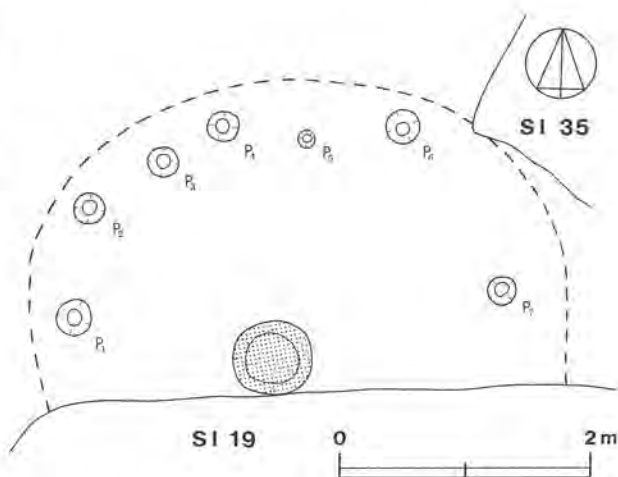
床 平坦で、よく踏み固められている。

ピット 7か所（P₁～P₇）検出されている。P₁～P₇は、径15～27cm、深さ21～41cmで、炉を囲むように検出され、支柱穴と思われる。

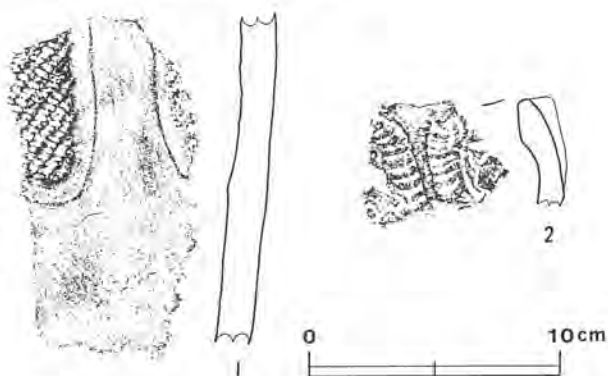
炉 中央部に検出され、径62cm程の円形を呈する地床炉である。炉床は、床を2～3cm掘り窪めており、火熱を受けロームが赤変硬化している。

遺物 炉付近の床面から縄文式土器片が少量出土している。

所見 本跡は、第19・35号住居跡より古く、床面だけが残存している状態であるが、遺構の形態や遺物等から縄文時代中期後葉の住居跡と思われる。



第7図 第15号住居跡実測図



第8図 第15号住居跡出土遺物拓影図

第8図は、第15号住居跡から出土

した縄文式土器片の拓影図である。1は胴部片で、磨消帯が垂下し、隆起線による区画内に単節RLの回転縄文が充填されている。2は口縁部片で、隆帯に沿ってキャタピラ文が施されている。

第21号住居跡（第9図）

位置 調査区の北部，B1a6区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の中央部は，第155号土坑に掘り込まれている。

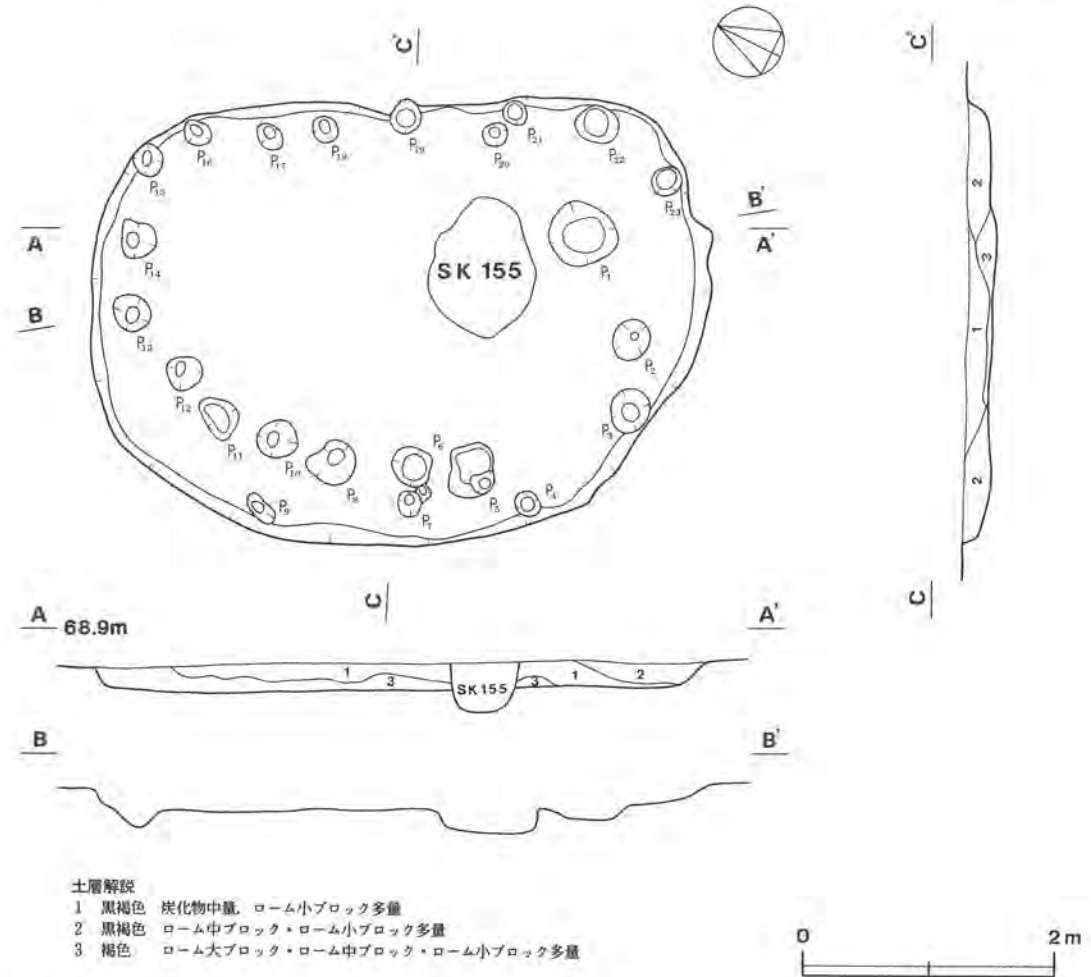
規模と平面形 長径4.90m，短径3.50mで，楕円形を呈している。

長径方向 N-28°-W。

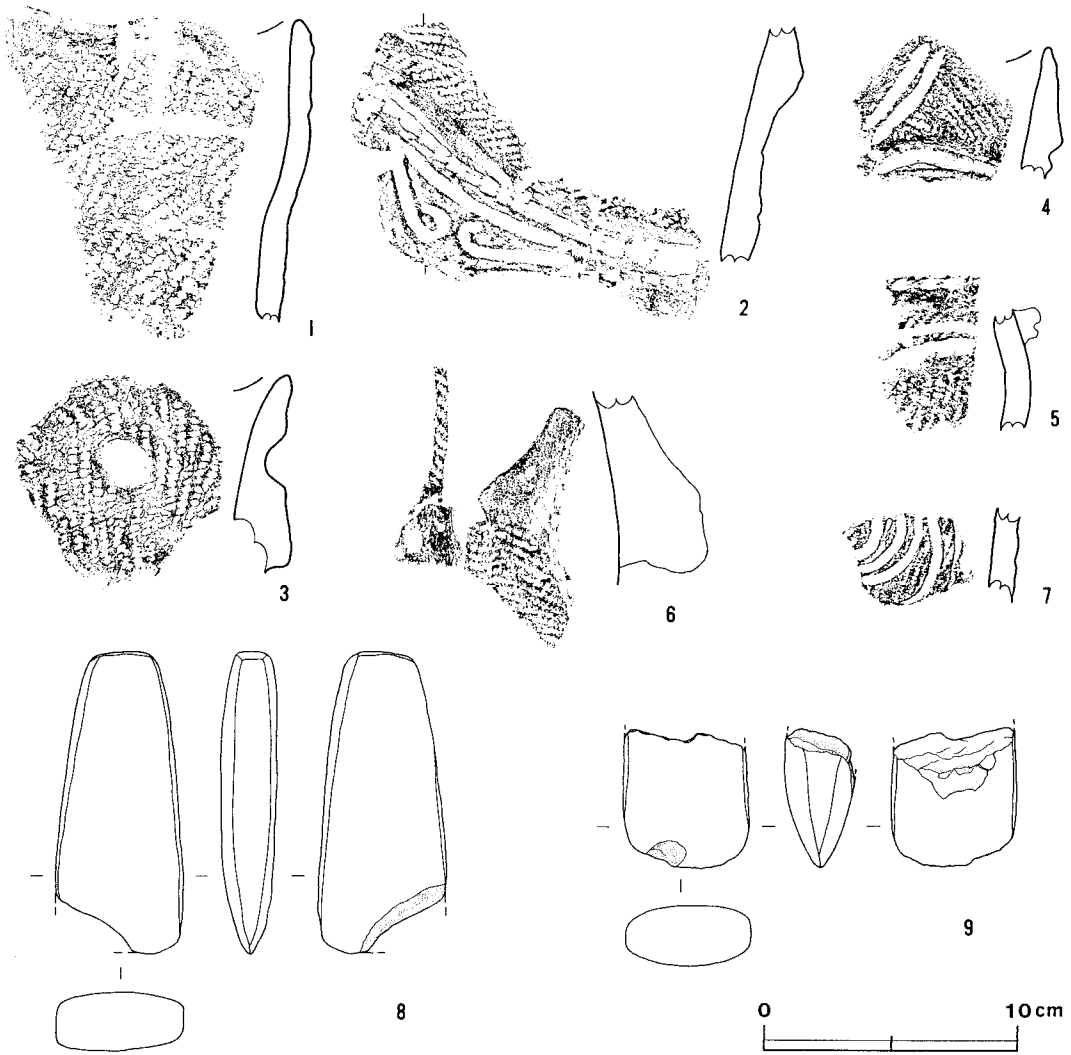
壁 壁高13～21cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ローム質で柱穴を結んだ線の内側はやや硬く，幾分凹んでいる。

ピット 23か所（P₁～P₂₃）検出されている。P₁は，径56cm，深さ14cmであるが，性格は不明



第9図 第21号住居跡実測図



第10図 第21号住居跡出土遺物実測・拓影図

である。P₂～P₂₃は、径20～42cm、深さ7～34cmで、壁際を回るように検出され、壁柱穴と思われる。

覆土 自然堆積。

遺物 住居跡全域の床面直上から縄文式土器の細片が出土しているが、P₁付近から比較的集中して出土している。

所見 本跡は、第155号土坑より古く、遺構の形態や遺物等から縄文時代中期中葉の住居跡と思われる。

第10図の1～7は、第21号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。1は波状口縁

第 21 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	石 質	法 量				出 土 位 置	備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第10図 8	磨製石斧	斑礫岩	12.2	5.1	2.2	(244.6)	覆土	Q41 PL23
9	磨製石斧	安山岩	(5.6)	5.1	2.8	(108.5)	覆土	Q42 基部欠損 PL23

部片で、単節 RL の回転縄文が施されている。2 は波状口縁部片で、口唇部に沿って隆帯が巡らされ、隆帯上に単節 RL の回転縄文が施され、隆帯に沿って押し引き刺突文が三角形に施され、その内に向き合った沈線の渦巻き文が施されている。3 は扇形の把手で、表面に単節 RL の回転縄文が施され、中央部に円形の凹みが見られる。4 は波状口縁部片で、地文には単節 LR の回転縄文が施され、波状口縁の片方に 2 条の沈線が、下部には渦巻き状の沈線が施されている。5 は口縁部片で、口唇部に押し引き刺突文が、口縁部上端に隆帯が巡らされ、隆帯上には沈線が施され、表面には単節 LR の回転縄文が施されている。6 は逆「V」字状の把手で、下端及び把手上面に単節 LR の回転縄文が施されている。7 は胴部片で、単節 RL の回転縄文が施されている上に渦巻き状の沈線が見られる。

第 37 号住居跡 (第 11 図)

位置 調査区の北部、Blc6 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南部は第 13 号住居跡の北部に、東部は第 77 号土坑に、中央部西寄りには第 79 号土坑に、西部は第 140 号土坑に掘り込まれている。本跡南側の二分の一程が、第 1 号塚の下から検出されている。

規模と平面形 第 13 号住居跡に掘り込まれているため確認できないが、長径 5.00 m、短径〔4.00〕m の楕円形を呈するものと推定される。

主軸方向 N - 75° - E。

壁 壁高 7 ~ 19 cm で、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、柱穴を結んだ線の内側はよく踏み固められている。

ピット 9 か所 (P₁ ~ P₉) 検出されている。P₁ ~ P₉ は、径 18 ~ 35 cm、深さ 30 ~ 70 cm で、壁際を回るように検出されている。P₄ は主柱穴と思われるが、その他は不明である。

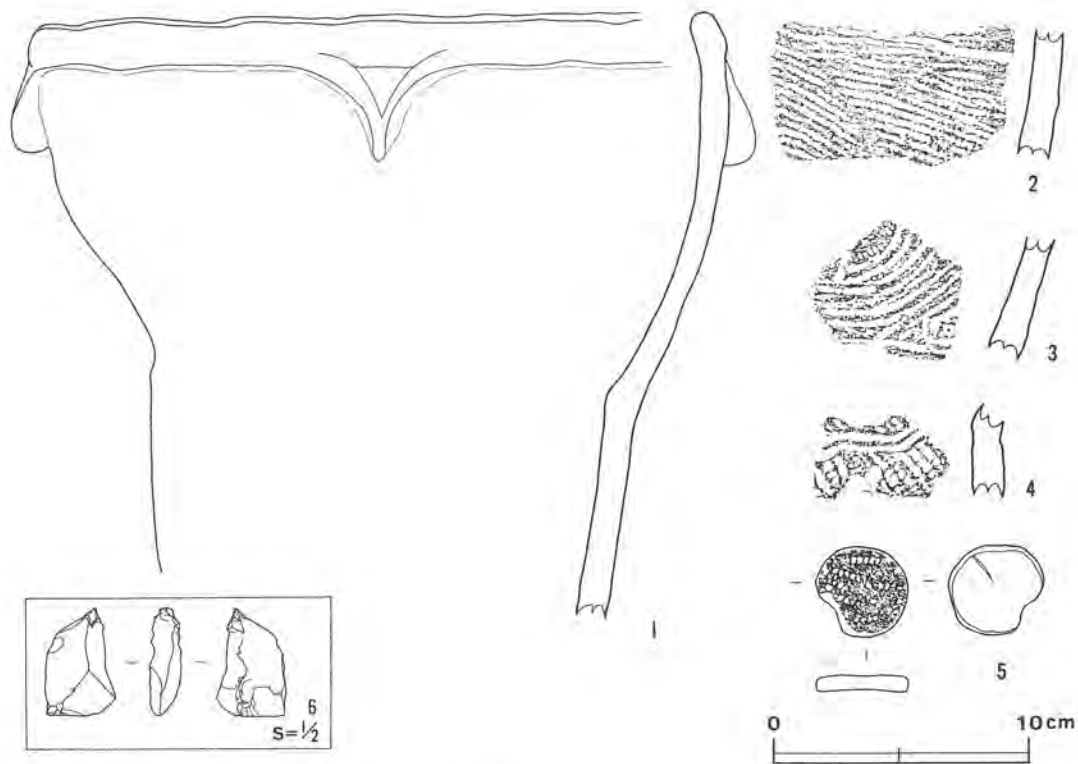
覆土 自然堆積。

遺物 床面から多量の縄文式土器片が出土している。第 12 図 1 は底部欠損の深鉢形土器で北部床面に埋められた状態で出土している。メノウの剥片は覆土中層から出土している。

所見 本跡は、重複している全ての遺構より古く、遺構の形態や遺物等から縄文時代中期中葉の住居跡と思われる。床面北部の埋設土器は、埋葬等の用途が想定できる。



第11図 第37号住居跡実測図



第12図 第37号住居跡出土遺物実測・拓影図

第12図の2～4は、第37号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。2は胴部片で、単節RLの回転縄文が施されている。3は胴部片で、渦巻き状の沈線が施されている。4は頸部片で、半截竹管による棒状沈線及び単節LRの回転縄文が施されている。

第 37 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第12図 1	陶彩土器 (阿玉台IV)	A (25.6) B (24.3)	底部欠損。胴部はほぼ直立して立ち上がる。口縁部は頸部から内彎しながら立ち上がり、上位でやや内傾する。無文土器。口縁部上端を隆帯が1周し、そこから下に「V」字形の突起が4単位付く。内面磨減が著しい。	砂粒・長石・石英・雲母 にふい赤褐色 普通	P261 PL16 60% 北部床面埋設

図版番号	器種	法量				出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第12図5	土製門板	3.7	3.7	0.7	(10.0)	覆土	DPI7 PL16

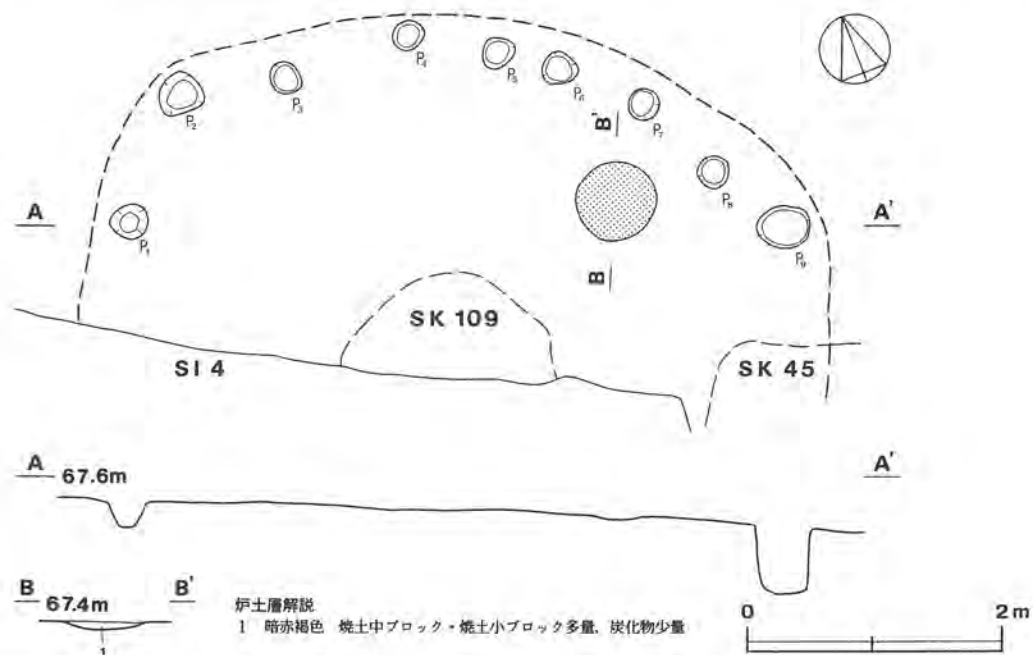
図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第12図6	網片	メノウ	(2.9)	(1.8)	(0.9)	(3.4)	覆土	Q55 PL16

第 38 号住居跡 (第 13 図)

位置 調査区の南部、C2d₆区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南西部は第4号住居跡の北東部に掘り込まれ、南東部は第45号土坑を、中央部は第109号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 第4号住居跡に掘り込まれて確認できないが、長径 [5.84] m, 短径 [4.80] m



第 13 図 第 38 号住居跡実測図

の楕円形を呈するものと推定される。

長径方向 [N-61°-E。]

壁 南西壁は第4号住居跡によって削平され、他の壁は流出している。

床 中央部や炉周辺に硬い床が確認されている。

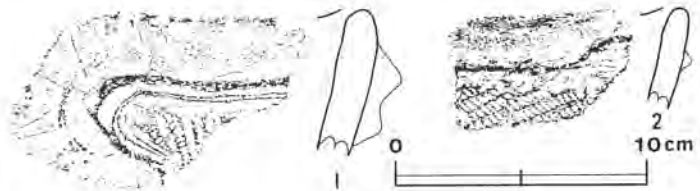
ピット 9か所 (P₁～P₉) 検出されている。P₁～P₉は、径24～44 cm、深さ24～56 cmで、壁際を回るように検出され、壁柱穴と思われる。

炉 南東部に検出され、径64 cm程の円形を呈した地床炉である。炉床は、床を5 cm程掘り窪められており、硬い暗赤褐色の焼土が遺存している。

遺物 出土遺物は全体的に少なく、炉の北側の床面より深鉢形土器の破片が出土している。

所見 本跡は、第4号住居跡より古く、第45・109号土坑より新しい。壁は削平あるいは流出している状態であるが、遺構の形態や遺物等から縄文時代中期後葉の住居跡と思われる。

第14図は、第38号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。1は口縁部片で、口縁部を隆起線によって楕円区画し、区画内に単節LRの回転縄文が充填されている。2は口縁部片で、隆起線によって口縁部無文体と胴部施文帯とに区画し、施文帯には単節LRの回転縄文が施されている。口縁部には隆起線がせり上がることによって表出される小突起が見られる。



第14図 第38号住居跡出土遺物拓影図

第41号住居跡 (第15図)

位置 調査区の中央部東寄り、B2i₆区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北部は第16号住居跡の南部に、南部は第25号住居跡の北コーナーや第86号土坑に、東部は第40号住居跡の西部にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 重複部分が多く確認できないが、長径 [4.00] m、短径 [3.90] mの円形を呈するものと推定される。

長径方向 [N-11°-W。]

壁 壁高14 cmで、外傾して立ち上がっている。

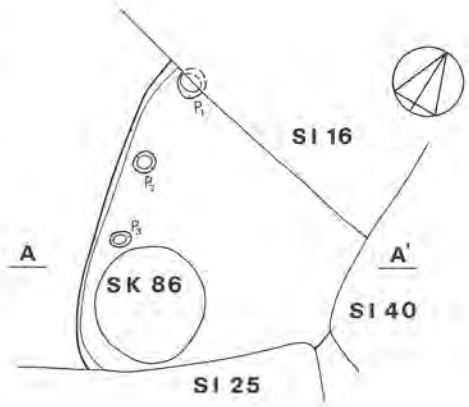
床 平坦で、よく踏み固められている。

ピット 3か所 (P₁～P₃) 検出されている。P₁～P₃は、径18～25 cm、深さ19～25 cmで、壁際を回るように検出され、壁柱穴と思われる。

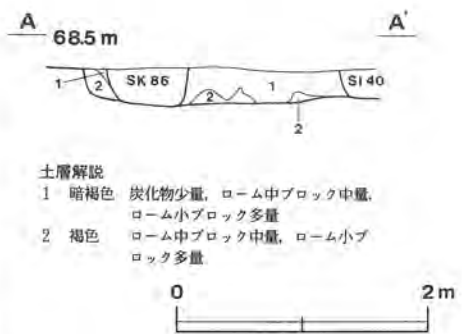
覆土 自然堆積。

遺物 本跡全域の床面から縄文式土器片が出土している。覆土上層から流れ込みと思われる土師器片がわずかに出土している。

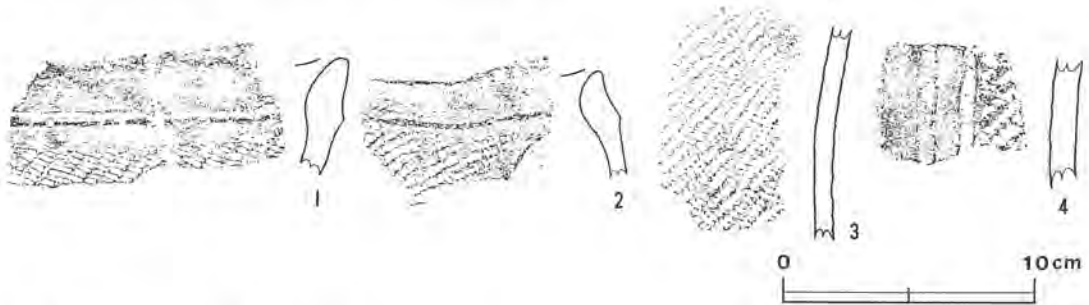
所見 本跡は、重複している全ての遺構より古く、重複部分が多いので全体の状況を捉える事はできなかったが、遺構の形態や遺物等から縄文時代中期後葉の住居跡と思われる。



第16図は、第41号住居跡から出土した縄文式土器片の拓影図である。1は口縁部片で、隆起線によって口縁部無文体と胴部施文帯とに区画し、施文帯には単節RLの回転縄文が施されている。2は口縁部片で、隆起線によって口縁部無文体と胴部施文帯とに区画している。胴部は弧状に垂下する隆起線によって縄文施文帯と無文体とに区画している。地文には単節RLの回転縄文が施されている。3は胴部片で、胴部には単節RLの回転縄文が施されている。4は胴部片で、地文に単節RLの回転縄文を施し、沈線によって区画された磨消帯が垂下している。



第15図 第41号住居跡実測図



第16図 第41号住居跡出土遺物拓影図

第44号住居跡 (第17図)

位置 調査区の北部, B1a5区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の西部は第14号住居跡の北東部に, 東部は第1号土坑に, 北部は第70号土坑に, 北西部は第67・76号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 重複部分が多く確認できないが、長径2.18 m、短径 [1.84] m の円形を呈するものと推定される。

長径方向 [N - 78° - E。]

壁 壁高10 cmで、外傾して立ち上がっている。

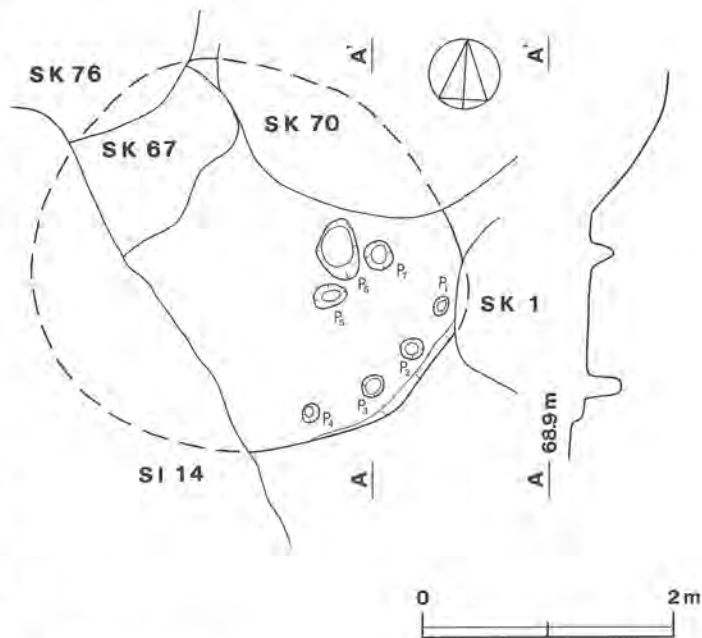
床 平坦で、柱穴を結んだ線の内側はよく踏み固められている。

ピット 7か所 (P₁ ~ P₇) 検出されている。P₁ ~ P₄ は、径16 ~ 22 cm、深さ18 ~ 36 cmで、壁際を回るように検出され、壁柱穴と思われる。P₅ ~ P₇ は、径24 ~ 50 cm、深さ20 ~ 30 cmであるが、性格は不明である。

覆土 自然堆積。

遺物 遺物は出土していない。

所見 本跡は、重複している全ての遺構より古く、住居跡の形態等から縄文時代中期の住居跡と思われる。



第17図 第44号住居跡実測図

第45号住居跡 (第18図)

位置 調査区の北部、B1j₉区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の中央部は第4号土坑に、南東部は第116号土坑に、北西部は第117号土坑にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 長径3.39 m、短径2.98 mの不定形を呈している。

長径方向 N - 78° - E。

壁 壁高13 ~ 34 cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

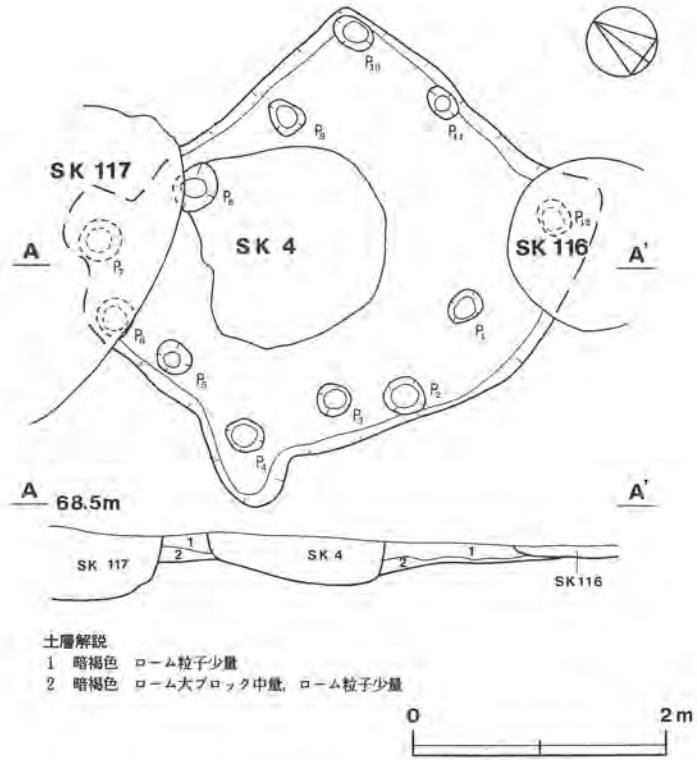
床 ローム質で、中央部のやや北西寄りには第4号土坑に掘り込まれているが、残存する床面はよく踏み固められて硬い。

ピット 12か所 (P₁ ~ P₁₂) 検出されている。P₁ ~ P₁₂ は、径26 ~ 32 cm、深さ31 ~ 62 cmで、壁際を回るように検出され、主柱穴と思われる。

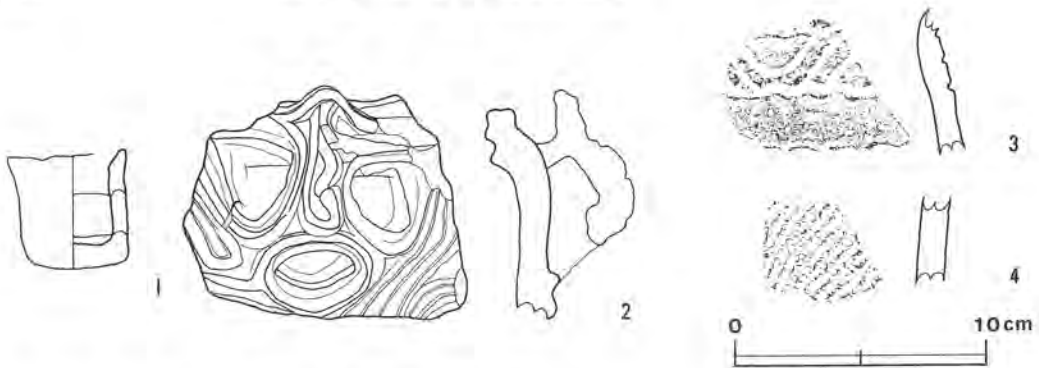
覆土 自然堆積。

遺物 縄文式土器片が南部の床面を中心に出土している。その他土師器片が覆土上層からわずかに出土しているが、流れ込みと思われる。

所見 本跡は、重複している全ての遺構より古く、遺構の形態や遺物等から縄文時代中期中葉の住居跡と思われる。



第18図 第45号住居跡実測図



第19図 第45号住居跡出土遺物実測・拓影図

第45号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第19図 1	手捏土器 (阿玉台)	A 4.8 B 4.8 C 4.0	偏平な平底。体部は垂直に立ち上がり、口縁部で外反する。無文土器で、外部は少し凸凹。輪積み痕有り。	砂粒・石英・雲母・パミス 明赤褐色 普通	P266 PL38 100% 南西部床面直上
2	把手 (阿玉台)	長さ (9.3) 幅 (11.3)	孔が3つある環状把手。環状に巡らされている把手の上面に渦巻き状の隆起線が巡らされている。把手に沿っても隆起線が施されている。口唇部には幅の広い沈線が巡らされ、口縁部上端には2本の隆起線が巡らされている。内面ナデ。	砂・長石・石英・雲母 にふい黄褐色(内面) 黒褐色(外面) 普通	P267 PL38 5% 南東部床面直上

3は頸部片で、結節沈線文や波状沈線文が施されている。4は胴部片で、胴部には単節RLの回転縄文が施されている。

2 土坑

当調査区から検出された土坑は148基である。このうち縄文時代の土坑は98基で、調査区の全域に分布している。土坑の時期、形状、使用目的等の特徴や遺物を比較的多く出土している土坑32基については文章で記述し、その他のものは一覧表に記載した。

第4号土坑（第20図）

位置 調査区の北部，A1j₉区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第45号住居跡の中央部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径1.80 m，短径1.52 mの楕円形を呈し，深さ0.20 mを測る。

長径方向 N - 83° - W。

壁面 緩やかに外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土上・中層から多量の縄文式土器片が出土している。少量の土師器片や石が出土しているが、いずれも流れ込みと思われる。

所見 本跡は、第45号住居跡より新しく、出土遺物の特徴等から縄文時代中期後葉の土坑と思われる。

第7号土坑（第20図）

位置 調査区の北部，B1b₀区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第150号土坑と重複している。

規模と平面形 長径3.70 m，短径1.77 mの不定形を呈し，深さ1.00 mを測る。

長径方向 N - 15° - W。

壁面 北西壁は内傾して立ち上がり，その他の壁は外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。規模は，長径3.98 m，短径2.30 mである。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土上・中層から多量の縄文式土器片が出土している。石は覆土下層や底面から出土しているが、何に使用されたかは不明である。第36図2の浅鉢は覆土中層から，3，4の深鉢は底面直上から出土している。少量の土師器片が出土しているが，流れ込みと思われる。

所見 本跡は、断面形がフラスコ状を呈していることや、遺物の特徴等から縄文時代中期後葉の土坑と思われる。

第10号土坑（第21図）

位置 調査区の北部，B1c₈区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第13・75号土坑と重複している。

規模と平面形 長径2.62 m，短径2.32 mの楕円形を呈し，深さ0.83 mを測る。

長径方向 N - 29° - E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。東部に，径32 cm，深さ14 cmのピット（P₁）が検出されている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土上・中層から多量の縄文式土器片が出土している。第36図5の深鉢は覆土下層から，第58図2の石鏃は床面直上から出土している。弥生式土器片や土師器片が出土しているが，流れ込みと思われる。

所見 本跡は，出土遺物の特徴等から縄文時代中期中葉の土坑と思われる。

第13号土坑（第21図）

位置 調査区の北部，B1d₈区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は，第12号住居跡の北コーナーに掘り込まれ，第12号土坑を掘り込み，第10・72号土坑と重複している。

規模と平面形 長径3.52 m，短径2.36 mの不定形を呈し，深さ0.45 mを測る。

長径方向 N - 35° - E。

壁面 北東壁は内傾して立ち上がり，その他の壁は緩やかに外傾して立ち上がっている。

底面 平坦であるが，東部は幾分凹凸が見られる。規模は，長径3.40 m，短径2.17 mである。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から中量の縄文式土器片が出土している。第36図6の深鉢は覆土下層から出土している。

所見 本跡は，第12号住居跡より古く，第12号土坑より新しい。断面形がフラスコ状を呈していることや，遺物の特徴等から縄文時代中期中葉の土坑と思われる。

第17号土坑（第22図）

位置 調査区の北部，B2c₂区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第16号土坑の北東部に、第73号土坑の南東部にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 長径2.06 m、短径1.84 mの楕円形を呈し、深さ0.89 mを測る。

長径方向 N-8°-E。

壁面 南壁は内傾して立ち上がり、その他の壁は外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。南部に、径28～32 cm、深さ24 cmのピット(P_i)が検出されている。規模は、長径2.20 m、短径2.00 mである。

覆土 全体的にロームブロックを含んでおり、人為的に埋め戻された様相を呈している。

遺物 覆土上・中層から中量の縄文式土器片と覆土下層から少量の石器とが出土している。第37図7の大型の深鉢、9の深鉢の底部や第58図6の磨製石斧が底面直上から出土している。中量の土師器片が出土しているが、流れ込みと思われる。

所見 本跡は、第16・73号土坑より古く、断面形がフラスコ状を呈していることや、遺物の特徴等から縄文時代中期中葉の土坑と思われる。

第20号土坑(第22図)

位置 調査区の北部、B2d₁区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第29号住居跡の北コーナーに掘り込まれている。

規模と平面形 長径1.58 m、短径1.27 mの楕円形を呈し、深さ1.04 mを測る。

長径方向 N-46°-W。

壁面 北壁は内傾して立ち上がり、上位ではほぼ垂直に立ち上がっている。その他の壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。規模は、長径1.72 m、短径1.42 mである。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から多量の縄文式土器片が出土している。第37図10の深鉢は床面直上から、第58図9の磨製石斧は覆土下層から出土している。

所見 本跡は、第29号住居跡より古く、断面形がフラスコ状を呈していることや、遺物の特徴等から縄文時代中期前葉の土坑と思われる。

第21号土坑(第22図)

位置 調査区の北部、B2d₁区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第29号住居跡の西コーナーに掘り込まれている。

規模と平面形 長径2.62 m、短径2.16 mの楕円形を呈し、深さ0.65 mを測る。

長径方向 N-87°-E。

壁面 南壁は内傾して立ち上がり、上位で外傾して立ち上がっている。その他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。規模は、長径 2.45 m、短径 1.85 m である。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から多量の縄文式土器片と少量の石器が出土している。第 37 図 11 の浅鉢や第 59 図 12 の打製石斧は底面直上から出土している。

所見 本跡は、第 29 号住居跡より古く、断面形がフラスコ状を呈していることや、遺物の特徴等から縄文時代中期前葉の土坑と思われる。

第 25 号土坑（第 23 図）

位置 調査区の北部、B1c0 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第 30 号住居跡の中央部、第 80 号土坑の南部にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 長径 1.48 m、短径〔1.29〕m の楕円形を呈し、深さ 0.62 m を測る。

長径方向 N - 1° - W。

壁面 南壁は内傾して立ち上がり、その他の壁は外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。規模は、長径 1.37 m、短径〔1.32〕m である。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から少量の縄文式土器片と石が出土している。石は何に使用されたかは不明である。第 38 図 12 の小形の深鉢は床面直上から出土している。

所見 本跡は、第 30 号住居跡、第 80 号土坑より古く、断面形がフラスコ状を呈していることや、遺物の特徴等から縄文時代中期前葉の土坑と思われる。

第 37 号土坑（第 24 図）

位置 調査区の中央部、C2b5 区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径 1.44 m、短径 1.29 m の楕円形を呈し、深さ 0.52 m を測る。

長径方向 N - 88° - E。

壁面 壁は内傾して立ち上がり、上位ではほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。規模は、長径 2.07 m、短径 1.97 m である。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から多量の縄文式土器片と少量の石が出土している。石は何に使用されたかは不明である。第 38 図 13 の深鉢の底部は底面直上から出土している。

所見 本跡は、断面形がフラスコ状を呈していることや、遺物の特徴等から縄文時代中期中葉の

土坑と思われる。

第 44 号土坑 (第 25 図)

位置 調査区の南部, C2f₅ 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は, 第 43・47 号土坑と重複している。

規模と平面形 長径 1.93 m, 短径 1.69 m の楕円形を呈し, 深さ 1.69 m を測る。

長径方向 N - 53° - E。

壁面 底面から壁中程で細くなるように内傾して立ち上がり, 壁中程から確認面にかけてほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 全体的にロームブロックを含んでおり, 人為的に埋め戻された様相を呈している。

遺物 覆土中・下層から多量の縄文式土器片と少量の石が出土している。石は何に使用されたかは不明である。第 154 図 2 の須恵器の坏は覆土上層から出土しているが, 流れ込みと思われる。

所見 本跡は, 遺構の形態や遺物の特徴等から縄文時代中期中葉の陥し穴と思われる。

第 46 号土坑 (第 25 図)

位置 調査区の南部, C2g₅ 区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径 1.89 m, 短径 1.72 m の円形を呈し, 深さ 0.70 m を測る。

壁面 南西壁は内傾して立ち上がり, その他の壁は外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。規模は, 長径 2.06 m, 短径 1.91 m である。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中層から中量の縄文式土器片が出土している。第 38 図 14 の深鉢の底部や 15 の深鉢は底面直上から出土している。

所見 本跡は, 断面形がフラスコ状を呈していることや, 遺物の特徴等から縄文時代中期中葉の土坑と思われる。

第 52 号土坑 (第 26 図)

位置 調査区の南部西寄り, C2h₆ 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は, 第 2 号住居跡の北西コーナーに掘り込まれている。

規模と平面形 長径 1.31 m, 短径 (0.95) m の楕円形を呈すると推定され, 深さ 0.32 m を測る。

長径方向 N - 6° - W。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土下層から少量の縄文式土器片が出土している。第38図16の深鉢は底面直上からつぶれた状態で出土している。

所見 本跡は、第2号住居跡より古く、出土遺物の特徴等から縄文時代中期後葉の土坑と思われる。

第54号土坑（第26図）

位置 調査区の中央部，C2h9区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径1.52m，短径0.96mの不定形を呈し，深さ0.31mを測る。

長径方向 N-18°-W。

壁面 緩やかに外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土下層から極少量の縄文式土器片が出土している。第154図5の須恵器の盤は覆土上層から出土しているが，流れ込みと思われる。

所見 出土遺物の特徴等から縄文時代中期後葉の土坑と思われる。

第59号土坑（第26図）

位置 調査区の北部西寄り，B1e7区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は，第11号住居跡の北東部，第12号住居跡の南西壁中央部にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 長径2.51m，短径2.51mの不整円形を呈し，深さ0.48mを測る。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がっているが，西壁は緩やかに内傾して立ち上がり，東壁は急激に内傾して立ち上がっている。

底面 平坦。規模は，長径2.69m，短径2.43mである。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から多量の縄文式土器片が出土している。第39図18・19の浅鉢，20の深鉢は底面直上から出土している。

所見 本跡は，第11・12号住居跡より古く，断面形がフラスコ状を呈していることや，遺物の特徴等から縄文時代中期前葉の土坑と思われる。

第 62 号土坑 (第 27 図)

位置 調査区の中央部西寄り, C2g₉ 区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径 2.00 m, 短径 1.40 m の楕円形を呈し, 深さ 1.25 m を測る。

長径方向 N - 10° - E。

壁面 壁は内傾して立ち上がり, 上位ではほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。規模は, 長径 2.86 m, 短径 2.64 m である。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から中量の縄文式土器片が出土している。第 39 図 21 の深鉢は覆土下層から出土している。

所見 本跡は, 断面形がフラスコ状を呈していることや, 遺物の特徴等から縄文時代中期中葉の土坑と思われる。

第 65 号土坑 (第 27 図)

位置 調査区の中央部寄り, C2c₂ 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北部は, 第 64 号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長径 0.78 m, 短径 0.77 m の不定形を呈し, 深さ 0.70 m を測る。

長径方向 N - 7° - W。

壁面 壁は下位で強く内傾して立ち上がり, 中位から上位にかけては緩やかに内傾して立ち上がっている。

底面 平坦。規模は, 長径 2.10 m, 短径 1.37 m である。

覆土 全体的にロームブロックを含んでおり, 人為的に埋め戻された様相を呈している。

遺物 覆土の中・下層及び底面から若干浮いた状態で少量の縄文式土器片や石器や石が出土している。縄文式土器片で接合・復元できたものはない。石が何に使用されたかは不明である。土師器片も出土しているが, 流れ込みと思われる。

所見 本跡は, 第 64 号土坑より古い。遺物の出土状況からみて, 土坑が廃棄された後に, 意図的に南側から土器片や石等を投棄したものと推定される。断面形がフラスコ状を呈することや, 遺物の特徴等から縄文時代中期前葉の土坑と思われる。

第 66 号土坑 (第 27 図)

位置 調査区の中央部, C2b₂ 区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径 2.25 m, 短径 1.59 m の不定形を呈し, 深さ 0.82 m を測る。

長径方向 N - 50° - W。

壁面 南東壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、その他の壁は内傾して立ち上がり、上位でほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦であるが、中央部にわずかな凹みがある。規模は、長径 2.20 m、短径 1.93 m である。

覆土 全体的にロームブロックを含んでおり、人為的に埋め戻された様相を呈している。

遺物 覆土下層から極少量の縄文式土器片が出土している。第 39 図 22 の小形鉢は覆土下層から出土している。覆土上層から少量の土師器片や支脚が出土しているが、流れ込みと思われる。

所見 本跡は、断面形がフラスコ状を呈していることや、遺物の特徴等から縄文時代中期前葉の土坑と思われる。

第 68 号土坑 (第 28 図)

位置 調査区の中央部、C2a₂ 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第 1 号道路跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長径 1.38 m、短径 1.28 m の不整形円形を呈し、深さ 1.02 m を測る。

壁面 壁は内傾して立ち上がり、上位で外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。規模は、長径 2.18 m、短径 2.10 m である。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から多量の縄文式土器片が出土している。第 40 図 24 の浅鉢は底面直上から、第 60 図 20 の打製石斧は覆土下層から出土している。覆土上・中層から少量の土師器片が出土しているが、流れ込みと思われる。

所見 本跡は、第 1 号道路跡より古く、断面形がフラスコ状を呈していることや、遺物の特徴等から縄文時代中期中葉の土坑と思われる。

第 77 号土坑 (第 28 図)

位置 調査区の北部、B1c₇ 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第 13 号住居跡の北東コーナー、第 37 号住居跡の東部にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 長径 2.31 m、短径 (1.35) m の不定形を呈し、深さ 0.57 m を測る。

長径方向 N - 41° - W。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 全体的にロームブロックやパミスを含んでおり、人為的に埋め戻された様相を呈している。
遺物 覆土中・下層から少量の縄文式土器片と石が出土している。石は何に使用されたかは不明で

ある。第 40 図 25 の深鉢は覆土中層から出土している。

所見 本跡は、第 13・37 号住居跡より古く、出土遺物の特徴等から縄文時代後期前葉の土坑と思われる。

第 84 号土坑 (第 29 図)

位置 調査区の中央部、B1g₀ 区を中心に確認されている。

規模と平面形 長径 1.83 m、短径 1.69 m の円形を呈し、深さ 0.97 m を測る。

長径方向 N - 79° - E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から中量の縄文式土器片が出土している。第 60 図 21 の磨製石斧は底面直上から出土している。少量の土師器片が出土しているが、流れ込みと思われる。

所見 本跡は、出土遺物の特徴等から縄文時代中期後葉の土坑と思われる。

第 87 号土坑 (第 29 図)

位置 調査区の中央部、C2a₅ 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第 25 号住居跡の南西壁中央部と第 1 号道路跡にそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 長径 2.45 m、短径 1.91 m の不整楕円形を呈し、深さ 0.63 m を測る。

長径方向 N - 30° - E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。3 か所のピット (P₁ ~ P₃) を検出している。P₁ は、規模径 36 cm、深さ 54 cm で、P₂、P₃ は、規模径 21 ~ 30 cm、深さ 54 ~ 60 cm である。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層及び底面から若干浮いた状態で、極めて多量の縄文式土器片が出土している。第 41 図 26 の浅鉢は底面から浮いてつぶれた状態で、第 60 図 22 の石鏃は覆土下層から出土している。中量の土師器片が出土しているが、流れ込みと思われる。

所見 本跡は、第 25 号住居跡や第 1 号道路跡より古く、出土遺物の特徴等から縄文時代中期中葉の土坑と思われる。

第 92 号土坑 (第 30 図)

位置 調査区の中央部、B2f₃ 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第22号住居跡の北西部に掘り込まれている。

規模と平面形 長径1.06 m、短径(0.92) mの楕円形を呈すると推定され、深さ0.45 mを測る。

長径方向 N - 74° - W。

壁面 内傾して立ち上がっている。

底面 平坦。規模は、長径1.22 m、短径(1.03) mである。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層及び底面から若干浮いた状態で多量の縄文式土器片が出土している。第41図29の小形の深鉢は底面直上で出土している。

所見 本跡は、第22号住居跡より古く、断面形がフラスコ状を呈していることや、遺物の特徴等から縄文時代後期前葉の土坑と思われる。

第94号土坑(第30図)

位置 調査区の中央部東寄り、B2e4を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第27号住居跡の南部に掘り込まれ、第93号土坑と重複している。

規模と平面形 長径2.06 m、短径1.88 mのほぼ円形を呈すると推定され、深さ0.69 mを測る。

壁面 壁は内傾して立ち上がり、上位でほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 皿状。規模は、長径1.95 m、短径1.92 mである。

覆土 全体的にロームブロックを含んでおり、人為的に埋め戻された様相を呈している。

遺物 覆土中・下層から多量の縄文式土器片と少量の石が出土している。石は何に使用されたかは不明である。第42図30の浅鉢や第43図32の深鉢は底面直上から出土している。覆土上層から少量の土師器片が出土しているが、流れ込みと思われる。

所見 本跡は、第27号住居跡より古く、断面形がフラスコ状を呈していることや、遺物の特徴等から縄文時代中期前葉の土坑と思われる。

第103号土坑(第31図)

位置 調査区の南部、C2e8区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第6号住居跡の中央部、第106号土坑の北西部をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長径(1.20) m、短径1.16 mの不定形を呈し、深さ0.22 mを測る。

長径方向 [N - 20° - E。]

壁面 壁中程まで垂直に、その上は外傾して立ち上がっている。

底面 平坦。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から中量の縄文式土器片が出土している。第43図33, 34の深鉢や第61図26の打製石斧は覆土下層から出土している。少量の土師器片が出土しているが、流れ込みと思われる。

所見 本跡は、第6号住居跡、第106号土坑より新しく、出土遺物の特徴等から縄文時代中期中葉の土坑と思われる。

第104号土坑（第31図）

位置 調査区の中央部西寄り、C2g₁区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第7号住居跡の中央部北寄り部分に掘り込まれている。

規模と平面形 長径0.75 m, 短径0.71 mの円形を呈し、深さ0.97 mを測る。

壁面 壁は内傾して立ち上がり、上位ではほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。規模は、長径2.40 m, 短径2.35 mである。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から多量の縄文式土器片が出土している。第43図35, 36の深鉢の底部や第61図27の凹石は底面直上から出土している。

所見 本跡は、第7号住居跡より古く、断面形がフラスコ状を呈していることや、遺物の特徴等から縄文時代中期中葉の土坑と思われる。

第106号土坑（第31図）

位置 調査区の南部、C2f₈区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第5号住居跡の東部、第103号土坑の南西部、第107号土坑の北部をそれぞれ掘り込まれ、第6号住居跡の西部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長径1.29 m, 短径1.14 mの不整楕円形を呈し、深さ0.89 mを測る。

長径方向 N-3°-E。

壁面 壁は内傾して立ち上がり、上位ではほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。規模は、長径2.78 m, 短径2.63 mである。

覆土 全体的にロームブロックやパミスブロックを含んでおり、人為的に埋め戻された様相を呈している。

遺物 覆土中・下層から極めて多量の縄文式土器片が出土している。第43図37の深鉢は底面直上から出土している。

所見 本跡は、第5号住居跡、第103・107号土坑より古く、第6号住居跡より新しい。断面形がフラスコ状を呈していることや、遺物の特徴等から縄文時代中期中葉の土坑と思われる。

第 114 号土坑 (第 32 図)

位置 調査区の北部, A2j₁ 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は, 第 33 号住居跡の南部や第 34 号住居跡の東コーナーにそれぞれ掘り込まれている。

規模と平面形 長径 2.02 m, 短径 1.57 m の不定形を呈し, 深さ 0.49 m を測る。

長径方向 N - 72° - W。

壁面 南壁は内傾して立ち上がり, その他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。規模は, 長径 1.85 m, 短径 1.57 m である。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から中量の縄文式土器片が出土している。第 44 図 39 の深鉢は底面直上から出土している。

所見 本跡は, 第 33・34 号住居跡より古く, 断面形がフラスコ状を呈していることや, 遺物の特徴等から縄文時代中期前葉の土坑と思われる。

第 115 号土坑 (第 32 図)

位置 調査区の北部, A1j₀ 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は, 第 34 号住居跡の中央部北寄り部分に掘り込まれている。

規模と平面形 直径 1.50 m の円形を呈し, 深さ 0.55 m を測る。

壁面 壁は内傾して立ち上がり, 上位ではほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。規模は, 長径 1.98 m, 短径 1.85 m である。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から極めて多量の縄文式土器片が出土している。第 45 図 43 の深鉢は底面直上からつぶれた状態で出土している。少量の土師器片が出土しているが, 流れ込みと思われる。

所見 本跡は, 第 34 号住居跡より古く, 断面形がフラスコ状を呈していることや, 遺物の特徴等から縄文時代中期中葉の土坑と思われる。

第 121 号土坑 (第 32 図)

位置 調査区の北部, B1a₈ 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は, 第 122 号土坑の西部に掘り込まれている。

規模と平面形 長径 2.58 m, 短径 1.90 m の不定形を呈し, 深さ 0.65 m を測る。

長径方向 N - 69° - E。

壁面 内傾して立ち上がっている。

底面 平坦。規模は、長径 2.27 m、短径 [1.97] m である。

覆土 全体的にロームブロックやパミスブロックを含んでおり、人為的に埋め戻された様相を呈している。

遺物 覆土中・下層から極めて多量の縄文式土器片と少量の石器が出土している。第 46 図 45 の深鉢は覆土中層から、第 61 図 28 の石鏃は覆土下層から出土している。

所見 本跡は、第 122 号土坑より古く、断面形がフラスコ状を呈していることや、遺物の特徴等から縄文時代中期中葉の土坑と思われる。

第 125 号土坑 (第 33 図)

位置 調査区の北部東寄り、B2c₃ 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第 27 号住居跡の北西コーナーに掘り込まれ、第 123 号土坑の北東部、第 124 号土坑の東部をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長径 1.79 m、短径 1.77 m の不整形円形を呈し、深さ 0.52 m を測る。

壁面 内傾して立ち上がっている。

底面 凹凸。規模は、長径 1.88 m、短径 1.72 m である。

覆土 全体的にロームブロックを含んでおり、人為的に埋め戻された様相を呈している。

遺物 覆土中・下層及び底面から若干浮いた状態で極めて多量の縄文式土器片と少量の石が出土している。縄文式土器片で接合・復元できたものは少ない。石は何に使用されたかは不明である。第 46 図 46 の深鉢の底部は覆土中層から出土している。

所見 本跡は、第 27 号住居跡より古く、第 123・124 号土坑より新しい。遺物の出土状況からみて、土坑が廃棄された後に、意図的に土器片等が投棄されたものと推定される。断面形がフラスコ状を呈していることや、遺物の特徴等から縄文時代中期中葉の土坑と思われる。

第 144 号土坑 (第 34 図)

位置 調査区の北部西寄り、B1f₇ 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第 12 号住居跡の南コーナーに掘り込まれている。

規模と平面形 長径 (2.01) m、短径 1.82 m の楕円形を呈し、深さ 0.42 m を測る。

長径方向 N - 57° - E。

壁面 壁は内傾して立ち上がり、上位ではほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。規模は、長径 2.42 m、短径 (2.11) m である。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から多量の縄文式土器片が出土している。第 47 図 48 の深鉢は底面直上から

出土している。

所見 本跡は、第12号住居跡より古く、断面形がフラスコ状を呈していることや、遺物の特徴等から縄文時代中期前葉の土坑と思われる。

第145号土坑（第34図）

位置 調査区の北部西寄り、B1a₄区を中心に確認されている。

重複関係 本跡は、第14号住居跡の北西部に掘り込まれている。

規模と平面形 長径3.86m、短径1.89mの不定形を呈し、深さ0.95mを測る。

長径方向 N-10°-W。

壁面 北壁は内傾して立ち上がり、その他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

底面 平坦。規模は、長径2.75m、短径2.24mである。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から多量の縄文式土器片と少量の石が出土している。石は何に使用されたかは不明である。第62図30、31の耳飾りが2個覆土下層から出土している。少量の土師器片が出土しているが、流れ込みと思われる。

所見 本跡は、第14号住居跡より古く、断面形がフラスコ状を呈していることや、遺物の特徴等から縄文時代中期中葉の土坑と思われる。

表2 縄文時代土坑一覧表

土坑 番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m)					壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 本跡(新) > 他遺構(旧)	図版 番号
				上部長径	上部短径	深さ	坑底長径	坑底短径						
1	B1a ₄	N-65°-W	不定形	1.86	1.60	0.77	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片81点, 土師器片52点	本跡 > SI44	第20図
4	A1 _b	N-83°-W	楕円形	1.80	1.52	0.20	—	—	緩斜	平坦	自然	縄文式土器片204点, 土師器片5点	本跡 > SI45	〃
6	A1 _b	—	円形	1.63	1.54	1.14	—	—	垂直	平坦	自然	縄文式土器片141点, 土師器片29点, 石14点		〃
7	B1b ₆	N-15°-W	不定形	3.70	1.77	1.00	3.98	2.30	内傾	平坦	自然	縄文式土器及び破片543点, 土師器片37点, 石40点	SK150と重複 フラスコ状	〃
8	B1b ₆	—	円形	1.24	1.18	0.67	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片32点, 土師器片16点		〃
9	B1b ₇	N-7°-W	不定形	1.80	1.35	0.62	1.85	1.42	内傾	平坦	自然	縄文式土器片145点, 土師器片8点, 石器1点	SK130と重複 フラスコ状	〃
10	B1c ₃	N-29°-E	楕円形	2.62	2.32	0.83	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片130点, 弥生式土器片19点, 土師器片785点, 石器1点	SK13・75と重複	第21図
11	B1d ₃	N-62°-W	隅丸長方形	1.66	1.43	0.68	—	—	垂直	平坦	自然	縄文式土器片119点, 土師器片6点	本跡 < SI20 SK72と重複	〃
12	B1d ₃	N-64°-E	隅丸方形	1.58	1.54	0.70	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片7点	本跡 < SI12, SK13 SK72と重複	〃
13	B1d ₄	N-35°-E	不定形	3.52	2.36	0.45	3.40	2.17	内傾	平坦	自然	縄文式土器及び破片29点	SK12 < 本跡 < SI12 SK10・72と重複 フラスコ状	〃

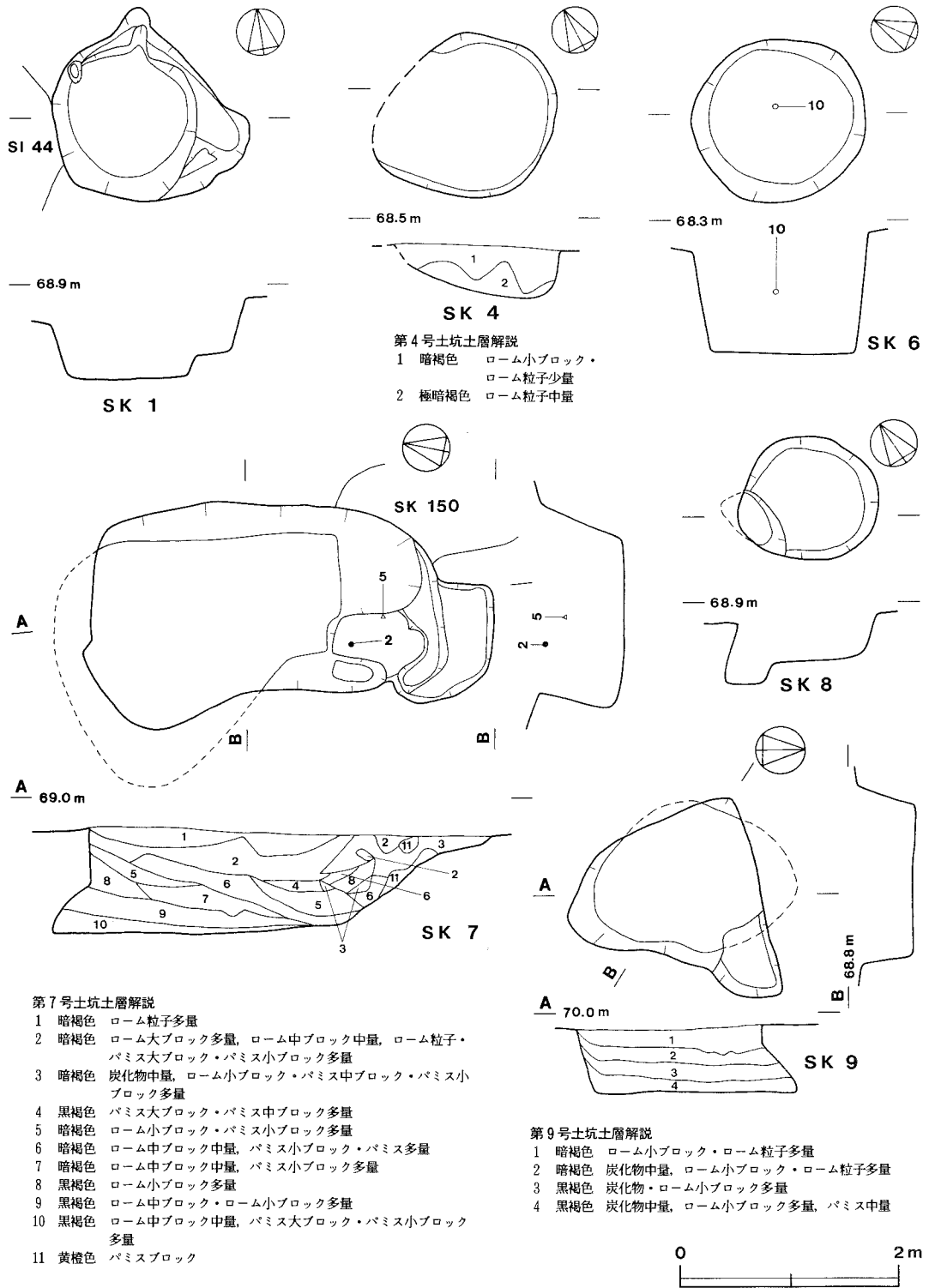
土坑 番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m)					壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 本跡(新) > 他遺構(旧)	図版 番号
				上部長径	上部短径	深さ	坑底長径	坑底短径						
14	B2b ₁	N-22° E	不定形	1.72	1.31	0.70	2.00	1.92	内傾	平坦	自然			第21図
15	B2b ₁	N-49° E	楕円形	1.53	1.17	0.78	2.00	1.86	内傾	平坦	自然	縄文式土器片64点, 土師器片24点, 石器2点	フラスコ状	第22図
16	B2c ₁	N-21° W	楕円形	1.67	(1.50)	0.63	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片34点, 土師器片59点	SK17・73と重複	〃
17	B2c ₂	N-8° E	楕円形	2.06	1.84	0.89	2.20	2.00	内傾	平坦	人為	縄文式土器及び破片151点, 土師器片170点, 石器4点	本跡<SK16・73 フラスコ状	〃
19	B2c ₁	—	不整形	1.35	1.31	0.30	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片126点		〃
20	B2d ₁	N-46° W	楕円形	1.58	1.27	1.04	1.72	1.42	内傾	平坦	自然	縄文式土器及び破片94点, 石器1点	本跡<SI29 フラスコ状	〃
21	B2d ₁	N-87° E	楕円形	2.62	2.16	0.65	2.45	1.85	内傾	平坦	自然	縄文式土器及び破片188点, 石器2点	本跡<SI29, SK153 フラスコ状	〃
22	B2c ₃	N-39° E	不定形	1.98	1.39	0.84	2.50	2.28	内傾	平坦	人為	縄文式土器片18点, 石器1点	フラスコ状	第23図
23	B1d ₁	N-62° W	不定形	(2.31)	1.81	0.88	2.85	(2.50)	内傾	平坦	自然	縄文式土器片70点, 石器2点	本跡<SI20・30, SK129・141 フラスコ状	〃
25	B1c ₁	N-1° W	楕円形	1.48	(1.29)	0.62	1.37	(1.32)	内傾	平坦	自然	縄文式土器及び破片37点, 石器8点	本跡<SI30, SK80 フラスコ状	〃
27	B1h ₁	N-65° E	楕円形	2.32	1.69	0.53	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片37点, 石器8点		〃
28	B2i ₁	N-32° W	楕円形	2.10	1.80	0.69	1.36	1.27	内傾	平坦	自然	縄文式土器片13点	フラスコ状	第24図
32	B2j ₁	N-22° W	不定形	1.55	1.42	0.17	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片20点		〃
33	B2h ₁	N-78° W	楕円形	1.63	1.17	0.35	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片24点		〃
34	B2g ₁	—	円形	1.56	1.43	0.72	2.03	1.99	内傾	平坦	自然	縄文式土器片89点, 石器5点	本跡<SI16 フラスコ状	〃
35	B2j ₁	N-44° E	楕円形	1.24	0.90	0.48	1.57	1.57	内傾	平坦	自然	縄文式土器片8点, 石器1点	本跡<SI25, SK95フラスコ状	〃
36	C2b ₁	N-12° W	楕円形	1.57	1.24	0.42	2.03	1.52	内傾	平坦	自然	縄文式土器片91点, 土師器片10点	フラスコ状	〃
37	C2b ₁	N-88° E	楕円形	1.44	1.29	0.52	2.07	1.97	内傾	平坦	自然	縄文式土器及び破片153点, 石器4点	フラスコ状	〃
39	C2c ₁	N-56° E	楕円形	1.14	1.00	0.21	—	—	緩斜	平坦	自然	縄文式土器片33点, 土師器片10点		第25図
42	C2f ₁	—	不整形	1.64	1.49	0.51	—	—	緩斜	平坦	自然	縄文式土器片12点		〃
43	C2f ₁	N-53° W	楕円形	1.56	1.40	0.31	—	—	緩斜	平坦	自然	縄文式土器片19点	SK44と重複	〃
44	C2f ₁	N-53° E	楕円形	1.93	1.69	1.69	1.40	1.10	内傾	平坦	人為	縄文式土器片123点, 土師器片24点, 須恵器(覆土土層)1点, 石器5点	SK43・47と重複 フラスコ状	〃
45	C2d ₁	N-57° W	隅丸長方形	1.83	1.37	0.24	—	—	緩斜	平坦	人為	縄文式土器片53点	本跡<SI38	第25図
46	C2g ₁	—	円形	1.89	1.72	0.70	2.06	1.91	内傾	平坦	自然	縄文式土器及び破片33点	フラスコ状	〃
47	C2f ₁	N-75° E	不定形	2.17	1.34	0.43	—	—	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片43点, 土師器片10点	SK44と重複	〃
50	C2g ₁	—	円形	1.44	1.33	0.34	—	—	緩斜	平坦	自然	縄文式土器片31点		第26図
52	C2h ₁	—	(円形)	1.31	(0.95)	0.32	—	—	外傾	平坦	人為	縄文式土器片2点	本跡<SI12	〃
53	C2h ₁	N-41° W	不定形	1.33	1.12	0.32	—	—	垂直	平坦	自然	縄文式土器片40点		〃
54	C2h ₁	N-18° W	不定形	1.52	0.96	0.31	—	—	緩斜	平坦	自然	縄文式土器片2点, 須恵器1点		〃
56	C2h ₁	N-85° E	不定形	2.49	1.95	0.40	—	—	緩斜	平坦	不明	縄文式土器片71点, 石器1点		〃
57	C2g ₁	N-44° E	楕円形	2.08	1.57	0.70	2.56	1.95	内傾	平坦	人為	縄文式土器片80点, 土師器片13点	本跡<SI15 SK137と重複 フラスコ状	〃
58	C2g ₁	—	円形	1.62	1.59	0.38	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片29点, 石器5点	本跡<SI15	〃
59	B1c ₁	—	不整形	2.51	2.51	0.48	2.69	2.43	内傾	平坦	自然	縄文式土器及び破片166点	本跡<SI11・12 フラスコ状	〃
60	C2c ₁	—	円形	1.45	1.35	0.40	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片69点		第27図
61	B2i ₁	N-30° W	不定形	1.20	(0.97)	0.85	1.26	0.68	内傾	平坦	自然	縄文式土器片20点	本跡<SI40 フラスコ状	〃
62	C2g ₁	N-10° E	楕円形	2.00	1.40	1.25	2.86	2.64	内傾	平坦	自然	縄文式土器及び破片33点	フラスコ状	〃
64	C2b ₁	N-60° E	楕円形	1.47	(0.47)	0.70	—	—	外傾	平坦	人為	縄文式土器片52点, 石器1点	本跡>SK65	〃
65	C2c ₁	N-7° W	不定形	0.78	0.77	0.70	2.10	1.37	内傾	平坦	人為	縄文式土器片5点, 土師器片10点, 石器2点	本跡<SK64 フラスコ状	〃

土坑 番号	位置	長径方向	平面形	規 模 (m)					壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考 本跡(新) > 他遺構(旧)	図版 番号
				上部長径	上部短径	深さ	坑底長径	坑底短径						
66	C2b ₂	N-50° W	不定形	2.25	1.59	0.82	2.20	1.93	内傾	平坦	自然	縄文式土器及び破片2点, 土師器片8点	フラスコ状	第27図
67	B1a ₃	N-29° W	不定形	1.97	1.45	0.47	—	—	外傾	皿状	人為	縄文式土器片21点, 土師器片21点, 石5点	本跡<SI14・44 SK70・76と重複	〃
68	C2a ₂	—	不整形	1.38	1.28	1.02	2.18	2.10	内傾	平坦	自然	縄文式土器及び破片242点, 土師器片110点, 石器1点, 石23点	本跡<SF1 フラスコ状	第28図
75	B1d ₁	N-58° W	不定形	2.32	2.30	0.77	—	—	垂直	平坦	自然	縄文式土器片7点	本跡<SI13 SK10と重複	〃
76	B1a ₃	—	円形	2.50	2.32	0.93	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片7点	本跡<SI14・44 SK67と重複	〃
77	B1c ₁	N-41° W	不定形	2.31	(1.35)	0.57	—	—	垂直	平坦	人為	縄文式土器片25点, 石5点	本跡SI13・37	〃
80	B1c ₁	N-36° E	不定形	2.19	1.68	0.59	1.97	1.84	内傾	平坦	人為	縄文式土器片26点	SK25・127<本跡<SI30 フラスコ状	第28図
81	B1b ₁	N-85° W	不定形	1.39	1.22	0.46	—	—	垂直	平坦	自然	縄文式土器片17点	本跡<SK139	第28図
82	B1g ₁	N-5° E	不定形	1.72	1.39	0.94	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片51点, 土師器片31点, 石4点	本跡<SK85	〃
83	B1g ₁	N-67° E	楕円形	1.10	0.72	0.27	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片26点		〃
84	B1g ₁	N-79° E	円形	1.83	1.69	0.97	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片35点, 土師器片25点, 石器1点		第29図
87	C2a ₃	N-30° E	不整形楕円形	2.45	1.91	0.63	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片211点, 土師器片40点, 石器1点	本跡<SI25, SF1	〃
88	B2k ₁	N-74° E	不定形	2.37	1.50	0.55	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片10点	SI41<本跡<SI16・40	〃
89	B2i ₁	N-16° E	不整形楕円形	1.30	1.08	0.48	—	—	外傾	凹凸	自然	縄文式土器片1点	本跡<SI16	〃
90	B2h ₁	—	円形	0.94	0.91	0.72	1.92	1.77	内傾	平坦	人為	石器1点	本跡<SI17 フラスコ状	〃
91	B2f ₁	N-45° E	不定形	2.30	1.82	0.77	2.33	1.57	内傾	平坦	自然	縄文式土器片36点, 石器1点, 石2点	本跡<SI26, SK149 フラスコ状	第30図
92	B2f ₁	N-74° W	楕円形	1.06	(0.92)	0.45	1.22	(1.03)	内傾	平坦	自然	縄文式土器及び破片123点	本跡<SI22 フラスコ状	〃
93	B2e ₁	N-7° E	楕円形	2.03	1.88	0.64	2.23	2.22	内傾	平坦	自然	縄文式土器片114点, 土師器片10点, 石器1点, 石20点	本跡<SI27 SK94と重複 フラスコ状	〃
94	B2e ₁	—	円形	2.06	1.88	0.69	1.95	1.92	内傾	皿状	人為	縄文式土器及び破片124点, 土師器及び破片26点, 石10点	本跡<SI27 SK93と重複 フラスコ状	〃
95	B2j ₁	N-0°	不定形	1.88	1.45	0.72	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片11点	本跡<SI17 SK35と重複	第30図
102	C2d ₁	N-30° E	不定形	2.28	1.81	0.73	3.13	2.45	内傾	平坦	人為	縄文式土器片37点, 土師器片24点, 石8点	本跡<SI24・39 フラスコ状	第31図
103	C2e ₁	N-73° E	不定形	(1.20)	1.16	0.22	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器及び破片62点, 土師器片11点, 石器1点	本跡>SI6 SK106と重複	〃
104	C2b ₁	—	円形	0.75	0.71	0.97	2.40	2.35	内傾	平坦	自然	縄文式土器及び破片87点, 石器1点	本跡<SI7 フラスコ状	〃
105	C2b ₁	—	円形	1.69	1.57	0.54	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片11点	本跡<SI7	〃
106	C2f ₁	N-3° E	不整形楕円形	1.29	1.14	0.89	2.78	2.63	内傾	平坦	人為	縄文式土器及び破片216点	本跡<SI5・6, SK107 SK103と重複 フラスコ状	〃
107	C2f ₁	N-9° W	楕円形	0.81	(0.66)	0.16	—	—	緩斜	皿状	自然		SK106<本跡<SI5・6	第32図
109	C2d ₁	N-65° W	(楕円形)	1.62	(0.90)	0.25	—	—	緩斜	平坦	自然	縄文式土器片35点	本跡<SI4・38	〃
114	A2j ₁	N-72° W	不定形	2.02	1.57	0.49	1.85	1.57	内傾	平坦	自然	縄文式土器片57点	本跡<SI33・34 フラスコ状	〃
115	A1j ₁	—	不整形	1.50	1.50	0.55	1.98	1.85	内傾	平坦	自然	縄文式土器及び破片197点, 土師器及び破片21点	本跡<SI34 フラスコ状	〃
119	B1a ₃	N-7° W	楕円形	1.30	1.12	0.54	1.08	0.99	内傾	平坦	人為	縄文式土器片134点, 土師器片18点, 石5点	フラスコ状	〃
121	B1a ₃	N-69° E	不定形	2.58	1.90	0.65	2.27	(1.97)	内傾	平坦	人為	縄文式土器及び破片427点, 石器2点	SK122と重複 フラスコ状	〃
122	B1a ₇	—	不整形	1.88	1.82	1.05	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片23点, 石3点	SK121と重複	〃
123	B2d ₁	N-3° E	不定形	(1.96)	1.91	0.21	2.20	1.91	内傾	平坦	人為	縄文式土器片308点, 土師器片66点, 石14点	本跡<SI27, SK124・125 フラスコ状	第33図
124	B2c ₁	—	(円形)	2.00	(1.47)	0.83	—	—	外傾	平坦	人為	縄文式土器片45点	SK123<本跡<SI27, SK125 〔フラスコ状〕	〃
125	B2c ₁	—	不整形	1.79	1.77	0.52	1.88	1.72	内傾	凹凸	人為	縄文式土器片160点, 石11点	SK123・124<本跡<SI27 フラスコ状	〃

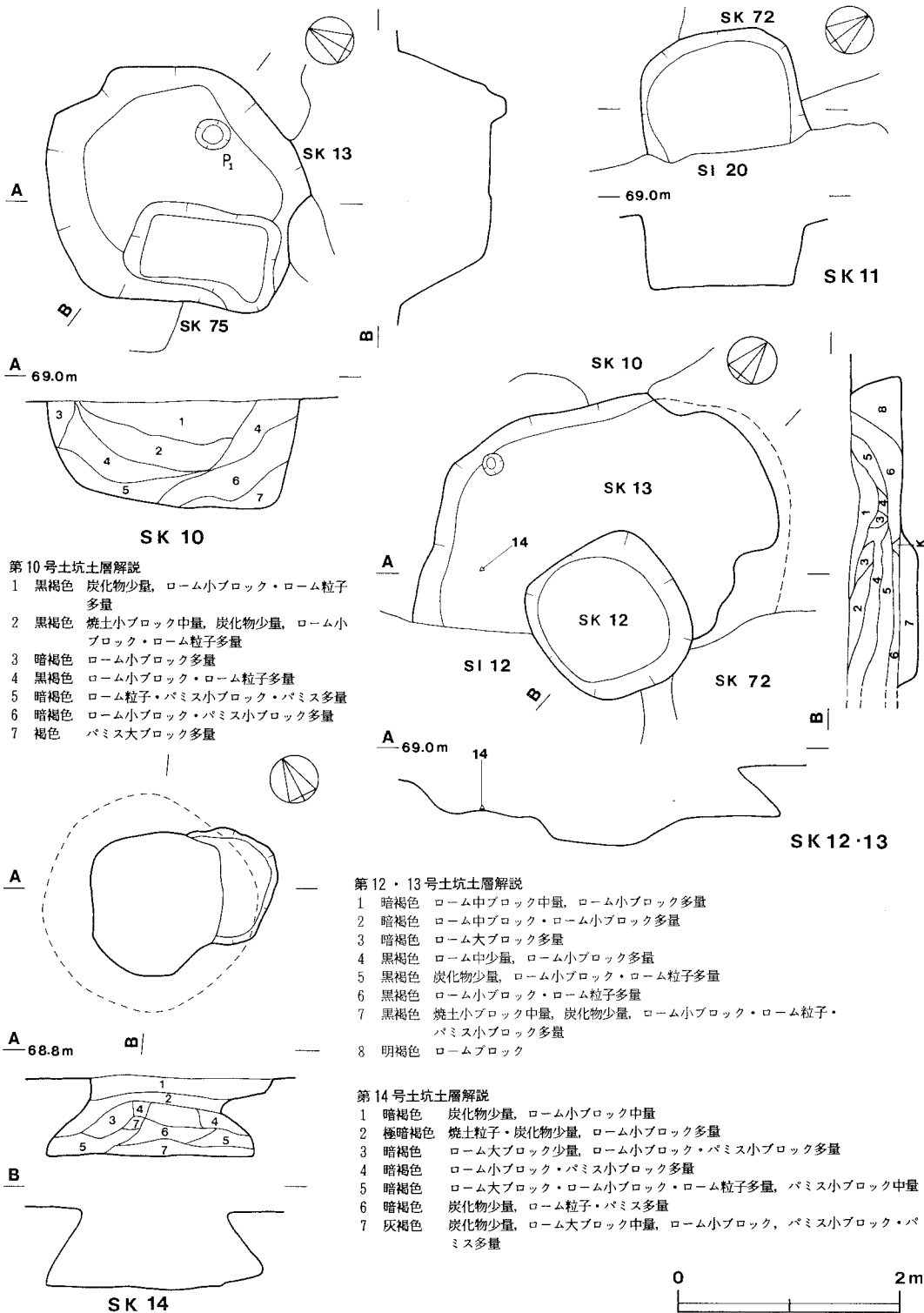
土坑 番号	位置	長径方向	平面形	規模 (m)					壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 本跡(新) > 他遺構(旧)	図版 番号
				上部長径	上部短径	深さ	坑底長径	坑底短径						
127	B1b ₁	N-60° W	不定形	2.05	1.34	0.70	1.96	1.24	内傾	平坦	自然		本跡<SI30・31 SK80と重複 フラスコ状	第33図
128	B2b ₂	N-46° E	不定形	1.36	0.98	0.56	1.30	1.09	内傾	平坦	自然		本跡<SI28 フラスコ状	〃
129	B1d ₃	—	円形	1.39	1.33	0.72	—	—	外傾	皿状	自然	縄文式土器片22点	SK23<本跡<SI30	第33図
138	B1h ₆	N-45° W	楕円形	1.50	1.34	0.75	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片10点	本跡<SI19	第33図
141	B1c ₅	N-66° W	不定形	1.98	1.24	0.90	1.87	1.80	内傾	平坦	不明	縄文式土器片19点、石2点	SK23<本跡<SK142 フラスコ状	〃
142	B1c ₅	N-2° W	(楕円形)	1.46	(1.02)	0.46	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片12点	本跡>SK141	〃
143	B2e ₃	N-22° W	(楕円形)	1.31	(0.82)	0.89	2.62	1.47	内傾	平坦	自然		本跡<SI27 フラスコ状	第34図
144	B1f ₁	N-57° E	不定形	(2.01)	1.82	0.42	2.42	(2.11)	内傾	平坦	自然	縄文式土器及び破片87点	本跡<SI12 フラスコ状	〃
145	B1a ₁	N-10° W	不定形	3.86	1.89	0.95	2.75	2.24	内傾	平坦	自然	縄文式土器片127点、土師器 片13点、石器2点、石15点	本跡<SI14 フラスコ状	〃
146	A2i ₁	N-46° W	不定形	2.18	(0.88)	0.60	2.28	(1.03)	内傾	平坦	人為	縄文式土器片1点	本跡<SI33 フラスコ状	〃
150	B1b ₃	N-42° W	不定形	(1.22)	1.54	0.25	—	—	外傾	平坦	自然	縄文式土器片3点	SK7と重複	〃
151	B2d ₁	—	円形	2.54	2.50	0.36	2.35	2.30	内傾	凹凸	人為	縄文式土器片51点	本跡<SI29・35 フラスコ状	第35図
153	B2c ₂	—	不整形	1.48	1.43	0.68	2.00	1.84	内傾	平坦	人為	縄文式土器片5点、石10点	SK20<本跡<SI29 フラスコ状	〃
160	B2d ₁	N-21° W	不定形	2.27	1.86	0.31	2.07	1.85	内傾	平坦	人為	縄文式土器片14点	本跡<SI27 フラスコ状	〃
161	B1c ₄	(N-90° W)	(楕円形)	(0.54)	(0.42)	—	—	—	不明	不明	不明	縄文式土器1点(埋設土器)	本跡>SI37	第11図

土坑出土土器観察表

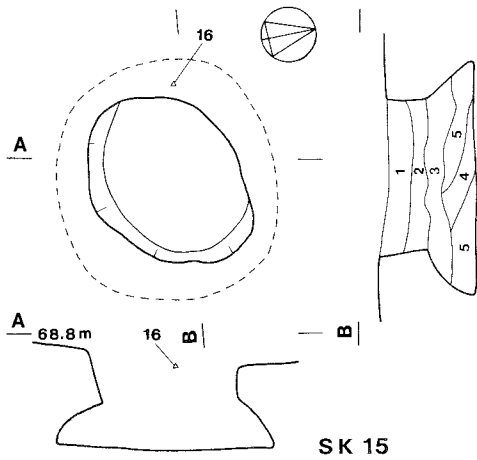
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第36図 1	深鉢形土器 (加曽利B)	B (16.9) C [11.8]	平底。胴部は外傾しながら直線的に立ち上がる。底部網代痕有り。胴部外面単節 RL の回転縄文を施した後へラ削り、内面へラナデ。	砂粒・長石・ 石英・雲母 にふい赤褐色 普通	SK7 P270 30% 底面直上
2	浅鉢形土器 (加曽利B)	A (24.4) B 7.3 C 8.8	平底。胴部は外傾しながら立ち上がる。無文土器。胴部内・外面及び口縁部内・外面丁寧なへラ磨き。口縁部内面に稜有り。	砂粒・長石・ 石英・雲母 赤色 普通	SK7 P273 PL49 60% 覆土中層
3	深鉢形土器 (加曽利B)	B (16.0) C 5.2	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。胴部外面は弧状の隆起線によって無文体と縄文施文帯とに区画、施文帯には単節 LR の回転縄文が施されているが、磨滅している。	砂粒・礫 にふい黄褐色 普通	SK7 P272 20% 底面直上
4	深鉢形土器 (加曽利B)	B (13.5) C 4.4	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。胴部外面は弧状の隆起線によって無文体と縄文施文帯とに区画、施文帯には単節 RL の回転縄文が施されているが、磨滅している。胴部下端へラ磨き、内面磨滅が著しい。	砂粒・長石・ 石英・雲母 明赤褐色 普通	SK7 P271 30% 底面直上
5	深鉢形土器 (阿玉台)	B (21.2) C 8.6	平底。胴部は外傾しながら立ち上がり、口縁部で外反する。胴部外面単節 RL の縄文地文に縦位のへラ磨きが施されている。胴部下端横位のへラ磨き。	砂粒・長石・ 雲母 赤色 普通	SK10 P275 PL49 70% 覆土下層
6	深鉢形土器 (阿玉台III)	A 22.0 B (22.4)	胴中央部から外傾して立ち上がり、口縁部に至る。胴下半部は弱い隆帯によって区画し、隆帯には爪形文が施されている。中央部外面は半截竹管による平行沈線によって区画され、区画内には縦位の沈線が施されている。折り返し口縁で、口縁部下端には爪形文が施されている。口縁には2単位の孔が2つある横状把手が付く。把手の隆帯には爪形状の連続刺突文が施されている。	砂粒・長石・ 石英・雲母 褐灰色 普通	SK13 P276 PL49 50% 覆土下層
第37図 7	深鉢形土器 (大木8a)	A 32.1 B (21.2)	胴上半部は内彎して頸部に至り、口縁部は頸部から外反して立ち上がる。頸部以下の単節LRの縄文地文を半截竹管による4条の平行沈線によって区画し、頸部から口縁部は複節RLRの回転縄文が施されている。口縁部上端には上下2本の隆帯が巡らされ、下側の隆帯には棒状工具による押圧が加えられている。口縁部には上下の隆帯からせり上がることによって表出された橋状の把手が2個1組で4単位付けられている。	砂粒・長石・石英 灰黄褐色 普通	SK17 P277 PL49 60% 底面直上
8	深鉢形土器 (加曽利B)	B (8.2) C 11.4	平底。胴部は外傾して立ち上がる。胴下半部外面ナデ、中央部外面単節 RL の回転縄文が横位に施されている。	砂粒・長石・ 石英・雲母 にふい褐色 普通	SK17 P278 30% 底面直上
9	深鉢形土器 (加曽利B)	B (4.3) C 14.6	底部片。平底。胴部外面へラナデ後磨き。	砂粒・長石・ 石英・雲母 褐色 普通	SK17 P279 30% 底面直上



第20図 土坑実測図(縄文1)

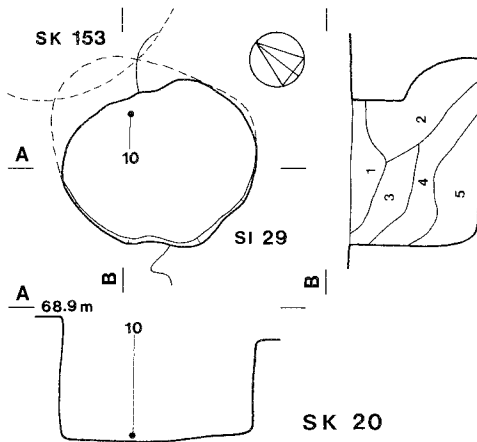
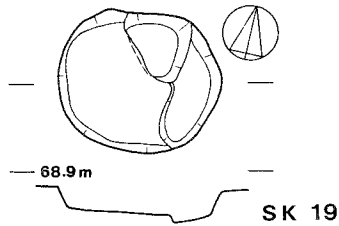


第21図 土坑実測図(縄文2)



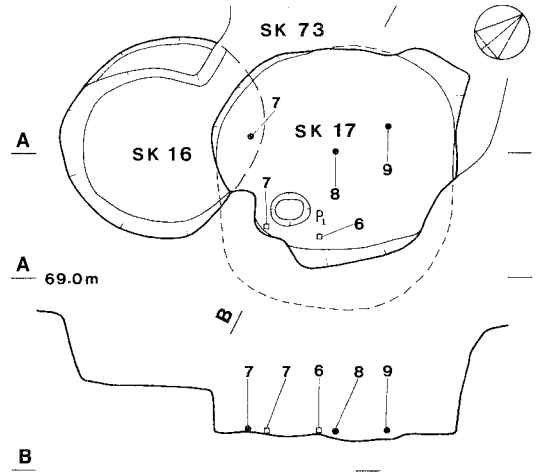
第15号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, パミス中量
- 3 極暗褐色 ローム中ブロック少量, ローム粒子多量
- 4 極暗褐色 ローム粒子・パミス小ブロック・パミス多量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・パミス多量



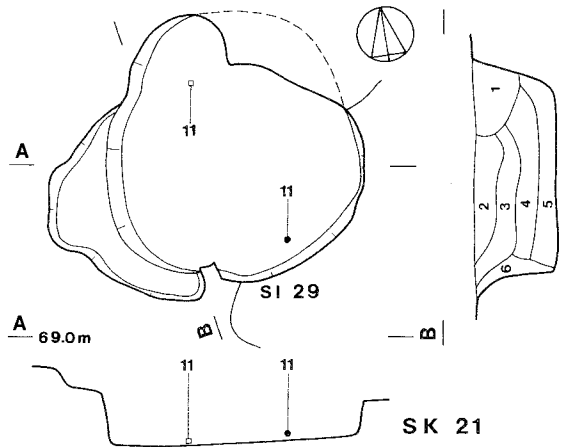
第20号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子多量
- 2 黒褐色 焼土小ブロック・炭化物少量, ローム小ブロック多量
- 3 黒褐色 炭化物少量, ローム小ブロック多量
- 4 黒褐色 炭化物・ローム大ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 5 暗褐色 炭化物少量, ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・パミス小ブロック多量



第17号土坑土層解説

- 1 黒褐色 焼土小ブロック少量, 炭化物中量, ローム小ブロック多量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック多量
- 3 極暗褐色 炭化物少量, ローム大ブロック中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック多量
- 4 暗褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・パミスブロック多量

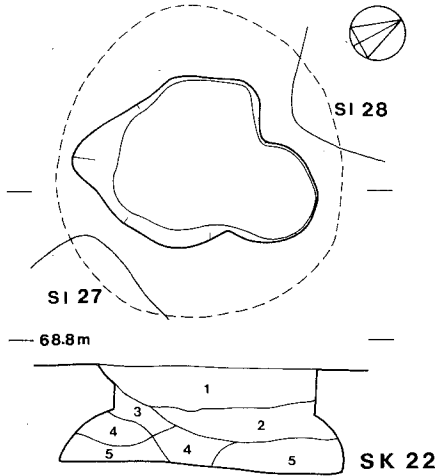


第21号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック多量
- 3 黒褐色 炭化物少量, ローム小ブロック多量
- 4 黒褐色 炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 5 極暗褐色 炭化物・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 6 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量

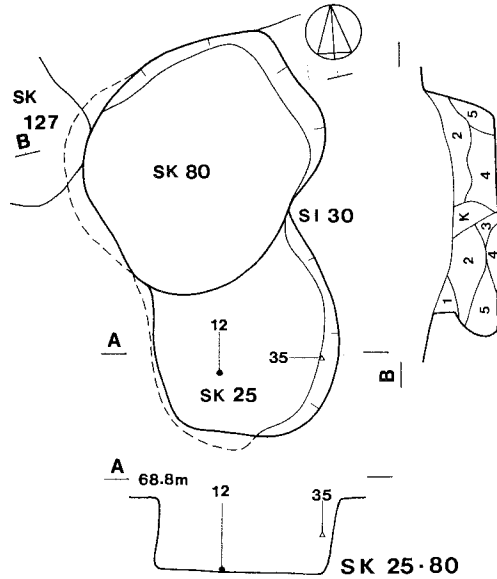


第22図 土坑実測図(縄文3)



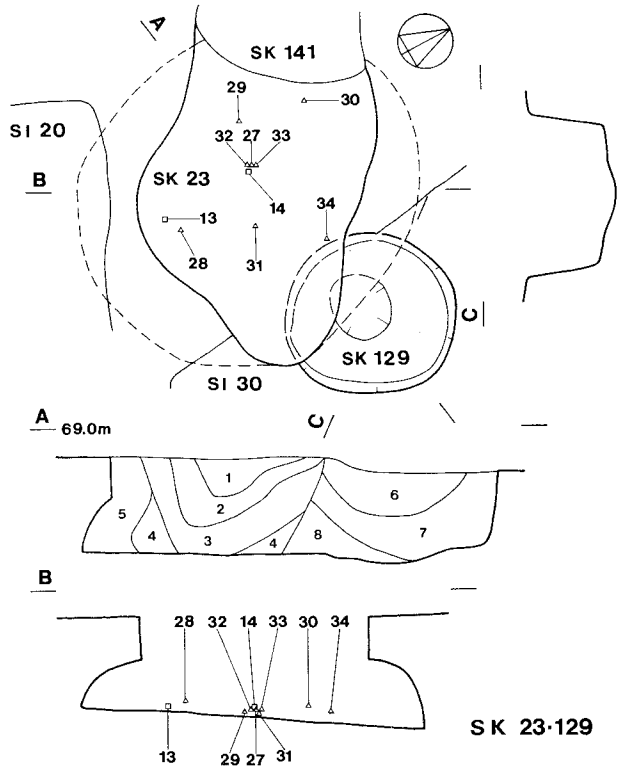
第 22 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化物・ローム中ブロック少量, ローム粒子多量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子多量
- 3 暗褐色 ローム大ブロック多量, ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック少量, ローム小ブロック多量, バミス中量
- 5 黒褐色 ローム中ブロック少量, ローム小ブロック・ローム粒子多量, バミス少量



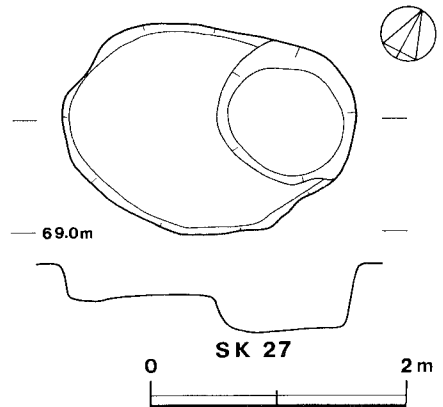
第 80 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 2 黒褐色 炭化物・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子多量, バミス小ブロック中量
- 3 褐色 ローム中ブロック中量, ローム粒子・バミス多量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・バミス中ブロック中量, バミス小ブロック多量
- 5 黒褐色 炭化物・ローム中ブロック中量, ローム粒子多量, バミス小ブロック中量

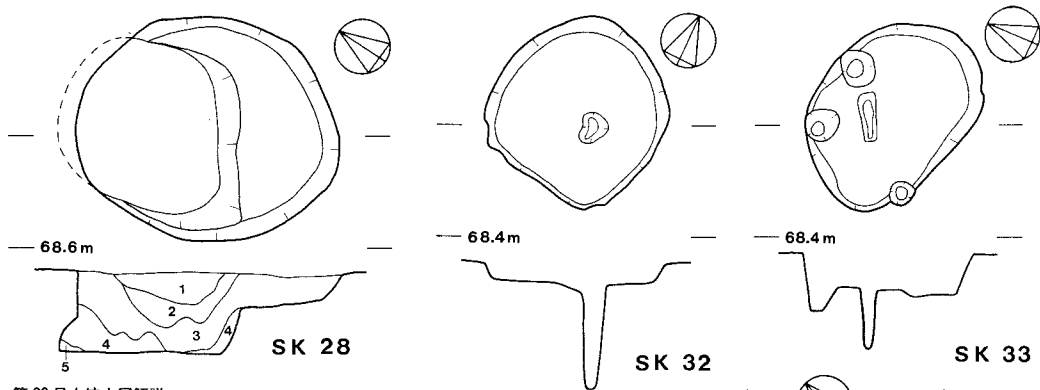


第 23 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック中量, ローム粒子多量
- 3 黒褐色 炭化物・ローム大ブロック・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・バミス小ブロック多量
- 4 黒褐色 焼土小ブロック中量, 炭化物少量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 5 黒褐色 ローム中ブロック少量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 6 黒褐色 焼土中ブロック少量, 炭化物・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 7 暗褐色 炭化物少量, ローム大ブロック多量, ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 8 黒褐色 炭化物・ローム大ブロック中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック多量

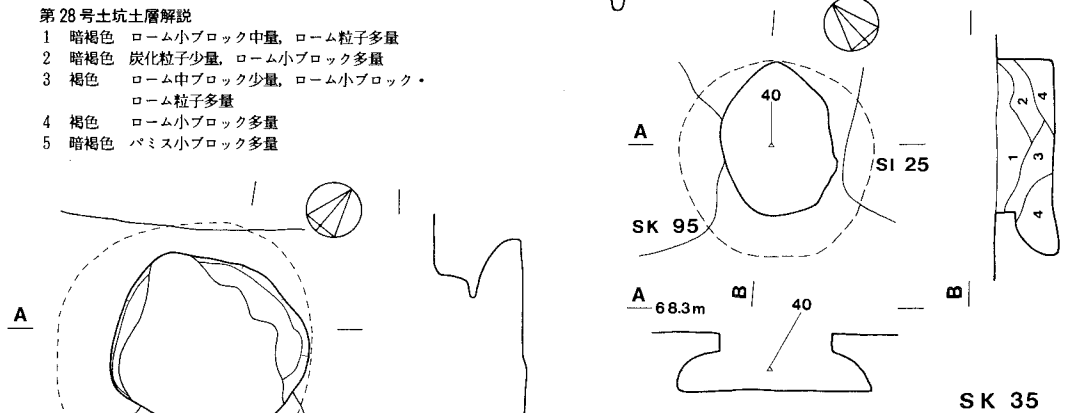


第 23 図 土坑実測図 (縄文 4)



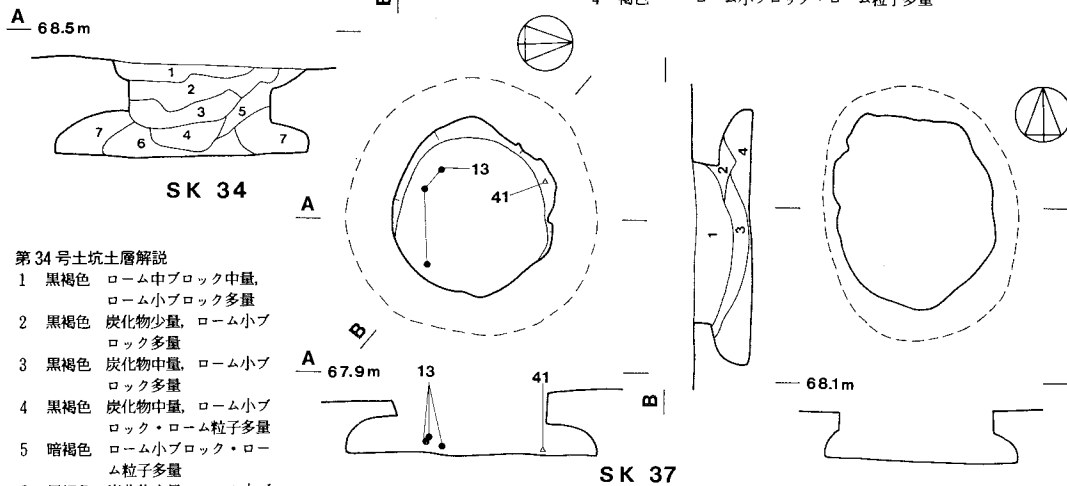
第 28 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子多量
- 2 暗褐色 炭化粒子少量, ローム小ブロック多量
- 3 褐色 ローム中ブロック少量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 4 褐色 ローム小ブロック多量
- 5 暗褐色 パミス小ブロック多量



第 35 号土坑土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック多量
- 2 暗褐色 焼土小ブロック少量, ローム小ブロック多量
- 3 黒褐色 焼土小ブロック・炭化物少量, ローム小ブロック多量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量

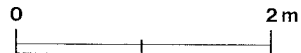


第 34 号土坑土層解説

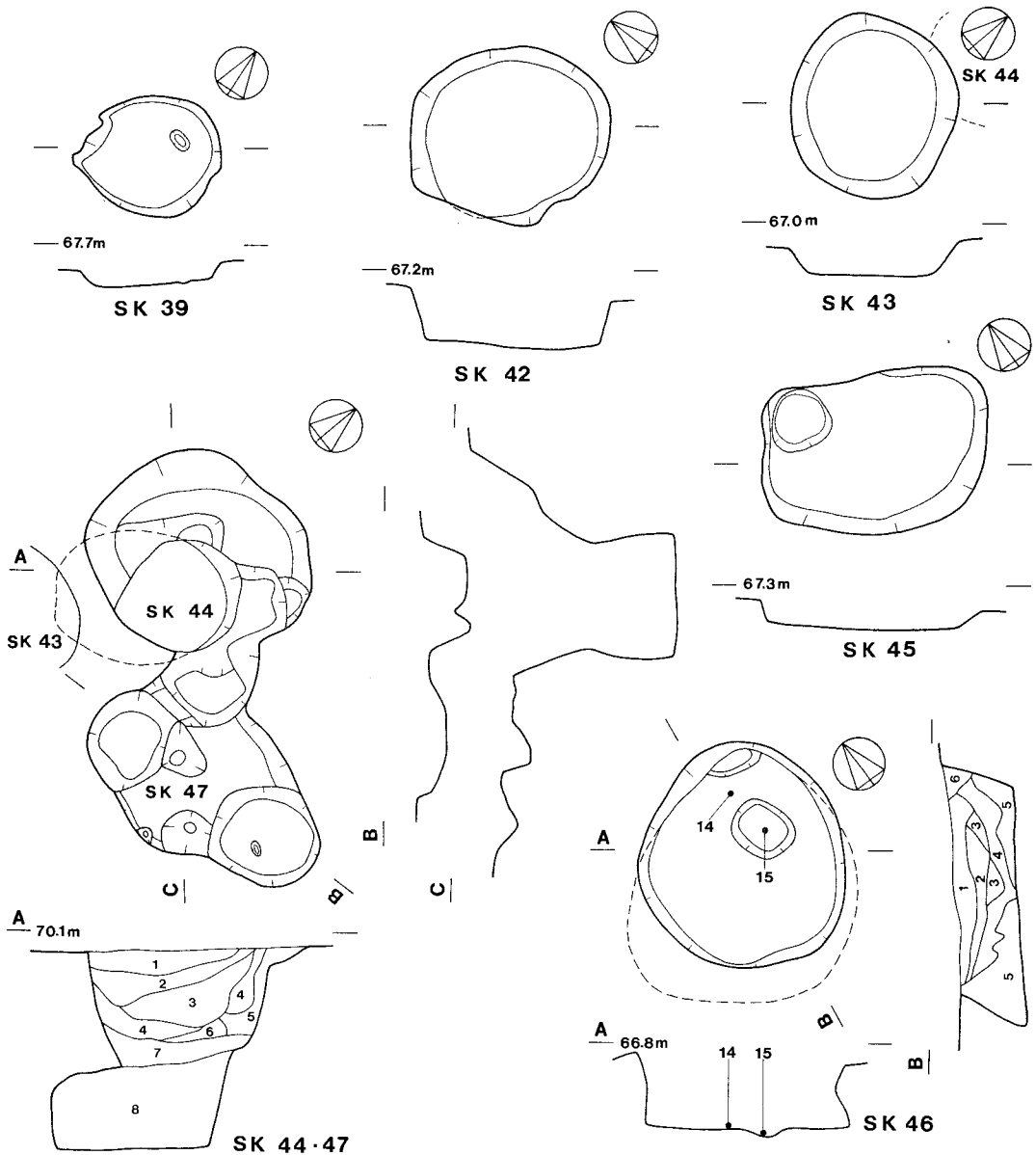
- 1 黒褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 2 黒褐色 炭化物少量, ローム小ブロック多量
- 3 黒褐色 炭化物中量, ローム小ブロック多量
- 4 黒褐色 炭化物中量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 6 黒褐色 炭化物中量, ローム小ブロック多量
- 7 黒褐色 炭化物少量, ローム小ブロック・ローム粒子多量

第 37 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 3 黒褐色 炭化物少量, ローム小ブロック中量, ローム粒子多量
- 4 黒褐色 炭化物中量, ローム小ブロック・ローム粒子多量



第 24 図 土坑実測図 (縄文 5)



第44号土坑土層解説

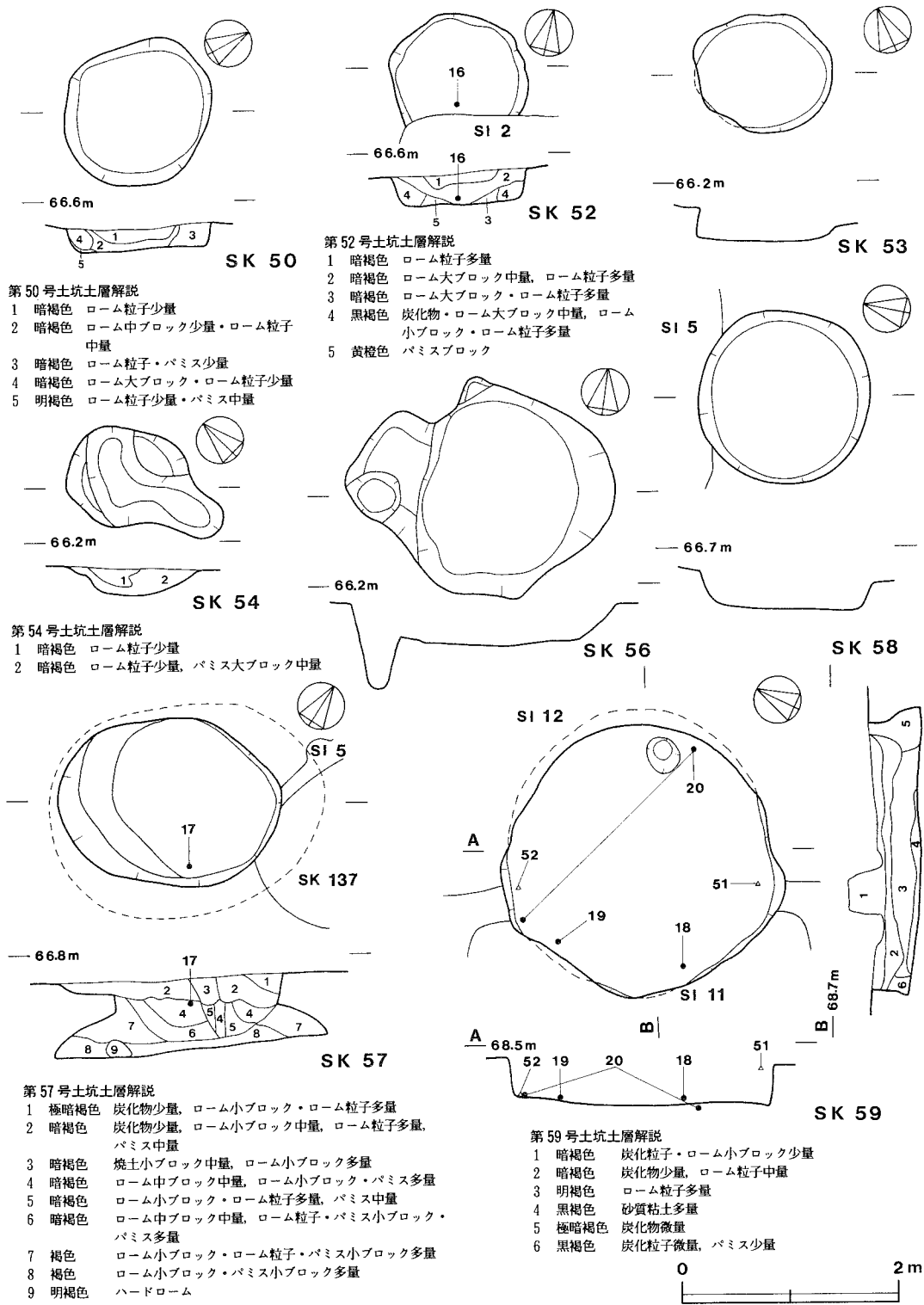
- 1 暗褐色 ローム小ブロック多量, パミス中量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 3 黒褐色 炭化物少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック中量, ローム粒子多量
- 4 極暗褐色 炭化物少量, ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 5 暗褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子・パミス小ブロック多量
- 6 暗褐色 ローム大ブロック・パミス小ブロック多量
- 7 明黄褐色 パミス土
- 8 褐色 ローム大ブロック多量, 砂質粘土

第46号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, パミス小ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・パミス小ブロック多量, パミス中ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 5 極暗褐色 ローム小ブロック多量
- 6 明褐色 ハードローム



第25図 土坑実測図(縄文6)



第50号土坑土層解説
 1 暗褐色 ローム粒子少量
 2 暗褐色 ローム中ブロック少量・ローム粒子中量
 3 暗褐色 ローム粒子・バミス少量
 4 暗褐色 ローム大ブロック・ローム粒子少量
 5 明褐色 ローム粒子少量・バミス中量

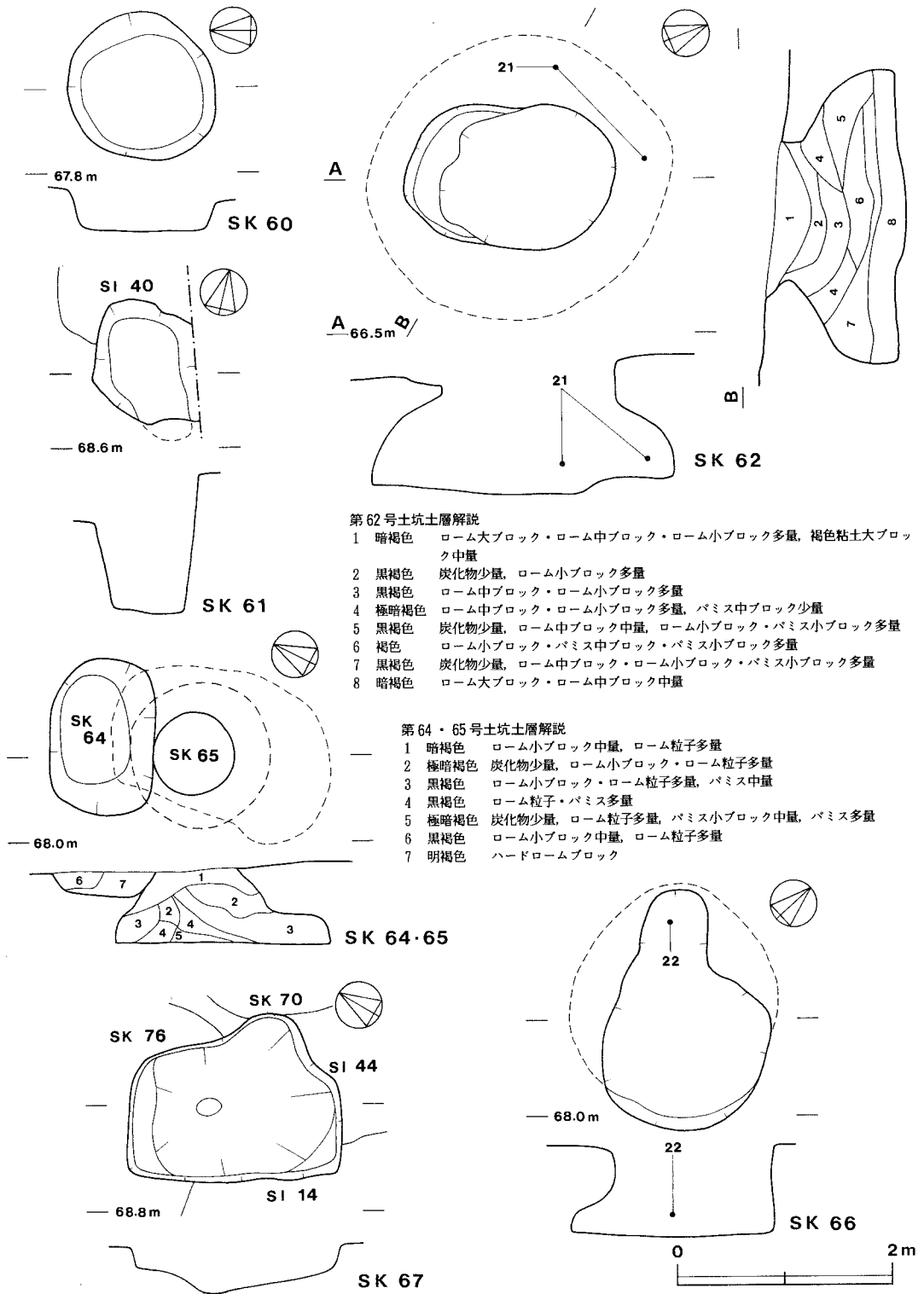
第52号土坑土層解説
 1 暗褐色 ローム粒子多量
 2 暗褐色 ローム大ブロック中量, ローム粒子多量
 3 暗褐色 ローム大ブロック・ローム粒子多量
 4 黒褐色 炭化物・ローム大ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
 5 黄褐色 バミスブロック

第54号土坑土層解説
 1 暗褐色 ローム粒子少量
 2 暗褐色 ローム粒子少量, バミス大ブロック中量

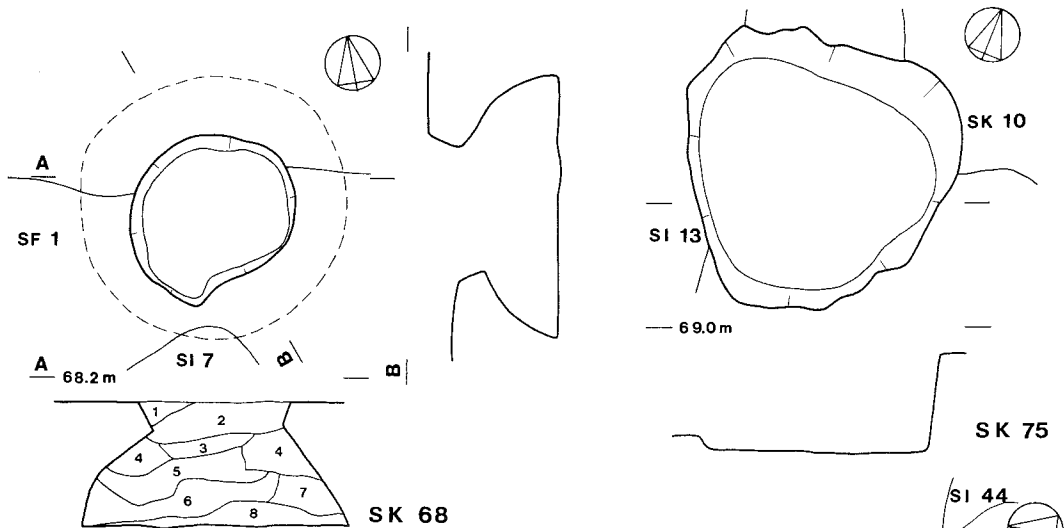
第57号土坑土層解説
 1 極暗褐色 炭化物少量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
 2 暗褐色 炭化物少量, ローム小ブロック中量, ローム粒子多量, バミス中量
 3 暗褐色 焼土小ブロック中量, ローム小ブロック多量
 4 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・バミス多量
 5 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量, バミス中量
 6 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム粒子・バミス小ブロック・バミス多量
 7 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・バミス小ブロック多量
 8 褐色 ローム小ブロック・バミス小ブロック多量
 9 明褐色 ハードローム

第59号土坑土層解説
 1 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック少量
 2 暗褐色 炭化物少量, ローム粒子中量
 3 明褐色 ローム粒子多量
 4 黒褐色 砂質粘土多量
 5 極暗褐色 炭化物微量
 6 黒褐色 炭化粒子微量, バミス少量

第26図 土坑実測図(縄文7)

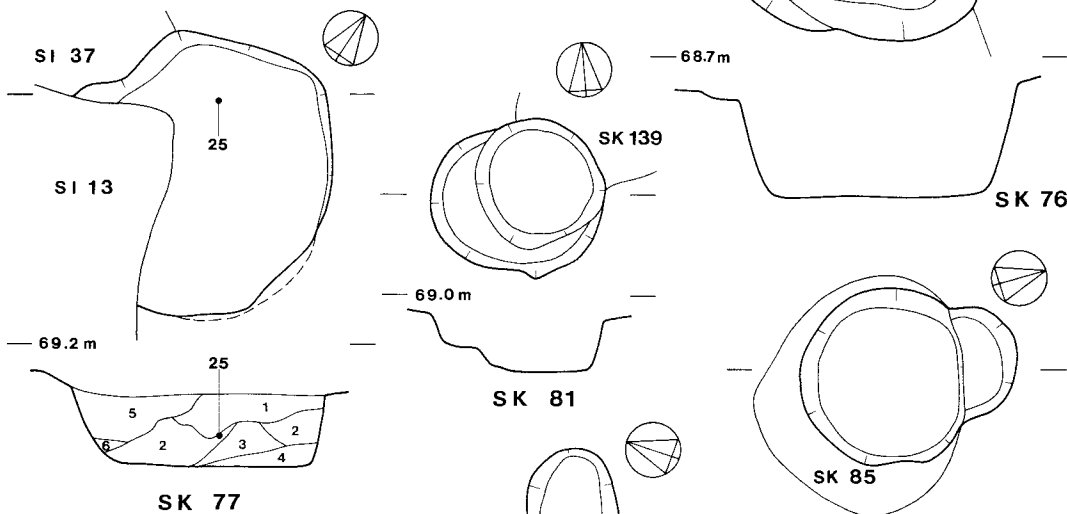


第 27 図 土坑実測図 (縄文 8)



第 68 号土坑土層解説

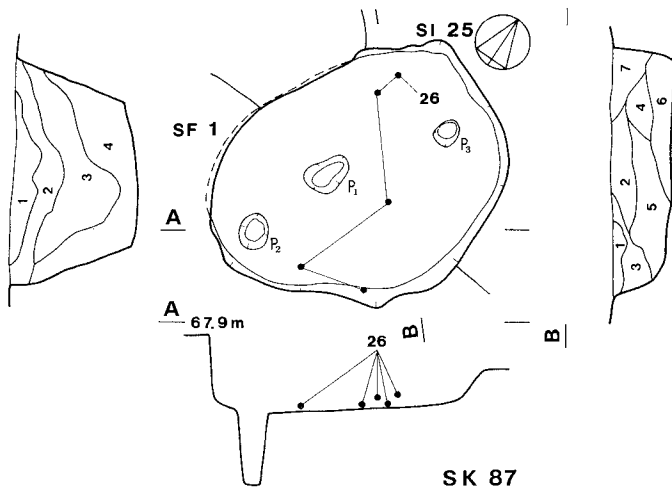
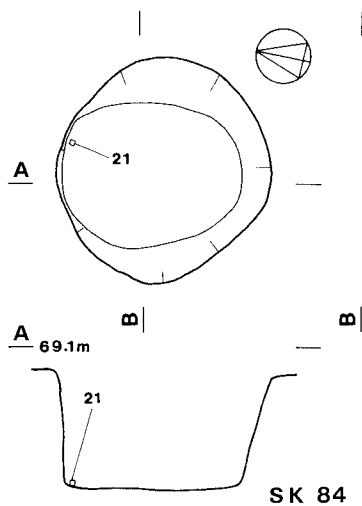
- 1 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 2 黒褐色 炭化物中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック多量
- 3 暗褐色 ローム大ブロック中量, ローム小ブロック・パミス小ブロック多量
- 4 暗褐色 炭化物・ローム中ブロック中量, ローム粒子多量, パミス小ブロック中量
- 5 黒褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 6 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・パミス小ブロック多量
- 7 黒褐色 ローム大ブロック中量, ローム小ブロック・パミス小ブロック多量
- 8 黒褐色 炭化物中量, ローム中ブロック多量



第 77 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 炭化物少量, ローム小ブロック多量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・パミス多量
- 3 黒褐色 焼土粒子少量, 炭化物・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子多量, パミス中量
- 4 極暗褐色 ローム粒子中量, パミス多量
- 5 明褐色 ハードローム
- 6 黄褐色 パミス土

第 28 図 土坑実測図 (縄文 9)

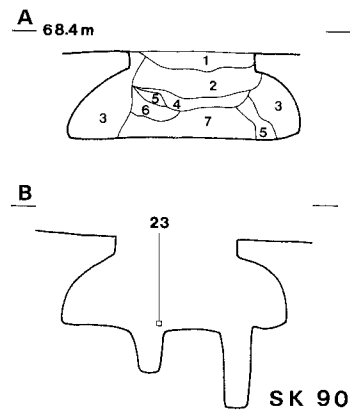
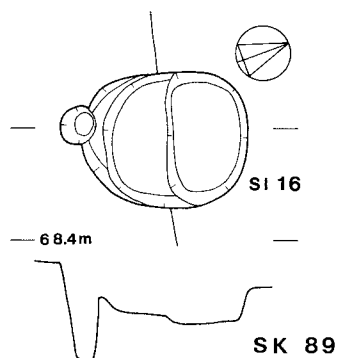
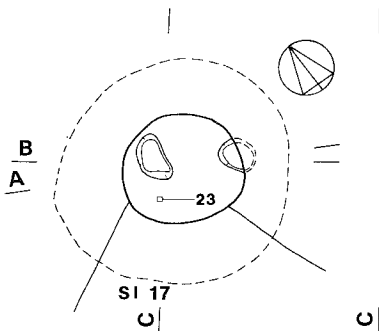
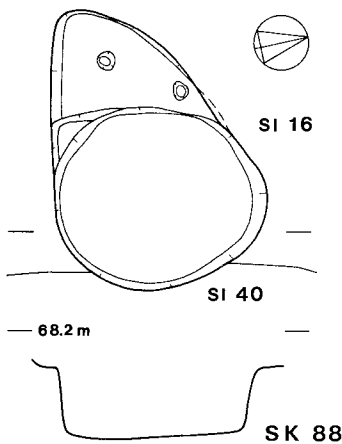


第84号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, パミス微量
- 3 黒褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, パミス微量

第87号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化物少量, ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 3 黒褐色 炭化物少量, ローム小ブロック多量
- 4 黒褐色 炭化物・ローム小ブロック多量
- 5 黒褐色 炭化物中量, ローム小ブロック多量
- 6 黒褐色 炭化物・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 7 明褐色 ソフトローム

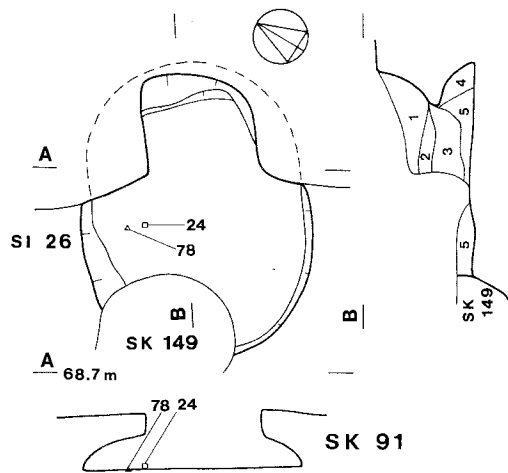


第90号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化物少量, ローム小ブロック中量, ローム粒子多量
- 2 黒褐色 炭化物少量, ローム小ブロック多量
- 3 黒褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 4 黒褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック, パミス中量
- 6 黒褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量, パミス小ブロック中量
- 7 極暗褐色 ローム小ブロック多量, パミス中ブロック中量, パミス小ブロック多量

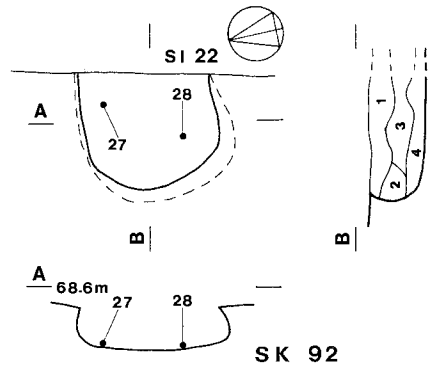


第29図 土坑実測図 (縄文10)



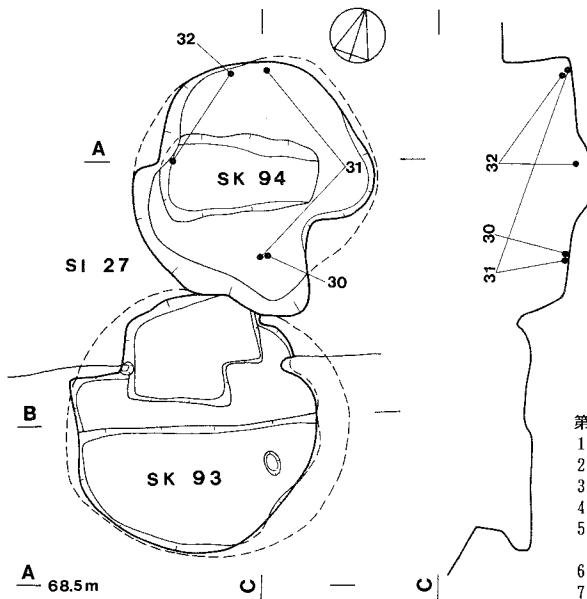
第91号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化物少量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子多量
- 3 黒褐色 炭化物少量, ローム小ブロック中量, ローム粒子多量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子多量
- 5 暗褐色 炭化物・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子多量



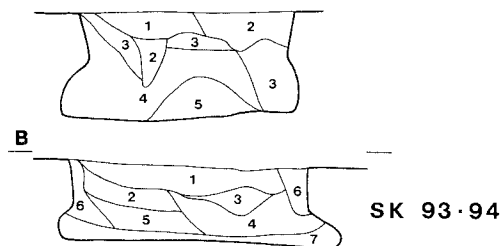
第92号土坑土層解説

- 1 暗褐色 炭化物・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 2 暗褐色 炭化物中量, ローム小ブロック多量
- 3 黒褐色 焼土中ブロック少量, 炭化物・ローム小ブロック多量
- 4 褐色 炭化物少量, ローム小ブロック多量



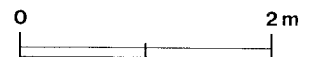
第93号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化物・ローム中ブロック少量, ローム小ブロック多量
- 2 黒褐色 炭化物少量, ローム小ブロック多量
- 3 黒褐色 炭化物少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック多量
- 4 黒褐色 炭化物中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック多量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子多量, パミス小ブロック中量
- 6 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 7 明黄褐色 パミス

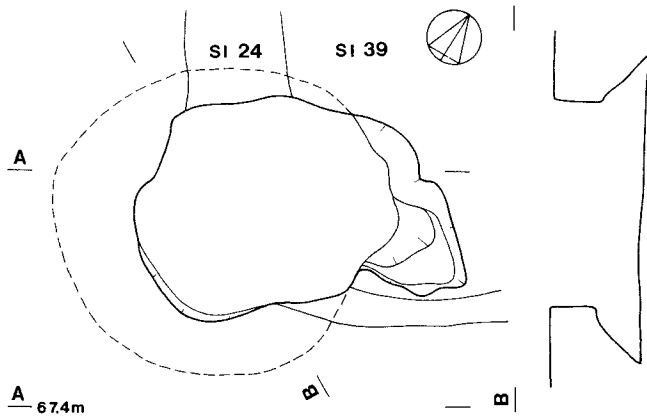


第94号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 2 暗褐色 ローム大ブロック・ローム小ブロック多量
- 3 黒褐色 炭化物少量, ローム小ブロック多量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック中量, ローム粒子多量
- 5 黒褐色 ローム大ブロック多量, ローム中ブロック少量



第30図 土坑実測図(縄文11)

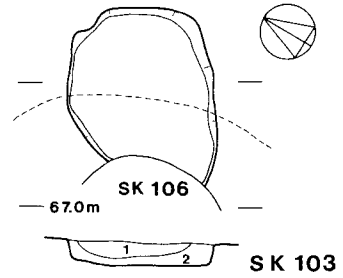
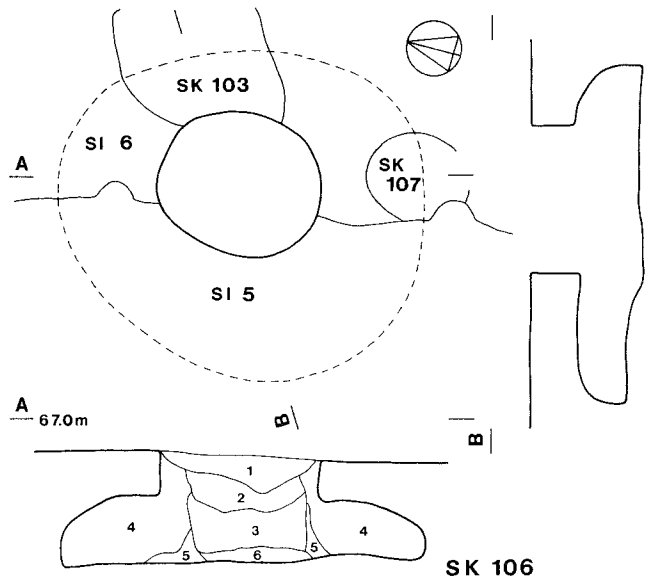


第 102 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック少量, ローム小ブロック多量, パミス小ブロック中量
- 3 黒褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 4 黒褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 5 極暗褐色 ローム大ブロック多量, ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・パミス小ブロック多量
- 6 明黄褐色 パミス土

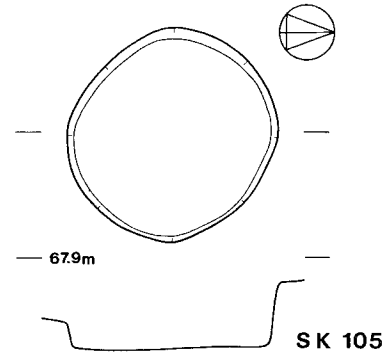
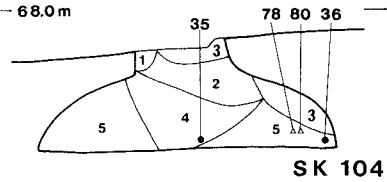
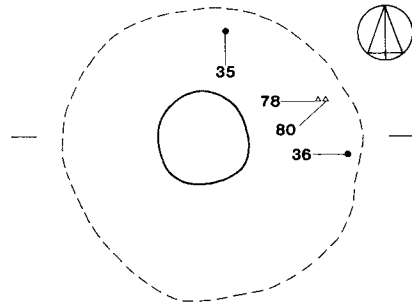
第 104 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック中量, ローム粒子多量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 3 暗褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック中量, ローム粒子多量
- 4 黒褐色 炭化物中量, ローム小ブロック多量
- 5 黒褐色 炭化物・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量



第 103 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック多量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量

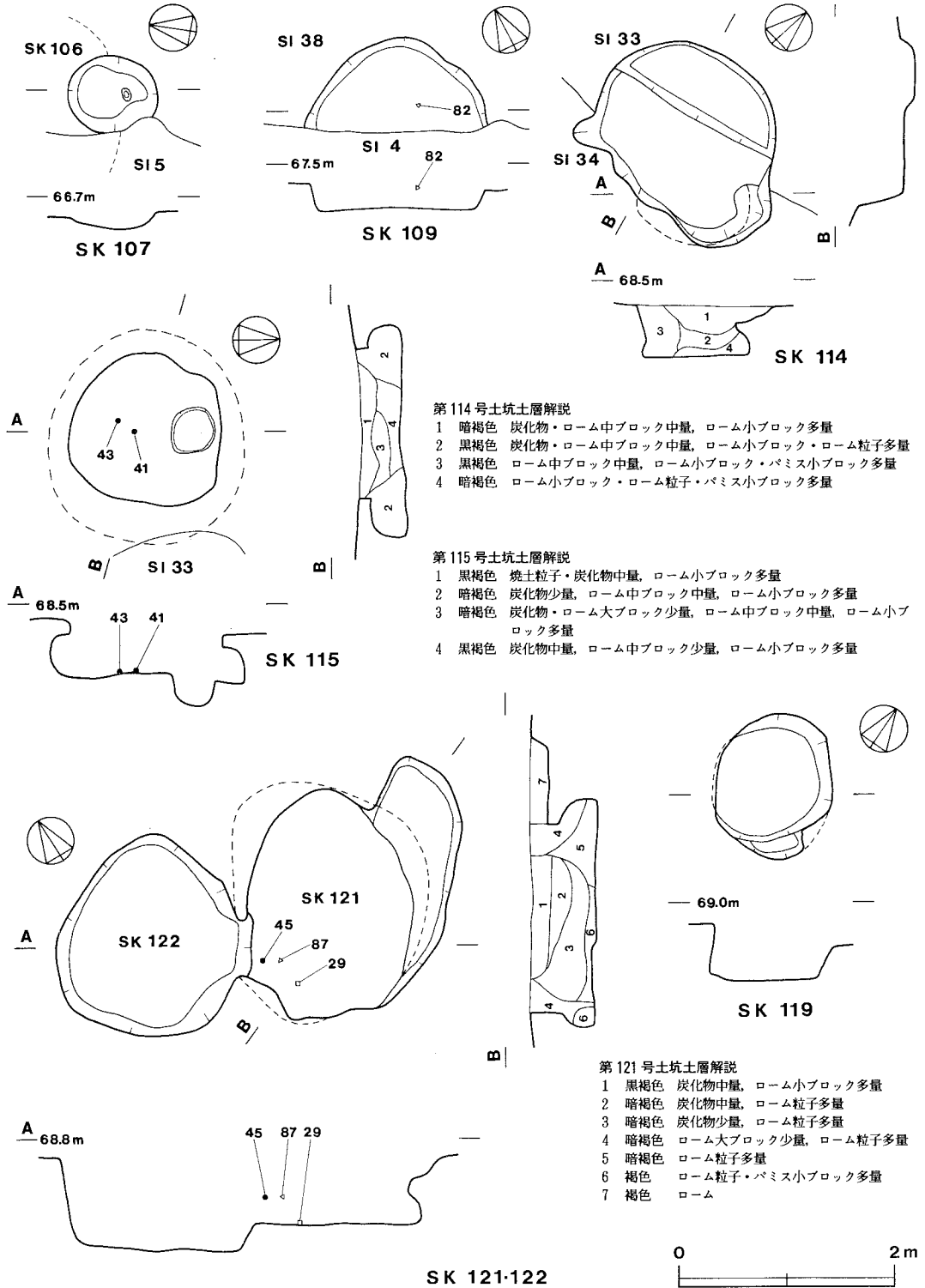


第 106 号土坑土層解説

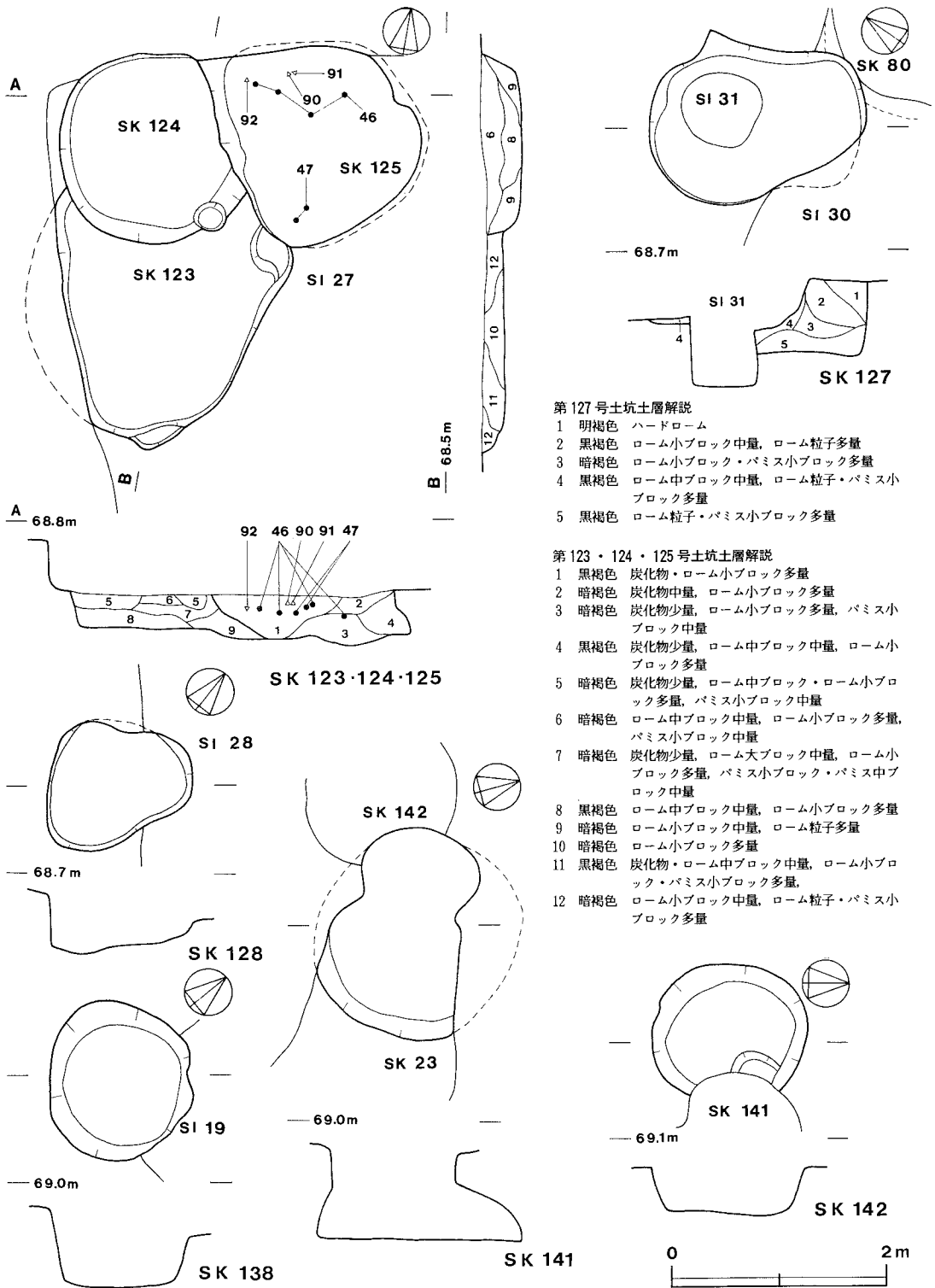
- 1 黒褐色 炭化物・ローム中ブロック少量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 2 黒褐色 炭化物少量, ローム粒子多量
- 3 黒褐色 炭化物少量, ローム小ブロック多量
- 4 黒褐色 炭化物・ローム中ブロック少量, ローム小ブロック多量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック多量
- 6 暗褐色 ローム粒子・パミス小ブロック多量



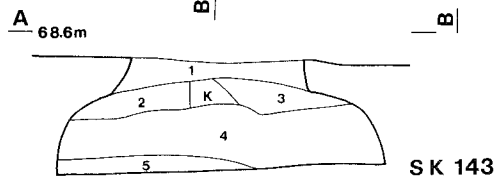
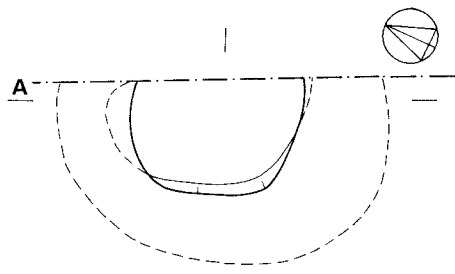
第 31 図 土坑実測図 (縄文 12)



第32図 土坑実測図 (縄文13)



第 33 図 土坑実測図 (縄文 14)

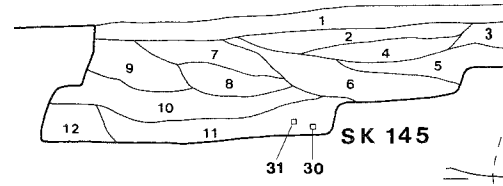
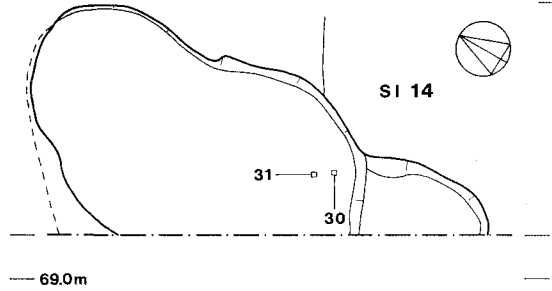
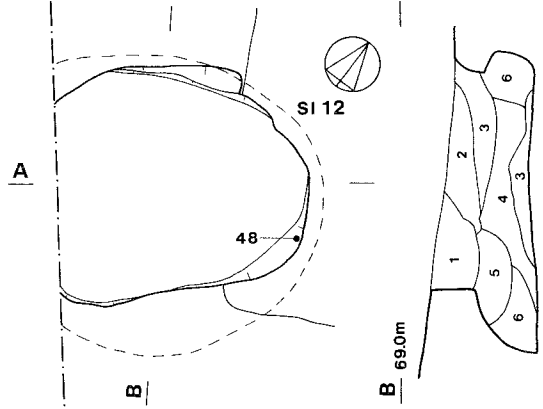


第 144 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 炭化物少量, ローム小ブロック中量, ローム粒子多量
- 2 暗褐色 炭化物・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 3 暗褐色 炭化物少量, ローム大ブロック・ローム小ブロック多量
- 4 黒褐色 炭化物中量, ローム小ブロック・ローム粒子・バミス小ブロック多量
- 5 黒褐色 炭化物少量, バミス多量
- 6 黒褐色 炭化物少量, ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・バミス小ブロック多量

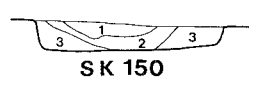
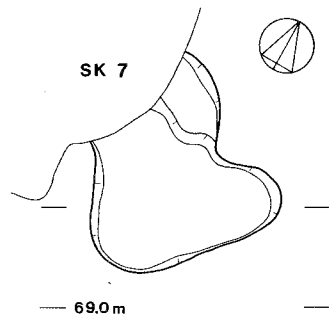
第 143 号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 2 黒褐色 炭化物・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 3 黒褐色 炭化物少量, ローム大ブロック中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック多量
- 4 褐色 ローム中ブロック・バミス中ブロック中量, バミス小ブロック多量
- 5 黒褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・バミス小ブロック多量



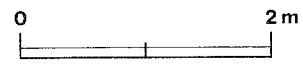
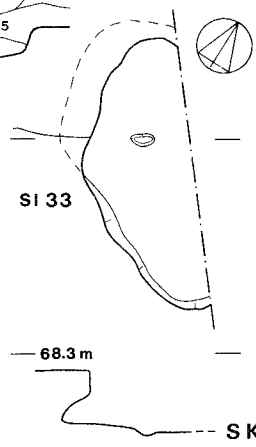
第 145 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 炭化物微量, バミス少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 炭化粒子微量, ローム粒子中量
- 5 暗褐色 炭化材少量, ローム粒子中量
- 6 暗褐色 炭化材中量, 炭化物少量, バミス中量
- 7 暗褐色 炭化物少量, ローム粒子中量
- 8 暗褐色 炭化材・ローム粒子少量
- 9 暗褐色 ローム粒子・バミス中量
- 10 暗褐色 炭化粒子少量, ローム粒子中量
- 11 黒褐色 ローム粒子少量
- 12 極暗褐色 ローム粒子少量, バミス中量

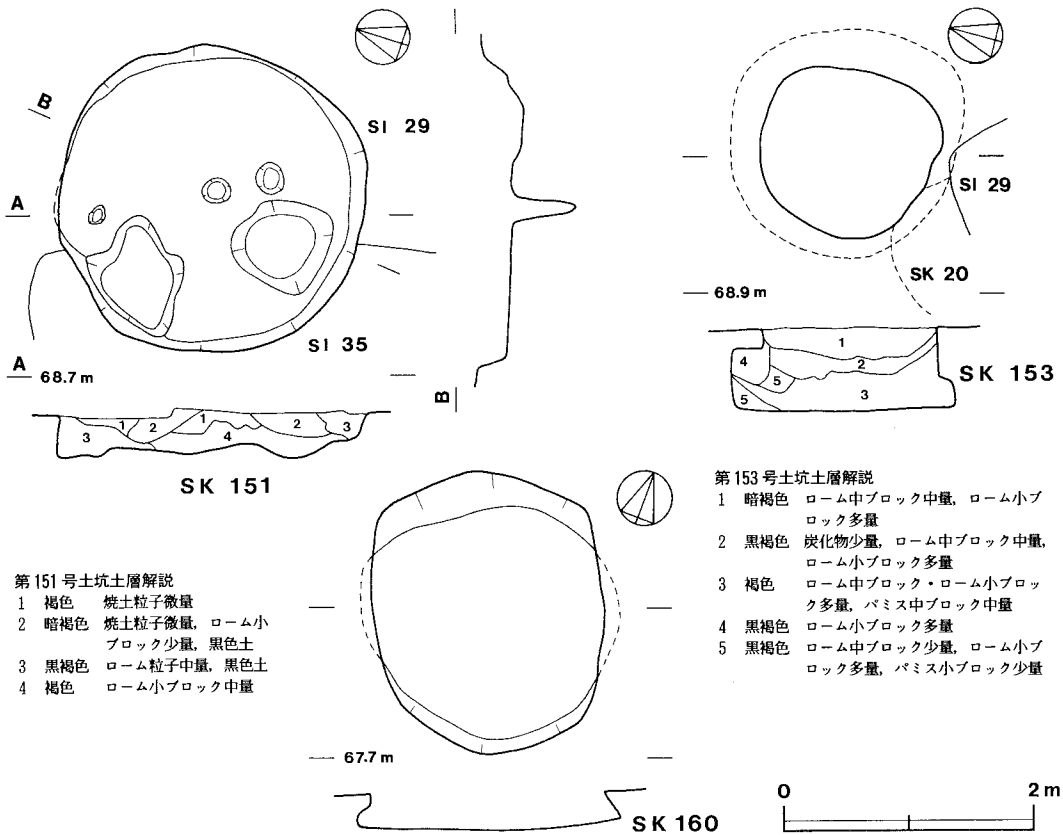


第 150 号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック多量
- 2 暗褐色 炭化物少量, ローム小ブロック・バミス小ブロック多量
- 3 黒褐色 炭化物少量, ローム小ブロック・ローム粒子多量



第 34 図 土坑実測図 (縄文 15)

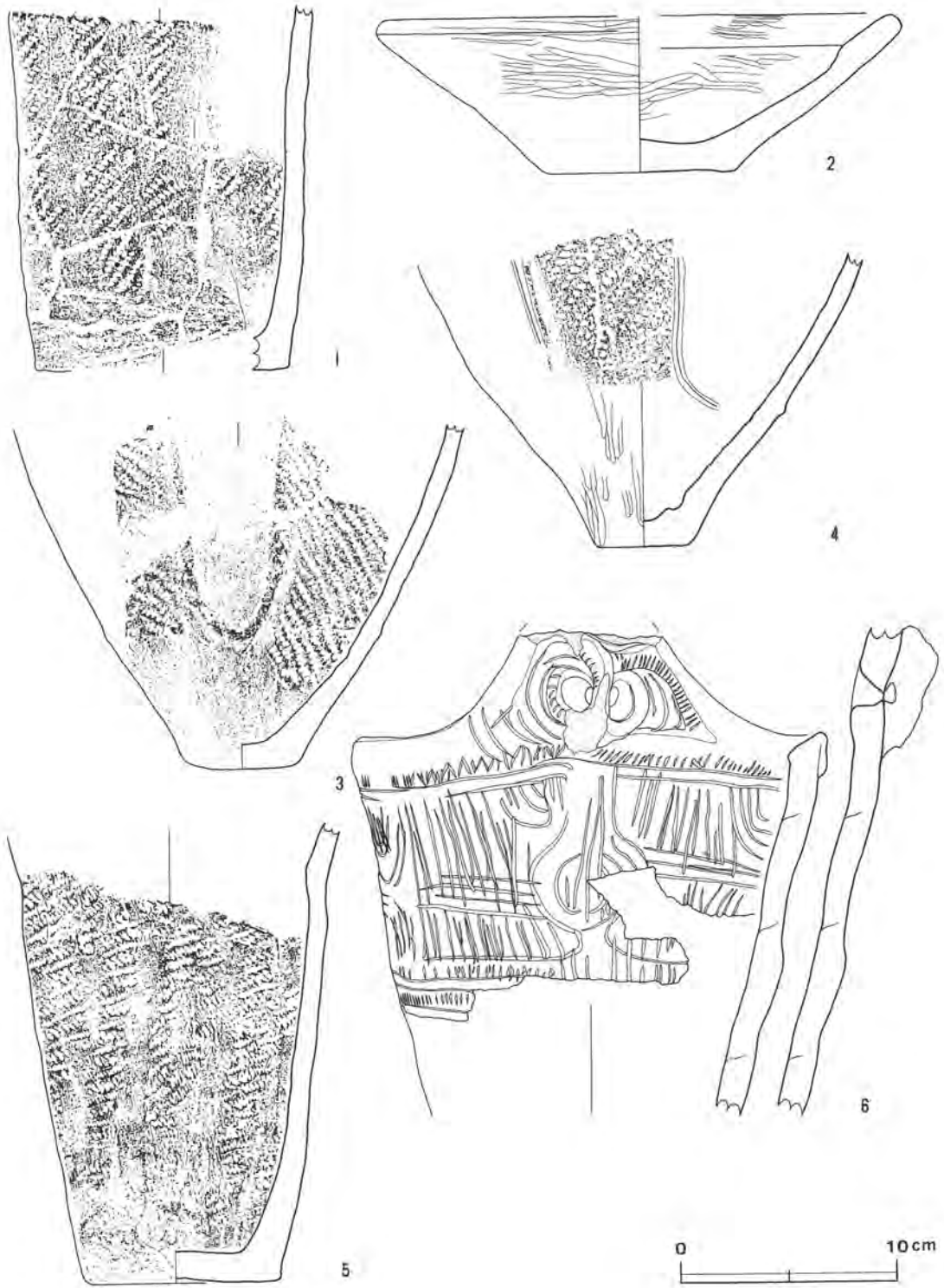


第151号土坑土層解説
 1 褐色 焼土粒子微量
 2 暗褐色 焼土粒子微量, ローム小ブロック少量, 黒色土
 3 黒褐色 ローム粒子中量, 黒色土
 4 褐色 ローム小ブロック中量

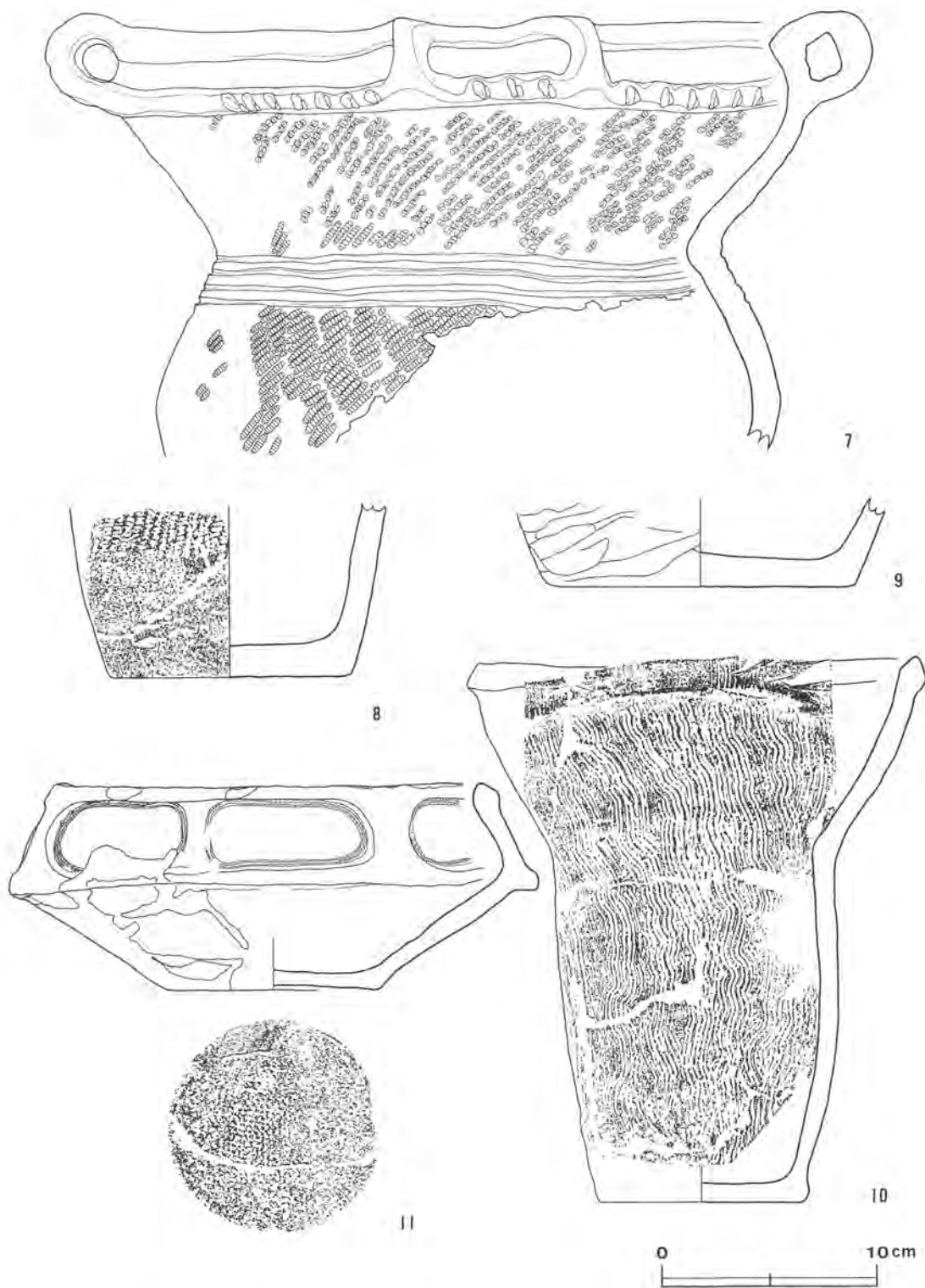
第153号土坑土層解説
 1 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
 2 黒褐色 炭化物少量, ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
 3 褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック多量, バミス中ブロック中量
 4 黒褐色 ローム小ブロック多量
 5 黒褐色 ローム中ブロック少量, ローム小ブロック多量, バミス小ブロック少量

第35図 土坑実測図(縄文16)

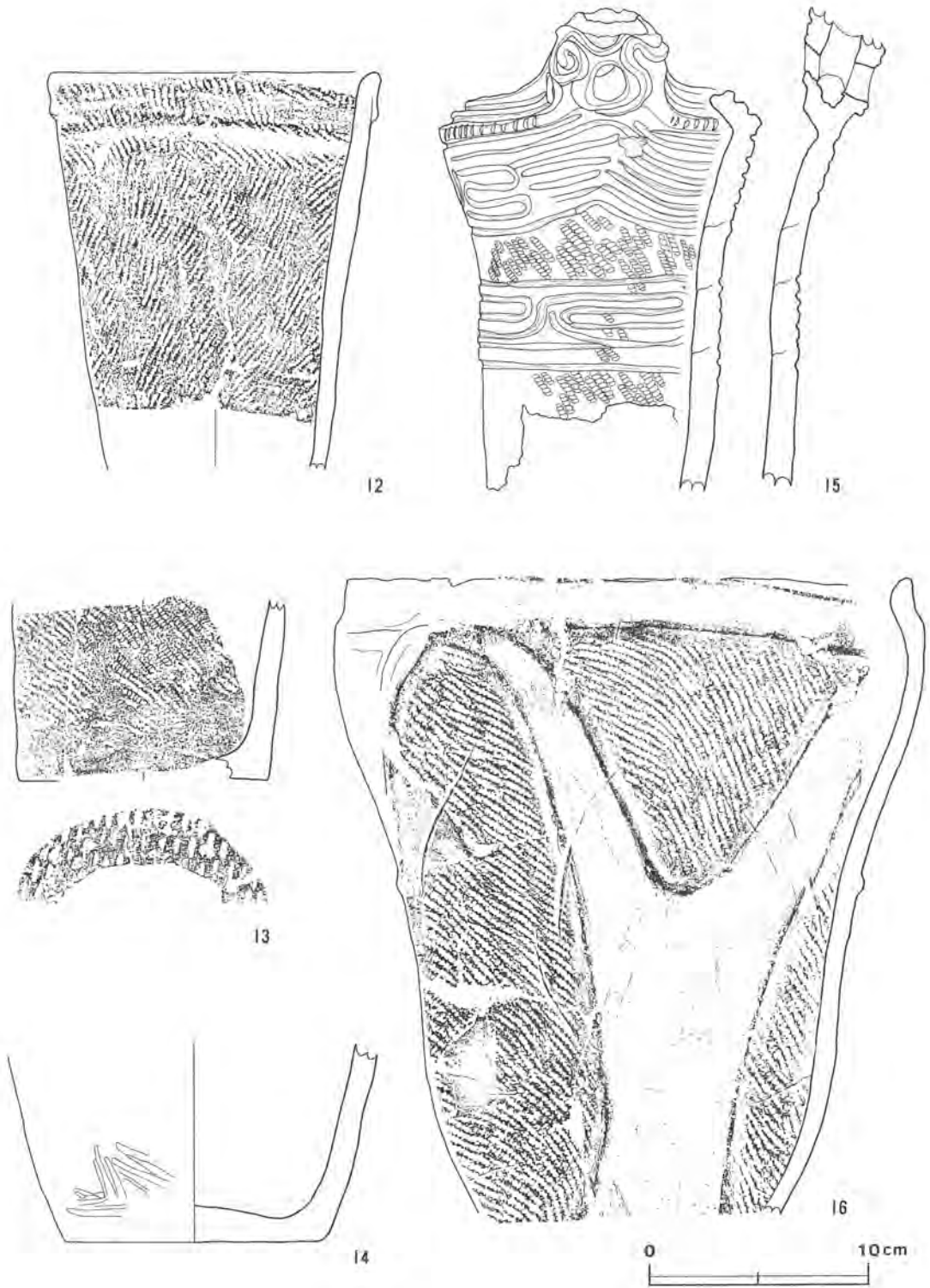
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第37図 10	深鉢形土器 (阿玉台II)	A 20.7 B 25.9 C 9.6	平底。胴部はほぼ垂直に立ち上がり、頸部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。胴部下端外面へラナデ、全面に6本歯の櫛歯状工具による縦位の条線文が施されている。口縁には隆帯を巡らしている。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	SK20 P280 PL49 80% 底面直上
11	浅鉢形土器 (阿玉台II)	A 19.9 B 9.8 C 9.8	上げ底気味の平底。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は頸部から内傾する。底部に網代痕有り。胴部外面削り後磨き。口縁部には窓枠状に区画する隆帯の内側に沿って2列の結節沈線文が施されている。内面一部磨減。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	SK21 P281 PL49 70% 底面直上
第38図 12	深鉢形土器 (阿玉台II)	A (15.1) B (18.6)	胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は折り返し口縁。胴部から口縁部全体に単節LRの回転縄文が横位や縦位に施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	SK25 P282 PL49 55% 底面直上
13	深鉢形土器 (阿玉台)	B (8.4) C (11.4)	平底。胴部はほぼ垂直に立ち上がる。底部に網代痕有り。胴部下端ナデ、中央部には単節LRの回転縄文が施されている。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	SK37 P283 20% 底面直上
14	深鉢形土器 (阿玉台)	B (9.4) C 12.2	平底。胴部は外傾して立ち上がる。胴部下端外面へラ磨き。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	SK46 P287 25% 底面直上
15	深鉢形土器 (阿玉台IV)	A 15.0 B (22.7)	胴部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部はやや外傾して立ち上がる。胴部全体に単節LRの回転縄文を施し、胴中央部及び口縁部には2本の平行沈線の間を4単位の渦巻き状の沈線が巡っている。口唇部には3本の隆帯が巡らされ、一番下の隆帯には連続するキザミ目が施され、この隆帯と一番上の隆帯からせり上がることによって表出された1単位6孔と思われる環状の把手を有している。把手には渦巻き状の隆帯が施されている。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	SK46 P288 PL50 80% 底面直上



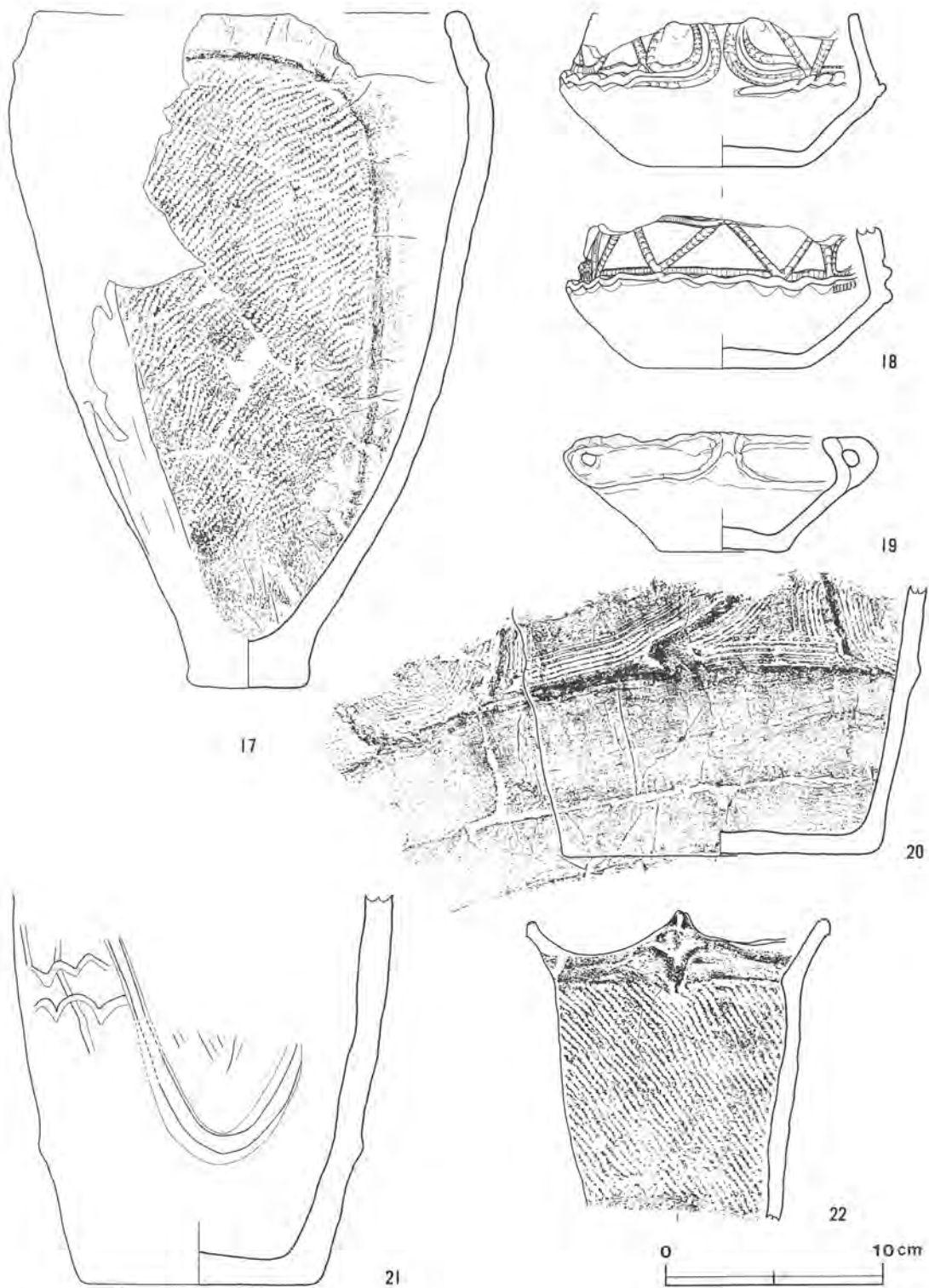
第 36 図 土坑出土土器実測図（縄文 1）



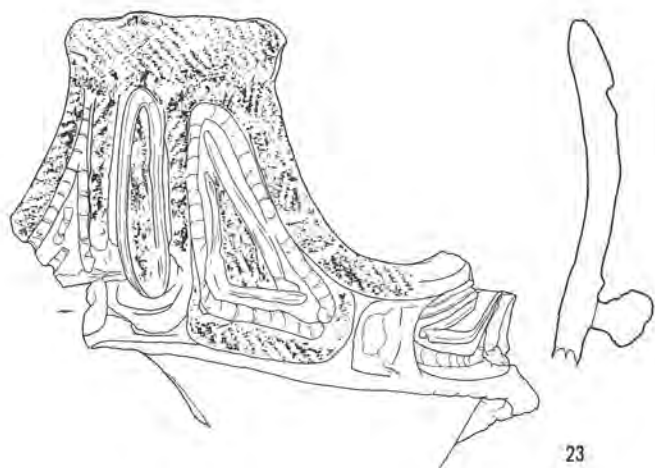
第 37 図 土坑出土土器実測図（縄文 2）



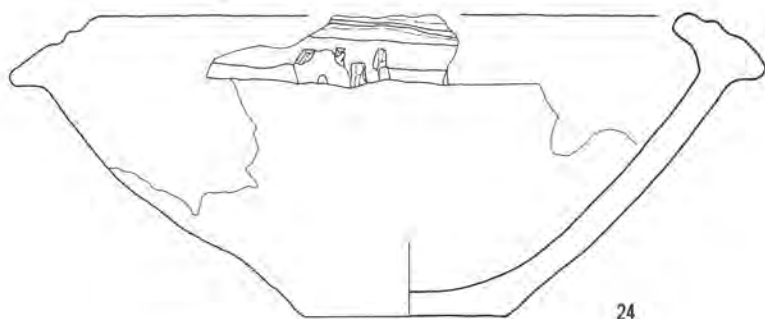
第 38 図 土坑出土土器実測図（縄文 3）



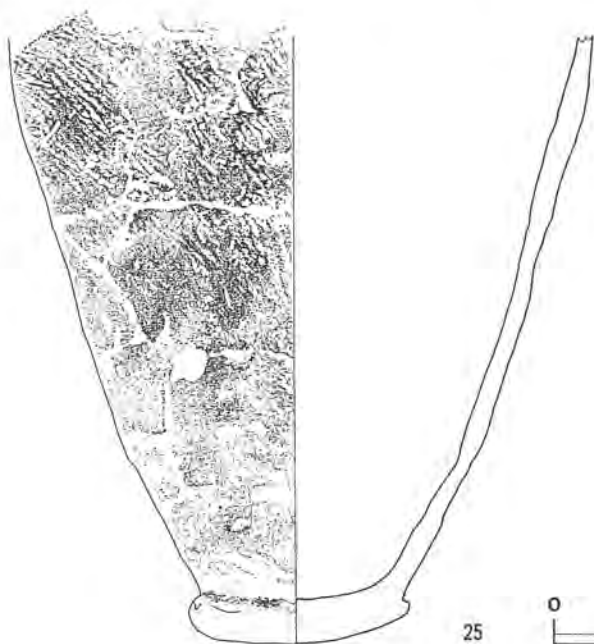
第 39 図 土坑出土土器実測図（縄文 4）



23



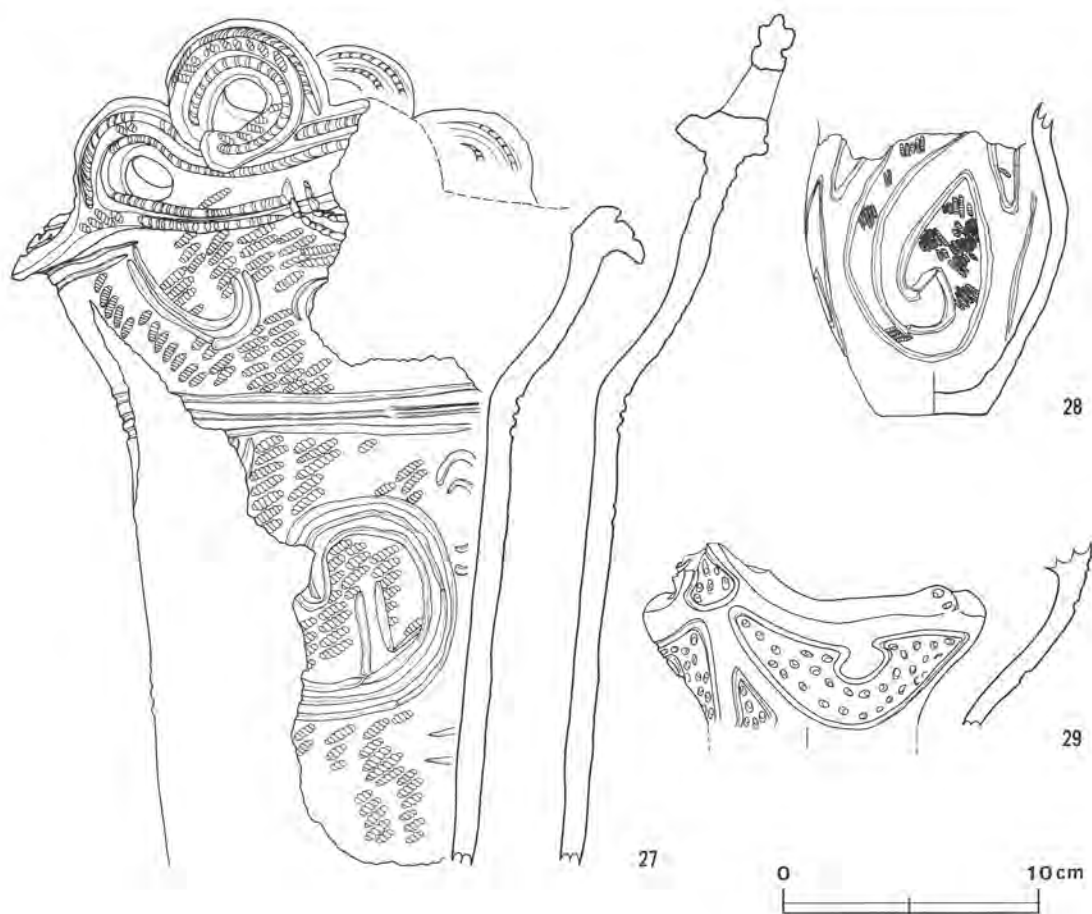
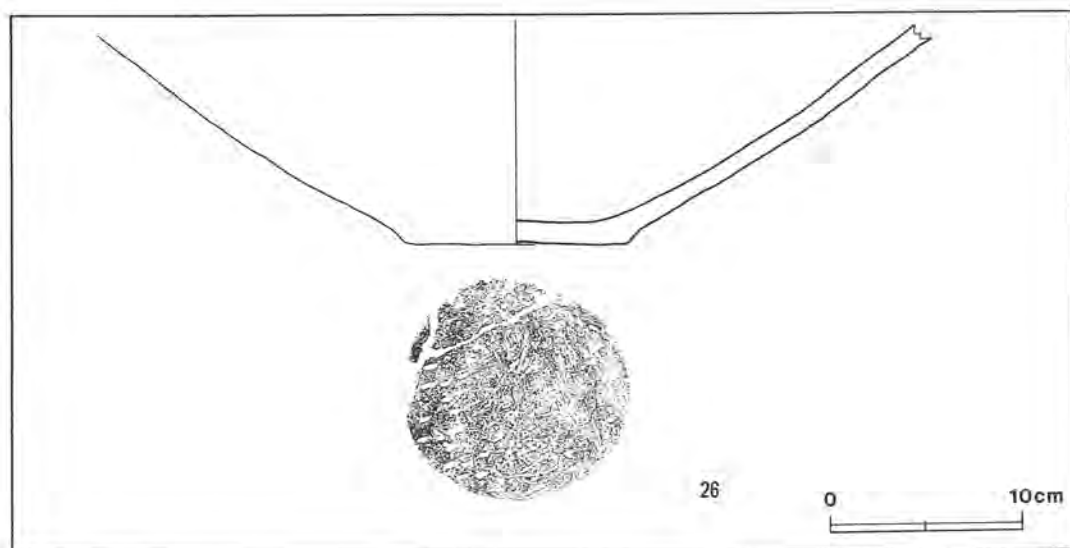
24



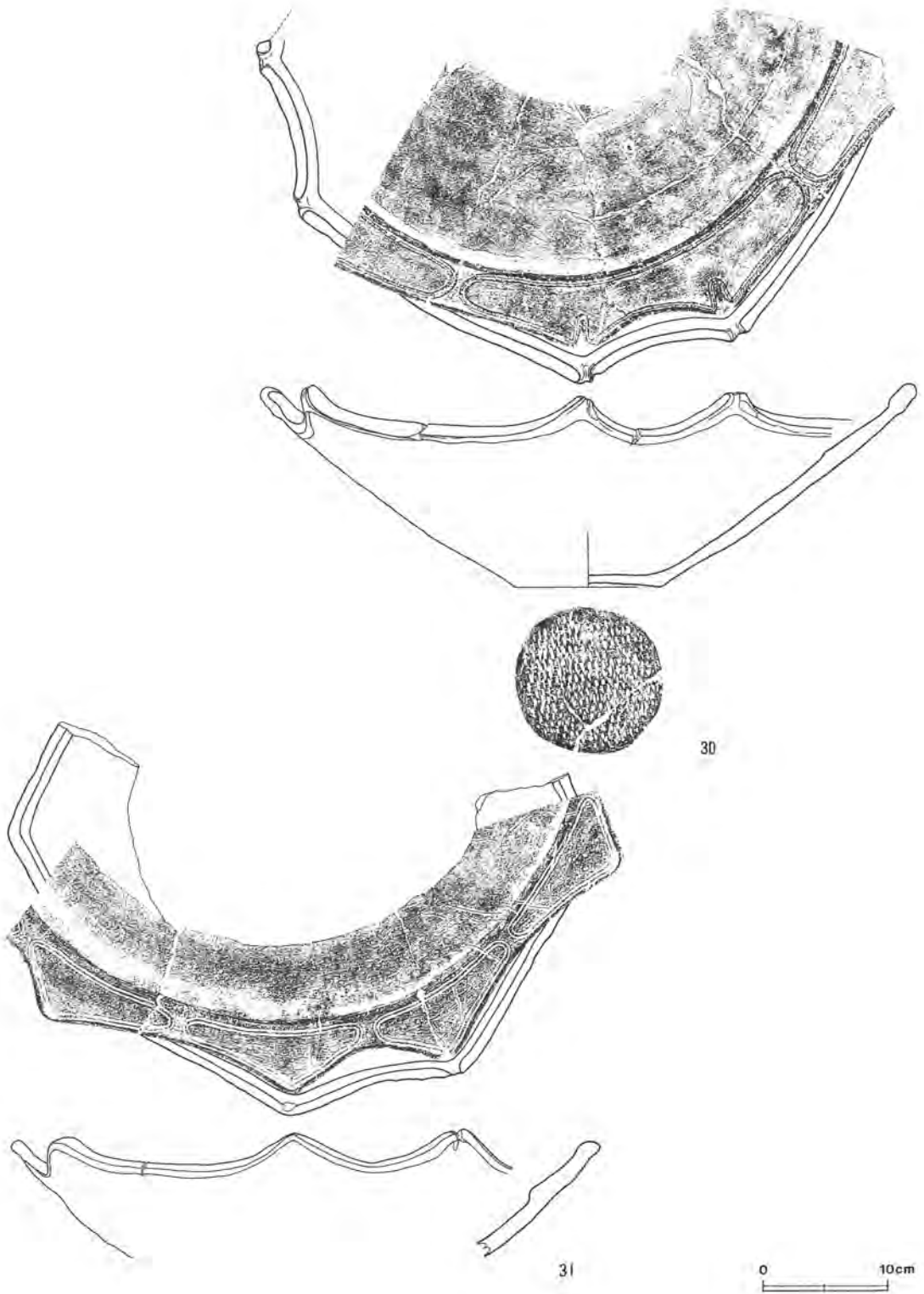
25



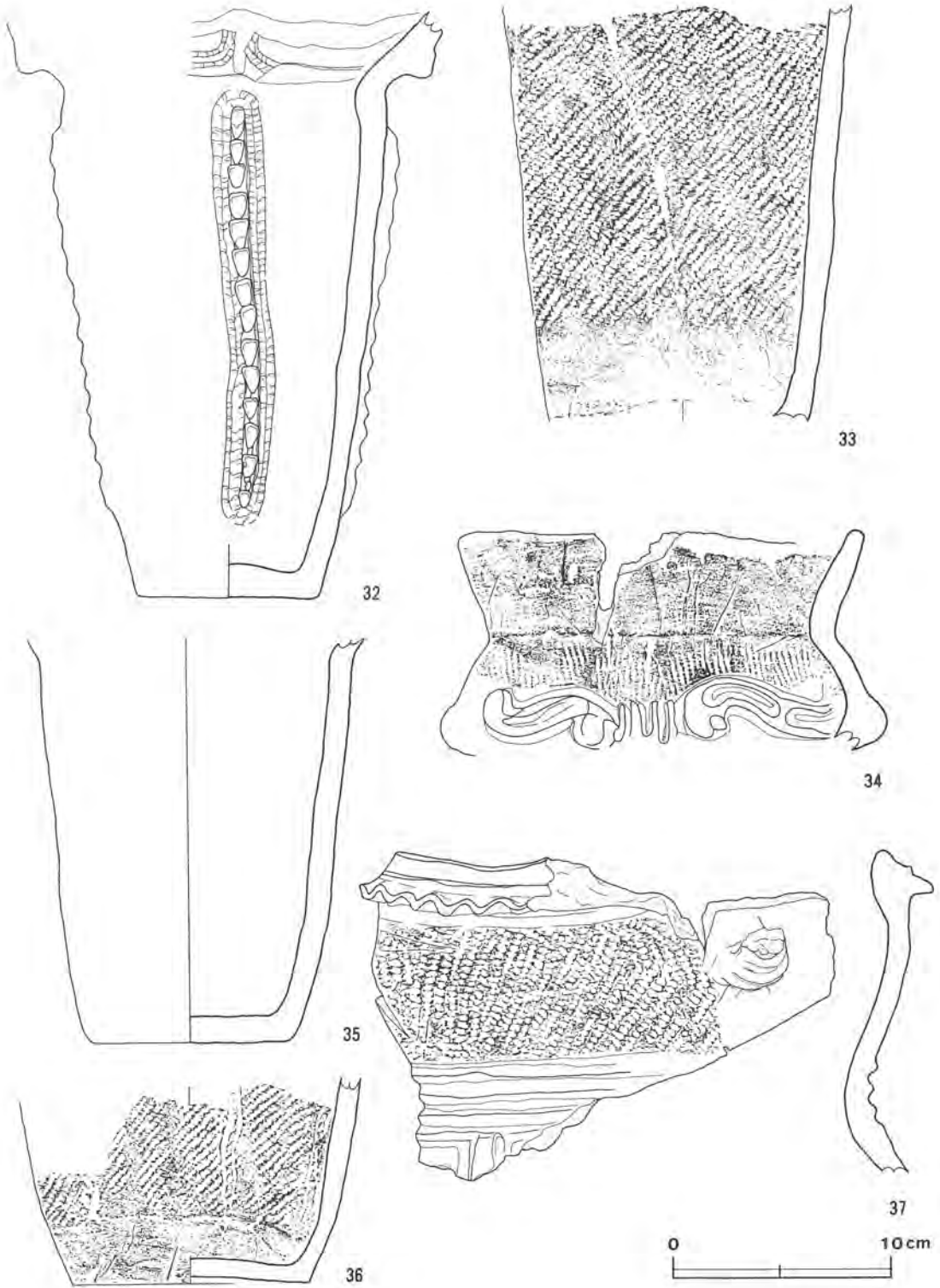
第 40 図 土坑出土土器実測図（縄文 5）



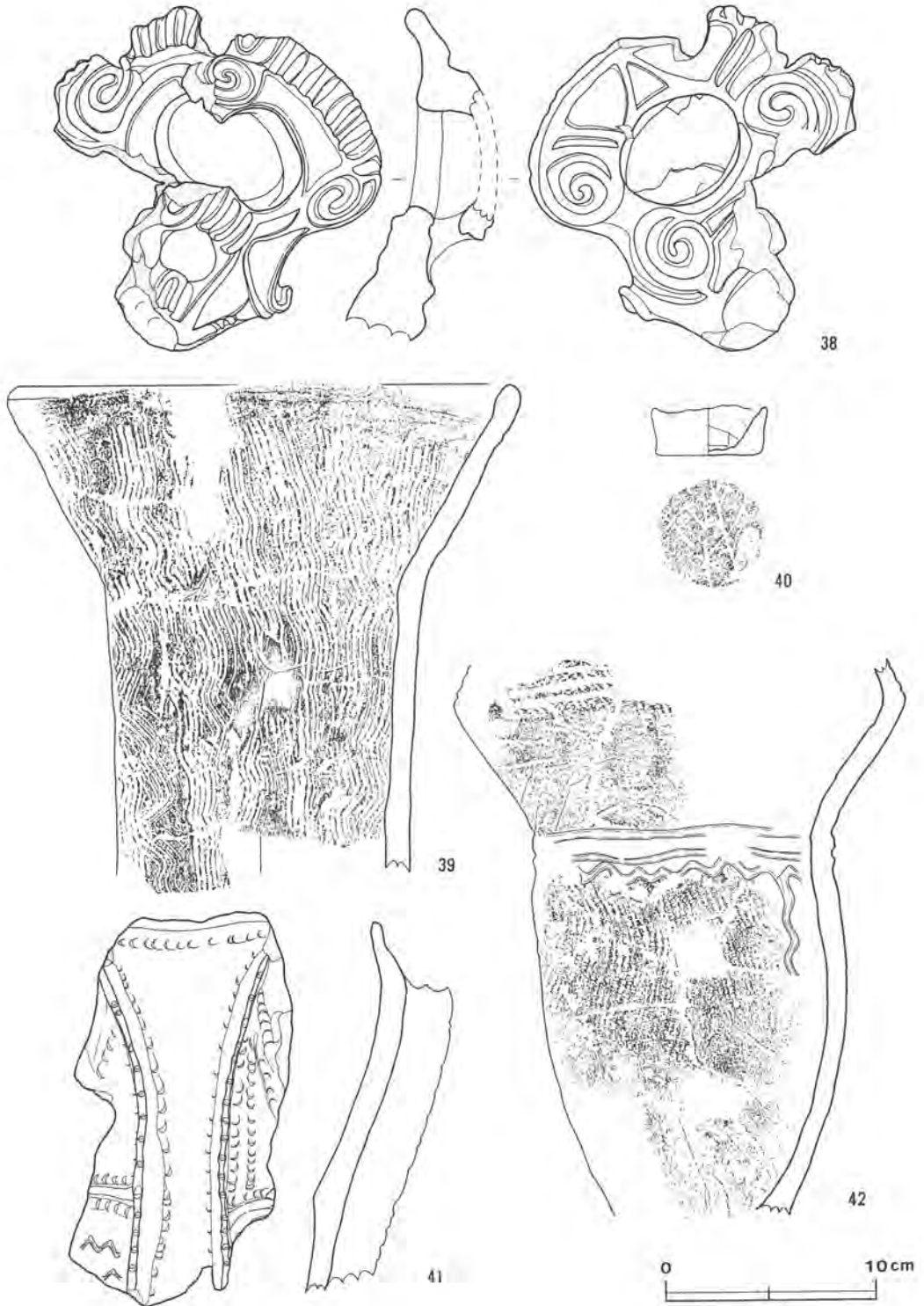
第 41 図 土坑出土土器実測図（縄文 6）



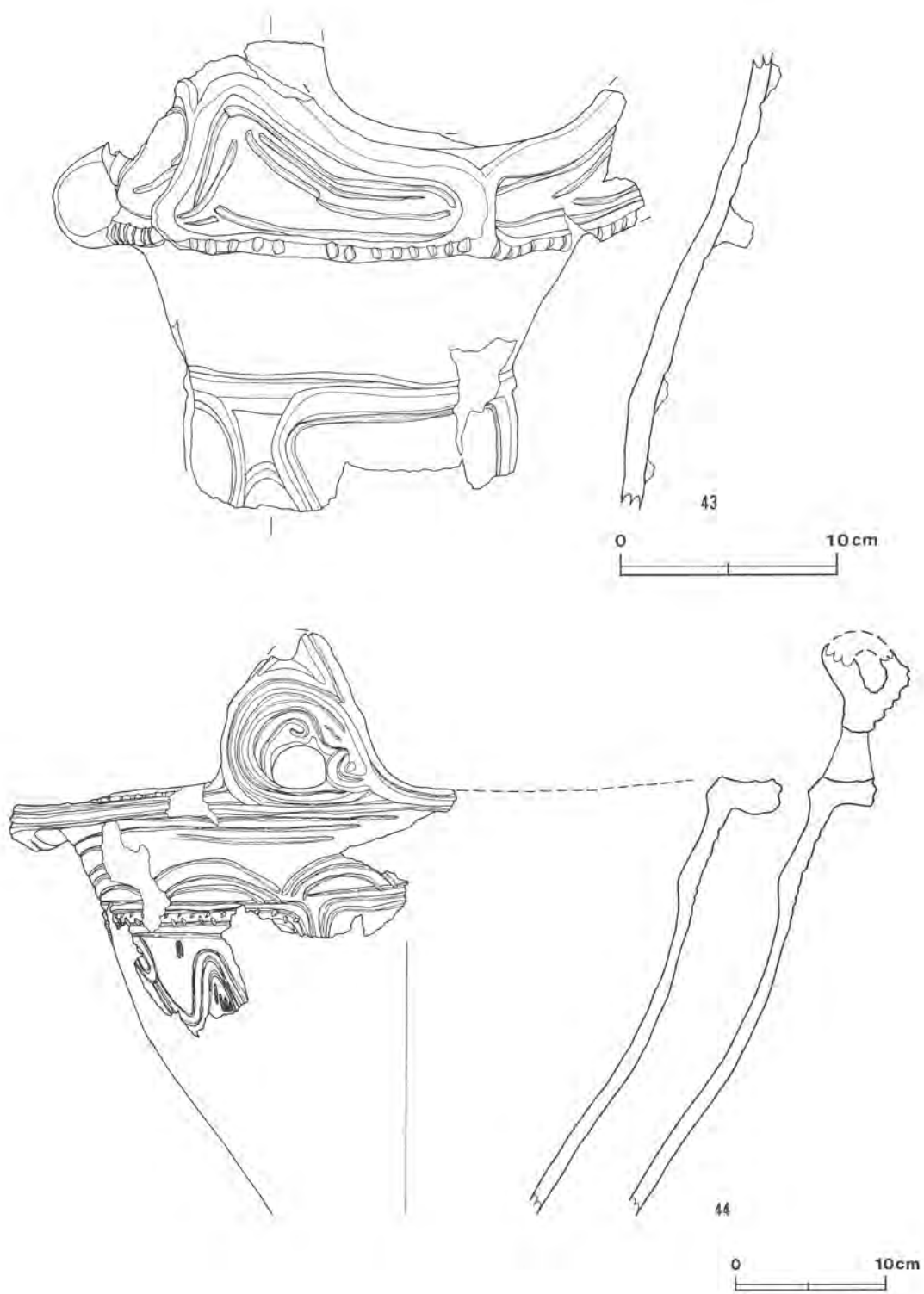
第 42 図 土坑出土土器実測図（縄文 7）



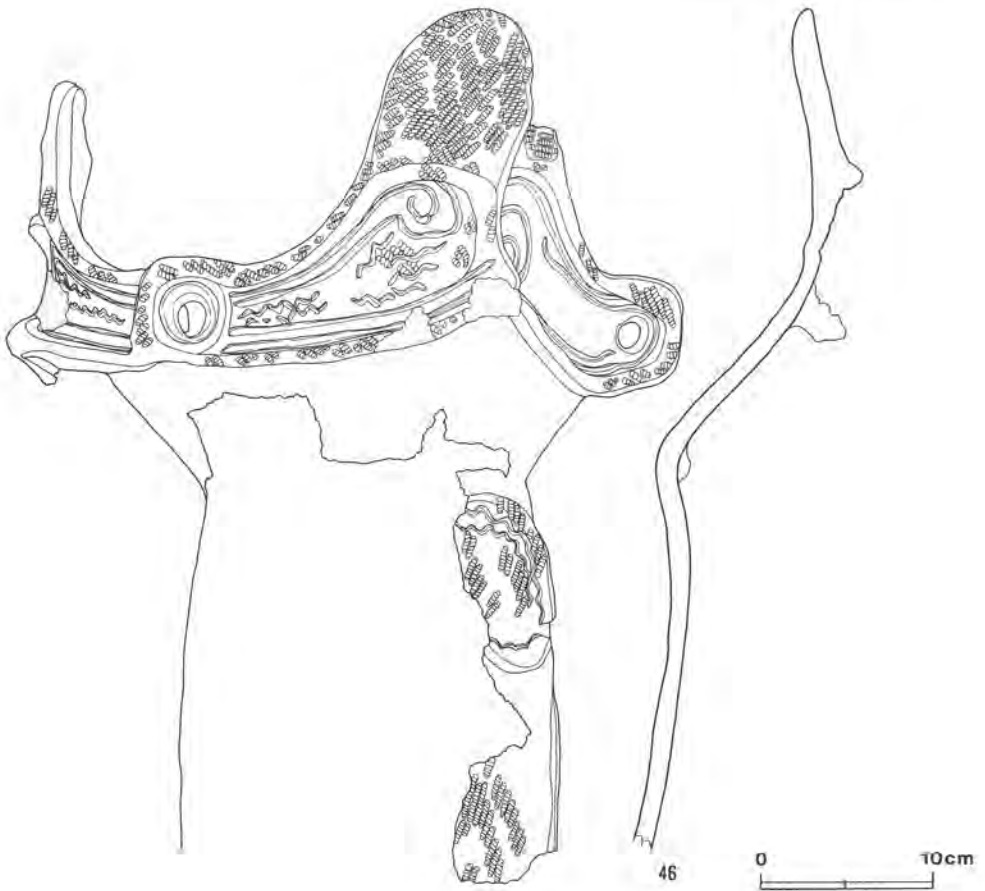
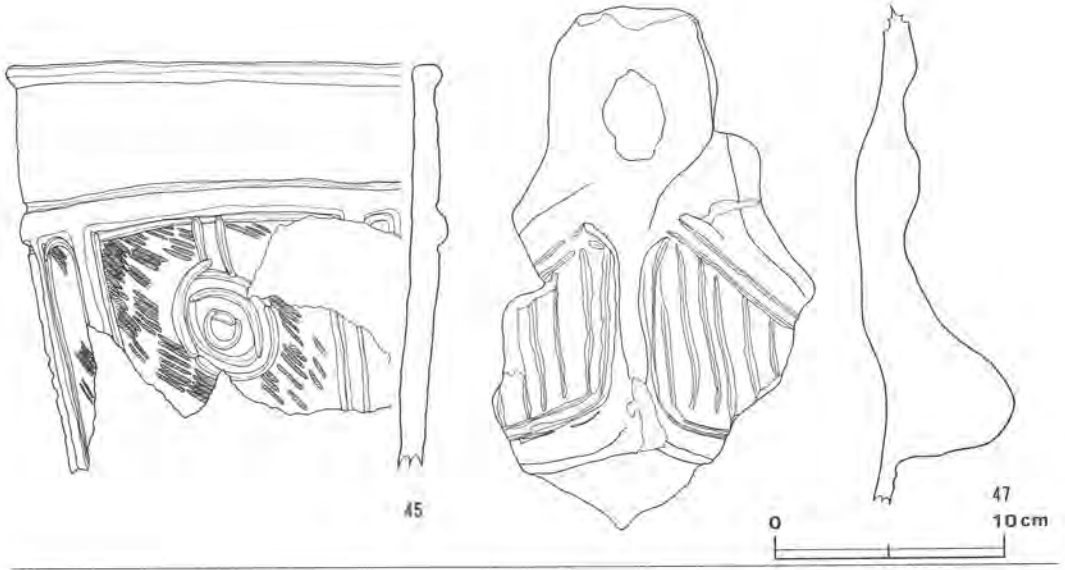
第43図 土坑出土土器実測図（縄文8）



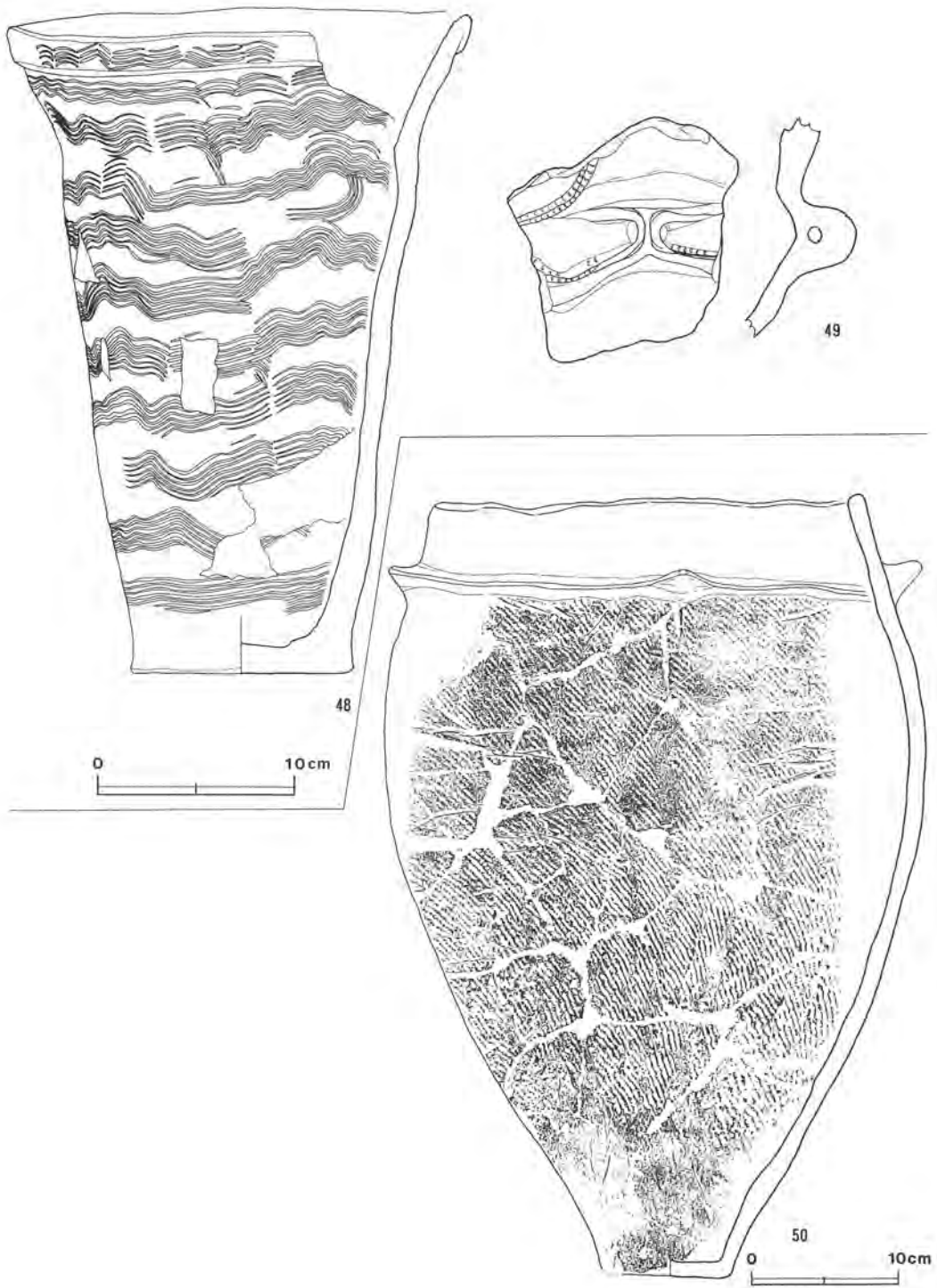
第 44 図 土坑出土土器実測図（縄文 9）



第45図 土坑出土土器実測図（縄文10）



第46図 土坑出土土器実測図（縄文11）

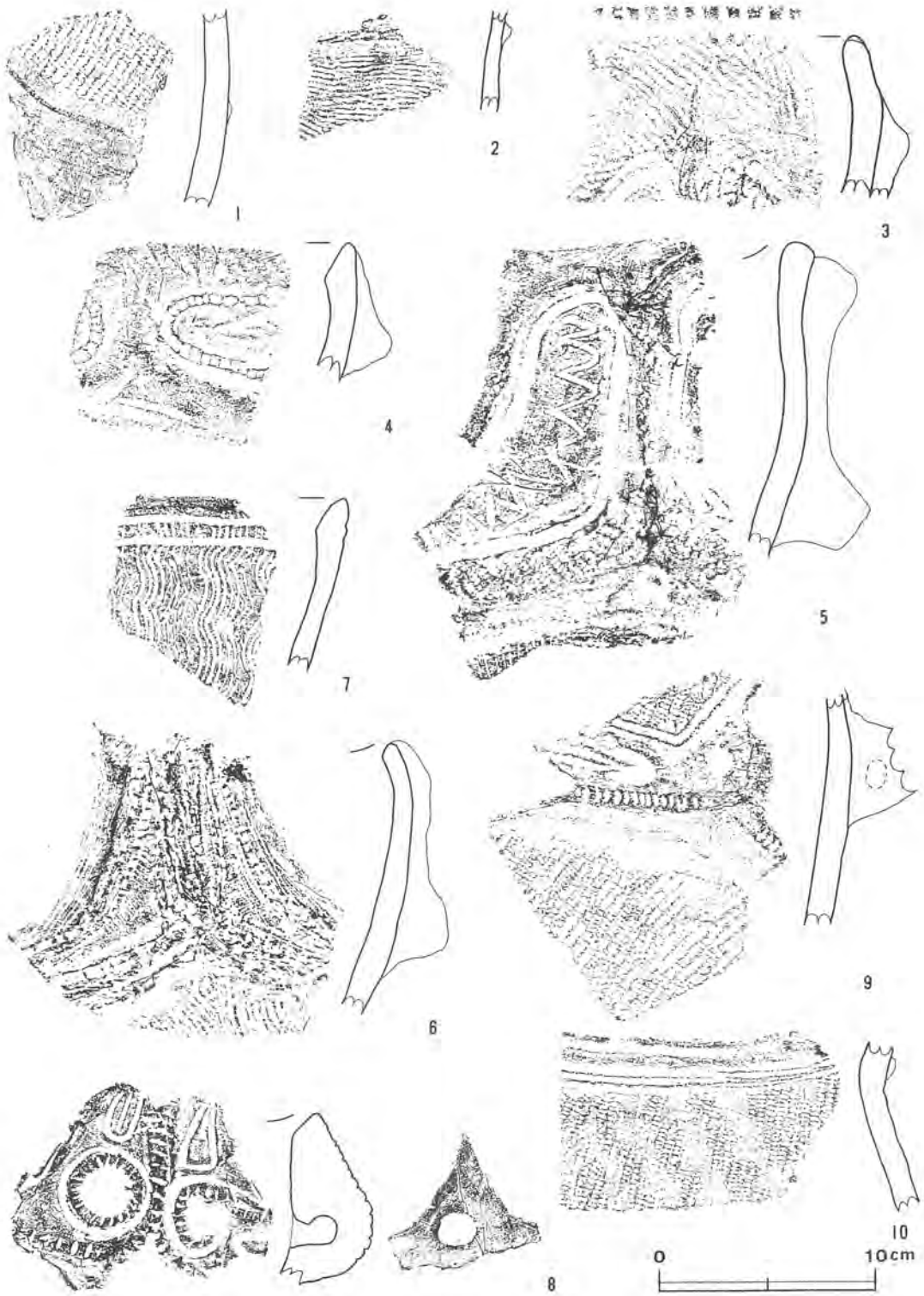


第 47 図 土坑出土土器実測図（縄文 12）

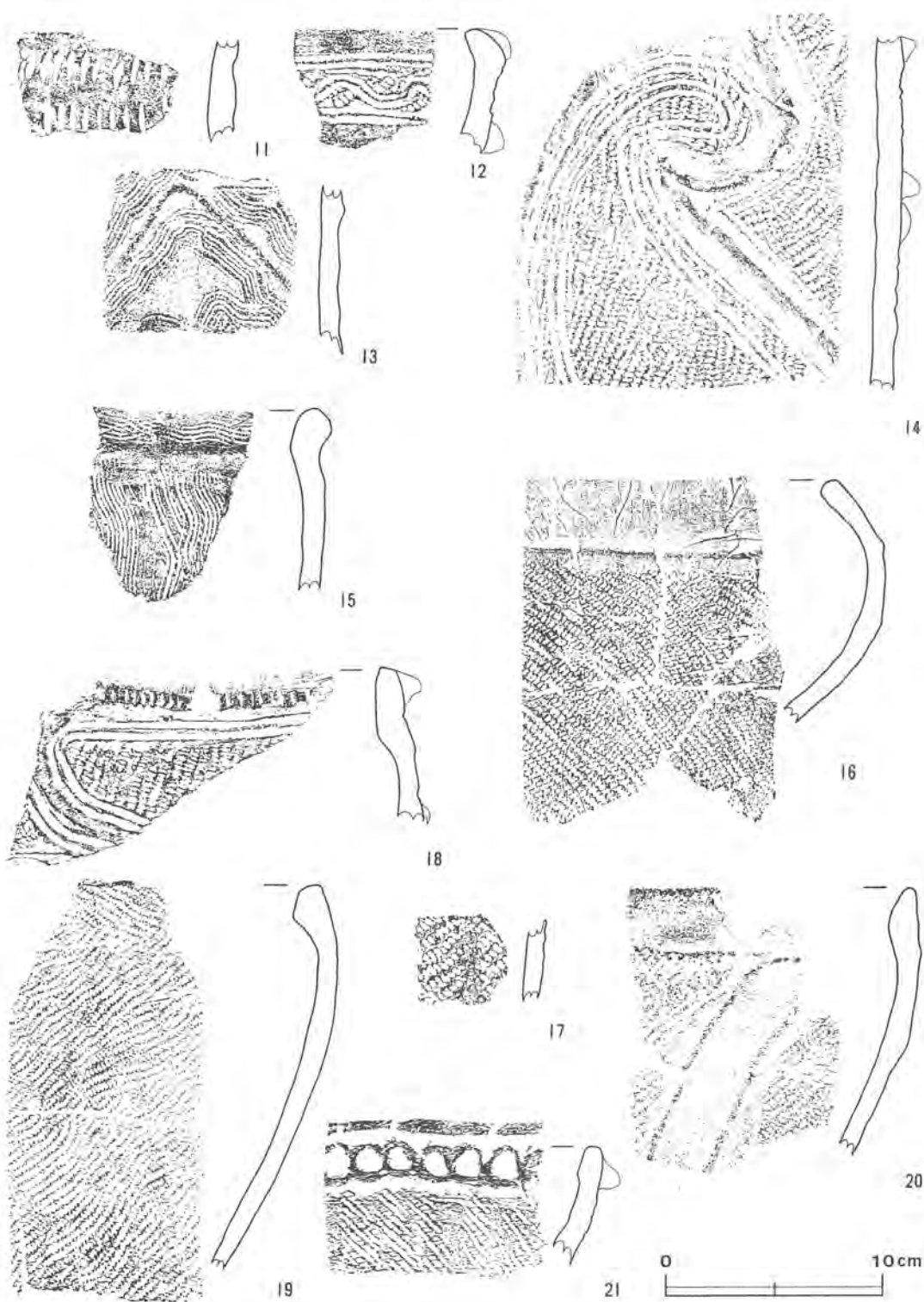
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第38図 16	深鉢形土器 (加曾利印)	A (26.1) B (29.7)	胴部は内彎しながら立ち上がり、上半部からわずかに外反し、口縁部で内彎する。口縁部下位には両側にナヅリを加えた隆起線による三角文が施され、区画内には単節LRの回転縄文が充填されている。胴部には推定で4単位2条の隆起線で区画された幅広の磨消帯が垂下している。区画外には単節LRの回転縄文が充填されている。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	SK52 P289 25% 底面直上
第39図 17	深鉢形土器 (加曾利印)	A (19.8) B 32.2 C 5.8	突出した平底。胴部は内彎しながら立ち上がり、中央部でややくびれ、口縁部は内彎しながら立ち上がる。胴部下端へラ磨き。胴部は弧状の隆起線によって無文体と縄文施文帯とに区画され、この隆起線は、同時に口縁部無文体と胴部文様帯とに区画している。地文には単節RLの回転縄文が施されている。	砂粒・長石・ 石英・パミス 明赤褐色 普通	SK57 P298 PL50 30% 底面直上
18	浅鉢形土器 (阿玉台II)	A (12.4) B 7.3	平底。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は頸部から内傾する。胴部は無文で磨きが施されている。頸部に波状の隆帯が貼り付けられている。口縁部には2単位の眼鏡状の隆帯が施され、隆帯の回りには一列の結節沈線文が施され、この眼鏡状の隆帯の間に三角形を呈する結節沈線文が施されている。内面に丁寧な磨きが施されている。	砂粒・長石・ 石英・雲母 橙色 普通	SK59 P291 PL50 95% 底面直上
19	浅鉢形土器 (阿玉台II)	B 5.5 C 5.8	上げ底気味の平底。胴部は外傾しながら立ち上がり、口縁部で内彎する。無文土器で、口縁部には頸部の隆起線と口唇部の隆起線とからせり上がることによって表出された橋状の把手が4単位付けられている。	砂粒・雲母 橙色 普通	SK59 P292 PL50 95% 底面直上
20	深鉢形土器 (阿玉台II)	B (12.7) C 14.7	平底。胴部は外傾して立ち上がる。胴部は1本の隆帯によって、無文体と施文帯とに区画されている。無文体には丁寧な磨きが施されている。施文帯は縦位や斜位に施されている隆帯によって3単位の区画されていると推定され、区画内には6~7本歯の櫛歯状工具による条線文が施されている。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	SK59 P293 PL51 40% 底面直上
21	深鉢形土器 (阿玉台III)	B (18.5) C (11.4)	平底。胴部は外傾しながら立ち上がる。胴部は3単位の楕円形を呈すると推定される隆帯によって区画されている。区画外には2条の波状沈線文が施されている。	砂粒・長石・雲母 浅黄褐色 普通	SK62 P294 30% 覆土下層
22	小形深鉢形土器 (阿玉台)	B (14.2) C (14.7)	胴部は外傾しながら立ち上がり、口縁部で大きく外反する。胴部には単節LRの回転縄文が施されている。口縁は波状を呈し、山形状の突起を4つ有し、突起の上端部にはキザミ目が施されている。この内2単位の突起の頂部から「Y」字状の隆帯が垂下し、口縁部を巡る隆帯と連結している。	砂粒・長石・雲母 赤褐色 普通	SK66 P295 PL51 70% 覆土下層
第40図 23	把手 (阿玉台IV)	長さ(17.5)	板状の山形把手。頸部に貼り付けられた隆帯と把手上端から2本の垂下する隆帯及び斜位に下がる隆帯とで区画された部分に、隆帯にそって棒状工具による結節沈線文が施されている。地文及び隆帯には単節LRの縄文が施されている。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	SK68 P297 PL51 5% 覆土下層
24	浅鉢形土器 (加曾利印)	A 23.3 B 12.1 C 8.1	平底。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は急激に内彎する。無文土器で、胴部内・外面磨き。口縁部を巡る幅の広い隆帯に棒状工具による2本の沈線が巡らされ、隆帯の端部に棒状工具によるキザミ目を有している。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	SK68 P296 PL51 80% 底面直上
25	深鉢形土器 (堀之内)	B (24.5) C 8.8	突出しつつぶれた丸底。胴部は内彎気味に立ち上がる。胴部下端は磨滅して文様構成不明。胴中央部は単節LRの縄文が施されているが、磨滅している。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	SK77 P303 PL51 55% 覆土中層
第41図 26	浅鉢形土器 (阿玉台IV)	B (11.8) C (11.8)	平底。胴部は外傾して立ち上がる。底部網代痕有り後削り。胴部外面磨き。胴部内・外面煤付着。	砂粒・長石・ 雲母・スコリア にぶい黄褐色 普通	SK87 P304 PL52 70% 底面直上
27	深鉢形土器 (大木8a)	B 22.3 C (34.5)	胴部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は外反して立ち上がる。胴部と口縁部とを4条の平行沈線によって区画し、胴部には単節LRの縄文が施された後、3条の渦巻き状の沈線が施されている。口縁部は単節LRの縄文が施された後、2単位の渦巻き状の沈線が口唇部近くの2条の平行沈線に連続して施されている。口唇部の幅の広い隆帯には2条の沈線が巡らされ、この隆帯からせり上がることで表出される円形の3頭状の把手が付いている。この把手には渦巻き状の隆起線が施され、隆起線上には縄文が施され、隆起線内には結節沈線文が施されている。内面へラナデ。	砂粒・長石・ 石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	SK92 P307 PL52 65% 底面直上

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第41図 28	深鉢形土器 (称名寺)	B (12.5) C 4.3	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり、中位でくびれる。胴部は「J」字状や渦巻き状の沈線によって、無文帯と単節LRの縄文施文帯とに区画されている。	砂粒・長石・石英・礫 にぶい赤褐色 普通	SK92 P308 PL52 40% 底面直上
29	小形深鉢形 土器 (称名寺)	A (13.2) B (7.3)	口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。口縁部は沈線によってハート形及び三角形を呈する形に区画し、区画内には円形刺突文が施されている。口唇部には4つの円形刺突文が2か所付くと推定され、内側に隆起線を有し、1単位の山形状の把手が付くと推定される。	砂粒・長石・ 石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	SK92 P309 PL52 25% 底面直上
第42図 30	浅鉢形土器 (阿玉台Ⅰb)	A (53.8) B 16.8 C 12.1	上げ底気味の平底。胴部は直線的に外傾して立ち上がる。底部網代痕有り。無文土器で、外面削り、内面磨き。口縁部上端に隆帯を巡らせ、この隆帯から連なるように2個1組の波状口縁が4単位で口縁を形成すると推定される。波状口縁の上端部には棒状工具による押圧がなされている。口縁部の内面には、胴部との境に隆起線を巡らして区画し、区画内には2列の結節沈線文が4単位の山形状の楕円形を呈するように施されている。内・外面煤付着。	砂粒・長石・ 雲母・バミス 赤褐色 普通	SK94 P311 PL52 70% 底面直上
31	浅鉢形土器 (阿玉台Ⅰb)	A (48.7) B (9.6)	胴部は外傾して立ち上がる。無文土器で、外面削り、内面磨き。口縁部上位に隆帯を巡らせ、この隆帯から連なるように2個1組の波状口縁が4単位で口縁を形成すると推定される。頸部内面に明瞭な稜を有し、口縁部内面に2列の結節沈線文が2つつ4単位の隅丸三角形を呈するように施されている。内・外面煤付着。	砂粒・長石・ 雲母・バミス にぶい橙色 普通	SK94 P312 PL53 50% 底面直上
第43図 32	深鉢形土器 (阿玉台Ⅱ)	B (27.8) C 8.6	平底。胴部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は外傾して立ち上がる。胴部には4単位の隆帯が貼り付けられ、隆帯上には指頭による押圧が加えられ、隆帯の回りには、2列の結節沈線文が施されている。口縁部は隆帯によって楕円形に区画されていると推定され、区画内には2列の結節沈線文が施されている。	砂粒・長石・雲母 淡橙色 普通	SK94 P310 PL53 80% 底面直上
33	深鉢形土器 (阿玉台)	B (19.6)	胴部はほぼ垂直に立ち上がる。胴部下端外面ナデ、内面磨き。胴部には単節RLの回転縄文が施されている。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	SK103 P316 30% 覆土下層
34	鉢形土器 (加曾利Ⅰ)	A (18.8) B (10.6)	胴部は内彎しながら立ち上がり、頸部でくびれ、口縁部は外傾する。胴部から口縁部内面磨き、口縁部外面ナデ。胴部に横位の「S」字状の隆帯が推定8単位みられ、隆帯上に凹みが巡り、この隆帯の間に4条の棒状工具による押圧痕が見られる。隆帯から上位は単節LRの回転縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	SK103 P317 PL53 15% 覆土下層
35	深鉢形土器 (阿玉台)	B (18.9) C 9.2	平底。胴部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部で外反する。無文土器で、底部へら削り、胴部外面削り後磨き、内面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	SK104 P318 PL53 60% 底面直上
36	深鉢形土器 (阿玉台)	B (9.6) C 11.1	平底。胴部はやや外傾して立ち上がる。底部へら削り後磨き。胴部下端は磨き、中央部は単節RLの縄文地文を半截竹管による平行沈線文が垂下している。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	SK104 P319 40% 底面直上
37	深鉢形土器 (大木8a)	B (15.3)	口縁部は頸部から内彎しながら立ち上がる。頸部に4条の隆起線が巡り、一番下の隆起線から3条の隆起線が垂下すると推定される。口縁部に単節RLの縄文が施され、口縁部上位に巡らされる隆帯上には棒状工具による押圧痕が連続している。幅の広い口唇部には1条の隆起線が巡っている。口縁部内面磨き。	砂粒・長石・ 雲母・スコリア 橙色 普通	SK106 P320 PL53 20% 底面直上
第44図 38	把手 (大木8a)	長さ (15.4) 幅 15.6 厚さ 6.5	4孔の環状把手。下位から2条の隆帯が中位で1条になり、そこからまた2条になって眼鏡状を呈して1条になり、この上位は渦巻き状になる。把手の上端部には幅の広い隆帯が施され、この隆帯の上面に棒状工具による押圧痕が連続し、隆帯の両側に渦巻き状の隆帯が見られる。裏側の部分にも渦巻き状と三角形状と2本の平行状の隆帯が見られる。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	SK106 P321 PL54 5% 覆土
39	深鉢形土器 (阿玉台Ⅱ)	A (24.8) B (23.8)	胴部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部で外傾して立ち上がる。胴部には7～8本歯の櫛歯状工具による縦位の条線文が施されている。口縁部上位内面に隆帯が巡らされる。内面磨き。	砂粒・長石・ 石英・雲母 橙色 普通	SK114 P322 PL54 45% 底面直上
40	手捏土器 (阿玉台)	A 5.7 B 2.3 C 5.2	平底。体部は垂直に上がり、口唇部に至る。体部外面凸凹、内面指頭圧痕有り、上位ナデ。底部木葉痕有り。	砂粒 にぶい橙色 普通	SK114 P323 PL54 95% 覆土

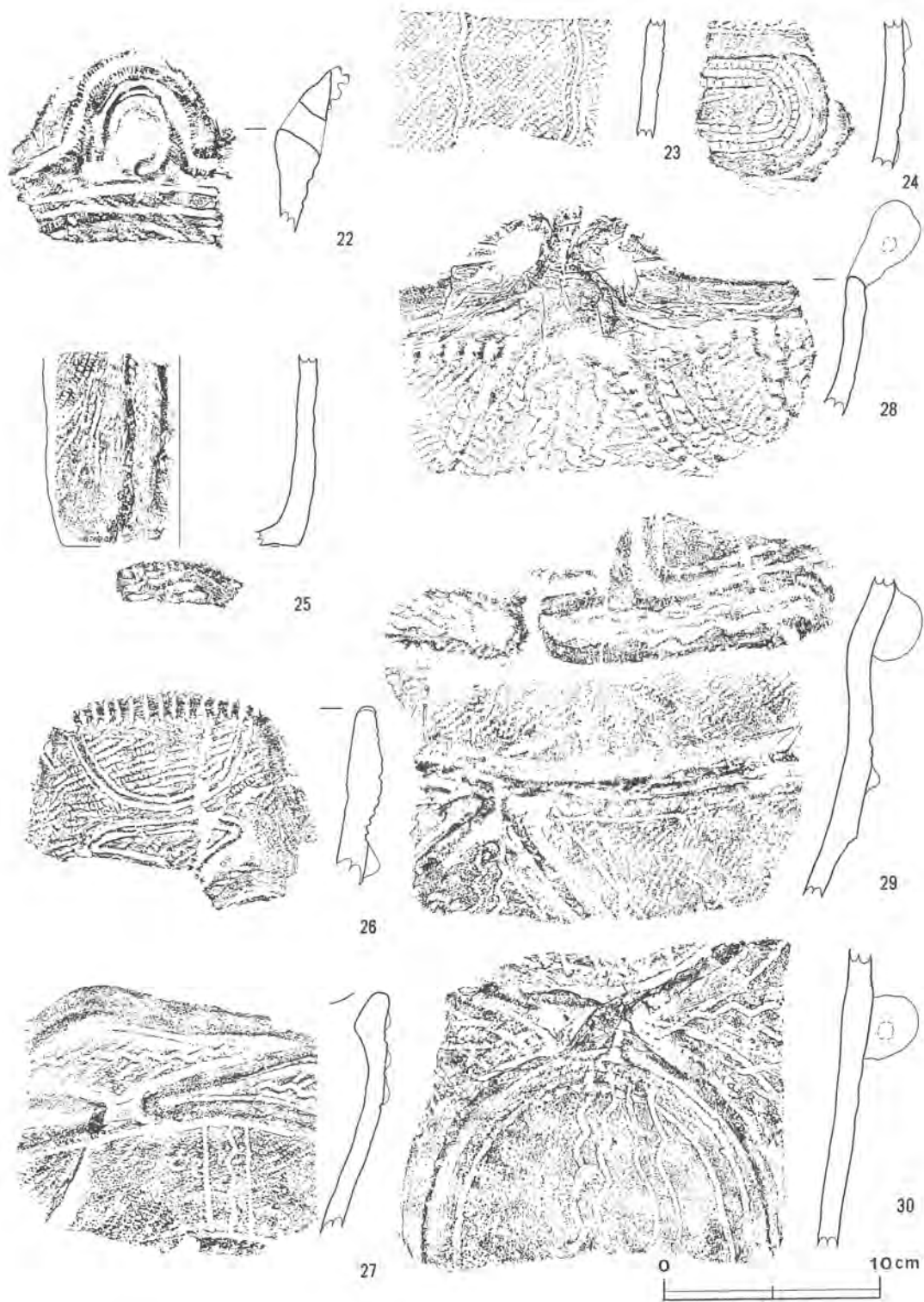
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第44図 41	把手 (阿玉台Ⅲ)	長さ (19.6) 幅 (10.5)	台形状を呈する把手。把手面には逆「ハ」の字状の背の高く細長い隆帯が貼り付けられ、この隆帯の上面に棒状工具による圧痕が加えられている。この隆帯から連結して把手の上端部に隆帯が巡らされ、下部には横へ隆帯が延びている。これらの隆帯に沿って押し刺突文が施されている。	砂粒・長石・石英・雲母にぶい 橙色 普通	SK115 P325 5% PL54 覆土
42	深鉢形土器 (大木8a)	B (26.9)	胴部はほぼ垂直に立ち上がり、中位でやや膨らみを持ち、口縁部は外傾して立ち上がり、端部で内彎する。胴部の上位を横位の2条の半截竹管による平行沈線文によって、頸部無文帯と区画する。平行沈線文に沿って半截竹管による山形沈線文が巡り、この沈線文から半截竹管による波状文が垂下し、この区画内には単節RLの縄文が施されている。口唇部には縄文が施された後、3条の沈線が巡っている。内・外面磨減。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	SK115 P328 40% PL54 覆土
第45図 43	深鉢形土器 (阿玉台Ⅲ)	A (22.6) B (22.0)	胴部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部はやや大きく外傾して立ち上がる。無文土器で、胴部は口縁部との境に1本の隆帯を巡らして区画されている。この隆帯に接して、2本の隆帯が3単位貼り付けられ、隆帯に沿って沈線が施されている。頸部には無文帯を有している。口縁は3単位の山形状把手を隆帯で三角形に区画し、区画内に沈線がほぼ隆帯に沿って回っている。下側の隆帯上にはキザミ目を有している。内面ナデ。	砂粒・長石・雲母 暗赤褐色 普通	SK115 P324 55% PL54 底面直上
44	深鉢形土器 (大木8a)	A (46.4) B (39.5)	胴部は内彎しながら立ち上がり、中位でやや膨らみを持つ。胴部に()形をした4単位の4条の沈線を有し、中2条には丸棒状刺突文が巡らされ、下半部には単節LRの縄文地文に渦巻き状の沈線が施されている。頸部から胴部には半截竹管による弧状文が巡っている。口唇部の隆帯には3条の沈線を有し、この沈線の1条には丸棒による刺突文が巡らされている。口縁には、この隆帯からせり上がることによって表出された2孔1単位の環状把手を有している。把手には渦巻き状の隆起線が巡り、側面には棒状工具による押圧痕が見られる。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	SK115 P327 20% PL54 覆土
第46図 45	深鉢形土器 (阿玉台Ⅲ)	A 19.3 B (19.1)	胴部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部に至る。頸部に上下に沈線を伴った隆帯が巡り、この隆帯に連結して4単位の隆帯が垂下している。地文には渦巻き状の沈線及び単節LRの縄文が施されている。口縁部に無文帯を持ち、端部に隆帯を巡し、口唇部に厚みを持たせている。	砂粒・長石・雲母 灰褐色 普通	SK121 P329 35% PL55 覆土中層
46	深鉢形土器 (阿玉台Ⅳ)	A 33.0 B (51.3)	胴部はほぼ垂直に立ち上がり、中位でやや膨らみ、口縁部で大きく外傾する。胴部には頸部を巡る1条の隆帯に接続する「Y」字状の隆帯に続く曲線の隆帯が4単位貼り付けられ、隆帯に沿って2条の山形沈線文を施している。地文には単節RLの縄文が施されている。頸部には無文帯を有している。3単位の波状口縁を呈している。口縁部は隆帯によって隅丸三角形に区画され、隆帯に沿って沈線文が施されている。区画内には縄文地文に山形沈線文を施している。口縁には扇状及び双頭状の把手を有し、表面に単節RLの縄文が施されている。把手上部から隆帯が口唇部上を垂下し、口縁部の下方を巡る隆帯と連結して4単位の環状把手を表出している。内面ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 褐色 普通	SK125 P330 50% PL55 覆土中層
47	把手 (阿玉台Ⅳ)	長さ (23.2) 幅 (14.0)	把手下半は隆帯によって三角形に区画され、この隆帯がせり上がって突起となり、区画内には棒状工具による沈線が施されている。把手上半は扇状を呈し、把手中央部に円形の凹みを有する。内面磨き。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	SK125 P331 5% PL55 覆土
第47図 48	深鉢形土器 (阿玉台Ⅱ)	A 23.8 B 34.2 C 11.0	平底。胴部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。底部へラ削り。胴部から口縁部は6~7本の櫛歯状工具による横位の条線文が施されている。口縁部は折り返し口縁。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	SK144 P332 100% PL55 底面直上
49	把手 (阿玉台Ⅱ)	長さ (12.5) 幅 (11.9)	山形状の把手。把手上端の隆帯に沿って2列の結節沈線文が施され、口縁部には隆帯が上下両側からせり上がることによって表出された橋状把手が見られ、この下側の隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。内面磨き。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	SK151 P333 5% PL55 覆土
50	深鉢形土器 (加曾利EⅤ)	A 29.3 B 53.5 C 8.0	平底。底部より外傾して胴上半部まで開いた後、やや内彎して口縁部に至る。最大径は胴中央部よりやや上に持つ。口縁部無文帯と胴部縄文施文帯とを微隆起線によって区画し、微隆起線上には4単位の舌状突起を有し、胴部には単節LRの回転縄文が縦位に施されている。内面磨減が著しい。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	SK161 P260 85% PL55 埋設土器



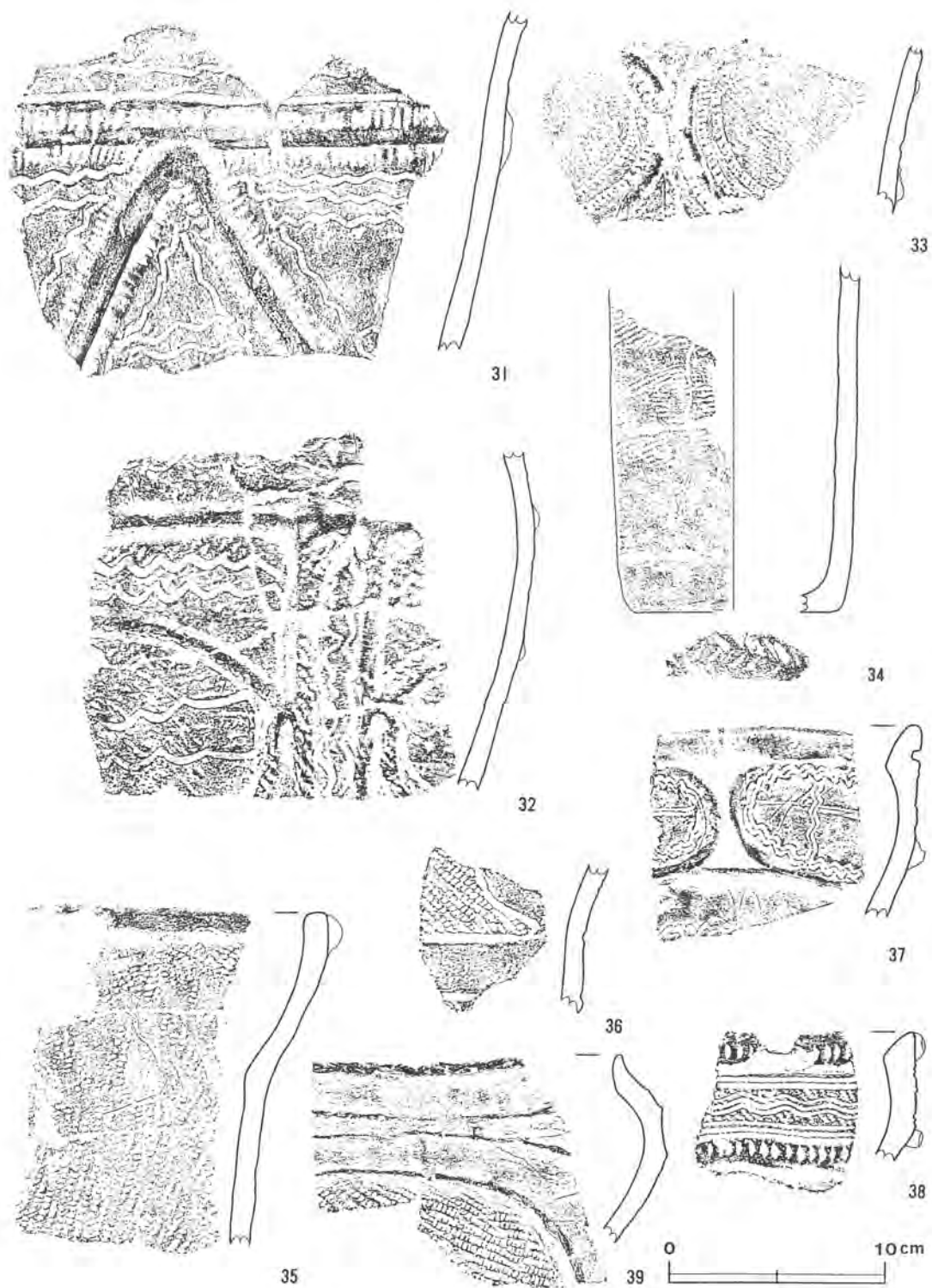
第 48 図 土坑出土土器拓影図（縄文 13）



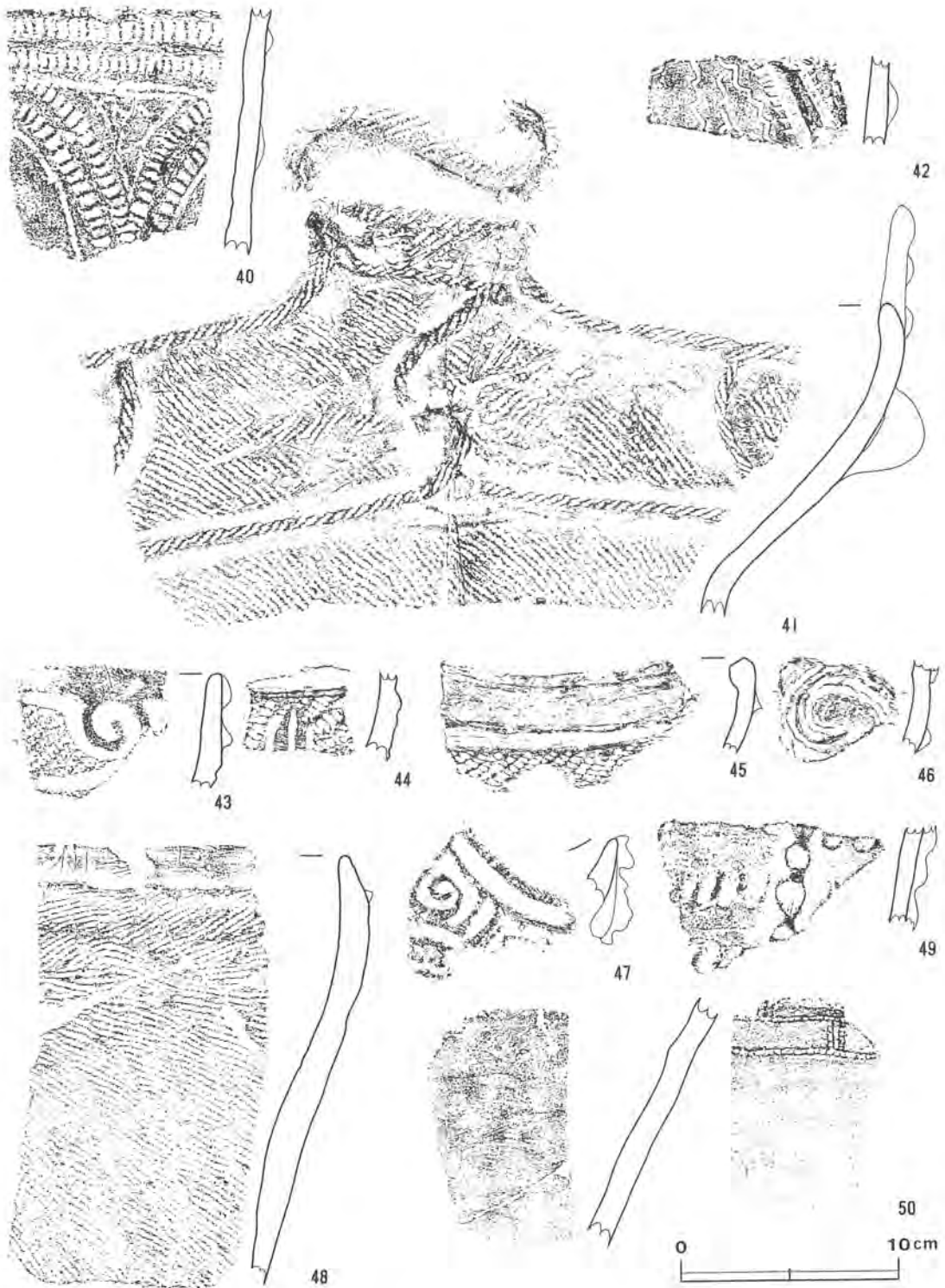
第 49 図 土坑出土土器拓影図 (縄文 14)



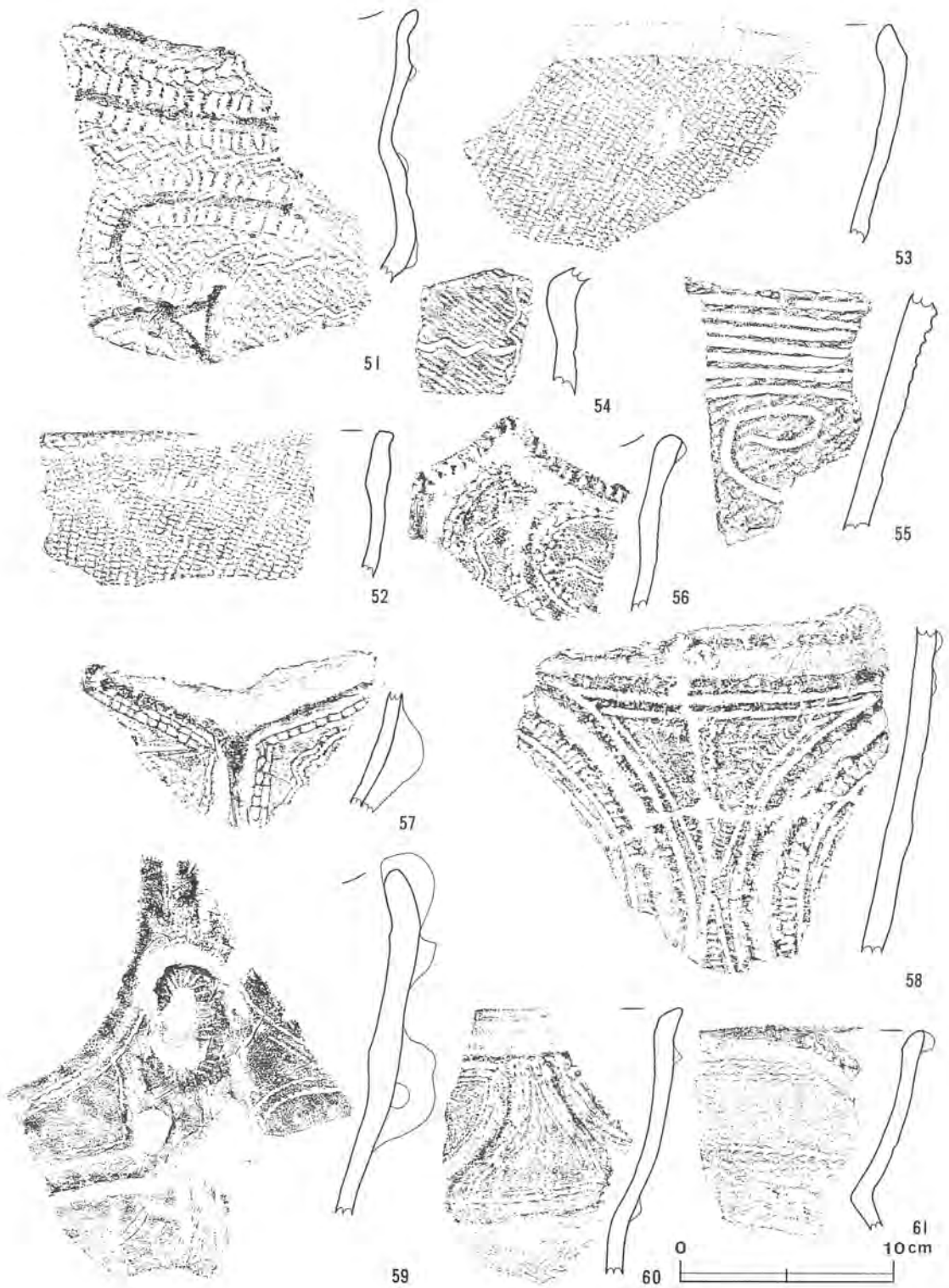
第50図 土坑出土土器拓影図（縄文15）



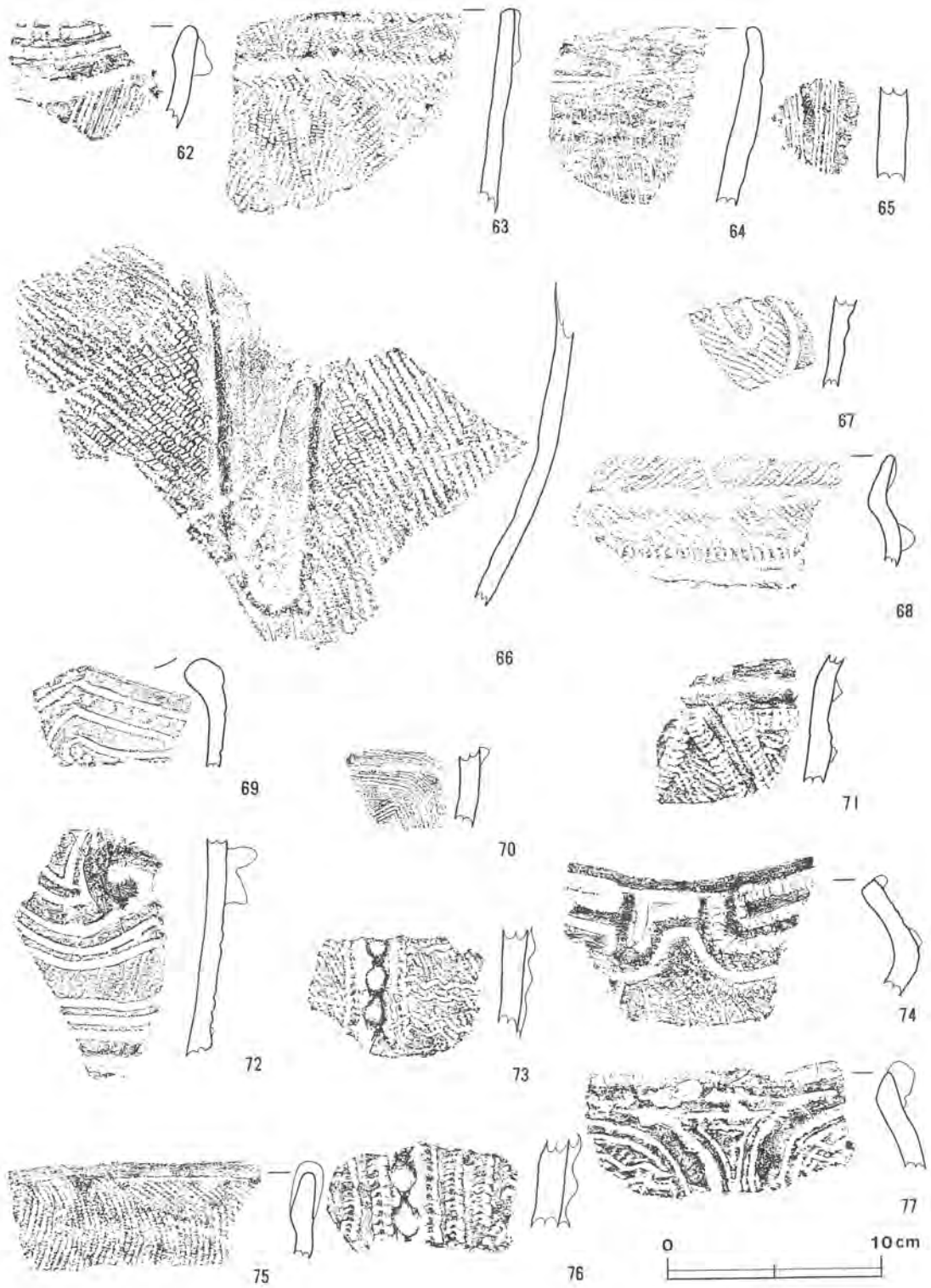
第 51 図 土坑出土土器拓影図（繩文 16）



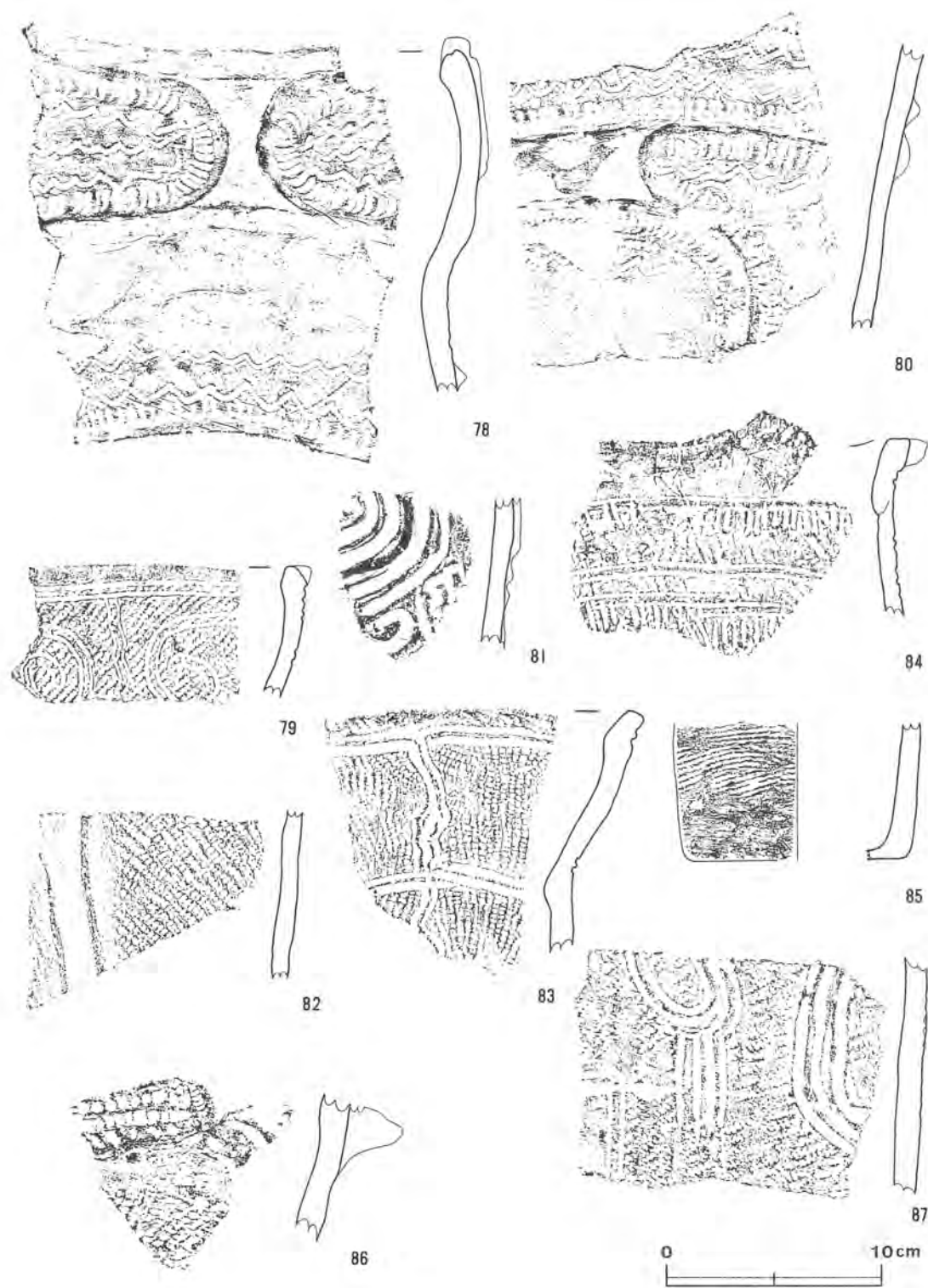
第 52 図 土坑出土土器拓影図（縄文 17）



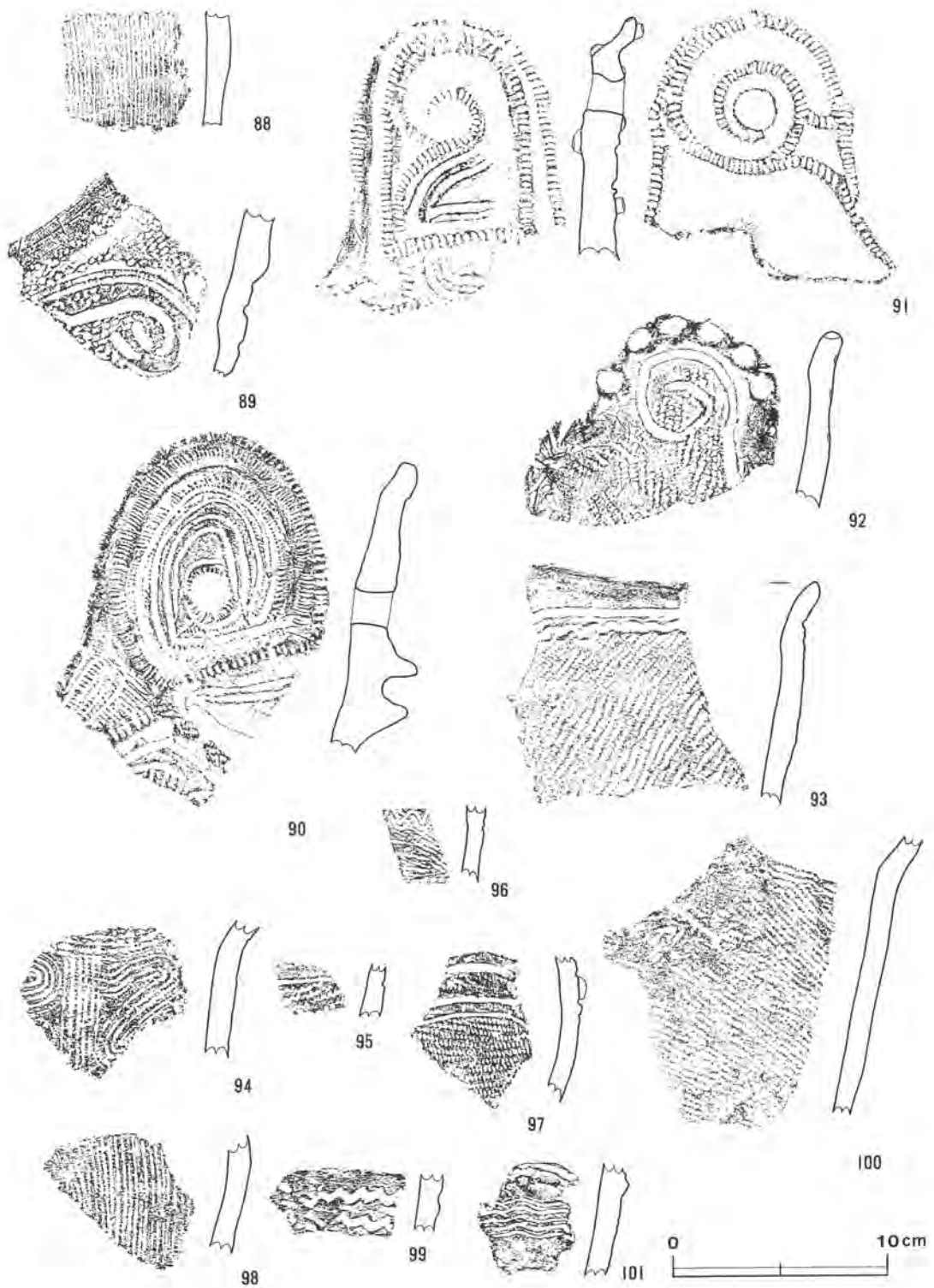
第53圖 土坑出土土器拓影圖（繩文18）



第54図 土坑出土土器拓影図（縄文19）



第 55 図 土坑出土土器拓影図（縄文 20）



第 56 図 土坑出土土器拓影図（縄文 21）

土坑出土縄文式土器拓影図解説（第 48 図～第 56 図）

1・2 は第 1 号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。1 は胴部片で、隆起線によって無文体と縄文施文帯とに区画し、施文帯には単節 LR の回転縄文が施されている。2 は無節 R の回転縄文が縦位や斜位に施されている。3 は第 4 号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、方形を呈する把手で、地文に単節 RL の回転縄文が施され、中央の隆帯の両脇に幅の広い沈線と結節沈線文が施され、上端部にはキザミ目を有している。4 は第 6 号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、口縁部片で、楕円形に区画した隆帯に沿って結節沈線文が施されている。5～8 は第 7 号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。5 は方形を呈する把手で、隆帯に沿って幅の広い沈線が施され、沈線の内側には山形沈線文が施されている。6 は山形状を呈する把手で、隆帯に沿って 2 列の結節沈線文が施され、下端部には櫛歯状工具による条線文が施されている。7 は口縁部で、櫛歯状工具による条線文が施された後、2 列の結節沈線文が巡っている。8 は 3 孔の環状把手で、隆帯に沿ってキザミ目が巡り、上端には沈線が施されている。9・10 は第 9 号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。9 は胴部片で、隆帯によって区画し、区画内には 2 条の沈線が巡り、沈線内には単節 LR の回転縄文が施され、地文には単節 LR の回転縄文が施されている。隆帯上にはキザミ目が巡っている。10 は頸部片で、隆帯に沿って沈線が巡り、地文に単節 RL の回転縄文が施されている。11 は第 10 号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、胴部片で、爪形文が施されている。12・13 は第 11 号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。12 は口縁部片で、単節 RL の縄文地文の上に平行沈線や波状沈線が巡っている。13 は胴部片で、「V」字状に延びる隆帯が貼り付けられ、地文には櫛歯状工具による波状の条線文が施されている。14 は第 13 号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、胴部片で、蕨手状を呈する隆起線の区画内・外に単節 RL の回転縄文が縦位や斜位に施された後、隆起線に沿って沈線が施されている。15 は第 14 号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、口縁部片で、口縁には隆帯が巡らされ、隆帯上には条線文が横位波状に、胴部には条線文が縦位波状に施されている。16 は第 15 号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、口縁部片で、隆起線によって口縁部無文体と胴部施文帯とに区画し、施文帯には単節 LR の回転縄文が施されている。17 は第 16 号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、胴部片で、単節 RL の回転縄文が施されている。18 は第 17 号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、口縁部片で、口縁部は隆帯に沿って 2 条の沈線が巡り、沈線による区画内には単節 RL の回転縄文が施され、口縁部上端をめぐる隆帯上にはキザミ目が施されている。19・20 は第 19 号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。19 は口縁部片で、全体に単節 RL の回転縄文が施されている。20 は口縁部片で、隆起線によって口縁部無文体と胴部施文帯とに区画し、垂下する 2 本の隆起線によって胴部を無文体と施文帯とに区画している。区画内には単節 LR の回

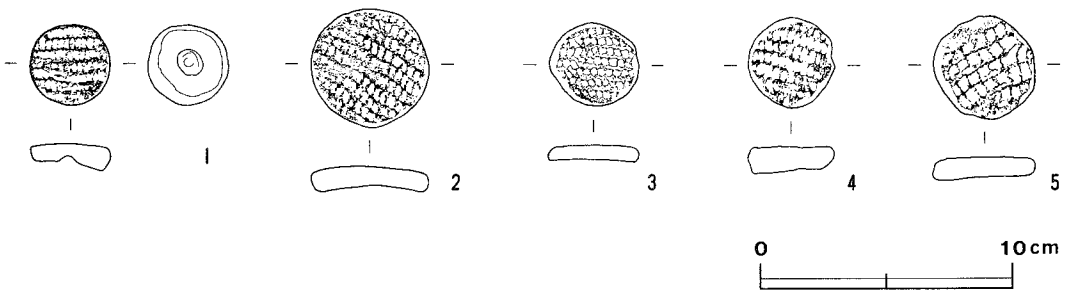
転縄文が施されている。21・22は第20号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。21は口縁部片で、口縁部上端に隆帯が巡り、隆帯上には棒状工具による押圧が加えられている。地文は単節LRの回転縄文が施されている。22は1孔の環状把手で、口縁部から把手上端に2本の隆起線が巡り、隆起線にはキザミ目が施され、口縁に沿って2条の平行沈線が巡っている。

23～25は第21号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。23は胴部片で、単節RLの回転縄文が施された後2条の沈線が垂下している。24は頸部片で、楕円形を呈する隆帯に沿って2列の結節沈線文が施されている。25は底部片で、底部網代痕有り、単節RLの縄文地文に2本の隆起線が垂下している。26は第22号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、方形状を呈する把手で、地文は単節RLの回転縄文を施した後、半円形状をした2条の沈線と楕円形状をした2条の沈線とが施されている。27～34は第23号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。27は口縁部片で、口縁部上端に巡らされた隆帯と三角形に施された隆帯とで区画された中に、単節RLの回転縄文が充填された後1条の沈線と波状の沈線とが施されている。口縁部下位には2条の沈線の間を波状の沈線が垂下している。28は口縁部片で、口縁部上端の隆帯からせり上がって眼鏡状の把手となる。逆「U」字状に垂下する隆帯に沿って2列の結節沈線文と幅の広い沈線が施されている。29は頸部片で、単節LRの縄文地文に眼鏡状にせり上がる隆帯と三角形に張り付けられた隆帯とが見られ、隆帯内には沈線が施されている。30は「X」字状を呈する隆起線の中央部にせり上がって把手が付き、隆起線内には結節沈線文と波状沈線が施されている。31は胴部片で、横位に巡る隆帯と逆「V」字状を呈する隆帯とが施され、隆帯に沿ってキャピラ文が巡り、区画内には波状沈線が施されている。32は隆帯に沿って結節沈線文が施され、区画内には波状沈線が施されている。33は胴部片で、楕円形を呈する隆起線に沿って区画内に2列の、区画外に1列の結節沈線文が施されている。34は底部片で、底部は網代痕有り、無節Lの縄文地文に2条の沈線が垂下している。35は第25号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、口縁部片で、口縁部上端に隆帯が巡り、地文には単節RLの回転縄文が施されているが、磨減している。36は第27号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、頸部片で、沈線によって無文体と縄文施文帯とに区画し、施文帯には単節LRの回転縄文が充填されている。37・38は第34号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。37は口縁部片で、口縁部上端に隆帯が巡り、この隆帯から楕円形状に隆帯が貼り付けられ、隆帯内には2条の沈線が施されている。38は口縁部片で、2本の平行に巡らされている隆帯上にはキザミ目が施され、隆帯の間には3条の平行沈線や3条の波状沈線が巡っている。39・40は第35号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。39は口縁部片で、隆起線によって口縁部無文体と胴部施文帯とに区画し、無文帯には2列の隆起線が、施文帯には単節LRの回転縄文が施されている。40は胴部片で、隆起線によって区画し、隆起線に沿って結節沈線文が施されている。区画内には沈線が

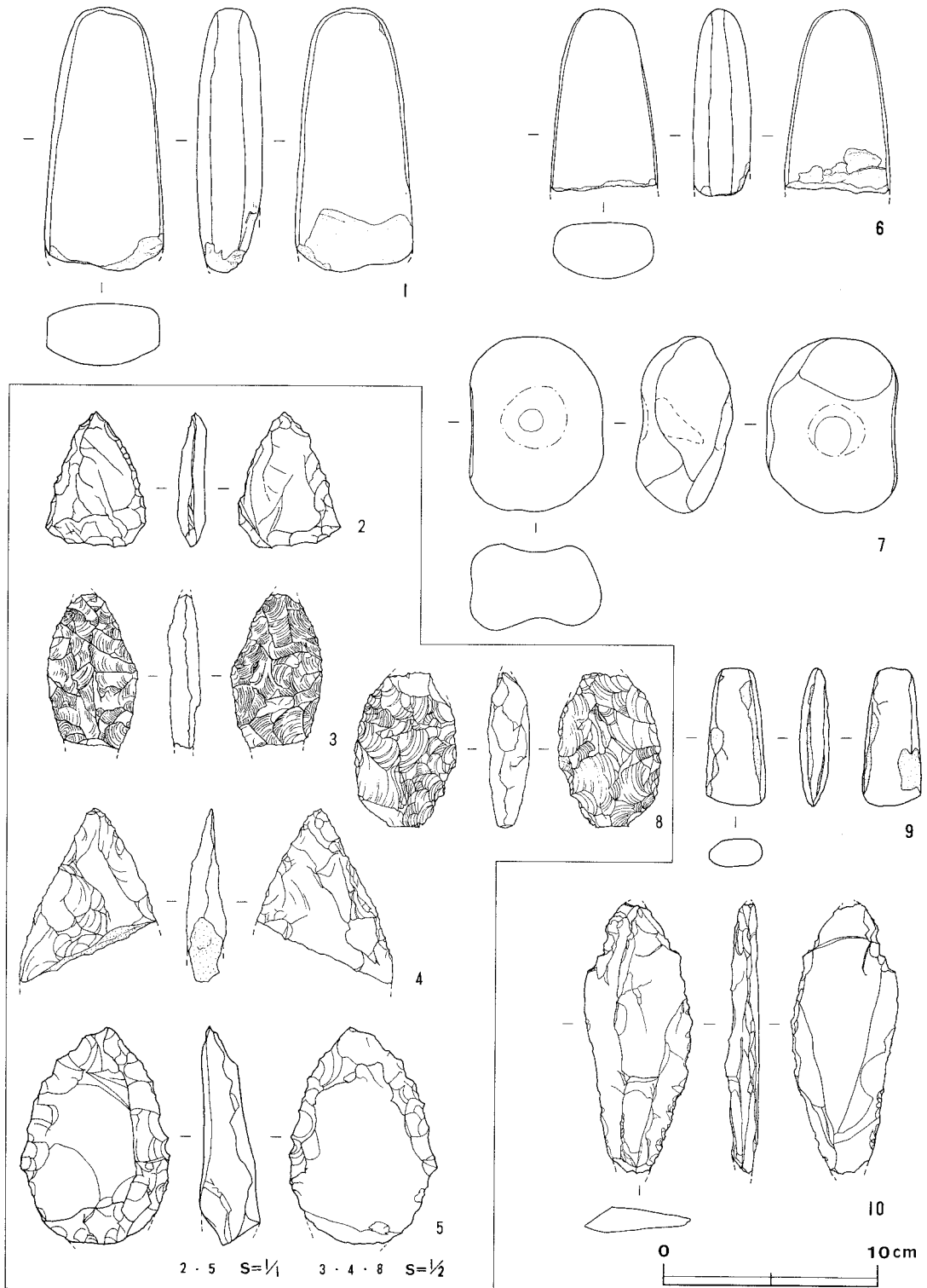
施されている。41・42は第37号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。41は口縁部片で、口唇部に「S」字状の突起が付く。地文には隆帯が貼り付けられた後単節 RL の回転縄文が施されている。42は胴部片で、隆起線に沿ってキャタピラ文が施され、その内側に沈線が施されている。43は第43号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、口縁部片で、口縁部上端の隆帯から渦巻き状の隆帯が垂下し、地文には単節 RL の回転縄文が施されている。44は第44号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、横位の沈線が巡り、単節 RL の縄文地文に沈線が垂下している。45は第45号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、口縁部片で、隆起線によって口縁部無文帯と胴部施文帯とに区画し、施文帯には単節 RL の回転縄文が施されている。46は第46号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、胴部片で、渦巻き状の隆起線に沿って結節沈線文が施されている。47は第53号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、渦巻き状の隆起線が施されている。48は第56号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、口縁部片で、隆起線によって口縁部無文帯と胴部施文帯とに区画し、施文帯には単節 RL の回転縄文が縦位や斜位に施されている。49は第57号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、胴部片で、縦位に貼り付けられた隆帯上に棒状工具による押圧が加えられ、横位に爪形文が施されている。50は第58号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、浅鉢の口縁部片で、内面に1列の結節沈線文が施されている。51・52は第59号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。51は口縁部片で、2本の隆起線の間押し引き刺突文とキャタピラ文が施され、単節 LR の縄文地文に楕円形を呈する隆起線が貼り付けられ、隆起線の区画内・外にキャタピラ文や沈線が施されている。52は口縁部片で、地文に単節 RL の回転縄文が施されている。53は第60号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、口縁部片で、弱い隆起線によって口縁部無文帯と胴部施文帯とに区画し、施文帯には単節 RL の回転縄文が施されている。54は第61号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、頸部片で、無節 L の縄文地文に沈線が施されている。55は第62号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、単節 RL の縄文地文に7条の平行沈線と渦巻き状の沈線が施されている。56・57は第64号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。56は口縁部片で、口縁部上端に貼り付けられた隆帯にはキザミ目が施され、楕円形状の隆起線に沿って結節沈線文が施されている。57は胴部片で、隆帯の区画内に2列の結節沈線文と沈線が施されている。58は第65号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、胴部片で、隆帯に沿って2列の結節沈線文やキャタピラ文が施されている。59～61は第68号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。59は口縁部片で、双頭の山形把手に沿って隆帯が垂下して楕円形を呈して、中央部で橋状を呈する。この上の部分の隆帯上にはキザミ目が見られる。楕円形の区画内には2列の結節沈線文が見られる。60は口縁部片で、隆起線によって口縁無文帯と胴部施文帯とを区画し、施文帯には三角形を呈する隆起線が施さ

れ、隆起線内には2列の結節沈線文が施されている。61は口縁部片で、楕円形状を呈する隆帯によって区画し、隆帯上にはキザミ目が巡り、隆帯内には2列の押し引き刺突文が施されている。62は第77号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、口縁部片で、口唇部に巡る隆帯上には2列の結節沈線文が施され、下位には条線文が施されている。63・64は第80号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。63は折り返しの口縁部片で、単節RLの回転縄文が縦位や斜位に施されている。64は口縁部片で、沈線によって口縁部無文帯と胴部施文帯とに区画し、施文帯には縦位の条線文が施されている。65は第82号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、胴部片で、5条の沈線が垂下している。66は第83号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、胴部片で、楕円形状に垂下する隆起線によって無文帯と施文帯とに区画し、区画内には単節LRの回転縄文が施されている。67は第84号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、胴部片で、渦巻き状を呈する沈線によって、無文帯と施文帯とに区画し、区画内には単節RLの回転縄文が施されている。68～70は第87号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。68は折り返しの口縁部片で、1列の隆帯を貼り付けた後単節LRの回転縄文が施されている。隆帯上にはキザミ目が巡らされている。69は口縁部片で、沈線によって無文帯と施文帯とに区画し、区画内には刺突文が施され、口唇部には沈線が一部見られる。70は胴部片で、隆起線によって区画し、区画内には条線文が充填されている。71・72は第91号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。71は隆起線によって区画し、区画内には1列のキャタピラ文が施されている。72は胴部片で、隆帯が渦巻き状を呈して小突起となり、単節LRの縄文地文に3条の沈線が施されている。73は第93号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、胴部片で垂下する隆帯上には押圧が加えられている。単節LRの縄文地文に沈線や押し引き刺突文が施されている。74～76は第94号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。74は口縁部片で、隆起線内には結節沈線文や沈線が施され、胴部には単節RLの回転縄文が施されている。75は口縁部片で、単節LRの回転縄文が縦位や斜位に施されている。76は胴部片で、垂下する隆帯上には押圧が加えられている。隆帯に沿って結節沈線文が施されている。77は第103号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、口縁部片で、隆帯に沿って平行沈線や波状沈線が施されている。78～80は第104号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。78は口縁部片で、口縁部には楕円形状を呈する隆帯に沿ってキャタピラ文が施され、頸部には1本の隆起線に沿ってキャタピラ文と山形沈線文が巡らされている。79は口縁部片で、単節RLの縄文地文に平行沈線と渦巻き状の沈線が施されている。80は胴部片で、隆起線に沿ってキャタピラ文や山形沈線文が施され、下位ではさらに押し引き刺突文も施されている。81は第106号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、胴部片で、渦巻き状の隆起線が見られる。82は第109号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、胴部片で、地文に単節LRの回転縄

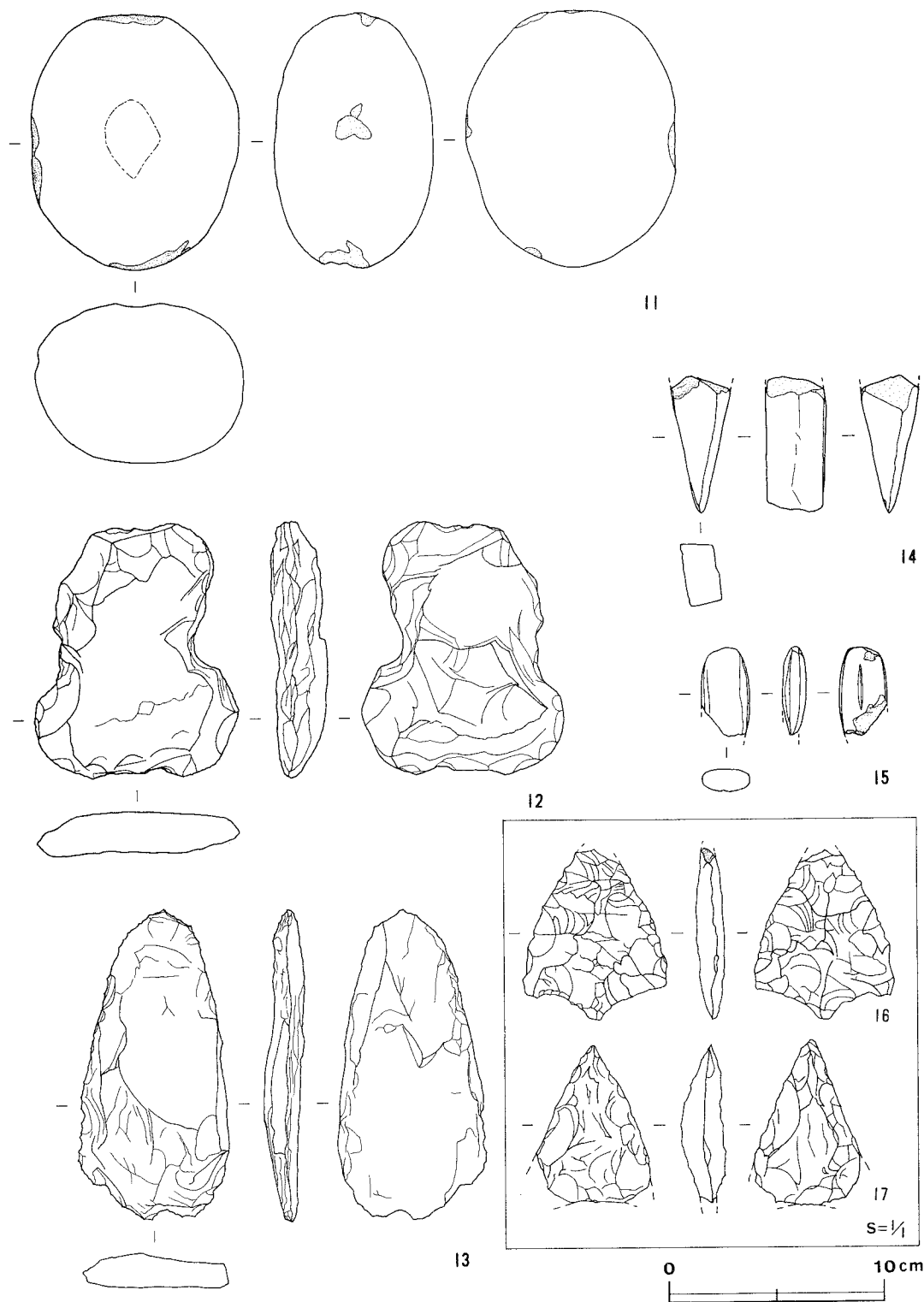
文を施し、2本の隆起線によって区画された磨消帯が垂下している。83・84は第114号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。83は口縁部片で、単節RLの縄文地文に沈線が施されている。84は口縁部片で、半截竹管による棒状沈線やキザミ目が施されている。85・86は第115号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。85は底部片で、単節RLの回転縄文が施されている。86は頸部片で、隆帯がせり上がることにより小突起となり、隆帯には結節沈線文が巡り、地文には単節RLの回転縄文が施されている。87・88は第121号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。87は胴部片で、単節RLの縄文地文に沈線が垂下している。88は胴部片で、条線文が充填されている。89は第124号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図であり、口縁部片で、単節RLの縄文地文に渦巻き状の沈線が施されている。90～92は第125号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。90は円形状を呈する把手で、上端を巡る隆帯上にキザミ目と爪形文が施されている。隆帯の内側には沈線や爪形文が施され、中央部に孔が1つある。91は円形状を呈する把手で、上端を巡る隆帯上にはキザミ目が巡り、隆帯の内側には「2」の字状を呈する隆帯にもキザミ目が見られ、中央部に孔が1つある。92は円形状を呈する把手で、上端には押圧が加えられている。単節RLの縄文地文に渦巻き状を呈する沈線が施されている。93・94は第129号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。93は口縁部片で、1条の沈線と1列のコンパス文によって口縁部と区画し、地文には単節RLの回転縄文が施されている。94は頸部片で、櫛歯状工具による沈線が施されている。95・96は第144号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。95は胴部片で、沈線が施されている。96は胴部片で、無節Lの縄文地文に山形沈線文が施されている。97～99は第145号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。97は胴部片で、隆起線と沈線によって区画した内側には単節RLの回転縄文が施されている。98は胴部片で、条線文が充填されている。99は胴部片で、波状沈線が施されている。100・101は第160号土坑から出土した縄文式土器片の拓影図である。100は頸部片で、地文には単節RLの回転縄文が施されているが、磨滅している。101は胴部片で、沈線が施されている。



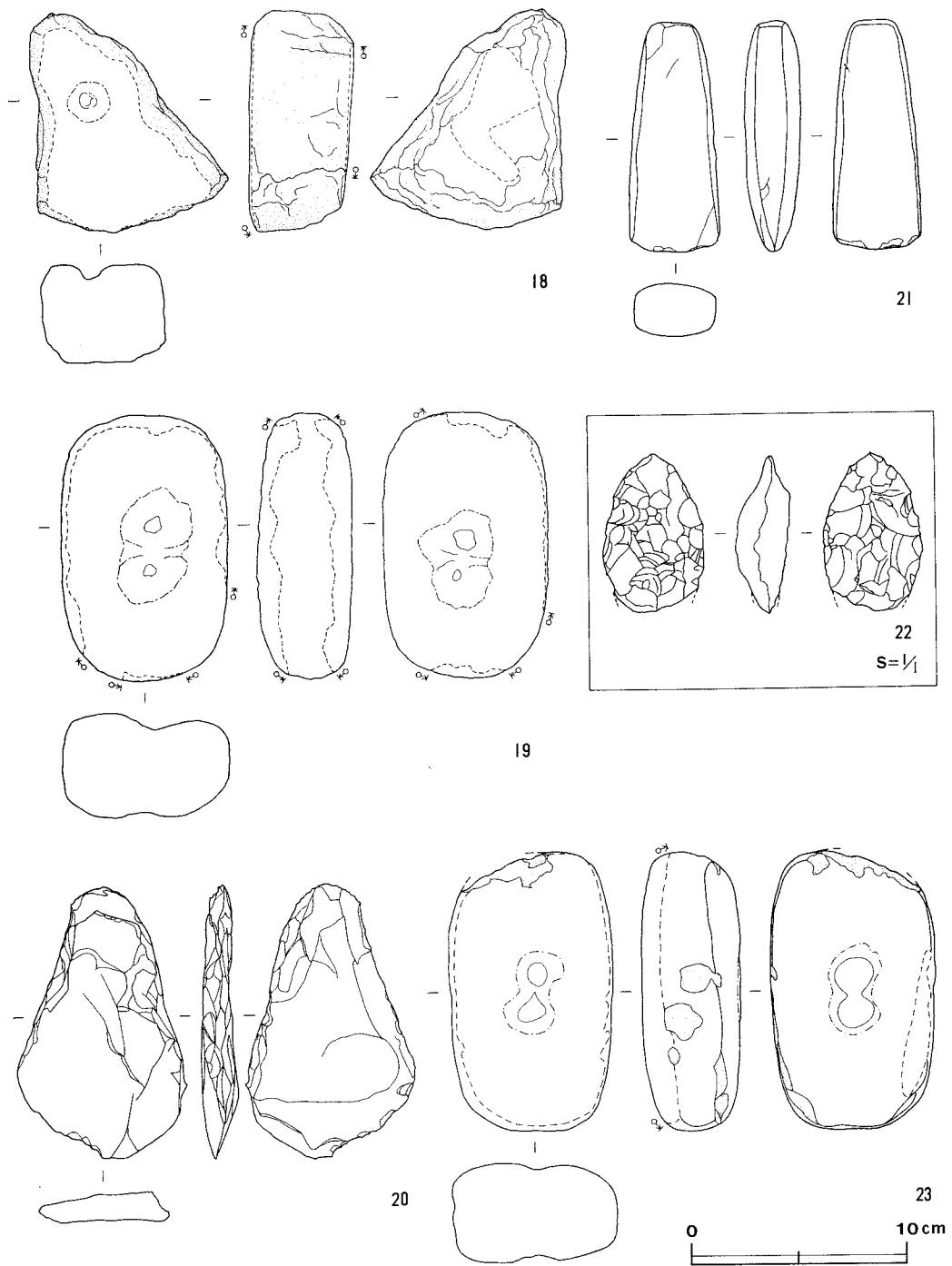
第57図 土坑出土土製品実測図（縄文22）



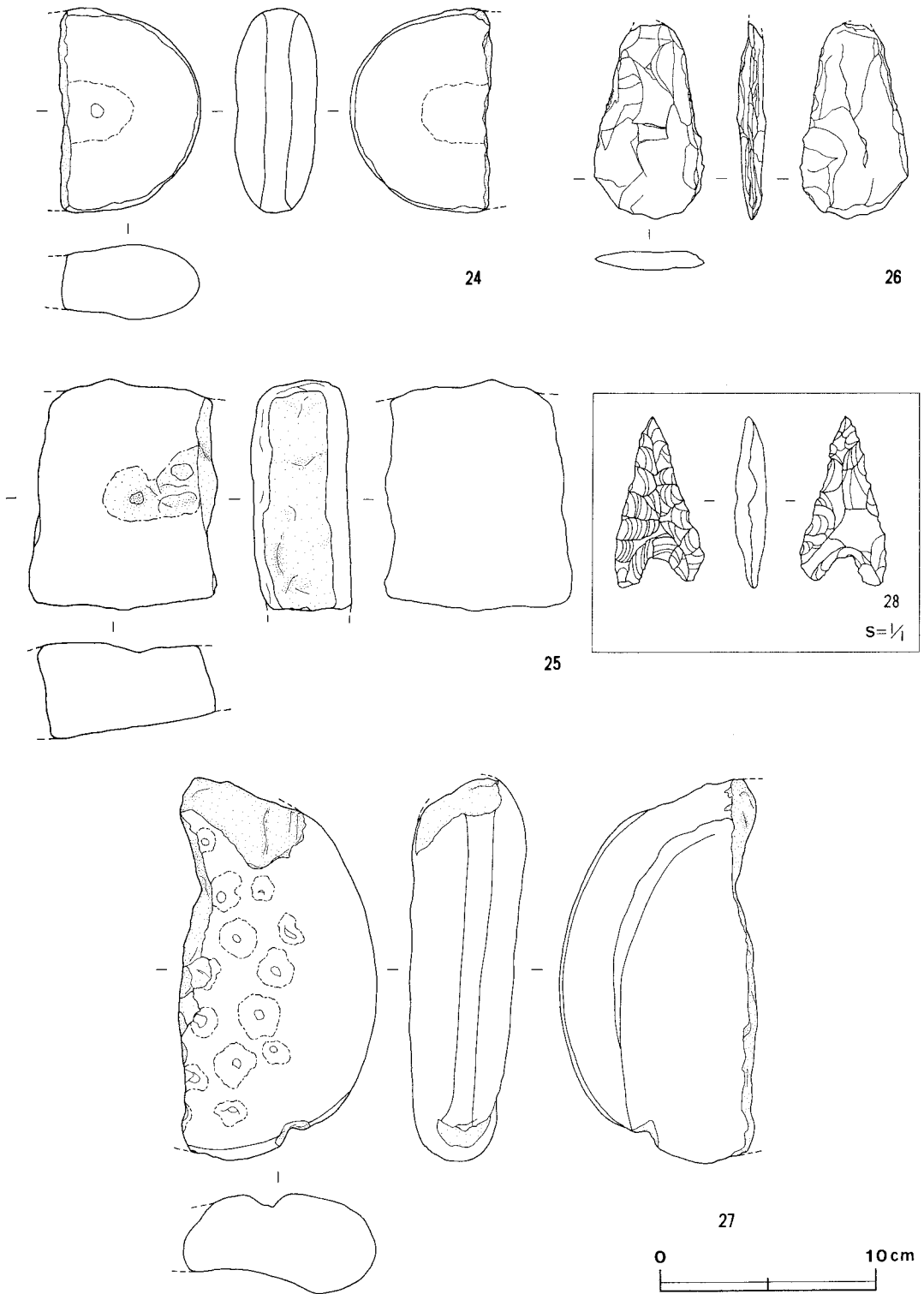
第 58 図 土坑出土石器・石製品実測図 (縄文 23)



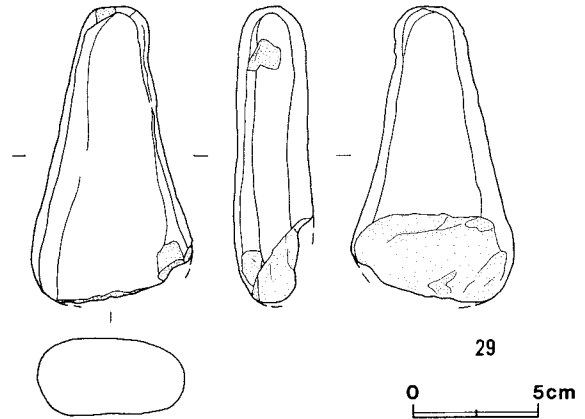
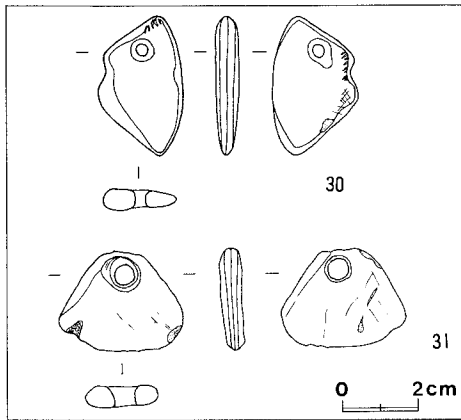
第 59 図 土坑出土石器・石製品実測図（縄文 24）



第 60 図 土坑出土石器・石製品実測図（縄文 25）



第 61 図 土坑出土石器・石製品実測図（縄文 26）



第62図 土坑出土石器・石製品実測図（縄文27）

土坑出土土製品観察表

図版番号	器種	法量				出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第57図1	土製円板	3.3	3.2	1.1	11.0	SK4 覆土	DP18 裏面に径1.1cm深さ0.3cmの孔有り。 PL58
2	土製円板	4.7	4.8	1.0	23.8	SK15 底面直上	DP21 PL58
3	土製円板	3.3	3.6	0.7	9.3	SK106 覆土	DP23 PL58
4	土製円板	3.6	3.5	1.1	(14.7)	SK106 覆土	DP24 PL58
5	土製円板	4.2	4.0	0.9	(17.8)	SK106 覆土	DP25 PL58

土坑出土石器・石製品観察表

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第58図1	磨製石斧	緑泥岩	(12.6)	5.5	3.0	(323.5)	SK9 覆土	Q58 PL58
2	石鏃	チャート	2.1	1.6	0.5	1.4	SK10 底面直上	Q59 PL58
3	尖頭器	黒曜石	(4.8)	2.8	1.0	(10.8)	SK15 覆土	Q60 PL58
4	尖頭器	チャート	(5.4)	(4.1)	1.2	(17.7)	SK15 覆土	Q61 PL58
5	石鏃	チャート	(3.4)	2.3	1.0	(6.6)	SK17 覆土	Q62 PL58
6	磨製石斧	結晶片岩	(8.8)	5.0	2.7	(183.7)	SK17 底面直上	Q63 PL58
7	凹石	砂岩	8.3	6.2	4.5	(310.5)	SK17 底面直上	Q64 表裏両面に凹み有り。
8	尖頭器	黒曜石	(4.8)	3.2	1.3	(19.1)	SK17 覆土	Q65 PL58
9	磨製石斧	蛇紋岩	6.5	2.8	1.4	(39.5)	SK20 覆土下層	Q66 PL58
10	打製石斧	粘板岩	(12.7)	5.0	1.6	(90.5)	SK21 覆土	Q67 PL59
第59図11	凹石	安山岩	(12.0)	(9.7)	7.4	(884.7)	SK21 底面直上	Q68 PL59
12	打製石斧	硬砂岩	12.0	9.5	2.7	(308.4)	SK21 底面直上	Q69 PL59
13	打製石斧	粘板岩	14.5	7.1	1.9	(178.0)	SK23 底面直上	Q70 PL59
14	砥石	結晶片岩	(6.4)	2.7	2.8	(56.8)	SK23 底面直上	Q71 PL59

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第59図15	磨製石斧	蛇紋岩	(4.2)	2.3	1.1	(15.7)	SK35 覆土	Q72 刃部欠損。 PL59
16	石鏃	チャート	(2.6)	2.2	0.4	(2.1)	SK56 覆土	Q73 PL59
17	石鏃	チャート	(2.4)	1.7	0.6	(1.9)	SK64 覆土	Q74 PL59
第60図18	凹石	斑礫岩	(10.4)	9.2	5.1	(588.5)	SK65 覆土	Q76 PL59
19	凹石	安山岩	12.5	7.8	4.5	676.5	SK65 覆土	Q75 表裏両面に凹み有り。 PL59
20	打製石斧	粘板岩	12.9	7.9	1.7	172.2	SK68 覆土下層	Q77 PL59
21	磨製石斧	砂岩	10.9	4.2	2.6	(188.6)	SK84 底面直上	Q78 PL60
22	石鏃	チャート	(2.3)	1.5	0.8	(2.0)	SK87 覆土下層	Q79 PL60
23	凹石	安山岩	(13.1)	7.7	4.6	(810.5)	SK90 底面直上	Q80 表裏両面に凹み有り。磨石兼用。
第61図24	凹石	安山岩	9.6	(6.7)	3.8	(323.6)	SK91 底面直上	Q81 表裏両面に凹み有り。1/2欠損。
25	凹石	砂岩	(10.9)	(8.8)	4.8	(695.9)	SK93 覆土	Q82
26	打製石斧	粘板岩	(9.2)	5.1	1.4	(67.4)	SK103 覆土下層	Q83 PL60
27	凹石・石皿	安山岩	(18.0)	(9.2)	5.5	(702.4)	SK104 底面直上	Q84 1/2欠損。 PL60
28	石鏃	チャート	2.6	1.4	0.5	1.1	SK121 覆土下層	Q85 PL60
第62図29	磨製石斧	流紋岩	(11.9)	6.5	3.2	(289.4)	SK121 底面直上	Q86 刃部欠損。 PL60
30	首飾り	滑石	3.7	2.2	0.6	6.8	SK145 覆土下層	Q87 PL60
31	首飾り	滑石	2.6	3.3	0.7	6.4	SK145 覆土下層	Q88 PL60

3 屋外炉

当調査区の中央部から屋外炉 1 基が検出されている。

第 1 号屋外炉 (第 63 図)

位置 調査区の中央部、C2b5 区を中心に確認されている。

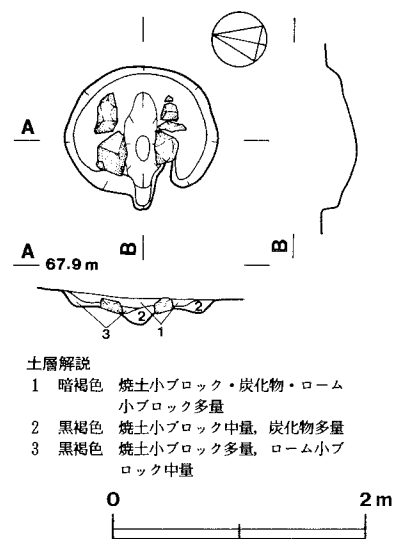
規模と平面形 長径 1.22 m, 短径 1.05 m の楕円形を呈し、深さ 0.28 m を測る。

長径方向 N - 11° - W。

壁面 緩やかに外傾して立ち上がっている。

底面 皿状を呈し、中央部が凹んでいる。中央部には、長径 8 cm, 短径 6 cm の楕円形の小さめの石から、長径 36 cm, 短径 24 cm の楕円形の大きめの石が 7 個「ハ」の字状に並べられている。この「ハ」の字状の内側が焼土化しており、屋外炉の火床部と思われる。

覆土 自然堆積。覆土中・下層から焼土小ブロックや炭化粒子が多量に検出されている。



第 63 図 第 1 号屋外炉実測図

遺物 少量の縄文式土器片が出土している。

所見 本跡は、遺構の形態や遺物の特徴等から縄文時代中期の屋外炉と思われる。

第3節 弥生時代の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

当調査区から検出された弥生時代の住居跡は、2軒である。これらの住居跡は、調査区の北部から検出されている。遺物は、十王台式や二軒屋式の甕形土器や壺形土器の破片を主に出土している。

第30号住居跡（第64図）

位置 調査区の北部、B1c₀区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北西部は第31号住居跡の南東部に掘り込まれているが、第127号土坑を掘り込んでいる。南西部は第23・129号土坑を、中央部は第25号土坑を、北部は第80号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸5.94m、短軸4.22mの長方形を呈している。

長軸方向 N-12°-W。

壁 壁高8～13cmで、垂直に立ち上がっている。

床 ローム質で平坦である。柱穴を結んだ線の内側はよく踏み固められている。

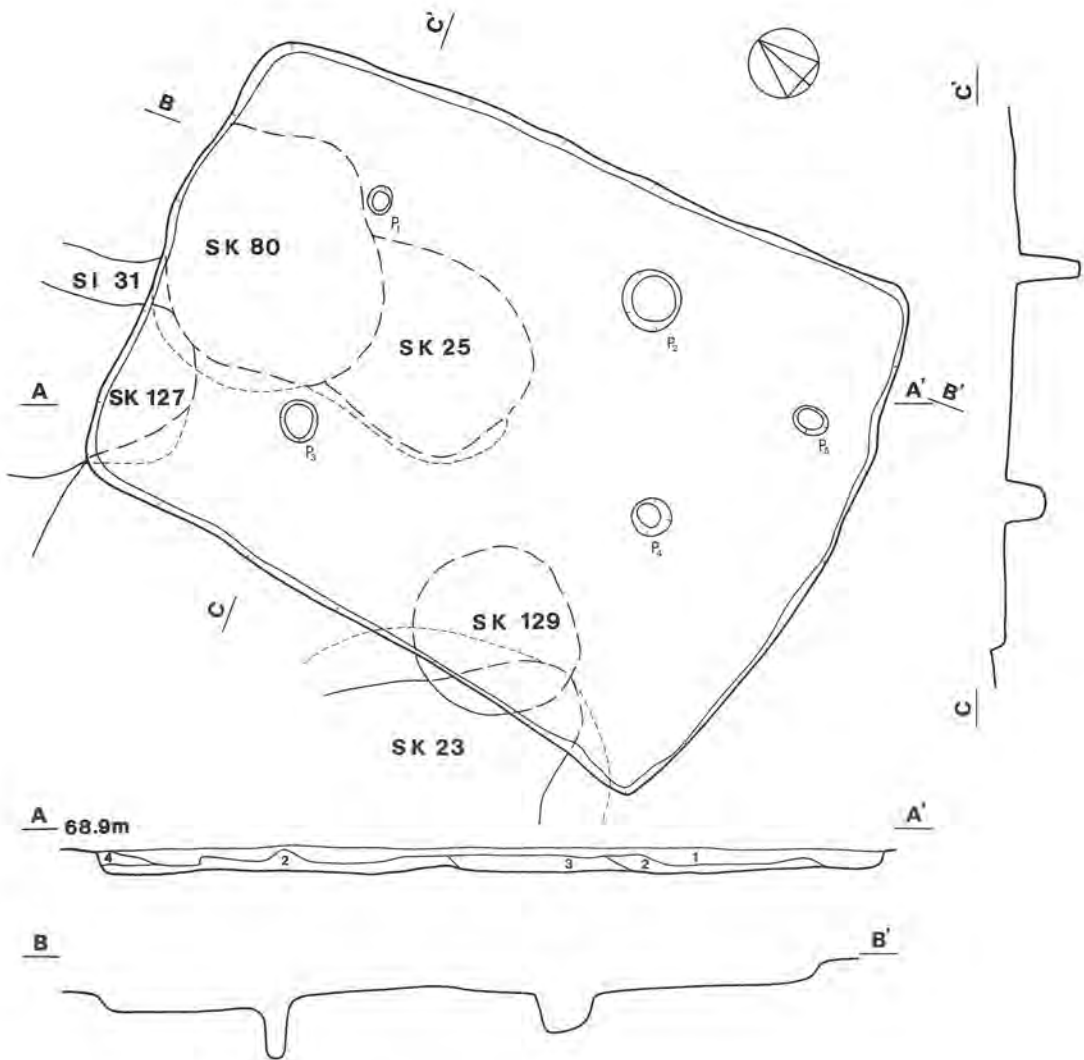
ピット 5か所（P₁～P₅）検出されている。P₁～P₃は、径23～48cm、深さ32～52cmで、主柱穴と思われる。P₄は、径34cm、深さ54cmで、出入り口に伴う梯子ピットと思われる。P₅は、径30cm、深さ32cmであるが、性格は不明である。

炉 検出されない。

覆土 自然堆積。

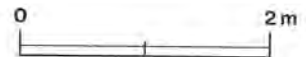
遺物 北部床面からは弥生式土器片が少量出土している。その他覆土上層から流れ込みと思われる縄文式土器や土師器の破片が出土している。

所見 本跡は、第31号住居跡より古く、重複している全ての土坑より新しい。遺構の形態や出土遺物等から弥生時代後期以降に構築された住居跡と推定される。



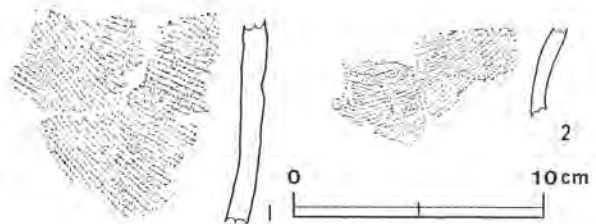
土層解説

- 1 暗褐色 炭化物・ローム中ブロック少量、ローム小ブロック多量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック多量、ソフトローム
- 3 黒褐色 炭化物・ローム中ブロック少量、ローム小ブロック多量
- 4 褐色 ハードローム



第64図 第30号住居跡実測図

第65図は、第30号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。1は胴部片で、単節LRの回転縄文が施されている。2は頸部片で、単節LRの回転縄文が施されている。



第65図 第30号住居跡出土遺物拓影図

第36号住居跡（第66図）

位置 調査区の北部西寄り，B1f₈区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北西部は，第12号住居跡の南東部に掘り込まれている。

規模と平面形 第12号住居跡に掘り込まれて確認できないが，長軸2.76m，短軸（1.48）mで，隅丸長方形を呈するものと推定される。

長軸方向 [N - 65° - E。]

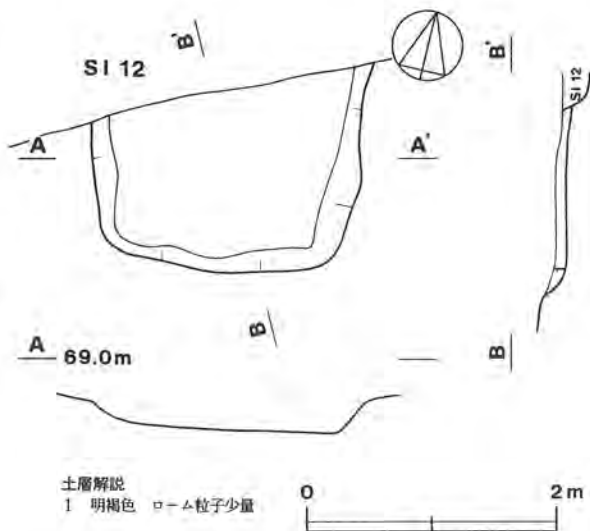
壁 壁高17～27cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ローム質で平坦である。全体的によく踏み固められている。

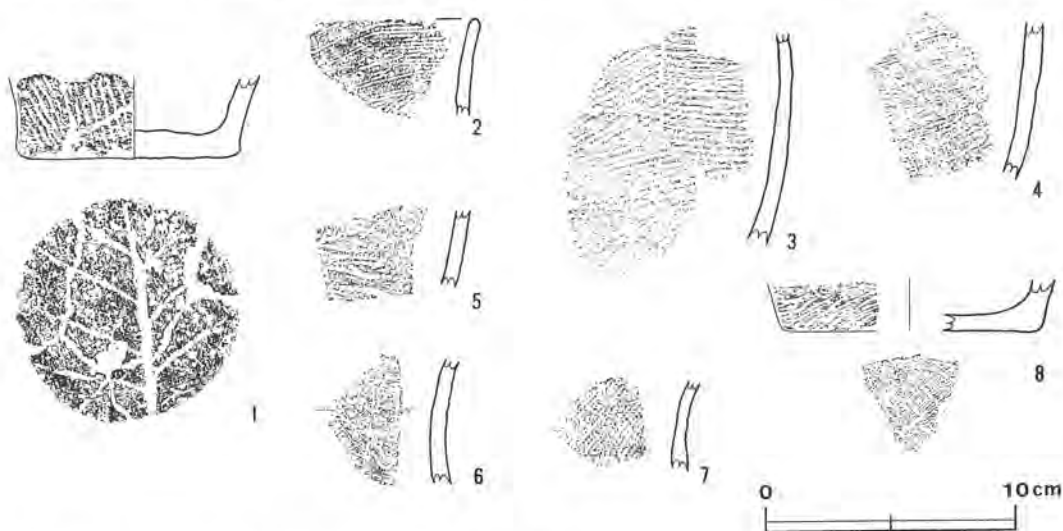
覆土 自然堆積。

遺物 中央部床面直上から弥生式土器片が少量出土している。第67図の1は壺形土器の底部で南部床面から正位の状態出土している。その他覆土上層から流れ込みと思われる縄文式土器片や土師器片が出土している。

所見 本跡は，第12号住居跡より古く，この住居跡に掘り込まれているため，柱穴や炉を検出することができなかったが，遺物から弥生時代後期以降に構築された住居跡と思われる。



第66図 第36号住居跡実測図



第67図 第36号住居跡出土遺物実測・拓影図

第 36 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第 67 図 1	壺形土器 ※生土器	B (3.3) C 8.2	底部片。平底で、底部に木葉痕が見られる。胴部は外傾気味に立ち上がる。胴部外面に撚糸文が施されているが、磨滅している。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P259 PL13 10% 南部床面直上

2 は口縁部片で、口縁部に付加条一種の縄文が、口唇部に縄文原体の回転圧痕が施されている。3 は胴部片で、付加条二種の縄文が施されている。4・5 は胴部片で、付加条一種の縄文が施されている。6 は頸部片で、櫛描波状文と櫛描格子目文が施されている。7 は頸部片で、付加条一種の縄文と櫛描文が施されている。8 は底部片で、底部に布目痕が見られ、胴部下端には付加条一種の縄文が施されているが、磨滅している。

第 4 節 古墳時代の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

当調査区から検出された古墳時代の住居跡は、30 軒である。これらの住居跡は、調査区全体から検出されているが、北部から中央部にかけて特に集中して、しかも重複して検出されている。遺物は、五領期から鬼高期に比定される土師器の坏、埴、甕、甗や壺等であり、須恵器は坏や甕等である。

第 1 号住居跡（第 68 図）

位置 調査区の南部、C2j8 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北壁中央部は第 108 号土坑に、南東部は第 2 号掘立柱建物跡の北西部にそれぞれ掘り込まれている。中央部西寄りには第 136 号土坑と、東壁中央部は第 148 号土坑とそれぞれ重複している。

規模と平面形 長軸 7.78 m、短軸〔7.40〕m の方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N - 29° - W。

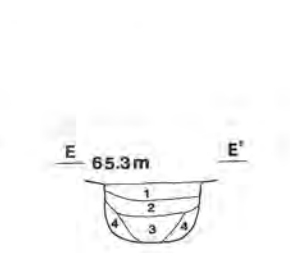
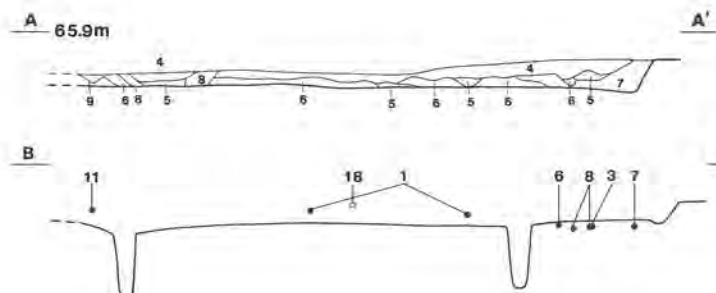
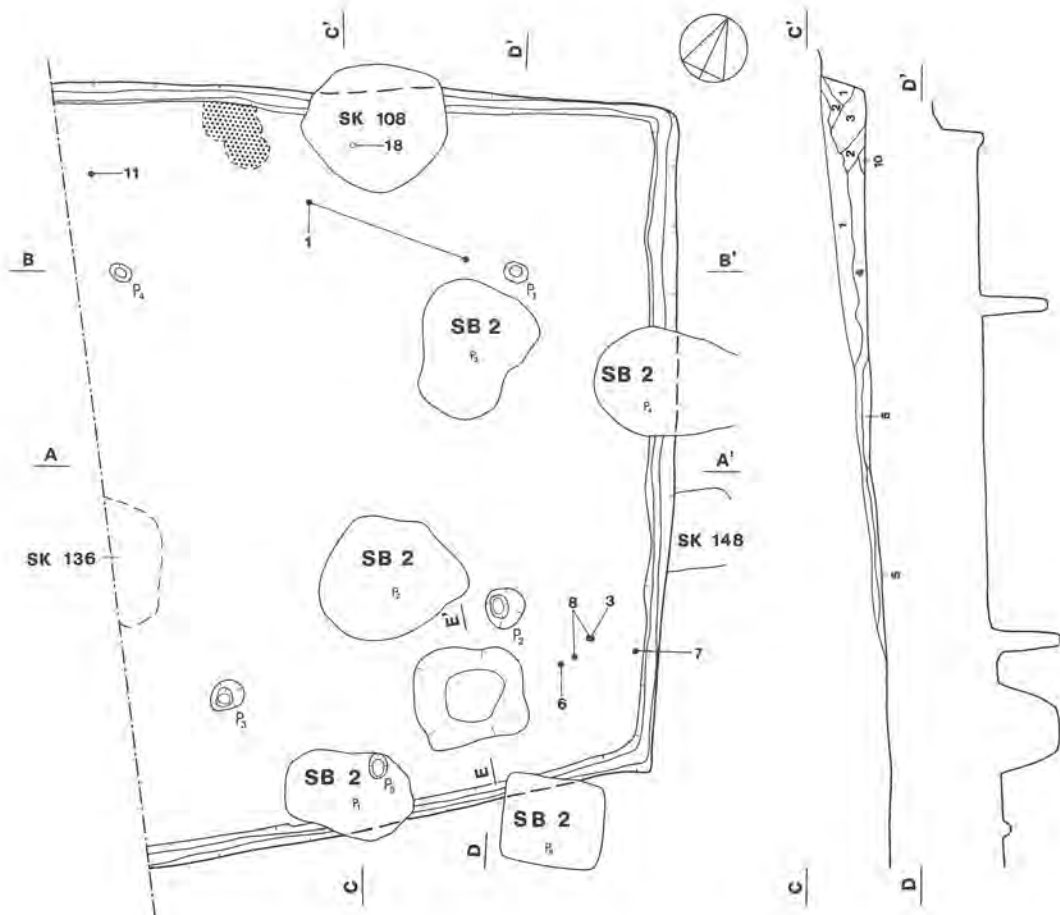
壁 壁高 45 ~ 61 cm で、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅 18 ~ 22 cm、深さ 6 ~ 10 cm、断面形状は皿状を呈し、壁下を全周している。

床 ほぼ平坦で、柱穴を結んだ線の内側はよく踏み固められている。

ピット 5 か所 (P₁ ~ P₅) 検出されている。P₁ ~ P₄ は、径 20 ~ 46 cm、深さ 68 ~ 74 cm で、主柱穴と思われる。P₅ は、径 28 cm、深さ 65 cm で、出入り口に伴う梯子ピットと思われる。

貯蔵穴 南東壁際中央部からやや東コーナー寄りに検出されている。平面形は長軸 114 cm、短軸 100 cm の不整形を呈し、断面形は深さ 64 cm の逆台形状を呈している。



住居跡土層解説

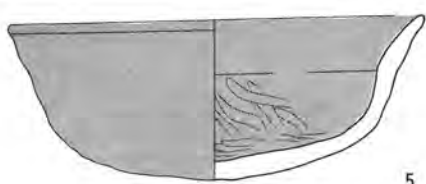
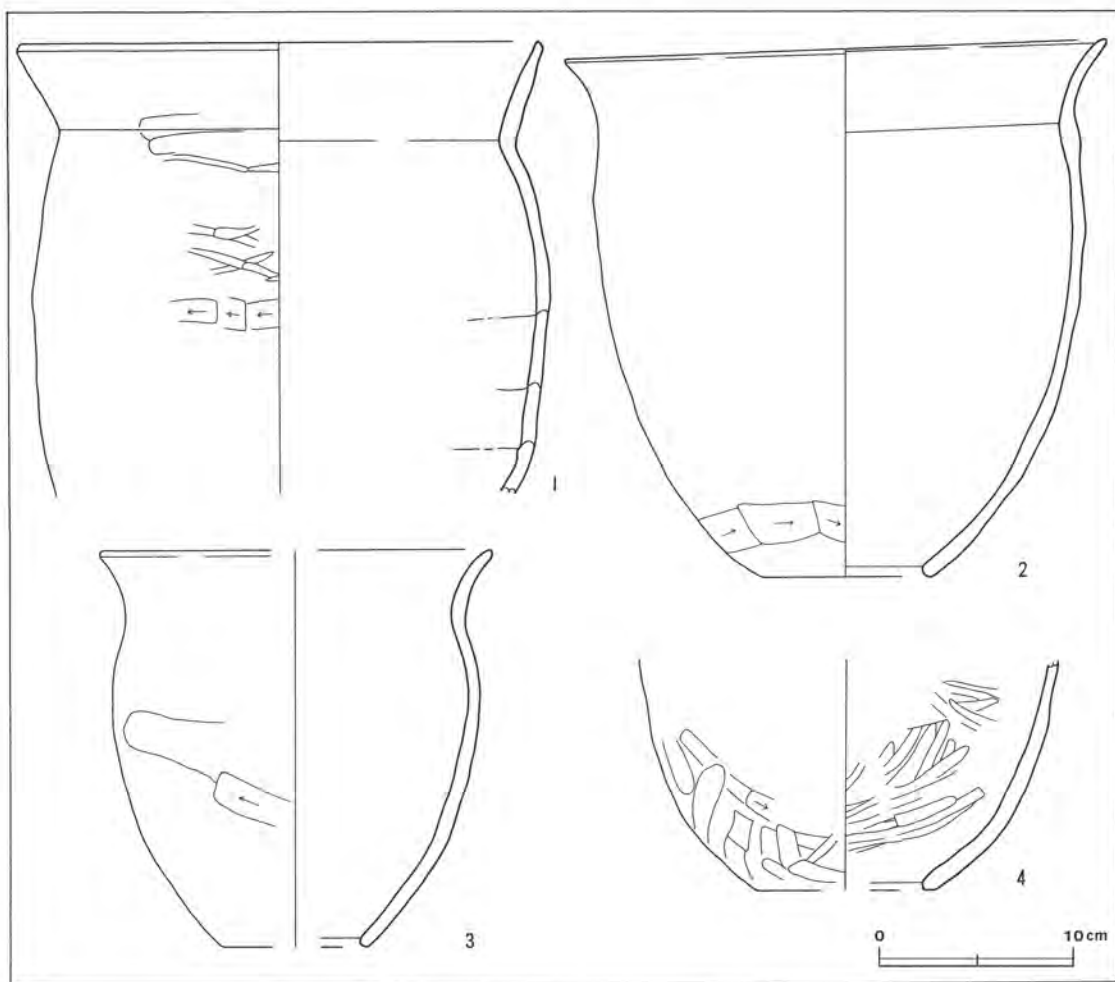
- 1 暗褐色 焼土小ブロック・炭化物少量, ローム小ブロック多量
- 2 黒褐色 焼土粒子・炭化物少量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 3 黒褐色 焼土小ブロック中量, 炭化粒子少量, ローム小ブロック多量
- 4 暗褐色 ローム粒子・バミス多量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量, バミス多量
- 6 黒褐色 焼土中ブロック中量, ローム粒子・バミス小ブロック多量
- 7 暗赤褐色 焼土小ブロック・ローム小ブロック多量, バミス中量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック中量, バミス小ブロック多量
- 9 暗褐色 焼土小ブロック・ローム粒子中量, バミス多量
- 10 灰褐色 砂質粘土粒子多量

貯蔵穴土層解説

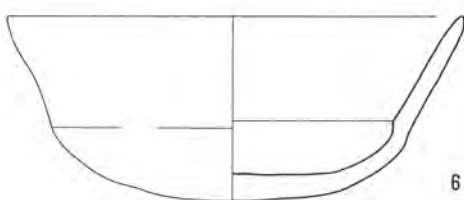
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 3 黒褐色 炭化物・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 4 暗褐色 炭化物中量, ローム小ブロック多量



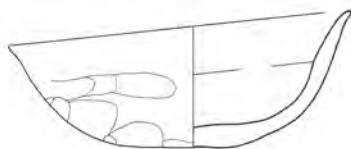
第 68 図 第 1 号住居跡実測図



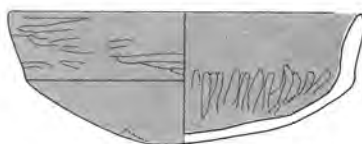
5



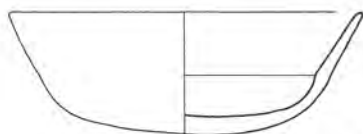
6



7



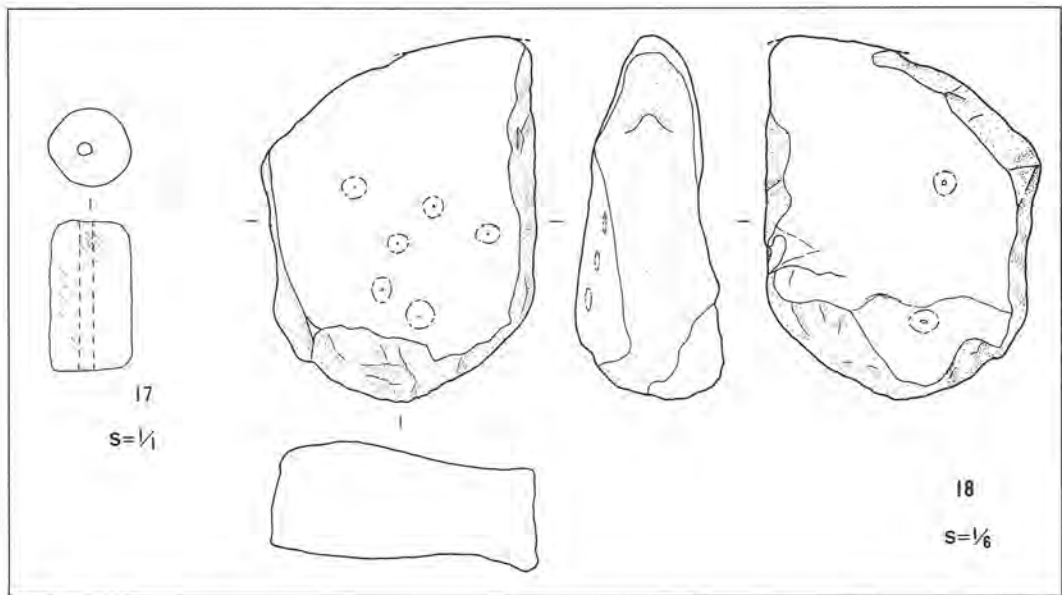
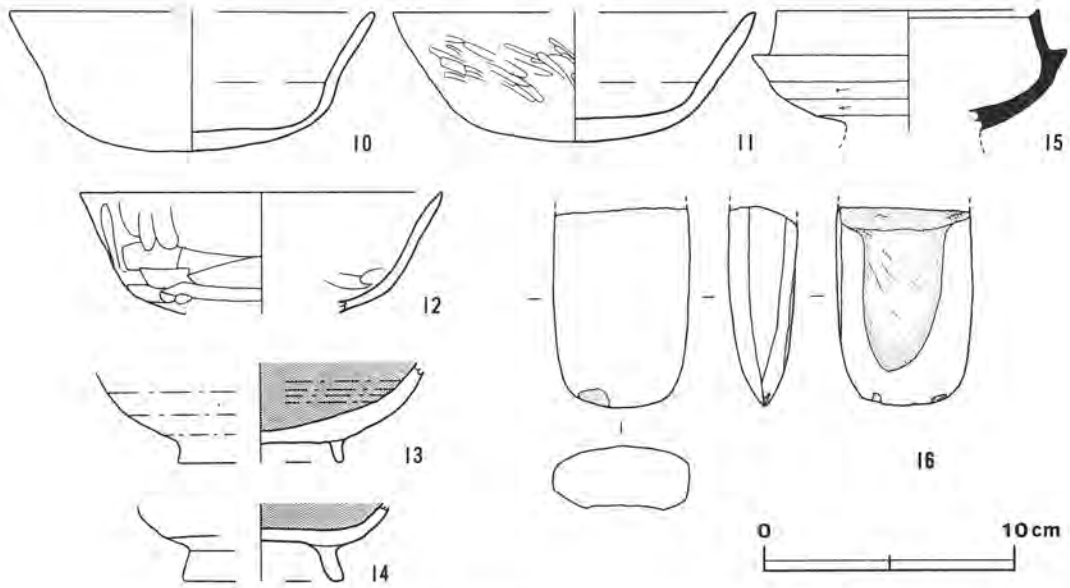
9



8



第 69 图 第 1 号住居跡出土遺物実測図(1)



第70図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

竈 第108号土坑に切られていて不明であるが、北西壁中央部付近から焼土や焼けた凹石が検出されたこと等から、北西壁中央部に付設されていたものと推定される。

覆土 自然堆積を呈するが、一部後世の攪乱を受けている。

遺物 覆土中・下層や床面から土師器の甕や坏の破片等が多数出土しているが、東コーナーの床面から特に集中して出土している。第69図1は甕で北西部床面から、7は坏で東コーナー床面からそれぞれつぶれた状態で出土している。5、9、第70図10は坏で貯蔵穴の覆土下層から出

土している。北西部覆土中層から管玉が出土している。

所見 本跡は、第108号土坑、第2号掘立柱建物跡より古く、床面や覆土下層から炭化材や焼土が検出されていること等から焼失家屋と思われる、遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住居跡と思われる。

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第69図 1	甕 土師器	A 27.6 B (24.1)	胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で「く」の字状に外反する。	胴部外面横位のヘラ削り及びヘラ磨き。頸部外面横ナデ。口縁部内・外面横ナデ。胴部内面に輪積み痕有り。胴部外面煤付着。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P1 50% 北西部床面直上
2	甕 土師器	A 28.2 B 28.6 孔径 7.9	無底式の甕。胴下半部は内彎気味に立ち上がり、胴中央部から頸部にかけて内彎気味に立ち上がる。	胴部内・外面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面煤付着。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P2 PL4 80% 南部覆土
3	甕 土師器	A (20.4) B 21.0 孔径 (7.2)	無底式の甕。胴下半部は内彎気味に立ち上がり、胴中央部から頸部にかけて内彎気味に立ち上がる。	胴中央部外面ヘラ削り後ナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P3 40% 東コーナー床面直上
4	甕 土師器	B (12.2) 孔径 (8.2)	無底式の甕。胴下半部は内彎気味に立ち上がる。	胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P4 25% 貯蔵穴覆土
5	坏 土師器	A 16.6 B 6.6	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は緩く外反する。	体部内面及び口縁部ヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒 橙色 普通	P5 PL4 100% 貯蔵穴覆土
6	鉢 土師器	A 18.2 B 7.4	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は緩く外反する。体部と口縁部との境の内面に弱い稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。外面二次焼成を受け、口縁部外面一部煤付着。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P6 PL4 100% 東コーナー床面直上
7	坏 土師器	A 13.7 B 5.6	扁平な丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は緩く外反する。	体部外面ヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	P7 60% 東コーナー床面直上
8	坏 土師器	A 14.2 B 4.9	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は緩く外反する。体部と口縁部との境には内面に弱い稜を有する。	口縁部内・外面弱い横ナデ。	砂粒 明褐色 普通	P8 80% 東コーナー床面直上
9	坏 土師器	A 14.2 B 5.3	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は緩く外反する。体部と口縁部との境には外面に弱い稜を有する。	底部ヘラ削り。体部ヘラ磨き。口縁部外面ヘラ磨き。内・外面赤彩。	砂粒 橙色 普通	P9 PL4 60% 貯蔵穴内覆土
第70図 10	坏 土師器	A (14.7) B 5.7	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は緩く外反する。体部と口縁部との境には内面に弱い稜を有する。	口縁部内面弱い横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P10 40% 貯蔵穴内覆土
11	坏 土師器	A (14.6) B 5.3	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は緩く外反する。	体部外面から口縁部にかけてヘラ磨き。体部外面から口縁部にかけて煤付着。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P11 60% 北西部覆土
12	坏 土師器	A 14.6 B (4.9)	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は緩く外反する。	体部外面ヘラ削り。口縁部外面ヘラナデ、内面横ナデ。体部内面ヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	P12 40% 東部覆土
13	高台付坏 土師器	B (3.9) D (6.6) E 0.9	平底。「ハ」の字状に開く短い高台が付く。体部は内彎しながら立ち上がる。	水挽き成形後横ナデ。内面黒色処理。貼り付け高台。	長石 浅黄褐色 普通	P14 30% 北部覆土
14	高台付坏 土師器	B (3.1) D (6.4) E 1.5	平底。「ハ」の字状に開く高台が付く。	高台の内・外面横ナデ。内面黒色処理。貼り付け高台。	砂粒・石英 にぶい黄色 普通	P15 10% 東部覆土

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第70図 15	高坏 須恵器	A 10.6 B (4.9)	脚部欠損。坏部は内彎しながら立ち上がり、口縁端部は内側に段を有する。受部はやや上方に伸びる。立ち上がりは、内傾して高く立ち上がる。	水挽き成形後横ナデ。坏底部回転へら削り後ナデ。	砂粒・長石 灰色 普通	P13 40% 覆土 PL4

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第70図 16	磨製石斧	砂岩	(8.0)	5.5	2.8	(199.9)	北西部覆土	Q1 流れ込み PL4
17	管玉	滑石	2.0	1.1	1.0	2.7	北西部覆土	Q2 孔径0.2cm PL4
18	凹石・石皿	砂岩	29.0	22.1	11.9	(8370.0)	北西壁際中央部床面直上	Q3 表裏両面使用。 PL4

第4号住居跡 (第71図)

位置 調査区の南側中央部、C2e5区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北東部は第38号住居跡の南西部や第109号土坑をそれぞれ掘り込み、中央部から南部にかけて第1号掘立柱建物跡に掘り込まれている。北西壁北コーナー寄りには第99号土坑と重複している。

規模と平面形 長軸 8.30 m、短軸 8.08 m の方形を呈している。

長軸方向 N-31°-E。

壁 壁高 12～66 cm で、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅 14～22 cm、深さ 3～8 cm、断面形は皿状を呈し、壁下を全周している。

床 ほぼ平坦で、柱穴を結んだ線の内側はよく踏み固められている。

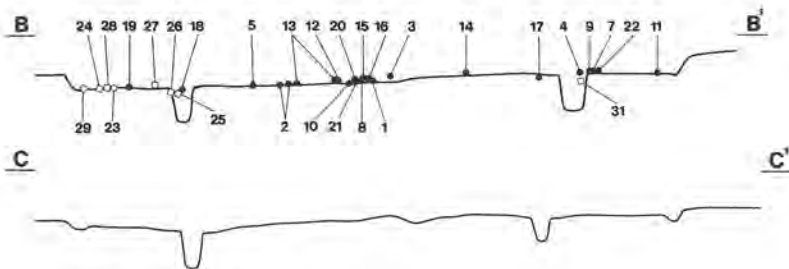
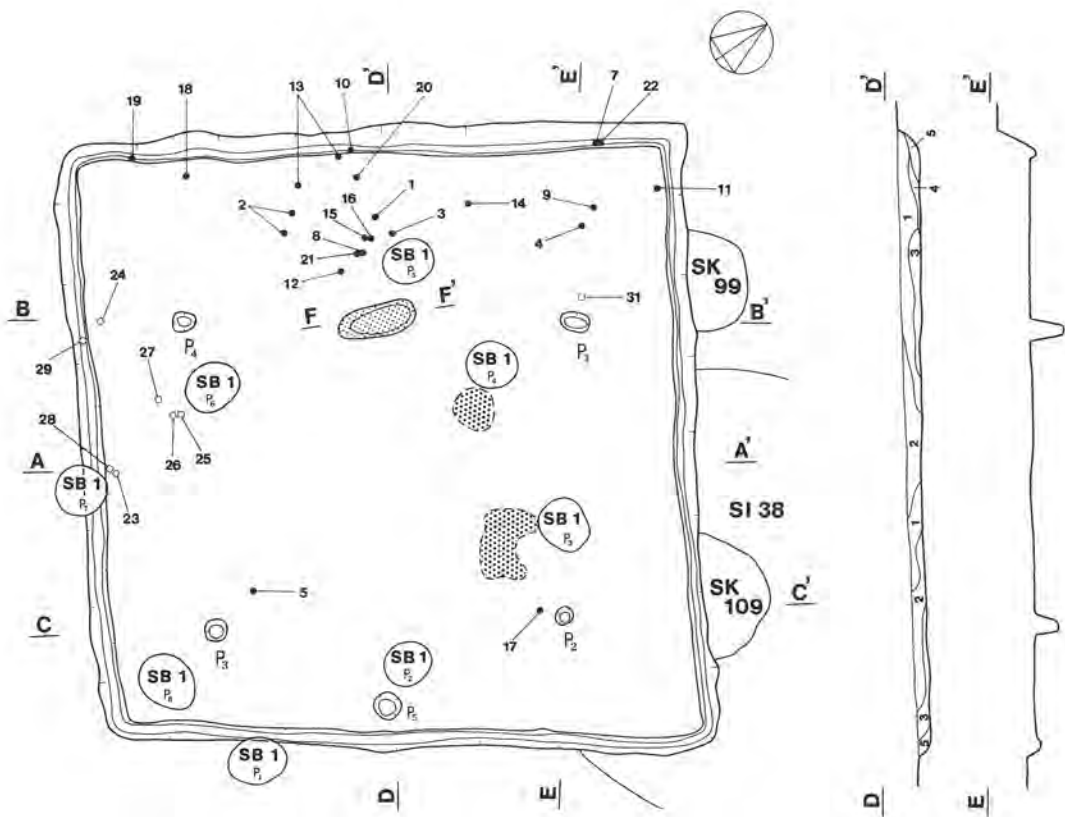
ピット 5か所 (P1～P5) 検出されている。P1～P4は、径 26～38 cm、深さ 30～50 cm で、支柱穴と思われる。P5は、径 38 cm、深さ 30 cm で、出入り口に伴う梯子ピットと思われる。

炉 中央部西寄りに設けられた地床炉で、平面形は長径 104 cm、短径 44 cm の楕円形を呈している。炉床は、床を 2～3 cm 程掘り窪められている。

覆土 自然堆積。

遺物 全域の床面直上から土師器片が多量に出土しているが、特に北西部床面を中心に出土している。北西部床面から第72図1の甕、第73図8の埴及び13や14の高坏はそれぞれ横位の状態で、9の埴は逆位の状態で、12の高坏は正位の状態で、第72図7の埴は北コーナーから横位の状態で出土している。南西部床面からは石製模造品(剣、鏡、管玉)、石器の石鏃等が出土している。

所見 本跡は、第1号掘立柱建物跡より古く、第38号住居跡・第109号土坑より新しい。石製模造品が多数出土していることから、祭祀に関係する住居跡の可能性が考えられ、遺構の形態や遺物等から古墳時代中期の住居跡と思われる。



住居跡土層解説

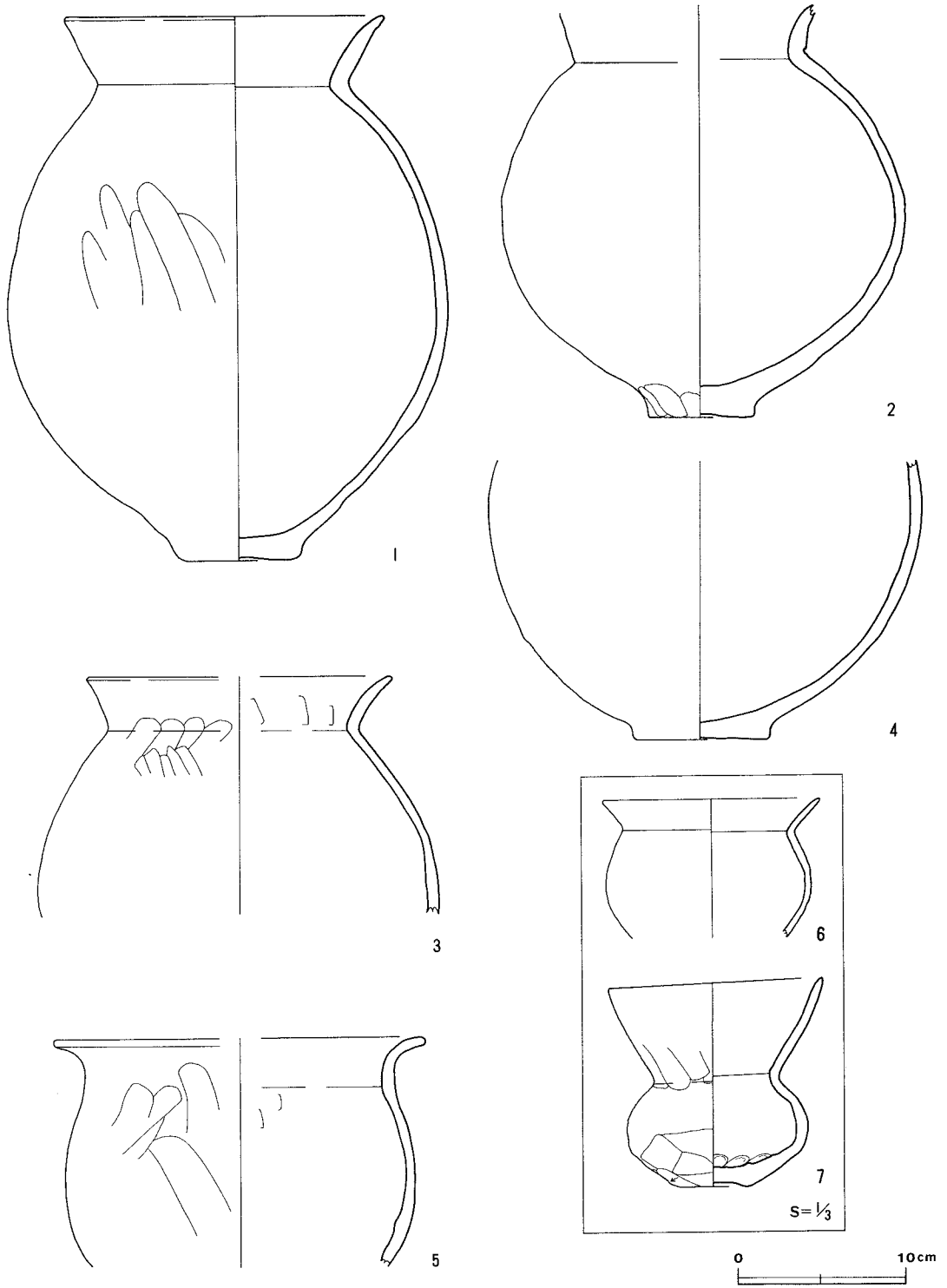
- 1 暗褐色 ローム小ブロック多量
- 2 極暗褐色 焼土粒子・炭化物少量, ローム粒子多量
- 3 黒褐色 炭化物少量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 5 黒褐色 焼土小ブロック・炭化物少量, ローム小ブロック多量

炉土層解説

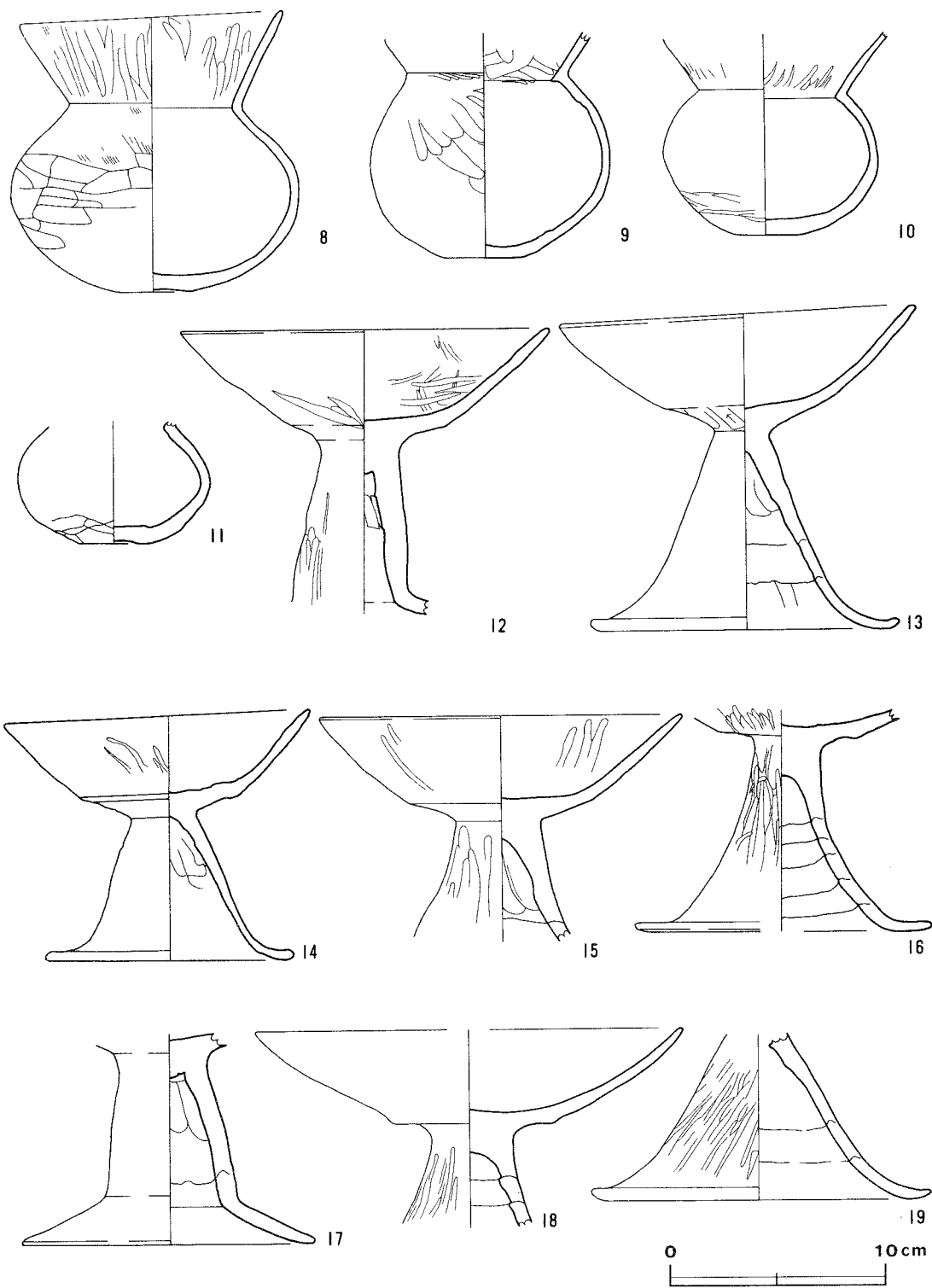
- 1 黒褐色 焼土粒子少量, ローム中ブロック・ローム小ブロック多量



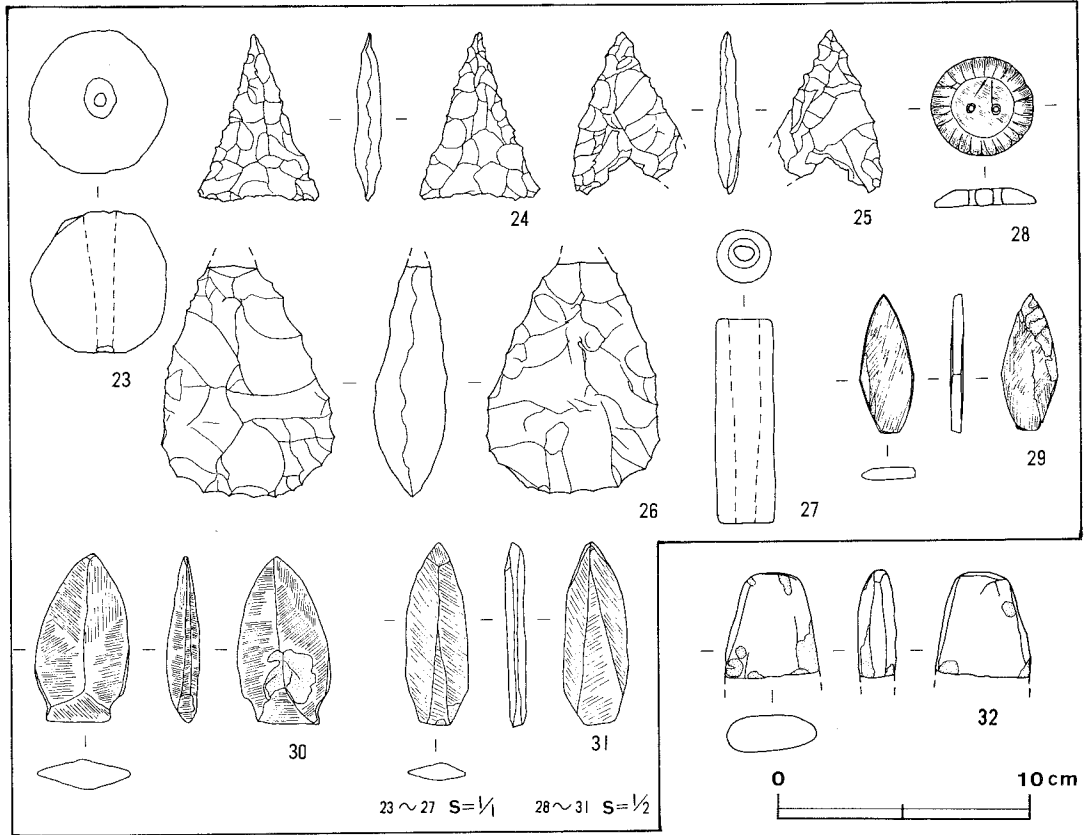
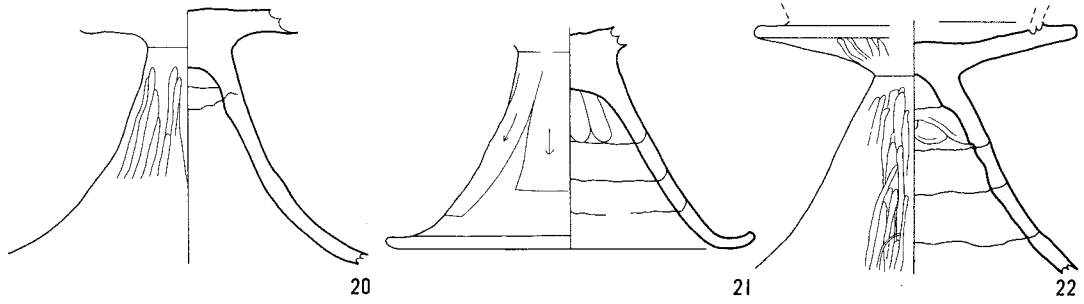
第 71 図 第 4 号住居跡実測図



第 72 图 第 4 号住居跡出土遺物実測図(1)



第 73 图 第 4 号住居跡出土遺物実測図(2)



第74図 第4号住居跡出土遺物実測図(3)

第4号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 1	甕 土師器	A 19.2	突出した平底。胴部はやや長胴 気味を呈し、口縁部は頸部から 「く」の字状に立ち上がり、上 位でやや外反する。	胴部外面縦位のヘラナデ。口縁 部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 にふい黄褐色 普通	P32 PL7 85% 北西部床面直上
		B 33.5				
		C 6.4				
2	甕 土師器	B (25.4)	突出した平底。胴部は球形状を 呈し、最大径を中位に持つ。口 縁部は外傾して立ち上がる。	底部外面ヘラ削り。口縁部内・ 外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 にふい褐色 普通	P33 PL7 70% 北西部床面直上
		C 6.4				

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 3	甕 土師器	A (18.6) B (14.6)	胴部から口縁部にかけての破片。 胴部は球形を呈し、口縁部は 頸部から「く」の字状に立ち上 がる。	胴部から頸部にかけてヘラナデ。 口縁部外面横ナデ、内面ヘラナ デ。	砂粒・長石・石英・ 雲母・パミス 橙色 普通	P34 50% 北西部床面直上
4	甕 土師器	B (17.1) C 8.4	底部から胴部にかけての破片。 突出した平底。胴部は球形を 呈する。	内・外面とも磨滅が著しい。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	P35 40% 北コーナ 床面直上
5	甕 土師器	A (22.7) B (14.0)	胴部から口縁部にかけての破片。 胴部は球形を呈し、口縁部は 垂直に近く立ち上がり、上端部 で外反して開く。	胴部外面縦位のヘラナデ、胴部 内面横位のヘラナデ。口縁部 内・外面横ナデ。胴部内面の一 部磨滅が著しい。	砂粒・石英 橙色 普通	P36 30% 南コーナ 床面直上
6	小形甕 土師器	A 10.0 B (6.4)	胴部から口縁部にかけての破片。 胴部は球形を呈し、口縁部は 頸部から「く」の字状に立ち上 がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 赤橙色 普通	P37 50% 北西部覆土
7	埴 土師器	A 10.0 B 9.6 C 3.2	わずかな上げ底。胴部は偏平な 球形を呈する。口縁部は外傾 して立ち上がり、上位でやや内 彎する。	胴下半部外面ヘラ削り。頸部外 面縦位のヘラナデ。口縁部内・ 外面横ナデ。内面磨滅が著しい。	砂粒・長石 浅黄橙色 普通	P38 PL7 100% 北コーナ 壁溝直上
第73図 8	埴 土師器	A 12.3 B 13.3 C 3.3	わずかな上げ底。胴部は偏平な 球形を呈する。口縁部は外傾 して立ち上がる。	胴中央部外面横位のヘラナデ。 胴上半部外面弱いヘラ磨き。口 縁部内・外面丁寧なヘラ磨き。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P39 PL7 95% 北西部床面直上
9	埴 土師器	B (10.6) C 3.6	平底。胴部は球形を呈し、最 大径を中位に持つ。口縁部一部 欠損。	胴中央部外面斜位のヘラナデ。 頸部外面ヘラ磨き。口縁部内面 ヘラナデ。	砂粒・長石・石英・ パミス にぶい橙色 普通	P40 PL7 90% 北コーナ 床面直上
10	埴 土師器	B (19.5) C 2.9	平底。胴部は偏平な球形を呈 する。口縁部外傾して立ち上 がるが、一部欠損。	胴下半部から胴中央部の外面に かけて丁寧な横位のヘラ磨き。 口縁部外面横ナデ後弱いヘラ磨 き。口縁部内面横ナデ後丁寧な ヘラ磨き。一部煤付着。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P41 PL7 70% 北西壁溝直上
11	埴 土師器	B (5.7) C 3.2	わずかな上げ底。胴部は偏平な 球形を呈し、最大径を中位に 持つ。口縁部欠損。	胴下半部ヘラ削り。一部煤付着。	砂粒・長石 にぶい黄橙色 普通	P42 PL7 60% 北コーナ 床面直上
12	高 坏 土師器	A 17.2 B (13.5) E (8.3)	脚部は円筒状を呈するが、裾部 欠損。坏部は外傾して立ち上 がり、大きく開く。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面 縦位のヘラナデ。坏部内・外面 ヘラ磨き、一部磨滅。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P45 PL7 75% 北西部床面直上
13	高 坏 土師器	A 16.5 B 15.3 D 14.4 E 9.3	脚部はラップ状を呈し、裾部で 水平近くに広がり、端部でわず かに上方に向かう。坏部は下位 に弱い稜を持ち、内彎気味に立 ち上がる。	脚部内面ヘラナデ、輪積み痕有 り。坏底部ヘラ削り。坏部内面 磨滅が著しい。	砂粒・長石・石英・ スコリア 橙色 普通	P44 PL7 90% 北西部床面直上
14	高 坏 土師器	A 14.3 B 11.8 D 11.6 E 7.0	脚部は円筒状を呈し、裾部で水 平近くに広がる。坏部は下位に 弱い稜を持ち、外傾して開く。	脚部内面ヘラナデ。坏部は横ナ デ後ヘラ磨き。坏部内面は横ナ デ。坏部内面磨滅が著しい。	砂粒・長石 浅黄橙色 普通	P43 PL7 95% 北西部床面直上
15	高 坏 土師器	A 16.8 B (10.6) E (5.7)	脚部はラップ状を呈するが、裾 部欠損。坏部は下位に稜を持ち、 外傾して立ち上がり、大きく開 く。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面 上位指ナデ、輪積み痕有り。坏 部外面ヘラ磨き、内面丁寧なヘ ラ磨き。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P46 65% 北西部床面直上
16	高 坏 土師器	B (10.4) D (13.8) E 8.8	脚部はラップ状を呈し、裾部で 水平近くに広がり、端部でわず かに上方に向かう。坏部は下位 に稜を有するが、坏上半部欠損。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面 輪積み痕有り。坏部外面ヘラ磨 き。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P49 50% 北西部床面直上
17	高 坏 土師器	B (9.9) D 13.7 E 8.7	坏部欠損。脚部は円筒状を呈し、 裾部で大きく開く。	脚部内面上位指ナデ、輪積み痕 有り。裾部は内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 明赤褐色 普通	P51 50% 東コーナ 付近床面直上

図版番号	器種	法量 (cm)	器種の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第73図 18	高坏土師器	A (20.0) B (10.4) E (4.4)	脚部はラッパ状を呈するが、脚下半部以下欠損。坏部は下位に稜を有し、内彎気味に大きく開く。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・スコリア 橙色 普通	P48 55% 西コーナー床面直上
19	高坏土師器	B (7.8) D 15.7 E 7.8	坏部欠損。脚部はラッパ状を呈し、裾部で大きく開き、端部でわずかに上方に向かう。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面輪積み痕有り。	砂粒・長石 橙色 普通	P52 50% 西コーナー壁溝直上
第74図 20	高坏土師器	B (10.4) E (8.8)	脚部はラッパ状を呈するが、裾部は欠損。坏底部のみで欠損。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P50 50% 北西部床面直上
21	高坏土師器	B (8.9) C 14.6 E 7.9	坏部欠損。脚部はラッパ状を呈し、裾部で大きく開き、端部でわずかに上方に向かう。	脚部外面縦位のヘラ削り、内面上部指ナデ、輪積み痕有り。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P53 45% 北西部床面直上
22	裝飾器台土師器	B (10.1) E (8.0)	脚部はラッパ状を呈するが、裾部は欠損。器受部はおおきく外傾して立ち上がるが、口縁部の裝飾用の段は欠損。	脚部外面縦位のヘラ磨き、内面縦位のヘラナデ、輪積み痕有り。器受部外面縦位のヘラ磨き。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P47 60% 北コーナー壁溝直上

図版番号	器種	法量				出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第74図 23	球状土錘	1.9	1.8		5.7	床面直上	DP1 孔径0.4cm PL7

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第74図 24	石鏃	チャート	2.2	1.6	0.4	0.9	南西部床面直上	Q6 PL7
25	石鏃	チャート	2.1	1.4	0.4	(0.8)	南西部床面直上	Q7 PL7
26	石鏃	チャート	(2.5)	2.3	1.0	(6.0)	南西部床面直上	Q8 PL7
27	管玉	滑石	2.7	0.7		2.2	南西部床面直上	Q10 孔径0.3cm PL7
28	双孔円板	滑石	2.6	2.7	0.4	4.3	南西部床面直上	Q11 孔径0.1と0.2cmの2孔 PL7
29	石剣	滑石	3.7	1.5	0.3	2.7	南西部壁溝直上	Q14 PL7
30	石剣	滑石	4.5	2.5	0.9	9.9	南西部床面直上	Q12 PL7
31	石剣	滑石	4.9	1.7	0.5	5.3	北東部床面直上	Q13 PL7
32	磨製石斧	砂岩	(4.3)	3.6	1.5	(34.5)	南東部覆土	Q9 刃部欠損 流れ込み PL7

第7号住居跡（第75図）

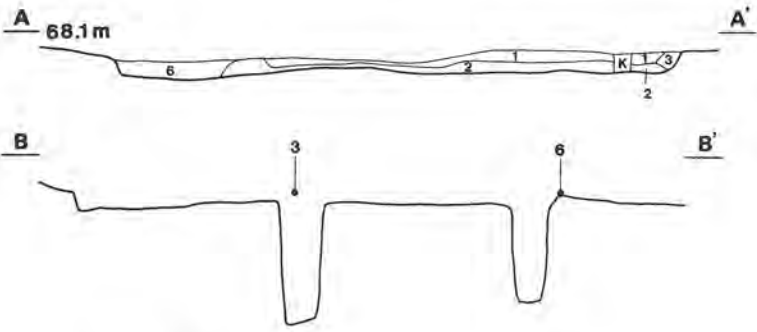
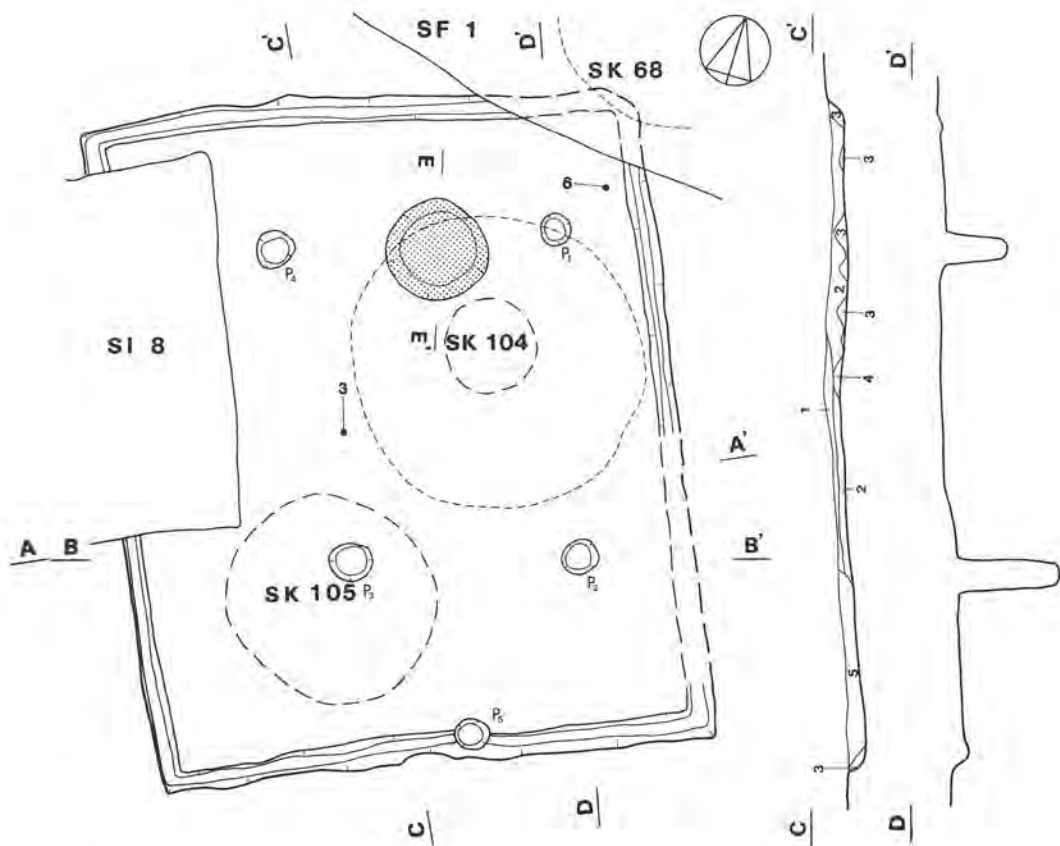
位置 調査区の中央部西寄り、C2b1区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南西壁の西コーナー寄りには第8号住居跡の北東部に、北コーナーは第1号道路跡に掘り込まれ、中央部北寄りには第104号土坑を、中央部南寄りには第105号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 5.44 m、短軸 4.55 m の方形を呈している。

長軸方向 N - 28° - E。

壁 壁高 9 ~ 15 cm で、ほぼ垂直に立ち上がっている。北東壁の東コーナー寄りは攪乱のため、



- 住居跡土層解説
- 1 極暗褐色 ローム粒子多量
 - 2 暗褐色 ローム小ブロック多量
 - 3 褐色 ソフトローム
 - 4 暗赤褐色 焼土大ブロック・焼土小ブロック多量, ローム小ブロック中量
 - 5 黒褐色 ローム中ブロック少量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
 - 6 暗褐色 焼土粒子少量, ローム小ブロック・ローム粒子多量

- 炉土層解説
- 1 暗赤褐色 焼土大ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子多量



第75図 第7号住居跡実測図

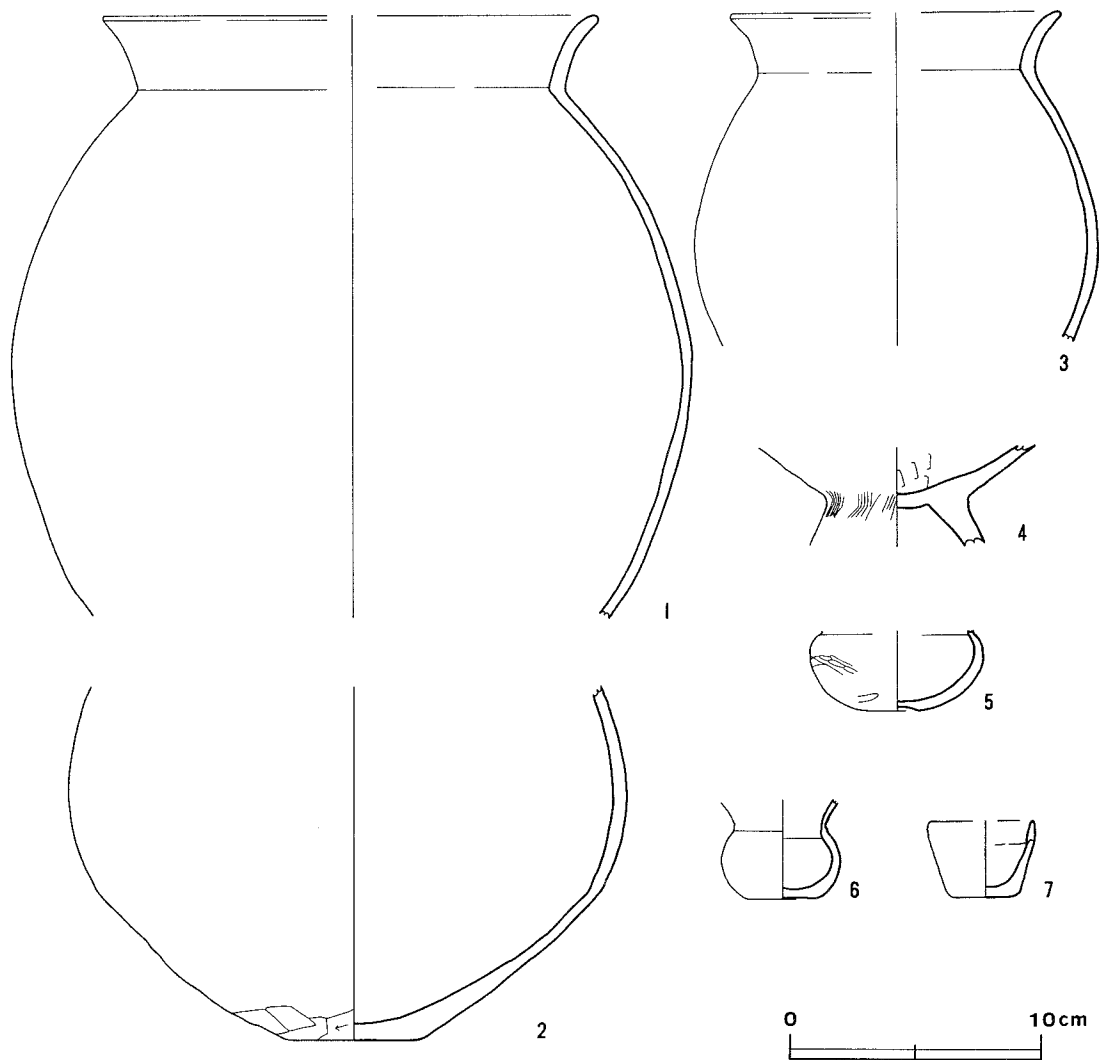
南西壁の西コーナー寄りには第8号住居跡に切られているため確認できなかった。

壁溝 幅10～22 cm, 深さ2～7 cm, 断面形は皿状を呈し, 壁下を回っているが, 北東壁の東コーナー寄りには攪乱のため, 南西壁の西コーナー寄りには第8号住居跡に切られているため, 不明である。

床 ほぼ平坦であるが, 炉の周囲はよく踏み固められている。

ピット 5か所 (P₁～P₅) 検出されている。P₁～P₄は, 径24～34 cm, 深さ48～100 cmで, 主柱穴と思われる。P₅は, 径27 cm, 深さ98 cmで, 出入り口に伴う梯子ピットと思われる。

炉 北部のP₁とP₄を結んだ線上に検出され, 径42 cmの円形を呈する地床炉である。炉床は, 床



第76図 第7号住居跡出土遺物実測図

を 10 cm程掘り窪められ、ロームがレンガ状に赤変硬化している。

覆土 自然堆積。

遺物 土師器片や手捏土器片が炉跡付近を中心に少量出土している。第 76 図 6 の罫は北コーナー床面から逆位の状態で、3 の甕は中央部床面からつぶれた状態で出土している。

所見 本跡は、第 8 号住居跡より古く、第 104・105 号土坑より新しい。遺構の形態や遺物等から古墳時代前期の住居跡と思われる。

第 7 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第76図 1	甕 土師器	A (19.6)	胴部は球形状を呈し、口縁部は頸部から外反して開く。	胴中央部外面へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英にぶい褐色普通	P69 20% 覆土
		B (24.2)				
2	甕 土師器	B (14.7)	平底。胴上半部欠損。胴部は球形状を呈する。	胴下半部へラ削り。内・外面とも磨滅が著しい。	砂粒・石英にぶい橙色普通	P70 30% 覆土
		C 5.4				
3	小形甕 土師器	A (13.0)	底部欠損。胴部は球形状を呈し、口縁部は頸部から外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面一部二次焼成を受けている。	砂粒・長石・石英暗赤褐色普通	P71 15% 中央部床面直上
		B (13.3)				
4	台付甕 土師器	B (4.0)	台部は「ハ」の字状に下方へ開き、胴部は外傾して立ち上がる。	底部外面ハケ目整形。内面へラ当て痕有り。	砂粒・長石・石英にぶい浅黄褐色普通	P72 10% 覆土
5	ミニチュア土器(罫) 土師器	A (6.0)	わずかな上げ底。胴部は内彎しながら立ち上がる。頸部から口縁部欠損。	胴部外面へラ磨き。内面一部磨滅。	砂粒・長石にぶい橙色普通	P73 60% 覆土
		B (3.2)				
		C 1.8				
6	ミニチュア土器(罫) 土師器	B (4.0)	平底。胴部は扁平な球形状を呈し、口縁部は外傾しながら上方へ開く。	底部内面弱い指頭圧痕がみられる。	砂粒 橙色 普通	P74 65% 北コーナー床面直上
		C 2.8				
7	ミニチュア土器 土師器	A (4.2)	平底。胴部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部に至る。底部に径 2 mm、深さ 4 mm の孔有り。	内面に輪積み痕を残す。	砂粒にぶい橙色普通	P75 50% 炉内
		B 3.1				
		C 2.6				

第 9 号住居跡 (第 77 図)

位置 調査区の中央部西寄り、B1j₀ 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南西部は、第 1 号道路跡に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸 5.29 m、短軸 4.95 m の方形を呈している。

長軸方向 N - 77° - E。

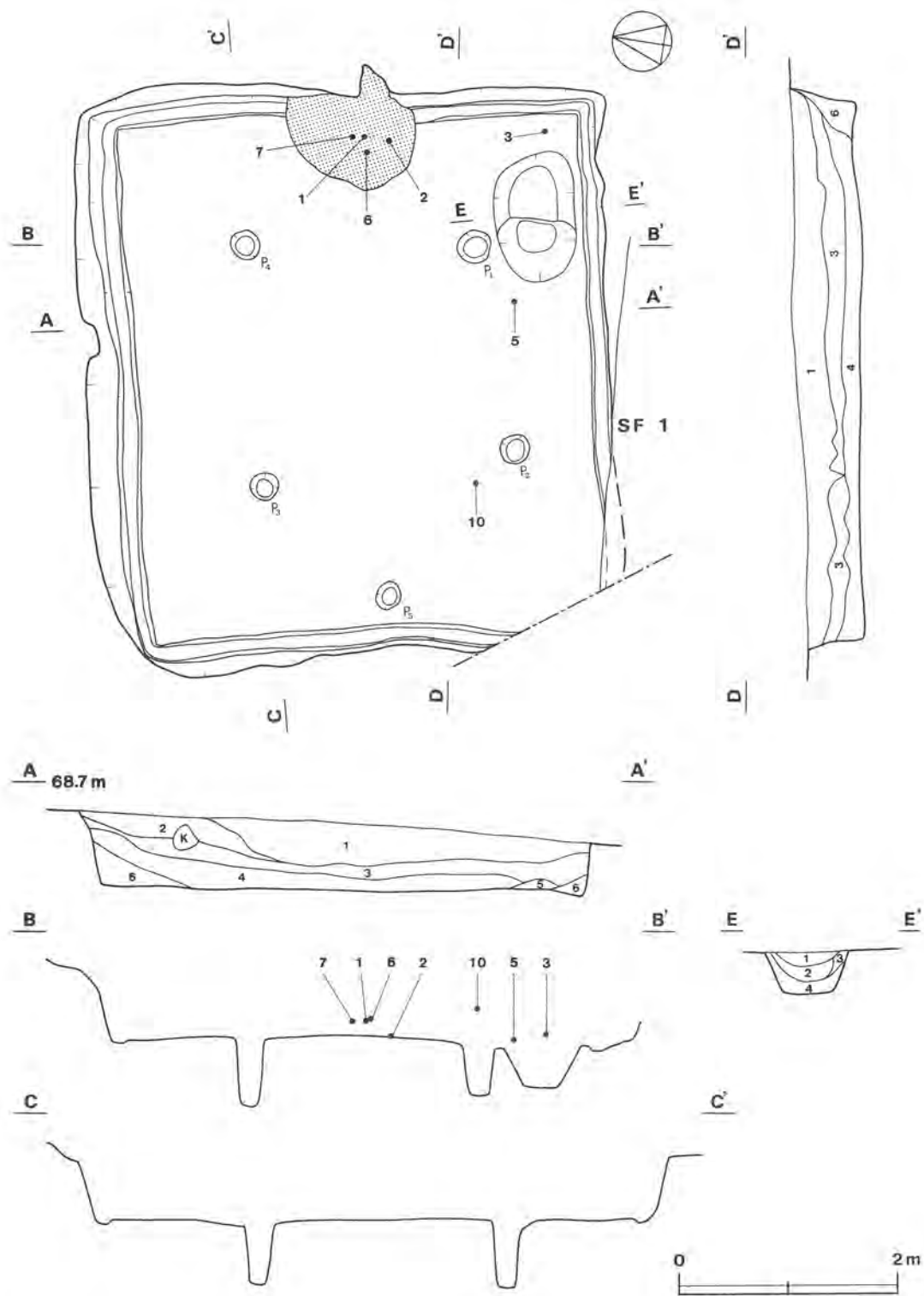
壁 壁高 56 ~ 73 cm で、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅 14 ~ 24 cm、深さ 4 ~ 8 cm、断面形は皿状を呈し、壁下を全周している。

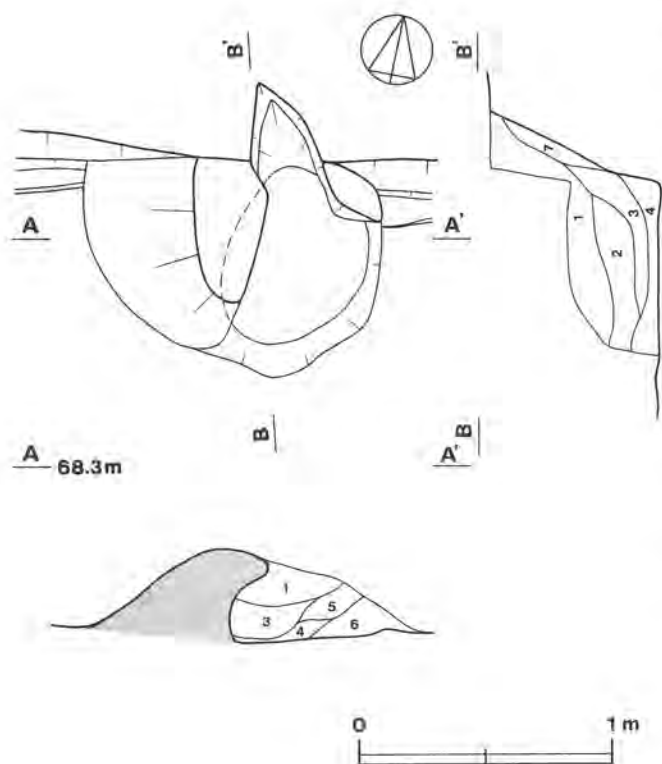
床 ほぼ平坦で、竈付近はよく踏み固められている。

ピット 5 か所 (P₁ ~ P₅) 検出されている。P₁ ~ P₄ は、径 26 ~ 32 cm、深さ 46 ~ 64 cm で、主柱穴と思われる。P₅ は、径 26 cm、深さ 56 cm で、出入り口に伴う梯子ピットと思われる。

貯蔵穴 南東コーナーに検出されている。平面形は長径 120 cm、短径 74 cm の楕円形を呈し、断面形は深さ 38 cm の逆台形状を呈している。



第77图 第9号住居跡実测图



住居跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック多量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 3 褐色 ローム小ブロック多量
- 4 褐色 ローム粒子多量
- 5 赤褐色 焼土大ブロック・焼土中ブロック・焼土小ブロック・焼土粒子多量
- 6 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量

竈土層解説

- 1 灰褐色 焼土中ブロック中量, ローム粒子多量
- 2 黒褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロック中量, 焼土粒子・ローム粒子・バミス多量
- 3 暗赤褐色 焼土中ブロック中量, 焼土小ブロック・ローム小ブロック多量, 粘土少量
- 4 暗赤褐色 焼土中ブロック中量, 焼土小ブロック・ローム小ブロック・バミス多量
- 5 灰褐色 焼土大ブロック中量, 焼土小ブロック多量, 砂質粘土少量
- 6 褐灰色 バミス・バミス小ブロック多量
- 7 極暗赤褐色 ローム小ブロック中量, 砂少量

貯蔵穴土層解説

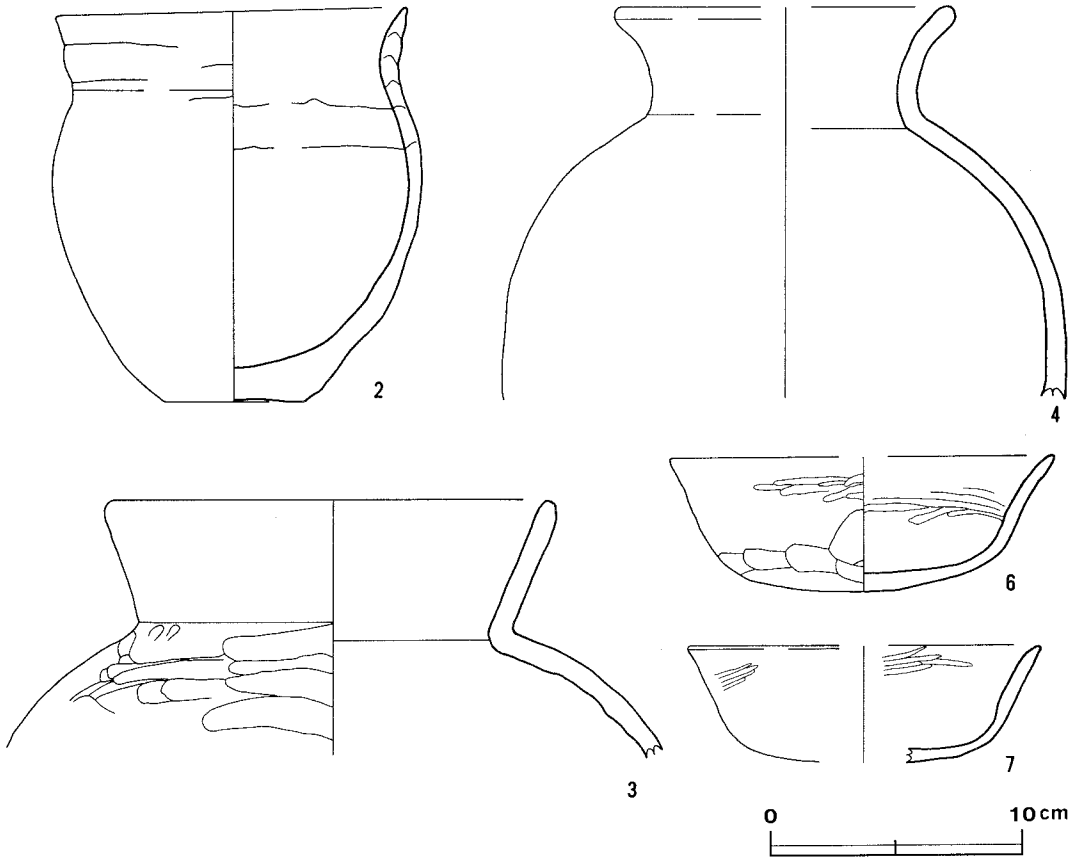
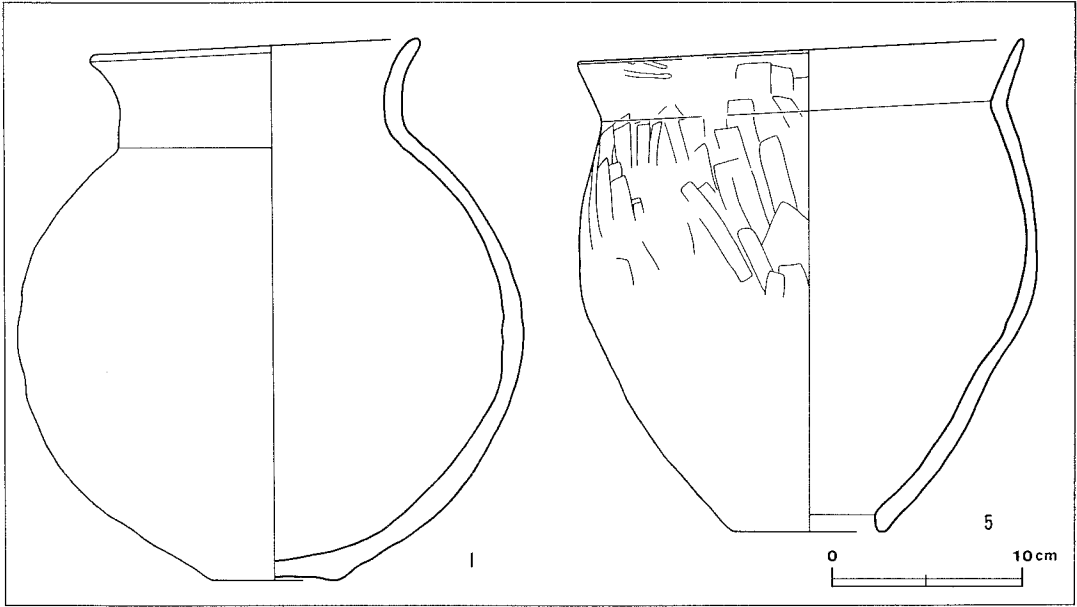
- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量
- 2 黒褐色 焼土小ブロック・炭化物中量, ローム小ブロック多量
- 3 極暗褐色 ローム小ブロック・バミス小ブロック多量
- 4 黒褐色 炭化物少量, ローム小ブロック・バミス小ブロック多量, バミス中ブロック中量

第78図 第9号住居跡竈実測図

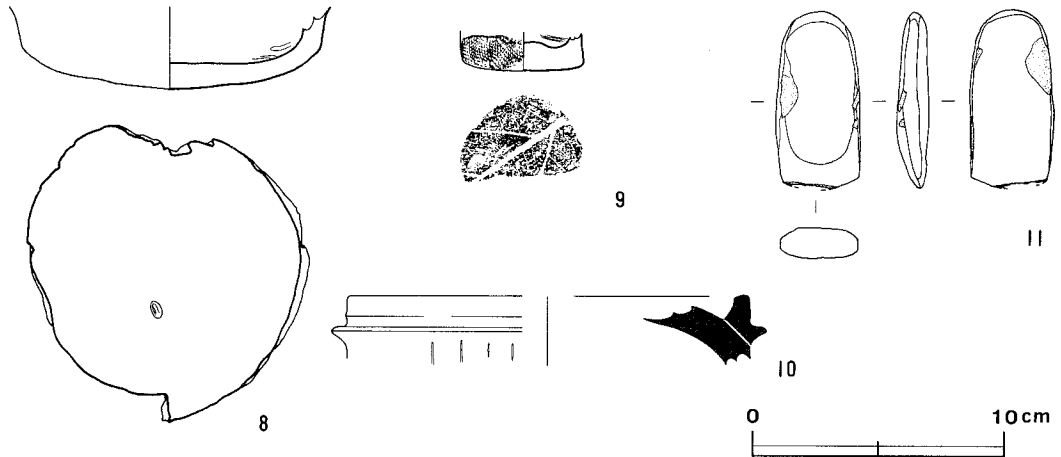
竈 東壁中央部に、壁を32cm程壁外へ掘り込み、砂質粘土で構築されている。規模は、長さ120cm、幅118cmを測る。火床部はよく熱を受けて赤変硬化しており、支脚として用いられた甕も熱を受けて赤化している。煙道は火床から急な角度で外傾して立ち上がり、屋外に延びている。覆土 自然堆積。

遺物 竈内や竈付近を中心に土師器の坏、甕、壺等が出土している。第80図8は底部に刳痕のついた坏で中央部床面から斜位の状態で出土している。第79図3の甕は東部床面から斜位の状態で、5の甕は南部床面から斜位の状態で出土している。竈内から1の甕と6の坏はそれぞれ斜位の状態で、2の甕は逆位の状態で出土している。南西部覆土中層から流れ込みと思われる第80図10の須恵器の円面碗が出土している。

所見 本跡は、第1号道路跡より古く、遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住居跡と思われる。



第 79 图 第 9 号住居跡出土遺物実測図(1)



第 80 図 第 9 号住居跡出土遺物実測図 (2)

第 9 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第79図 1	甕 土師器	A 17.4 B 28.7 C 6.6	平底。胴部は球形状を呈し、口縁部は頸部から外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面磨滅が著しく、一部煤付着。	砂粒・長石・石英・雲母にぶい橙色普通	P77 PL10 100% 甕内
2	甕 土師器	A 14.0 B 15.8 C 5.6	平底。胴部は内彎気味に立ち上がり、最大径は上位に持つ。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、上位で外反する。	口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕有り。内・外面全面にわたり磨滅が著しい。	砂粒・長石・石英赤橙色普通	P78 PL10 100% 甕内逆位
3	甕 土師器	A 18.1 B (10.2)	胴中央部以下欠損。胴部は内彎して頸部に至り、口縁部は頸部から「く」の字状に外反する。	胴部外面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。内・外面共に磨滅が著しいが、内面は特に剝離する。	砂粒・長石・石英橙色普通	P79 40% 南東コーナー 床面直上
4	甕 土師器	A (13.6) B (15.8)	胴部は球形状を呈し、口縁部は外傾しながら立ち上がり、上位で開く。	胴部外面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英にぶい橙色普通	P80 20% 覆土
5	甌 土師器	A 23.3 B 26.3 C 8.2 孔径 6.8	無底式の甌。胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反する。	胴部外面へラナデ。口縁部外面へラナデ後へラ磨き、内面横ナデ。胴部内面磨滅が著しい。外面の一部煤付着。	砂粒・スコリア橙色普通	P81 PL10 100% 南東部床面直上
6	坏 土師器	A (15.4) B 5.4	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でやや外反する。	体部外面へラナデ。口縁部内・外面へラ磨き。	砂粒・雲母橙色普通	P82 PL10 85% 甕内
7	坏 土師器	A (14.2) B (4.7)	体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でやや外反する。	口縁部内・外面へラ磨き。	砂粒・スコリア明赤褐色普通	P83 25% 甕内
第80図 8	坏 土師器	B (3.3)	丸底。体部はほぼ垂直に立ち上がり、上位でやや外反する。	胴部内面横ナデ後へラ磨き。底部外面に切痕有り。	砂粒・石英にぶい黄橙色普通	P84 PL10 20% 中央部床面直上
9	ミニチュア 土器 土師器	B (1.6) C 4.8	平底。胴部はほぼ垂直に立ち上がる。	胴下半外面撫糸文。内面はハケ目整形。底部に木葉痕有り。	砂粒・長石明赤褐色普通	P85 20% 北東部覆土
10	円面硯 須恵器	B (2.8) C (16.0)	圈足円面硯。硯部は陸と海が明確であるが、陸部は内堤から剝離し欠損。硯部外端部には一条の凸帯を巡らす。脚台部欠損。	硯部は回転へラ削り。硯部外面の凸帯は張り付け。	砂粒・石英灰色普通	P86 PL10 10% 南西部覆土 (流れ込み)

図版番号	器種	石質	法 量				出土位置	備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第80図 11	磨製石斧	砂岩	(7.1)	3.4	1.3	(51.2)	北西部覆土	Q19 流れ込み PL10

第10号住居跡（第81図）

位置 調査区の中央部西寄り， B1h₉区を中心に確認されているが， 南西側は調査区域外に延びている。

規模と平面形 長軸 6.24 m， 短軸 (2.86) m のほぼ方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N - 27° - W。

壁 壁高 43 ~ 68 cm で， ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅 16 ~ 18 cm， 深さ 6 ~ 16 cm， 断面形は U 字状を呈し， 調査区域外の未確認部分を除いて壁下を全周している。

床 平坦で， ピットを囲んだ内側の中央部床面はよく踏み固められている。

ピット 3か所 (P₁ ~ P₃) 検出されている。P₁， P₂ は， 径 20 ~ 56 cm， 深さ 68 ~ 82 cm で， 主柱穴と思われる。P₃ は， 径 20 cm， 深さ 24 cm で， 壁柱穴と思われる。

竈 大部分が調査区域外のため全容を捉える事はできなかったが， 北西壁中央部に， 砂質粘土で構築されている。火床部は， 熱を受けて赤変硬化している。

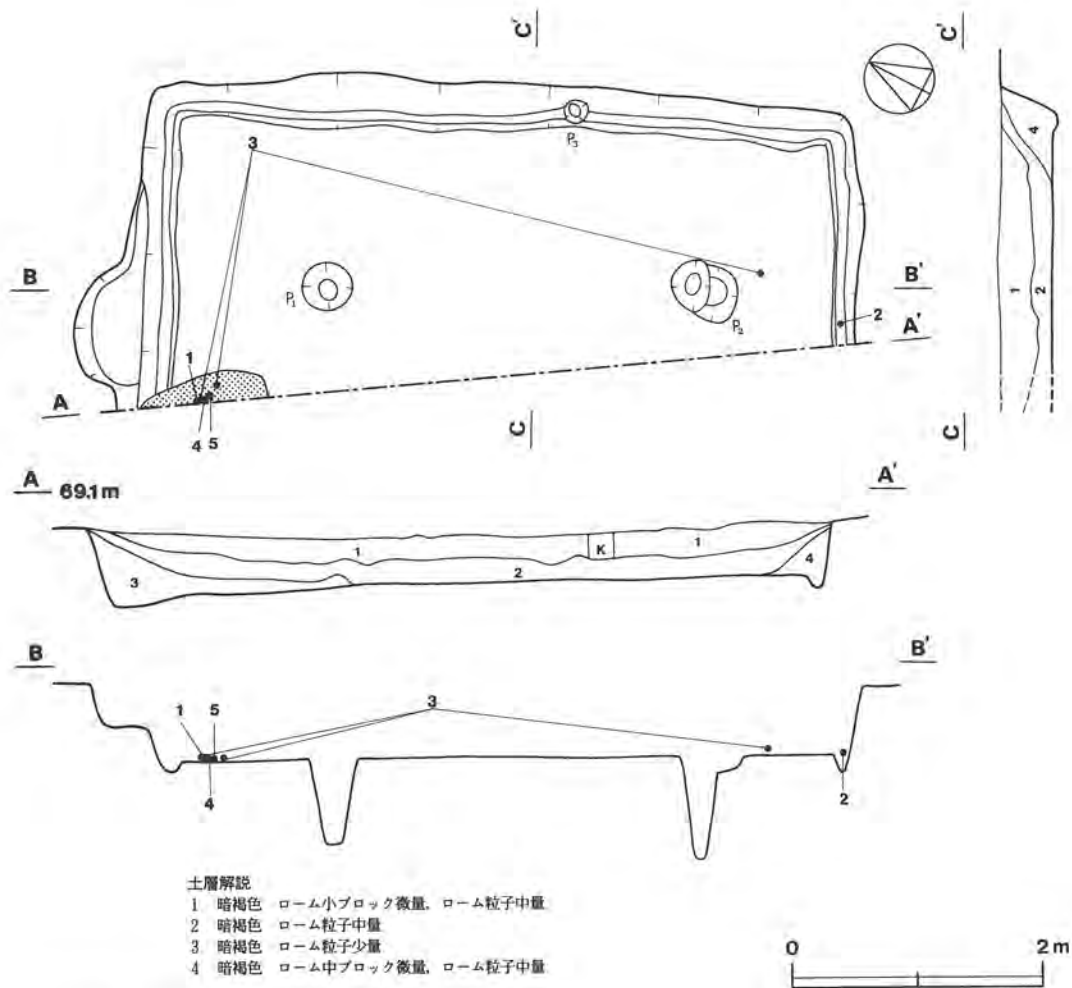
覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から多量の土師器片が出土している。竈内から第82図3の甑はつぶれた状態で， 4の鉢は斜位の状態で， 5の は逆位の状態で出土している。2の甑は南東壁溝から斜位の状態で出土している。

所見 本跡は， 南西側が調査区域外のため， 遺構全体の確認はできなかったが， 遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住居跡と思われる。

第10号住居跡出土遺物観察表

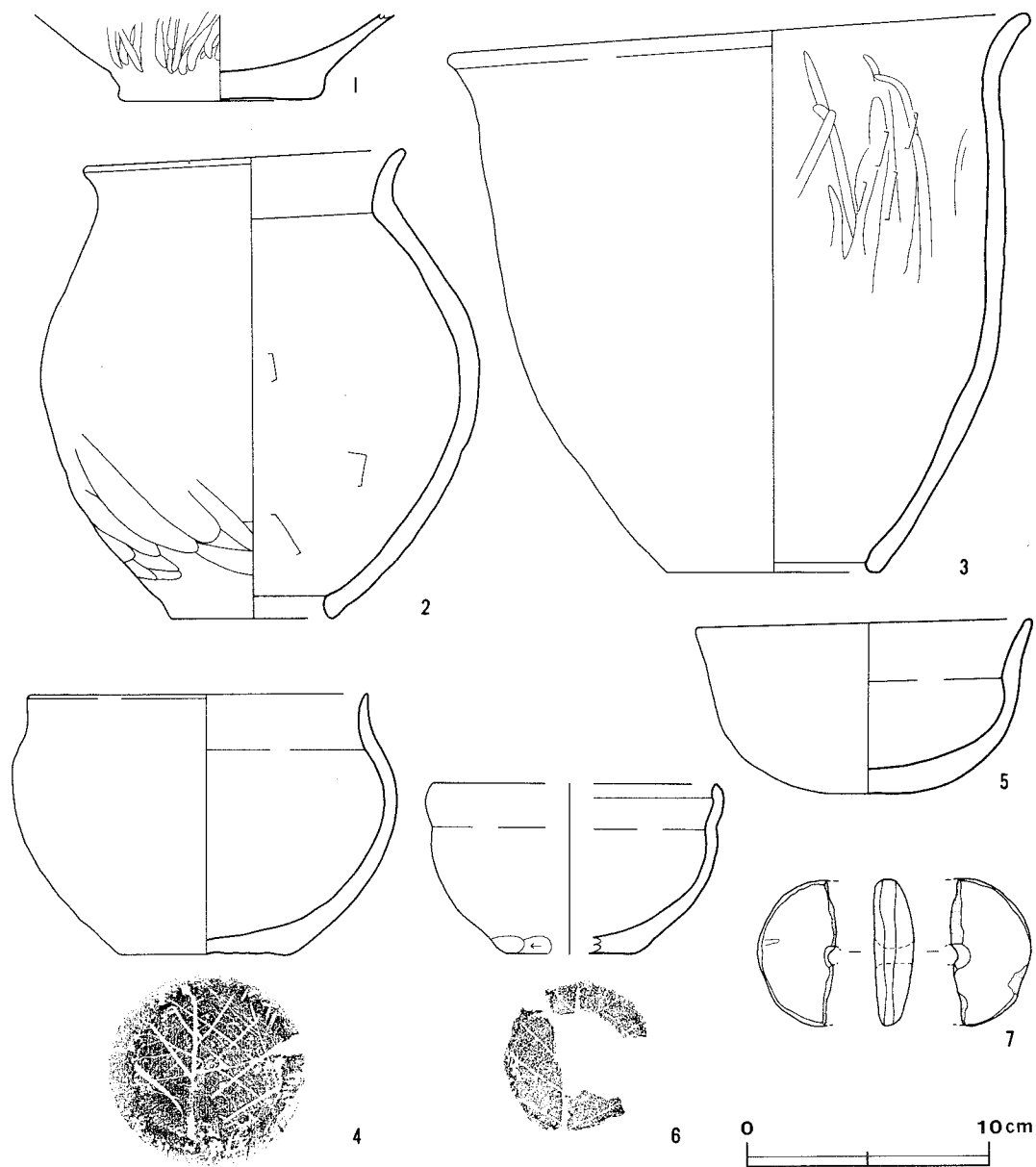
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第82図 1	甑 土師器	B (3.6) C 8.4	平底。胴部は外傾して立ち上がる。	底部は手持ちへら削り。胴部外面へら磨き。	砂粒・長石・石英・礫 赤褐色 普通	P87 15% 竈内
2	甑 土師器	A 13.2 B 19.6 C 6.8 孔径 5.8	無底式の甑。胴部は内彎しながら立ち上がり， 口縁部で外反する。	胴部外面へらナデ。胴部内面へら当て痕有り。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面煤付着。	砂粒・長石・石英 にふい橙色 普通	P88 100% 南東壁溝
3	甑 土師器	A 24.1 B 23.4 C 8.8 孔径 7.6	無底式の甑。胴部は外傾しながら立ち上がり， 中位でやや内彎し， 口縁部で緩く外反しながら開く。	胴部内面へら磨き。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面煤付着。	砂粒・長石 橙色 普通	P89 75% 竈内と南東部 床面直上



第81図 第10号住居跡実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第82図 4	鉢 土師器	A 14.0	平底。胴部は内彎気味に立ち上がり、最大径は上位に持つ。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。底部に木葉痕有り。胴部外面二次焼成を受け磨滅。	砂粒・長石・石英 明灰黄色 普通	P90 85% 竈内
		B 10.9				
		C 7.1				
5	埴 土師器	A 14.3	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は緩く外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面二次焼成を受けている。	砂粒・長石 橙色 普通	P91 80% 竈内逆位
		B 7.3				
		C 3.2				
6	埴 土師器	A [11.9]	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、上位で弱く内傾する。口縁部は頸部から外反気味に立ち上がり、口唇部でやや内傾する。	底部手持ちへら削り。底部に木葉痕有り。底部から体部にかけて煤付着。	砂粒・長石・石英 にぶい赤褐色 普通	P92 60% 北東部覆土
		B 7.1				
		C 5.6				

図版番号	器種	法量				出土位置	備考			
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)					
第82図 7	紡錘車	(3.3)	6.1	1.6	(29.1)	南東部覆土	DP2	孔径(0.7)cm	1/2欠損	PL11



第82図 第10号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡（第83図）

位置 調査区の北部西寄り，B1f区を中心に確認されているが，南西側は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡の北東部は，第59号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.35m，短軸（1.59）mの方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N-28°-W。

壁 壁高 19~50 cm で、ほぼ垂直に立ち上がっている。

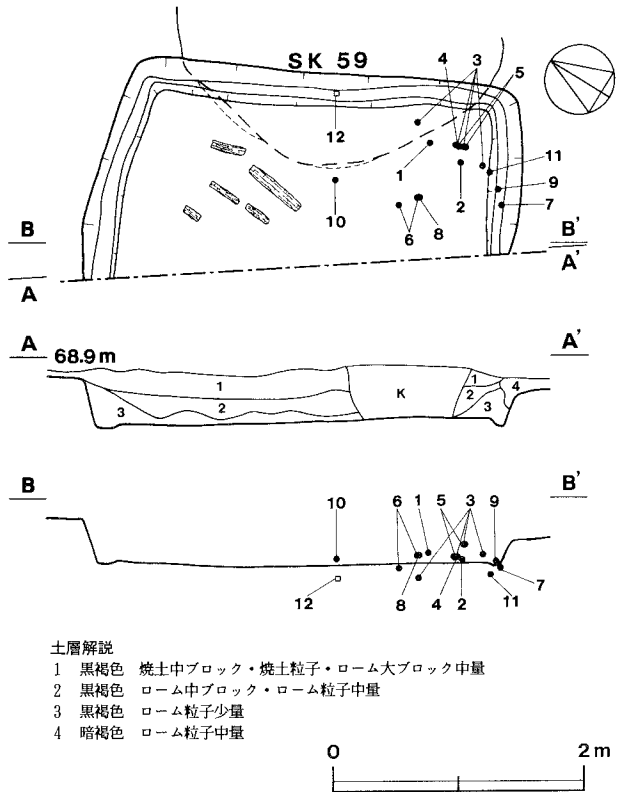
壁溝 幅 12~18 cm、深さ 4 cm、断面形は皿状を呈し、調査区域外の未確認の部分を除いて壁下を全周している。

床 ほぼ平坦で、全域にわたってよく踏み固められている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から多量の土師器片が出土している。南東部床面からはほぼ完形の第 84 図 1 の甕は横位の状態で、3 の甕は斜位の状態で、第 85 図 9 の埴は正位の状態で出土している。

所見 本跡は、第 59 号土坑より新しく、床面や覆土下層から炭化材や焼土が検出されたこと等から焼失家屋と思



土層解説

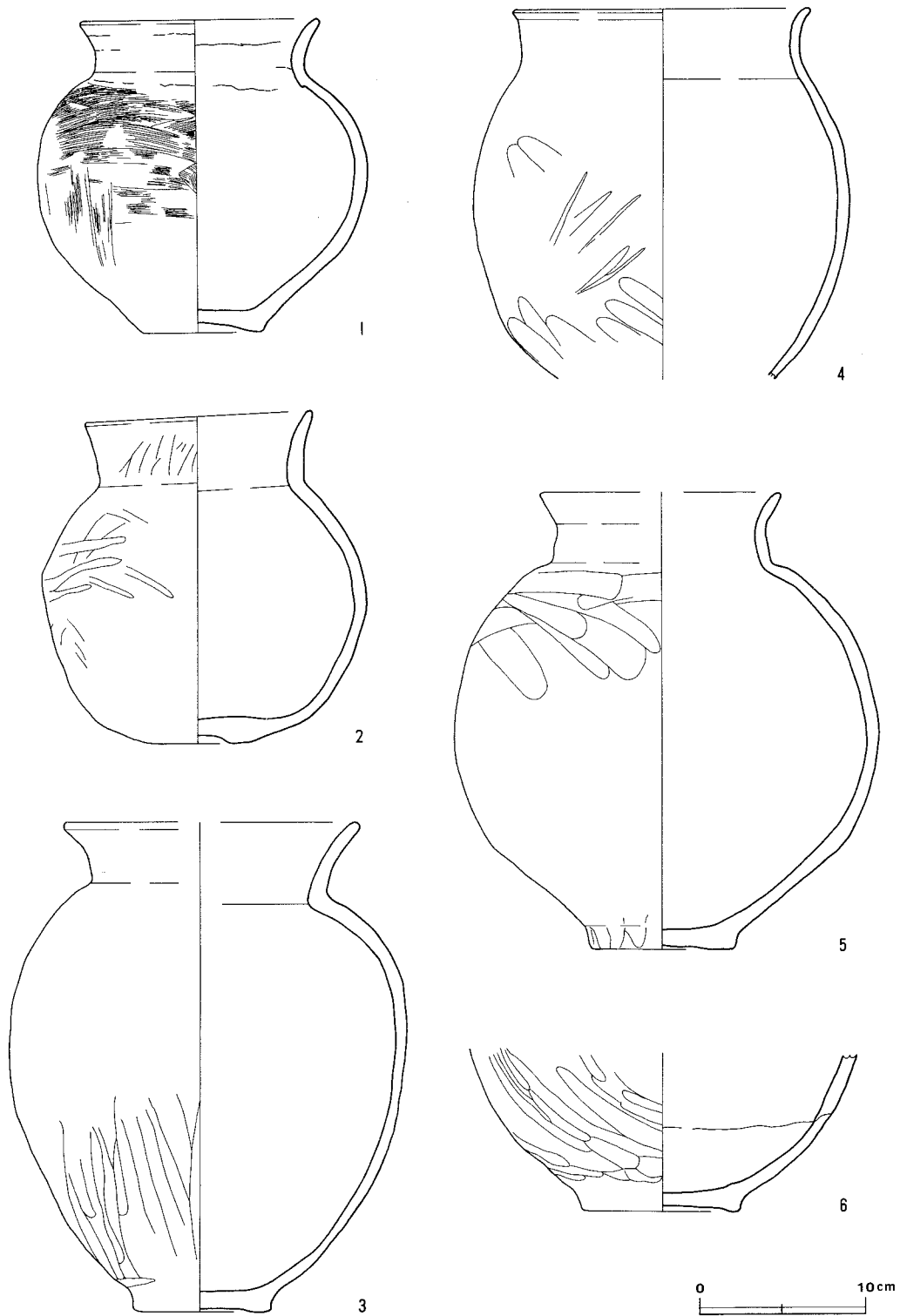
- 1 黒褐色 焼土中ブロック・焼土粒子・ローム大ブロック中量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量

第 83 図 第 11 号住居跡実測図

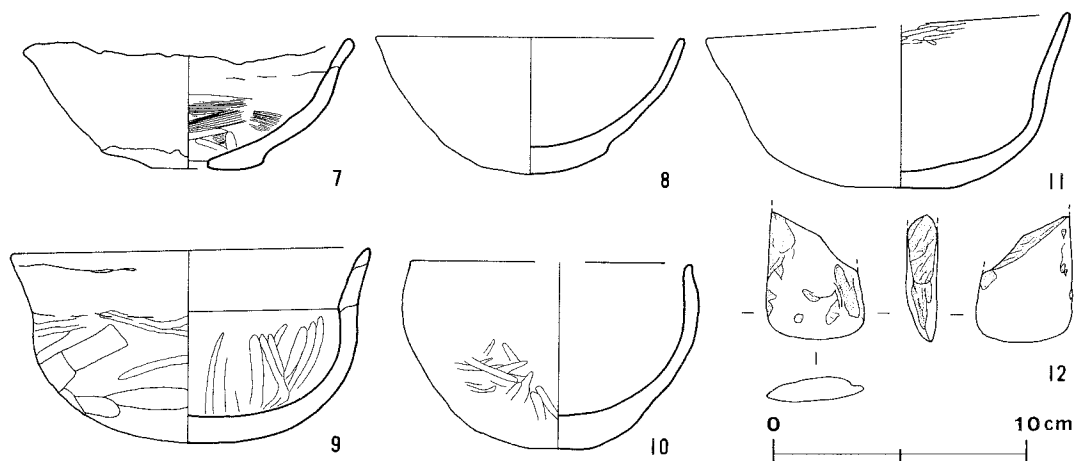
われ、遺物がほぼ完形で床面から出土している状況等から住居使用期間中に火災に遭遇したものと考えられる。南西側が調査区域外のため、柱穴、竈を含めた遺構全体の確認はできなかったが、遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住居跡と思われる。

第 11 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第84図 1	甕 土師器	A 14.4 B 19.2 C 7.0	上げ底。胴部は球形状を呈し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、上位で外反する。	胴部外面ハケ目整形。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕有り。胴部外面煤付着。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P93 PL13 100% 南東部床面直上
2	甕 土師器	A 13.7 B 20.3 C 4.6	上げ底。胴部は球形状を呈し、口縁部は頸部から外反して開く。	胴部外面ヘラナデ後ヘラ磨き。頸部ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面煤付着。	砂粒・スコリア 明褐色 普通	P94 PL13 90% 南東部床面直上
3	甕 土師器	A (17.9) B 29.9 C 8.4	わずかな上げ底。胴部は長胴気味で、最大径を上位に持つ。口縁部は頸部から「く」の字状に立ち上がる。	胴部外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面煤付着。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P95 PL13 95% 南東部床面直上
4	甕 土師器	A 17.6 B (23.6)	胴部は球形状を呈し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口唇部をわずかにつまみ上げる。	胴部外面ヘラ削り後ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面煤付着。	砂粒・長石・石英・雲母 黒褐色 普通	P96 PL13 70% 南東部床面直上
5	甕 土師器	A (14.6) B 27.9 C 8.8	突出した平底。胴部は球形状を呈し、口縁部は垂直に立ち上がり、上位で外反する。	底部手持ちヘラ削り。胴部外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 褐灰色 普通	P97 40% 南東部床面直上



第 84 图 第 11 号住居跡出土遺物実測図(1)



第 85 図 第 11 号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第84図 6	甕 土師器	B 9.7 C 9.4	突出した上げ底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部外面へラナデ。輪積み痕有り。底部内面煤附着。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P98 20% 中央部床面直上
第85図 7	甗 土師器	A 13.3 B 4.6 C 3.1 孔径 1.4	単孔式の甗。底部は幾分突出する。胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	胴部内面ハケ目整形後へラ磨き。輪積み痕有り。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P99 PL13 100% 南東部床面直上
8	坏 土師器	A 12.3 B 5.5	突出した丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口唇部でわずかに外傾する。	底部へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。底部から体部にかけて煤附着。	砂粒・長石・ 石英・雲母 にぶい橙色 普通	P101 PL13 100% 南東部床面直上
9	碗 土師器	A 14.4 B 7.9	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で緩く外傾する。	体部外面へラナデ後へラ磨き。体部内面放射状のへラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・石英 明赤褐色 普通	P100 PL13 95% 南東部床面直上
10	碗 土師器	A [11.2] B 7.5 C 2.4	わずかに突出した偏平な平底。体部は中位で二段に内彎して立ち上がり、口唇部はわずかにつまみ上げられている。	底部へラ削り。体部へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・ 石英・パミス 明赤褐色 普通	P102 PL13 65% 中央部床面直上
11	碗 土師器	A [14.4] B 7.1 C 4.4	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	底部へラ削り。口縁部外面横ナデ、内面へラ磨き。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P103 40% 南東部床面直上

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第85図 12	磨製石斧	蛇紋岩	(5.1)	3.9	1.3	(30.0)	覆土	Q20 基部欠損 流れ込み PL13

第 12 号住居跡 (第 86 図)

位置 調査区の北部西寄り、B1es 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北東部は第 20 号住居跡の西コーナーに掘り込まれ、南東部は第 36 号住居跡の北西部を掘り込んでいる。北コーナーは第 12・13 号土坑を、南西壁中央部は第 59 号土坑を、

中央部は第110号土坑を、南コーナーは第144号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 7.46 m, 短軸 6.62 m の長方形を呈している。

長軸方向 N - 62° - E。

壁 壁高 30 ~ 64 cm で、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅 14 ~ 22 cm, 深さ 2 ~ 7 cm, 断面形は皿状を呈し、第20号住居跡に切られている北東壁東コーナー寄りを除いて壁下を全周している。

床 平坦で、柱穴を囲んだ内側の中央部床面がよく踏み固められている。

ピット 5か所 (P₁ ~ P₅) 検出されている。P₁ ~ P₄ は、径 18 ~ 34 cm, 深さ 44 ~ 64 cm で、主柱穴と思われる。P₅ は、径 22 cm, 深さ 28 cm で、出入り口に伴う梯子ピットと思われる。

貯蔵穴 南コーナーに検出されている。平面形は長径 114 cm, 短径 84 cm の楕円形を呈し、断面形は深さ 44 cm の逆台形を呈している。

竈 第20号住居跡に掘り込まれているために検出されなかったが、本来は北東壁中央部に付設されていたものと推定される。

覆土 自然堆積。

遺物 全域の覆土中・下層から多量の土師器の甕や坏片が出土し、貯蔵穴から土師器の甕や坏片等が出土している。第88図2の小形甕は南西コーナーピットから横位の状態で、3の埴は北西部床面から正位の状態で出土している。その他管玉（石製未製品）が出土している。

所見 本跡は、第20号住居跡より古く、第36号住居跡や重複している全ての土坑より新しい。遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住居跡と思われる。

第20号住居跡（第86図）

位置 調査区の北部、Ble₉区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の西コーナーは第12号住居跡の北東部を、北コーナーは第11号土坑を、南コーナーは第111号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 6.54 m, 短軸 6.20 m の方形を呈している。

長軸方向 N - 25° - E。

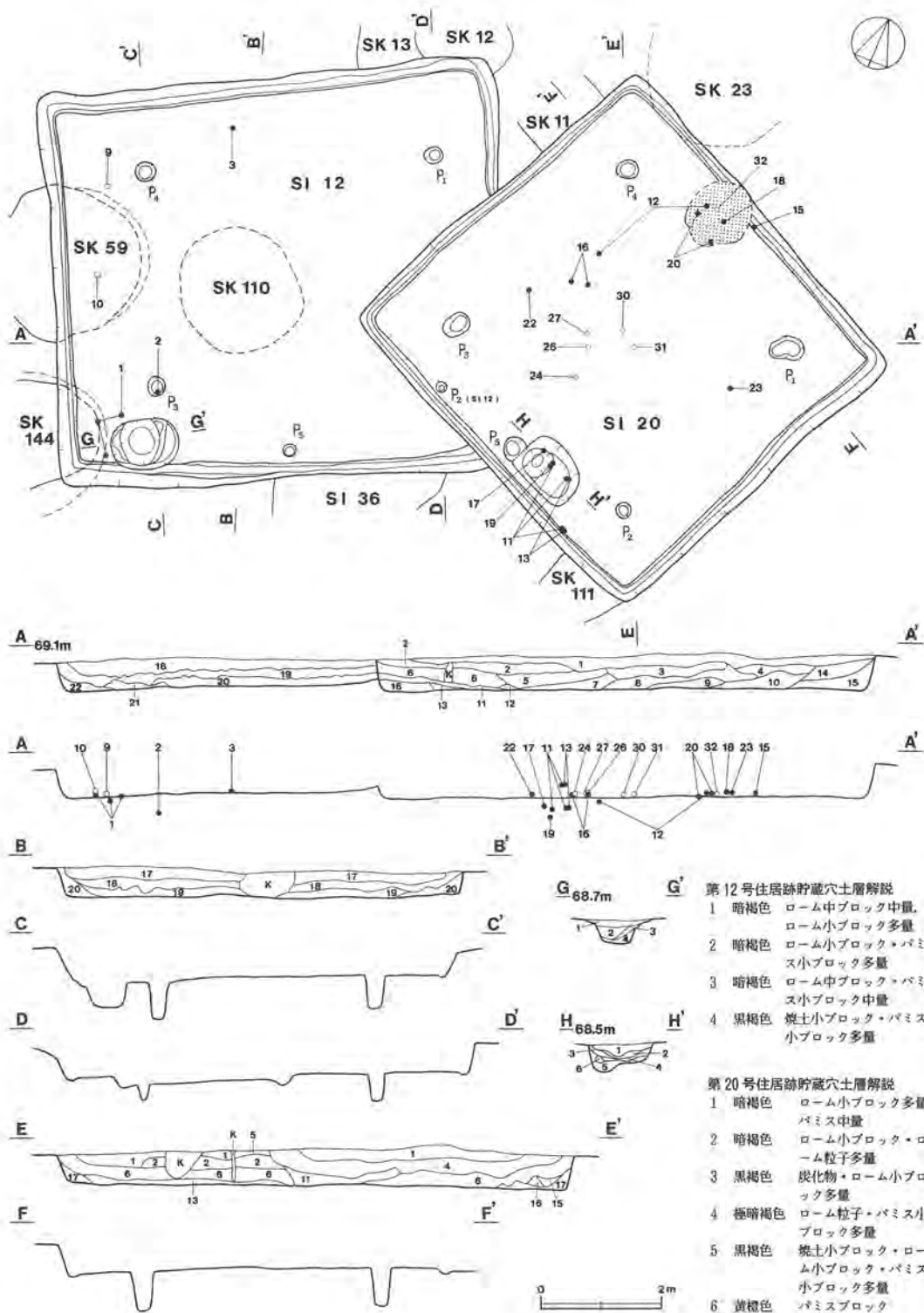
壁 壁高 45 ~ 55 cm で、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅 14 ~ 26 cm, 深さ 6 ~ 10 cm, 断面形は皿状を呈し、壁下を全周している。

床 平坦で、柱穴を結んだ線の内側及び竈付近はよく踏み固められている。

ピット 5か所 (P₁ ~ P₅) 検出されている。P₁ ~ P₄ は、径 26 ~ 58 cm, 深さ 65 ~ 76 cm で、主柱穴と思われる。P₅ は、径 40 cm, 深さ 54 cm で、出入り口に伴う梯子ピットと思われる。

貯蔵穴 南西壁際中央部からやや南コーナー寄りに検出されている。平面形は長軸 110 cm, 短軸



第86図 第12・20号住居跡実測図

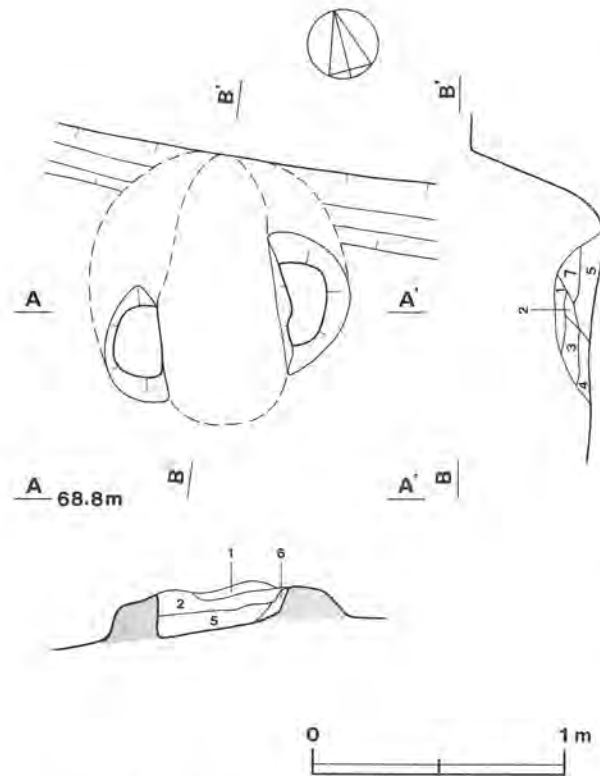
82 cmの長方形を呈し、断面形は深さ 48 cm の 2 段に掘り窪められた逆台形状を呈している。

竈 北東壁中央部からやや北コーナー寄りに、砂質粘土で構築されている。規模は、長さ 130 cm 幅 134 cm を測る。削平されており、わずかに袖部が残存しているだけである。火床は熱を受けて赤変硬化している。煙道部の壁外への掘り込みは見られず、煙道は火床から急な角度で外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 土師器の甕や坏片等が多量に出土している。特に、竈付近及び貯蔵穴内から土師器の甕や坏片が出土している。貯蔵穴内覆土下層から第 88 図 11 の甕の底部はつぶれた状態で、第 90 図 19 の坏は斜位の状態で出土している。竈内から 18 の罎は正位の状態で、20 の坏は斜位の状態で出土している。土製品の勾玉及び球状土錘が中央部から南西部にかけての床面から出土している。

所見 本跡は、重複している全ての遺構より新しく、遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住居跡と思われる。



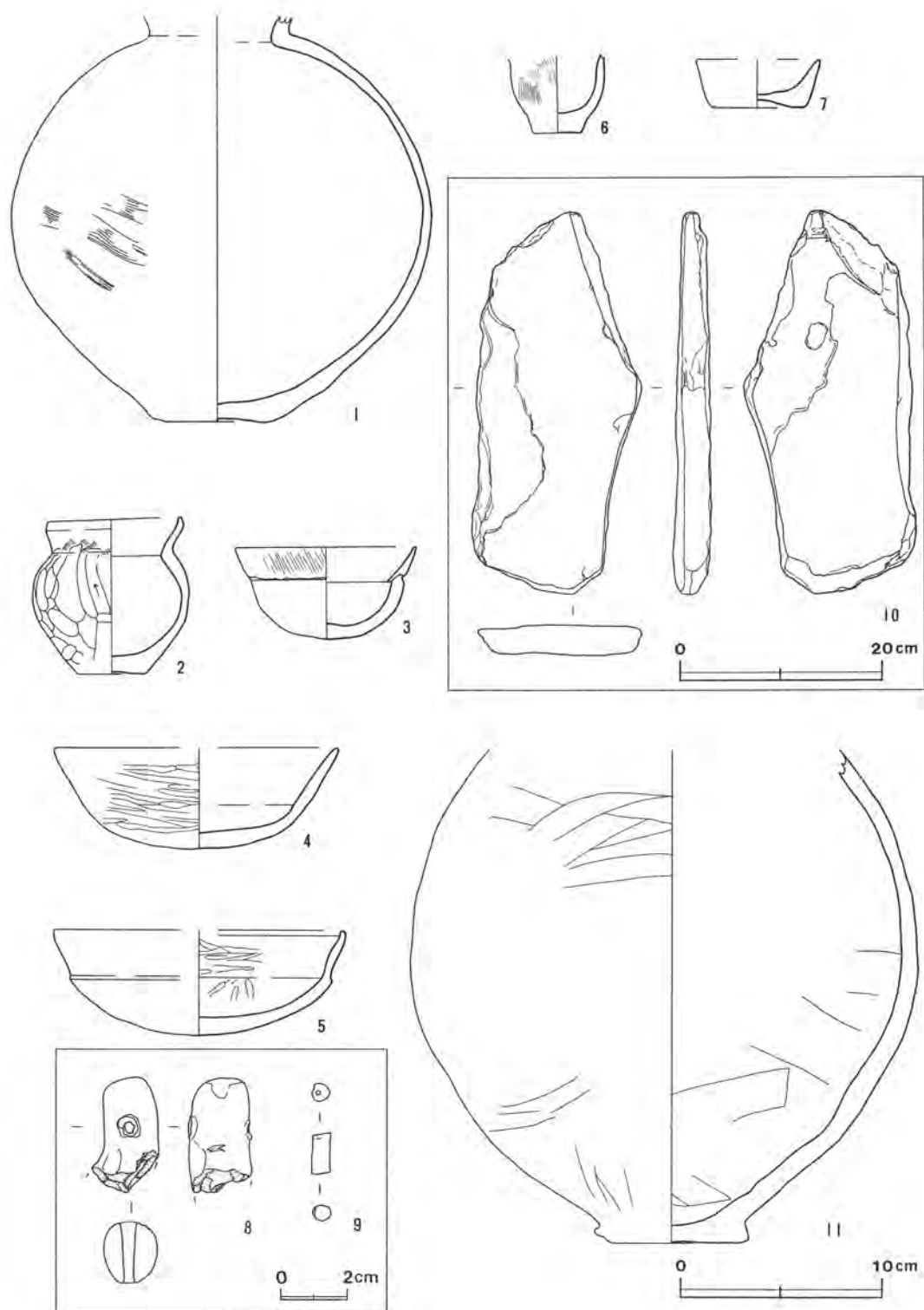
第 12・20 号住居跡土層解説

- | | | |
|----|-------|----------------------|
| 1 | にぶい褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 | にぶい褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 | にぶい褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 4 | 明褐色 | ローム粒子・パミス少量 |
| 5 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 6 | にぶい褐色 | ローム粒子少量, パミス中量 |
| 7 | 褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 8 | にぶい褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子少量 |
| 9 | 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 10 | 暗褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 11 | にぶい褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子少量 |
| 12 | にぶい褐色 | ローム粒子少量 |
| 13 | 褐色 | ローム粒子少量 |
| 14 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 15 | 褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子・パミス少量 |
| 16 | にぶい褐色 | ローム粒子微量 |
| 17 | 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 |
| 18 | 明褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子中量 |
| 19 | にぶい褐色 | ローム粒子少量 |
| 20 | 褐色 | ローム粒子中量 |
| 21 | 褐色 | 炭化物・ローム粒子少量 |
| 22 | 褐色 | ローム中ブロック・ローム粒子少量 |

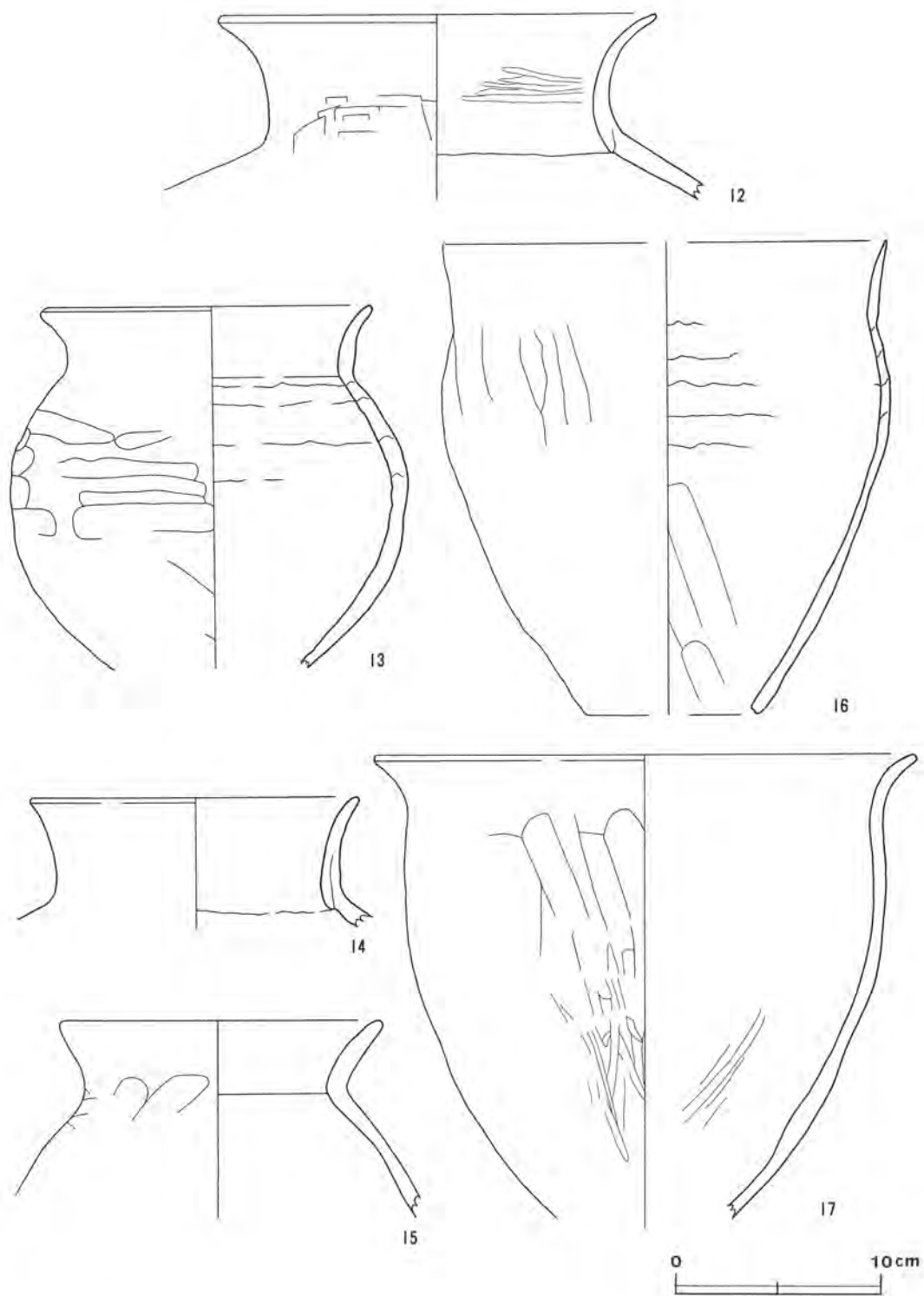
第 20 号住居跡竈土層解説

- | | | |
|---|-------|----------------------------------|
| 1 | 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子多量 |
| 2 | 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子多量 |
| 3 | 極暗赤褐色 | 焼土中ブロック中量, 焼土小ブロック多量, パミス小ブロック中量 |
| 4 | 黒褐色 | 焼土中ブロック・パミス中ブロック中量 |
| 5 | 極暗赤褐色 | 焼土中ブロック・焼土小ブロック多量 |
| 6 | 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・パミス中ブロック多量 |
| 7 | 暗赤褐色 | 焼土中ブロック中量, 焼土小ブロック多量 |

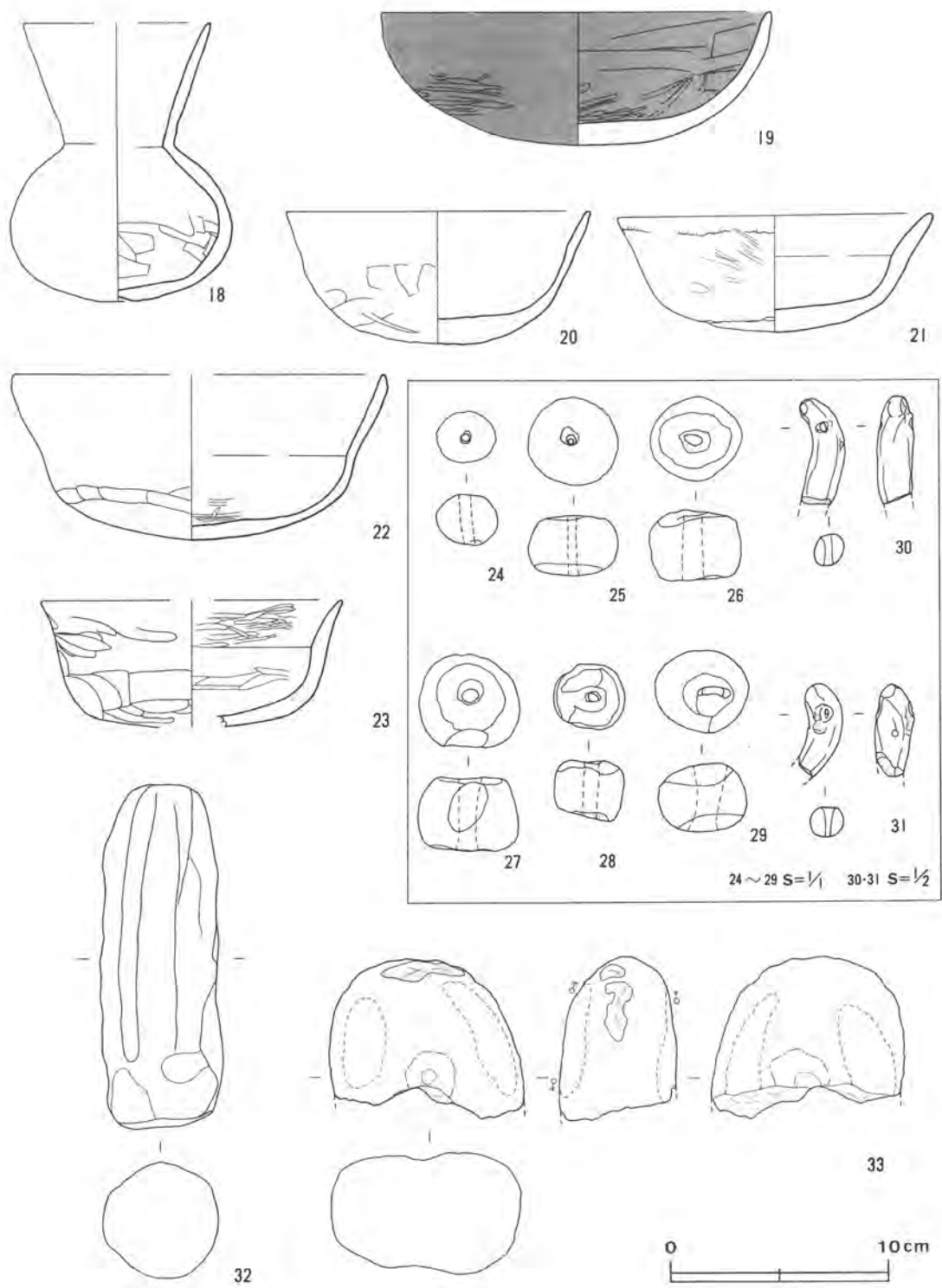
第 87 図 第 20 号住居跡竈実測図



第 88 图 第 12 · 20 号住居跡出土遺物実測図(1)



第 89 图 第 12・20 号住居跡出土遺物実測図 (2)



第90图 第12・20号住居跡出土遺物実測图(3)

第12号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第88図 1	甕 土師器	B (20.7) C 5.4	平底。胴部は球形を呈する。	胴部外面ハケ目整形。胴部内・外面磨滅著しい。底部煤付着。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P104 65% 南コーナー床面直上
2	小形甕 土師器	A 6.8 B 8.1 C 3.4	平底。胴部は長胴気味に立ち上がり、口縁部は頸部から外反して開き、口唇部でやや内傾する。	底部へら削り。胴部へらナデ。口縁部外面ハケ目整形後横ナデ、内面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P105 PL14 100% 南コーナーのピット
3	埴 土師器	A 9.1 B 4.7	丸底。胴部は境状を呈し、最大径を頸部付近に持つ。口縁部は複合口縁で、外傾して立ち上がる。	口縁部外面ハケ目整形後横ナデ、内面横ナデ。	砂粒・スコリア 褐色 普通	P106 PL14 90% 北西部床面直上
4	坏 土師器	A [14.5] B 5.2	丸底。体部は緩く内彎しながら立ち上がる。	体部外面へら磨き。口縁部内・外面へら磨き後横ナデ。	砂粒・スコリア・バミス にぶい褐色 普通	P107 PL14 60% 南東部覆土
5	坏 土師器	A [14.8] B 5.4	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は緩く外反し、口唇部でわずかに内傾する。体部と口縁部との境に明瞭な稜を有する。	底部外面へら削り、内面へら磨き。口縁部外面横ナデ、内面へら磨き後横ナデ。底部煤付着。	砂粒・長石・ 石英・雲母 褐色 普通	P108 40% 北西部覆土
6	ミニチュア 土器 土師器	B (4.0) C 2.4	平底。胴部は内彎気味に立ち上がり、中位からほぼ垂直に立ち上がる。口唇部付近で外傾する。	胴部外面ハケ目整形、内面に弱い指頭圧痕有り。	砂粒・長石・スコリア にぶい褐色 普通	P109 50% 覆土
7	ミニチュア 土器 土師器	A [6.2] B 2.5 C [4.6]	上げ底気味の平底。胴部は外傾して立ち上がる。	底部へら削り。	砂粒・長石・ 雲母・スコリア 明赤褐色 普通	P110 30% 覆土

図版番号	器種	法量				出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)		
第88図 8	土製勾玉	(3.5)	2.0	1.8	(11.6)	南西部覆土	DP32 孔径0.4cm PL14

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(g)		
第88図 9	管玉	滑石	1.3	0.6		0.8	西コーナー床面直上	Q23 孔径0.2cm 未製品 PL14
10	板状石製品	粘板岩	(39.0)	17.0	3.8	(3218.1)	南西部床面直上	Q21

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第88図 11	甕 土師器	B (25.2) C 7.8	突出した平底。胴部は球形を呈するがやや長胴気味である。	底部へら削り。胴部内・外面へらナデ。	砂粒・長石・ 石英・スコリア にぶい赤褐色 普通	P161 PL14 60% 貯蔵穴内覆土
第89図 12	甕 土師器	A 21.3 B (9.2)	口縁部片。口縁部は外反して立ち上がり、上位で大きく開き、内側に折り返す口縁。	頸部外面へら当て痕有り、内面へら磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・バミス 褐色 普通	P163 20% 竈内と 中央部床面直上
13	甕 土師器	A 16.2 B (17.8)	胴部は球形を呈し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、上位で外反する。	胴部外面へらナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・長石 にぶい黄褐色 普通	P162 PL14 60% 貯蔵穴 と南東部覆土
14	甕 土師器	A 16.2 B (6.5)	口縁部片。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、上位でやや開き、内側に折り返す口縁。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P165 15% 貯蔵穴内覆土
15	甕 土師器	A [15.8] B (9.7)	口縁部片。口縁部は頸部から「く」の字状に外反する。	頸部へらナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・スコリア にぶい褐色 普通	P164 20% 北東壁溝

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第89図 16	甌 土師器	A (21.5) B 23.3 C 8.4 孔径 8.0	無底式の甌。胴部は内彎気味に立ち上がり、上位で直立する。口縁部は頸部から緩やかに外傾する。	胴部内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・長石に ぶい黄橙色 普通	P166 PL14 70% 中央部床面直上
17	甌 土師器	A (26.5) B (22.8)	無底式の甌。胴部は緩く内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	胴部外面ヘラナデ後ヘラ磨き、内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面煤付着。	砂粒・長石 橙色 普通	P167 20% 貯蔵穴内覆土
第90図 18	埴 土師器	A (8.6) B 13.0 C 1.6	上げ底気味の丸底。胴部は球形状を呈するが、最大径は中位よりやや下に持つ。口縁部は外傾して立ち上がり、端部に至る。	底部ヘラ削り。胴部内面ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P168 PL14 60% 竈内
19	坏 土師器	A 18.0 B 6.2	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でほぼ垂直に立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ後ヘラ磨き。口縁部内面ヘラナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石・ 石英・スコリア 明赤褐色 普通	P169 100% 貯蔵穴内覆土
20	坏 土師器	A 14.0 B 6.2	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。	体部外面ヘラナデ後弱いヘラ磨き、内面弱いヘラ磨き。	砂粒・長石・バミス 橙色 普通	P170 PL14 95% 竈内
21	坏 土師器	A 14.5 B 5.5	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	体部外面ヘラ磨き。口縁部内面横ナデ。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P171 PL14 95% 北西部覆土
22	坏 土師器	A (17.2) B 7.7	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。口唇部は尖る。	体部下端ヘラナデ、内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 明褐色 普通	P172 40% 北西部床面直上
23	坏 土師器	A (13.8) B (5.8)	体部は内彎しながら立ち上がる。	体部下端ヘラ削り、内・外面ヘラナデ。口縁部外面弱い磨き、内面丁寧なヘラ磨き。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P173 40% 南東部床面直上

図版番号	器種	法量				出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第90図 24	球状土錘	0.8	0.9		0.4	中央部床面直上	DP4 孔径0.2cm PL14
25	球状土錘	0.9	1.4		1.5	北東部覆土	DP5 孔径0.2cm PL14
26	球状土錘	1.1	1.4		1.7	中央部床面直上	DP6 孔径0.4cm PL14
27	球状土錘	1.1	1.5		2.4	中央部床面直上	DP7 孔径0.4cm PL14
28	球状土錘	0.9	1.1		0.8	北東部覆土	DP26 孔径0.2cm PL14
29	球状土錘	1.1	1.4		1.6	覆土	DP33 孔径0.4cm PL14
30	土製勾玉	(3.3)	1.4	1.0	(4.3)	中央部床面直上	DP27 孔径0.3cm PL14
31	土製勾玉	(2.8)	1.3	0.9	(3.4)	中央部床面直上	DP29 孔径0.2cm PL14
32	支脚	16.0	5.3	5.4	453.5	竈内	DP20 PL14

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第90図 33	凹石	安山岩	(7.5)	8.9	5.4	(485.9)	北西部覆土	Q38 表裏両面に凹み有り。

第13号住居跡 (第91図)

位置 調査区の北部、B1d₆区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北部は第37号住居跡の南部を掘り込み、南東部は第75号土坑を、北東コー

ナーは第77号土坑を、北西部は第78号土坑を、竈は第79号土坑を、北西コーナーは第140号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。本跡の北側三分の一程が第1号塚の下から検出されている。

規模と平面形 長軸6.88m、短軸6.30mのほぼ方形を呈している。

長軸方向 N-14°-W。

壁 壁高21~37cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅14~20cm、深さ4~6cm、断面形は皿状を呈し、壁下を全周している。

床 平坦であり、柱穴を結んだ線の内側はよく踏み固められている。

ピット 6か所(P₁~P₆)検出されている。P₁~P₄は、径33~36cm、深さ28~70cmで、主柱穴と思われる。P₅は、径32cm、深さ34cmで、出入り口に伴う梯子ピットと思われる。P₆は、径36cm、深さ28cmであるが、性格は不明である。

貯蔵穴 南壁際中央部からやや東寄りに検出されている。平面形は長軸130cm、短軸82cmの長方形を呈し、断面形は深さ80cmの逆台形を呈している。

竈 北壁中央部に、壁を24cm程壁外へ掘り込み、砂質粘土で構築されている。規模は、長さ152cm、幅116cmを測る。火床は熱を受けて赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

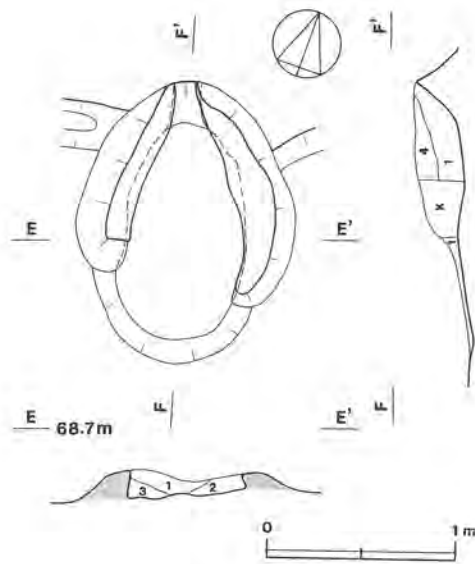
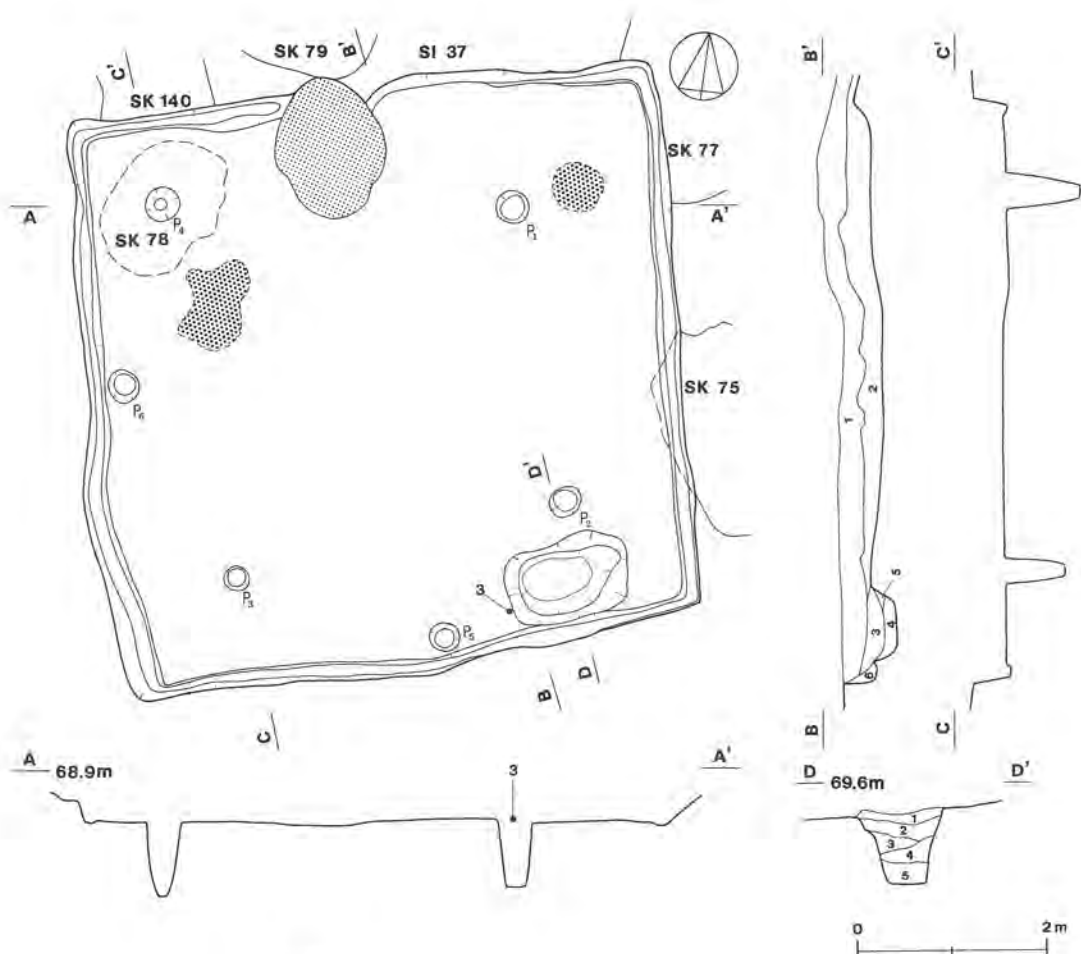
覆土 自然堆積。

遺物 竈付近や貯蔵穴内から土師器の甕や坏等が多量に出土している。第92図3の坏は南壁際中央部付近床面から斜位の状態で、4の鉢は竈内から出土している。竈東側から球状土錘が出土している。覆土中層から古銭「寛永通寶」が出土しているが、これは第1号塚からの流れ込みと思われる。

所見 本跡は、第37号住居跡、第75・77・78号土坑より新しく、第79・140号土坑より古い。床面や覆土下層から炭化材や焼土が検出されていること等から焼失家屋と思われ、遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住居跡と思われる。

第13号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第92図 1	甕 土師器	A {30.4} B 13.2	口縁部片。胴上半部から内彎して立ち上がり、口縁部は頸部から「く」の字状に外傾し、口唇部で弱く内傾する。	胴部外面へら削り、内面へら磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P112 15% 南東部覆土
2	甕 土師器	A 17.2 B 22.2 C 11.3	平底。胴部は内彎しながら立ち上がり、最大径は中位よりやや上に持つ。口縁部は外反して開く。	胴部外面へら削り。口縁部内・外面横ナデ。胴部内・外面磨滅が著しい。胴部外面一部煤付着。	砂粒・長石・石英 赤色 普通	P111 PL16 70% 南東部覆土
3	坏 土師器	A 14.9 B 6.0	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は緩く外反する。体部と口縁部との境に明瞭な稜を有する。	体部外面へら削り、内面放射状のへら磨き(暗文)。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・長石 橙色 普通	P113 PL16 100% 南壁中央部付近 床面直上



住居跡土層解説

- 1 暗褐色 焼土小ブロック少量, ローム粒子多量
- 2 黒褐色 焼土小ブロック少量, ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 3 暗褐色 ローム大ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 4 褐色 炭化粒子少量, ローム小ブロック・ローム粒子・パミス多量
- 5 黒褐色 炭化物中量, ローム粒子・パミス多量
- 6 極暗褐色 ローム粒子・パミス小ブロック中量, パミス多量

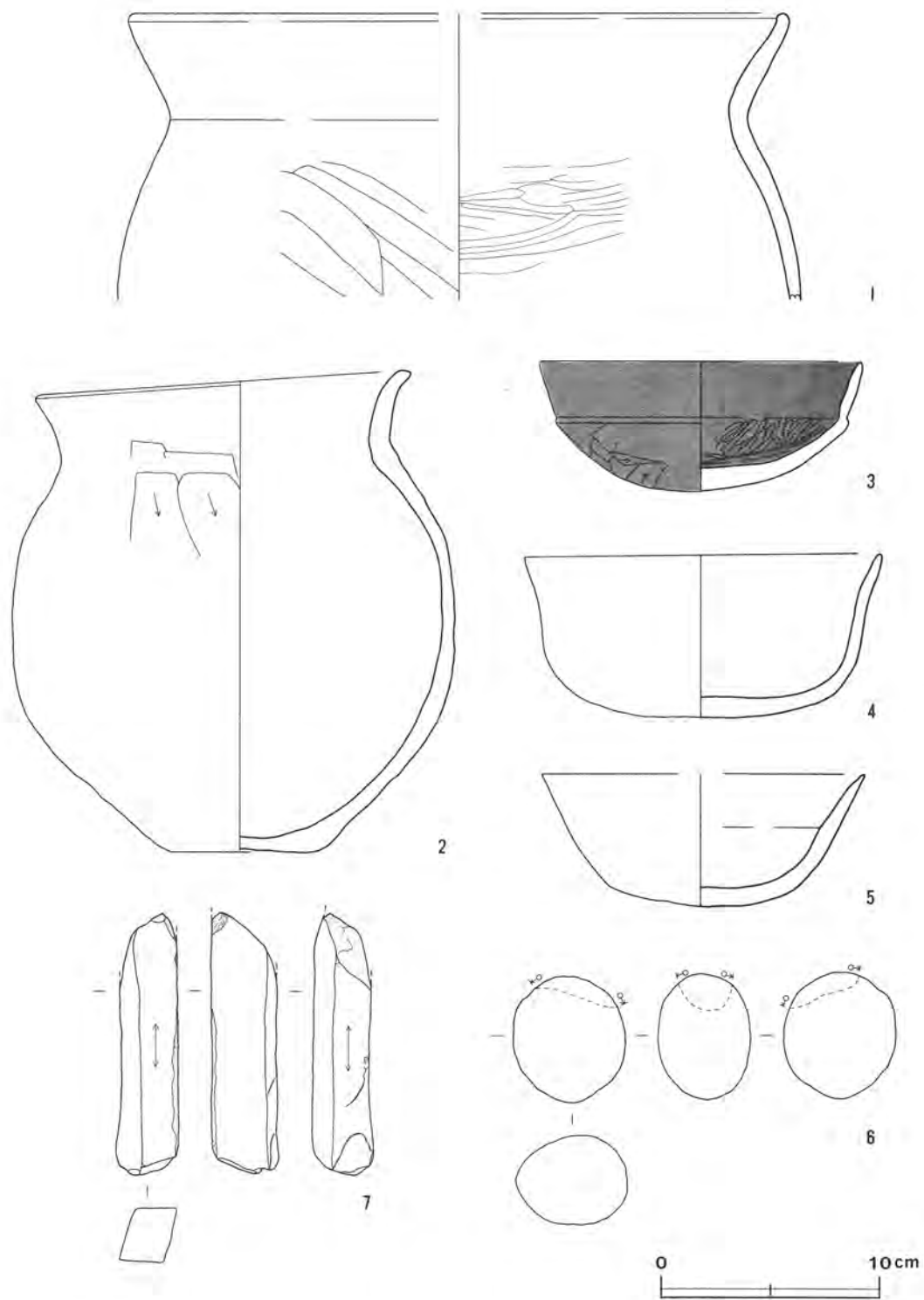
竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土大ブロック多量, 焼土中ブロック中量, 焼土小ブロック多量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子多量
- 3 暗赤褐色 焼土中ブロック中量, 焼土小ブロック多量
- 4 暗赤褐色 焼土中ブロック中量, 焼土小ブロック多量, ローム小ブロック中量

貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック微量, ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量, パミス少量
- 5 黒褐色 ローム粒子中量

第91図 第13号住居跡・竈実測図



第 92 图 第 13 号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第92図 4	鉢 土師器	A 16.4 B 7.6 C 3.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は緩く外反する。	底部外面へラ削り、内面弱いへラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面一部煤付着。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P114 PL16 80% 竈内
5	坏 土師器	A [14.9] B 5.1	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。口唇部で器厚を急に減じる。	底部外面へラ削り、内面弱いへラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。底部外面煤付着。	砂粒・長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P115 20% 貯蔵穴内覆土

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第92図 6	磨石	安山岩	5.9	5.2	4.2	162.5	南東部覆土	Q24 PL16
7	砥石	チャート	(12.0)	2.9	3.1	(133.1)	南西部覆土	Q25 PL16

第14号住居跡 (第93図)

位置 調査区の最北部西寄り、B1b5区を中心に確認されているが、南西側は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡の北東部は第44号住居跡の西部を、北コーナーは第67・76号土坑を、北西部は第145号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸6.64m、短軸(3.20)mのほぼ方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N-28°-W。

壁 壁高22~31cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅18~22cm、深さ6~8cm、断面形は皿状を呈し、調査区域外の未確認部分を除いて壁下を全周している。

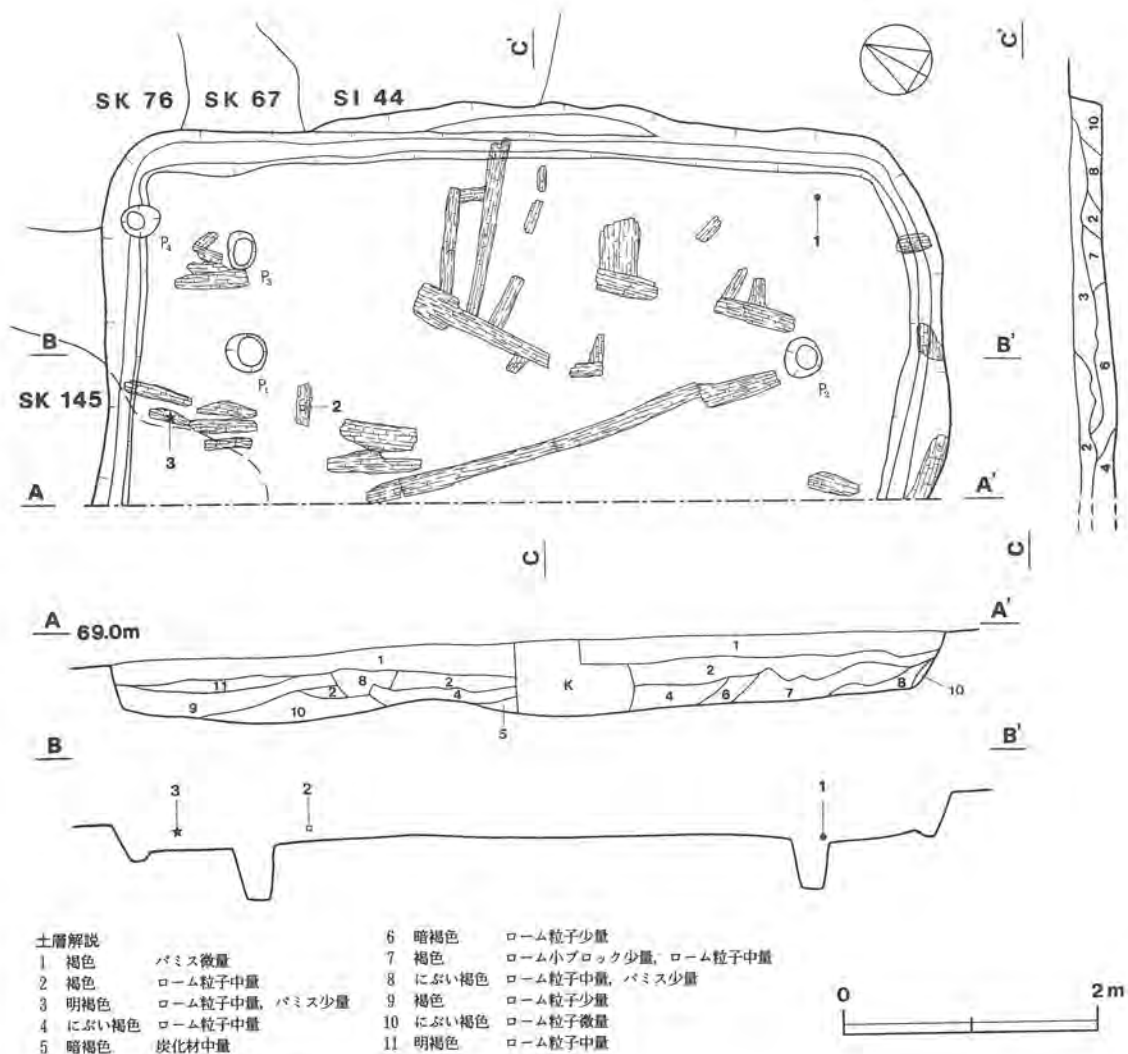
床 ほぼ平坦で、柱穴を結んだ線の内側はよく踏み固められている。

ピット 4か所(P1~P4)検出されている。P1、P2は、径30~34cm、深さ42~44cmで、主柱穴と思われる。P3、P4は、径26cm、深さ26~37cmであるが、性格は不明である。

覆土 自然堆積。

遺物 全域から土師器の壺、甕の破片や刀子、砥石が出土している。第94図1の壺は東コーナー付近の床面から正位の状態出土している。

所見 本跡は、重複している全ての遺構より新しく、床面や覆土下層から多くの炭化材や焼土が検出されていること等から焼失家屋と思われる、完形の遺物が出土していること等から、住居使用期間中に火災に遭遇したものと考えられる。南西側が調査区域外のため、柱穴及び炉を含めた遺構全体の確認はできなかったが、遺構の形態や遺物等から古墳時代中期の住居跡と思われる。

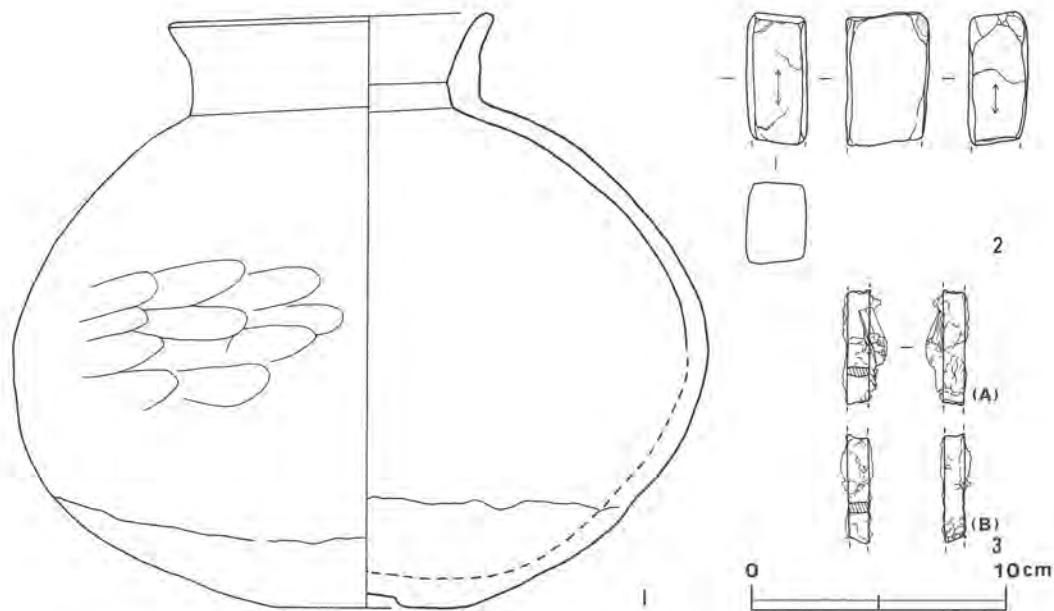


第93図 第14号住居跡実測図

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第94図 1	壺 土師器	A 12.9 B 24.1 C 7.5	中央部に径3cmの円形で、深さ0.6cmの凹みのある平底。胴部は球形を呈し、最大径を中位よりやや下に持つ。口縁部は垂直に立ち上がり、上位で外反して開く。	胴部外面へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕有り。胴部外面一部煤付着。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P116 PL17 100% 東コーナー付近床面直上

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第94図 2	砥石	チャート	(5.4)	2.4	3.2	(86.6)	北東部木炭物直上	Q26 PL17



第94図 第14号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法 量			出 土 位 置	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)		
第94図 3	刀子(A)	(4.5)	1.7	(7.8)	北東部木炭物直上	M4 (A)と(B)は同一個体と考えられる。断面形は長方形を呈する。(A)に炭化物付着。 PL17
	(B)	(4.4)	1.2	(5.5)	北東部木炭物直上	

第16号住居跡 (第95図)

位置 調査区の中央部東寄り、B2h5区を中心に確認されているが、北東側は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡の南東部は第40号住居跡の北西部に掘り込まれ、南部は第41号住居跡の北部や第88号土坑を、北西コーナーは第34号土坑を、南西部は第89号土坑を、中央部は第131・147号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 7.78 m, 短軸 (3.78) m のほぼ方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N-11°-E。

壁 壁高 11~23 cm で、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅 18~26 cm, 深さ 4~6 cm, 断面形は皿状を呈し、調査区域外の未確認部分を除いて壁下を全周している。

床 平坦である。

ピット 2か所 (P1, P2) 検出されている。P1, P2 は、径 32~60 cm, 深さ 28~50 cm で、主

柱穴と思われる。

覆土 自然堆積。

遺物 北西部床面や東側中央部床面から土師器の甕片や坏片等が出土している。北西コーナーから第96図1の甕は横位の状態で、2の罎は斜位の状態で出土している。

所見 本跡は、第40号住居跡より古く、第41号住居跡や重複している全ての土坑より新しい。北東側が調査区域外のため、炉を含めた遺構全体の確認はできなかったが、遺構の形態や遺物等から古墳時代前期の住居跡と思われる。

第40号住居跡（第95図）

位置 調査区の中央部東寄り、B2i6区を中心に確認されているが、東側は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡の北西部は第16号住居跡の南東部を、西部は第41号住居跡の東部や第88号土坑を、南部は第61号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.52m、短軸（1.16）mのほぼ方形を呈するものと推定される。

長軸方向 [N-15°-W.]

壁 壁高35～37cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、全体的によく踏み固められている。

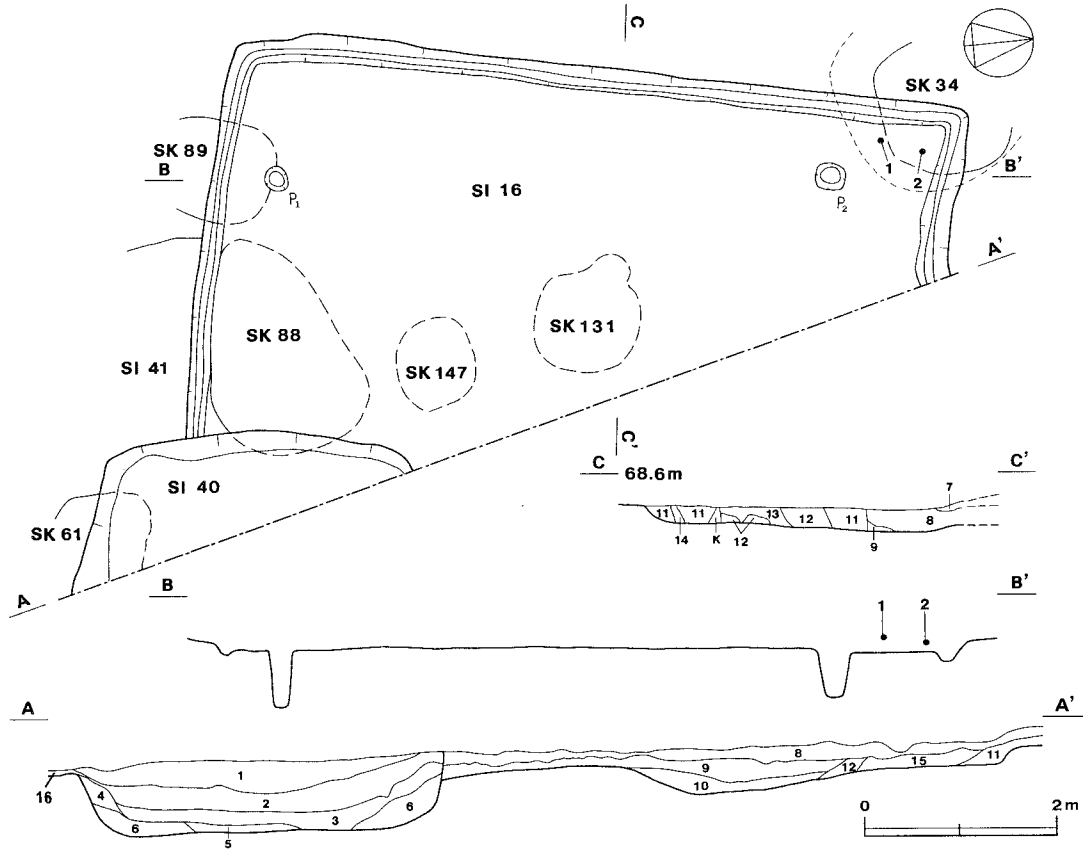
覆土 自然堆積。

遺物 全体的に出土遺物は少なく、床面直上から土師器の甕片等が出土しているが、全て細片である。

所見 本跡は、重複している全ての遺構より新しく、東側が調査区域外のため、ピット及び竈を含めた遺構全体の確認はできなかったが、遺構の形態や土師器片等の出土遺物から古墳時代後期以降の住居跡と推定される。

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第96図 1	甕 土師器	A 18.8	単孔式の甕。底部は突出した平底。胴部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は折り返しの複合口縁。	胴部外面ハケ目整形。口縁部外面横ナデ。内面ハケ目整形。胴部外面二次焼成を受け赤化。	砂粒・長石・石英・雲母・パミスにぶい橙色 普通	P117 PL18 60% 北西コーナー覆土
		B 12.8				
2	罎 土師器	C (5.7)	平底。胴部は球形状を呈し、口縁部は外傾する。	胴部外面へら磨き。口縁部外面縦位のへら磨き、内面横位のへら磨き。輪積み痕有り。底部外面一部煤付着。	砂粒・長石・石英にぶい橙色 普通	P118 PL18 75% 北西コーナー覆土
		A [10.2]				
		B 13.7				
		C 3.2				



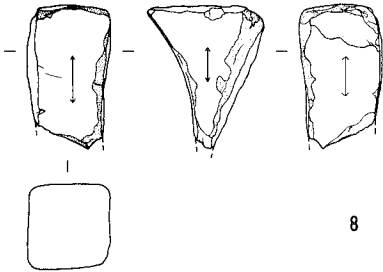
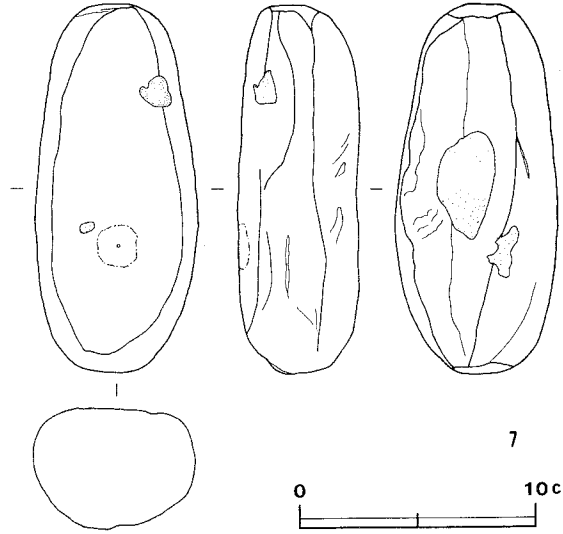
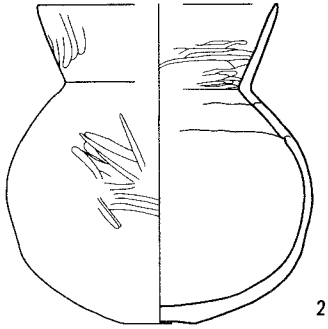
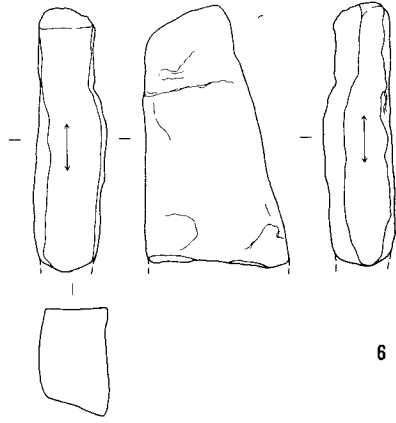
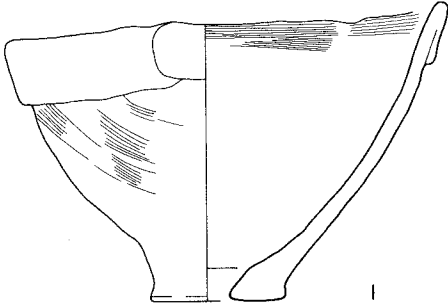
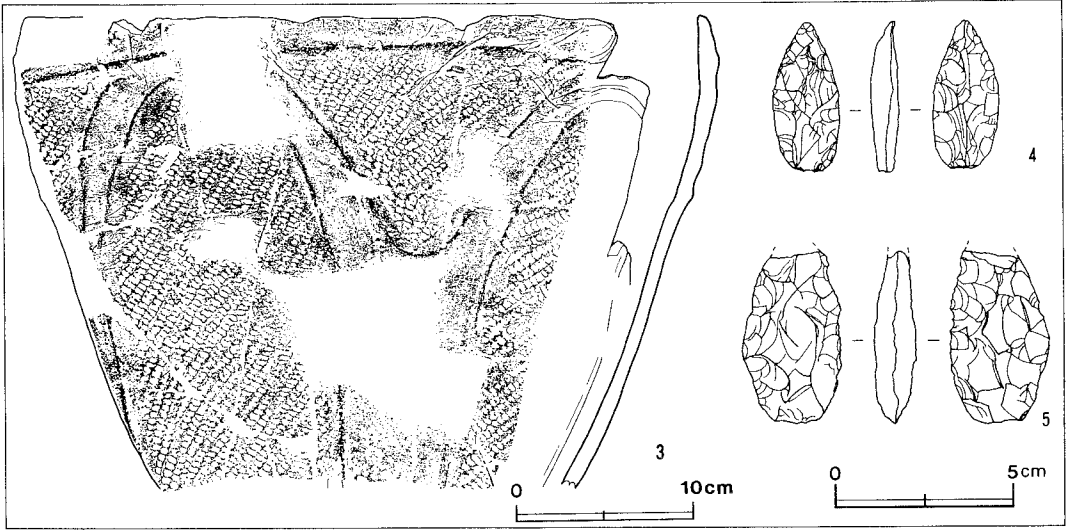
土層解説

- | | | | |
|---------|-----------------------|----------|-----------------------|
| 1 明褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子少量 | 9 におい褐色 | ローム中・小ブロック微量, ローム粒子中量 |
| 2 におい褐色 | ローム中・小ブロック中量, ローム粒子多量 | 10 褐色 | ローム小ブロック微量, ローム粒子中量 |
| 3 におい褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子中量 | 11 明褐色 | ローム粒子中量 |
| 4 におい褐色 | ローム粒子中量 | 12 におい褐色 | ローム粒子中量 |
| 5 におい褐色 | ローム大ブロック・パミス少量 | 13 におい褐色 | ローム粒子中量, パミス微量 |
| 6 におい褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子中量 | 14 明褐色 | ローム粒子中量, パミス微量 |
| 7 橙色 | ローム粒子中量 | 15 明褐色 | ローム少ブロック微量, ローム粒子中量 |
| 8 におい橙色 | ローム粒子中量 | 16 におい褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子中量 |

第95図 第16・40号住居跡実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第96図 3	深鉢形土器 (加曾利EIV)	A (39.2) B (27.0)	口縁部は内彎しながら立ち上がり, 口縁部を巡る1条の隆起線によって, 口縁部無文帯と胴部縄文施文帯とに区画されている。胴部は「V」字状や弧状に垂下する隆起線によって無文帯と縄文施文帯とに区画されている。地文には単節RLの回転縄文が斜位や横位に施されている。口縁部には隆起線が両側からせり上がることによって表出された, 推定4単位の小突起が見られる。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・ パミス におい褐色 普通	P119 30% 中央部覆土 (流れ込み)

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第96図 4	尖頭器	チャート	(4.2)	1.9	0.9	(6.3)	覆土	Q27 PL18
5	尖頭器	チャート	(4.9)	2.8	1.2	(14.8)	覆土	Q28 PL18



第96图 第16·40号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	石質	法 量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第96図 6	砥石	片麻岩	(11.3)	3.2	6.1	(277.0)	南東部覆土	Q29 PL18

第 40 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	石質	法 量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第96図 7	凹石	安山岩	15.8	6.8	5.2	889.2	南西部床面直上	Q56 磨石としても使用。 PL18
8	砥石	凝灰岩	(6.2)	3.6	4.9	(96.7)	覆土	Q57 PL18

第 17 号住居跡 (第 97 図)

位置 調査区の中央部、B2i₃区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北コーナーは第 90 号土坑を、東コーナーは第 95 号土坑を、南部は第 96 号土坑を、西コーナーは第 112 号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 7.02 m、短軸 6.92 m の方形を呈している。

長軸方向 N - 59° - E。

壁 壁高 15 ~ 42 cm で、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅 16 ~ 30 cm、深さ 4 ~ 7 cm、断面形は皿状を呈し、壁下を全周している。

床 平坦で、柱穴を結んだ線の内側及び竈付近はよく踏み固められている。

ピット 7 か所 (P₁ ~ P₇) 検出されている。P₁ ~ P₄ は、径 26 ~ 54 cm、深さ 90 ~ 104 cm で、支柱穴と思われる。P₅ は、径 20 cm、深さ 29 cm で、出入り口に伴う梯子ピットと思われる。P₆、P₇ は、径 20 ~ 33 cm、深さ 63 ~ 68 cm であるが、性格は不明である。

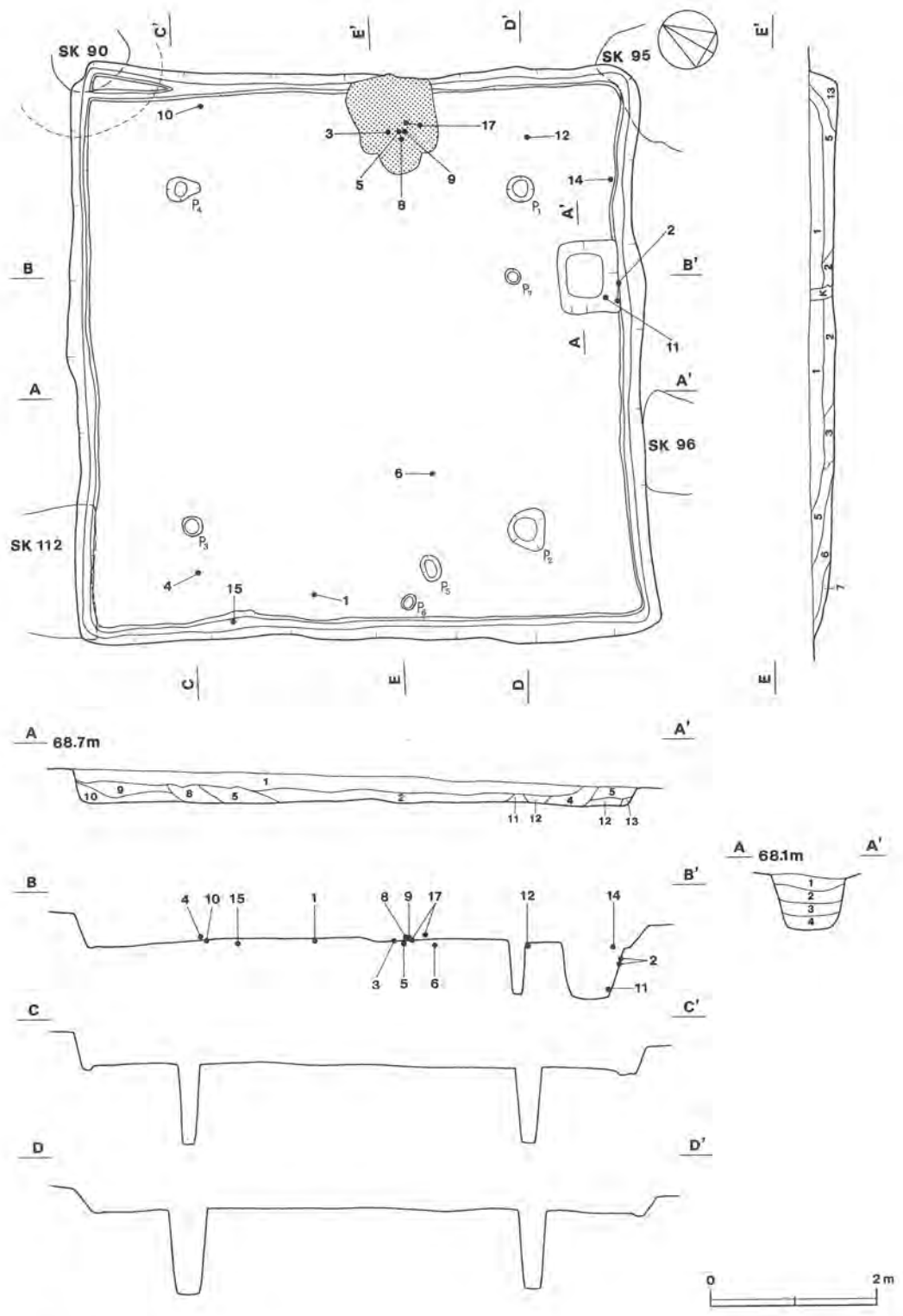
貯蔵穴 南東壁際中央部からやや東コーナー寄りに検出されている。平面形は長軸 90 cm、短軸 74 cm の長方形を呈し、断面形は深さ 68 cm の逆台形を呈している。

竈 北東壁中央部からやや東コーナー寄りに、砂質粘土で構築されている。規模は、長さ 138 cm、幅 130 cm を測る。火床は熱を受けて赤変硬化している。煙道部の壁外への掘り込みは見られず、煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

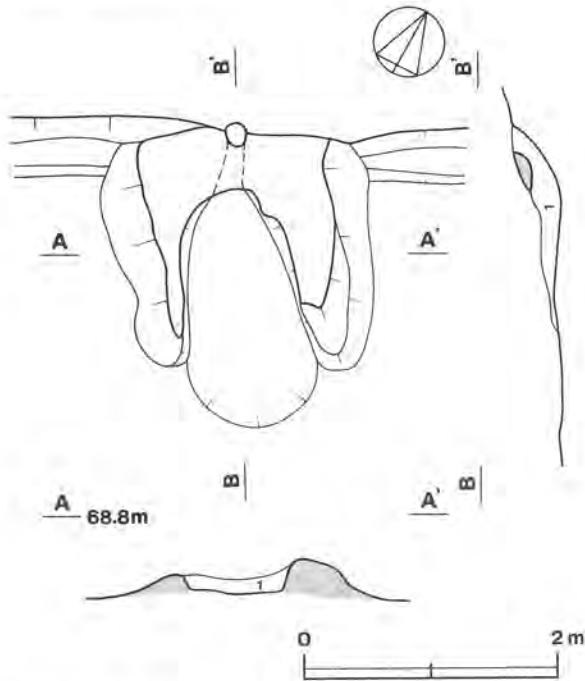
遺物 全域から土師器の甕、甌、坏及びその破片が、多量に出土しているが、竈付近及び東部から土師器の甕、甌、埴、壺等が集中して出土している。第 99 図 1 の甕は南西壁際中央部から横位の状態で、3 の甕は竈内から逆位の状態で、14 の埴は東コーナー付近から正位の状態で出土している。石製模造品の石剣及び有孔円板は覆土中層から出土している。

所見 本跡は、重複している全ての土坑より新しく、遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住



第97图 第17号住居跡实测图

居跡と思われる。



住居跡土層解説

- 1 暗褐色ローム粒子少量、パミス少量
- 2 黒褐色炭化物・ローム粒子少量
- 3 黒褐色ローム粒子・パミス少量
- 4 暗褐色ローム粒子中量
- 5 黒褐色炭化物・ローム粒子少量
- 6 暗褐色焼土粒子・ローム粒子少量
- 7 褐色焼土粒子・ローム小ブロック少量、ローム粒子中量
- 8 黒褐色焼土粒子中量、ローム粒子少量
- 9 黒褐色炭化物少量、ローム粒子中量
- 10 黒褐色炭化物少量、炭化粒子中量、ローム粒子少量
- 11 暗褐色炭化物少量、ローム粒子中量
- 12 暗褐色ローム粒子少量
- 13 黒褐色ローム粒子少量

竈土層解説

- 1 暗赤褐色焼土粒子・ローム粒子多量

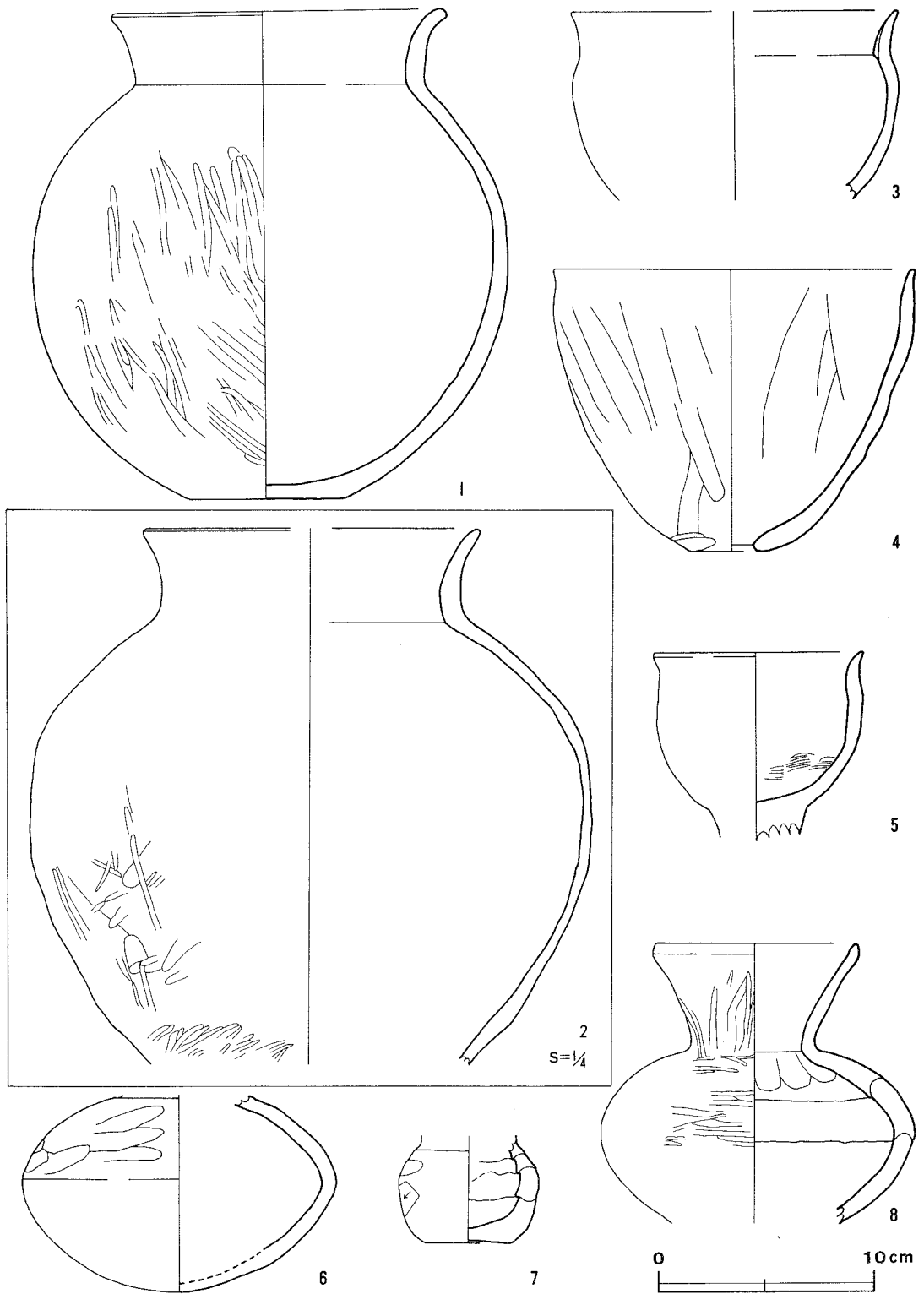
貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック中量、ローム小ブロック多量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック中量、ローム小ブロック多量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・パミス小ブロック中量
- 4 黒褐色 ローム中ブロック少量、パミス小ブロック多量

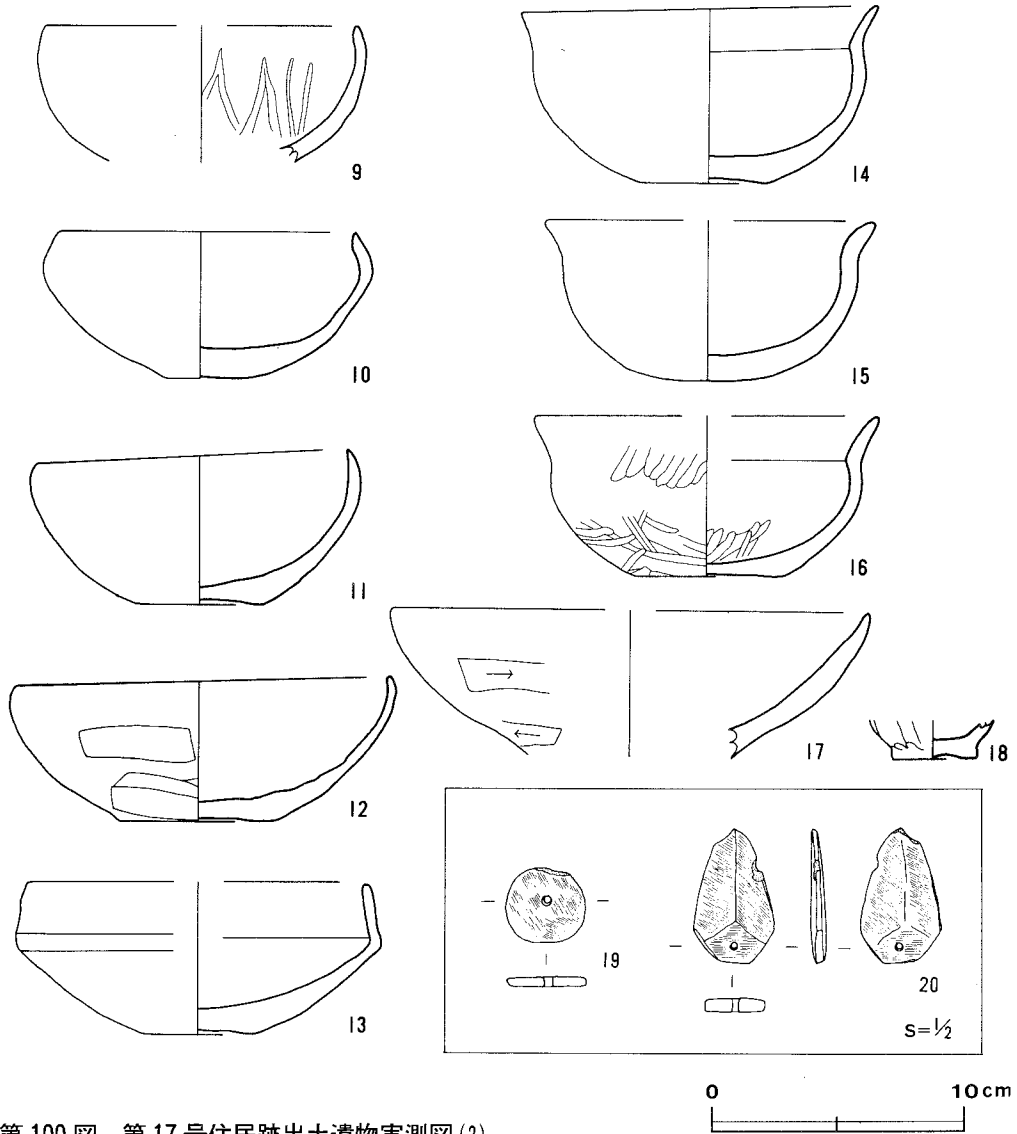
第98図 第17号住居跡竈実測図

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99図 1	甕 土師器	A 15.8 B 23.3 C 7.2	平底。胴部は球形状を呈し、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、上位で外反する。	底部へラ削り。胴部外面へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。胴部煤付着。一部磨減。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	P120 PL20 95% 南西壁際 中央部床面直上
2	甕 土師器	A [20.9] B (33.6)	胴部は球形状を呈し、最大径を上位に持つ。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、上位で外反する。	胴部外面へラナデ後へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面煤付着。	砂粒・長石・石英 にふい橙色 普通	P121 PL20 40% 貯蔵穴内覆土
3	小形甕 土師器	A [15.4] B (9.0)	胴部は球形状を呈し、最大径を上位に持つ。口縁部は緩く外反し、内側に折り返す口縁。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面二次焼成を受け赤化。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	P122 30% 竈内
4	甕 土師器	A 17.0 B 13.4 C 3.8 孔径 2.4	単孔式の甕。胴部は外上方に開き、口縁部はやや内彎し、口唇部をわずかにつまみ上げる。	底部へラ削り。胴部内・外面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面煤付着。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P125 PL20 90% 西コーナー床 面直上
5	高坏 土師器	A 9.8 B 9.0	体部は緩く内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾気味に立ち上がる。脚部欠損。	胴部内面ハケ目整形。口縁部内・外面横ナデ。体部煤付着。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P123 PL20 70% 竈内
6	埴 土師器	B (9.4)	丸底。胴部は偏平で中位で強く張る。口縁部欠損。	底部へラ削り。胴部外面へラナデ。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	P124 PL20 60% 中央部床面直上
7	埴 土師器	B (5.1) C [4.0]	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	底部へラ削り。胴部外面へラ削り。輪積み痕有り。	砂粒・長石・ 石英・スコリア 橙色 普通	P127 40% 北東部覆土
8	埴 土師器	A 9.4 B (13.3)	胴部は球形状を呈するが、中位で強く張る。口縁部は外傾しながら立ち上がり、口唇部で弱く内傾する。	胴部外面横位のへラ磨き、内面上位に指頭圧痕有り。頸部から口縁部にかけて縦位のへラ磨き。輪積み痕有り。	砂粒・長石・ 石英・雲母 明赤褐色 普通	P126 PL20 70% 竈内



第 99 图 第 17 号住居跡出土遺物実測図 (1)



第100図 第17号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 9	坏 土師器	A (12.6) B (5.6)	体部は内彎しながら口縁部に至る。口縁部はやや内彎する。	体部内面へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母にぶい橙色 普通	P135 20% 竈内
10	坏 土師器	A 12.0 B 5.9 C 3.0	偏平な平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部で内傾する。	底部へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリアにぶい橙色 普通	P129 PL20 80% 北コーナー付 近床面直上
11	坏 土師器	A 12.3 B 6.3 C 4.8	上げ底気味の平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は内彎する。	底部へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。体部外面煤付着。	砂粒・長石・石英にぶい黄橙色 普通	P130 PL20 80% 貯蔵穴内覆土
12	坏 土師器	A 14.8 B 5.9 C 6.2	上げ底気味の平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はやや内彎する。	底部へラ削り。体部外面へラ削り。内・外面磨滅が著しい。	砂粒・長石・石英・スコリアにぶい橙色 不良	P131 PL20 85% 東コーナー床面直上

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第100図 13	坏 土師器	A [13.6] B 6.1 C [4.4]	上げ底気味の平底。体部は皿状を呈し、口縁部は内傾する。体部との境に明瞭な稜を有する。	底部へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・雲母・スコリアにふい橙色普通	P133 PL20 45% 南東部覆土
14	埴 土師器	A 14.2 B 7.2 C 4.8	上げ底気味の平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。	口縁部内・外面横ナデ。体部二次焼成を受け赤化。	砂粒・長石・石英・雲母・パミス明赤褐色普通	P128 PL20 80% 東コーナー床面直上
15	埴 土師器	A [13.2] B 6.5	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外傾する。	底部へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英にふい橙色普通	P132 PL20 65% 南西壁溝内
16	埴 土師器	A [13.8] B 6.5 C 5.8	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外傾する。	体部内・外面へラ磨き。頸部外面へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア橙色普通	P134 35% 貯蔵穴内覆土
17	高坏 土師器	A [18.5]	脚部欠損。坏部は内彎しながら立ち上がる。	坏部外面へラ削り。坏部外面磨減が著しい。	砂粒・長石・石英赤褐色普通	P136 30% 竈内
18	ミニチュア 土器 土師器	B (1.6) C 3.2	突出した平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。	底部へラ削り。胴部下端へラ削り。	砂粒・長石・雲母にふい橙色普通	P137 80% 北西部覆土

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第100図19	有孔円板	滑石	2.0	2.1	0.3	1.8	北東部覆土	Q30 孔径0.2cm PL20
20	石剣	滑石	(3.6)	2.2	0.4	(3.7)	北東部覆土	Q31 孔径0.1cm PL20

第18号住居跡(第101図)

位置 調査区の中央部、B2g₂区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北西部は第19号住居跡の南東部を、北東部は第32号住居跡の南西部をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸6.26m、短軸6.24mの方形を呈している。

長軸方向 N-75°-E。

壁 壁高22~30cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅10~12cm、深さ8cm、断面形はU字状を呈し、壁下を全周している。

床 平坦で、柱穴を結んだ線の内側や竈付近はよく踏み固められている。

ピット 5か所(P₁~P₅)検出されている。P₁~P₄は、径22~30cm、深さ57~63cmで、主柱穴と思われる。P₅は、径18cm、深さ50cmで、出入りに伴う梯子ピットと思われる。

貯蔵穴 南壁際中央部からやや東寄りに検出されている。平面形は長軸110cm、短軸76cmの長方形を呈し、断面形は深さ60cmの長方形を呈している。

竈 東壁中央部に、砂質粘土で構築されている。規模は、長さ126cm、幅152cmを測ると思われる。攪乱のため東側の袖部は消失している。火床は熱を受けて赤変硬化している。煙道部の壁外への掘り込みは見られず、煙道は火床から急な角度で外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 出土遺物は全体的に多く、特に、竈付近及び貯蔵穴から土師器の甕、坏、壺等が出土している。第 103 図 1 の甕は南側中央部床面からつぶれた状態で、竈内から 2 の甕はつぶれた状態で出土している。第 104 図 13 の高坏は竈内から逆位の状態で出土しているが、この高坏は支脚として使用したものと思われる。縄文式土器片を二次加工して作られたと思われる 15 の紡錘車は北西部床面から出土している。

所見 本跡は、第 19・32 号住居跡より新しく、遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住居跡と思われる。

第 19 号住居跡 (第 101 図)

位置 調査区の中央部、B1g₁ 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北部は第 15 号住居跡の南部を、南西コーナーは第 138 号土坑をそれぞれ掘り込み、南東部は第 18 号住居跡の北西部に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸 7.12 m、短軸 7.10 m の方形を呈している。

長軸方向 N - 2° - W。

壁 壁高 19 ~ 35 cm で、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、柱穴を結んだ線の内側はよく踏み固められている。

ピット 6 か所 (P₁ ~ P₆) 検出されている。P₁ ~ P₄ は、径 24 ~ 34 cm、深さ 50 ~ 69 cm で、主柱穴と思われる。P₅ は、径 26 cm、深さ 35 cm で、出入り口に伴う梯子ピットと思われる。P₆ は、径 26 cm、深さ 60 cm であるが、性格は不明である。

貯蔵穴 南西コーナーに検出されている。平面形は長軸 76 cm、短軸 62 cm の長方形を呈し、断面形は深さ 44 cm の逆台形状を呈している。

覆土 自然堆積。

遺物 全域にわたって、床面或は覆土下層から、土師器の甕、坏やその破片が出土している。土製品の勾玉や第 105 図 24 の器台は北西部床面から逆位の状態で、25 の装飾器台は中央部西寄り床面から横位の状態で出土している。28 の手捏土器は中央部東寄り床面から正位の状態で出土している。

所見 本跡は、第 18 号住居跡より古く、第 15 号住居跡、第 138 号土坑より新しい。器台や高坏が数多く出土していることから、祭祀に関係する住居跡の可能性も考えられ、遺構の形態や遺物等から古墳時代中期の住居跡と思われる。

第 32 号住居跡 (第 101 図)

位置 調査区の中央部、B2f₃ 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南西部は、第18号住居跡の北東部に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸3.70m、短軸〔3.64〕mのほぼ方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N-13°-W。

壁 壁高18~28cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦である。

ピット 1か所(P₁)検出されている。P₁は、径18cm、深さ50cmで、出入り口に伴う梯子ピットと思われる。

竈 北壁中央部に、砂質粘土で構築されている。規模は、長さ53cm、幅73cmを測る。東側袖部の半分程は削平されている。火床は赤変硬化している。煙道部の壁外への掘り込みは見られず、煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

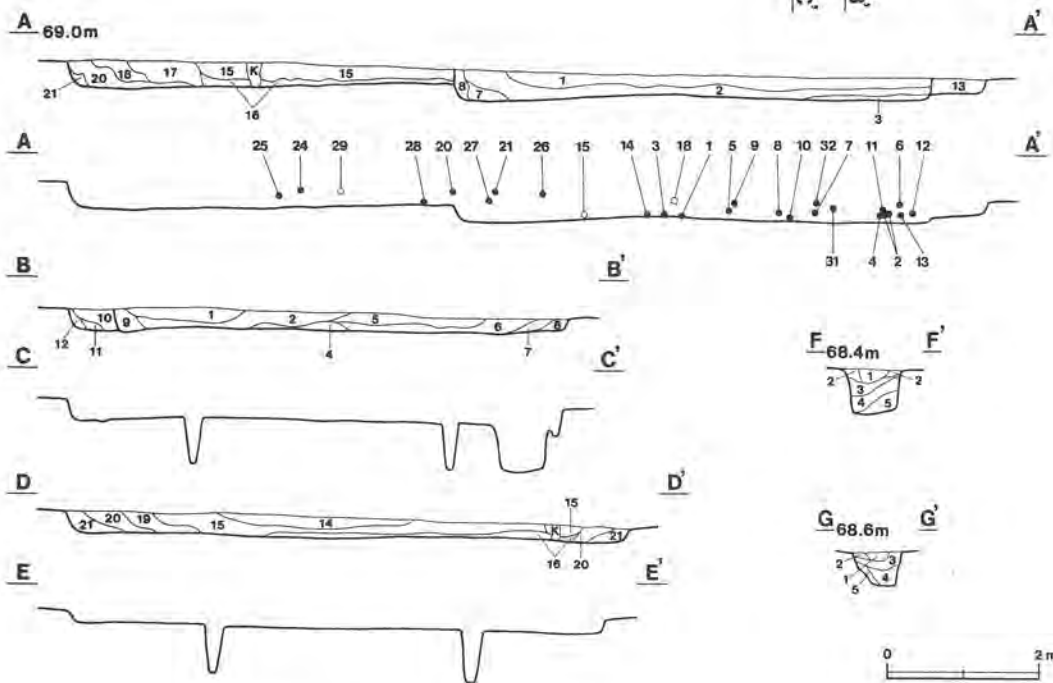
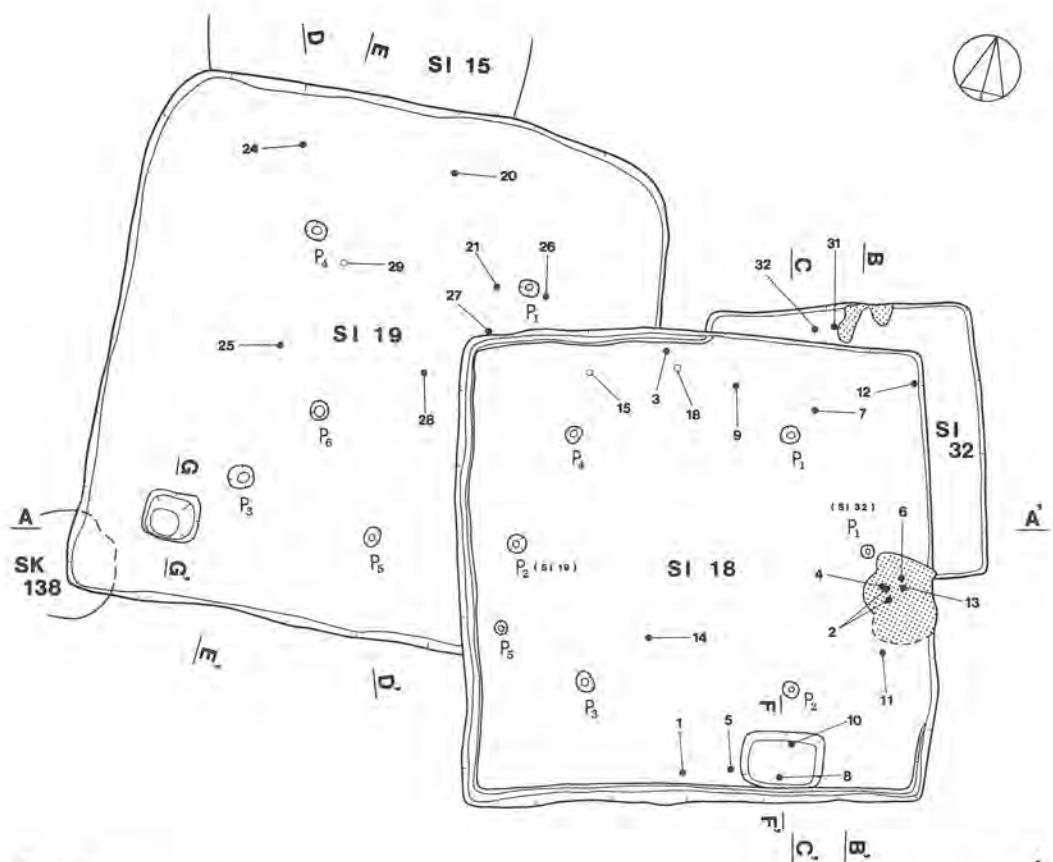
覆土 自然堆積。

遺物 竈内から土師器の甕や坏片が出土している。第105図31の小形甕は竈袖部付近から正位の状態で、32の甕は竈西側床面からつぶれた状態で出土している。

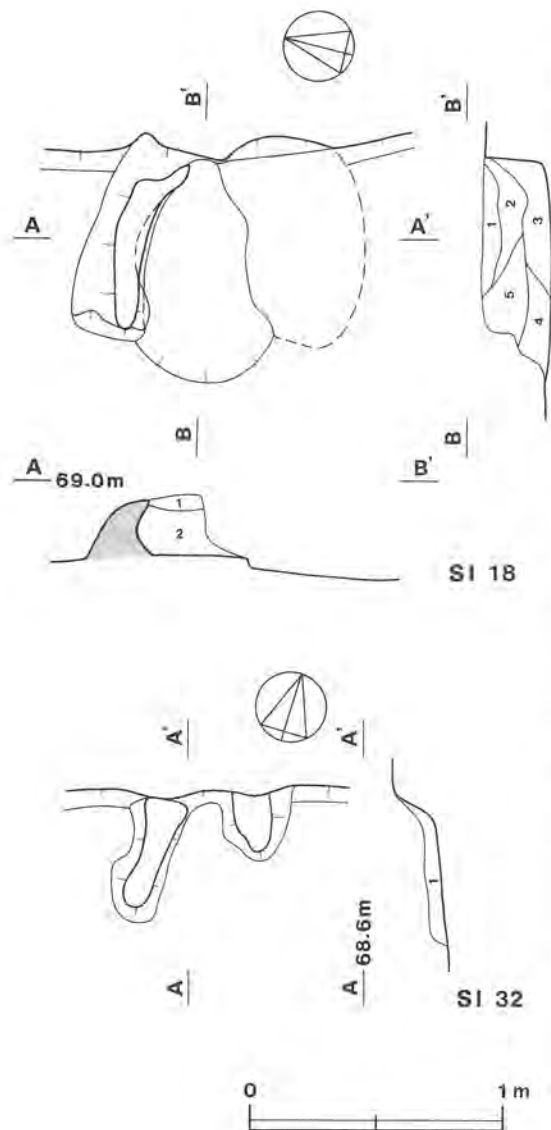
所見 本跡は、第18号住居跡より古く、遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住居跡と思われる。

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103図 1	甕 土師器	A 16.5 B 20.9 C 6.4	上げ底気味の平底。胴部は球形状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がり、上位で大きく開く。	底部へラ削り。胴部外面へラ削り。頸部へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・礫 にぶい橙色 普通	P138 PL22 95% 南壁際中央部床面直上
2	甕 土師器	A 15.8 B 15.3 C 6.7	偏平な平底。胴部は球形状を呈し、最大径を上位に持つ。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、上位で外反する。胴部との境に弱い稜を有する。	底部へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。二次焼成を受け、磨滅が著しい。	砂粒・長石・石英・バミス 橙色 普通	P139 PL22 95% 竈内
3	甕 土師器	A 17.2 B (11.0)	胴下半部欠損。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、上位で開く。	胴部内・外面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P140 30% 北壁際中央部床面直上
4	甕 土師器	B (22.4) C 7.2	突出した平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	胴部外面二次焼成を受け赤化、一部煤付着。	砂粒・長石 黄褐色 普通	P141 30% 竈内
5	小形甕 土師器	A 12.2 B (9.3)	胴部は球形状を呈し、口縁部は「く」の字状に立ち上がる。	胴部外面へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面二次焼成を受け赤化、一部煤付着。	砂粒・長石・バミス にぶい橙色 普通	P142 PL22 50% 南壁際中央部床面直上
6	甕 土師器	B (6.9) C 6.0	平底。胴部は内彎気味に立ち上がる。	底部へラ削り。胴部内・外面へラナデ。胴部外面二次焼成を受け磨滅。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 不良	P143 30% 竈内
7	坏 土師器	A 13.9 B 5.2	丸底。体部は内彎して外上方に開く。口縁部との境の内側に弱い稜を有する。	体部外面へラナデ。口縁部内面横ナデ。	砂粒・バミス 橙色 普通	P144 PL22 100% 北東部床面直上
8	坏 土師器	A 15.3 B 5.3	丸底。体部は内彎して外上方に開く。	底部へラ削り。体部外面へラナデ。口縁部内・外面へラ磨き。底部煤付着。	砂粒・長石 橙色 普通	P145 PL22 90% 南壁際中央部床面直上



第101图 第18·19·32号住居迹实测图



第18・19・32号住居跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック微量, ローム粒子中量, パミス少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子中量
- 3 黒褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック少量, ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子中量
- 6 黒褐色 焼土粒子微量, ローム粒子中量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック微量, ローム粒子中量
- 8 暗褐色 ローム粒子中量
- 9 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量
- 10 暗褐色 炭化粒子微量, ローム粒子中量
- 11 暗褐色 焼土粒子微量, ローム中ブロック・ローム粒子中量
- 12 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子中量
- 13 暗褐色 ローム中ブロック少量, ローム小ブロック中量
- 14 暗褐色 ローム粒子少量
- 15 黒褐色 ローム粒子少量
- 16 褐色 ローム大ブロック多量, ローム粒子中量
- 17 黒褐色 ローム粒子少量
- 18 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子中量
- 19 暗褐色 炭化物少量, ローム粒子中量
- 20 黒褐色 ローム粒子多量
- 21 褐色 ローム大ブロック多量

第18号住居跡竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土中ブロック中量, 焼土小ブロック多量
- 2 暗赤褐色 焼土中ブロック・砂質粘土中量, 焼土小ブロック多量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子多量
- 4 暗赤褐色 焼土大ブロック微量, 焼土中ブロック中量, 焼土小ブロック多量
- 5 暗赤褐色 焼土大ブロック中量, 焼土中ブロック・焼土小ブロック多量

第18号住居跡貯蔵穴土層解説

- 1 黒褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック多量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 3 暗褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 4 極暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 5 暗褐色 炭化物中量, パミス小ブロック多量

第19号住居跡貯蔵穴土層解説

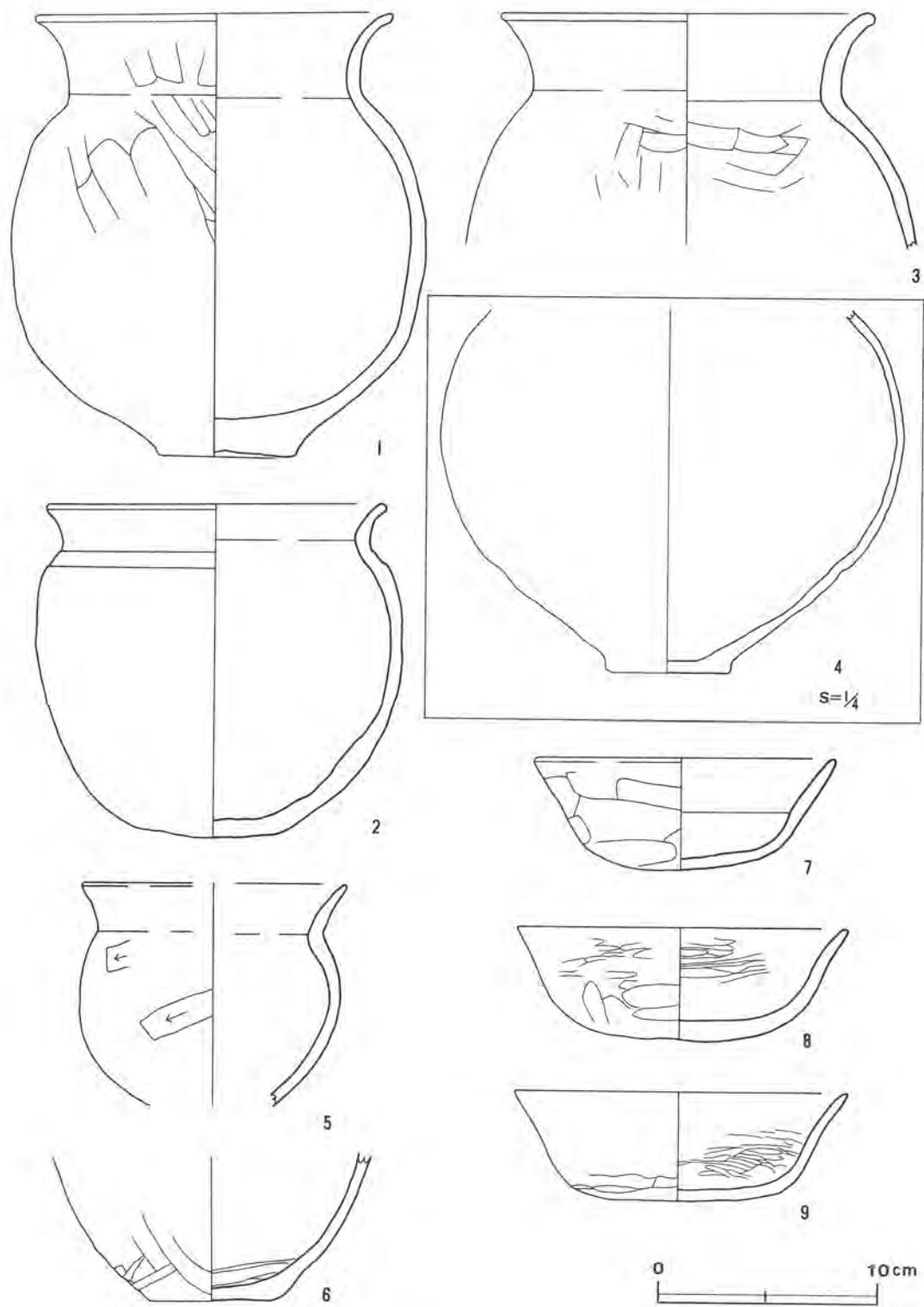
- 1 暗褐色 炭化材・ローム中ブロック少量, ローム小ブロック多量
- 2 黒褐色 炭化物少量, ローム小ブロック多量
- 3 暗褐色 炭化物少量, ローム小ブロック多量
- 4 黒褐色 ローム小ブロック多量
- 5 極暗褐色 ローム大ブロック中量, パミス小ブロック多量

第32号住居跡竈土層解説

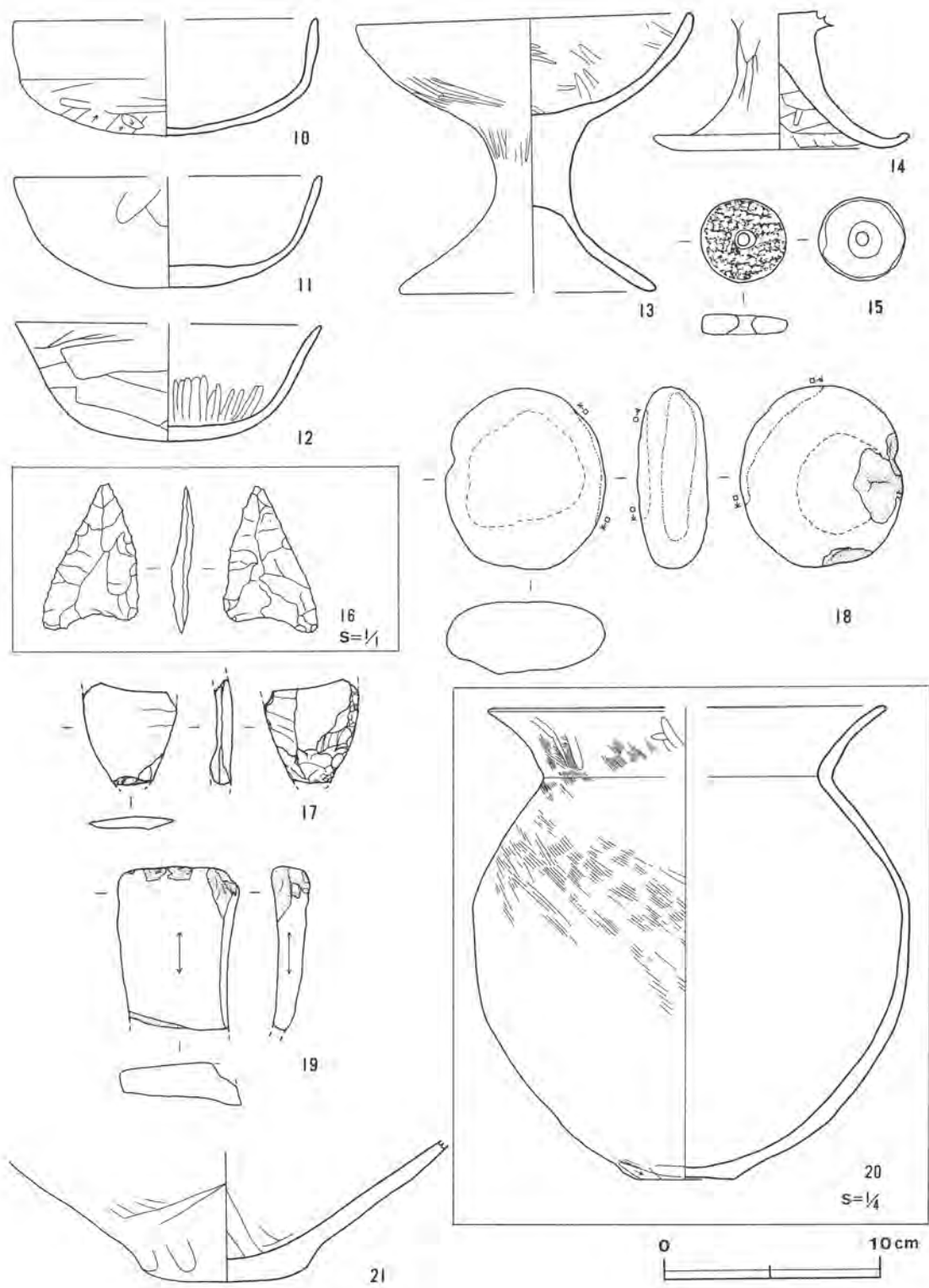
- 1 黒褐色 焼土小ブロック・炭化物中量, ローム粒子多量

第102図 第18・32号住居跡竈実測図

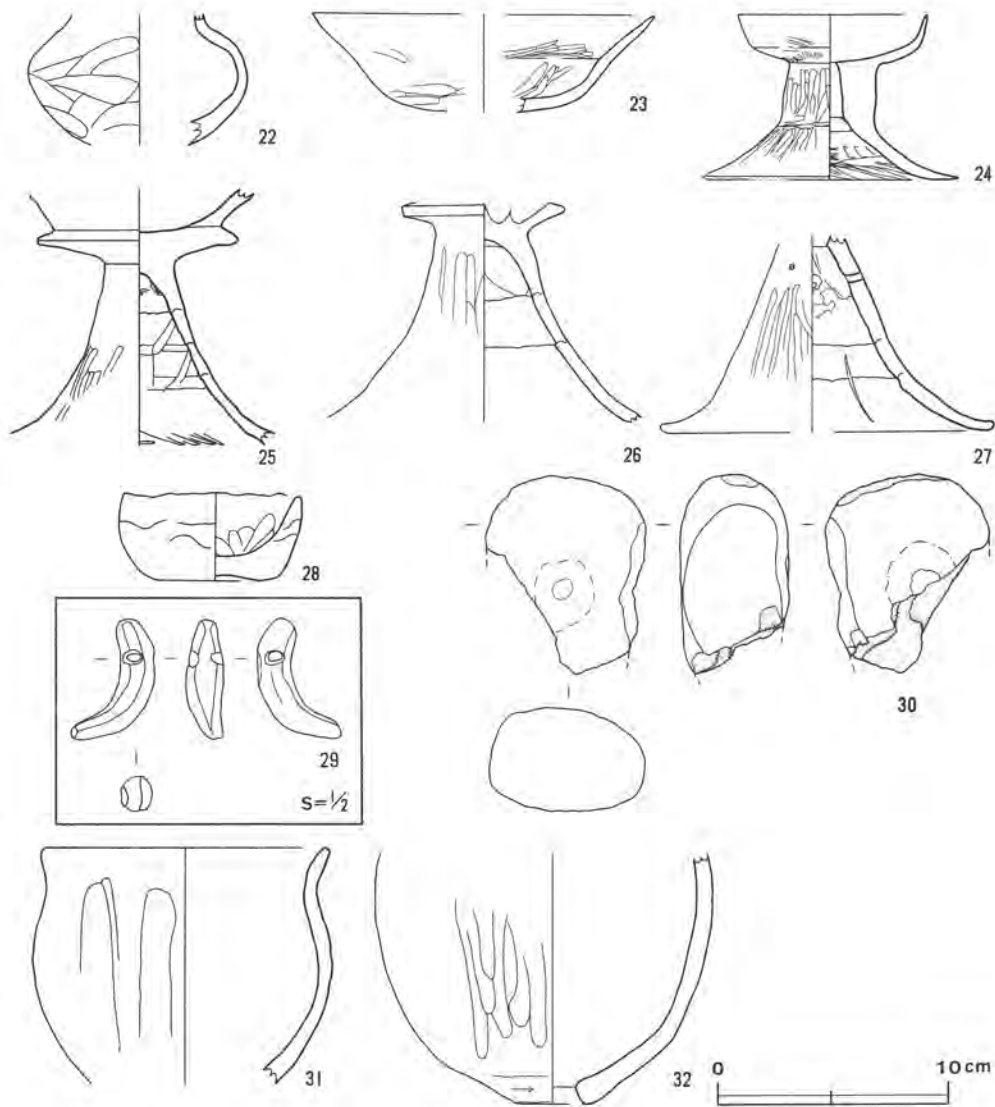
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103図 9	坏 土師器	A 15.4 B 5.2 C 4.0	丸底。体部は内彎して外上方に開く。	底部へラ削り。体部下端へラナデ。体部内面へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・パミス 明赤褐色 普通	P146 PL22 90% 北東部床面直上
第104図 10	坏 土師器	A 14.5 B 5.5	丸底。体部は内彎して外上方に開き、口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。体部との境に稜を有する。	底部へラ削り。体部へラ削り後へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・スコリア 明赤褐色 普通	P147 PL22 70% 貯蔵穴内覆土
11	坏 土師器	A (14.5) B 5.3 C 3.0	丸底。体部は内彎しながら立ち上がる。	底部へラ削り。体部外面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P148 60% 南東部床面直上



第 103 图 第 18・19・32 号住居跡出土遺物実測図(1)



第 104 图 第 18 · 19 · 32 号住居跡出土遺物実測図 (2)



第105図 第18・19・32号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第104図 12	坏 土師器	A 14.6 B 5.6	丸底。体部は内彎して外上方に開く。	底部へら削り。体部外面へらナデ、内面放射状のへら磨き(暗文)。底部煤付着。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P149 60% 北東コーナー体面直上
13	高坏 土師器	A 16.0 B 5.0 D 12.0 E 8.2	脚部上位は柱状を呈し、下位で大きく「ハ」の字状に開く。坏部は半球状を呈し、内彎しながら立ち上がる。	脚部外面縦位の丁寧なへら磨き。坏部内・外面丁寧なへら磨き。	砂粒・長石・スコリア 橙色 普通	P150 PL22 90% 甕内逆位

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第104図14	高坏土師器	D 12.0 E (6.6)	坏部欠損。脚部はラッパ状を呈し、裾部で水平近くに広がり、端部でわずかに上方に向かう。	脚部外面へラナデ、内面上位指ナデ、中位へラナデ。裾部内面へラ当て痕有り。	砂粒・長石・スコリアにぶい橙色普通	P151 50% 中央部床面直上

図版番号	器種	法量				出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第104図15	紡錘車	4.0	4.0	1.0	18.3	北西部床面直上	DP3 孔径0.4cm PL22

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第104図16	石鉢	チャート	2.3	1.5	0.3	(0.8)	北東部覆土	Q32 PL22
17	スクレイパー	チャート	(4.8)	4.4	1.1	(14.1)	北東部覆土	Q33 PL22
18	磨石	安山岩	8.6	7.5	3.3	(297.0)	北西部床面直上	Q34 PL22
19	砥石	流紋岩	(7.8)	5.8	1.8	(81.4)	南東部覆土	Q35 PL22

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第104図20	甕土師器	A [24.6] B 29.8 C 6.4	平底。胴部は球形を呈し、やや上位に最大径を持つ。口縁部は「く」の字状に外反し、上位で大きく開く。	底部へラ削り。胴部外面ハケ目整形。口縁部外面ハケ目整形後へラ磨き。口縁部内面横ナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P152 50% 北東部床面直上
21	甕土師器	B (6.6) C 7.6	底部片。突出した平底。肥厚した底部から外上方に立ち上がる。	底部へラ削り。胴部内・外面へラナデ。	砂粒・長石・礫 褐色 普通	P153 10% 北東部床面直上
第105図22	埴土師器	B (5.8)	胴部は球形を呈するが、中位で強く張る。	胴部外面へラナデ。	砂粒・長石・石英・スコリアにぶい橙色普通	P154 PL22 50% 南西部覆土
23	坏土師器	A [14.8] B (4.4)	体部は内彎して外上方に開く。口縁部との境に弱い稜を有する。	体部下端へラ削り。体部外面へラ磨き、内面放射状のへラ磨き(暗文)。口縁部内・外面へラ磨き。体部外面一部煤付着。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P155 30% 南東部覆土
24	器台土師器	A 8.3 B 7.3 D 11.2 E 4.9	脚部は円筒状を呈し、裾部で大きく外反して開く。器受部は皿状を呈し、口縁部ではほぼ垂直に立ち上がる。	脚部外面全体縦位のへラ磨き、裾部との境に横位のへラ磨き、内面上位指ナデ、裾部内面へラ磨き後横ナデ、へラ当て痕有り。	砂粒 橙色 普通	P156 PL22 90% 北西部床面直上
25	裝飾器台土師器	B (10.8) C (7.5)	脚部はラッパ状に開く。器受部は横外方に開いて、器受部下位の裝飾用段に至り、再び外反する。	脚部外面縦位のへラ磨き、内面上位指ナデ、中位から下位にかけてへラ磨き。輪積み痕有り。	砂粒・長石・スコリアにぶい黄橙色普通	P157 PL22 60% 中央部床面直上
26	裝飾器台土師器	B (9.7) C (8.3)	脚部はラッパ状に開く。器受部は横外方に開く。器受部の裝飾用段は欠損。	脚部外面縦位のへラ磨き、内面上位指ナデ。輪積み痕有り。外面一部煤付着。	砂粒・長石・スコリア 明赤褐色 普通	P158 PL22 50% 北東部床面直上
27	器台土師器	D [15.4] E (8.7)	器受部欠損。脚部はラッパ状を呈し、裾部で大きく開く。円孔(径3mm)が4か所穿たれている。	脚部外面へラ磨き、内面上位指ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・長石・スコリアにぶい黄橙色普通	P159 PL22 30% 北東部床面直上
28	手捏土器土師器	A [7.9] B 3.8 C 5.7	上げ底気味の平底。体部は直立気味に立ち上がり、口縁部でわずかに内傾する。	底部へラ削り。内面に指頭圧痕有り。輪積み痕有り。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P160 65% 中央部床面直上

図版番号	器種	法量				出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第105図29	土製勾玉	3.2	2.2	1.0	3.0	中央部床面直上	DP34 孔径0.3cm PL22

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第105図30	凹石	安山岩	(8.7)	6.5	4.8	(285.5)	覆土	Q36

第 32 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第105図 31	小形甕 土師器	A 12.4 B (10.5)	胴部は球形状を呈し、口縁部は軽く外反する。	胴部外面縦位のヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面一部煤付着。	砂粒・長石・石英・雲母にふい橙色普通	P228 PL22 45% 竈内
32	甑 土師器	B 11.0 C 3.4 孔径 2.6	単孔式の甑。胴部は内彎しながら立ち上がる。	底部ヘラ削り。胴部外面縦位のヘラ磨き。胴部外面煤付着。	砂粒・長石・石英にふい褐色普通	P229 PL22 35% 竈西側床面直上

第 22 号住居跡 (第 106 図)

位置 調査区の中央部、B2f4区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北東部は第 26 号住居跡の西コーナーに掘り込まれ、北西部は第 92 号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 4.76 m、短軸 [3.08] m の方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N - 15° - E。

壁 壁高 25 ~ 39 cm で、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅 14 ~ 18 cm、深さ 4 cm、断面形は皿状を呈し、壁下を全周している。

床 平坦で、柱穴を結んだ線の内側及び竈付近はよく踏み固められている。

ピット 5 か所 (P₁ ~ P₅) 検出されている。P₁ ~ P₄ は、径 30 ~ 34 cm、深さ 60 ~ 68 cm で、主柱穴と思われる。P₅ は、径 26 cm、深さ 56 cm で、出入り口に伴う梯子ピットと思われる。

貯蔵穴 南西コーナーに検出されている。平面形は長軸 100 cm、短軸 80 cm の長方形を呈し、断面形は深さ 52 cm の逆台形を呈している。

竈 北壁中央部からやや西寄りに付設されているが、攪乱を受け、袖部や煙道部は残っていない。規模は、長さ 80 cm、幅 86 cm と推定され、火床は赤変硬化している。煙道部は、壁を掘り込んだ痕跡はないので、壁の内側にあったものと思われる。

覆土 自然堆積。

遺物 竈周辺や貯蔵穴内及び南東部から土師器の甕、坏、埴とその破片が出土している。第 107 図 1 や 2 の坏は中央部覆土下層からそれぞれ正位の状態で出土している。

所見 本跡は、第26号住居跡より古く、第92号土坑より新しい。遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住居跡と思われる。

第26号住居跡（第106図）

位置 調査区の中央部東寄り、B2f₄区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の西コーナーは第22号住居跡の北東部を掘り込み、北西部は第91号土坑を掘り込み、第149号土坑と重複している。

規模と平面形 長軸4.96m、短軸4.80mの方形を呈している。

長軸方向 N-32°-W。

壁 壁高22～35cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅12～18cm、深さ2～6cm、断面形は皿状を呈し、壁下を全周している。

床 平坦で、柱穴を結んだ線の内側及び竈付近はよく踏み固められている。

ピット 5か所（P₁～P₅）検出されている。P₁～P₄は、径24～32cm、深さ44～62cmで、主柱穴と思われる。P₅は、径26cm、深さ54cmで、出入り口に伴う梯子ピットと思われる。

貯蔵穴 南コーナーに検出されている。平面形は長径74cm、短径62cmの楕円形を呈し、断面形は深さ56cmの逆台形状を呈している。

竈 北西壁中央部に付設されているが、袖部や煙道部は残っていない。規模は、長さ120cm、幅116cmと推定される。火床は赤変硬化している。煙道部は、壁を掘り込んだ痕跡がないので、壁の内側にあったものと思われる。

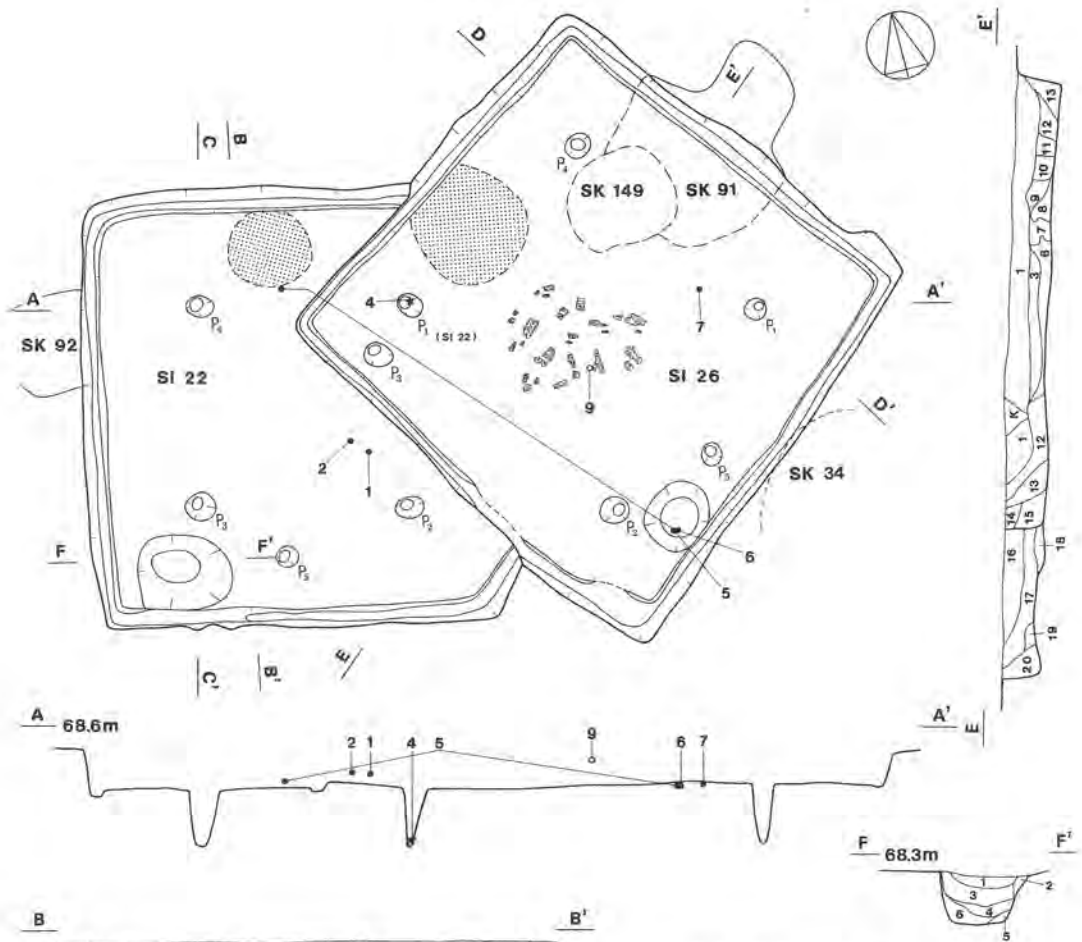
覆土 自然堆積。

遺物 竈付近及び貯蔵穴内から土師器の甕等が出土している。中央部床面から支脚が出土している。第107図5の甕は貯蔵穴内覆土から正位の状態で、7の小形壺は中央部床面から横位の状態で出土している。

所見 本跡は、第22号住居跡、第91号土坑より新しく、炭化材や焼土が床面や覆土下層から検出されていること等から焼失家屋と思われ、遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住居跡と思われる。

第22号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第107図 1	坏 土師器	A 13.0	上げ底気味の平底。体部は皿状を呈し、口縁部はやや内彎する。体部との境に稜を有する。	底部へラ削り。体部外面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・スコリアにぶい橙色普通	P175 PL24 80% 中央部覆土下層
		B 4.8				
		C 3.5				
2	坏 土師器	A 9.5	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、上位で直立する。体部内面の口縁部との境に稜を有する。	体部外面へラナデ後へラ磨き。口縁部内面横ナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P174 PL24 95% 中央部覆土下層
		B 5.3				
		C 3.0				



第22号住居跡貯蔵穴土層解説

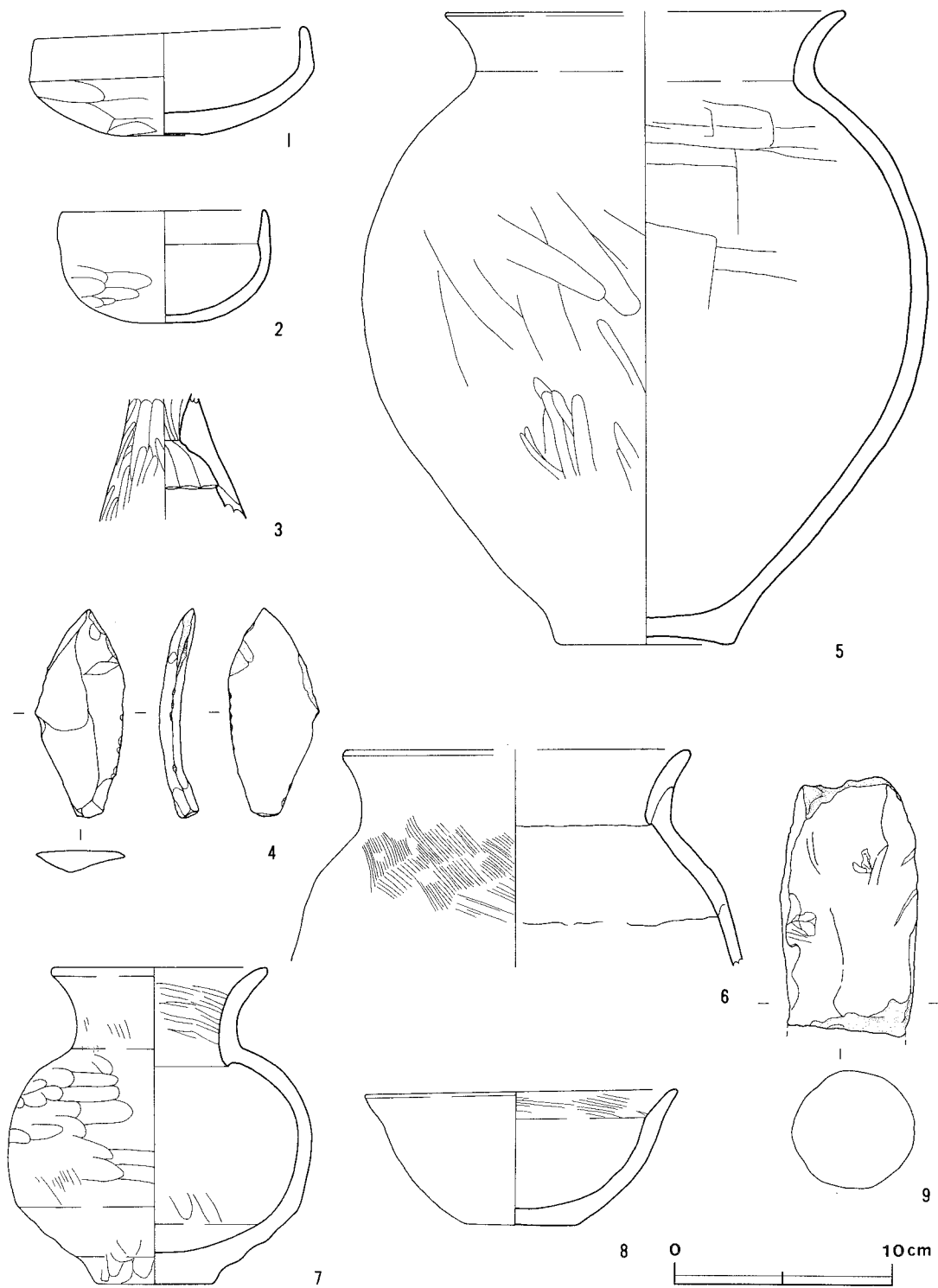
- 1 暗褐色 炭化物少量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ローム大ブロック・ローム小ブロック多量
- 3 暗褐色 炭化物中量, ローム中ブロック・ローム小ブロック多量
- 4 極暗褐色 炭化物中量, ローム大ブロック・ローム小ブロック多量
- 5 黒褐色 ローム大ブロック中量, ローム中ブロック多量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック・パミス小ブロック多量

第22・26号住居跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック微量, ローム粒子中量
- 3 暗褐色 炭化材微量, ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム大ブロック・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 焼土小ブロック・ローム粒子少量
- 6 暗褐色 炭化材中量
- 7 暗褐色 炭化物・ローム粒子少量
- 8 暗褐色 炭化物少量, ローム粒子中量
- 9 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 10 暗褐色 炭化材中量, ローム粒子少量
- 11 暗褐色 ローム大ブロック中量, ローム粒子少量
- 12 暗褐色 ローム中ブロック少量, ローム粒子中量
- 13 暗褐色 焼土小ブロック微量, ローム粒子中量
- 14 明褐色 ローム粒子中量
- 15 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子中量
- 16 明褐色 ローム中ブロック微量, ローム粒子中量
- 17 暗褐色 炭化物微量, ローム粒子中量
- 18 明褐色 ローム粒子中量
- 19 灰褐色 ローム粒子微量, 粘土少量
- 20 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 21 暗褐色 ローム粒子少量
- 22 暗褐色 炭化物微量, パミス少量



第106図 第22・26号住居跡実測図



第107图 第22・26号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第107図 3	器台 土師器	B (5.8)	脚部片。脚部はラッパ状に開く。	脚部外面へラ磨き、内面上位指ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英 にぶい橙色 普通	P176 10% 南東部覆土

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第107図 4	スクレイパー	凝灰岩	9.7	4.2	1.8	34.0	第1号ピット内覆土	Q44 PL24

第26号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第107図 5	甕 土師器	A [18.2] B 29.6 C 7.8	やや突出した上げ底気味の平底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位よりやや上に持つ。口縁部は外反気味に立ち上がり、大きく開く。	底部へラ削り。胴部外面へラ削り後磨き、内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面一部煤付着。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P206 PL24 65% 貯蔵穴内覆土
6	甕 土師器	A [16.1] B (10.1)	口縁部片。口縁部は外反して開く。内側への折り返し口縁。	胴部外面ハケ目整形。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕有り。胴部外面一部煤付着。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P207 15% 貯蔵穴内覆土
7	小形壺 土師器	A 10.0 B 14.7 C 5.2	突出した平底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位よりやや上に持つ。口縁部は頸部から外傾して立ち上がり、大きく開く。	底部から胴部下端へラ削り。胴部外面へラナデ後磨き。口縁部内・外面横ナデ、内面強い横ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P208 PL24 95% 中央部床面直上
8	碗 土師器	A 14.6 B 6.4 C 5.5	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。	底部へラ削り。体部外面弱いナデ。口縁部外面横ナデ。内面磨き。二次焼成を受け赤化。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P209 PL24 80% 南西部覆土

図版番号	器種	法量				出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第107図 9	支脚	(12.2)	6.4	5.4	(482.8)	中央部床面直上	DP8 PL24

第24号住居跡 (第108図)

位置 調査区の南部東寄り、C2c1区を中心に確認されているが、北東側は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡の中央部から南部は第39号住居跡の南西側半分程に掘り込まれ、南コーナーは第102号土坑を掘り込んでいる。西コーナーは第100号土坑と、北西壁中央部西コーナー寄りは第101号土坑と重複している。

規模と平面形 長軸 7.20 m、短軸 (2.96) m のほぼ方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N-29°-W。

壁 壁高 8~18 cm で、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅 12~22 cm、深さ 6~10 cm、断面形は皿状を呈し、調査区域外の未確認部分を除いて壁下を全周している。

床 平坦で、柱穴を結んだ線の内側の中央部はよく踏み固められている。

ピット 2か所（P₁、P₂）検出されている。P₁、P₂は、径24～38cm、深さ40～62cmで、主柱穴と思われる。

覆土 自然堆積。

遺物 北西部床面等から土師器の高坏や埴等及び破片が少量出土している。第109図2の埴は北西壁際中央部床面から横位の状態で、3の高坏は南コーナー付近床面から横位の状態で出土している。

所見 本跡は、第39号住居跡より古く、第102号土坑より新しい。北東側が調査区域外のため、さらに第39号住居跡に掘り込まれているため、炉や竈を含めた遺構全体の確認はできなかったが、遺構の形態や遺物等から古墳時代中期の住居跡と思われる。

第39号住居跡（第108図）

位置 調査区の南部東寄り、C2c₈区を中心に確認されているが、北東側は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡の南西部は第24号住居跡の中央部から南部を、南コーナーは第102号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸4.80m、短軸（2.28）mのほぼ方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N-35°-W。

壁 壁高8～12cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

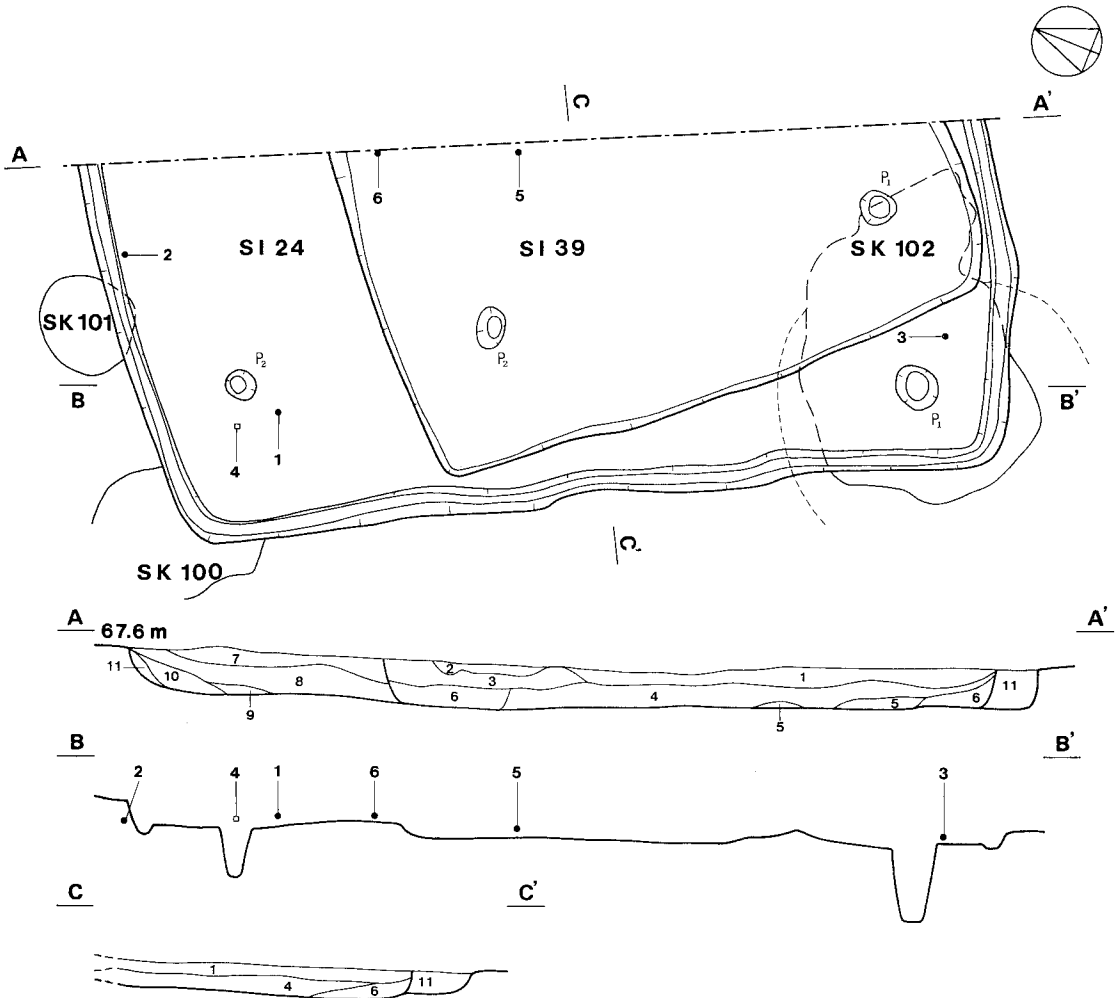
床 平坦で、柱穴を結んだ線の内側の中央部はよく踏み固められている。

ピット 2か所（P₁、P₂）検出されている。P₁、P₂は、径30～34cm、深さ50～58cmで、主柱穴と思われる。

覆土 自然堆積。

遺物 全体的に出土遺物は少ないが、第109図6の小形甕は北西部床面から斜位の状態で出土している。

所見 本跡は、第24号住居跡、第102号土坑より新しく、北東側が調査区域外のため、炉や竈を含めた遺構全体の確認はできなかったが、遺構の形態や遺物等から古墳時代中期の住居跡と思われる。



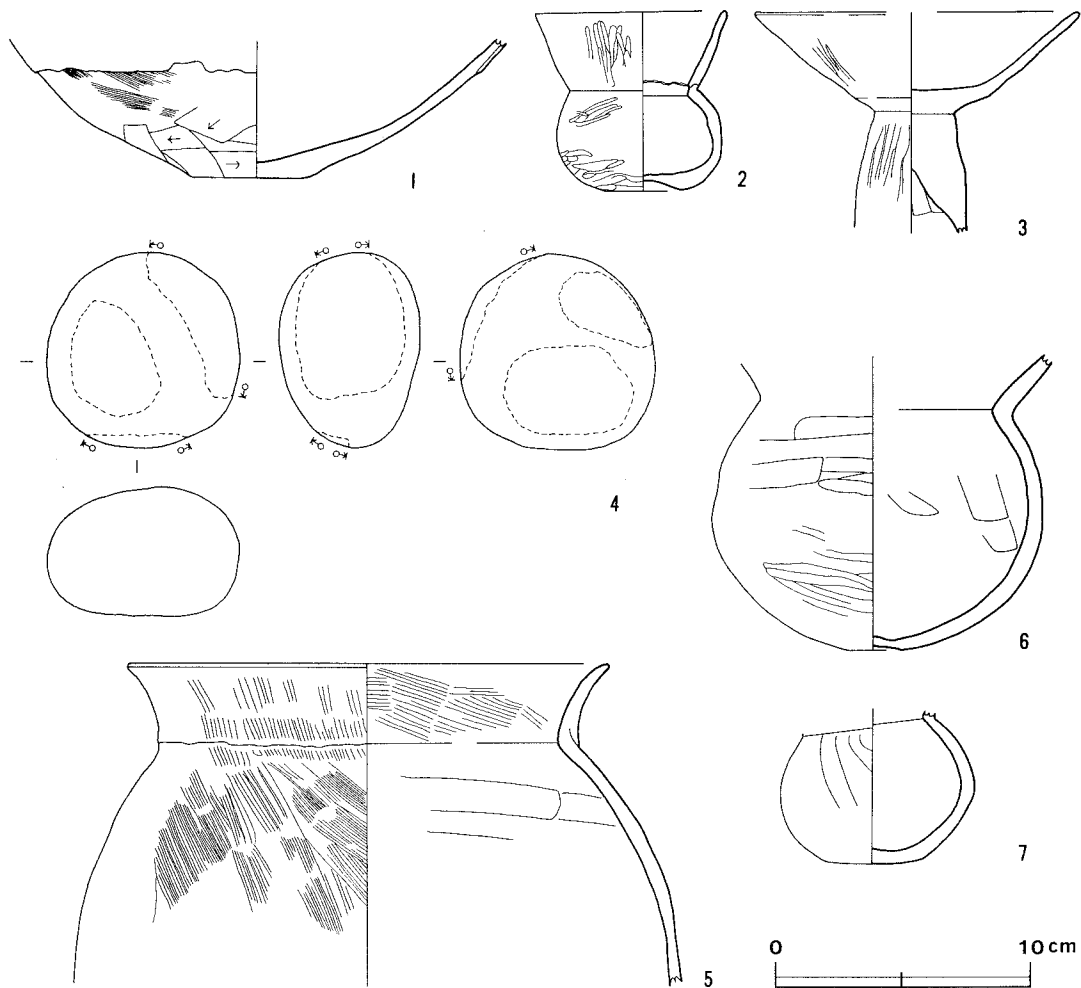
土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|--------|---------------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子中量 | 8 黒褐色 | ローム小ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 | 9 黒褐色 | 焼土粒子微量, ローム小ブロック少量, ローム粒子中量 |
| 3 黒褐色 | 炭化粒子・ローム粒子少量 | 10 明褐色 | ローム中ブロック微量, ローム小ブロック少量, ローム粒子中量 |
| 4 黒褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子中量 | 11 明褐色 | ローム小ブロック少量, ローム粒子中量 |
| 5 明褐色 | ローム粒子中量 | | |
| 6 黒褐色 | 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子少量 | | |
| 7 黒褐色 | 炭化物微量, ローム小ブロック少量, ローム粒子中量 | | |

第 108 図 第 24・39号住居跡実測図

第 24 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第109図 1	甕 土師器	B (5.7) C 4.7	平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	底部から胴部下端にかけてヘラ削り。胴部外面ハケ目整形。つなぎ目痕あり。	砂粒・長石 にふい黄橙色 普通	P182 10% 西コーナー 付近床面直上
2	埴 土師器	A 7.7 B 7.3 C 3.0	上げ底。胴部は球形状を呈し、中位に最大径を持つ。口縁部は外傾しながら開く。	胴部外面ヘラ磨き。口縁部外面縦位のヘラ磨き、内面横ナデ。	砂粒 にふい黄橙色 普通	P183 PL26 90% 北西壁際中 央部床面直上



第109図 第24・39号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第109図 3	高坏 土師器	A (12.7) B (8.9) E (4.8)	脚部は円柱状を呈し、坏部は下位に稜を有し、外傾して立ち上がる。	脚部外面ヘラ磨き、内面指ナデ。坏部外面ヘラ磨き、内面一部磨滅。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P184 PL26 40% 南コーナー付近床面直上

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第109図 4	磨石	安山岩	7.9	7.7	5.6	509.8	西コーナー付近床面直上	Q43 PL26

第39号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第109図 5	甕 土師器	A 19.2 B (13.0)	胴部は球形状を呈し、口縁部は緩く外反して開く。折り返し口縁。	胴部外面丁寧なハケ目整形、内面ヘラナデ。頸部から口縁部にかけての外面縦位のハケ目整形。口縁部内面横位のハケ目整形。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P262 25% 中央部床面直上

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第109図 6	小形甕 土師器	B (11.8) C 2.2	上げ底。胴部は球形状を呈し、口縁部は外傾して立ち上がる。	胴外面下半部へラ磨き、上半部へラナデ、内面へラナデ。	砂粒・長石・石英・雲母・バミス 浅黄橙色 普通	P263 PL26 80% 北西部床面直上
7	埴 土師器	B (6.2) C 3.8	平底。胴部は球形状を呈し、中位で張る。	胴外面へラナデ。外面一部煤付着。	砂粒・長石・石英に ぶい黄橙色 普通	P264 PL26 70% 南西部覆土

第 25 号住居跡 (第 110 図)

位置 調査区の中央部東寄り，B2j₆ 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北コーナーは第 41 号住居跡の南部を掘り込み，東コーナーは第 43 号住居跡の北西部に掘り込まれ，西コーナーは第 35 号土坑を掘り込み，南コーナーは第 1 号道路跡に掘り込まれ，第 87・97・98 号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 6.10 m，短軸 5.98 m の方形を呈している。

長軸方向 N - 41° - W。

壁 壁高 11 ~ 44 cm で，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅 18 ~ 24 cm，深さ 4 ~ 9 cm，断面形は皿状を呈し，第 43 号住居跡に切られている東コーナー部分を除いて壁下を全周している。

床 平坦で，柱穴を結んだ線の内側及び竈付近はよく踏み固められている。

ピット 5 か所 (P₁ ~ P₅) 検出されている。P₁ ~ P₄ は，径 26 ~ 40 cm，深さ 42 ~ 54 cm で，支柱穴と思われる。P₅ は，径 40 cm，深さ 46 cm で，出入り口に伴う梯子ピットと思われる。

貯蔵穴 南壁際中央部に検出されているが，第 43 号住居跡に切られている。平面形は長軸 90 cm，短軸 76 cm の不整形を呈し，断面形は深さ 60 cm の逆台形を呈するものと思われる。

竈 北西壁中央部からやや北寄りに，砂質粘土で構築されている。規模は，長さ 106 cm，幅 120 cm を測る。火床は熱を受けて赤変硬化している。煙道部の壁外への掘り込みは見られず，煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 土師器の甕，甔，埴，坏やその破片が多量に出土しているが，特に竈付近に集中して出土している。竈内から第 111 図 1，2 の甕は斜位の状態で，第 112 図 15 の埴は逆位の状態で出土している。竈東側から 7 の坏は正位の状態で，9 の坏と 12 の埴はそれぞれ逆位の状態で出土している。中央部北寄りから焼土が検出されている。

所見 本跡は，第 43 号住居跡，第 1 号道路跡より古く，第 41 号住居跡，重複している全ての土坑より新しい。遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住居跡と思われる。

第 43 号住居跡 (第 110 図)

位置 調査区の中央部東寄り、B2j6区を中心に確認されているが、北東側は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡の北西部は、第25号住居跡の東コーナーを掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸2.73m、短軸(1.42)mのほぼ方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N-30°-W。

壁 壁高15~16cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で、全体的によく踏み固められている。

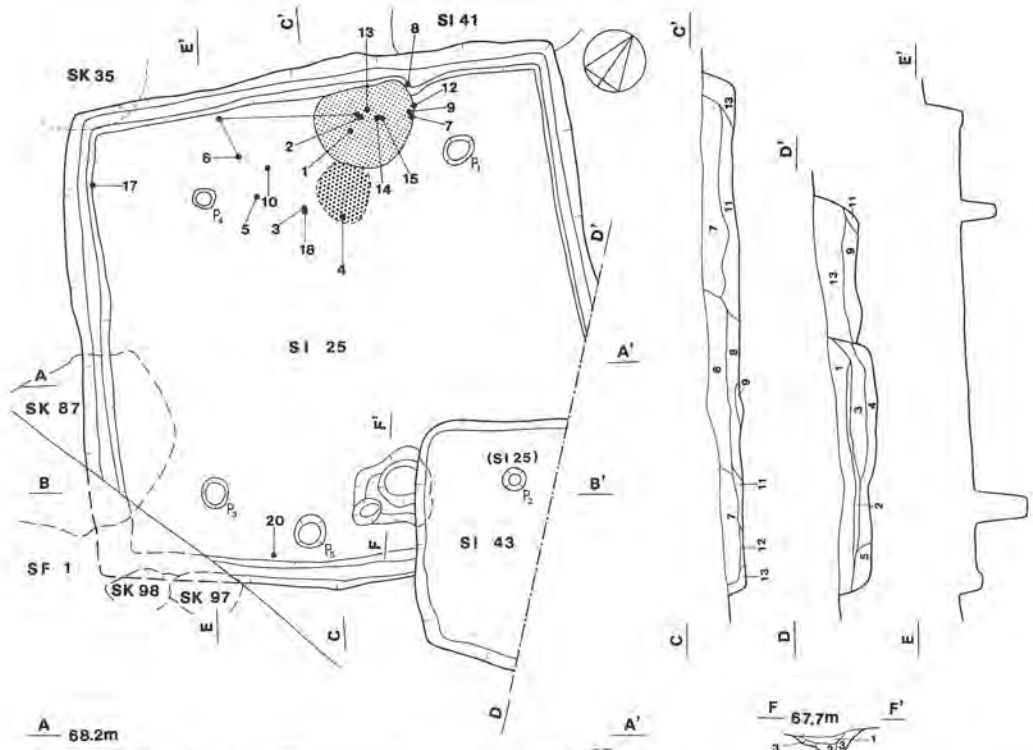
覆土 自然堆積。

遺物 西部床面から土師器片が少量出土しているが、全て細片である。

所見 本跡は、第25号住居跡より新しい。北東側が調査区域外のため、ピット、炉及び竈を含めた遺構全体の確認はできなかったが、住居跡の形態や土師器片等の出土遺物から古墳時代後期の住居跡と推定される。

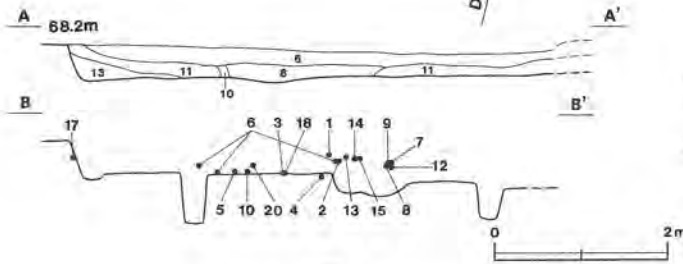
第25号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第111図 1	甕 土師器	A 18.0 B 25.7 C 8.0	突出した平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。口縁部は大きく外反して開く。	胴部外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・礫にふい黄橙色普通	P185 PL28 90% 竈内
2	甕 土師器	B (24.6) C 8.8	やや突出した平底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部は頸部から外傾して立ち上がる。	胴部外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面二次焼成を受け、磨滅が著しい。	砂粒・長石・石英赤褐色普通	P186 PL28 80% 竈内
3	甕 土師器	A 24.9 B (26.2)	胴部は長胴気味を呈し、口縁部は頸部から外反して開く。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面煤付着、一部磨滅。	砂粒・礫にふい赤褐色普通	P190 PL28 60% 北西部床面直上
4	埴 土師器	B (9.3) C 5.6	平底。胴部は球形状を呈し、中位で強く張る。	底部ヘラ削り。胴部外面ヘラ磨き。胴部外面に糊痕有り。	砂粒・長石・石英・パミス 橙色普通	P187 PL28 70% 北西部床面直上
5	甕 土師器	A 17.7 B 19.6 C 6.0 孔径 5.3	無底式の甕。胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で直立する。	胴部最下端ヘラ削り。胴部内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕有り。胴部外面煤付着。	砂粒・長石・石英にふい黄橙色普通	P188 PL28 95% 北西部床面直上
6	甕 土師器	A 23.3 B 29.6 C (8.8) 孔径 (7.8)	無底式の甕。胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外傾して立ち上がる。	胴部下位ヘラ削り。胴部外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・礫・スコリアにふい黄橙色普通	P189 PL28 80% 竈内と北西部床面直上
第112図 7	埴 土師器	A 14.1 B 6.3 C 4.7	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、上位で直立する。口縁部でやや外傾する。	底部ヘラ削り。体部外面ヘラ削り後磨き、内面ヘラナデ後磨き。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。	砂粒 赤色普通	P191 PL28 100% 竈内
8	埴 土師器	A 15.7 B 6.1 C 5.4	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、上位で直立する。口縁部で外傾する。	底部から体部外面ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。外面赤彩。	砂粒・長石・パミス 橙色普通	P192 PL28 100% 竈内
9	埴 土師器	A 13.0 B 5.5	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部で内傾する。	底部ヘラ削り。胴部内面ヘラ当て痕有り。口縁部内・外面横ナデ。体部外面煤付着。	砂粒・長石・スコリア 橙色普通	P193 PL28 100% 竈内



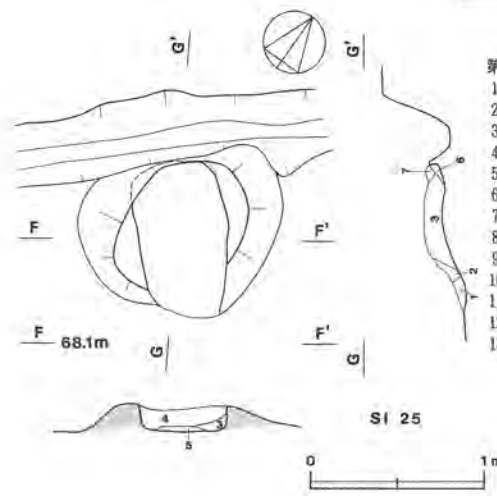
第 25 号住居跡貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量、
バミス中量
- 2 黒褐色 ローム中ブロック中量、ローム小ブ
ロック・バミス小ブロック多量
- 3 暗褐色 ローム大ブロック・ローム小ブロッ
ク多量、ローム中ブロック・バミス
小ブロック中量



第 25・43 号住居跡土層解説

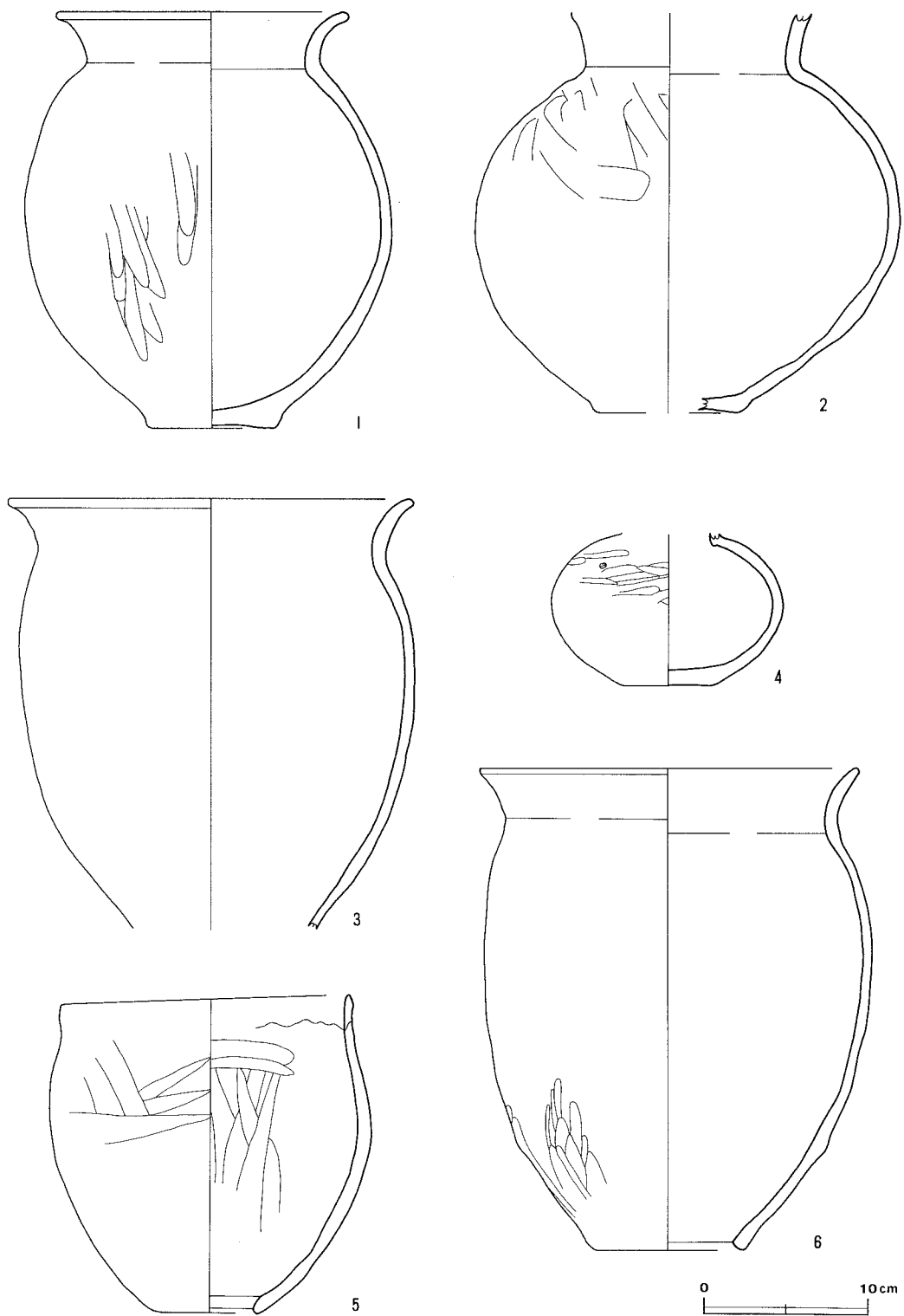
- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック微量、ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子中量、バミス微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子中量
- 6 暗褐色 ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 7 にぶい褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 9 明褐色 ローム粒子中量
- 10 明褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子中量
- 11 暗褐色 炭化材微量、ローム粒子少量
- 12 にぶい褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 13 明褐色 ローム粒子少量



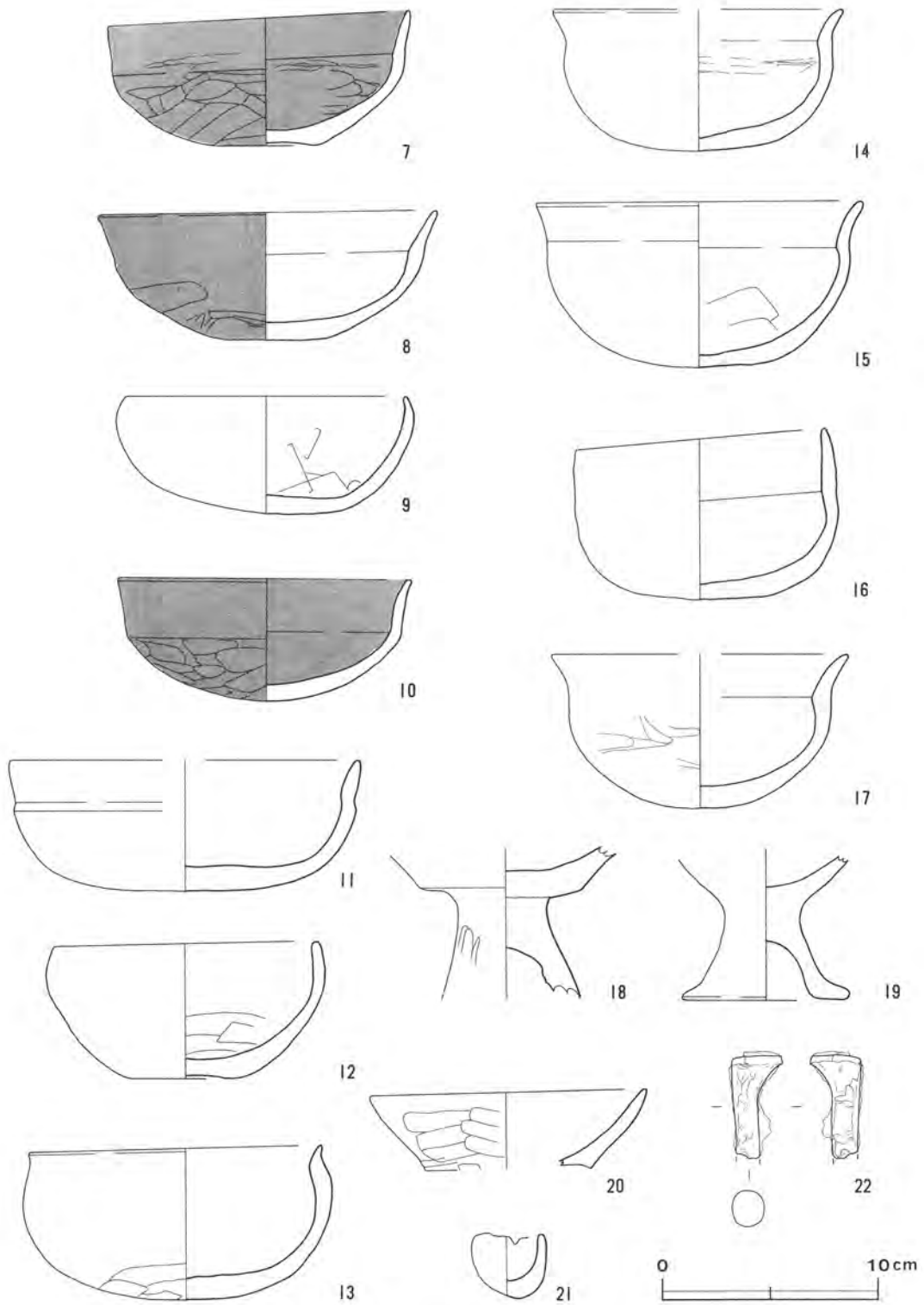
第 25 号住居跡竈土層解説

- 1 極暗赤褐色 焼土粒子・ローム粒子多量
- 2 黒褐色 焼土粒子多量、ローム粒子中量
- 3 暗赤褐色 焼土中ブロック少量、焼土小ブロック多量
- 4 褐灰色 砂質粘土多量
- 5 にぶい赤褐色 焼土大ブロック・焼土中ブロック多量
- 6 黒褐色 焼土中ブロック中量、焼土小ブロック多量
- 7 暗赤褐色 焼土小ブロック多量

第 110 図 第 25・43 号住居跡・竈実測図



第 111 图 第 25 号住居跡出土遺物実測図(1)



第112図 第25号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第112図 10	坏 土師器	A 13.7 B 5.7	丸底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部で直立し、端部で外傾する。	底部から体部外面へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。内・外面赤彩。内・外面磨滅。	砂粒・長石・スコリア 赤色 普通	P194 PL28 100% 北西部床面直上
11	坏 土師器	A [16.2] B 6.1 C [4.6]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部でわずかに外傾する。体部との境に明瞭な稜を有する。	底部へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。体部外面磨滅。	砂粒・長石・石英・礫 橙色 普通	P197 50% 北西部覆土
12	埴 土師器	A 12.4 B 6.4 C 5.2	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部で内傾する。	底部へラ削り。体部内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・礫 にぶい黄橙色 普通	P195 PL28 80% 竈内
13	埴 土師器	A 13.7 B 7.2 C 3.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でやや内傾し、口唇部で丸くおさめる。	底部へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。体部内面磨滅が著しい。	砂粒・長石・石英・礫 にぶい橙色 不良	P196 PL28 70% 竈内
14	埴 土師器	A [13.4] B 6.7	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で外傾する。	底部へラ削り。体部内面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。体部外面一部磨滅。	砂粒・長石・石英・礫 橙色 普通	P198 50% 竈内
15	埴 土師器	A 15.1 B 9.0 C 3.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でやや外傾する。	底部へラ削り。体部内面へラ当り痕有り。体部一部煤付着。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P199 PL28 95% 竈内
16	埴 土師器	A 11.5 B 8.0 C [4.0]	平底。体部は内彎気味に立ち上がり、上位から口縁部は直立する。	口縁部内・外面横ナデ。内・外面磨滅。	砂粒・長石・石英 明黄褐色 普通	P200 PL28 90% 竈内
17	埴 土師器	A [13.8] B 7.1	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でやや外傾する。	底部へラ削り。体部外面へラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。体部一部煤付着。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P201 PL28 65% 西コーナー床面直上
18	高 坏 土師器	B (7.0)	脚部はラッパ状に開く。坏部は下位に稜を有し、外傾して立ち上がる。	脚部外面へラ磨き。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P202 50% 北西部床面直上
19	高 坏 土師器	B (6.7) C 7.5	脚部はやや開き気味に下がり、裾部で大きく開く。	脚部外面弱い縦位のへラ磨き。裾部内・外面横ナデ。坏部下端へラ削り。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P203 PL28 50% 北東部覆土
20	高 坏 土師器	A 12.9 B (3.7)	脚部欠損。坏部は外傾して立ち上がり、上位でやや内傾する。	坏部外面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P204 40% 南東部床面直上
21	ミニチュア 土器 土師器	A 3.3 B 3.0	丸底。体部は外傾して立ち上がり、中位から直立して立ち上がる。	内面ナデ。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P205 80% 覆土

図版番号	器種	法量			出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)		
第112図22	釘	(5.5)	2.4	(38.6)	北西部覆土	M5 断面形は方形気味の丸型を呈する。PL28

第 27 号住居跡 (第 113 図)

位置 調査区の中央部東寄り、B2d₄区を中心に確認されているが、東側は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡の南部は第 93・94 号土坑を、北西コーナーは第 123・124・125 号土坑を、東部は第 143 号土坑を、中央部は第 160 号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 8.08 m、短軸 (6.04) m の方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N-17°-W。

壁 壁高 27～41 cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅 18～26 cm、深さ 4～7 cm、断面形は皿状を呈し、調査区域外の未確認部分を除いて壁下を全周している。

床 平坦で、柱穴を結んだ線の内側はよく踏み固められている。

ピット 7か所 (P₁～P₇) 検出されている。P₁～P₃は、径 30～48 cm、深さ 70～78 cmで、主柱穴と思われる。P₄は、径 22 cm、深さ 68 cmで、出入り口に伴う梯子ピットと思われる。P₅～P₇は、径 24～32 cm、深さ 56～76 cmであるが、性格は不明である。

貯蔵穴 南壁際中央部に検出されている。平面形は長軸 96 cm、短軸 90 cmの隅丸長方形を呈し、断面形は深さ 60 cmの逆台形を呈している。

竈 北壁中央部に付設されていたと思われるが、火床しか確認できず、規模等は不明である。竈を構築していた砂質粘土は廃墟になったときに取り除かれたものと思われるが、残りの粘土の一部が北壁中央部西寄り床面から検出されている。煙道部は壁を掘り込んだ痕跡は認められない。

覆土 自然堆積。

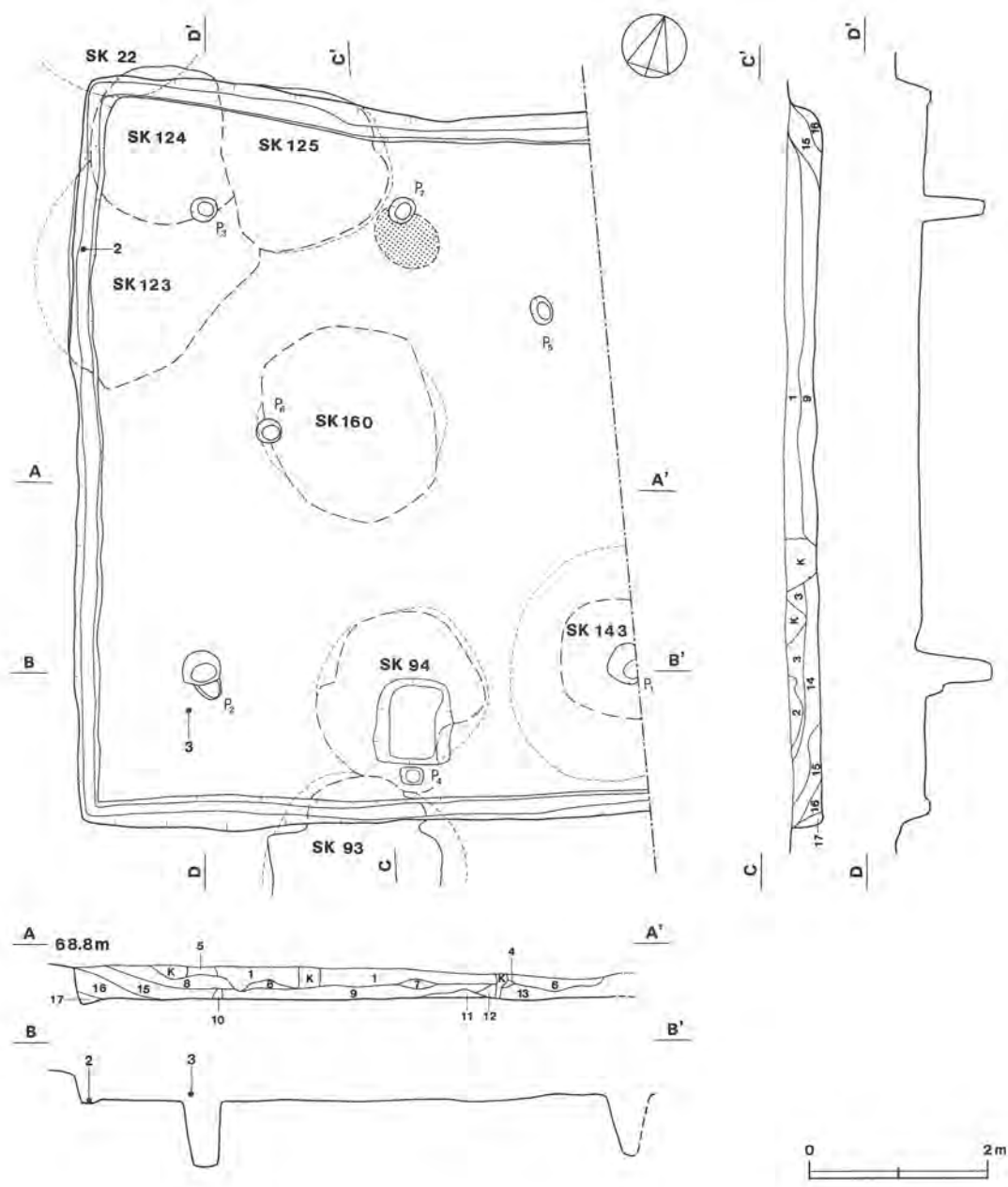
遺物 北壁中央部付近及び貯蔵穴内から、土師器の甕や坏及びその破片が出土している。第 114 図 2 の埴は西壁溝内から正位の状態で、3 の高坏は南西部床面から逆位の状態で出土している。

所見 本跡は、重複している全ての土坑より新しく、遺構の形態や遺物等から古墳時代中期の住居跡と思われる。

第 27 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第114図 1	甕 土師器	A 16.2	口縁部片。口縁部は外反して開く。	胴部外面ハケ目整形、内面ヘラナデ。口縁部内・外面ハケ目整形。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P210 PL29 20% 覆土
		B (7.4)				
2	埴 土師器	B (6.4)	やや上げ底。胴部は球形状を呈し、最大径は中位よりやや下に持つ。	底部から胴部下端ヘラ削り。胴部内面ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P211 PL29 60% 西壁溝内
		C 4.4				
3	高坏 土師器	B (5.7)	脚部は肥厚でラッパ状に開く。坏部は内彎気味に立ち上がる。	脚部外面弱いナデ、内面指ナデ。坏部内・外面弱いナデ、外面ハケ目整形。	砂粒・長石・石英 にぶい黄橙色 普通	P212 40% 南西部床面直上
		C (3.4)				

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	胎土・色調・焼成	備考
第114図 4	把手 (阿玉台)	長さ (13.3)	孔が5つあると推定される環状把手。把手中央部表・裏面に眼鏡状に隆帯が施され、表面には隆帯に沿って結節沈線文が施されている。隆帯から把手上端の隆帯に連結して、橋状となる。裏面にはキャタピラ文が施されている。把手頂端部には双頭状の小突起が付いている。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい赤褐色 普通	P305 PL29 5% 流れ込み
		幅 (10.2)			
		厚さ 6.1			
5	把手 (阿玉台)	長さ (9.6)	三角形を呈し、断面形は「トサカ」状の隆帯を呈している。隆帯の上面にはキザミ目が施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P 306 PL 29 5% 流れ込み
		幅 (7.3)			

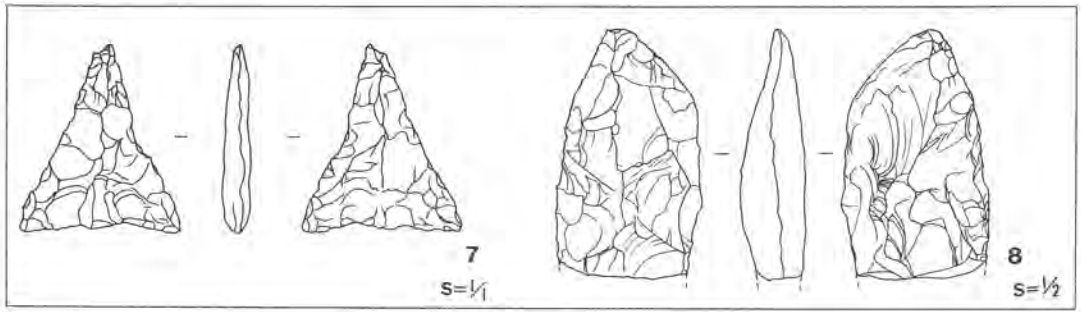
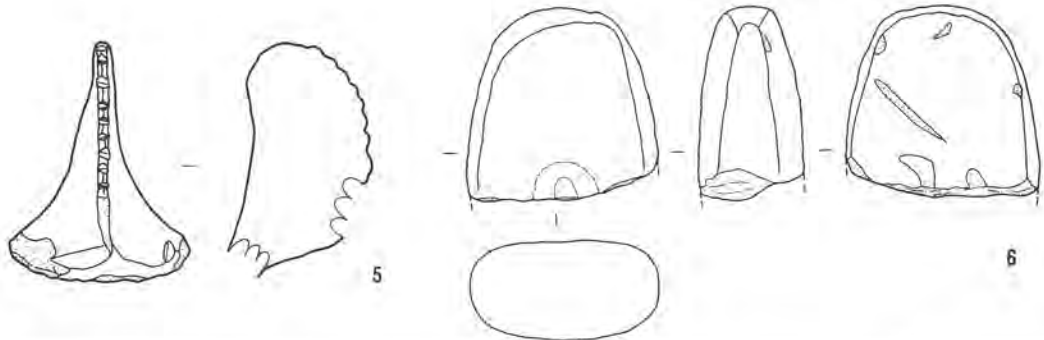
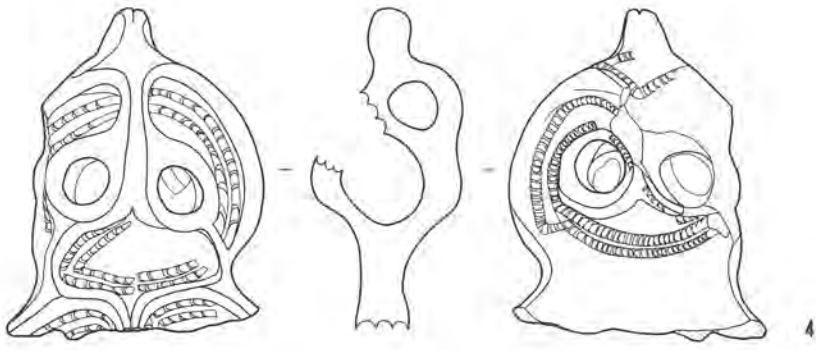
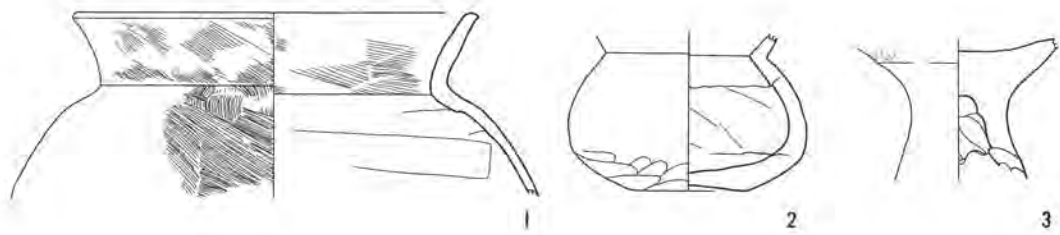


土層解説

- 1 暗褐色 ローム中ブロック微量, ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 焼土粒子微量, ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量
- 5 明褐色 ローム粒子微量, パミス少量
- 6 明褐色 ローム粒子中量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量
- 8 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量

- 9 黒褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子中量
- 10 黒褐色 ローム粒子少量
- 11 黒褐色 ローム中ブロック微量, ローム粒子少量
- 12 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 13 暗褐色 ローム中ブロック少量, ローム粒子中量
- 14 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子中量
- 15 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量
- 16 暗褐色 ローム中ブロック微量, ローム粒子少量
- 17 暗褐色 ローム粒子少量

第113図 第27号住居跡実測図



第 114 图 第 27 号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第114図 6	凹石	安山岩	(7.7)	7.8	4.2	(343.4)	覆土	Q46
7	石鏃	チャート	2.5	2.1	0.4	1.3	北西部覆土	Q45 PL29
8	尖頭器	チャート	(6.6)	3.9	1.7	(41.5)	覆土	Q47 PL29

第 28 号住居跡 (第 115 図)

位置 調査区の北部東寄り， B2b₃ 区を中心に確認されているが， 北東側は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡の西コーナーは第 113 号土坑を， 南西壁中央部は第 128 号土坑を， 南コーナーは第 152 号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 6.92 m， 短軸 (5.64) m のほぼ方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N-37°-W。

壁 壁高 13～36 cm で， ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅 18～32 cm， 深さ 3～8 cm， 断面形は U 字形を呈し， 調査区域外の未確認部分を除いて壁下を全周している。

床 平坦で， 柱穴を結んだ線の内側や竈付近はよく踏み固められている。

ピット 5 か所 (P₁～P₅) 検出されている。P₁～P₄ は， 径 27～35 cm， 深さ 60～70 cm で， 支柱穴と思われる。P₅ は， 径 34 cm， 深さ 54 cm で， 出入り口に伴う梯子ピットと思われる。

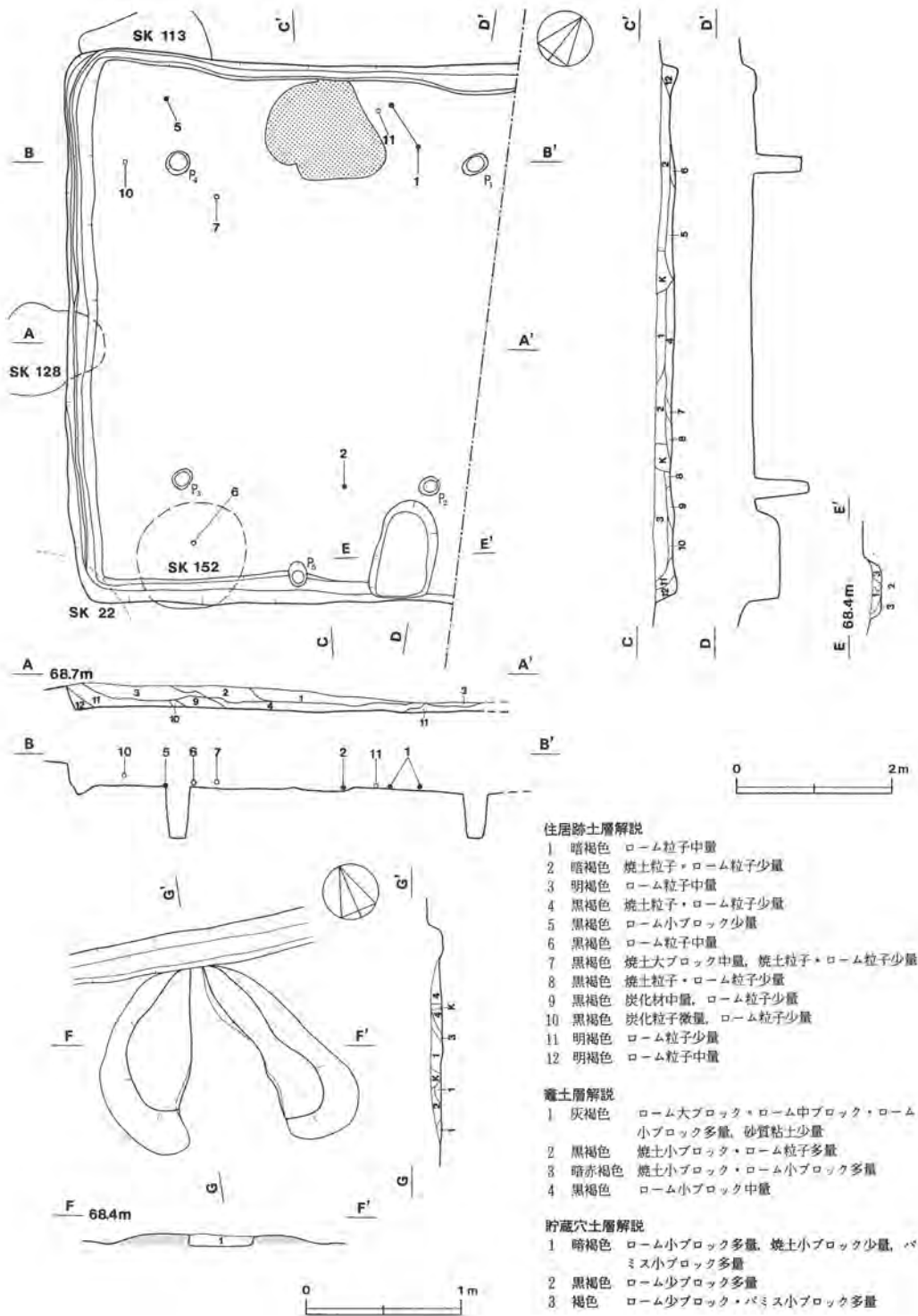
貯蔵穴 南東壁際中央部からやや東寄りに検出されている。平面形は長軸 128 cm， 短軸 80 cm の長方形を呈し， 断面形は深さ 42 cm の逆台形を呈している。

竈 北西壁中央部に， 砂質粘土で構築されている。規模は， 長さ 130 cm， 幅 165 cm を測る。火床は熱を受け赤変硬化している。煙道部の壁外への掘り込みは見られず， 煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がっている。

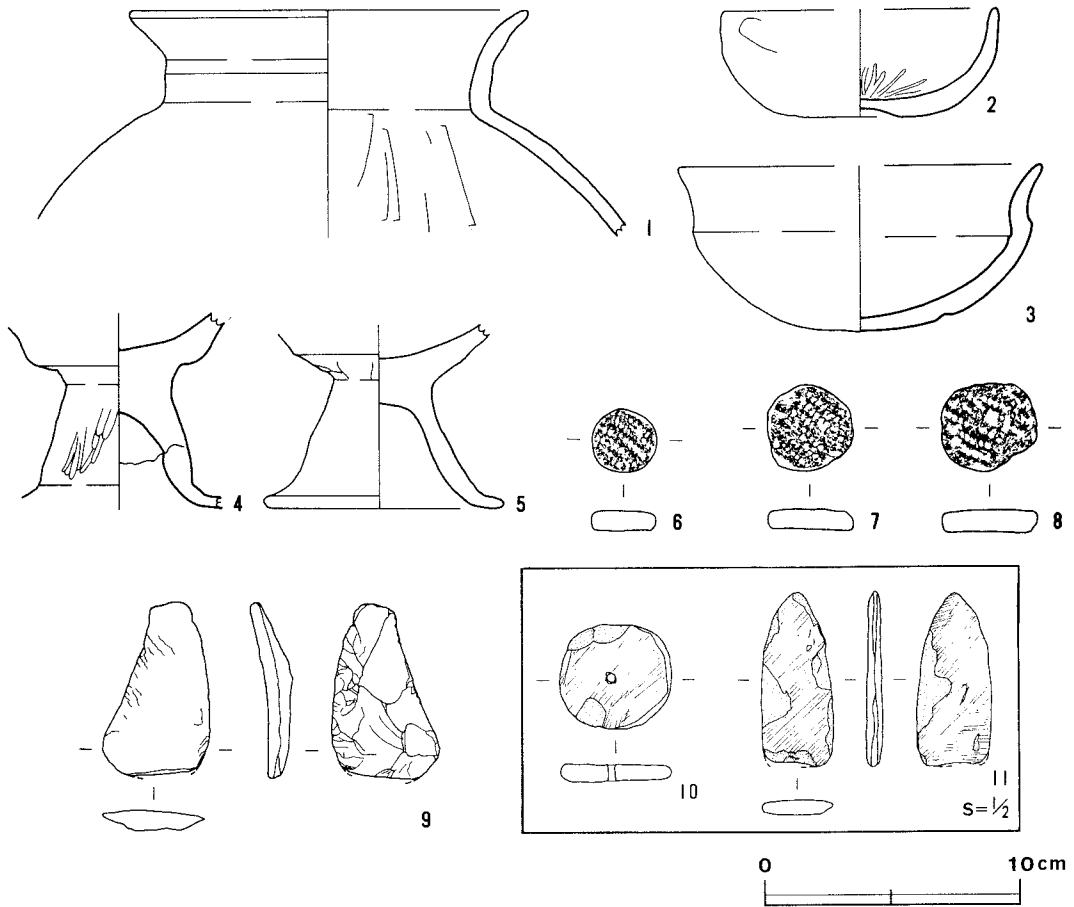
覆土 自然堆積。

遺物 竈及び貯蔵穴内から甕や坏及びその破片が出土している。第 116 図 1 の甕は竈の北東側床面から斜位の状態で， 2 の坏は南東部床面からつぶれた状態で， 5 の高坏は西コーナー付近床面からつぶれた状態で出土している。土製円板や石製模造品の鏡は西コーナー付近床面から， 剣は竈の北東側床面から出土している。

所見 本跡は， 重複している全ての土坑より新しく， 遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住居跡と思われる。



第 115 図 第 28 号住居跡・竈実測図



第116図 第28号住居跡出土遺物実測図

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第116図 1	甕 土師器	A 15.8 B (9.2)	胴部は内彎して頸部に至る。口縁部は垂直に立ち上がり、上位で外傾して開く。口縁部中位に稜を有する。	胴部外面弱いナデ、内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英にぶい橙色普通	P213 PL30 15% 竈北東側床面直上
2	坏 土師器	A (10.8) B 4.4 C (5.5)	上げ底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は垂直に立ち上がる。	体部外面ヘラナデ、内面放射状のヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。体部外面一部煤付着。	砂粒・長石・石英・雲母・ガラスにぶい橙色普通	P215 50% 南東部床面直上
3	碗 土師器	A (14.5) B 6.7	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反する。体部との境に稜を有する。	底部ヘラ削り。口縁部内・外面横ナデ。体部下端弱いナデ。二次焼成を受け赤化。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色普通	P214 60% 貯蔵穴内覆土
4	高坏 土師器	B (7.9) E (5.4)	脚部はラップ状を呈し、裾部で大きく開く。坏部は下位に稜を有し、外傾して立ち上がる。	脚部外面縦位のヘラ磨き。輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英 明褐色 不良	P216 PL30 60% 北西部覆土
5	高坏 土師器	B (7.4) C 9.3 E 5.2	脚部はラップ状に大きく開く。坏部は下位に弱い稜を有し、外傾して立ち上がる。	脚部内面指ナデ。坏底部ヘラ削り後ヘラナデ、内面ヘラ当て痕有り。	砂粒・長石・石英 橙色 不良	P217 PL30 65% 西コーナー床面直上

図版番号	器 種	法 量				出 土 位 置	備 考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第116図6	土製円板	2.6	2.5	0.8	6.5	南コーナー床面直上	DP9	PL30
7	土製円板	3.5	3.4	0.8	12.3	西コーナー床面直上	DP10	PL30
8	土製円板	3.6	3.7	0.9	15.4	覆土	DP11	PL30

図版番号	器 種	石 質	法 量				出 土 位 置	備 考	
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第116図9	スクレイパー	頁岩	(7.0)	4.3	1.4	(23.9)	北西部覆土	Q48 流れ込み	PL30
10	有孔円板	滑石	2.8	3.0	0.5	(5.9)	西コーナー床面直上	Q50 孔径0.2cm	PL30
11	石剣	滑石	(4.6)	1.9	0.4	(4.7)	竈北東側床面直上	Q51	PL30

第29号住居跡（第117図）

位置 調査区の北部，B2d₁区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南部は第35号住居跡の北部に掘り込まれ，北コーナーは第20号土坑を，西コーナーは第21号土坑を，東コーナーは第151号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸〔4.86〕m，短軸4.44mのほぼ方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N-44°-W。

壁 壁高16～25cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅16～21cm，深さ3～6cm，断面形は皿状を呈し，第35号住居跡に切られている南コーナーを除いて壁下を全周している。

床 平坦で，柱穴を結んだ線の内側及び竈付近はよく踏み固められている。

ピット 4か所（P₁～P₄）検出されている。P₁～P₄は，径24～32cm，深さ36～98cmで，主柱穴と思われる。

竈 北西壁中央部からやや北寄りに，壁を18cm程壁外に掘り込み，砂質粘土で構築されている。規模は，長さ108cm，幅118cmを測る。火床は熱を受けて赤変硬化し，煙道は緩やかに外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 覆土中・下層から土師器の甕や坏等の破片が出土している。竈内から支脚や土師器片が出土している。第119図1の甕は東コーナー壁溝内からつぶれた状態で出土している。

所見 本跡は，第35号住居跡より古く，重複している全ての土坑より新しい。遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住居跡と思われる。

第35号住居跡（第117図）

位置 調査区の中央部，B2e2 区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北部は第 29 号住居跡の南部や第 151 号土坑を，西部は第 15 号住居跡の北東部をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 5.40 m，短軸 5.30 m の方形を呈している。

長軸方向 N - 25° - E。

壁 壁高 3 ~ 28 cm で，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 平坦で，柱穴を結んだ線の内側及び竈付近はよく踏み固められている。

ピット 5 か所 (P₁ ~ P₅) 検出されている。P₁ ~ P₄ は，径 29 ~ 34 cm，深さ 56 ~ 76 cm で，主柱穴と思われる。P₅ は，径 28 cm，深さ 34 cm で，出入り口に伴う梯子ピットと思われる。

貯蔵穴 南西壁際中央部からやや南寄りに検出されている。平面形は長軸 103 cm，短軸 69 cm の長方形を呈し，断面形は深さ 36 cm の逆台形を呈している。

竈 北東壁中央部に，砂質粘土で構築されている。規模は，長さ 116 cm，幅 100 cm を測る。削平されており，わずかに袖部が残るのみである。火床は熱を受けて赤変硬化している。煙道部の壁外への掘り込みは見られず，煙道は火床から急な角度で外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 全域から土師器の甕や坏及びその破片が多量に出土しているが，竈内や貯蔵穴内とその周辺から甕，坏，甕及びその破片が出土している。竈内からは支脚が出土している。第 120 図 10 の甕は中央部床面から横位の状態で，16 の坏は北コーナー付近床面から斜位の状態で，第 121 図 19 の碗は竈内から正位の状態で出土している。

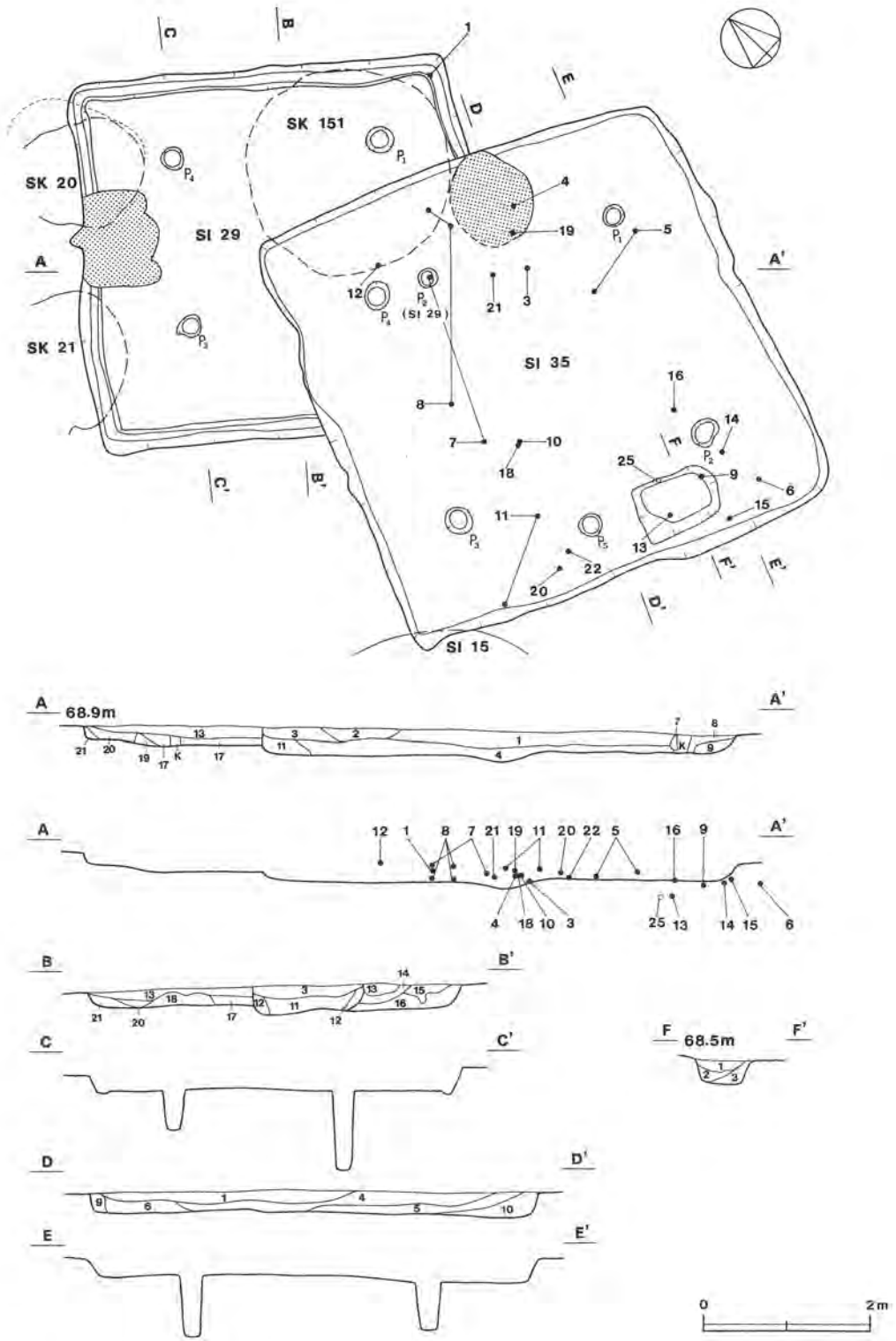
所見 本跡は，第 29 号住居跡，第 151 号土坑より新しく，遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住居跡と思われる。

第 29 号住居跡出土遺物観察表

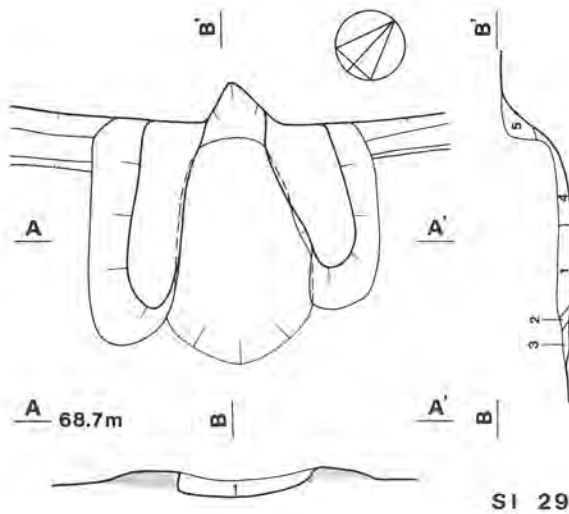
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第119図 1	甕 土師器	B (18.8)	突出した平底。胴部は内彎しながら立ち上がる。	底部へら削り。胴部外面へら削り後へら磨き，内面へらナデ後へら磨き。	砂粒・長石・石英・バミス 明赤褐色 普通	P218 PL32 30% 東コーナー壁溝内
		C 8.4				
2	坏 土師器	A (15.8)	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部でやや外傾する。	底部外面へら削り。口縁部内・外面横ナデ。体部外面煤付着。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P219 PL32 40% 北東部覆土
		B (5.6)				

第 35 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第119図 3	甕 土師器	A 16.1	上げ底気味のやや突出した平底。胴部は球形状を呈し，最大径を中位に持ち，口縁部は頸部から「く」の字状に立ち上がる。	底部へら削り。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面一部煤付着。胴部内・外面磨減が著しい。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P239 PL32 90% 竈前方部床面直上
		B 26.4				
		C 6.0				



第117图 第29・35号住居跡実測图



第29・35号住居跡土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子微量, ローム粒子中量
- 2 暗褐色 炭化物・ローム粒子少量
- 3 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子少量
- 4 黒褐色 炭化粒子中量, ローム粒子少量
- 5 黒褐色 炭化材・炭化粒子・ローム粒子中量
- 6 暗褐色 焼土粒子多量, 砂質粘土少量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量, 砂質粘土中量
- 8 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子中量
- 9 暗褐色 ローム粒子中量
- 10 暗褐色 炭化粒子中量, ローム粒子少量
- 11 暗褐色 ローム粒子微量
- 12 暗褐色 焼土粒子微量, ローム粒子中量
- 13 暗褐色 ローム粒子中量
- 14 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子少量
- 15 暗褐色 炭化粒子少量, ローム粒子中量
- 16 黒褐色 焼土粒子少量炭化粒子中量, ローム粒子少量
- 17 黒褐色 炭化粒子中量, ローム粒子少量
- 18 黒褐色 炭化物少量, 炭化粒子中量
- 19 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子少量
- 20 暗褐色 ローム粒子中量
- 21 黒褐色 炭化粒子少量, ローム粒子中量

SI 29

第29号住居跡竈土層解説

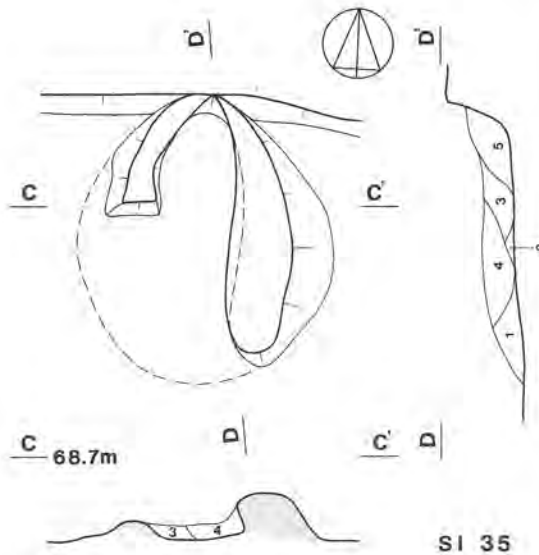
- 1 暗赤褐色 焼土中ブロック中量, 焼土小ブロック・焼土粒子多量
- 2 暗赤褐色 焼土小ブロック多量
- 3 暗赤褐色 焼土大ブロック多量, 焼土中ブロック中量
- 4 暗赤褐色 焼土中ブロック中量, 焼土粒子多量
- 5 暗赤褐色 焼土中ブロック中量, 焼土小ブロック多量

第35号住居跡竈土層解説

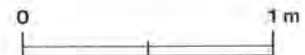
- 1 暗赤褐色 焼土中ブロック中量, 焼土小ブロック多量
- 2 暗赤褐色 焼土中ブロック少量, 焼土小ブロック多量
- 3 灰褐色 焼土中ブロック・焼土粒子少量, 砂質粘土中量
- 4 黒褐色 焼土小ブロック多量, 炭化物少量, ローム粒子多量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック多量

第35号住居跡貯蔵穴土層解説

- 1 暗褐色 炭化物中量, ローム小ブロック・バミス多量
- 2 暗褐色 炭化物少量, ローム小ブロック多量
- 3 極暗褐色 炭化物少量, ローム大ブロック中量, ローム小ブロック・バミス小ブロック多量

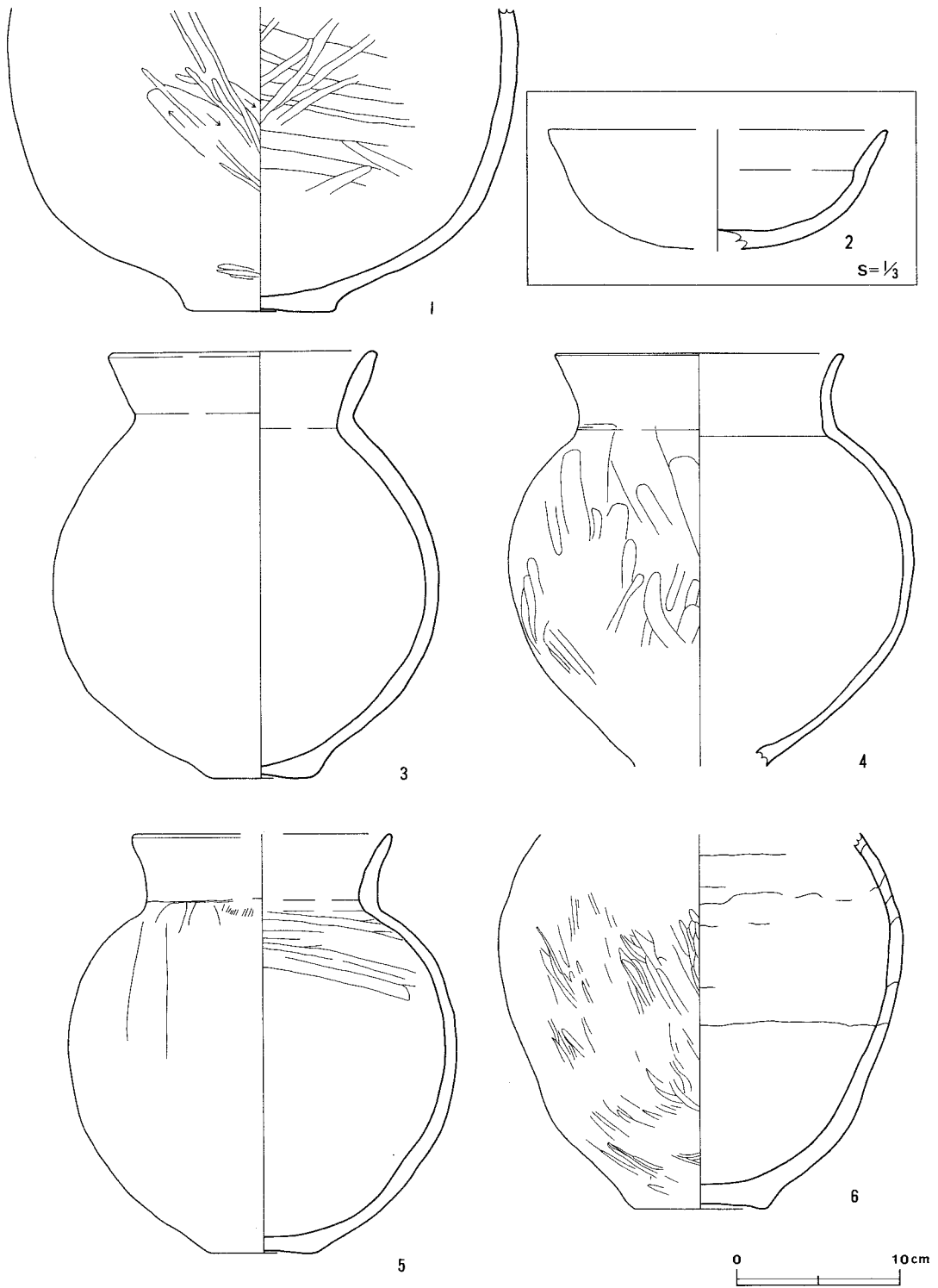


SI 35

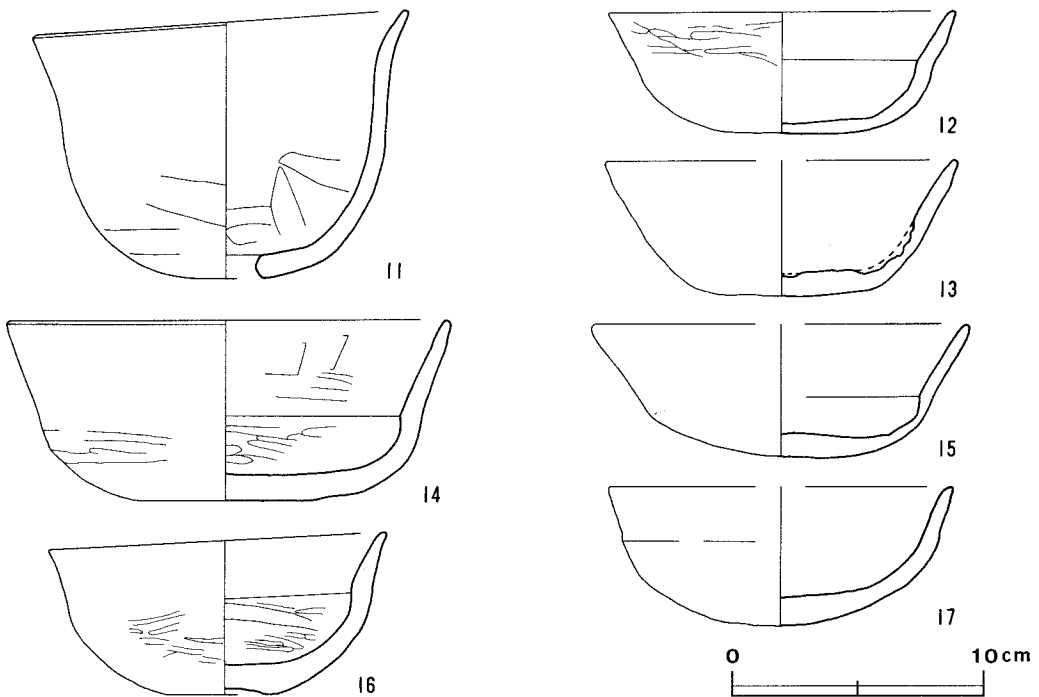
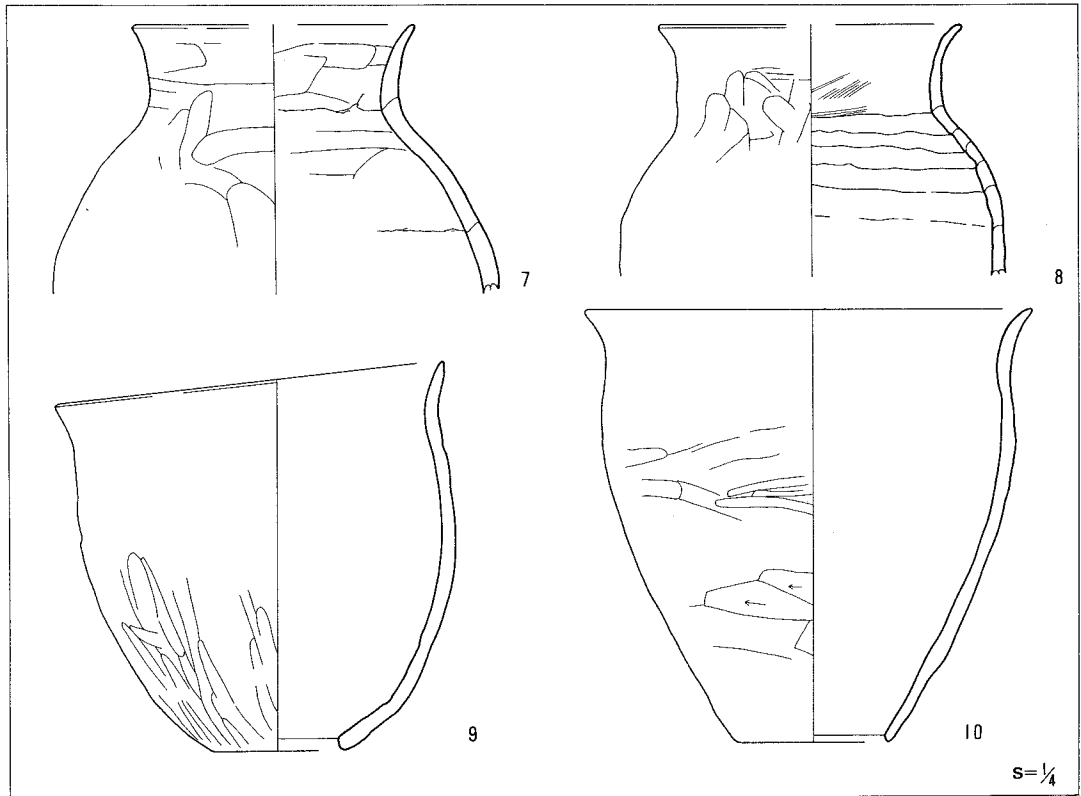


第118図 第29・35号住居跡竈実測図

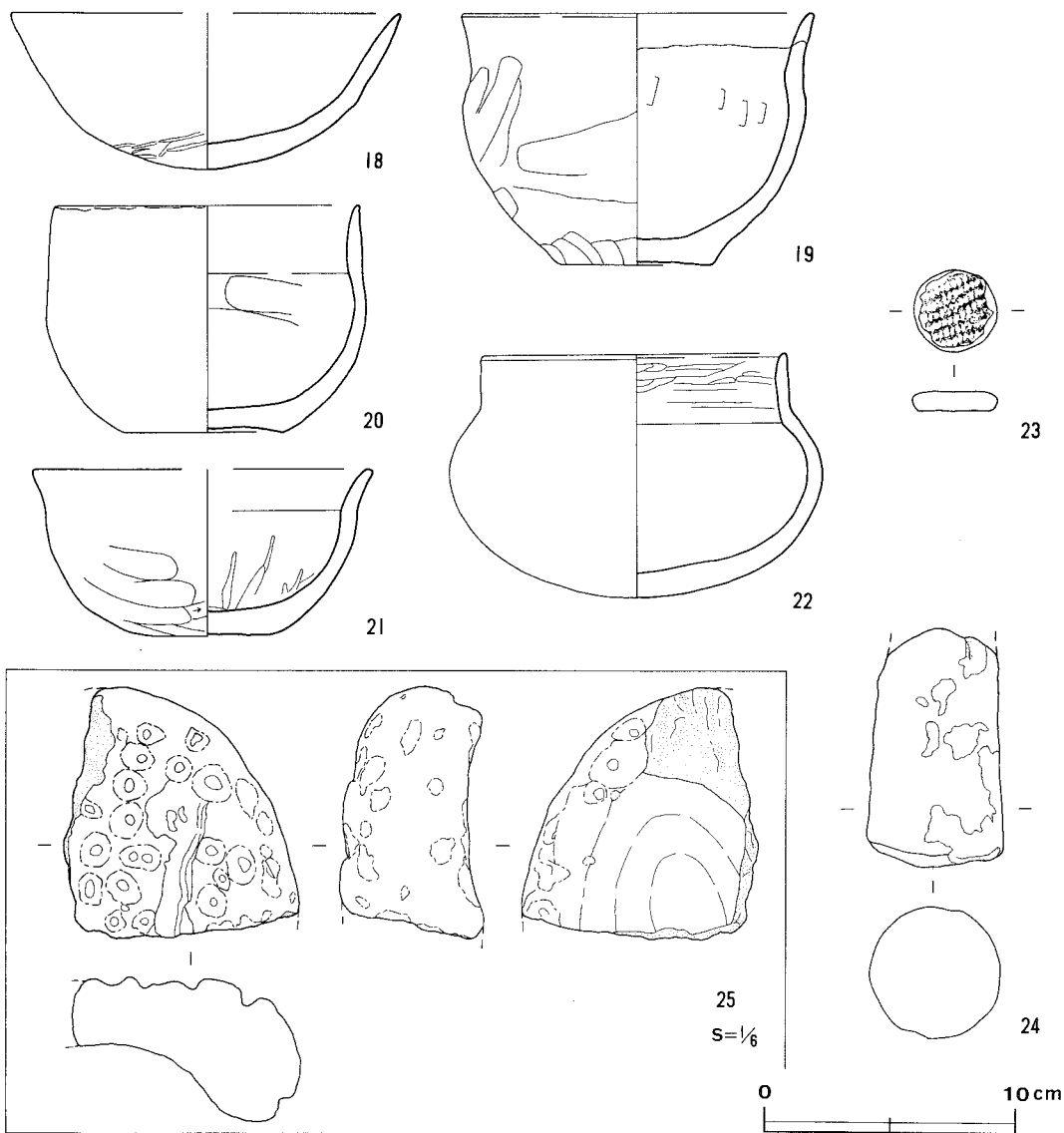
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第119図 4	甕 土師器	A 17.8 B (25.6)	底部穿孔。胴部は球形状を呈し、口縁部は外反して立ち上がり、大きく開く。	胴部外面ヘラナデ後ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面煤付着。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P240 80% 竈内
5	甕 土師器	A [15.8] B 26.0 C 6.4	平底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位に持つ。口縁部はやや外反して開く。	底部ヘラ削り。胴部外面縦位のヘラナデ、内面横位のヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P242 30% 北東部床面直上
6	甕 土師器	B (23.2) C 8.0	上げ底気味の平底。胴部は内彎しながら立ち上がり、最大径を中位よりやや上に持つ。	底部ヘラ削り。胴部外面ヘラ磨き。輪積み痕有り。	砂粒・長石・ スコリア 明赤褐色 普通	P243 50% 南コーナー付 近床面直上
7	甕 土師器	A [14.8] B (14.3)	張りの弱い胴部から、口縁部は直立して立ち上がり、上位でやや外反する。	胴部内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面ヘラナデ。輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英 にぶい褐色 普通	P241 35% 中央部床面直上



第119图 第29・35号住居跡出土遺物実測図(1)



第120图 第29・35号住居跡出土遺物実測図(2)



第121図 第29・35号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第120図 8	甕 土師器	A (16.2) B (13.4)	丸く張った胴部から、口縁部は直立して立ち上がり、上位で外反する。	胴部外面ヘラナデ。内面ハケ目整形。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母にふい赤褐色普通	P244 50% 甕西側床面直上
9	甕 土師器	A 20.6 B 19.9 C 6.9 孔径 6.2	無底式の甕。胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で緩く外反する。	胴部外面ヘラナデ後ヘラ磨き、内面磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母にふい黄橙色普通	P247 80% 貯蔵穴内覆土
10	甕 土師器	A 23.5 B 23.0 C 8.0 孔径 7.4	無底式の甕。胴部は外傾して立ち上がり、長胴を呈する。口縁部で緩く外反する。	胴下半部ヘラ削り、中央部から上半部ヘラナデ後ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面煤付着。	砂粒・長石・石英・雲母にふい黄橙色普通	P246 100% 中央部床面直上

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第120図 11	甌 土師器	A 14.9 B 10.8 C 3.2 孔径 2.3	単孔式の甌。胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で緩く外反する。	胴部内・外面ヘラナデ。口縁部内・外面一部煤付着。	砂粒・石英・パミスにぶい黄橙色普通	P249 PL33 80% 南西部床面直上
12	坏 土師器	A 13.8 B 5.0 C 4.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反する。	底部ヘラ削り。口縁部外面ヘラ磨き、内面横ナデ。体部内面磨滅が著しい。	砂粒 橙色 普通	P251 PL33 90%北コーナー付近床面直上
13	坏 土師器	A (14.1) B 5.5	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	底部ヘラ削り。体部内面磨滅が著しい。	砂粒・長石・石英・スコリア 橙色 普通	P254 45% 貯蔵穴内覆土
14	坏 土師器	A 17.7 B 7.3 C 7.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で長く外反する。	体部内・外面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ、内面にヘラ当て痕有り。	砂粒・石英・パミス 赤色 普通	P252 PL33 85% 南コーナー付近床面直上
15	坏 土師器	A (13.8) B 5.4	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反する。体部との境に稜を有する。	体部内面磨滅。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P253 55%南コーナー付近床面直上
16	坏 土師器	A 13.5 B 6.6 C 4.6	やや上げ底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で緩く外反する。体部との境の内面に稜を有する。	体部内・外面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P250 PL33 95% 南東部床面直上
17	坏 土師器	A (13.8) B 5.6	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反する。体部との境に稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。体部内面一部磨滅。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P256 PL33 60% 南東部覆土
第121図 18	坏 土師器	A (15.8) B 6.4	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。	体部外面ヘラ磨き、やや磨滅。体部外面一部煤付着。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P257 50% 中央部床面直上
19	埴 土師器	A 13.9 B 10.2 C 6.0	平底。胴部は内彎気味に立ち上がり、口縁部で軽く外反する。	底部から体部下端ヘラ削り。体部外面ヘラナデ、内面ヘラ当て痕有り。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P245 PL32 100% 竈内
20	埴 土師器	A 12.1 B 9.2 C 6.3	上げ底気味の平底。体部は内彎しながら立ち上がり、中位から口縁部でわずかに内傾する。	体部内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。体部外面磨滅。体部外面一部煤付着。	砂粒・石英・スコリア・パミスにぶい黄橙色普通	P248 PL32 95% 南西部床面直上
21	埴 土師器	A (13.6) B (6.7) C 4.3	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反する。体部との境の内面に稜を有する。	底部から体部外面ヘラ削り。体部内面放射上の弱いヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英にぶい黄橙色普通	P255 50% 竈前方部床面直上
22	埴 土師器	A 12.0 B 9.9	丸底。体部は球形状を呈し、中位よりやや上方で張り、口縁部は垂直に立ち上がる。	体部外面ナデ。口縁部外面横ナデ、内面ヘラ磨き。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P258 PL32 95% 南西部床面直上

図版番号	器種	法量				出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第121図23	土製円板	3.4	3.3	0.8	10.5	覆土	DP30 PL33
24	支脚	(9.6)	5.5	5.3	(294.9)	覆土	DP16 PL33

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第121図25	石皿・円石	安山岩	(20.3)	(18.7)	11.7	(2754.4)	貯蔵穴内覆土	Q54 PL33

第31号住居跡(第122図)

位置 調査区の北部, B1b₉区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の南東部は第30号住居跡の北西部や第127号土坑を掘り込み、北西コーナーは第118号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸4.98m、短軸4.68mの方形を呈している。

長軸方向 N-81°-E。

壁 壁高42~47cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅9~14cm、深さ4~7cm、断面形はU字形を呈し、壁下を全周している。

床 平坦で、柱穴を結んだ線の内側及び竈付近はよく踏み固められている。出入り口ピットの内側に土手状の高まりが確認されている。

ピット 5か所(P₁~P₅)検出されている。P₁~P₄は、径26~40cm、深さ64~72cmで、主柱穴と思われる。P₅は、径32cm、深さ78cmで、出入り口に伴う梯子ピットと思われる。

貯蔵穴 竈の南側、南東コーナーに検出されている。平面形は長径76cm、短径68cmの楕円形を呈し、断面形は深さ62cmの逆台形を呈している。

竈 東壁中央部からやや南寄りに、砂質粘土で構築されている。規模は、長さ167cm、幅123cmを測る。右側袖部は攪乱を受けて失われているが、火床は赤変硬化している。煙道部の壁外への掘り込みは見られず、煙道は火床から急な角度で外傾して立ち上がっている。

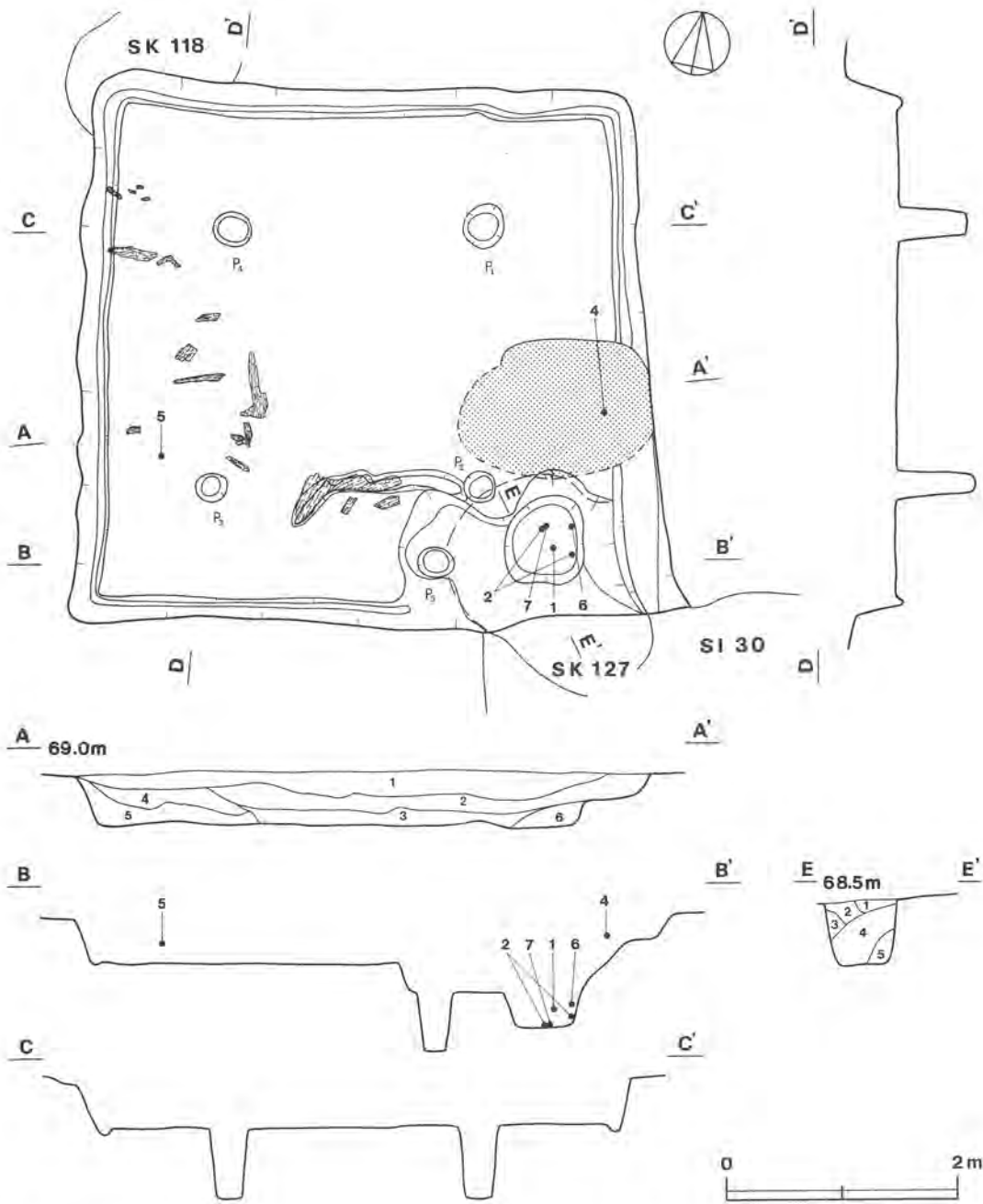
覆土 自然堆積。

遺物 多量の土師器の甕、坏等の破片が竈前面や貯蔵穴付近を中心に出土している。貯蔵穴内下層から第124図1の甕は横位の状態で、6の埴は正位の状態で、7の鉢は斜位の状態で出土している。5の坏は南西部覆土から正位の状態で、4の甕は竈内からつぶれた状態で出土している。

所見 本跡は、重複している全ての遺構より新しく、床面や覆土下層から多量の炭化材が検出されていること等から焼失家屋と思われる、完形に近い遺物が比較的多く床面直上から出土していること等から、住居使用期間中に火災に遭遇したものと考えられる。遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住居跡と思われる。

第31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第124図 1	甕 土師器	A 18.6 B 28.4 C 6.4	やや突出した平底。胴部は球形状を呈し、最大径は中位に持つ。口縁部は外傾しながら立ち上がり、上位で大きく外反する。	胴部外面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面軽い削り、一部煤付着。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P220 PL35 80% 貯蔵穴内覆土
2	甕 土師器	A 17.4 B (16.6)	胴下半部欠損。胴部は球形状を呈し、口縁部は外反して大きく開く。	胴部外面へラ磨き、内面へラナデ。口縁部外面横ナデ、内面横位のへラ磨き。輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・スコリア 橙色 普通	P221 35% 貯蔵穴内覆土
3	甕 土師器	A (14.8) B (9.3)	口縁部は頸部から外反気味に立ち上がる。	胴部内・外面へラナデ。頸部外面に強いへラナデ痕有り。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英・雲母 橙色 普通	P222 25% 南東部覆土



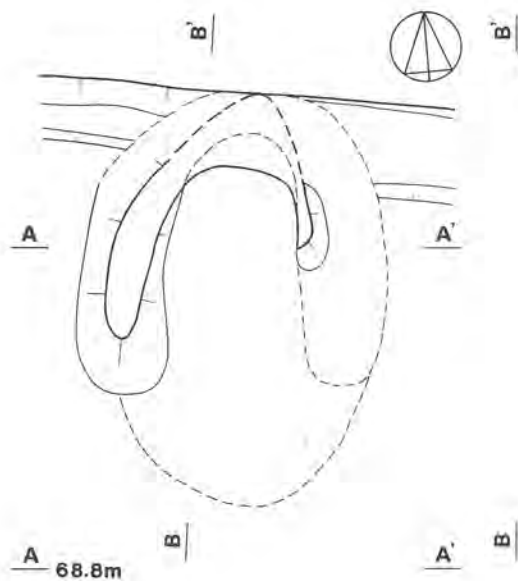
住居跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック多量
- 2 暗褐色 炭化物中量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 3 黒褐色 焼土小ブロック多量, 炭化物中量, ローム粒子多量
- 4 黒褐色 炭化物・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 5 極暗褐色 炭化物少量, ローム小ブロック多量
- 6 黒褐色 焼土中ブロック中量, ローム小ブロック多量

貯蔵穴土層解説

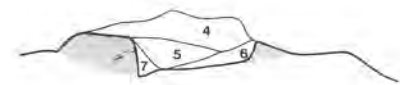
- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・パミス多量
- 2 暗褐色 ローム大ブロック中量, ローム小ブロック・パミス多量
- 3 暗褐色 炭化物中量, ローム小ブロック・パミス多量
- 4 黒褐色 炭化物中量, ローム小ブロック・ローム粒子・パミス多量
- 5 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・パミス多量

第 122 図 第 31 号住居跡実測図



竈土層解説

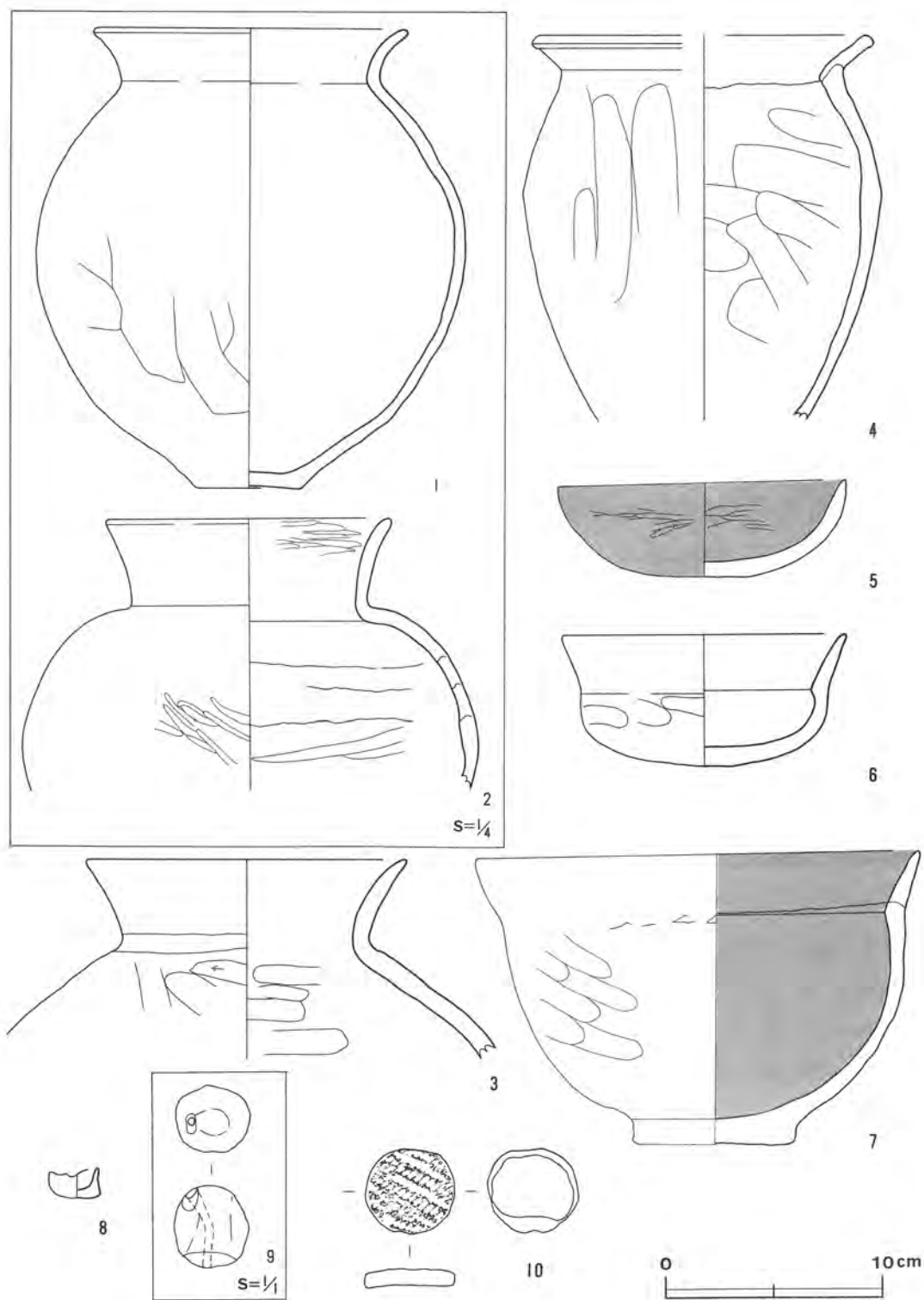
- 1 黒褐色 焼土粒子多量, ローム小ブロック中量, パミス多量
- 2 暗赤褐色 焼土粒子・パミス多量
- 3 極暗赤褐色 焼土粒子多量
- 4 黒褐色 焼土粒子・炭化物・ローム小ブロック中量, ローム粒子多量
- 5 暗赤褐色 ローム小ブロック中量, パミス多量
- 6 灰褐色 炭化物中量, ローム粒子多量, 砂質粘土少量
- 7 黒褐色 焼土小アブロック中量, ローム小ブロック多量, 砂質粘土少量
- 8 暗赤褐色 ローム粒子多量



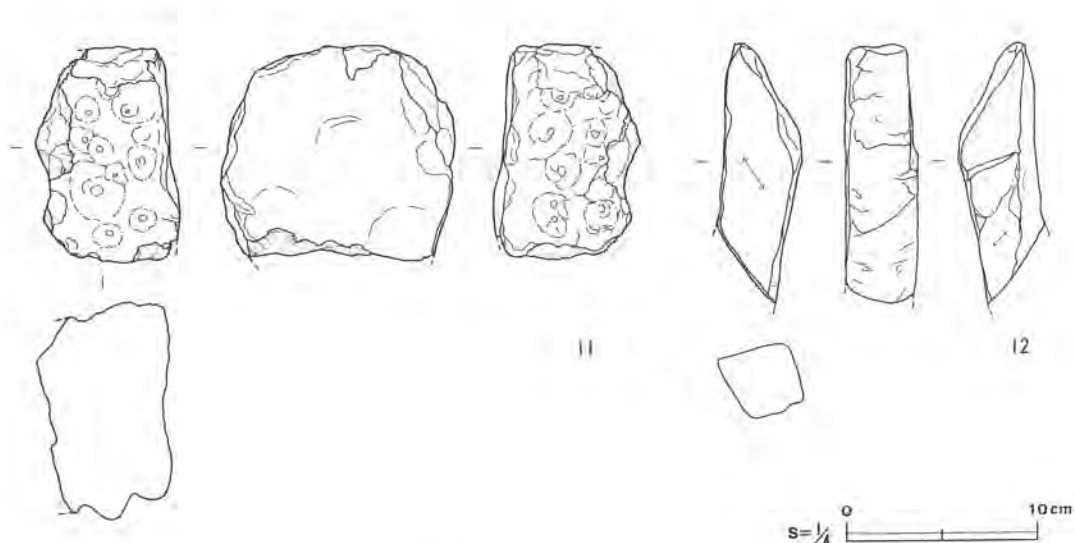
第123図 第31号住居跡竈実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第124図 4	甕 土師器	A (15.8) B (19.0)	胴部はやや長胴を呈し、内彎しながら立ち上がり、最大径は上位に持つ。口縁部は「く」の字状を呈して開き、内側の折り返し口縁。	胴部外面縦位のヘラナデ、内面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・礫にぶい橙色普通	P223 35% 竈内
5	坏 土師器	A 13.2 B 4.6 C 3.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部はほぼ直立して立ち上がる。	底部ヘラ削り。体部内・外面ヘラ磨き。口縁部外面ナデ。内・外面赤彩。	砂粒・スコリア 橙色普通	P225 80% PL35 南西部覆土
6	碗 土師器	A 13.2 B 6.2	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でやや外傾する。体部との境の内面に稜を有する。	底部ヘラ削り。体部外面ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。体部外面一部煤付着。	砂粒・長石・スコリアにぶい橙色普通	P224 100% PL35 貯蔵穴内覆土
7	鉢 土師器	A 20.5 B 13.7 C 7.5	突出した平底。胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は緩く外反して開く。	底部ヘラ削り。胴部外面ヘラナデ、内面弱い磨き。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕有り。内面赤彩。胴部外面煤付着。	砂粒・長石・石英・雲母・パミス 橙色普通	P226 80% PL35 貯蔵穴内覆土
8	ミニチュア 土器 土師器	A 2.3 B 1.4 C 2.0	平底。体部は直立気味に立ち上がり、口縁部に至る。	体部外面煤付着。	砂粒・長石・石英 普通	P227 80% PL35 南西部覆土

図版番号	器種	法量				出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第124図9	球状土鉢	1.3	1.2	1.0	1.4	覆土 DP13 孔径0.2cm	PL35
10	土製門板	3.9	4.2	1.0	16.3	覆土 DP12	PL35



第124图 第31号住居跡出土遺物実測図(1)



第 125 図 第 31 号住居跡出土遺物実測図 (2)

図版番号	器 種	石 質	法 量				出 土 位 置	備 考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第125図11	凹石	花崗岩	(11.5)	(7.7)	(12.2)	(1247.8)	北東部覆土	Q52 表裏両面に凹み有り。 PL35
12	砥石	結晶片岩	(13.8)	4.5	3.8	(1247.8)	覆土	Q53 PL35

第 33 号住居跡 (第 126 図)

位置 調査区の北部東寄り, A2j₁ 区を中心に確認されているが, 東側は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡の西部は第 34 号住居跡の東部を掘り込み, 南部は第 114 号土坑を, 北コーナーは第 146 号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 4.72 m, 短軸 4.70 m の方形を呈している。

長軸方向 N-20°-W。

壁 壁高 35~55 cm で, ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅 14~30 cm, 深さ 4~6 cm, 断面形は皿状を呈し, 調査区域外の未確認部分を除いて壁下を全周している。

床 平坦で, 柱穴を結んだ線の内側及び竈付近はよく踏み固められている。

ピット 4 か所 (P₁~P₄) 検出されている。P₁~P₃ は, 径 26~29 cm, 深さ 40~54 cm で, 支柱穴と思われる。P₄ は, 径 29 cm, 深さ 33 cm で, 出入り口に伴う梯子ピットと思われる。

貯蔵穴 南東壁際中央部からやや東寄りに検出されている。平面形は長軸 134 cm, 短軸 80 cm の隅丸長方形を呈し, 深さ 30 cm で, 断面形は東壁が二段になった逆台形を呈している。

竈 北西壁中央部に, 砂質粘土で構築されている。規模は, 長さ 60 cm, 幅 72 cm を測る。火床は

赤変硬化している。煙道部の壁外への掘り込みは見られず、煙道は火床から急な角度で外傾して立ち上がっている。

覆土 自然堆積。

遺物 竈付近及び貯蔵穴を中心に、土師器の甕や坏や碗の破片等が多数出土している。第128図1の甕は北西部と南東部の床面から横位の状態で、3の坏は南東部床面から正位の状態で出土している。7の片口鉢は南西壁際中央部から横位の状態で、2の甕は竈南側からつぶれた状態で、南コーナー壁際からは球状土錘が出土している。貯蔵穴内からは、炭化した種子が検出された。

所見 本跡は、重複している全ての遺構より新しく、遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住居跡と思われる。

第34号住居跡（第126図）

位置 調査区の北部、A1j₀区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の東部は第33号住居跡の西部に掘り込まれ、東コーナーは第114号土坑を、中央部北寄りには115号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸6.76m、短軸〔6.16〕mのほぼ方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N-21°-W。

壁 壁高5～27cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅16～18cm、深さ2～4cm、断面形は皿状を呈し、第33号住居跡に切られている北東壁を除いて壁下を全周している。

床 平坦で、柱穴を結んだ線の内側はよく踏み固められている。

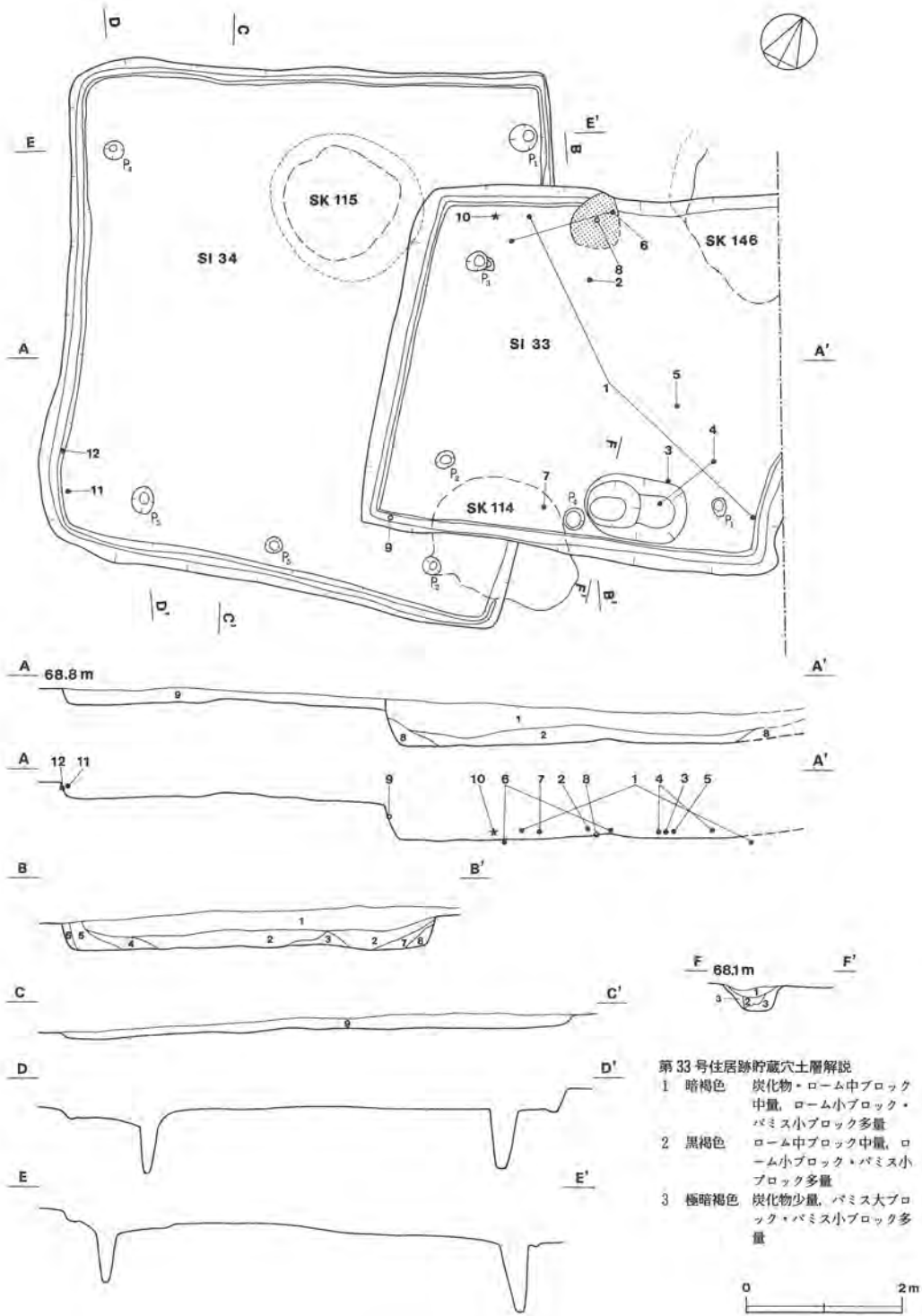
ピット 5か所（P₁～P₅）検出されている。P₁～P₄は、径28～36cm、深さ64～96cmで、主柱穴と思われる。P₅は、径25cm、深さ55cmで、出入り口に伴う梯子ピットと思われる。

炉 検出されない。

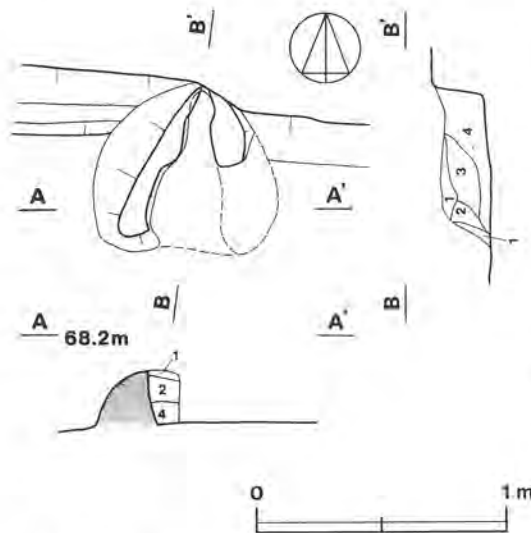
覆土 自然堆積。

遺物 南部床面から、土師器片等が比較的多く出土している。南西コーナー床面から第129図11の壺はつぶれた状態で、12の大形埴は正位の状態で出土している。

所見 本跡は、第33号住居跡より古く、第114・115号土坑より新しい。遺構の形態や遺物等から古墳時代前期の住居跡と思われる。



第126図 第33・34号住居跡実測図



第 127 図 第 33 号住居跡竈実測図

第 33・34 号住居跡土層解説

- 1 暗褐色 炭化物少量, ローム小ブロック中量, ローム粒子多量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子多量, パミス中ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック中量, ローム粒子・パミス小ブロック・パミス多量
- 4 黒褐色 焼土中ブロック中量, 焼土小ブロック多量, ローム小ブロック中量, ローム粒子多量
- 5 暗褐色 焼土小ブロック・炭化物・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量
- 6 褐色 ソフトローム
- 7 黒褐色 ローム中ブロック中量, ローム小ブロック・ローム粒子多量
- 8 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・パミス多量
- 9 暗褐色 炭化物少量, ローム粒子多量

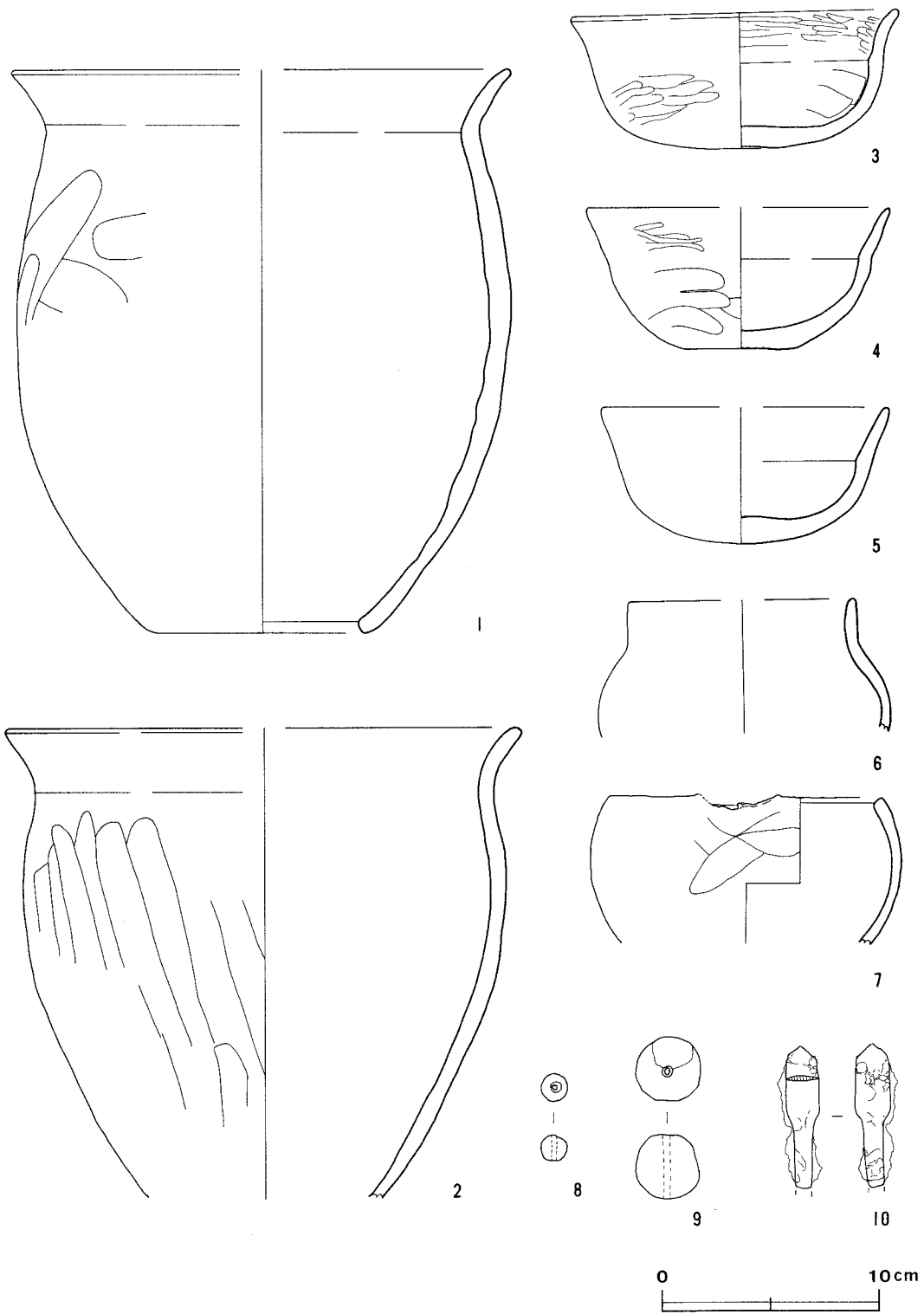
第 33 号住居跡竈土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・砂質粘土ブロック多量
- 2 暗赤褐色 焼土中ブロック・焼土小ブロック多量
- 3 黒褐色 ローム粒子・砂質粘土粒子多量
- 4 黒褐色 焼土小ブロック中量, ローム粒子多量

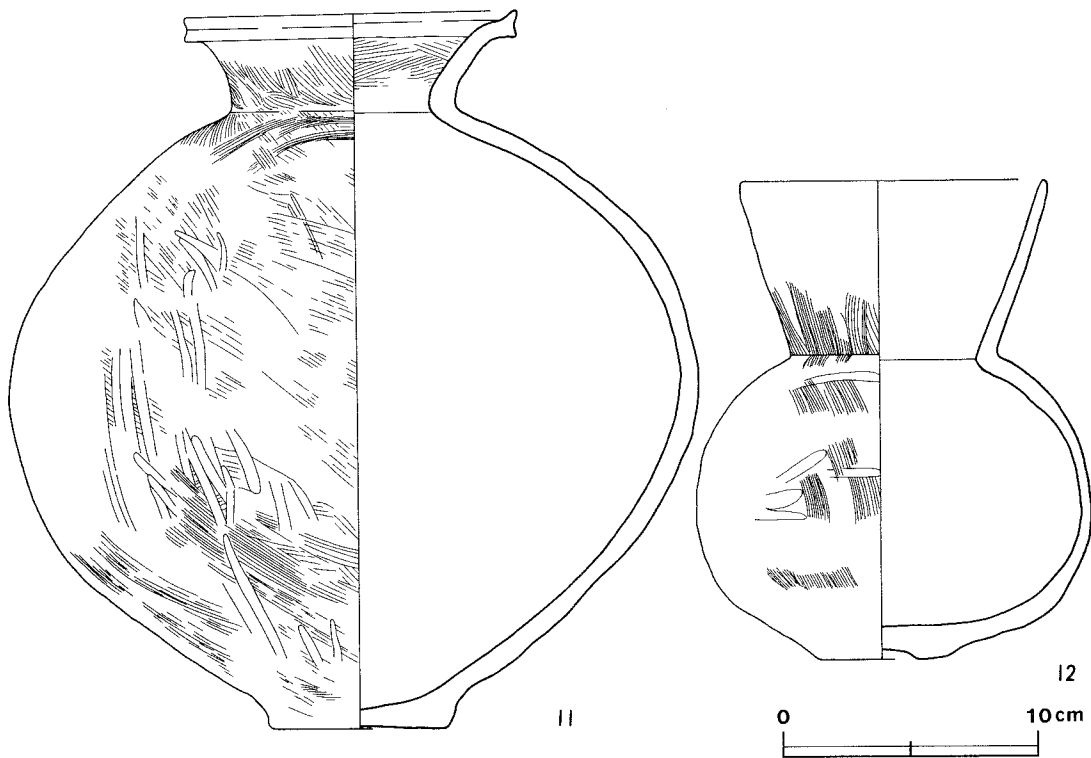
第 33 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第128図 1	甗 土師器	A [23.1] B 26.2 C 9.8 孔径 8.8	無底式の甗。胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で「く」の字状に外反する。	胴部外面へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面煤付着、内面磨滅が著しい。	砂粒・長石・ 橙色 普通	P231 PL37 80% 北西部と南東部の床面直上
2	甗 土師器	A [24.0] B (21.8)	無底式の甗。胴部はやや長胴を呈し、口縁部で大きく外反する。	胴部外面へラナデ後磨き。口縁部内・外面横ナデ。胴部外面煤付着。	砂粒・長石・ 石英・パミス 赤色 普通	P232 PL37 65% 竈南側
3	坏 土師器	A 15.2 B 6.4 C 3.4	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、上位で直立し、口縁部は外反気味に開く。	底部へラ削り。体部外面へラ磨き、内面へラナデ。口縁部外面横ナデ、内面へラ磨き。体部外面煤付着。	砂粒・長石・ スコリア にぶい橙色 普通	P233 PL37 100% 南東部床面直上
4	坏 土師器	A [14.0] B 6.6 C 5.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反して開く。	体部外面へラナデ。口縁部外面へラ磨き、内面横ナデ。	砂粒・長石・石英・ スコリア にぶい橙色 普通	P235 PL37 90% 南東部床面直上
5	坏 土師器	A [13.4] B 6.3	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は外反気味に開く。	底部へラ削り。体部内面一部磨滅。	砂粒・長石・石英 明赤褐色 普通	P236 35% 中央部床面直上
6	埴 土師器	A [10.3] B (6.2)	体部は中位から上位に強く屈曲して口縁部に至り、口縁部は垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア・ パミス にぶい赤褐色 普通	P230 25% 竈内と北西部床面直上
7	片口鉢 土師器	A [12.6] B (6.8)	胴部は球形状を呈し、口縁部で内彎する。口縁部にひとつ注口が付く。	胴部外面へラナデ。内面弱いナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	P234 PL37 40% 南西壁際 中央部床面直上

図版番号	器種	法量				出土位置	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第128図8	球状土鉢	1.2	1.2		1.7	貯蔵穴内覆土	DP14 孔径0.2cm PL37
9	球状土鉢	3.0	3.0		(23.1)	南西壁溝	DP15 孔径0.2cm PL37



第128图 第33・34号住居跡出土遺物実測図(1)



第129図 第33・34号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	法 量			出 土 位 置	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)		
第128図10	鉄鉢	(6.6)	2.2	(11.4)	北西部床面直上	M6 断面形は長方形を呈する。 PL37

第34号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
第129図 11	壺 土師器	A 13.1 B 28.9 C 7.0	突出した平底。胴部は球形状を呈し、口縁部は有段口縁で、緩く外反し大きく開く。口唇部は上方につまみ上げられている。	底部へら削り。胴部外面ハケ目整形後へら磨き、内面ハケ目整形。口縁部内・外面下位ハケ目整形。口縁部内・外面上端横ナデ。	砂粒・長石 にふい黄橙色 普通	P237 PL37 85% 南西コーナー 床面直上
12	大形埴 土師器	A [12.2] B 19.2 C 5.4	上げ底気味の丸底。胴部は球形状を呈し、口縁部で大きく外傾する。	胴部外面ハケ目整形後へらナデ。頸部から口縁部下位外面ハケ目整形。	砂粒・長石・石英 にふい褐色 普通	P238 PL37 65% 南西コーナー 床面直上

第42号住居跡(第130図)

位置 調査区の南部東寄り、C2g0区を中心に確認されているが、北東側は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡の北西部は、第23号住居跡の北東部を除く大部分に掘り込まれている。

規模と平面形 長軸 6.06 m, 短軸 (2.68) m のほぼ方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N-42°-W。

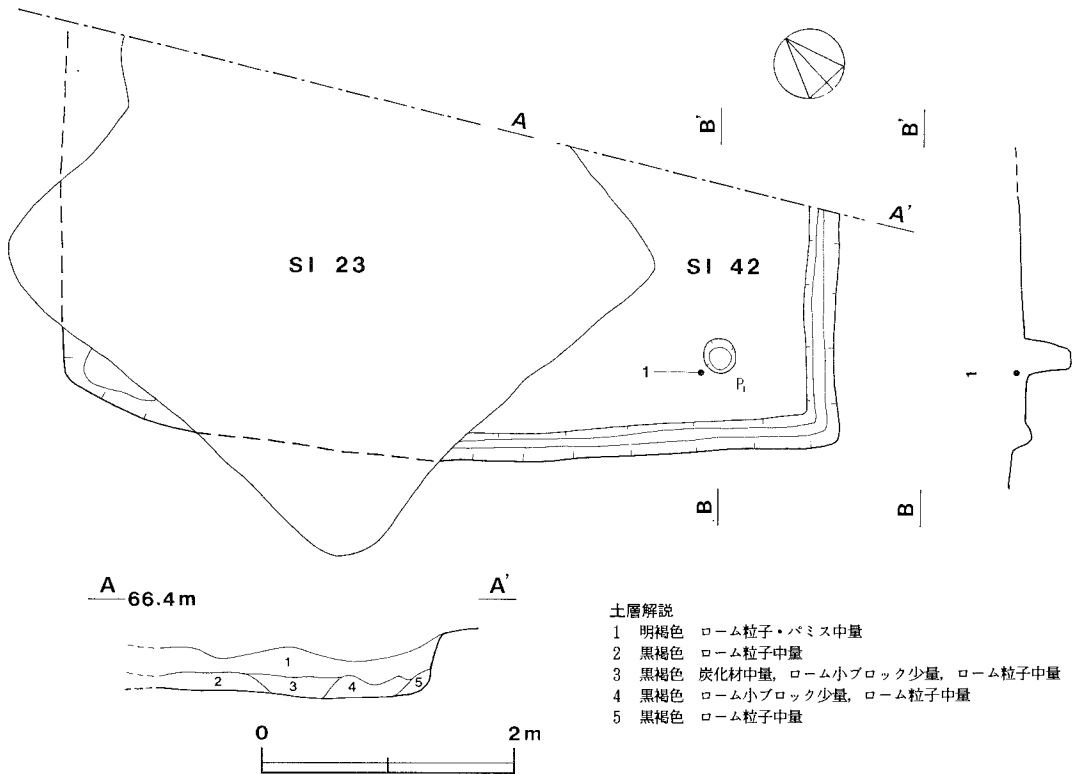
壁 壁高 14~21 cm, ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅 10~18 cm, 深さ 5~8 cm, 断面形は皿状を呈し, 第 23 号住居跡に切られている北西壁及び調査区域外の未確認部分を除いて壁下を周回している。

床 平坦で, 中央部を中心によく踏み固められている。

ピット 1 か所 (P₁) 検出されている。P₁ は, 径 28 cm, 深さ 38 cm で, 主柱穴と思われる。

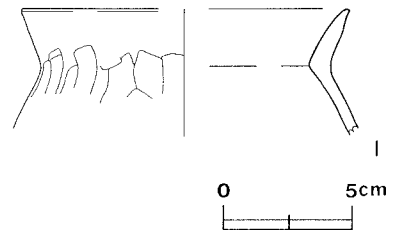
覆土 自然堆積。



第 130 図 第 42 号住居跡実測図

遺物 出土遺物は全体的に少ない。第 131 図 1 の甕は南コーナー付近床面から斜位の状態で出土している。

所見 本跡は, 第 23 号住居跡より古く, 北東側が調査区域外のため及び第 23 号住居跡に掘り込まれているため, 竈を含めた遺構全体の確認はできなかったが, 遺構の形態や遺物等から古墳時代後期の住居跡と推定される。



第 131 図 第 42 号住居跡出土遺物実測図

第 42 号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第131図 1	甕 土師器	A (13.0) B (5.1)	口縁部片。口縁部は外傾して立ち上がる。	頸部縦位のヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 赤褐色 普通	P265 10% 南コーナー付 近床面直上

第 5 節 平安時代の遺構と遺物

1 竪穴住居跡

当調査区から検出された平安時代の住居跡は、5軒である。これらの住居跡は、調査区の南部から検出されている。平面形はほぼ方形を呈している。大部分が調査区域外に延びていて詳細が不明である第8号住居跡を除いては、全て竈が付設されている。出土遺物は、9世紀代を中心とする土師器の甕、甌、坏、高台付坏等や須恵器の坏、高台付坏等である。

第2号住居跡 (第132図)

位置 調査区の南部西寄り、C2h6区を中心に確認されているが、南西コーナーはわずかに調査区域外に延びている。

重複関係 本跡の北西コーナーは、第52号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸 5.42 m、短軸 5.20 m の方形を呈している。

長軸方向 N - 5° - W。

壁 壁高 15 ~ 55 cm で、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅 16 ~ 22 cm、深さ 4 cm、断面形は皿状を呈し、調査区域外の未確認部分を除いて壁下を全周している。

床 平坦で、柱穴を結んだ線の内側及び竈付近はよく踏み固められている。

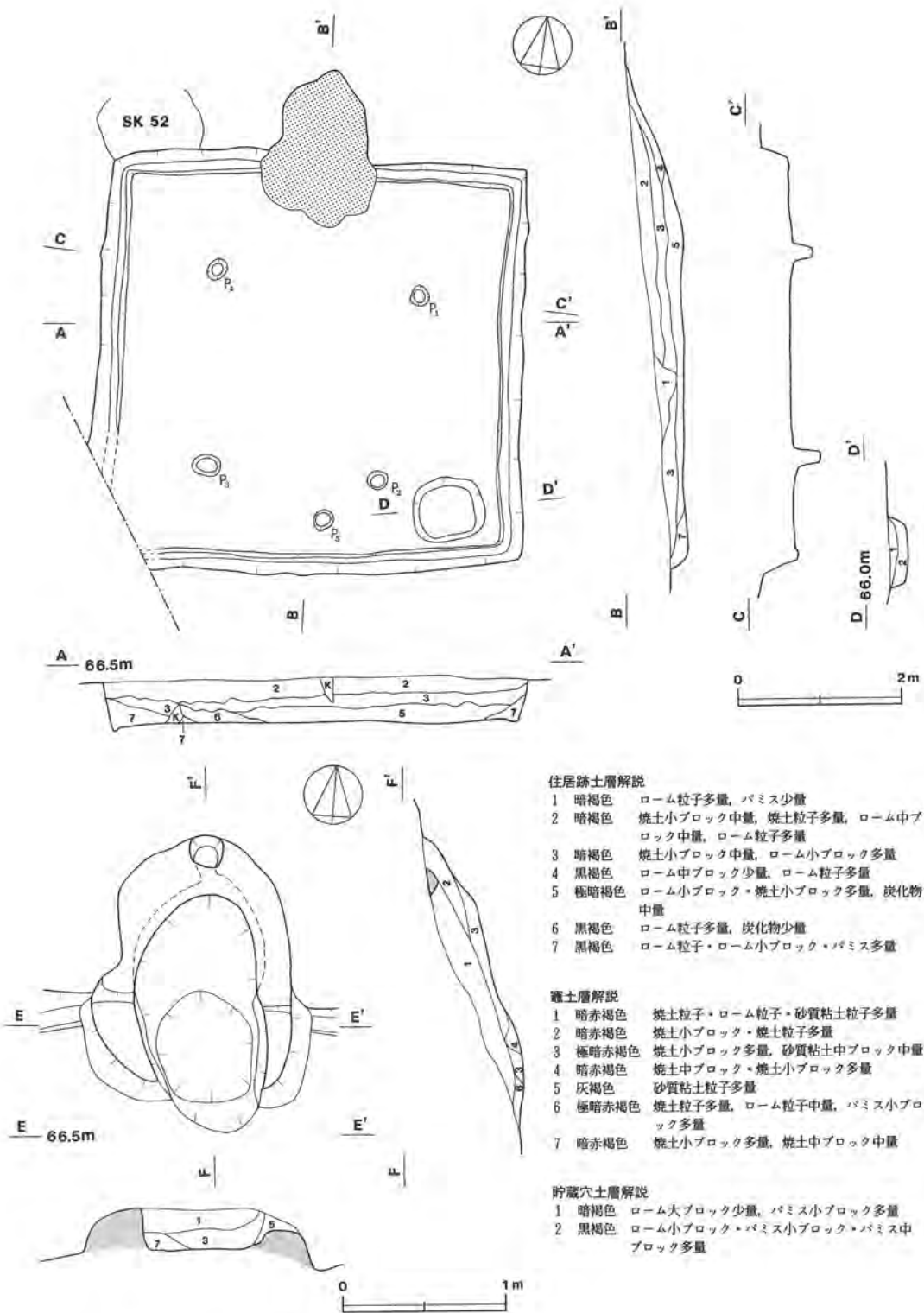
ピット 5か所 (P₁ ~ P₅) 検出されている。P₁ ~ P₄ は、径 24 ~ 35 cm、深さ 26 ~ 42 cm で、主柱穴と思われる。P₅ は、径 24 cm、深さ 24 cm で、出入り口に伴う梯子ピットと思われる。

貯蔵穴 南東コーナーに検出されている。平面形は長軸 90 cm、短軸 78 cm の長方形を呈し、断面形は深さ 20 cm の逆台形を呈している。

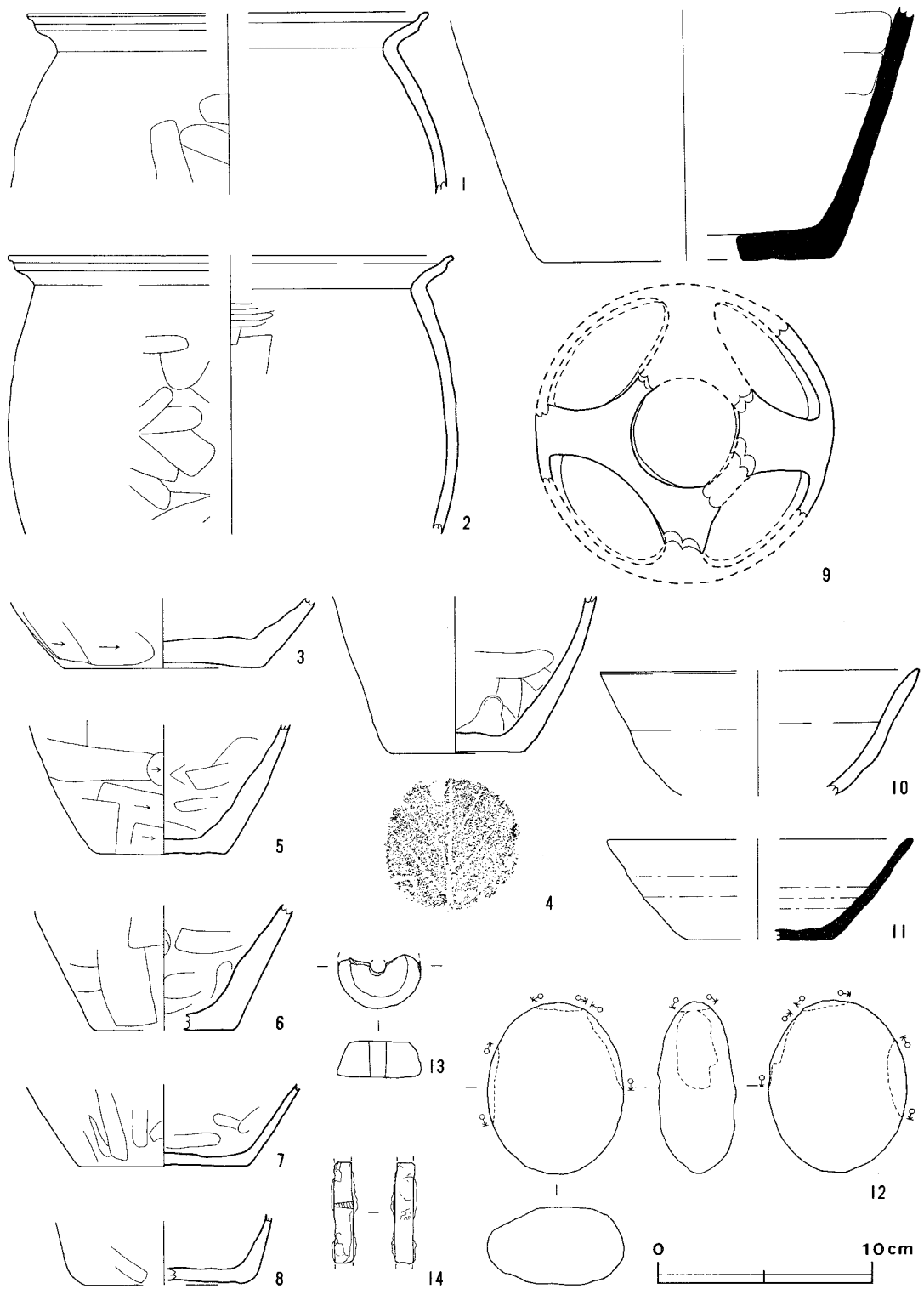
竈 北壁中央部に、壁を 120 cm 程壁外へ掘り込み、砂質粘土で構築されている。規模は、長さ 198 cm、幅 140 cm を測る。火床は赤変硬化し、煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がり、屋外に大きく延びている。

覆土 自然堆積。

遺物 竈付近を中心に、土師器の甕や坏の破片、須恵器の甌や坏の破片が集中して出土している。



第132図 第2号住居跡・竈実測図



第133图 第2号住居跡出土遺物実測図

竈前方床面から第133図4の甕は正位の状態、5の甕はつぶれた状態で出土している。9の須恵器の甔は竈内からつぶれた状態で出土している。

所見 本跡は、第52号土坑より新しく、遺構の形態や遺物等から平安時代前期の住居跡と思われる。

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第133図1	甕 土師器	A (18.7) B (8.6)	張りのある胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口唇部を外上方へつまみ上げる。	胴部外面縦位のヘラナデ。口縁部から頸部にかけて内・外面横ナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P16 20% 北東部覆土
2	甕 土師器	A (20.8) B (13.2)	張りの弱い胴部から、頸部を「く」の字状に強く屈曲させて、口唇部を外上方へつまみ上げる。	胴部外面ヘラナデ、内面ヘラ当て痕有り。頸部内面ヘラ磨き。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英 橙色 普通	P17 20% 北東部床面直上
3	甕 土師器	B (3.3) C (9.4)	平底。胴部は外傾して立ち上がる。	胴部外面横位のヘラ削り。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P18 10% 南西部覆土
4	甕 土師器	B (7.4) C 6.1	平底。胴上半部欠損。胴下半部は外傾して立ち上がる。	底部に鮮明な木葉痕。内面横ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 橙色 普通	P19 15% 竈前部床面直上
5	甕 土師器	B (6.1) C 5.6	平底。胴上半部欠損。胴下半部は外傾して立ち上がる。	底部ヘラ削りで一部剥離が見られる。胴部外面横位のヘラ削り、内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P20 15% 竈前部床面直上
6	甕 土師器	B (5.9) C (6.6)	平底であるが一部欠損。胴上半部欠損。胴下半部は外傾して立ち上がる。	内・外面横位のヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア 明褐色 普通	P21 15% 北東部覆土
7	甕 土師器	B (3.9) C (7.7)	平底であるが一部欠損。胴上半部欠損。胴下半部は外傾して立ち上がる。	胴部外面縦位のヘラナデ、内面横位のヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・バミス にぶい橙色 普通	P22 10% 南東部覆土
8	甕 土師器	B (3.3) C (7.4)	平底であるが一部欠損。胴上半部欠損。胴下半部は外傾して立ち上がる。	胴部内・外面横位のヘラナデ。	砂粒・長石・雲母・バミス にぶい橙色 普通	P23 10% 南西部覆土
9	甔 須恵器	B (12.4) C (13.4)	五孔式の甔。胴上半部欠損。胴下半部は外傾して立ち上がる。	胴部内面横ナデ。	砂粒 灰白色 普通	P24 PL5 10% 竈内
10	坏 土師器	A (14.8) B (5.9)	丸底であるが一部欠損。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外傾して立ち上がる。体部と口縁部との境には内・外面に弱い稜を有する。	口縁部内・外面横ナデ。	長石・スコリア 橙色 普通	P25 15% 北西部覆土
11	坏 須恵器	A (14.3) B 4.7 C (6.7)	平底。体部は外傾して立ち上がる。口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形後横ナデ。	砂粒・長石・雲母・スコリア・バミス 淡黄色 普通	P26 15% 竈内

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第133図12	磨石	粘板岩	8.1	6.4	3.7	258.3	北西部覆土	Q4 PL5
13	紡錘車	滑石	3.9	(1.7)	1.7	(19.8)	北西部覆土	Q5 孔径(0.7)cm 1/2欠損 PL5

図版番号	器種	法量			出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)		
第133図14	刀子	(4.8)	1.2	(5.3)	北西部覆土	M1 断面V字状 PL5

第3号住居跡（第134図）

位置 調査区の中央部西寄り，C2d₃区を中心に確認されている。

規模と平面形 長軸 2.96 m，短軸 2.95 m の方形を呈している。

長軸方向 N-1°-W。

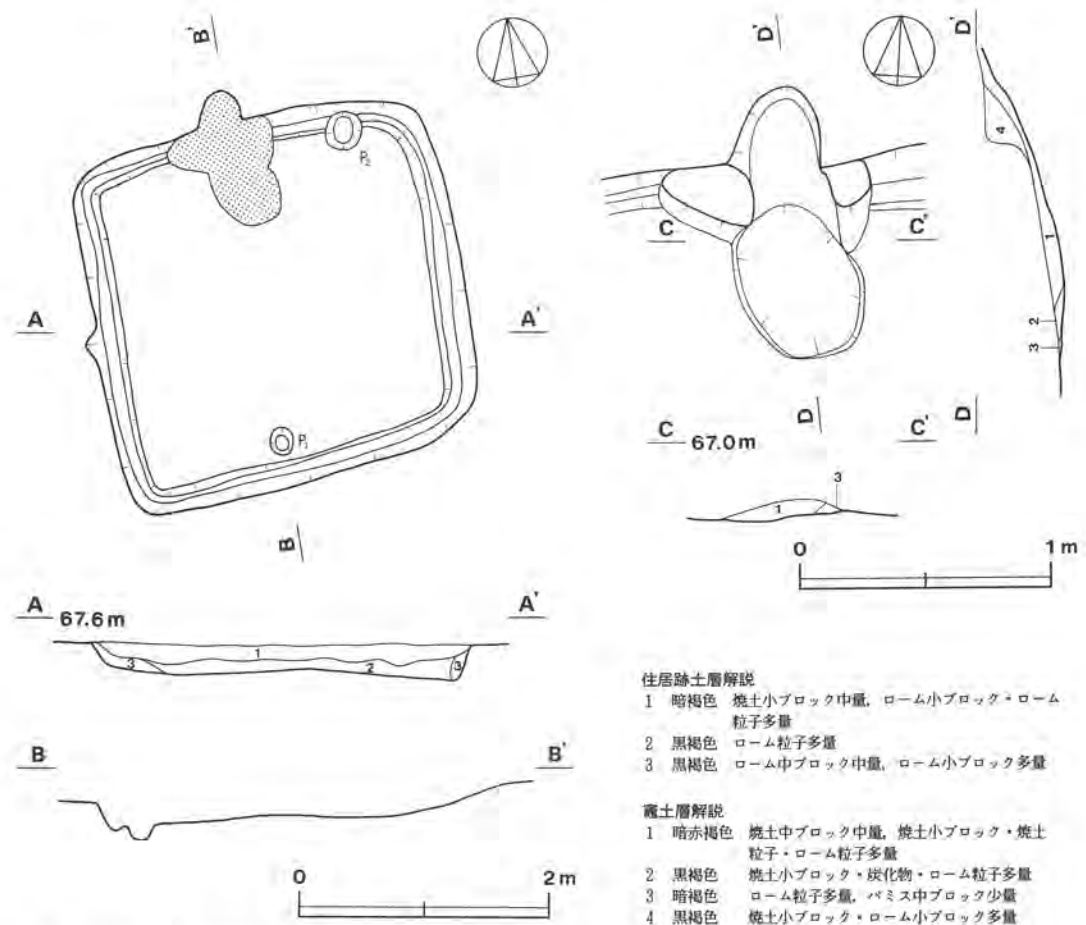
壁 壁高 19~26 cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅 14~20 cm，深さ 3~8 cm，断面形は皿状を呈し，壁下を全周している。

床 平坦で，竈付近から中央部の床面はよく踏み固められている。

ピット 2か所（P₁，P₂）検出されている。P₁は，径 22 cm，深さ 12 cmで，出入り口に伴う梯子ピットと思われる。P₂は，径 30 cm，深さ 10 cmであるが，性格は不明である。

竈 北壁中央部に，壁を 15 cm程壁外へ掘り込んで構築されているが，攪乱されている。規模は，長さ 55 cm，幅 45 cmを測る。火床は赤変硬化している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がり，壁外に延びている。

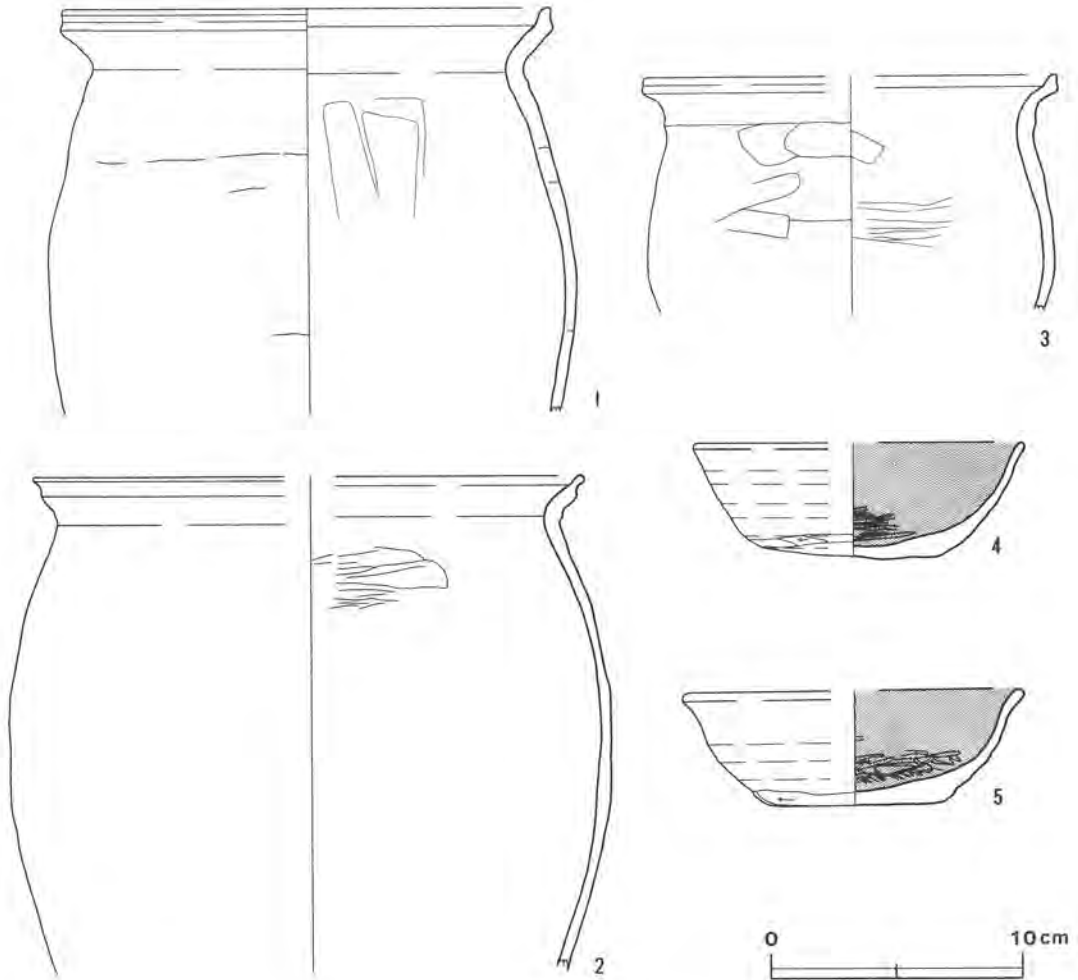


第134図 第3号住居跡・竈実測図

覆土 自然堆積。

遺物 竈内を中心に土師器の甕や坏の破片が出土している。竈内から第135図1の甕は斜位の状態で、4の坏はつぶれた状態で出土している。

所見 本跡は、調査区の中で検出された住居跡の中で最も小形である。遺構の形態や遺物等から平安時代前期の住居跡と思われる。



第135図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第135図 1	甕 土師器	A 19.4 B (16.3)	底部から胴下半部にかけて欠損。 胴部は内彎しながら立ち上がる。 頸部は「く」の字状に屈曲し、 口唇部を上方へつまみ上げる。	口縁部内・外面横ナデ。胴部外 面に輪積み痕有り。	砂粒・雲母 橙色 普通	P27 PL5 60% 竈内
2	甕 土師器	A (22.0) B (20.9)	胴部は内彎しながら立ち上がる。 頸部は「く」の字状に屈曲し、 口唇部を外上方へつまみ上げる。	頸部内面ヘラナデ。口縁部内・ 外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母・ スコリア 橙色 普通	P28 15% 竈内
3	甕 土師器	A (16.4) B (9.4)	胴部は内彎しながら立ち上がる。 頸部は「く」の字状に屈曲し、 口唇部を上方へつまみ上げる。 頸部外面に弱い稜を持つ。	胴部外面ヘラナデ。胴部内面丁 寧なヘラナデ。口縁部内・外面 横ナデ。	砂粒・長石・雲母 灰褐色 普通	P29 15% 竈内
4	坏 土師器	A (13.2) B 4.7 C 7.1	平底。体部は内彎しながら立ち 上がり、口縁部でわずかに外反 する。	水挽き成形後横ナデ。底部回転 ヘラ削り。体部下端外面ヘラ削 り。体部内面丁寧なヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒・長石・ 雲母・バミス 明褐色 普通	P30 PL5 60% 竈内
5	坏 土師器	A (13.6) B 4.6 C (6.8)	平底。体部は内彎しながら立ち 上がり、口縁部でわずかに外反 する。口唇部で器厚を薄くする。	水挽き成形後横ナデ。底部回転 ヘラ削り。体部下端外面ヘラ削 り。体部内面丁寧なヘラ磨き。 内面黒色処理。	砂粒・長石・雲母 にぶい黄褐色 普通	P31 PL5 50% 竈内

第5号住居跡 (第136図)

位置 調査区の南部、C2f7区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の東部は第6号住居跡の西部や第106・107号土坑を、南西コーナーは第57・137号土坑を、南部は第58号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸7.40m、短軸7.00mの方形を呈している。

長軸方向 N-6°-W。

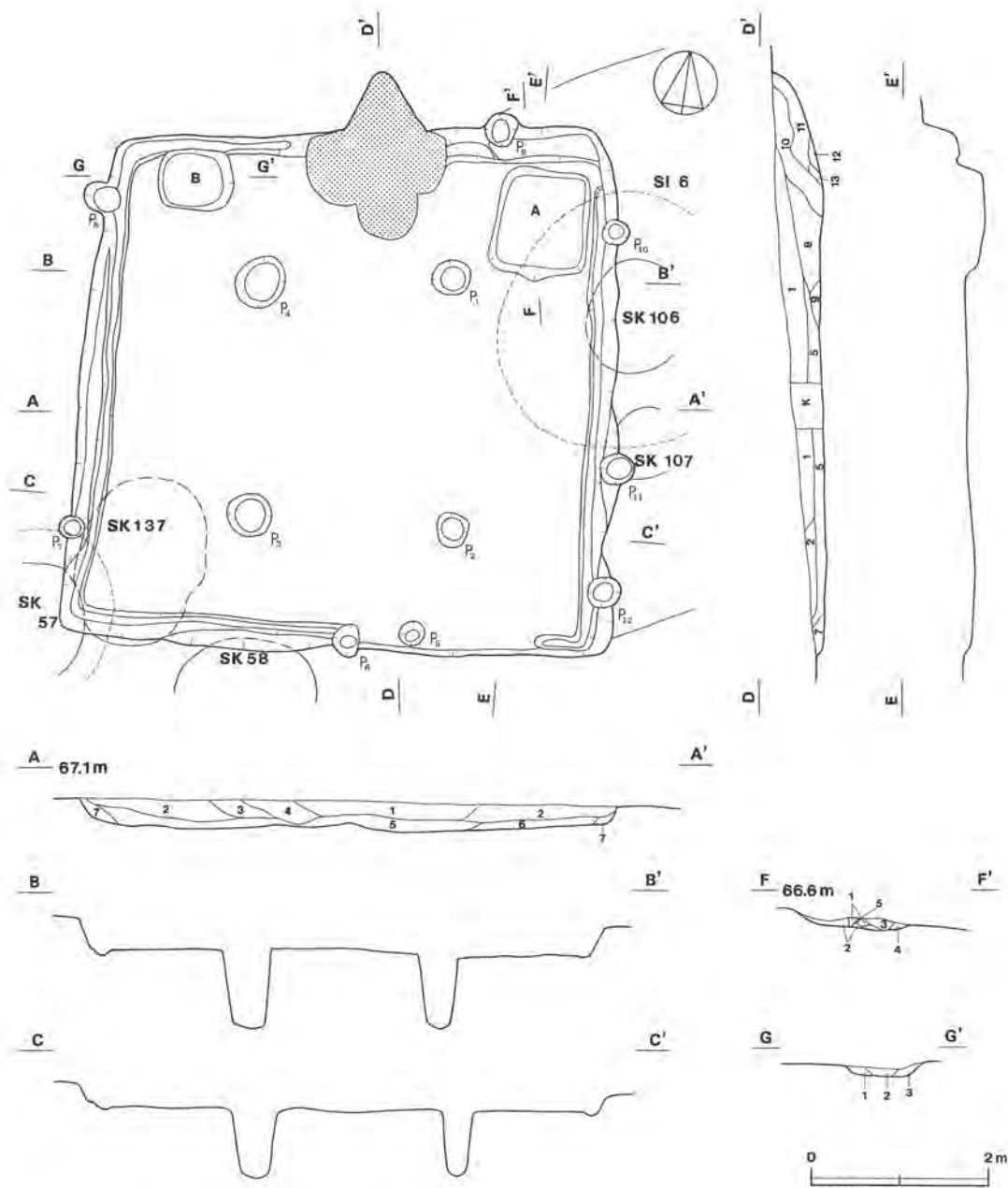
壁 壁高15～57cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅18～26cm、深さ3～7cm、断面形は皿状を呈し、壁下を全周している。

床 平坦で、柱穴を結んだ線の内側及び竈付近はよく踏み固められている。

ピット 12か所 (P1～P12) 検出されている。P1～P4は、径42～62cm、深さ82～90cmで、支柱穴と思われる。P5は、径40cm、深さ40cmで、出入り口に伴う梯子ピットと思われる。P6～P12は、規模径30～38cm、深さ30～42cmで、壁柱穴、あるいは底等の施設に伴うものと思われる。貯蔵穴は竈の両脇に2か所検出されている。貯蔵穴A (竈東側) は、平面形が長軸130cm、短軸104cmの長方形を呈し、断面形は深さ12cmの浅い逆台形を呈している。貯蔵穴B (竈西側) は、平面形が長軸86cm、短軸70cmの長方形を呈し、断面形は深さ10cmの浅い逆台形を呈している。

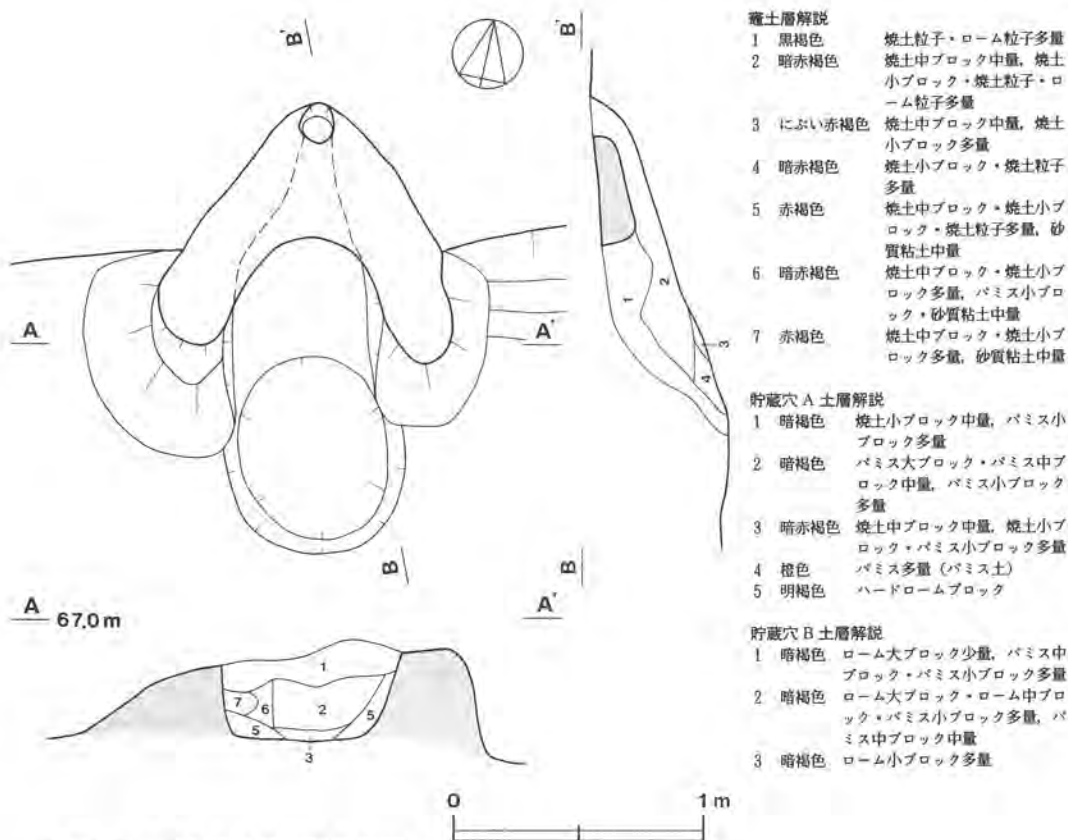
竈 北壁中央部に、壁を32cm程壁外へ掘り込み、砂質粘土で構築されている。規模は、長さ95cm、幅80cmを測る。燃焼部からは焼土や炭化物が出土し、火床は熱を受けて赤変硬化している。



住居跡土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------------|-----------|-----------------------------------|
| 1 暗褐色 | 炭化物中量, ローム小ブロック多量 | 8 灰褐色 | 焼土中ブロック中量, ローム小ブロック多量, パミス小ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子多量 | 9 灰褐色 | ローム大ブロック多量 |
| 3 暗褐色 | ローム小ブロック多量, パミス小ブロック中量 | 10 黒褐色 | 焼土粒子・ローム粒子多量 |
| 4 暗褐色 | ローム小ブロック・ローム粒子多量 | 11 暗赤褐色 | 焼土中ブロック中量, 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム粒子多量 |
| 5 黒褐色 | 焼土小ブロック・ローム中ブロック中量, ローム粒子多量 | 12 にぶい赤褐色 | 焼土中ブロック中量, 焼土小ブロック多量 |
| 6 黒褐色 | ローム大ブロック・ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量 | 13 暗赤褐色 | 焼土小ブロック・焼土粒子多量 |
| 7 暗褐色 | ローム中ブロック中量, ローム小ブロック多量 | | |

第136図 第5号住居跡実測図



第137図 第5号住居跡竈実測図

煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がり、壁外に延びている。

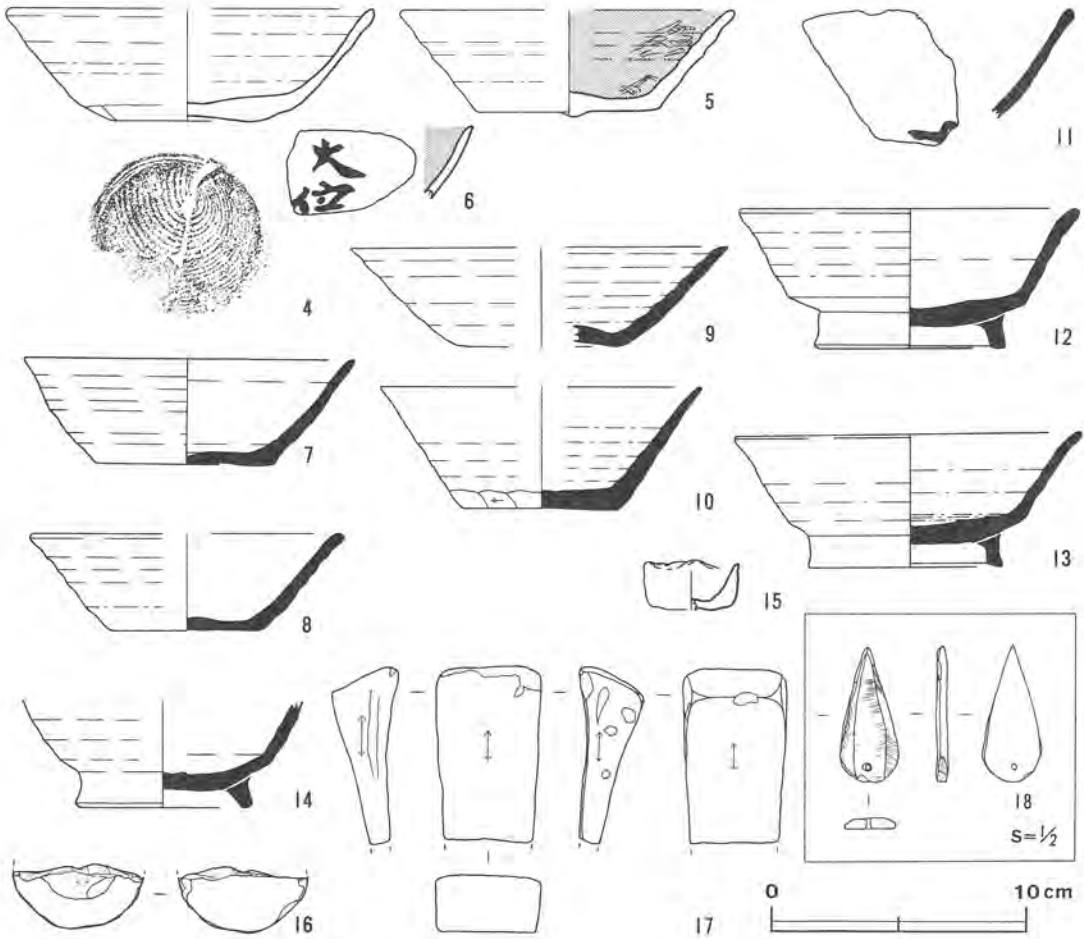
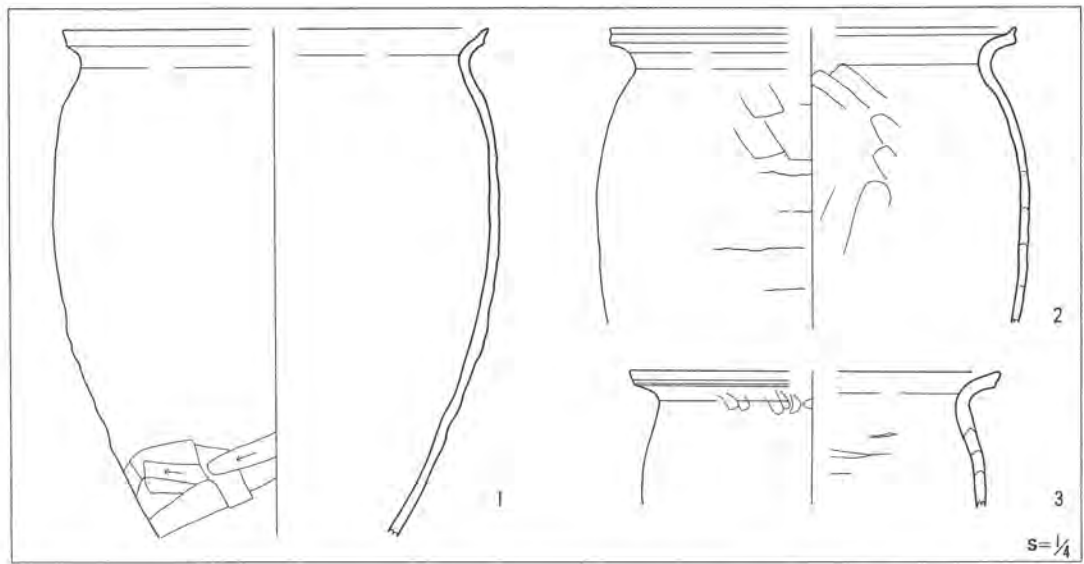
覆土 自然堆積。

遺物 竈内及びその付近からは土師器の甕、坏及びその破片や須恵器片等が多量に出土している。第138図1の甕は竈内からつぶれた状態で、2の甕は竈西側から斜位の状態で、12の須恵器の高台付坏は北西部床面から横位の状態で、13の須恵器の高台付坏は北東部床面から正位の状態で出土している。

所見 本跡は、重複している全ての遺構より新しく、遺構の形態や遺物等から平安時代前期の住居跡と思われる。

第5号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第138図 1	甕 土師器	A (22.2) B (27.0)	胴部は内彎しながら立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈曲し、口唇部を外上方へつまみ上げる。	胴下半部外面へラ削り。口縁部内・外面横ナデ。二次焼成を受け、外面磨滅が著しい。	砂粒・長石・石英 橙色 普通	P54 40% 竈内
2	甕 土師器	A (21.2) B (15.7)	胴部は内彎しながら立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈曲し、口唇部を外上方へつまみ上げる。	胴部内・外面へラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕有り。二次焼成を受け、外面一部磨滅。	砂粒・長石・雲母・スゴリア にぶい橙色 普通	P55 30% 竈内



第 138 图 第 5 号住居跡出土遺物実測図

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第138図 3	甕 土師器	A (19.4) B (7.2)	張りの弱い胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口唇部を外上方へつまみ上げる。	頸部外面縦位のヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英・雲母にぶい 橙色普通	P56 10% 北東部覆土
4	坏 土師器	A (14.8) B 4.5 C 6.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	水挽き成形後横ナデ。底部回転糸切り。二次焼成を受けている。	砂粒・長石・スコリア 橙色普通	P57 60% 竈内
5	坏 土師器	A (13.4) B 4.3 C 7.4	平底であるが中央部が突起している。体部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形後横ナデ。底部回転ヘラ削り。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母・スコリア 浅黄橙色普通	P58 PL8 50% 北東部床面直上
6	坏 土師器		口縁部片。口唇部は丸い。	水挽き成形後横ナデ。内面黒色処理。	砂粒・長石・スコリアにぶい 橙色普通	P59 PL8 5% 北東部覆土 墨書「大位」
7	坏 須恵器	A 13.3 B 4.2 C 7.0	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	水挽き成形後横ナデ。底部手持ちヘラ削り。二次焼成を受けている。	砂粒・長石・バミス 灰白色普通	P60 PL8 90% 竈内
8	坏 須恵器	A (12.6) B 3.9 C (6.0)	平底。体部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形後横ナデ。底部手持ちヘラ削り。体部下端ヘラ削り。	砂粒・長石 灰白色普通	P61 40% 竈袖部
9	坏 須恵器	A (15.0) B 4.0 C (6.4)	平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。	水挽き成形後横ナデ。	砂粒・長石 灰白色普通	P62 PL8 30% 北東部覆土
10	坏 須恵器	A (12.8) B 4.8 C (6.2)	平底。体部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形後横ナデ。底部回転ヘラ切り後底部及び体部下端手持ちヘラ削り。	砂粒・長石 灰白色普通	P63 30% 南東部覆土
11	坏 須恵器		口縁部片。口唇部は丸い。	水挽き成形後横ナデ。	砂粒・長石・スコリア 灰褐色普通	P64 PL8 10% 北東部覆土 墨書文字不明
12	高台付坏 須恵器	A 13.4 B 5.6 D 7.4 E 1.4	平底。ほぼ直立する高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部付近で軽く外反する。	水挽き成形後横ナデ。底部回転ヘラ削り。貼り付け高台。	砂粒・長石 灰白色普通	P65 PL8 80% 北西部床面直上
13	高台付坏 須恵器	A 13.6 B 5.4 D 7.6 E 1.5	平底。直立する高台が付く。体部は外傾して立ち上がり、口縁部付近で軽く外反する。	水挽き成形後横ナデ。底部回転ヘラ削り。貼り付け高台。	砂粒・長石 灰オリーブ色普通	P66 PL8 95% 北東部床面直上
14	高台付坏 須恵器	B (4.3) D 7.0 E 1.3	平底。「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がる。	水挽き成形後横ナデ。底部回転ヘラ削り。貼り付け高台。	砂粒・長石・バミス オリーブ灰色普通	P67 30% 北西部床面直上
15	手捏土器 土師器	A (3.9) B 1.9	平底。体部は直立気味に立ち上がり、口縁部に至る。	口縁部外面に指頭圧痕が残る。	砂粒・長石にぶい 黄橙色普通	P68 20% 覆土

図版番号	器種	法量				出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第138図16	紡錘車	(2.7)	5.2	2.0	(23.6)	覆土	DP31 1/2欠損 PL8

図版番号	器種	石質	法量				出土位置	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第138図17	砥石	凝灰岩	(7.2)	4.2	2.4	(72.9)	北西部壁溝直上	Q17 PL8
18	石剣	滑石	(3.6)	1.5	0.3	(2.6)	北西部覆土	Q15 孔径0.1cm PL8

第8号住居跡（第139図）

位置 調査区の中央部西寄り，C2b₁区を中心に確認されているが，南西側は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡の北東部は，第7号住居跡の南西壁の西コーナー寄りを掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸2.95m，短軸(1.66)mのほぼ方形を呈するものと推定される。

長軸方向 [N-23°-W。]

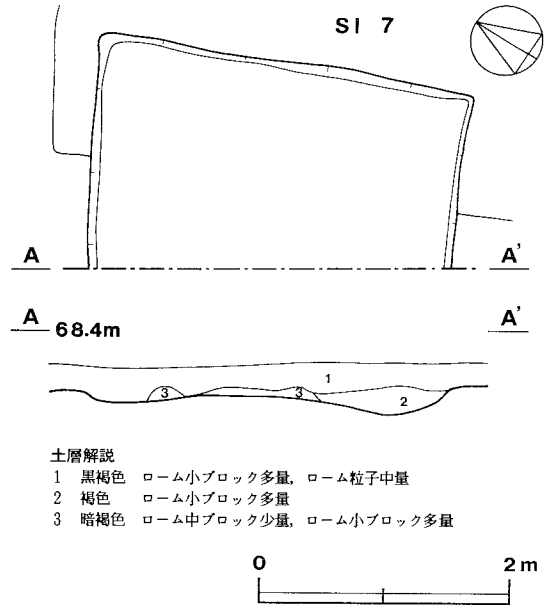
壁 壁高26cmで，ほぼ垂直に立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

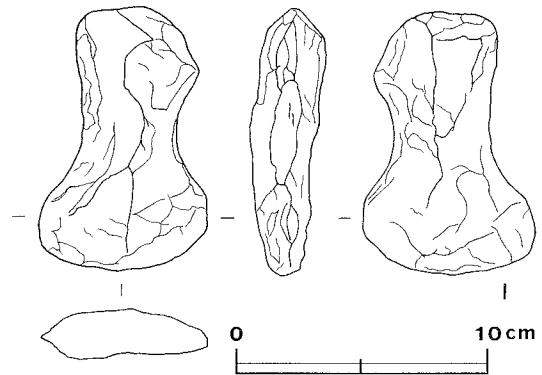
覆土 自然堆積。

遺物 出土遺物は少なく全て破片や細片である。

所見 本跡は，第7号住居跡より新しく，南西側の大部分が調査区域外のため，柱穴や竈を含めた遺構全体の確認はできなかったが，遺構の形態や出土遺物の破片等から平安時代前期の住居跡と推定される。



第139図 第8号住居跡実測図



第140図 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	石質	法 量				出土位置	備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第140図1	打製石斧	砂岩	10.6	6.7	2.2	158.2	南東部覆土	Q18 流れ込み PL9

第23号住居跡（第141図）

位置 調査区の南部東寄り，C2g₉区を中心に確認されているが，北東側は調査区域外に延びている。

重複関係 本跡の南東部は、第42号住居跡の北西部を掘り込んでいる。

規模と平面形 長軸3.73m、短軸(3.25)mの方形を呈するものと推定される。

長軸方向 N-4°-W。

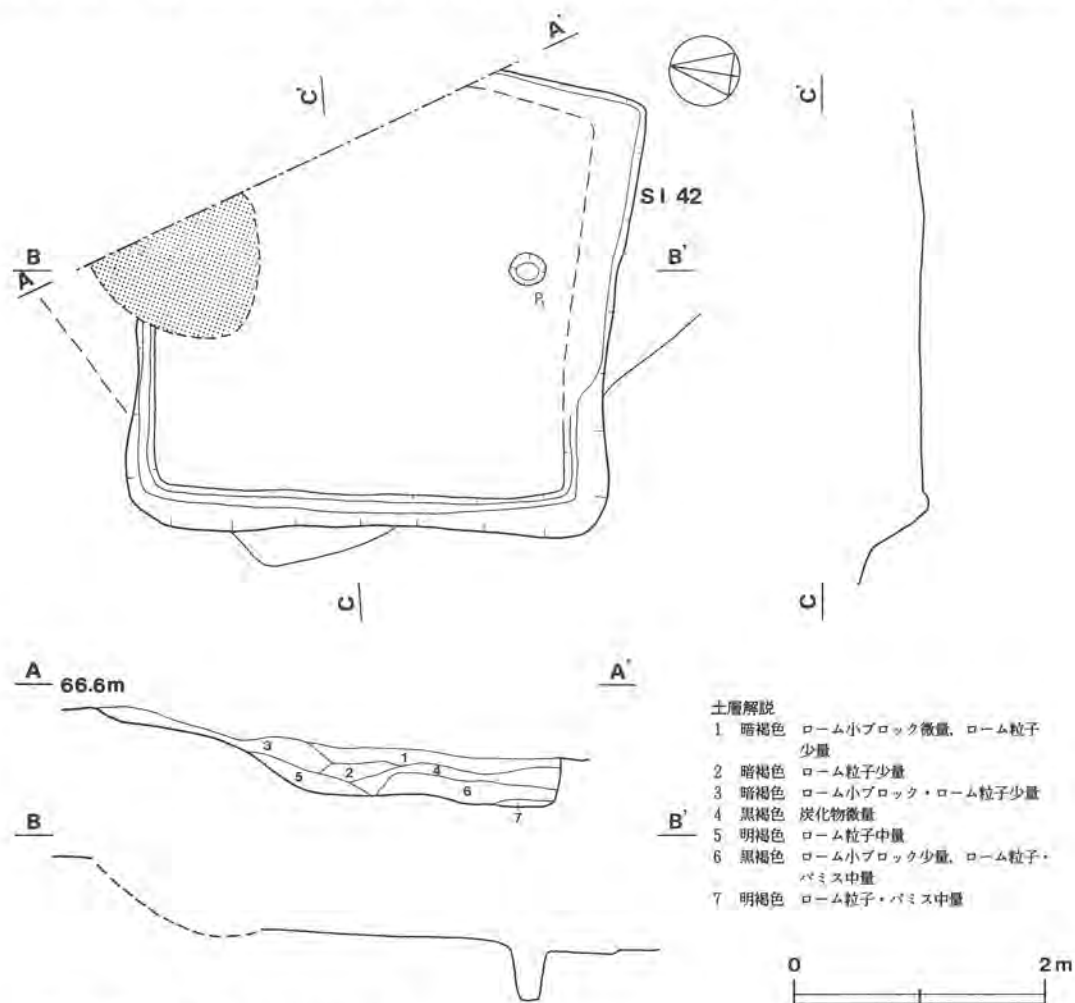
壁 壁高43cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。

壁溝 幅18~28cm、深さ4~8cm、断面形は皿状を呈し、調査区域外の未確認部分を除いて壁下を全周している。

床 平坦で、P₁から竈前面にかけての中央部床面はよく踏み固められている。

ピット 1か所(P₁)検出されている。P₁は、径28cm、深さ40cmで、出入り口に伴う梯子ピットと思われる。

竈 北壁中央部に、壁を52cm程壁外へ掘り込み、砂質粘土によって構築されている。規模は、長さ134cm、幅120cm程を測ると推定される。焚口から煙道部にかけて赤変硬化し、焼土や灰が



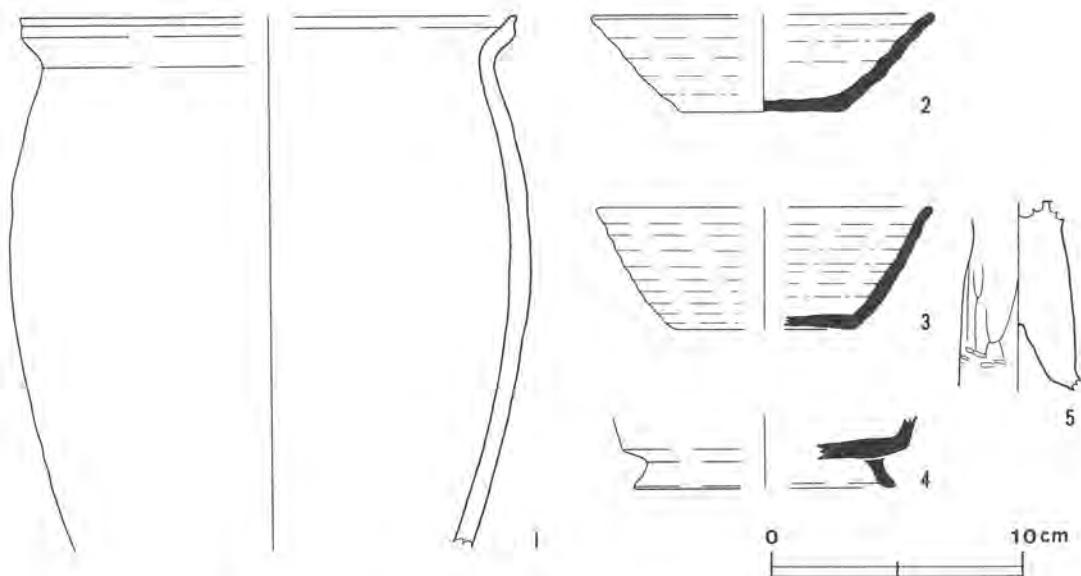
第141図 第23号住居跡実測図

多量に堆積している。煙道は火床から緩やかに外傾して立ち上がり、屋外に延びている。北東側が調査区域外に延びているので、詳細は不明である。

覆土 自然堆積。

遺物 出土遺物は少ないが、土師器の甕片や須恵器の坏片等が北西部床面や竈内から出土している。第142図1の甕は中央部床面から正位の状態、2の須恵器の坏は北西部床面から正位の状態出土している。

所見 本跡は、第42号住居跡より新しく、遺構の形態や遺物等から平安時代前期の住居跡と思われる。



第142図 第23号住居跡出土遺物実測図

第23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第142図 1	甕 土師器	A [19.6] B (16.4)	張りの弱い胴部から、頸部を「く」の字状に屈曲させて、口唇部を外上方へつまみ上げる。	胴部内・外面ナデ。頸部から口縁部にかけて内・外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母にふい黄褐色 普通	P177 PL25 20% 中央部床面直上
2	坏 須恵器	A [13.6] B 3.9 C [6.6]	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	水挽き成形後横ナデ。底部へラ削り。	砂粒・長石 灰色 普通	P178 PL25 40% 北西部床面直上
3	坏 須恵器	A [13.3] B 4.9 C [7.0]	やや上げ底気味の平底。体部は外傾して立ち上がり、口唇部を丸くおさめる。	水挽き成形後横ナデ。底部回転へラ削り。外面水挽き痕強い。	砂粒・長石 暗灰黄色 普通	P179 PL25 35% 南東部覆土
4	高台付坏 須恵器	B (2.9) D [10.2] E (1.2)	平底。「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は外傾して立ち上がる。底部との境に稜を有する。	底部回転へラ削り。貼り付け高台。	砂粒・長石 灰オリーブ色 普通	P181 PL25 15% 南東部覆土
5	高坏 土師器	B (7.6) E (6.9)	脚部片。脚部は円柱状を呈する。	脚部外面へラナデ後へラ磨き。	砂粒・長石・石英 褐色 普通	P180 10% 竈内

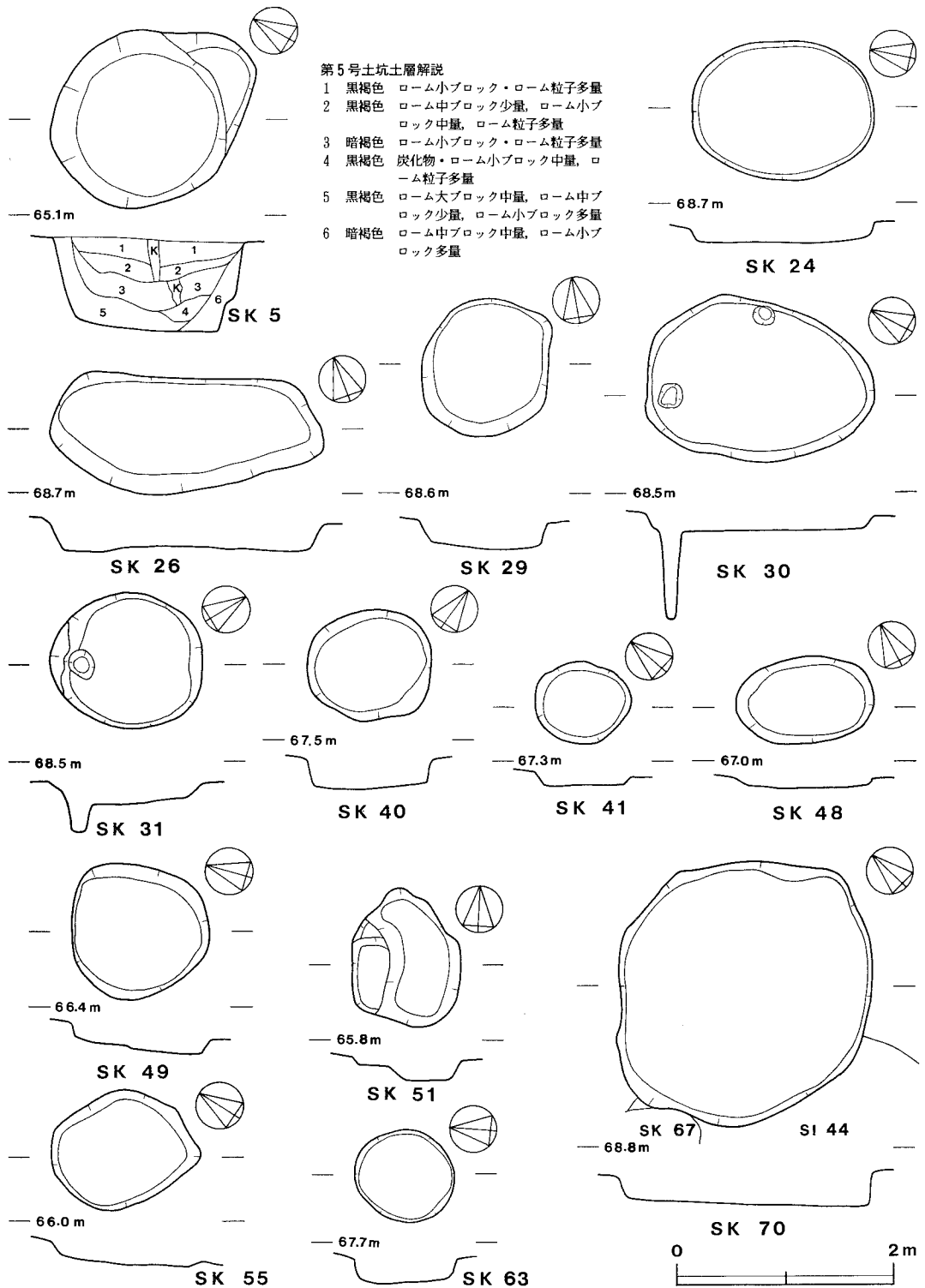
第6節 その他

1 土坑

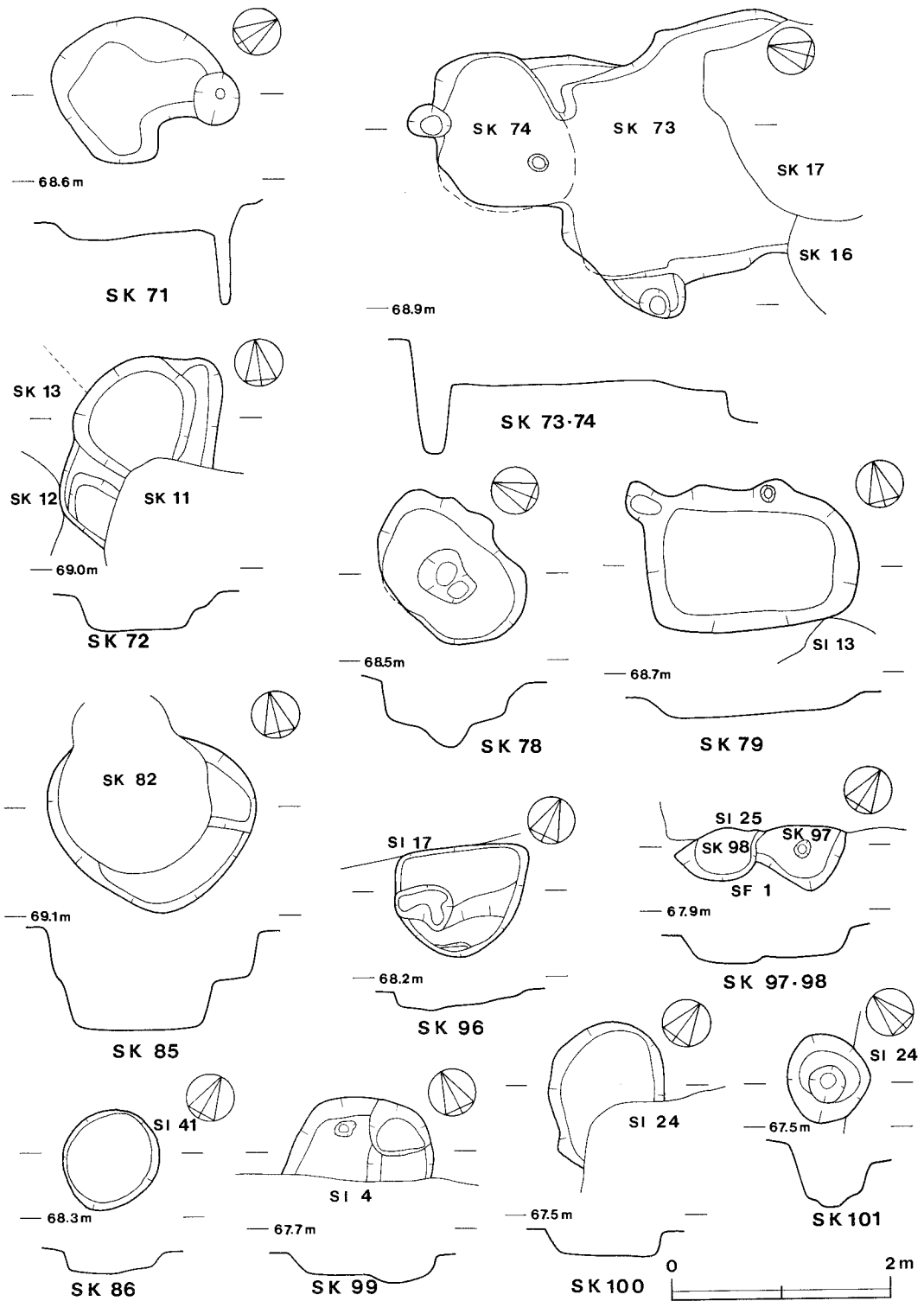
当調査区から検出された148基の土坑のうち、縄文時代の土坑98基を除いた50基については、時代の特定はできなかった。本節では、これらの土坑について、調査結果を一覧表にまとめて掲載する。

表3 土坑一覧表

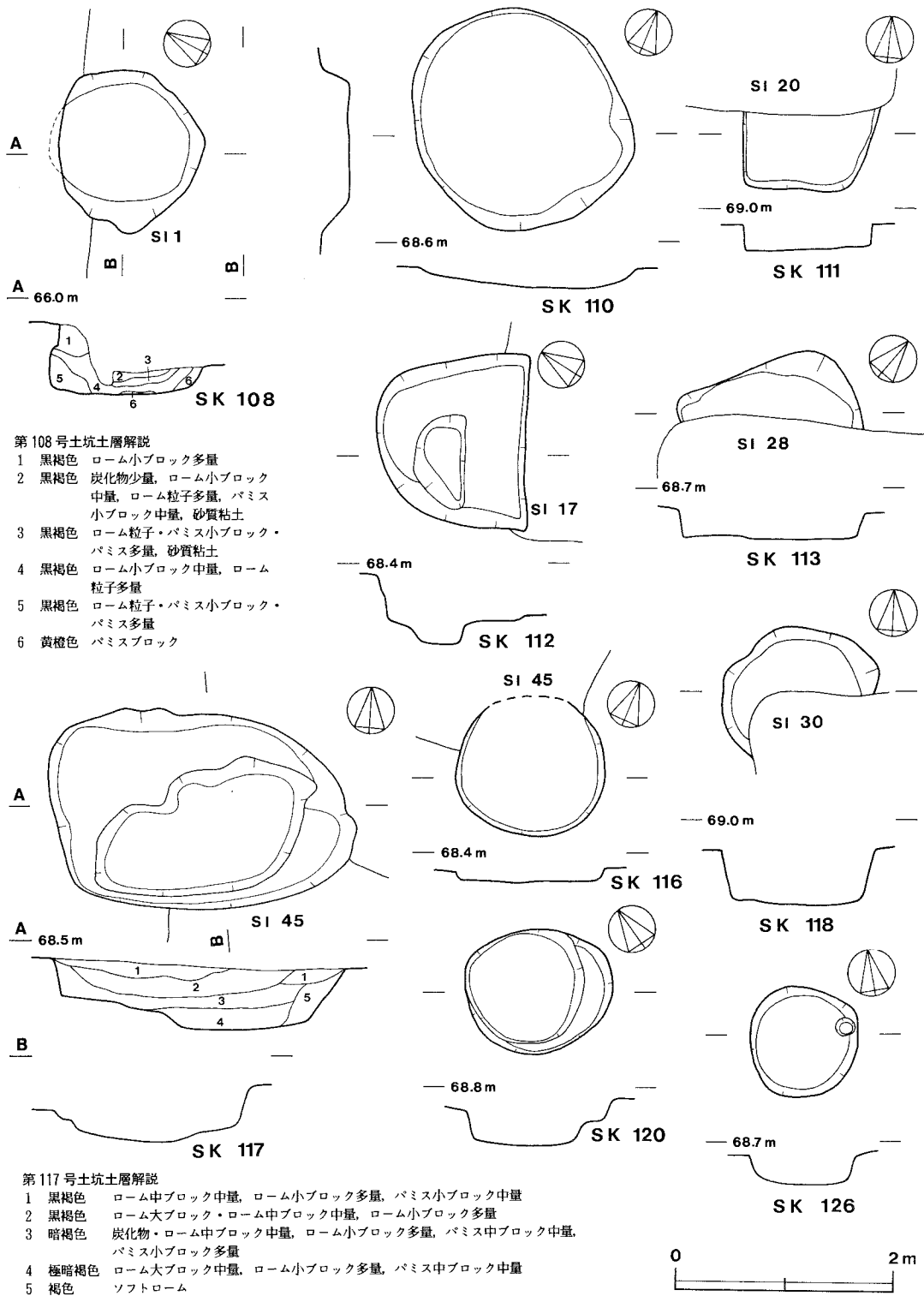
土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (m)			壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 本跡(新) > 他遺構(旧)	図 版 番 号
				長径	短径	深さ						
5	A1j	N-57°-W	楕円形	2.03	1.62	0.88	垂直	平坦	自然	縄文式土器片60点, 土師器片25点		第143図
24	B2e	N-10°-W	楕円形	1.68	1.30	0.19	外傾	平坦	自然			"
26	B2h	N-67°-W	楕円形	2.54	1.10	0.31	外傾	平坦	人為	縄文式土器片3点		"
29	B2i	N-63°-E	楕円形	1.40	1.23	0.28	外傾	平坦	人為	縄文式土器片2点, 土師器片1点		"
30	B2i	N-28°-W	楕円形	2.10	1.53	0.19	外傾	平坦	自然			"
31	B2i	N-59°-W	楕円形	1.43	1.28	0.21	緩斜	平坦	自然	縄文式土器片2点		"
40	C2d	—	円形	1.16	1.04	0.29	外傾	平坦	自然			"
41	C2e	N-41°-W	楕円形	0.89	0.78	0.14	緩斜	平坦	自然	縄文式土器片7点, 土師器片5点		"
48	C2f	N-61°-W	楕円形	1.27	0.82	0.11	外傾	平坦	自然			"
49	C2g	—	円形	1.28	1.28	0.28	外傾	平坦	自然			"
51	C2h	N-11°-W	楕円形	1.32	1.02	0.21	緩斜	平坦	人為	縄文式土器片4点		"
55	C2i	N-28°-W	楕円形	1.41	1.14	0.23	緩斜	平坦	自然			"
63	C2c	—	円形	0.80	0.80	0.25	外傾	平坦	自然	弥生式土器片1点, 土師器片4点		"
70	B1a	不明	楕円形	2.79	2.38	0.31	垂直	平坦	不明		本跡 > S14 SK67と重複	"
71	B1c	N-39°-E	不定形	1.75	1.36	0.33	外傾	平坦	自然	縄文式土器片9点		第144図
72	B1d	N-50°-W	不定形	1.34	1.33	0.35	外傾	平坦	不明		本跡 < SK11・12・13	"
73	B2b	N-27°-W	不定形	2.70	2.30	0.62	垂直	平坦	自然	土師器及び破片10点	本跡 > SK17 SK16・74と重複	"
74	B2b	N-35°-E	不定形	1.68	1.21	0.44	垂直	平坦	不明		SK73と重複	"
78	B1c	N-22°-E	楕円形	1.55	1.14	1.23	垂直	凹凸	人為		本跡 < S113	"
79	B1c	N-72°-W	不定形	1.86	1.31	0.20	緩斜	平坦	人為		S137 < 本跡 < S113	"
85	B1g	N-56°-W	楕円形	1.90	1.57	0.51	垂直	平坦	人為		本跡 > SK82	"
86	B2i	N-41°-W	楕円形	0.97	0.87	0.90	外傾	皿状	自然	縄文式土器片2点	本跡 > S141	"
96	B2j	N-29°-E	不定形	1.32	1.04	0.20	外傾	凹凸	自然		本跡 < S117	"
97	C2a	N-73°-E	楕円形	0.77	0.58	0.27	緩斜	平坦	自然		本跡 < S125, SF1 SK98と重複	"
98	C2a	N-38°-E	楕円形	0.79	0.49	0.33	緩斜	平坦	自然		本跡 < S125, SF1 SK97と重複	"
99	C2c	N-64°-W	楕円形	1.28	0.79	0.25	緩斜	平坦	人為	縄文式土器片3点, 土師器片9点	本跡 < S14	"
100	C2c	N-30°-W	楕円形	(1.38)	1.07	0.32	緩斜	平坦	自然	縄文式土器片1点, 土師器片4点	S124と重複	"
101	C2b	—	円形	0.77	0.77	0.65	緩斜	皿状	自然	土師器片2点	S124と重複	"
108	C2i	N-63°-E	楕円形	1.53	1.37	0.24	外傾	平坦	自然	縄文式土器片3点, 土師器片11点	本跡 > S11	第145図
110	B1e	—	円形	2.09	2.01	0.20	緩斜	平坦	人為		本跡 < S112	"



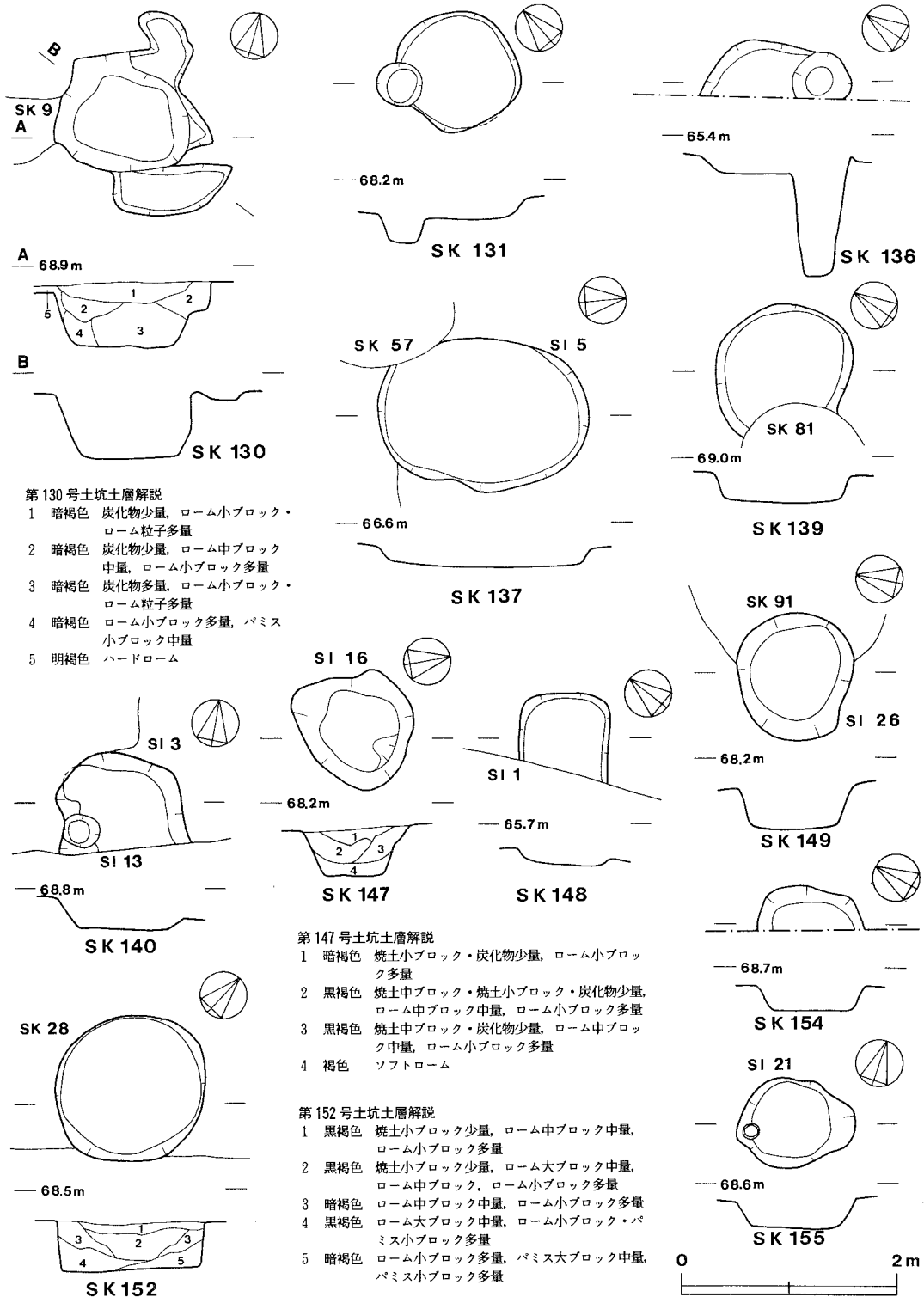
第143図 土坑実測図(その他1)



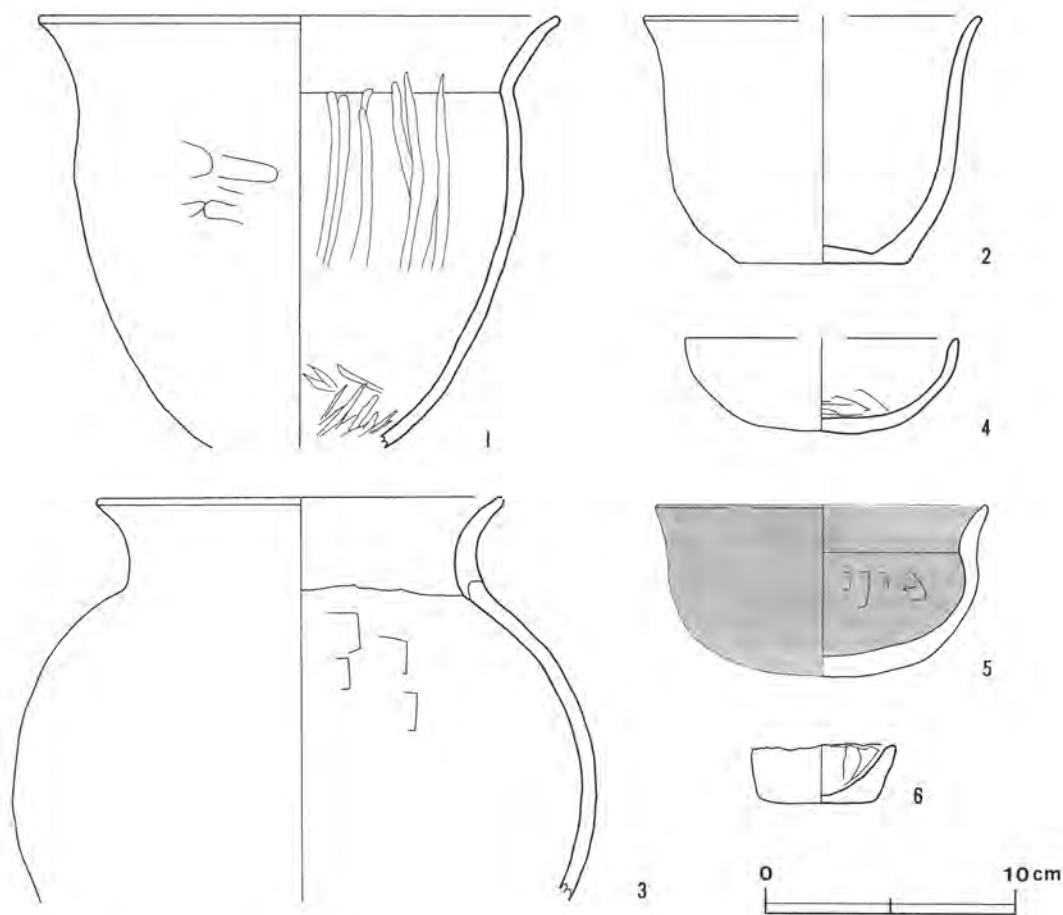
第144図 土坑実測図（その他2）



第 145 図 土坑実測図 (その他 3)



第 146 図 土坑実測図 (その他 4)



第147図 土坑出土遺物実測図（その他）

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規模 (m)			壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 本跡(新) > 他遺構(旧)	図版 番号
				長径	短径	深さ						
111	B1f	N-4°-E	長方形	1.14	(0.72)	0.24	垂直	平担	自然		本跡<SI20	第145図
112	B2h	N-58°-E	楕円形	1.52	1.39	0.65	外傾	凹凸	自然		本跡<SI17	"
113	B2a	N-37°-E	(隅丸長方形)	1.57	(0.54)	0.28	外傾	平担	自然	縄文式土器片2点	本跡<SI28	"
116	A1j	—	円形	1.39	(1.31)	0.13	緩斜	平担	自然	縄文式土器片13点, 土師器片2点	本跡<SI45	"
117	A1i	N-79°-E	不定形	2.82	(1.47)	0.53	外傾	平担	自然		本跡<SI45 SK5と重複	"
118	B1b	N-87°-W	(楕円形)	1.60	(0.61)	0.53	外傾	平担	自然		本跡<SI31	"
120	B1a	N-45°-W	楕円形	1.39	1.17	0.45	外傾	平担	自然			"
126	B1a	—	円形	1.08	1.04	0.25	外傾	平担	自然	縄文式土器片5点, 土師器片1点		"
130	B1b	N-29°-W	不定形	1.57	1.26	0.63	外傾	平担	自然	縄文式土器片1点, 土師器片13点	SK9と重複	第146図
131	B2h	N-53°-W	楕円形	1.35	1.11	0.21	緩斜	平担	自然		本跡<SI16	"
136	C2j	N-34°-W	(楕円形)	1.36	(0.54)	1.12	緩斜	平担	不明		本跡<SI1	"
137	C2g	N-6°-E	楕円形	1.97	1.43	0.22	緩斜	平担	自然		本跡<SI15 SK57と重複	"
139	B1g	N-58°-W	楕円形	1.34	(0.90)	0.24	外傾	平担	自然	縄文式土器片11点, 土師器片1点	本跡>SK81	"

土坑 番号	位置	長径方向 (長軸方向)	平面形	規 模 (m)			壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考 本跡(新) > 他遺構(旧)	図 版 番 号
				長径	短径	深さ						
140	B1c ₆	N-78°-E	不定形	1.17	(0.91)	0.29	緩斜	平坦	不明		本跡>S113・37	第146図
147	B2h ₆	N-54°-E	楕円形	1.19	1.02	0.48	段状	平坦	自然	縄文式土器片5点	本跡<S116	〃
148	C2j ₆	N-56°-E (隅丸長方形)	(0.77)	0.84	0.18	緩斜	平坦	自然	縄文式土器片1点、土師器片3点	本跡<S11	〃	
149	B2f ₆	N-76°-E	不定形	1.20	1.06	0.42	外傾	平坦	不明	土師器片2点	本跡>SK91 S126と重複	〃
152	B2c ₃	—	円形	1.50	1.36	0.49	垂直	平坦	自然		本跡<S128	〃
154	B1d ₆	N-27°-W	(楕円形)	0.99	(0.42)	0.24	外傾	平坦	不明	縄文式土器片16点、土師器片7点		〃
155	B1a ₆	N-60°-E	楕円形	1.07	0.76	0.30	緩斜	平坦	自然		本跡>S111	〃

時期不明土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第147図 1	甗 土師器	A 21.0 B (17.4)	胴部は内彎しながら立ち上がり、 口縁部で大きく外反する。	胴部外面へラナデ、内面へラ磨 き。口縁部内・外面横ナデ。胴 部外面一部煤付着。	砂粒・長石・石英 にふい黄橙色 普通	SK5 P268 65% 覆土
2	埴 土師器	A (13.6) B 10.0 C 6.8	胴部は内彎しながら立ち上がり、 中位からほぼ垂直に立ち上がる。 口縁部はわずかに外反する。	底部へラ削り。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	SK5 P269 60% 覆土
3	甗 土師器	A 16.2 B (16.1)	胴部は球形状を呈し、口縁部は 直立して立ち上がり、上位で大 きく外反する。	胴部内面へラナデ。口縁部内・ 外面横ナデ。口縁部は内側の折 り返し口縁。	砂粒・長石・雲母 にふい橙色 普通	SK73 P299 40% 覆土中層
4	坏 土師器	A 11.0 B 3.9	丸底。体部は内彎しながら立ち 上がり、口縁部ではほぼ直立する。	底部へラ削り。体部内面へラナ デ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・バミス 橙色 普通	SK73 P300 60%覆土中層
5	埴 土師器	A 13.4 B 6.9	丸底。体部は内彎しながら立ち 上がり、口縁部でやや外反する。	体部内面へラナデ。口縁部内・ 外面横ナデ。内・外面赤彩。体 部外面磨滅。	砂粒・長石・雲母・ バミス 橙色 普通	SK73 P301 PL62 100% 覆土上層
6	手捏土器 土師器	A 5.8 B 2.4 C 4.6	平底。体部は外傾しながら立ち 上がり、口縁部に至る。	底部へラ削り。体部内面指頭圧 痕有り。	砂粒・長石・石英 暗褐色 普通	SK73 P302 PL62 100% 覆土中層

2 塚

当調査区から検出された塚は、1基である。

第1号塚(第148図)

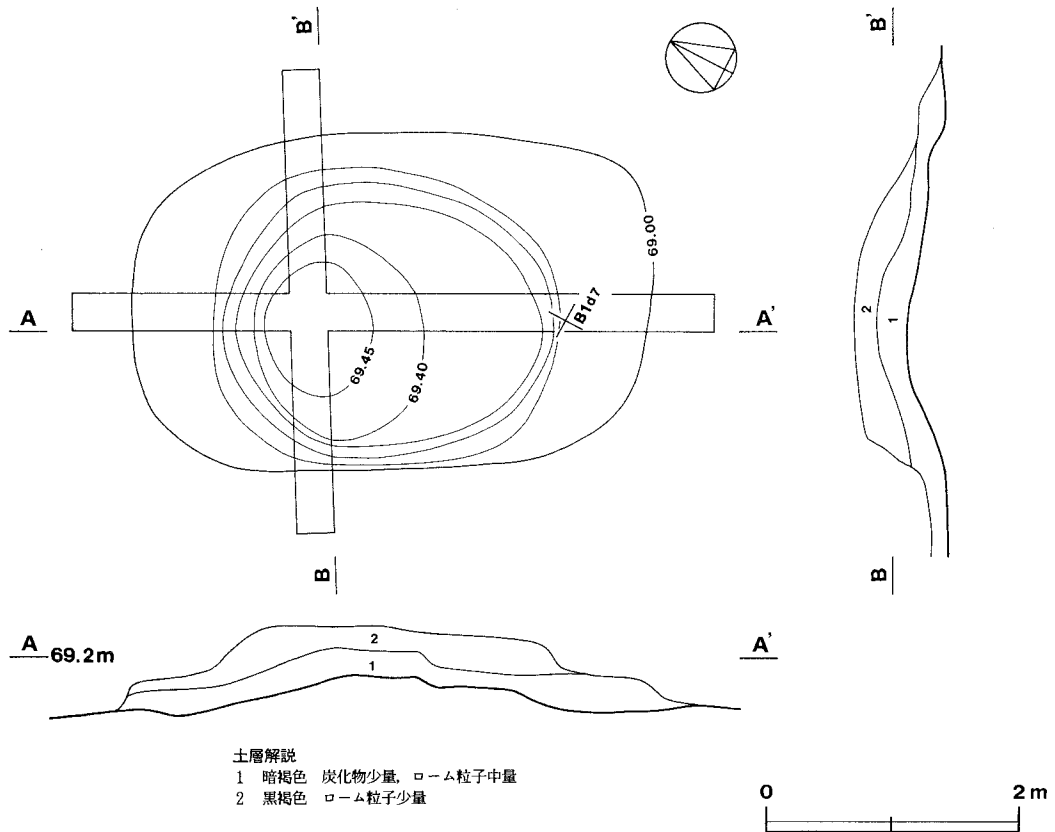
現況と確認状況 調査前から、調査区内に小高く盛り上がった塚が確認されていた。しばらくの期間放置されていたらしく、マウンドは、伐採された木と雑草に覆われていた。

位置 調査区の北部西寄り、B1c₆区に確認されている。

重複関係 縄文時代中期の第37号住居跡、古墳時代後期の第13号住居跡、時期不明の第79号土坑の上面に構築されている。

規模と形状 長軸4.14m、短軸2.72mの隅丸長方形を呈し、高さ45cmを測る。

長軸方向 N-26°-W。

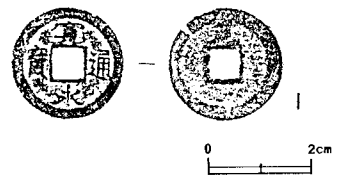


第148図 第1号塚実測図

構築状況 暗褐色の旧地表面をほぼ平らに成形し、その上に暗褐色土を積み上げ、さらにその上に黒褐色土を積み上げている。盛土は大まかで、比較的雑である。

遺物 塚の盛土中からは縄文式土器片や土師器片が、塚表面近くの盛土からは古銭「寛永通寶」が出土している。

所見 古銭「寛永通寶」が出土していることや、盛土の状況等から判断して、近世以降に構築された塚と考えられる。



第149図 第1号塚出土古銭拓影図

第1号塚出土遺物観察表

図版番号	銭名	初鑄年	鑄造地名	外縁径 (cm)	内郭径 (cm)	重量 (g)	出土位置	備考
第149図1	寛永通寶	寛文6年(1668)	日本	2.3	0.6	1.8	盛土中	M3 新寛永 PL61

3 道路跡

当調査区から道路跡が1条検出されている。ここでは、調査結果に基き、この道路跡の規模や形状等を中心に記述することにした。

第1号道路跡（第150図）

位置 調査区の中央部，C2区を中心に確認されている。

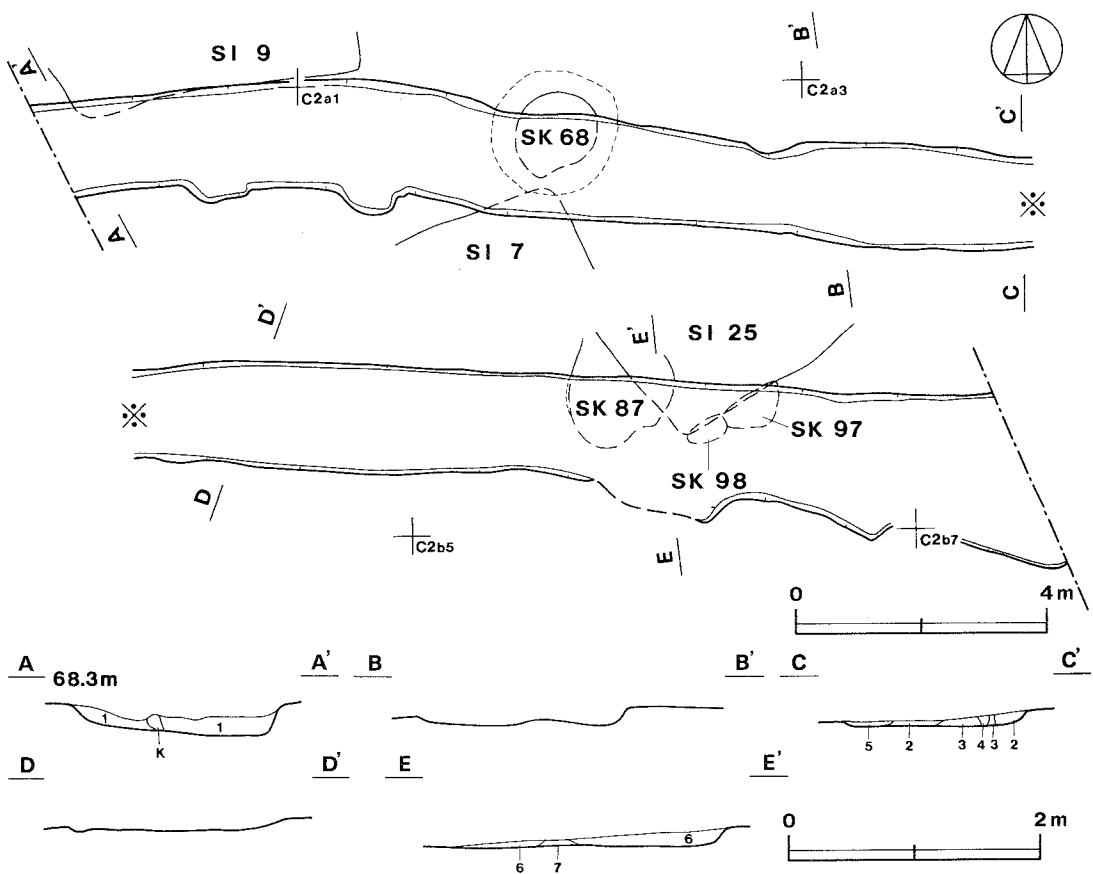
重複関係 本跡は，第7号住居跡の北コーナー，第9号住居跡の南西部，第25号住居跡の南コーナー，第68・87・97・98号土坑をそれぞれ掘り込んでいる。

規模 本跡の東側，西側ともに調査区域外になるため，道路跡の全長を捉える事はできなかった。道路は全長29.8m，幅1.5～2.5mで，厚さ6～14cm程踏み固められて，皿状に凹んでいる。

方向 N-85°-Wで，調査区をほぼ東西に横切っている。

形状 断面形は皿状を呈し，底面は非常に硬く踏み固められている。

覆土 覆土が浅く明確ではないが，自然堆積を呈している。



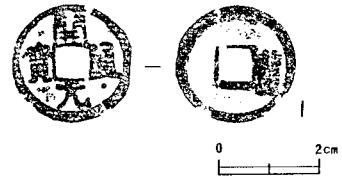
土層解説

- 1 黒褐色 ローム大ブロック少量，ローム中ブロック中量，ローム小ブロック多量
- 2 黒褐色 焼土小ブロック少量，ローム小ブロック多量
- 3 褐色 ハードローム
- 4 黒褐色 炭化物少量，ローム粒子多量
- 5 黒褐色 ローム小ブロック少量，ローム小ブロック多量
- 6 黒褐色 炭化物少量，ローム大ブロック，ローム小ブロック多量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子多量

第150図 第1号道路跡実測図

遺物 覆土中から少量の縄文式土器片や土師器片や古銭「開元通寶」が出土しているが、いずれも流れ込みと思われる。

所見 本跡は、重複している全ての遺構より新しい。出土遺物から時代を決定することはできず、重複関係から古墳時代より新しい道路跡と推定される。



第151図 第1号道路跡出土

第1号道路跡出土遺物観察表

図版番号	銭名	初鑄年	鑄造地名	外縁径 (cm)	内郭径 (cm)	重量 (g)	出土位置	備考
第151図1	開元通寶	武徳4年(621)	中国(唐)	2.4	0.6	2.3	覆土	M8 PL61

4 掘立柱建物跡

当調査区から掘立柱建物跡が2棟検出されている。掘立柱建物跡は、調査区の南部に位置し、古墳時代の住居跡と重複しているが、住居跡よりは新しい。

第1号掘立柱建物跡 (第152図)

位置 調査区の南部，C2e5区を中心に確認されている。

重複関係 本跡の北部は、第4号住居跡中央部から南部にかけての部分掘り込んでいます。

長軸方向 N - 4° - W。

規模 南北2間 (5.30 m)，東西2間 (4.32 m) の南北棟の建物であり、柱間寸法は桁行 2.26 ~ 3.06 m，梁行 1.58 ~ 2.88 m である。柱穴掘方は様々で、長径 0.66 ~ 0.83 m，短径 0.56 ~ 0.66 m 程の円形や楕円形を呈し、深さ 0.23 ~ 0.38 m を測る。柱痕跡は確認できなかった。

覆土 柱穴掘方の覆土内には、ローム粒子やロームブロックが多量に混入し、焼土ブロックや炭化物を少量含んだやや締まりのある暗褐色土や黒褐色土が観察された。

遺物 覆土中層から少量の土師器片が出土している。覆土上層から中層にかけて少量の縄文式土器片が出土しているが、流れ込みと思われる。

所見 本跡は、第4号住居跡より新しく、出土遺物や重複関係との関連等から古墳時代前期またはそれ以降に属する掘立柱建物跡と推定される。

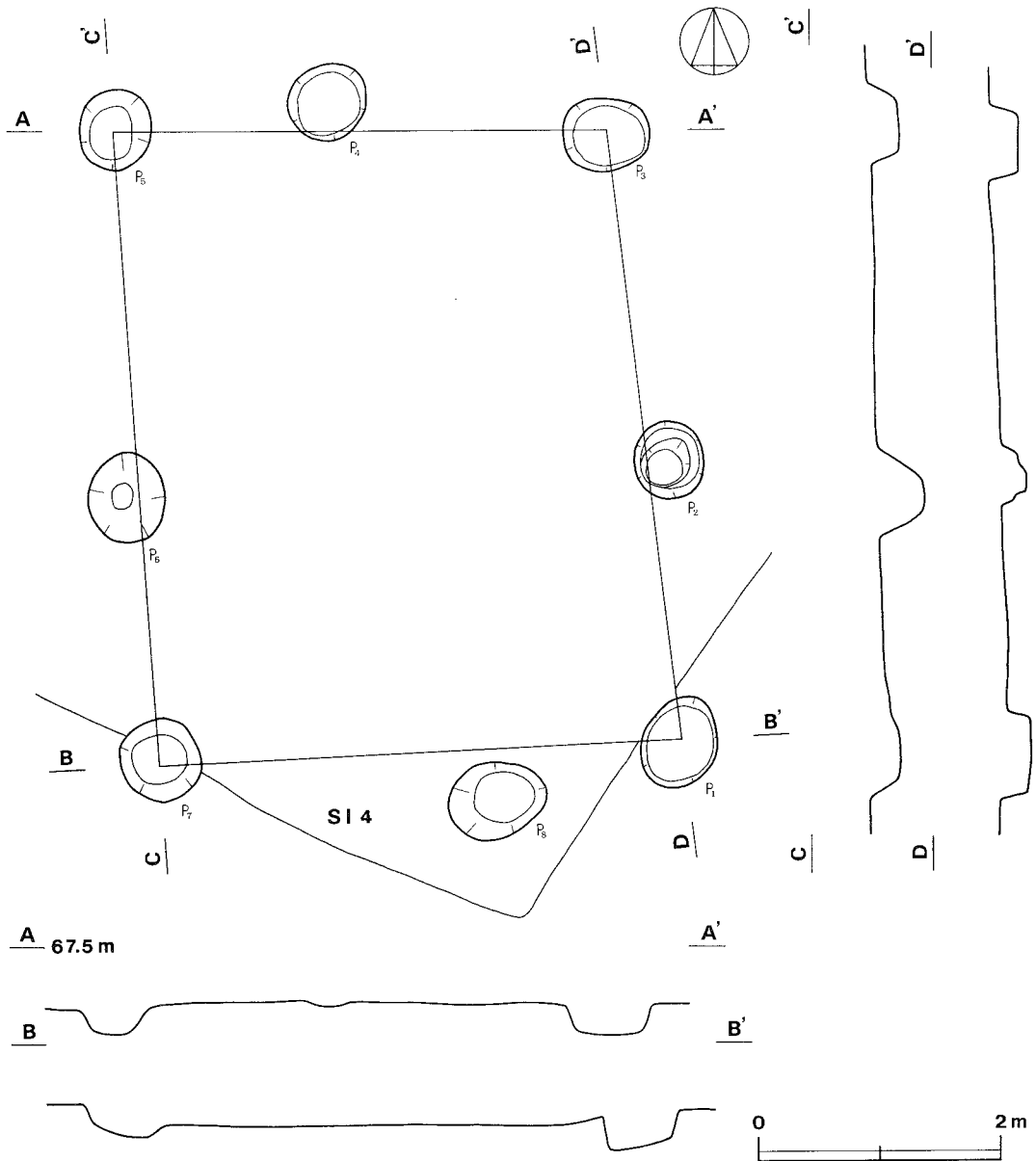
第2号掘立柱建物跡 (第153図)

位置 調査区の南部，C2j8区を中心に確認されている。

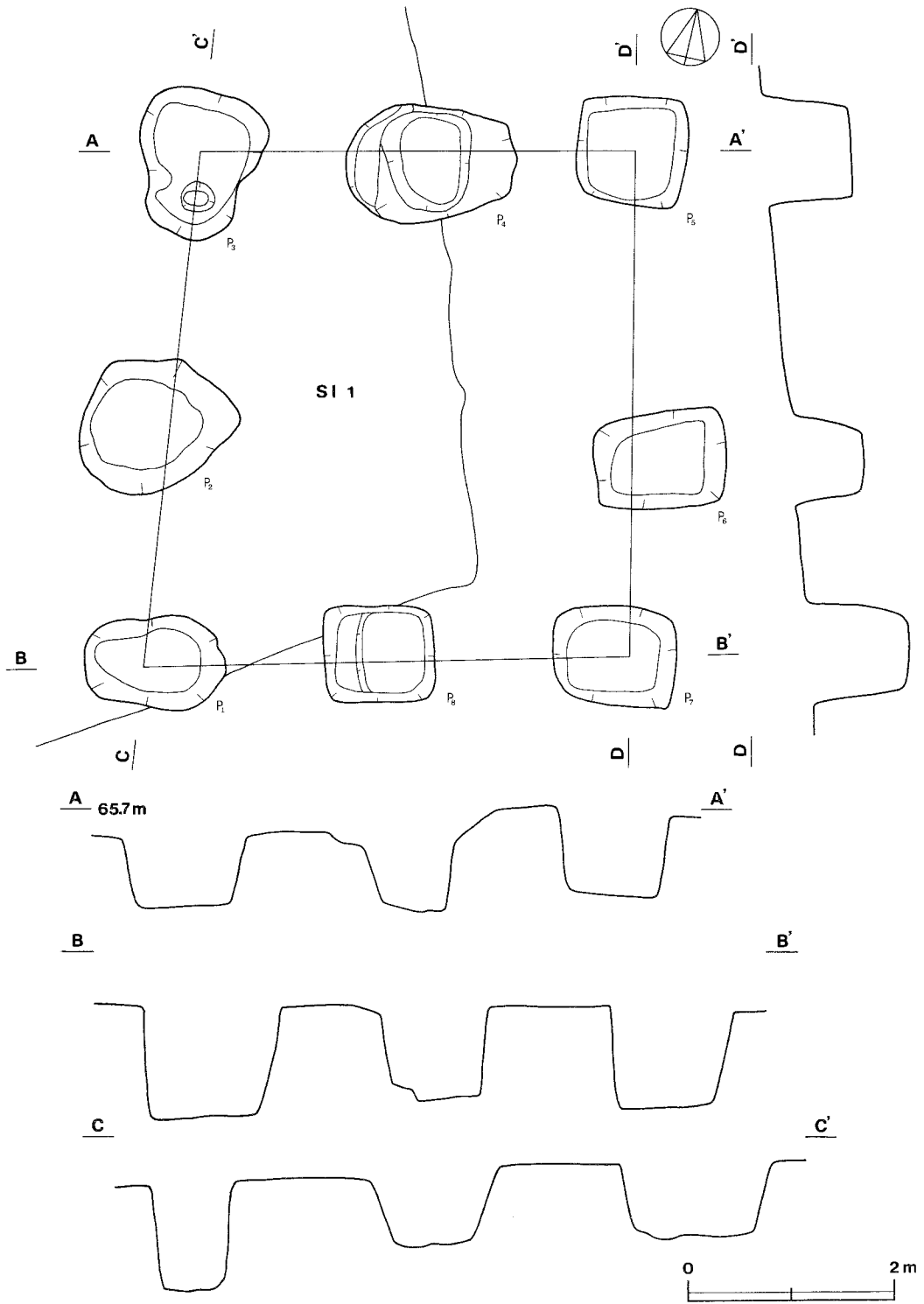
重複関係 本跡の北西部は、第1号住居跡の南東部を掘り込んでいます。

長軸方向 N - 13° - W。

規模 南北2間(約5.1m), 東西2間(約4.7m)の南北棟の建物であり, 柱間寸法は桁行1.84~3.10m, 梁行2.02~2.34mを測る。柱穴掘方は様々で, P₁~P₄は, 長径1.10~1.78m, 短径0.86~1.36mの楕円形や不定形を呈し, 深さ0.62~1.00mを測り, 断面形は逆台形を呈しているが, P₁は, 内傾して立ち上がっている。P₅~P₈は, 長軸0.96~1.28m, 短軸0.94~1.08mの方形や長方形を呈し, 深さ0.68~0.96mを測り, 断面形は逆台形を呈している。柱痕跡は確認できなかった。



第152図 第1号掘立柱建物跡実測図



第 153 图 第 2 号掘立柱建筑物迹实测图

覆土 柱穴掘方の覆土には、ローム粒子やロームブロックが混入し、炭化物を少量含んだやや硬くしまった暗褐色土や黒褐色土が観察された。

遺物 覆土中から、少量の縄文式土器片や土師器片が出土している。P₇の覆土中から極少量の須恵器の坏片が出土している。

所見 本跡は、第1号住居跡より新しく、出土遺物や重複関係との関連等から古墳時代後期またはそれ以降に属する掘立柱建物跡と推定される。

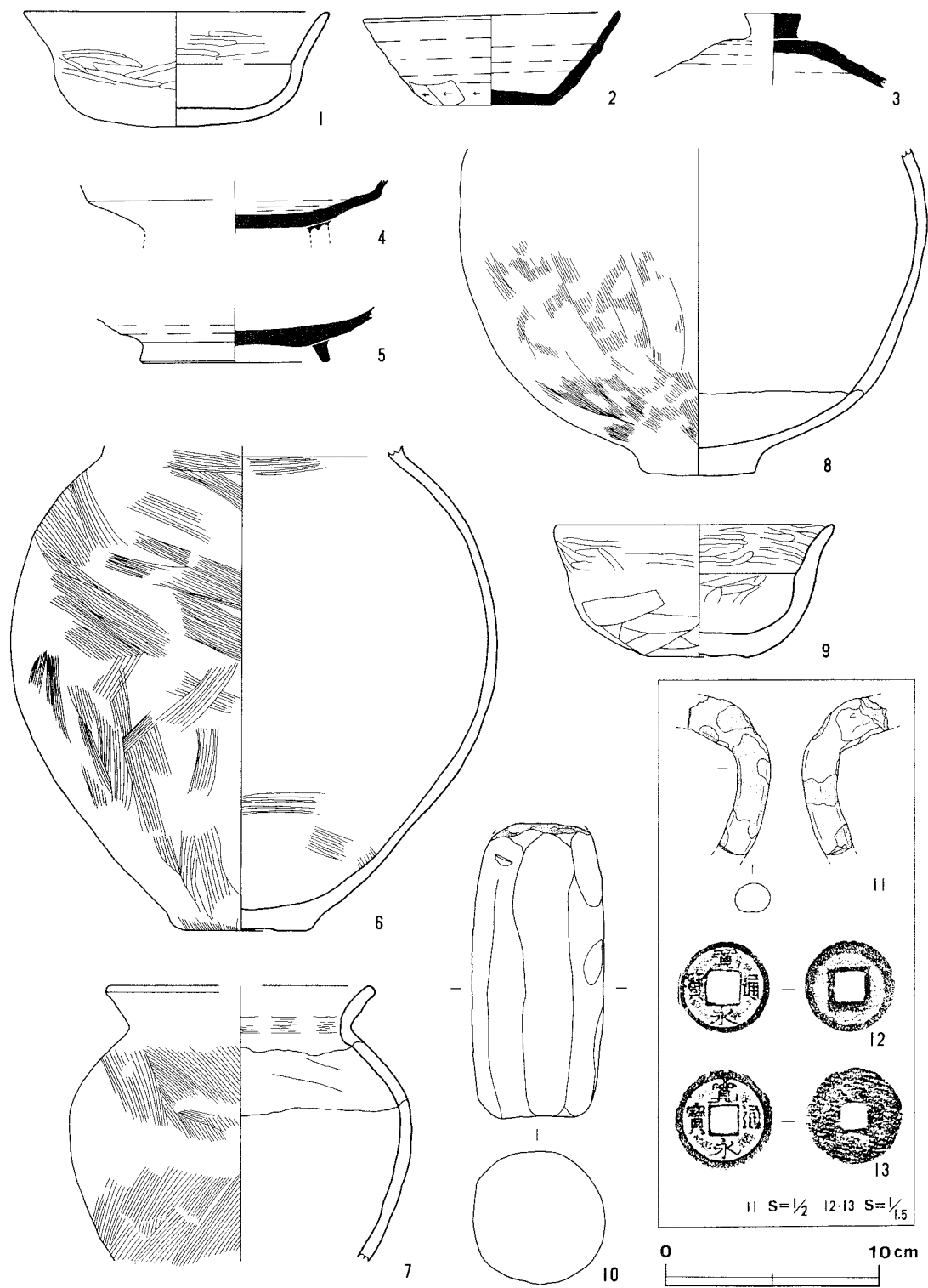
5 遺構外出土遺物

縄文時代の土坑から、その遺構に伴わないと考えられる遺物が出土している。ここで、実測図と観察表で、その一部を紹介する。

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第154図 1	埴土師器	A 14.4	丸底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部で外反する。	底部へら削り。体部外面へらナデ。口縁部外面横ナデ、内面へら磨き。	砂粒・長石・石英・雲母にふい橙色普通	SK8 P274 80% 覆土(流れ込み)
		B 5.5				
2	坏須恵器	A 12.2	平底。体部は直線的に外傾して立ち上がる。	水挽き成形後横ナデ。底部から体部下端へら削り。	砂粒・長石・バミス オリーブ灰色普通	SK44 P284 PL62 100% 覆土(流れ込み)
		B 4.4				
		C 5.8				
3	蓋須恵器	F 2.6	天井部は、頂部が平坦で外周部に向かってなだらかに下降する。つまみは腰高で中央部がわずかに盛り上がる。	水挽き成形後横ナデ。天井部回転へら削り。	砂粒・長石・バミス 灰色普通	SK44 P285 PL62 25% 覆土(流れ込み)
		G 1.3				
4	盤須恵器	B (2.4)	平底。直立する高台が付くと推定される。体部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形後横ナデ。底部回転へら削り。体部下端に稜を持つ。貼り付け高台。	砂粒・長石 灰色普通	SK44 P286 10% 覆土(流れ込み)
5	盤須恵器	B (2.6)	平底。「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は外傾して立ち上がる。	水挽き成形後横ナデ。底部回転へら削り。高台貼り付け後横ナデ。	砂粒・長石 灰色普通	SK54 P290 15% 覆土(流れ込み)
		D [8.8]				
		E 1.1				
6	甕土師器	B (22.9)	やや突出した平底。胴部は球形状を呈し、最大径を中位よりやや上に持つ。	底部から胴部外面ハケ目整形、内面弱いハケ目痕有り。	砂粒・長石・石英 にふい黄橙色普通	SK94 P313 70% 覆土(流れ込み)
		C 6.6				
7	甕土師器	B (15.5)	突出した平底。胴部は球形状を呈する。	胴部外面ハケ目整形、輪積み痕有り。	砂粒・長石・石英 にふい褐色普通	SK94 P314 40% 覆土(流れ込み)
		C 5.4				
8	小形甕土師器	A [12.6]	胴部は球形状を呈し、最大径を上位に持つ。口縁部は「く」の字状に外反して開く。	胴部外面ハケ目整形、内面へらナデ。頸部内面ハケ目痕有り。口縁部内・外面横ナデ。輪積み痕有り。	砂粒・長石 浅黄橙色普通	SK94 P315 40% 覆土(流れ込み)
		B [13.0]				
9	埴土師器	A 13.2	やや凸凹した平底。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でやや外傾する。	底部へら削り。体部外面へらナデ、内面磨き。口縁部内・外面横ナデ後へら磨き。	砂粒・スコリア 浅黄褐色普通	SK115 P206 PL62 100% 覆土(流れ込み)
		B 6.4				
		C 5.1				

図版番号	器種	法量				出土位置	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第154図10	支脚	13.9	6.2	6.3	665.6	SK6 覆土	DP19 流れ込み PL62



第 154 图 遺構外出土遺物実測図

図版番号	器 種	法 量				出 土 位 置	備 考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第154図11	土製勾玉	(5.0)	1.3	0.9	(7.8)	SK104 覆土	DP22 磨滅 不良品 流れ込み	PL62

図版番号	銭 名	初 鋳 年	鋳造地名	外縁径 (cm)	内郭径 (cm)	重量 (g)	出 土 位 置	備 考	
第154図12	寛永通寶	寛文6年(1668)	日本	2.4	0.6	2.1	SI13 覆土	M2 新寛永 流れ込み	PL62
13	寛永通寶	寛文6年(1668)	日本	2.4	0.6	2.6	SK1 覆土	M7 新寛永 流れ込み	PL62

第5章 考察

当調査区から検出された遺構は、縄文時代から平安時代までの竪穴住居跡 45 軒、土坑 148 基、屋外炉 1 基、塚 1 基、道路跡 1 条及び掘立柱建物跡 2 棟である。縄文時代を 8 期（裏山Ⅰ期～裏山Ⅷ期）、弥生時代を 1 期（裏山Ⅸ期）、古墳時代を 6 期（裏山Ⅹ期～裏山ⅩⅤ期）、平安時代を 1 期（裏山ⅩⅥ期）に時期区分をした。

本章では、縄文時代、弥生時代、古墳時代及び平安時代の遺構と遺物についての考察を試みる。

第1節 縄文時代

当調査区から検出された縄文時代の遺構は、竪穴住居跡 8 軒、土坑 98 基、屋外炉 1 基である。

1 土器について

本項では、当調査区から出土した縄文式土器の特徴について述べる。

裏山Ⅰ期

阿玉台Ⅰb～Ⅱ式に比定される土器群で、1・2列の結節沈線文が施されている事が多い。口縁部を隆帯によって区画するような土器が見られる。櫛歯状工具による条線文が施されているものも見られる。第39図18のように勝坂式土器の影響を受けているものもある。当調査区からの出土遺物に浅鉢が多いことが特徴である。（第37図10・11、第38図12、第39図18・19・20、第42図30・31、第43図32、第47図48参照）

裏山Ⅱ期

阿玉台Ⅲ式に比定される土器群で、幅の広い隆帯が口縁部を巡らしているものが多く、隆帯に爪形文や波状沈線文が施されているものが見られる。第45図44のように大木8a式の古いタイプが平行して出土している。（第36図6、第39図21、第44図42、第45図43・44、第46図45参照）

裏山Ⅲ期

阿玉台Ⅳ式に比定される土器群で、口縁部が隆帯によって区画され、地文には縄文が施されている。区画外に2条の波状沈線文が施されているものも見られる。第46図46のように口縁に扇状及び双頭状の把手を有する深鉢形土器がこの時期の特徴をもつ土器である。（第38図15、第41図26、第46図46参照）

裏山Ⅳ期

加曾利ⅤⅠ式に比定される土器群で、胴部片が多く、地文には縄文が施されている。第36図2の浅鉢はへら磨きが施されている。第37図7のように大木8a式の新しいタイプが平行して出土している。（第36図1・2、第37図7参照）

裏山Ⅴ期

加曾利 EⅢ式に比定される土器群である。

裏山Ⅵ期

加曾利 EⅣ式に比定される土器群で、隆起線によって無文帯と縄文施文帯に区画しているものが多い。第 47 図 50 のように大形の深鉢で、口縁部無文帯と胴部縄文施文帯とを微隆起線によって区画し、微隆起線上に 4 単位の舌状突起を有するものも見られる。(第 38 図 16, 第 39 図 17, 第 47 図 50 参照)

裏山Ⅶ期

称名寺Ⅱ式に比定される土器群であるが、第 92 号土坑からの出土遺物だけである。器形は胴部がくびれる深鉢である。第 41 図 28 のように J 字状や渦巻き文状の沈線が施されているものと 29 のように刺突文が施されているものがある。(第 41 図 28・29 参照)

裏山Ⅷ期

堀之内式に比定される土器群であるが、第 77 号土坑からの出土遺物だけである。第 77 号土坑の出土遺物は、つぶれた丸底で、地文には単節 LR の縄文が施されているが、磨滅している。粗製土器である。(第 40 図 25 参照)

2 遺構について

(1) 竪穴住居跡

裏山遺跡の調査区から検出された縄文時代の竪穴住居跡は 8 軒であるが、第 44 号住居跡は出土遺物がなく、時期は不明であるので、残る 7 軒のうち、阿玉台式期に比定されるものが 3 軒、加曾利 E 式期に比定されるものが 4 軒である。出土した土器の型式から、Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ期の 3 期に分けられ、その住居跡の形態や集落について述べる。(時期が推定の場合は、住居跡の番号に () を付し記載した。)

裏山Ⅲ期 中期中葉 (阿玉台Ⅳ式期に比定されるもの)

第 21・37・(45) 号住居跡

裏山Ⅴ期 中期後葉 (加曾利 EⅢ式期に比定されるもの)

第 6 号住居跡

裏山Ⅵ期 中期後葉 (加曾利 EⅣ式期に比定されるもの)

第 15・38・41 号住居跡

裏山Ⅲ期 (阿玉台Ⅳ式期)

この時期に比定される住居跡は、第 21・37・(45) 号住居跡で、調査区の北部から検出されている。平面形は、楕円形が 2 軒 (第 21・37 号)、不整形が 1 軒 (第 45 号) である。(ただ

し、第37号住居跡は古墳時代後期の住居跡に掘り込まれているので推定である。)床面積は、10㎡未満が1軒(第45号)、10㎡以上～15㎡未満が2軒(第21・37号)である。この時期の住居跡の特徴で、⁽¹⁾ 炉は住居跡の床面から検出されなかった。柱穴は壁の内側に沿って検出されている。本期の集落は住居跡が4～8mの間隔で、調査区の北部から比較的まとまって検出されているので、この台地の北側の台地縁辺部に延びて形成されているものと思われる。

裏山V期(加曾利EⅢ式期)

この時期に比定される住居跡は、第6号住居跡の1軒だけで、調査区の南部から検出されている。平面形は、平安時代の住居跡に掘り込まれているので、推定であるが、隅丸長方形を呈していたと思われる。床面積は、40㎡程で非常に大形である。床面から炉は検出されていない。柱穴は、2か所の主柱穴と10か所の補助柱穴が検出されている。

裏山VI期(加曾利EⅣ式期)

この時期に比定される住居跡は、第15・38・41号住居跡で、調査区の中央部から南部にかけて検出されている。平面形は、すべての住居跡が古墳時代の住居跡に掘り込まれているので、推定ではあるが、楕円形を呈していたと思われるものが2軒(第15・38号)、円形を呈していたと思われるものが1軒(第41号)である。床面積は、10㎡以上～15㎡未満は2軒(第15・41号)、15㎡以上は2軒(第38号)である。炉は、地床炉で、第15・38号住居跡から検出されている。柱穴は壁の内側に沿って検出されている。本期の集落は住居跡が15～19mの間隔で、調査区の東側から検出されているので、この台地の東側台地縁辺部に形成されているものと思われる。

これら縄文時代の住居跡は、炉が一般に言われるように阿玉台式期では検出されなかったが、加曾利E式期では検出されている。床面積は、加曾利E式期の住居跡は、阿玉台式期の住居跡に比べて、面積が広くなる傾向が窺われる。

裏山遺跡における縄文時代の集落の形成については、わずかに検出された住居跡から述べてきたわけであるが、Ⅲ期には台地の北部に形成されていたものが、Ⅳ期からⅤ期には衰退し、Ⅵ期で隆盛期を迎えている。ただし、土坑の検出時期が、Ⅰ期(阿玉台Ⅰb式期)からⅧ期(堀之内式期)まで至っており、集落については、住居跡の検出されなかったⅢ期以前やⅥ期以降についても、調査区外に形成されていた可能性も考えられる。

(2) 土坑

当調査区から検出された縄文時代に比定される土坑は、阿玉台式期に比定されるものが58基、加曾利E式期に比定されるものが38基、称名寺式期に比定されるものが1基、堀之内式期に比定されるものが1基の、計98基である。これらの土坑を、出土した土器の型式から、Ⅰ～Ⅷ期に分けることができる。(時期が推定の場合は、土坑の番号に()を付し記載した。)

- 裏山Ⅰ期 中期前葉（阿玉台Ⅰb～Ⅱ式期に比定されるもの）
第6・14・20・21・25・58・59・64・65・66・82・94・114・144・151号土坑
- 裏山Ⅱ期 中期中葉（阿玉台Ⅲ式期に比定されるもの）
第8・9・11・(12)・13・34・35・(36)・37・53・61・62・90・91・93・102・
115・119・121・122・(128)・143・146・153号土坑
- 裏山Ⅲ期 中期中葉（阿玉台Ⅳ式期に比定されるもの）
第10・22・23・46・67・68・75・76・80・87・104・105・123・124・125・
(127)・129・145・160号土坑
- 裏山Ⅳ期 中期中葉（加曾利EⅠ式期に比定されるもの）
第17・43・44・103・106号土坑
- 裏山Ⅴ期 中期後葉（加曾利EⅢ式期に比定されるもの）
第50・84・(107)・(138)・(150)号土坑
- 裏山Ⅵ期 中期後葉（加曾利EⅣ式期に比定されるもの）
第1・4・7・15・(16)・19・27・(28)・32・33・39・42・45・47・52・(54)・
56・57・60・(81)・83・(88)・(89)・95・109・141・142・161号土坑
- 裏山Ⅶ期 後期前葉（称名寺式期に比定されるもの）
第92号土坑
- 裏山Ⅷ期 後期前葉（堀之内式期に比定されるもの）
第77号土坑

本項では、まず土坑の形態分類を、下記の表に基づいて分類し、この形態分類に基づき、時期ごとに土坑の特徴についての考察を試み、さらに、フラスコ状土坑の役割等について述べる。

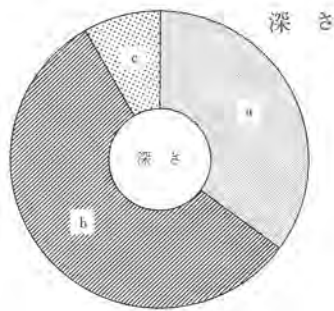
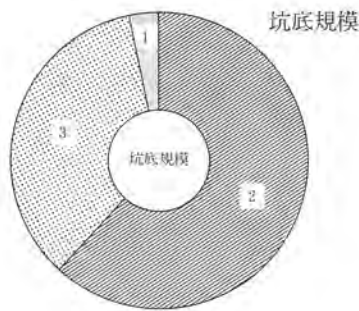
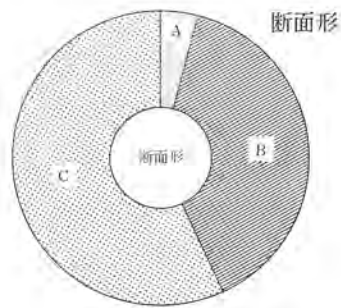
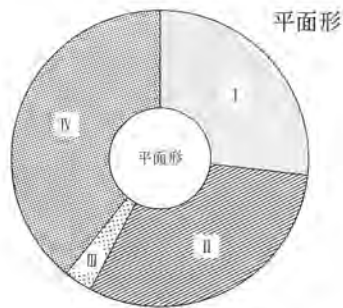
平面形	断面形	坑底規模	深さ	ピット
Ⅰ－円形・不整円形	A－円筒状	1－1m未満	a－0.5m未満	有－'
Ⅱ－楕円形・不整楕円形	B－皿状	2－1m以上2m未満	b－0.5m以上1m未満	無－"
Ⅲ－隅丸方形・隅丸長方形	C－フラスコ状	3－2m以上	c－1m以上	
Ⅳ－不定形	表記法は「ⅡA"3c」のようになる。			

① 土坑の形態について

当調査区からは、縄文時代に比定される土坑が、98基検出されているが、第161号土坑を除く97基について、上記の分類基準に基づいて形態分類を行った。その結果は表4の通りである。

○平面形

第155図に示したように、土坑の平面形はⅠ類（円形・不整円形）が25.8%、Ⅱ類（楕円形・不整楕円形）が31.9%、Ⅲ類（隅丸方形・隅丸長方形）が3.1%、Ⅳ類（不定形）が39.2%であ



第155図 土坑の形態規模分類

る。検出された土坑の多くは、不定形のIV類が多いが、IV類を除くとI・II類に属している土坑が多い。

○断面形

第155図に示したように、土坑の断面形はA類（円筒状）が4.1%、B類（皿状）が39.2%、C類（フラスコ状）が56.7%であり、検出された土坑の大部分はB・C類に属している。A～C類の中で、土坑の底面にピットを有するものは13.4%である。

○規模

第155図に示したように、土坑の坑底の長径や長軸を見てみると、1（1m未満）類が3.1%、2（1m以上2m未満）類が61.9%、3（2m以上）類が35.0%である。深さは、a（0.5m未満）類が35.1%、b（0.5m以上1m未満）類が56.7%、c（1m以上）類が8.2%である。長径や長軸の最大のもは3.98mになり、深さは最も深いもので1.69mである。

② 土坑の変遷

表4 土坑形態分類一覧表

形態分類 \ 時期	I	II	III	IV	V	VI	計
IA' 2b					1		1
IA' 2c	1						1
IB' 2a	1				1	4	6
IB' 2b			2				2
IB' 2c		1					1
IB' 3a	1						1
IB' 3b			1				1
IC' 1b			1				1
IC' 1b		1					1
IC' 2b		3	1			1	5
IC' 2b		1	1				2
IC' 2c			1				1
IC' 3a	1						1
IC' 3b	1		1				2
II B' 1a					1		1
II B' 2a				1		3	4
II B' 2a						3	3
II B' 2b	1				1	1	3
II B' 3b						1	1
II B' 3b			1				1
II C' 2a		2					2
II C' 2b	1	3		1		1	6
II C' 2c	1						1
II C' 3b	1	1		1		2	5
II C' 3b			1				1
II C' 3c		1					1
III A' 2b		1					1
III B' 2a						1	1
III B' 2b		1					1
IV A' 3b			1				1
IV B' 2a			1	1	1	2	5
IV B' 2a						1	1
IV B' 2b	1					2	3
IV B' 3a						2	2
IV C' 2a		1	1				2
IV C' 2b	1	3	1			1	6
IV C' 2c				1			1
IV C' 3a	2	1	1				4
IV C' 3b	1	3	4			1	9
IV C' 3b		1					1
IV C' 3c	1					1	2
合計	15	24	19	5	5	27	95

裏山I期（阿玉台Ib～II式期）

この時期の土坑は15基で、調査区の北部を中心に検出されている。規模は平均長径1.98m、平均深さ0.68mと大きめである。断面形では、A型土坑（円筒形）が6.7%、B型土坑（皿状）が26.7%、C型土坑（フラスコ状）が66.6%の割合を占めている。このように、既にこの時期からフラスコ状土坑の群集化の傾向が見られる。（この時期のなかでは、第58・59号土坑は幾分古いと思われる。同時期の住居跡は検出されなかった。）

裏山II期（阿玉台III式期）

この時期の土坑は24基で、調査区の全体から検出されている。断面形では、A型土坑が4.2%、B型土坑が8.3%、C型土坑が87.5%の割合で検出され、フラスコ状土坑の群集化のピークを迎え、調査区の東側を南北に大きく孤状を描いて検出されている。（同時期の住居跡は検出されなかった。）

裏山III期（阿玉台IV式期）

この時期は、土坑は19基検出され、第21・37・45号住居跡と同じ時期のものと考えられる。土坑はこれらの住居跡の周辺から、3～5基がひとまとまりとなって検出されている。このことは、住居跡群と土坑群とを区画するような制約があった可能性も考えられる。断面形では、A型土坑が5.3%、B型土坑が31.6%、C型土坑が63.1%の割合であり、引き続きフラスコ状土坑の群集化がみられる。規模は、平均長径は2.05mと裏山遺跡における縄文時代の土坑の中では最大であり、平均深さは0.71mと深くなりつつある。

裏山IV期（加曾利E式I期）

この時期の土坑はかなり少なく、調査区全体から5基だけ検出されている。断面形では、A型土坑が0%、B型土坑が40%、C型土坑が60%の割合であ

り、フラスコ状を呈するものの割合が高い。調査区の南部と北部にそれぞれ小さな土坑群が見られ、この時期の頃まで土坑の群集化の傾向がわずかにみられる。規模は、裏山遺跡における他の時期の土坑と比べて平均長径は1.96 mと大きく、平均深さ0.83 mと最も深い。(同時期の住居跡は検出されなかった。)

裏山V期(加曾利E式III期)

この時期の土坑は、5基検出され、第6号住居跡と同じ時期と考えられる。断面形では、A型土坑が20%、B型土坑が80%の割合である。この時期には、土坑は激減し、断面形がフラスコ状を呈するものは消滅している。規模は、平均長径は1.36 m、平均深さ0.49 mと裏山遺跡における他の時期の土坑と比べて最小である。

裏山VI期(加曾利EIV式期)

この時期の土坑は、28基検出され、第15・38・41号住居跡と同じ時期と考えられる。土坑は、V期に比べて5.6倍増加している。断面形では、A型土坑が0%、B型土坑が74.1%、C型土坑が25.9%の割合である。このように皿状を呈するものがほとんどであるが、再びフラスコ状を呈するものがみられるようになった。本期は当調査区における縄文時代の隆盛期と考えられ、竪穴住居跡や土坑が多数、調査区の全域から検出されている。それぞれの土坑は、住居跡の周囲から検出されているものが主であるが、重複しているものや単独で検出されているものがあり、住居跡群と土坑群との使用規制がなくなったと考えられる。

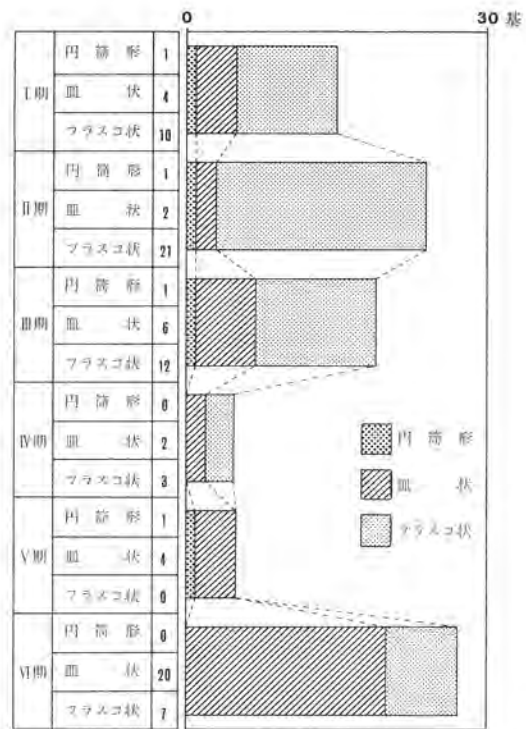
裏山VII期(称名寺式期)

この時期の土坑は、わずかに第92号土坑だけである。規模は長径1.06 m、深さ0.45 mで、断面形はフラスコ状を呈している。

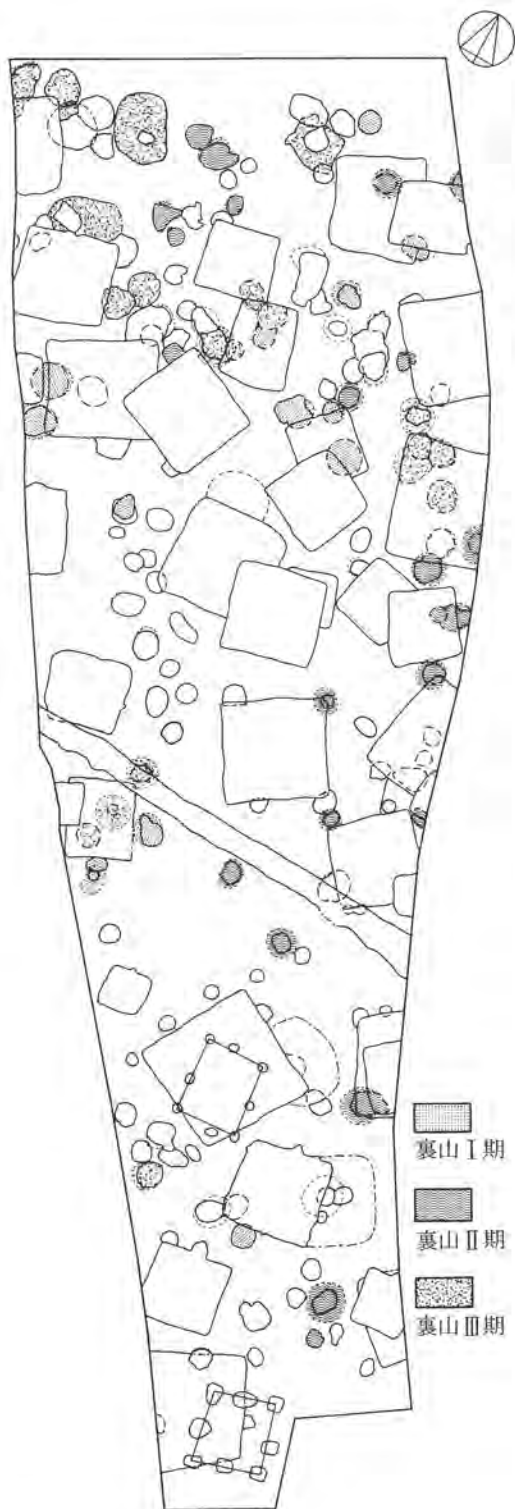
裏山VIII期(堀之内式期)

この時期の土坑は、わずかに第77号土坑だけである。規模は長径2.31 m、深さ0.57 mで、断面形は円筒形を呈している。

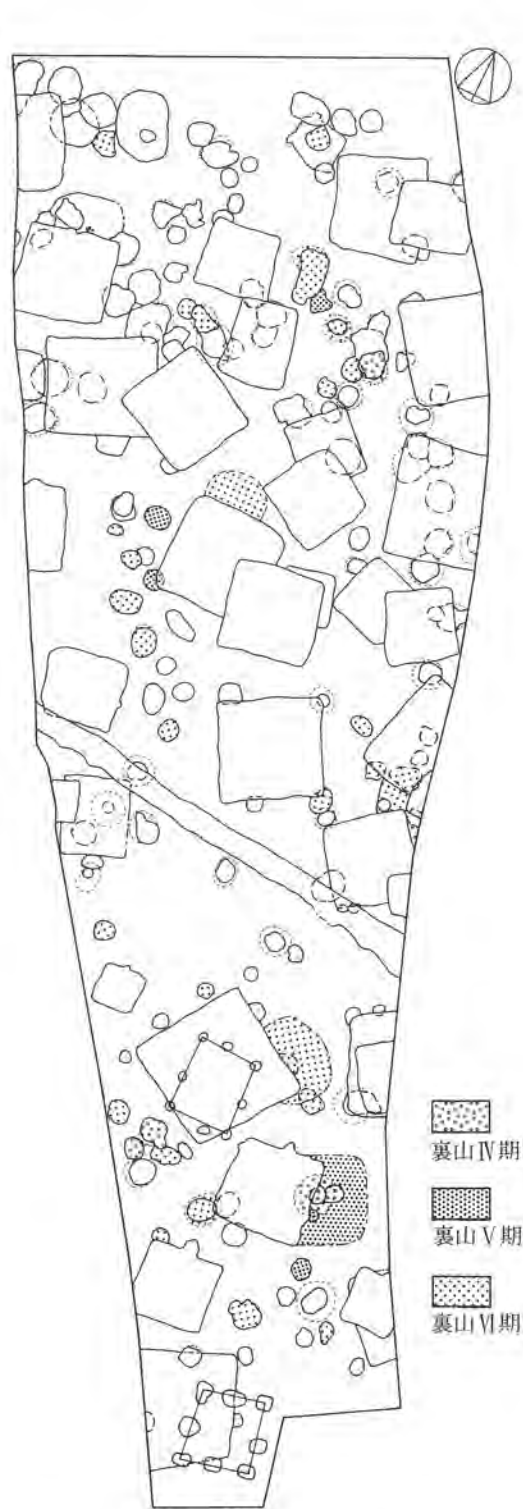
以上、当調査区から検出された土坑について、その特徴を述べてきたわけであるが、これらの土坑はI期において既に断面形がフラスコ状を呈するものの群集化の傾向がみられ始める。II・



第156図 時期と断面形



第157図 縄文時代住居跡・土坑分布図(1)



第158図 縄文時代住居跡・土坑分布図(2)

Ⅲ期ではさらに多数の土坑の群集化がみられ、断面形がフラスコ状を呈するものがほとんどである。特にⅡ期ではフラスコ状土坑の群集化のピークを迎えている。Ⅳ・Ⅴ期では群集化していたものが激減し、Ⅳ期では断面形がフラスコ状を呈するものと円筒形を呈するものとがみられるが、まだフラスコ状土坑が66.7%を占めている。Ⅴ期では断面形がフラスコ状を呈するものが消滅し、円筒形を呈するものと皿状を呈するものとなるが、皿状を呈するものがほとんどである。Ⅵ期では土坑が再び増加するが、断面形が円筒形を呈するものがほとんどで、わずかにフラスコ状を呈するものがみられる。第161号土坑からは埋設土器が出土している。Ⅶ・Ⅷ期にはそれぞれわずかに1基ずつ、断面形がフラスコ状や円筒形を呈する土坑がみられるだけである。

③ フラスコ状土坑について

フラスコ状土坑は、袋状土坑ともよばれる土坑である。この土坑は、縄文時代草創期から平安時代に至るまで見られる土坑のひとつの形態で、縄文時代中期にこのフラスコ状土坑は群集化することにその特徴がある。特に、東北地方から北関東ではその傾向が強いといわれている。

フラスコ状土坑が群集化するのは、一般に阿玉台Ⅳ～加曾利EⅠ式期と考えられているが、当遺跡ではもう少し早い時期に群集化していると考えられる。当遺跡のように群集化したフラスコ状土坑が検出されている遺跡としては、日立市の諏訪遺跡⁽³⁾や大宮町の梶巾遺跡⁽⁴⁾・諏訪台遺跡⁽⁵⁾、つくば市の下広岡遺跡⁽⁶⁾、石岡市の東大橋原遺跡⁽⁷⁾等が挙げられる。機能としては、貯蔵穴・墓壇・粘土採掘坑等が考えられている。当調査区で検出された土坑の機能は、前の3つの説を立証するに足る資料は検出されなかったが、形態から考えて貯蔵穴と考えるのが自然と思われる。現在でも、農家では、冬季の食物保存に、長径1～2m、深さ1m程の穴を掘り、食物を内部に入れ、藁等をかぶせ、その上に土をのせて蓋をすることが行われている。フラスコ状土坑も、このようにして食物の保存をしていたものと推定される。フラスコ状土坑の温湿度を測定した永瀬福男氏は、フラスコ状土坑は「外気の温湿度に関係なく一定」であり、「冬季で口縁部に蓋をすると摂氏2度・90パーセント以上で(中略)、この温湿度は、野菜を越冬させるために必要な温湿度である摂氏0～3度・90パーセント以上に近い数値を示している⁽⁸⁾」と述べていることを併せて考えると、やはり貯蔵穴説が強いと思われる。

フラスコ状土坑の坑底に見られるピット(海老原郁雄氏は『子ピット』と呼称している⁽⁹⁾)が、当調査区の第46・90・115・146号土坑から検出されている。このピットはⅡ・Ⅲ期に比定される土坑から比較的多く見られる。このピットは排水機能のためという説や上屋施設のための柱穴という説もあるが、やはり海老原氏のいう所の「土壇の入口を開放した状態でも壇底は常温を保持するであろうし、“親”より深い子ピットはその傾向がいっそう強まるであろう。(中略)子ピットの機能は、“特別室”乃至は“親”の貯蔵機能の補助、“親子”コンビの貯蔵機能などが考えられ⁽¹⁰⁾」という説を支持したい。すなわちこのフラスコ状土坑の坑底に見られるピットは、フ

ラスコ状土坑の本体よりも外的影響の受けることが少なく、より保存効果の高い貯蔵穴と考えることができるものと思われる。ただし、この子ピットは皿状を呈する土坑からも検出されているので、この場合は別な用途の可能性も考えられる。

註

- (1)鈴木美治「阿玉台期における竪穴住居跡の形態についての一考察」『年報3』茨城県教育財団1984年
茨城県教育財団「大谷津A遺跡上・下」茨城県教育財団文化財調査報告第28集1985年
- (2)平安時代に比定されるラスコ状土坑としては、つくば市の大境遺跡や江戸崎町の二の宮貝塚等がある。「大境遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第34集』1986年 「二の宮貝塚他」『茨城県教育財団文化財調査報告第65集』1991年
- (3)鈴木裕芳他『諏訪遺跡発掘調査報告書』日立市教育委員会1980年
- (4)井上義安他『茨城県梶巾遺跡』大宮町梶巾遺跡発掘調査会1985年
- (5)井上義安他『諏訪台遺跡』大宮町諏訪台遺跡発掘調査会1991年
- (6)茨城県教育財団「下広岡遺跡」茨城県教育財団文化財調査報告X1981年
- (7)川崎純徳他『石岡市東大橋原遺跡第1・2・3次』石岡市教育委員会1978～1980年
- (8)永瀬福男「秋田県内におけるラスコ状ピットについて」『秋田地方史論集』半田教授退官記念会1981年
- (9)(10)海老原郁雄『梨木平遺跡』栃木県上河内村教育委員会1986年

参考文献

- (1)石野博信『日本原始・古代住居の研究』吉川弘文館1990年
- (2)石塚和則「縄文時代中期中葉の住居形態」『研究紀要』埼玉県埋蔵文化財調査事業団1986年
- (3)鈴木裕芳「諏訪遺跡出土土器群の再検討」『茨城県史研究59』1987年
- (4)栃木県文化振興事業団「御城田」栃木県埋蔵文化財発掘調査報告第68集1987年
- (5)栃木県考古学会「槻沢遺跡」栃木県埋蔵文化財調査報告書第34集1980年
- (6)鈴木実「縄文時代の袋状土坑」西那須野郷土資料館紀要第2号1985年
- (7)海老原郁雄「縄文中期・袋状土坑の一検討」『唐澤考古6』唐澤考古学会1986年
- (8)小林達雄編『縄文土器大観2・3』小学館1988年
- (9)小林達雄他日本考古学協会昭和56年度大会シンポジウムI資料「北関東を中心とする縄文中期の諸問題」日本考古学協会1981年
- (10)加藤晋平他編『縄文文化の研究4』雄山閣1981年
- (11)谷井彪他「縄文中期土器群の再編」『研究紀要』埼玉県埋蔵文化財調査事業団1982年
- (12)谷井彪「阿玉台式からみた東北部大木式の変遷」『古代第80号』早稲田大学考古学会1985年12月
- (13)谷井彪「加曽利E式土器にみられる大木式土器の要素」『研究紀要第8号』埼玉県立歴史資料館1986年
- (14)松戸市教育委員会「子と清水貝塚遺物図版編1・2」『松戸市文化財調査報告第8・11集』1978・1985年
- (15)川崎純徳他『茨城県石岡市大作台遺跡発掘調査報告』茨城県石岡市教育委員会1981年

- (16)塚本師也「北関東・南東北における中期前半の土器様相」『古代第89号』早稲田大学考古学会1990年3月
(17)海老沢稔「茨城県内における縄文中期前半の土器様相」(2)『婆良岐考古第6号』婆良岐同人会1984年

第2節 弥生時代

当調査区から検出された弥生時代の遺構は、竪穴住居跡2軒であり、住居跡内からは弥生式土器の壺形土器片が出土している。

1 土器（裏山IX期）について

本期は、第30・36号住居跡出土の土器によって構成される。器種は壺と思われるが、破片ばかりである。胴部片には、単節LRの回転縄文の施されているものや、付加条の縄文が施されているものがある。頸部片には、櫛描波状文と櫛描格子目文の施されているもの、胴部下端に付加条の縄文が施され、底部片では、底部に布目痕がみられるもの等がある。

これらの遺物は、弥生時代後期に位置付けられると思われる。

2 竪穴住居跡

本期に比定される住居跡は、第30・36号住居跡である。第36号住居跡は古墳時代の住居跡に掘り込まれており、規模等不明な点が多いので、第30号住居跡について述べる。規模は、長軸5.94m、短軸4.22mの長方形を呈し、長軸方向はN-12°-Wを指している。主柱穴は一部攪乱を受け3か所だけ検出され、南壁中央部東寄り付近には出入りに伴う梯子ピットが検出されている。炉は検出されなかった。

参考文献

- (1)益子町史編さん委員会『車堂』1985年3月

第3節 古墳時代

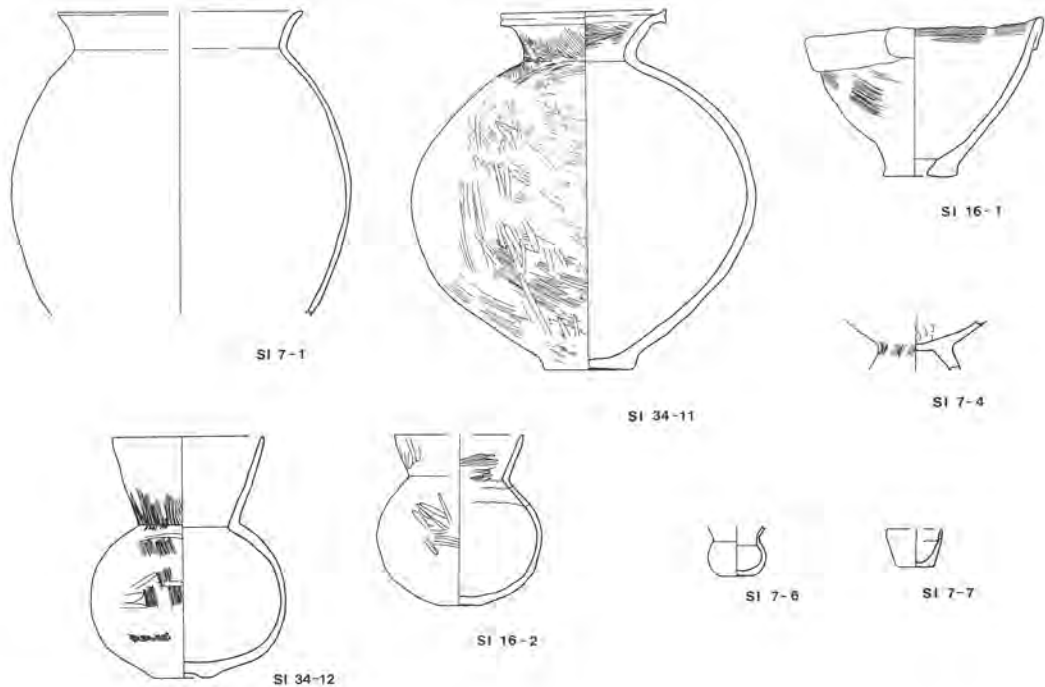
当調査区から検出された古墳時代の遺構は、竪穴住居跡30軒である。これら古墳時代の住居跡から出土した土師器を、南関東における古墳時代の土師器の型式学的編年観に基づき、前期を五領式、中期を和泉式、後期を鬼高式と分類した⁽¹⁾。住居跡について見てみると、五領式に比定できる住居跡は3軒、和泉式に比定できる住居跡は6軒、鬼高式に比定できる住居跡は21軒である。本節では、古墳時代前期を裏山X期、中期を裏山X I・X II期、後期を裏山X III～X V期の6期に時期区分を行い、若干の考察を加えるものである。

1 遺物について

裏山X期（五領期）

本期は、第7・16・34号住居跡出土の土器によって構成される。器種は、土師器の甕、台付甕、壺、甗、埴、ミニチュア土器である。甕は、胴下半部から中央部にかけての破片と胴中央部から口縁部にかけての破片である。胴部は球形状を呈し、口縁部は緩やかに外反している。台付甕は、脚部片で、外面にハケ目整形が施されている。壺は、胴部が球形状を呈し、口縁部は有段口縁で、外面全面にハケ目整形後磨きが施されている。甗は、単孔式の甗で、外面にハケ目整形が施され、口縁部は折り返し口縁である。埴は、胴部が球形状を呈し、外面に磨きが施されているものと、球形状を呈し、外面にハケ目整形後磨きが施され、底部に凹みがあるものがある。ミニチュア土器は、埴形を示すものと鉢形を示すものがある。

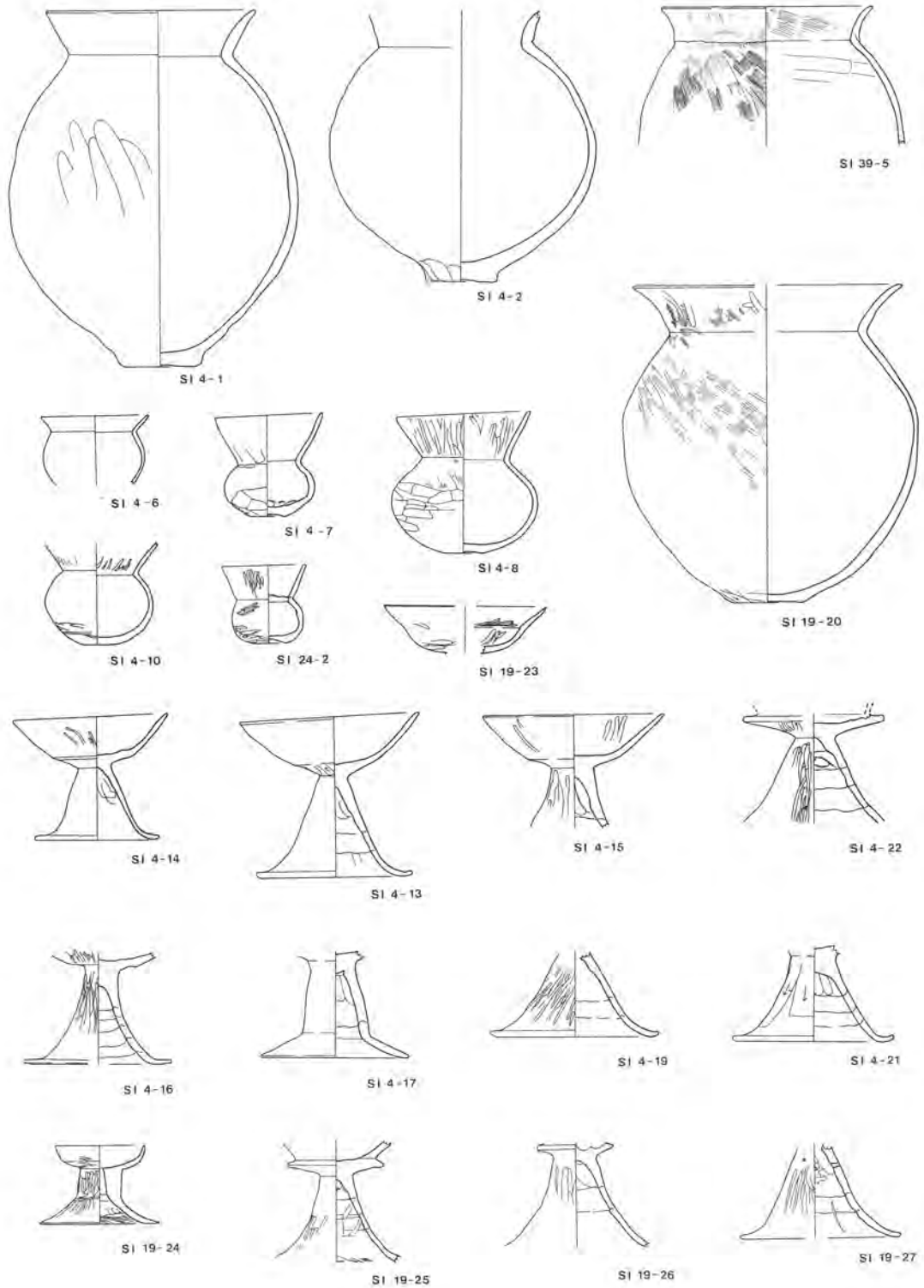
これらの遺物は、4世紀後半に位置付けられると思われる。



第159図 裏山X期（五領期）土器群

裏山XI期（和泉1期）

本期は、第4・19・24・39号住居跡出土の土器によって構成される。器種は、土師器の甕、壺、埴、坏、高坏、器台である。甕は、突出した平底で、胴部が球形状を呈し、ヘラナデやハケ目整形が施され、頸部は「く」の字状を呈し、口縁部に至っている。小形甕も胴部が球形状を呈し、頸部は「く」の字状を呈している。埴は、胴部が球形状や偏平な球形状を呈している。坏は、



第160図 裏山X I期(和泉1期)土器群

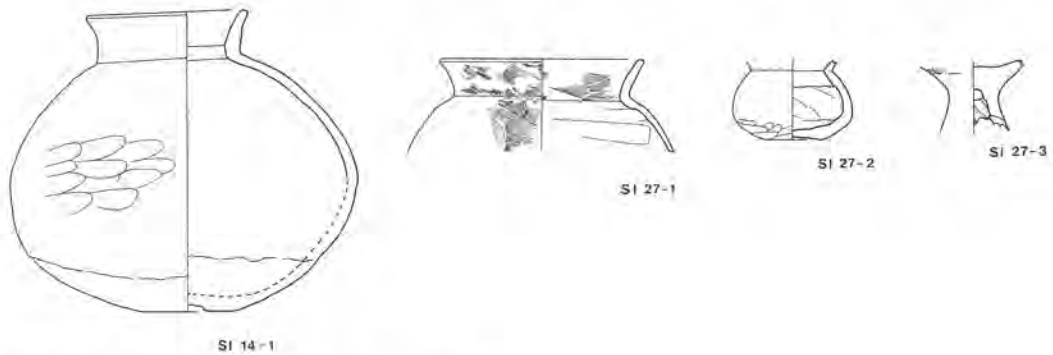
体部が内彎して外上方に開く。高坏は、脚部が円筒状やラッパ状を呈し、坏部は下位に稜を持つものと坏部に鏝の付いているものがある。器台は、小形で、脚部は円筒状を呈し、裾部で大きく外反して開き、器受部は皿状を呈し、口縁部でほぼ直立に立ち上がるものと脚部がラッパ状を呈するものがある。

これらの遺物は、5世紀中葉に位置付けられると思われる。

裏山XⅡ期（和泉2期）

本期は、第14・27号住居跡出土の土器によって構成される。器種は、土師器の甕、壺、埴、高坏である。甕は、口縁部が外反して開く。壺は、胴部が球形状を呈し、最大径を中位に持ち、口縁部は垂直に立ち上がり、上位で外反して開く。埴は、胴部が球形状を呈し、最大径は中位よりやや下に持つ。高坏は、脚部がラッパ状に開き、坏部が内彎気味に立ち上がる。

これらの遺物は、5世紀中葉から後葉にかけての過渡的時期に位置付けられると思われる。

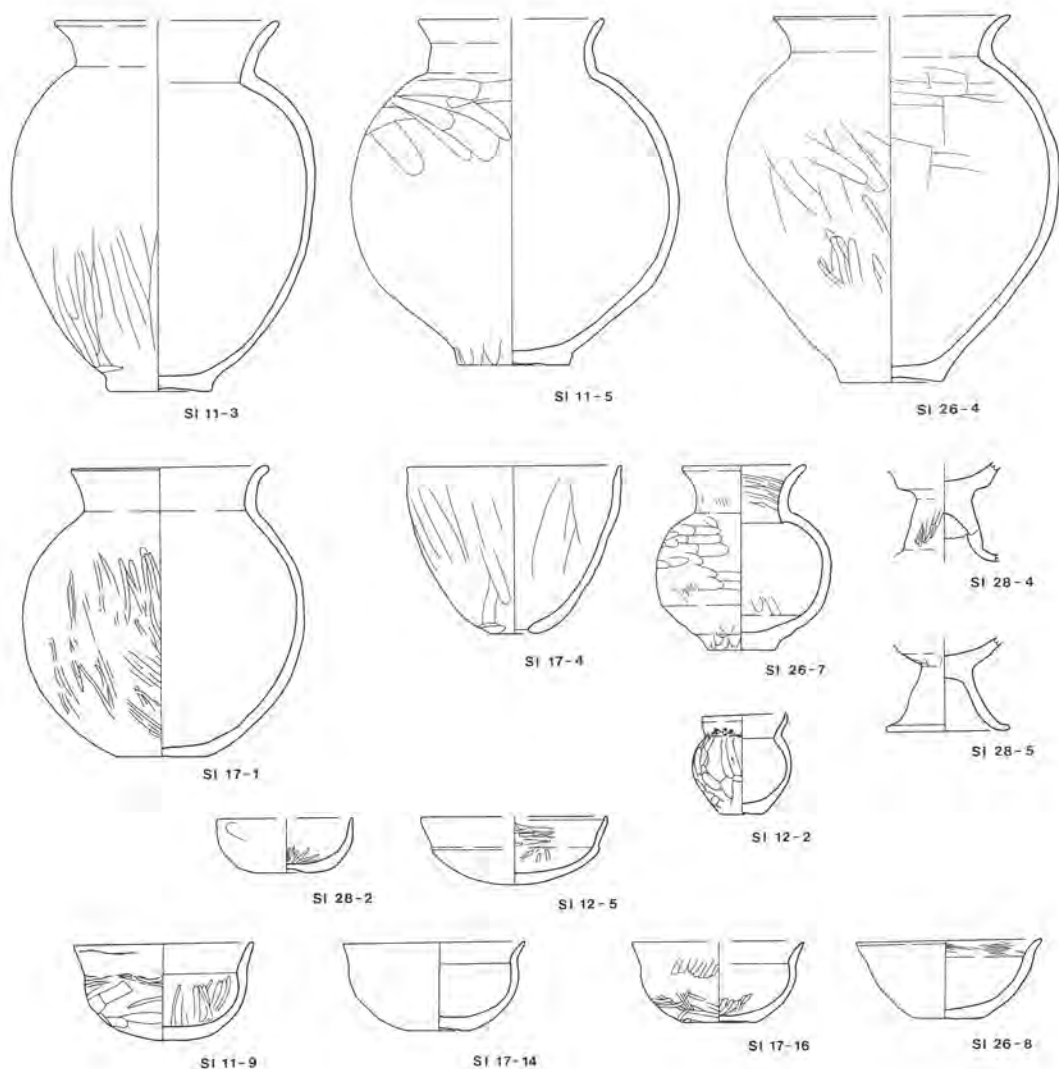


第161図 裏山XⅡ期（和泉2期）土器群

裏山XⅢ期（鬼高1期）

本期は、第11・12・17・22・26・28・32・42号住居跡出土の土器によって構成される。器種は、土師器の甕、小形甕、甌、坏、高坏、埴である。甕は、やや突出した平底と普通の平底とがある。胴部が球形状を呈するものとやや上位で張るものがあり、ヘラナデやヘラ磨きが施され、頸部は「く」の字状を呈しているものや口縁部に段を有するものがある。小形甕も胴部が球形状を呈するものとやや上位で張るものがあり、頸部は「く」の字状を呈している。甌は、小形で単孔式のもので、胴部は内彎しながら立ち上がる。坏は、底部が丸底と平底とがある。体部が内彎しながら立ち上がり、口縁部で稜を有するものがある。高坏は、脚部がラッパ状を呈し、短脚化してくる。坏部は下位に稜を持つ。埴は、平底と丸底とがある。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でやや外反する。

これらの遺物は、5世紀後葉に位置付けられると思われる。この時期は、竈が住居跡内に定着



第 162 図 裏山XⅢ期（鬼高1期）土器群

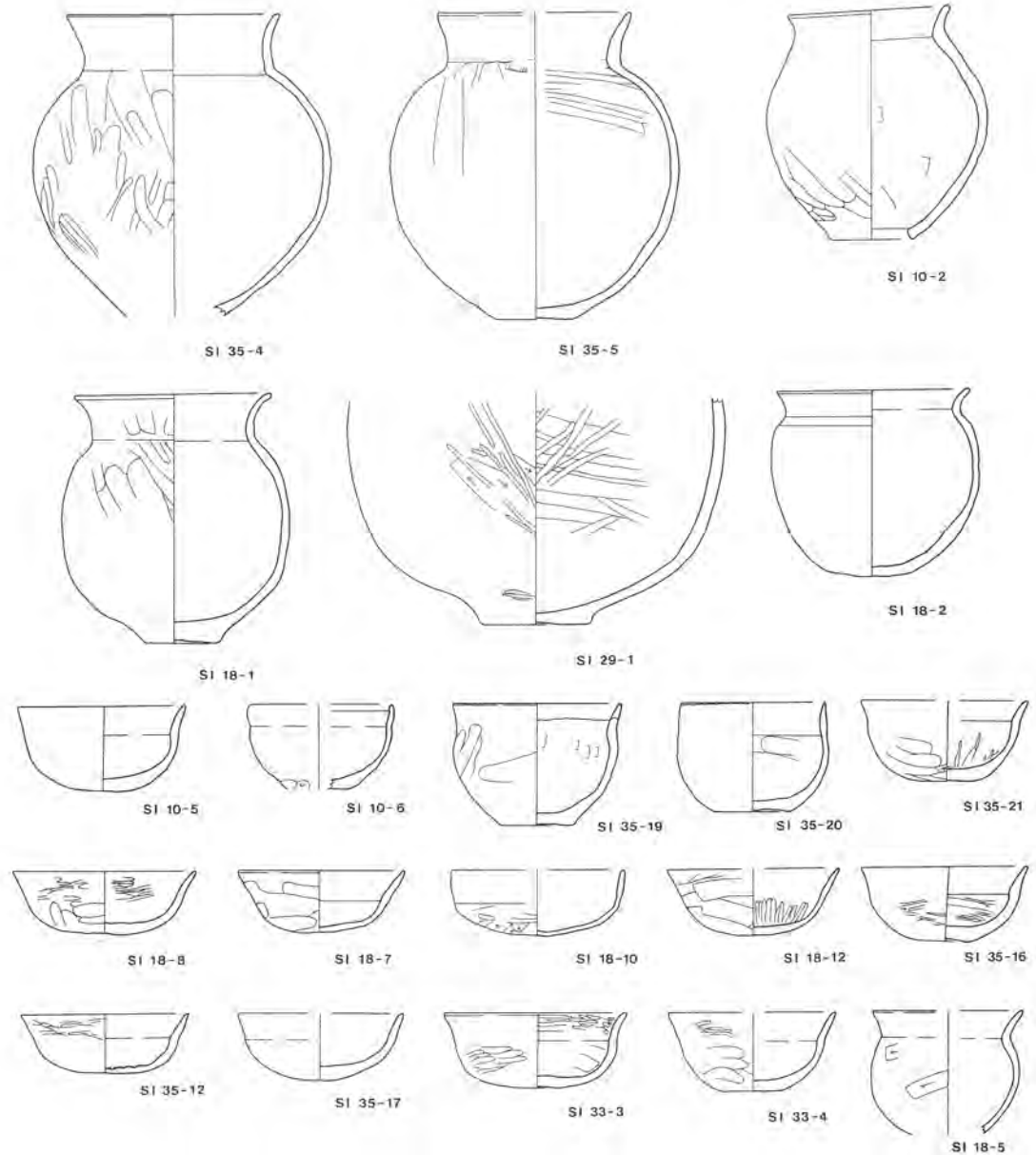
した時期で、和泉期から鬼高期にかけての過渡的時期であると考えられる。

裏山XⅣ期（鬼高2期）

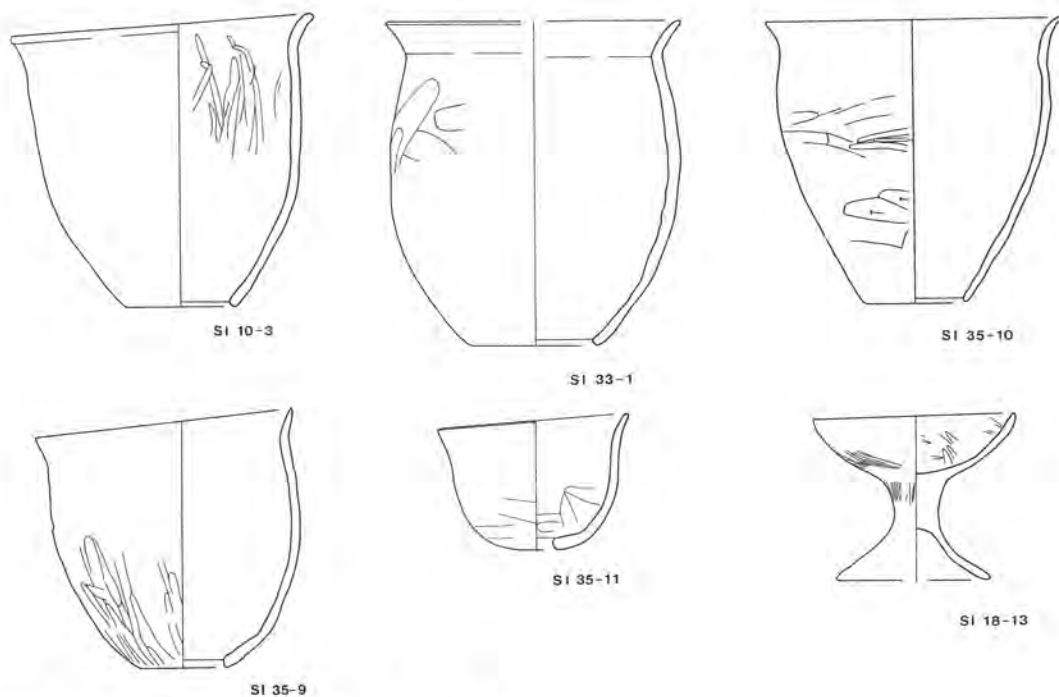
本期は、第 10・18・29・33・35 号住居跡出土の土器によって構成される。器種は、土師器の甕、小形甕、甌、坏、高坏、埴である。甕は、やや突出した平底と普通の平底とがある。胴部は球形状のものとして張るものがある。頸部は「く」の字状を呈するものと口縁部は緩やかに外反するものがある。甌は、単孔式と無底式とがある。単孔式のもの、内彎しながら立ち上がる。無底式のもの、内彎しながら立ち上がり、最大径を胴部上位に持つものと口縁部に持つものがあるが、口縁部に持つものの方が多い。坏は、平底と丸底とがあり、丸底の比率が

高くなる。体部は内彎しながら立ち上がる。口縁部との境に明瞭な稜を有し、口縁部が直立するものもある。高坏は、脚部がラッパ状を呈し、短脚化を示す。坏部は内彎気味に立ち上がる。埴は、平底と丸底とがある。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部でやや外反する。

これらの遺物は、5世紀最終末から6世紀のかなり新しい時期に位置付けられると思われる。



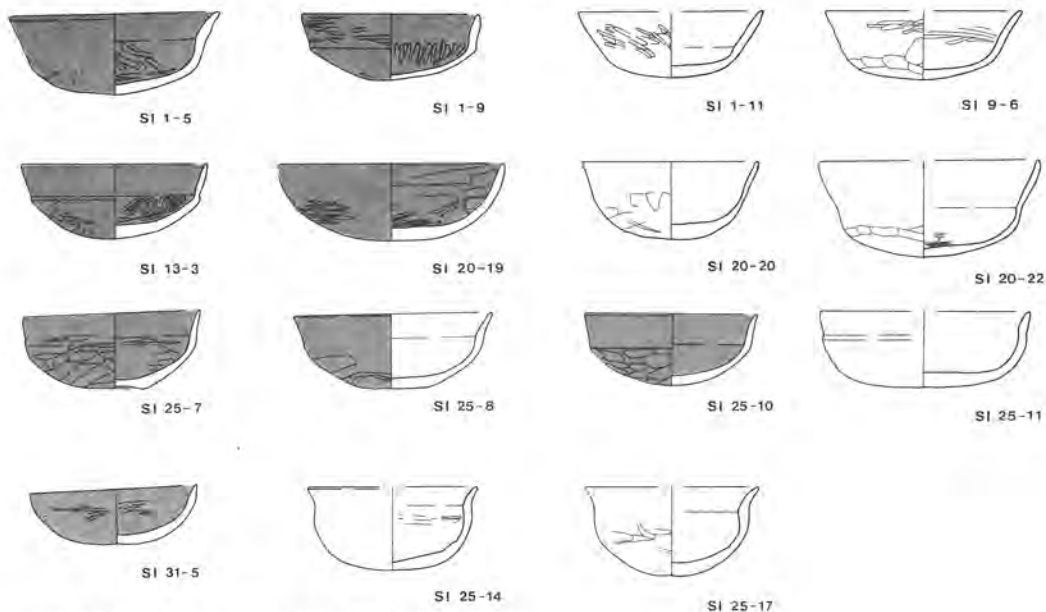
第163図 裏山XIV期(鬼高2期)土器群(1)



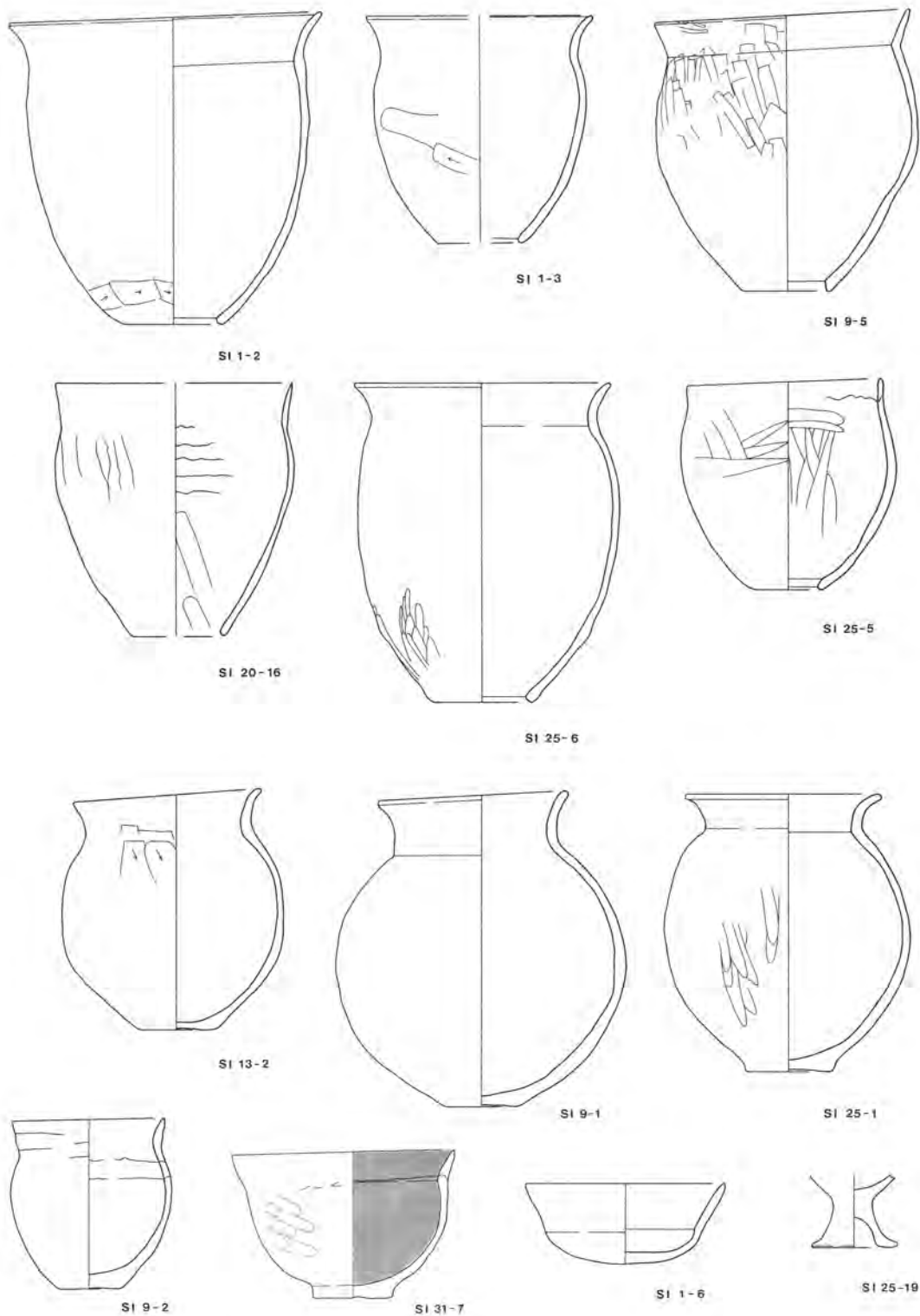
第164図 裏山XIV期（鬼高2期）土器群(2)

裏山XV期（鬼高3期）

本期は、第1・9・13・20・25・31号住居跡出土の土器によって構成される。器種は甕、甑、坏、高坏、埴である。甕は、やや突出した平底と普通の平底とがあり、平底の割合が多い。



第165図 裏山XV期（鬼高3期）土器群(1)



第166図 裏山XV期(鬼高3期)土器群(2)

胴部は、球形状を呈するものと上位で張るものがある。頸部は「く」の字状を呈するものと口縁部は緩やかに外反するものがある。小形甕は、平底で、やや長胴気味である。甌は、全て無底式である。胴部は下端ですぼまる形態で、口縁部は強く外反するものと緩やかに外反するものがある。坏は、大部分が丸底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部との境に稜を有するものも見られる。赤彩が施されるものが多い。

これらの遺物は、6世紀前葉に位置付けられると思われる。

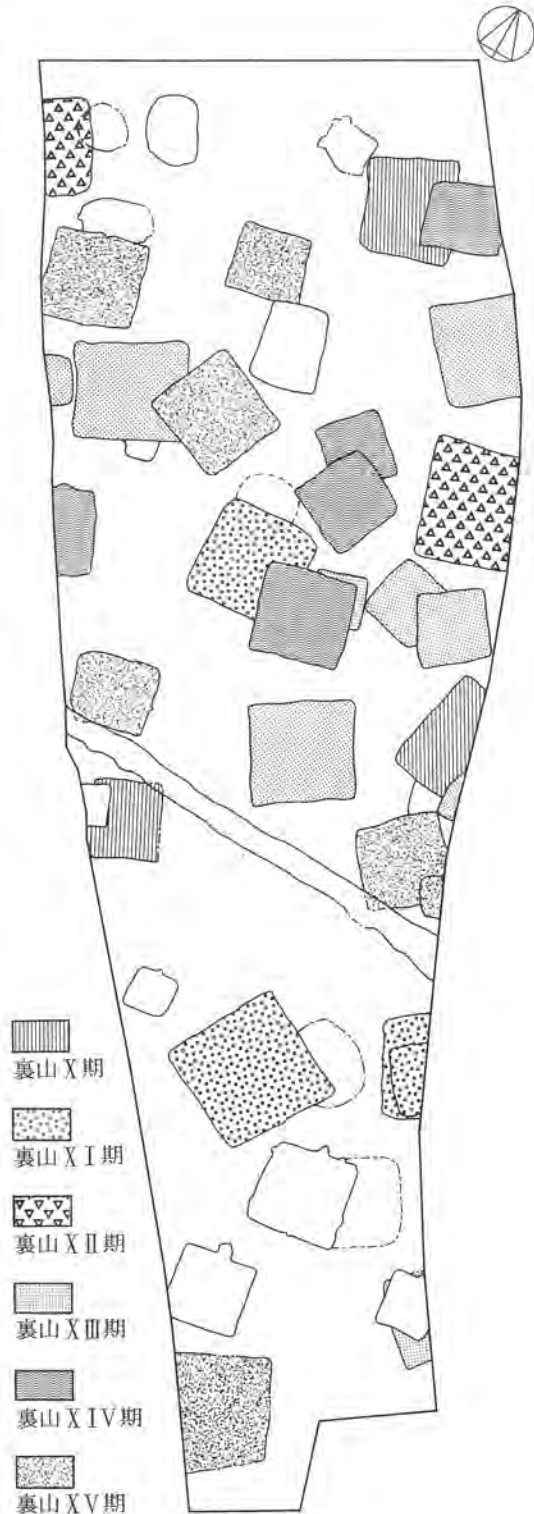
なお、裏山XⅢ～XⅤ期の時間幅は比較的短いのではないかと考えられる。

2 竪穴住居跡と集落について

当調査区からは、古墳時代の住居跡が30軒検出されている。本項では、それらの竪穴住居跡の構造と集落について検討を試みるものである。

裏山X期（五領期）

本期に比定される住居跡は、第7・16・34号住居跡である。これらの住居跡は、形状的に見ると方形を呈するものが2軒（第16・34号）、長方形を呈するものが1軒（第7号）である。規模的には、中形の住居跡が1軒（第7号）、大形の住居跡が2軒（第16・34号）である。炉は、地床炉で、第7号住居跡から検出されている。壁溝はすべての住居跡から検出されている。第16号住居跡は半分ほど調査区域外に延びているので、これを除く第7・34号住居跡について



第167図 古墳時代住居跡分布図

述べると、主柱穴は4か所で、出入りに伴う梯子ピットも検出されている。

当該期の集落は、調査区の中央部から北部にかけて住居跡が3軒検出されているので、この台地の中央部から北側の台地縁辺部にかけて形成されていたものと思われる。

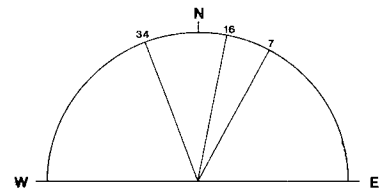
裏山X I期（和泉1期）

本期に比定される住居跡は、第4・19・24・39号住居跡である。第39号住居跡は第24号住居跡を切っている所以、第39号住居跡の方が新しいが、時期差は以外と少ないと思われる。これらの住居跡は、形状的に見るとすべて方形を呈している。規模的には、小形の住居跡が1軒（第39号）、大形の住居跡が2軒（第19・24号）、超大形の住居跡が1軒（第4号）である。炉は、地床炉で、第4号住居跡から検出されている。壁溝は、第39号住居跡を除くすべての住居跡から検出されている。第24・39号住居跡は半分ほど調査区域外に延びているので、これを除く

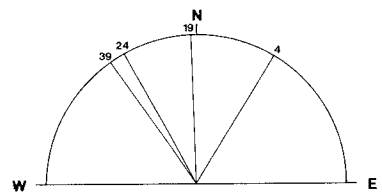
第4・19号住居跡について述べる。主柱穴は4か所で、出入りに伴う梯子ピットも検出されている。貯蔵穴は第19号住居跡から検出されている。

当該期の集落は、調査区の中央部から住居跡が4軒検出されているので、調査区の中央部から調査区域外の北東の方向へ延びる台地縁辺部に存在する可能性も考えられる。本遺跡と同台地上の西側に所在する磯部遺跡からは同時期と考えられる2軒（第3・5号）の住居跡⁽²⁾が検出されている。

第4号住居跡からは、高坏と滑石製の石製模造品が出土しているが、この石製模造品について述べると、本住居跡からは5点の石製模造品（管玉1点、双孔円板一鏡の模造品かー1点、剣3点）が出土している。しかも石製模造品が三種の神器（玉・鏡・剣、ただし玉が勾玉や白玉でなく管玉であることに問題があるかもしれないが）というセットで出土している。このように石製模造品がセットで出土している例は県内では少なく、阿見町の下小池東遺跡⁽⁴⁾だけであるが、これは、古墳時代中期（和泉期）における集落内における祭祀形態をよく表しており、祭祀が世帯共同体における「長」と思われる住居跡（本遺跡では第4号住居跡）において行使されることを意味しているものと思われる。このことが、古墳時代後期（鬼高期、裏山X III期以降）になると、第12号住居跡からは管玉が1点、第17・28号住居跡からは有孔円板が2点出土しているように、石製模造品がいくつかの住居跡から出土している。これは祭祀権の意味合の変化、すなわち、



第168図 裏山X期（五領期）
住居跡長軸方向



第169図 裏山X I期（和泉1期）
住居跡長軸方向

中期には集落内での有力家族で祭祀が行われていたものが、後期には有力家族が分立化し、いくつかの住居跡で祭祀が行われるようになったことを意味していると思われる。さらに、裏山XIV期以降では、石製模造品の出土はなく（平安時代のXVI期の第5号住居跡からわずかに1点出土しているが）、集落内において祭祀権の意味合が薄らいでいるもの⁽⁵⁾と思われる。

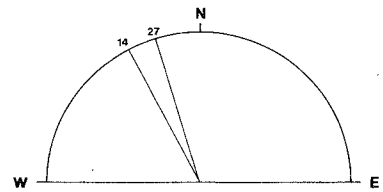
裏山X II期（和泉2期）

本期に比定される住居跡は、第14・27号住居跡である。これらの住居跡は、形状的に見るとすべて方形を呈している。規模的には、大形の住居跡が1軒（第14号）、超大形の住居跡が1軒（第27号）である。竈は、第27号住居跡⁽⁶⁾だけから検出されている。この竈は、北壁中央部に付設されていたと思われるが、火床しか確認できず、規模等は不明である。壁への掘り込みは見られず、形態から考えて、初期の竈と推定される⁽⁶⁾。（炉ではないと判断したのは、次の理由からである。①火床が北壁際中央部付近から確認されている。本期の炉は、床面中央部からやや壁際に近寄る位置で検出されていることが多い。炉が床中央部から壁際に近寄る例は、栃木県の赤羽根遺跡等がある。②袖部を構築していたと思われる焼土化した砂質粘土が北壁中央部西寄りから検出されている。）壁溝は、すべての住居跡から検出されている。主柱穴は、第14号住居跡は3か所で、第27号住居跡は2か所だけ検出されている。出入口に伴う梯子ピットは、第27号住居跡から検出されている。貯蔵穴は、第27号住居跡から検出されている。

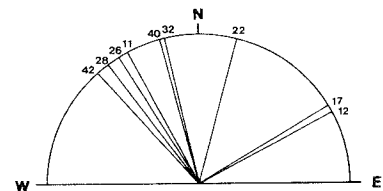
当該期の集落は、調査区の北部から住居跡が2軒検出されているので、この台地の北部から北東部にかけて形成されていたものと思われる。

裏山X III期（鬼高1期）

本期に比定される住居跡は、第11・12・17・22・26・28・32・40・42号住居跡である。第26号住居跡は第22号住居跡を掘り込んでいるので、第26号住居跡の方が新しいが、土器型式からは大きな時間幅は想定することはできず、時期差は以外と少ないと思われる。これらの住居跡は、形状的に見ると、第12号住居跡は長方形を呈するが、この住居跡以外はすべて方形を呈している。規模的には、小形の住居跡が5軒（第11・22・26・32・40号）、大形の住居跡が4軒（第12・17・28・42号）であり、裏山X II期に比べて小形化の傾向が見られる。第11・40・42号住居跡は調査区域外に延びているので、これを除く第12・17・22・26・28・32号住



第170図 裏山X II期（和泉2期）
住居跡長軸方向



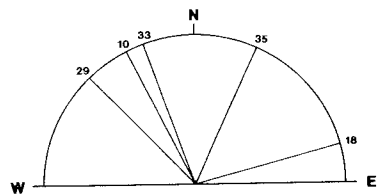
第171図 裏山X III期（鬼高1期）
住居跡長軸方向

居跡の形態について述べる。竈は第17・22・26・28・32号住居跡から検出されている。支柱穴は第12・17・22・26・28号住居跡からは4か所、第32号住居跡からは検出されなかった。出入口に伴う梯子ピットはすべての住居跡から検出されている。第12号住居跡は第20号住居跡に掘り込まれているために竈が検出されなかったのであり、本来は北東壁中央部に付設されていたものと思われる。壁溝は第32号住居跡を除くすべての住居跡から検出されている。出入口は竈の反対側或は長軸線上に位置しているものと考えられるが、第12号住居跡は長軸線に直交して南東壁中央部付近に位置しているものと考えられる。貯蔵穴は第12・17・22・26・28号住居跡から検出されているが、竈の右側から検出されているものが第17号住居跡、出入口の左側から検出されているものが第12・22・26・28号住居跡である。

当該期の集落は、調査区の中央部から住居跡が8軒検出されているので、この台地の中央部から北東部にかけて形成されていたものと思われる。

裏山XIV期（鬼高2期）

本期に比定される住居跡は、第10・18・29・33・35号住居跡である。第35号住居跡は第29号住居跡を掘り込んでいるので、第35号住居跡の方が新しいが、土器型式からは大きな時間幅は想定することはできず、時期差は以外と少ないと思われる。これらの住居跡は、形状的に見るとすべて方形を呈している。規模的には、小形の住居跡が2軒（第29・33号）、中形の住居跡が1軒（第35号）、大形の住居跡が2軒（第10・18号）である。竈は



第172図 裏山XIV期（鬼高2期）
住居跡長軸方向

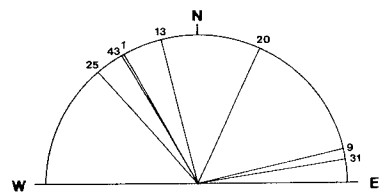
すべての住居跡から検出されている。壁溝は第35号住居跡を除くすべての住居跡から検出されている。第10号住居跡は半分ほど調査区域外に延びているので、これを除く第18・29・33・35号住居跡について述べる。支柱穴は第18・29・35号住居跡は4か所（第33号住居跡は北西部が、わずかに調査区域外に延びているので3か所）である。出入口に伴う梯子ピットは第18・33・35号住居跡では竈の反対側から検出されているが、第29号住居跡からは検出されなかった。貯蔵穴は第18・33・35号住居跡から検出されており、竈の右側から検出されているものが第18号住居跡、出入口の右側から検出されているものが第33・35号住居跡である。主軸方向はN-44°-W～N-75°-Eとばらつきが見られる。

当該期の集落は、調査区の北部から住居跡が5軒検出されているので、この台地の北部から北西部にかけて形成されていたものと思われる。

裏山XV期（鬼高3期）

本期の住居跡は、第1・9・13・20・25・31・43号住居跡（本時期は、磯部遺跡の第

1・6号住居跡⁽⁸⁾よりも古いものと考えられる。)である。遺構の大部分が調査区域外に延びている第43号住居跡を除いて考察を試みる。第43号住居跡は第25号住居跡に掘り込んでいるので、第43号住居跡の方が新しいが、土器型式からは大きな時間幅は想定することはできず、時期差は以外と少ないと思われる。これらの住居跡は、形状的にはすべて方形を呈している。規模的には、小形の住居跡が1軒(第31号)、中形の住居跡が1軒(第9号)、大形の住居跡が4軒(第1・13・20・25号)であり、裏山XIV期に比べてやや大きくなっている。竈はすべての住居跡から検出されている。壁溝はすべての住居跡から検出されている。支柱穴はすべての住居跡から4か所検出されている。出入口に伴う梯子ピットもすべての住居跡から検出されている。第31号住居跡の出入口に伴う梯子ピットは長軸線に直交する南壁中央部東寄り付近から検出され、この出入口に伴う梯子ピットを囲むようにして土手状の高まりも検出されているが、この土手状の高まりも出入口に伴う施設と考えられる。同じような例は森戸遺跡⁽⁹⁾にも見られる。貯蔵穴もすべての住居跡から検出されている。竈の右側から検出されているものが第9・31号住居跡、出入口に伴う梯子ピットの右側から検出されているものが第13・20・25号住居跡である。主軸方向はN-41°-W~N-81°-Eとばらつきが見られるが、土器から判断してほぼ同じ時期と考えた。



第173図 裏山XV期(鬼高3期)住居跡長軸方向

当該期の集落は、調査区の全域から住居跡が7軒検出されているので、西から東に延びる舌状台地の一带に形成されていたものと思われる。

註

- (1)杉原莊介・大塚初重『土師式土器集成本編1・2・3』東京堂出版1972年
- (2)(8)『磯部遺跡』茨城県岩瀬町教育委員会1972年3月
- (3)西野則史「住居跡内出土石製模造品について」『年報8』茨城県教育財団1989年
- (4)阿見町教育委員会『下小池東遺跡第12・13号住居址発掘調査報告書』1981年1月
- (5)鬼高期研究グループ「房総における鬼高期の研究(研究編)」『日本考古学研究所IV』1982年
- (6)埼玉県埋蔵文化財調査事業団「将監塚・古井戸I」『埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第64集』1986年 本庄市教育委員会『二本松遺跡発掘調査報告書』1983年
- (7)栃木県文化振興事業団「赤羽根」『栃木県埋蔵文化財調査報告第57集』1984年
- (8)茨城県教育財団「森戸遺跡外」『茨城県教育財団文化財調査報告第55集』1990年

参考文献

- (1)茨城県教育財団「善長寺遺跡・小田林遺跡外」『茨城県教育財団文化財調査報告第51集』1989年

- (2)茨城県教育財団「向坪B遺跡・北新田A遺跡外」『茨城県教育財団文化財調査報告第38集』1986年
- (3)栃木県史編さん委員会『栃木県史通史編1・原始・古代一』1981年
- (4)村山好文「房総における和泉式土器編年試案」『日本考古学研究所V』1983年
- (5)橋本澄朗外「関東地方における土器様相」シンポジウム『福島県に於ける古代土器の諸問題』万葉の里シンポジウム実行委員会・鹿島町教育委員会 1990年
- (6)樫村宣行・浅井哲也「常陸地域の鬼高式土器」『考古学ジャーナルNO.342』1992年
- (7)笹森紀己子「かまど出現の背景」『古代第72号』早稲田大学考古学会 1982年
- (8)横川好富「竈の出現とその背景」『埼玉の考古学』1987年
- (9)森原明廣「関東地方におけるカマド初現をめぐって」『研究紀要6』山梨県立考古博物館 1990年

第4節 平安時代

裏山遺跡の存する岩瀬町は、古代において、常陸国新治郡に属していた。新治郡衙は、現在の隣町の協和町古郡に所在していたものと思われる。新治郡衙跡を調査した高井悌三郎氏は、検出された51棟の建物群を、北部群25棟、東部群13棟、西部群9棟、南部群4棟の4グループに分離し、西部群を官舎、東部群を不動倉、他の群を倉庫として⁽¹⁾いる。東部群の不動倉からは焼き米が出土している。これは、『類聚國史』の「八年十月癸亥、常陸國新治郡宍、燒不動倉十三宇、穀九千九百九十石」の記事（弘仁8（817）年の記事）に一致している。隣市の笠間市の大郷戸の地付近には、『万葉集註釋』の「常陸國風土記云『新治郡驛家、名曰大神、所以然稱者、大蛇多在、因名驛家』云々」の記事の大神驛家が所在していたと考えられている⁽²⁾。『新編常陸國誌』によれば、「是驛（大神驛家筆者記す）ハ茨城郡安侯驛ヨリ笠間ニ至リ、コノ驛ヨリ、下野國へ越ユル所ト見エタリ、サレド急務ノ驛ニアラザレバ、廢セシト見ユ」とある⁽³⁾。これらのことから考えて、下野国府から新治郡衙・大神驛家を通り、安侯驛家あるいは河内驛家に至る古道が想定されている。当然この古道は、岩瀬町を通過していたと考えられる。

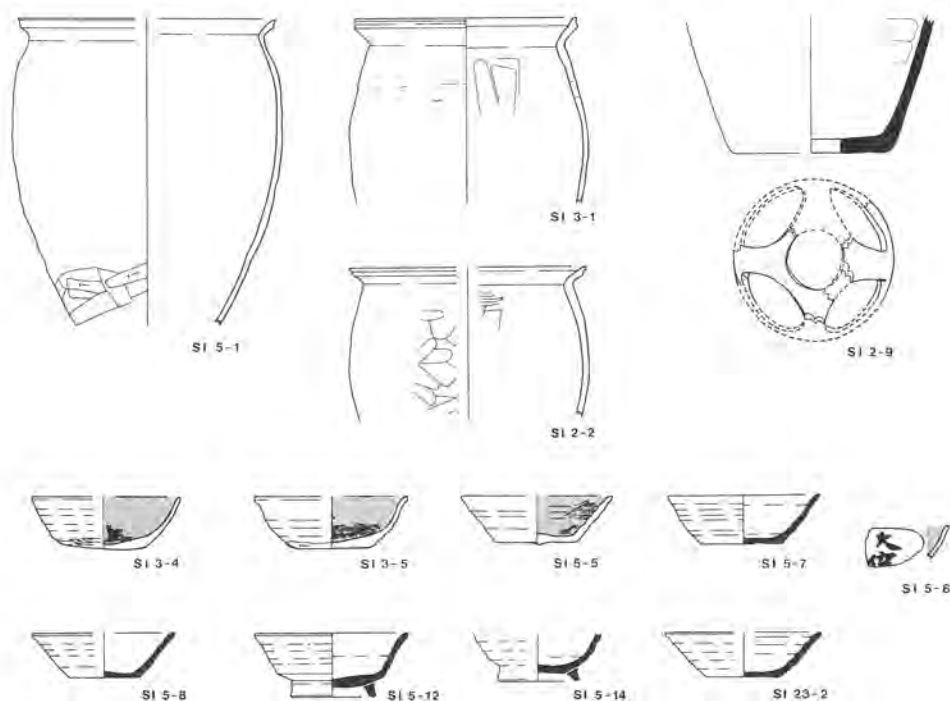
当遺跡の所在する磯部の地は、奈良時代から平安時代にかけて、古代常陸国新治郡の主要な地であったものと考えられる。

1 土器（裏山XVI期）について

本期は、第2・3・5・23号住居跡出土の土器によって構成される。器種は、土師器の甕、坏、須恵器の甕、坏、高台付坏等が出土している。土師器の甕は、頸部を「く」の字状に屈曲させ、口唇部を外上方につまみ上げられており、胴部外面はヘラ削り調整が行われているものと、ヘラナデ調整の行われているものがある。土師器の坏は、平底で、体部は外傾して立ち上がる

ものと、内彎しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反するもの等があり、内面黒色処理の施されているものが多い。須恵器の甑は、五孔式である。須恵器の坏は、平底で、外傾して立ち上がるものと、内彎しながら立ち上がり、口縁部でわずかに外反するもの等があり、底部は手持ちへら削り調整と回転へら削り調整とがある。須恵器の高台付坏は、直立あるいは「ハ」の字状に開く高台が付くもの等があり、体部は外傾して立ち上がるものと、内彎気味に立ち上がるものがある。墨書土器は第5号住居跡から2点出土している。1点は須恵器の坏に記載されているが、文字は不明のものである。もう1点は土師器の坏で、「大位」と読めるものである。

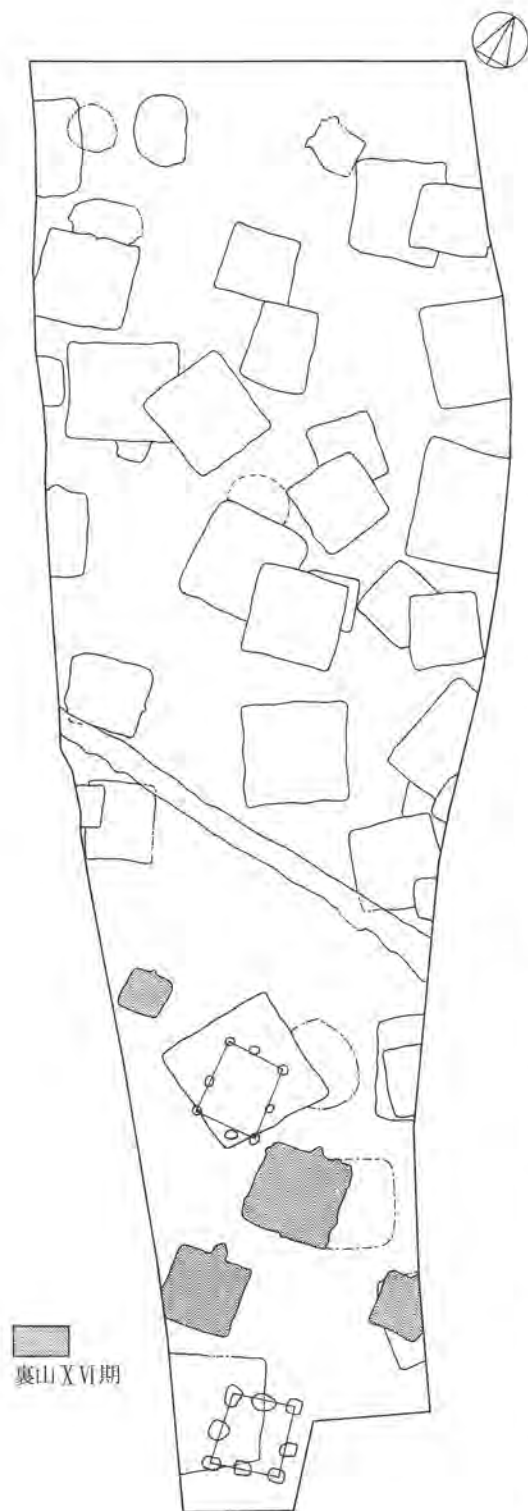
これらの遺物は、9世紀後半に位置付けられると思われる。



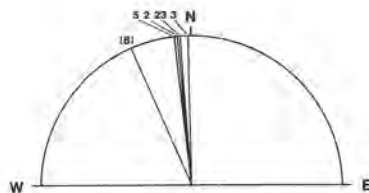
第174図 裏山XVI期(平安時代)土器群

2 竪穴住居跡と集落について

当調査区から検出された平安時代の遺構は、竪穴住居跡5軒で、第2・3・5・8・23号住居跡(本時期は、磯部遺跡の第2・4号住居跡の時期よりも古いと考えられる。)である。第8号住居跡は遺構のかなりの部分が調査区域外に延びているので、これを除く4軒の住居跡を中心に考察を加える。この4軒の住居跡は、すべて調査区の南部から検出されている。形状的には、すべて方形を呈している。規模的には、超小形、小形、中形と大形の住居跡がそれぞれ1軒ずつ



第 175 図 平安時代住居跡分布図



第 176 図 裏山 X VI 期 (平安時代)
住居跡長軸方向

検出されている。支柱穴は、大形と中形の住居跡には4か所検出されているが、小形と超小形の住居跡からは検出されなかった。出入り口に伴う梯子ピット及び壁溝は、すべての住居跡から検出されている。竈は、すべての住居跡の北壁中央部に検出され、煙道部は屋外に伸び、壁への掘り込みは15～120cmである。貯蔵穴は、大形の2軒の住居跡から検出されている。主軸方向は、4軒ともやや西に傾いており、その傾きは $N-0 \sim 6^{\circ} W$ の範囲内に収まっている。

本期の住居跡は、その規模に大きな差がみられることに特徴がある。(一般的には平安時代の住居跡は長軸3m代の小形の住居跡が多く、森戸遺跡⁽⁵⁾や柴崎遺跡⁽⁶⁾等の例があげられる。)さらに、長軸7m代と大形の第5号住居跡を取り囲むようにして同時期の住居跡が検出されていることも特徴と思われる。これら4軒の住居跡の相互関係は、戸長あるいは家父長(家父長制的世帯共同体の長)を中心とした小集落の様相を示しているのではないかとされるし、大・小の住居跡の間には身分的な差があることも考えられる。第5号住居跡からは出土遺物も豊富で、当調査区が

ら出土している2点の墨書土器もこの住居跡から出土している。この内一点の墨書土器は「大位」と判読される。この一点の墨書土器から考察を加えることは、大変危険であるが、「大位」が官職に関係する文字（「大初位」の略ではないかとも推定される）と捉えられるならば、新治郡衙との関係も考えられるのではないかとと思われる。

当調査区からは縄文・弥生・古墳・平安時代の土器が出土し、それらを16期に分け、その時期における竪穴住居跡（縄文時代については土坑についても）について、時期毎に概観してきたが、以下、それぞれの時代毎にまとめてみたい。

縄文時代は、中期の竪穴住居跡が8軒検出され、平面形は円形、楕円形、隅丸長方形等を呈している。土坑は、中期から後期にかけての土坑が98基検出され、断面形は円筒形を呈するもの、皿状を呈するものやフラスコ状を呈するものが見られる。阿玉台Ib式期から加曾利EI式期までフラスコ状土坑が群集して検出されている。遺物は深鉢形土器、浅鉢形土器、石鏃、打製石斧、磨製石斧や磨石等である。縄文時代後期の堀之内式期以降弥生時代後期に至るまでの遺構は検出されなかった。

弥生時代は、後期の竪穴住居跡が2軒検出され、平面形は長方形を呈している。遺物は弥生式土器の甕や壺の破片である。

古墳時代は、前期から後期前半までの竪穴住居跡が30軒検出され、平面形は方形を呈している。住居跡の規模においては、中期に大きさのピークを迎え、特に第4号住居跡は長軸8m余りを測り、当調査区の最大規模を有している。竈は中期の後半から見られ、比較的早い時期に設置されている。遺物は、前期に特徴的に見られるハケ目整形が中期のXI期まで見られる。中期には、胴部が球形状を呈する甕が目立ったが、後期にはわずかに長胴化した甕が見られる。後期のXV期には、赤彩された坏が見られる。

平安時代は、竪穴住居跡が5軒検出されているが、9世紀後半の住居跡が4軒見られる。この時期の住居跡は非常に小形であるが、当調査区からは長軸7m代の大型住居跡が検出され、この住居跡を囲むようにして同時期の住居跡が3軒検出されている。このことは、この時期における集落構造、すなわち家父長的世帯共同体の長を中心にして小集落が形成されていることを表しているものと思われる。

最後に、今回調査した台地上には、縄文時代中期から人々が居住しはじめて、弥生時代、古墳時代、そして平安時代に至るまで、継続的あるいは断続的に集落を形成していたものと思われる。

註

(1)高井梯三郎『常陸国新治郡上代遺跡の研究』1944年

(2)吉田東伍『大日本地名辞書』富山書房1907年

(3)中山信名『新編常陸国誌』崙書房 1979 年

(4)『磯部遺跡』茨城県岩瀬町教育委員会 1972 年 3 月

(5)茨城県教育財団「北郷 C 遺跡・森戸遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第 55 集』1990 年

(6)茨城県教育財団「柴崎遺跡 I・II-1 区」『茨城県教育財団文化財調査報告第 54 集』1989 年

参考文献

(1)史館同人会・市立市川考古博物館『シンポジウム資料房総における奈良・平安時代の土器』1983 年

表 5 平安時代住居跡一覧表

住居 番号	位置	主(長)軸方向	平面形	規 模	壁高(cm)	床面	内 部 施 設				炬 竈	覆土	出 土 遺 物	備 考
				長軸×短軸(m)			壁溝	主柱穴	貯蔵穴	入口				
2	C2h ₆	N-5°-W	方形	5.42×5.20	15~55	平坦	全周	4	1	P(1)	竈(1)	自然	土師器片1077点、須惠器片106点	
3	C2d ₃	N-1°-W	方形	2.96×2.95	19~26	平坦	全周			P(1)	竈(1)	自然	土師器片120点	性格不明P(1)
5	C2f ₁	N-6°-W	方形	7.40×7.00	15~57	平坦	全周	4	2	P(1)	竈(1)	自然	土師器片1476点、須惠器片223点	壁柱穴P(7)
8	C2b ₁	{N-23°-W}	方形	2.95×(1.66)	26	平坦						自然	土師器片273点、須惠器片2点	
23	C2g ₃	N-4°-W	方形	3.73×(3.25)	43~44		全周			P(1)	竈(1)	自然	土師器片470点、須惠器片28点	

結 語

一般県道西小埜真岡線道路改良工事に伴う、岩瀬町磯部地内に所在する裏山遺跡の発掘調査は、平成2年4月から7月の4か月にわたって実施された。調査の結果、縄文時代、弥生時代、古墳時代及び平安時代の遺構・遺物を検出し、多くの貴重な資料を得ることができた。

縄文時代の遺構は、竪穴住居跡8軒、土坑98基（フラスコ状土坑50基を含む）、屋外炉1基であり、出土遺物は、縄文時代中期の阿玉台式期と加曾利E式期のものが中心であるが、この時期の土器に平行する東北系の大木8a式土器も出土している。後期の称名寺式や堀之内式の土器も遺構に伴って出土している。このように、この台地には縄文時代中期から後期にかけて、人々が生活していたことが実証できた。さらには、フラスコ状土坑が群集して検出されたことは、貴重なことであるし、大木8a式土器が出土していることから、東北地方との文化交流についても窺い知ることができた。

弥生時代の遺構は、竪穴住居跡2軒であるが、出土遺物は後期に比定される弥生式土器片が出土している。

古墳時代の遺構は、前期の竪穴住居跡3軒、中期の竪穴住居跡6軒、後期の竪穴住居跡21軒である。このうち、炉をもつものが2軒、竈をもつものが17軒である。中期の住居跡から検出されている竈は、竈発生期のことを考えるときの貴重な資料となるものと思われる。出土遺物は土師器の坏、埴、高坏、甕、甗、壺、埴及びその破片、土製品の勾玉、球状土錘及び紡錘車、石製品の紡錘車、石製模造品等である。第4号住居跡からは石製模造品が3点セット（玉・鏡・剣）で出土したことは、古墳時代中期の集落内祭祀について考えるときの貴重な資料となるものと思われる。

平安時代の遺構は、竪穴住居跡5軒で、このうちの4軒の住居跡から竈が検出されている。出土遺物は土師器の甕、甗、坏及び高台付坏、須恵器の甗、坏、高台付坏及び円面硯の破片等である。第5号住居跡は、この時期の住居跡にしては、長軸7mと規模が大きく、出土遺物は豊富で、この住居跡を取り囲むようにして同時期の住居跡が検出されている。このことは、平安時代の小集落の様相や村落構造を端的に表していると思われる。

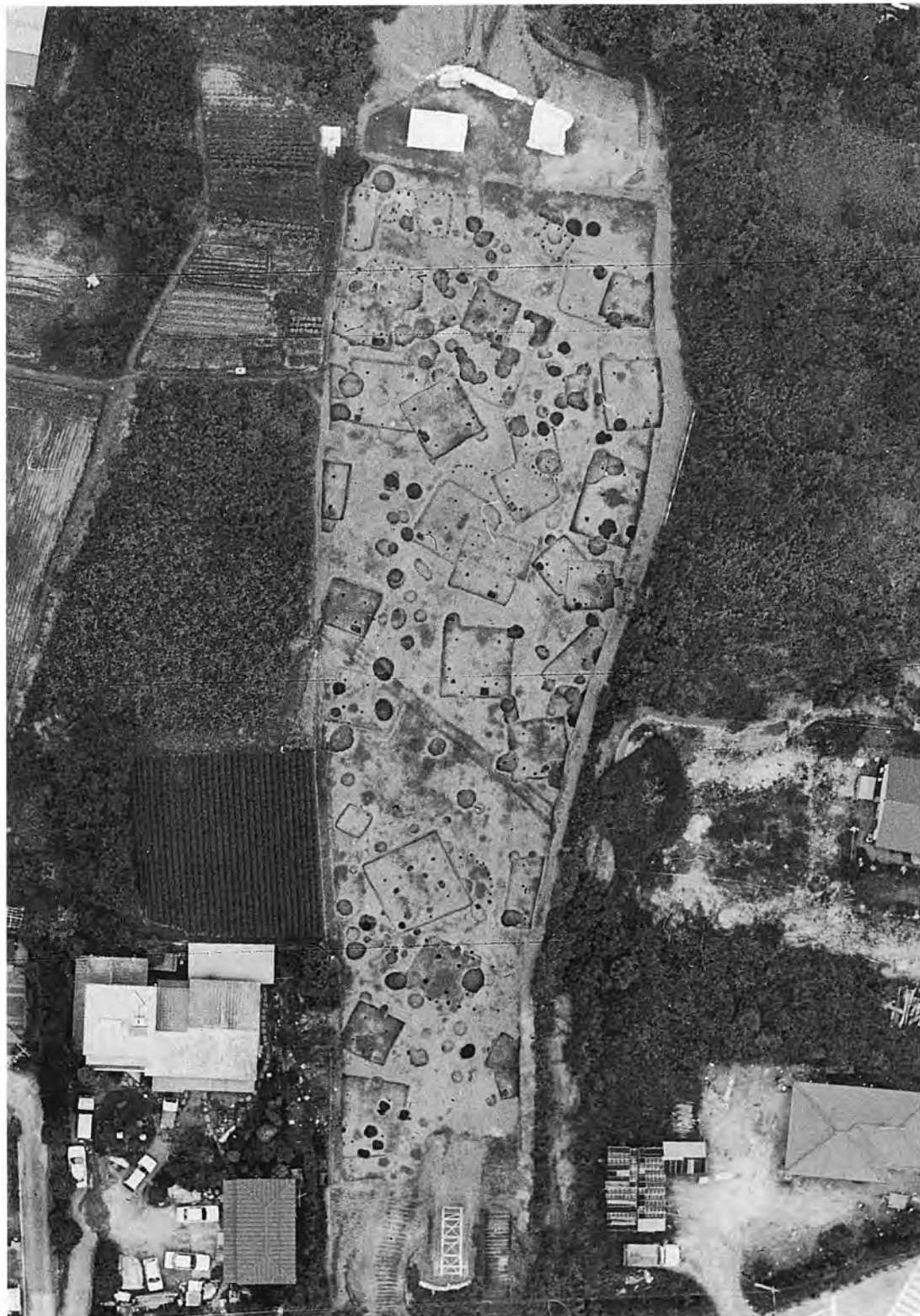
裏山遺跡の調査と整理を担当し、可能な限りの多くの資料を収集し、客観的に報告できるように努めてきた。本報告書が、今後この地域の歴史の解明のための一助になれば幸いである。

最後に、発掘調査から報告書作成に至るまで、岩瀬町教育委員会をはじめ、関係各位から多くの御指導、御協力をいただいたことに対して、末筆ながら深く感謝の意を表する次第である。

写真図版



第4号住居跡出土土器



裏山遺跡全景



遺構確認状況



遺跡遠景



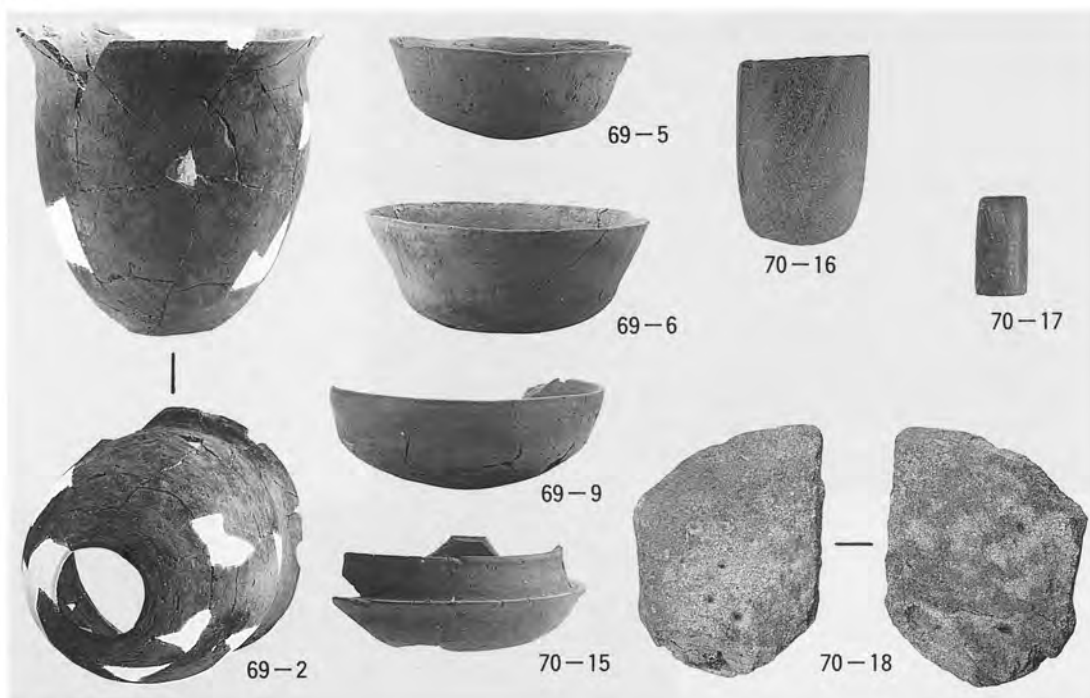
第1号住居跡



第1号住居跡遺物出土状況



第1号住居跡出土土器



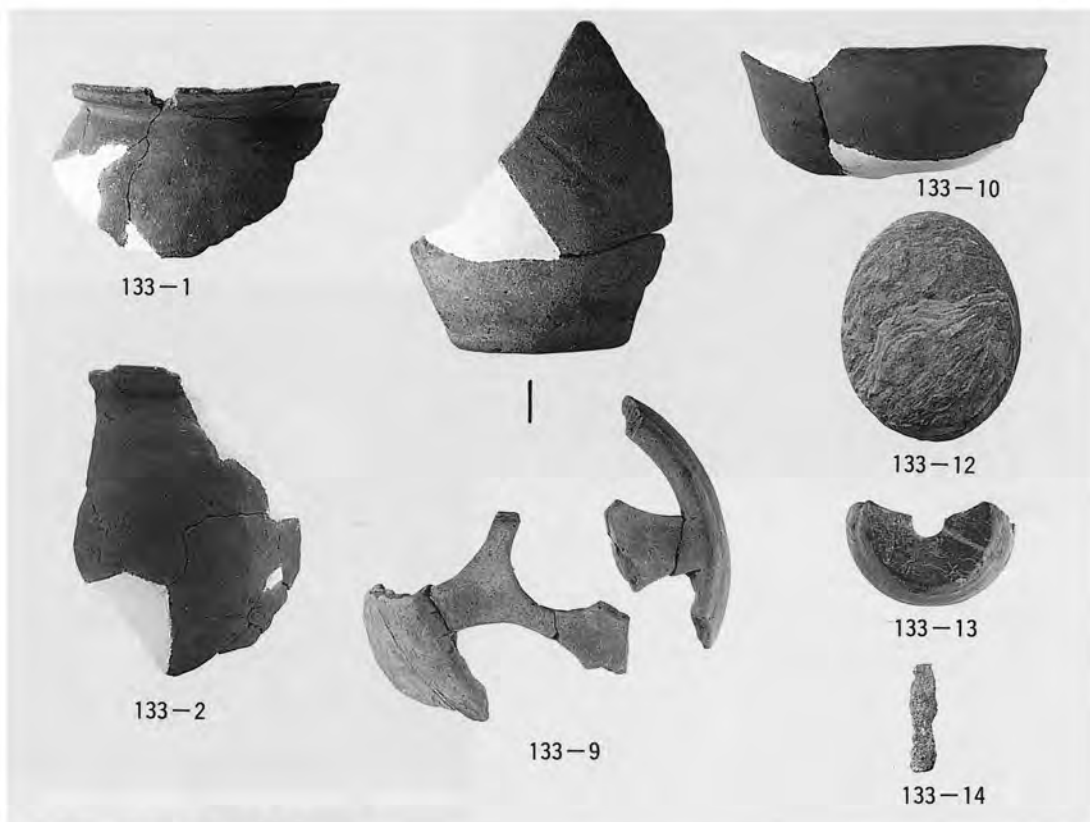
第1号住居跡出土遺物



第2号住居跡



第2号住居跡竈



第 2 号住居跡出土遺物



第 3 号住居跡

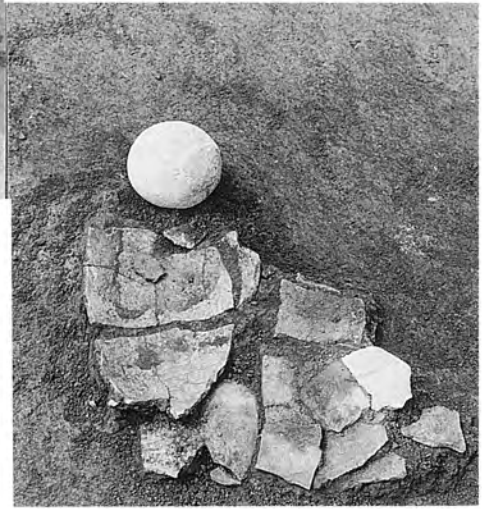


第 3 号住居跡出土遺物

PL 6



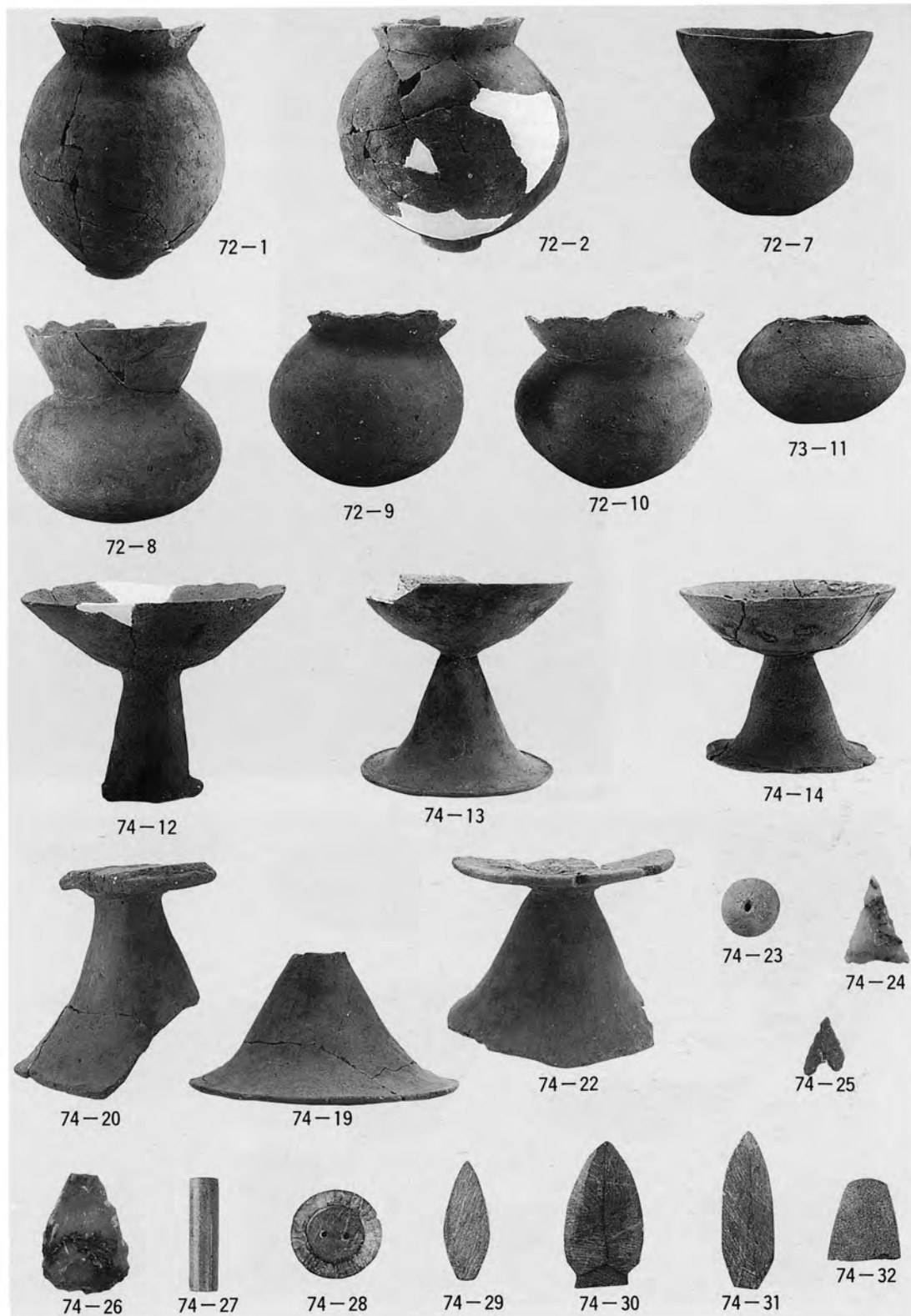
第 4 号住居跡



第 4 号住居跡遺物出土状況



第 4 号住居跡出土土器



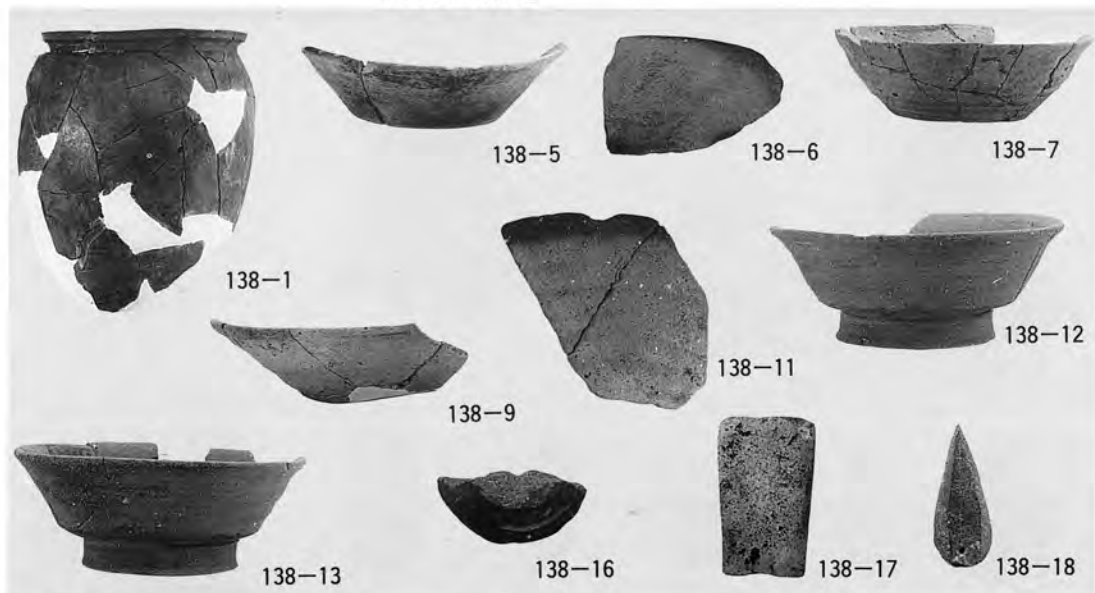
第 4 号住居跡出土遺物



第5号住居跡



第5号住居跡竈



第5号住居跡出土遺物



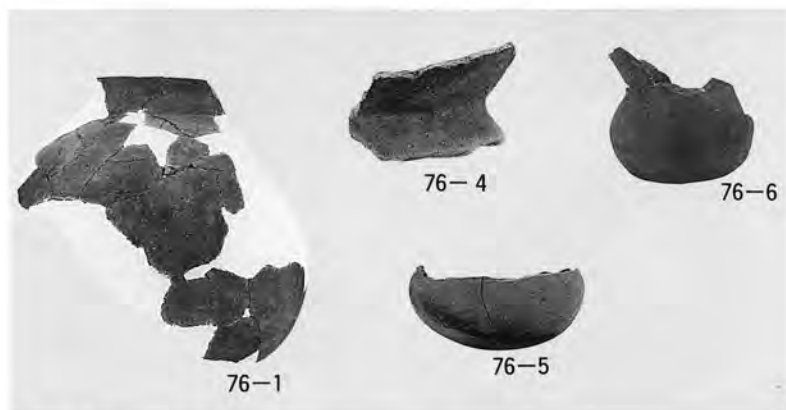
第6号住居跡



第7・8号住居跡



第7号住居跡遺物出土状況



第7号住居跡出土遺物



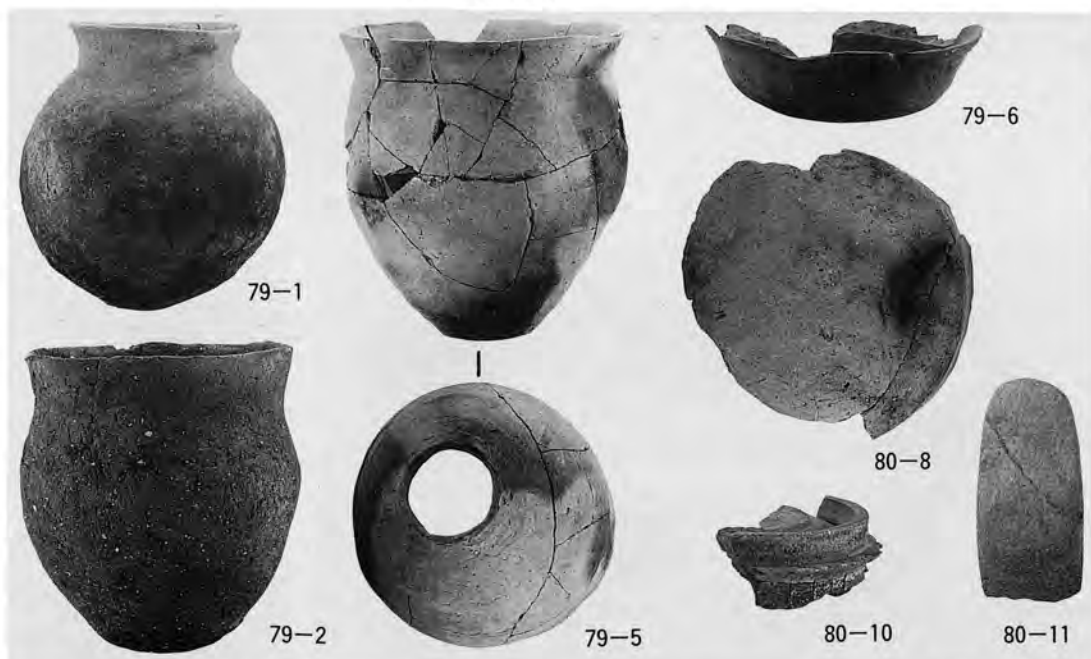
第8号住居跡出土遺物



第9号住居跡



第9号住居跡竈



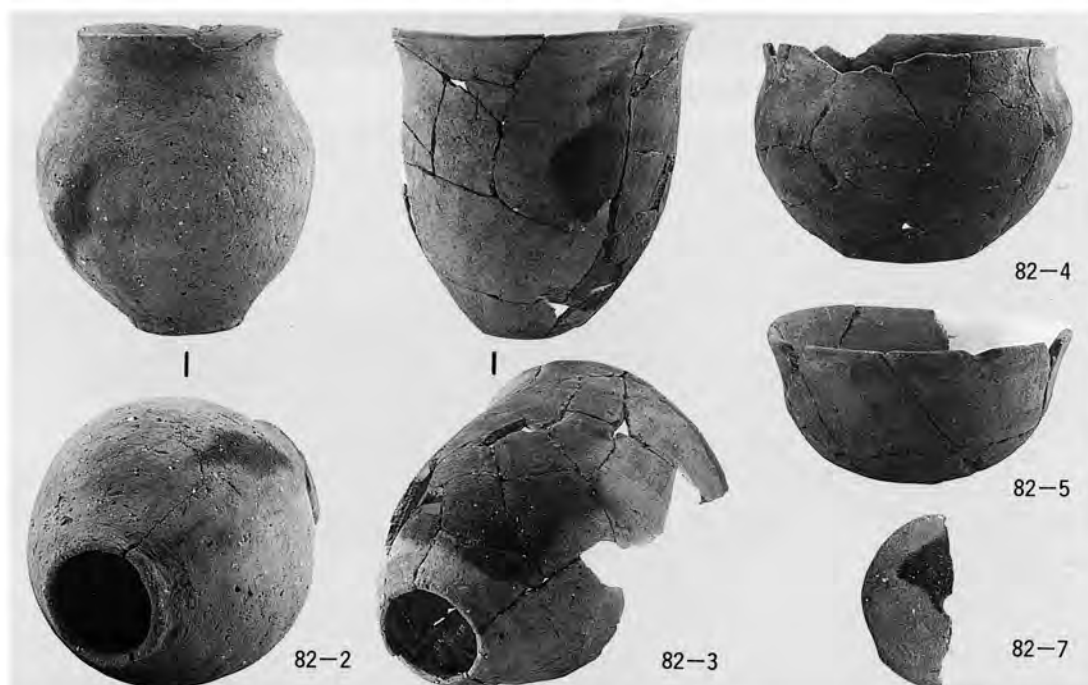
第9号住居跡出土遺物



第10号住居跡



第10号住居跡遺物出土状況



第10号住居跡出土遺物



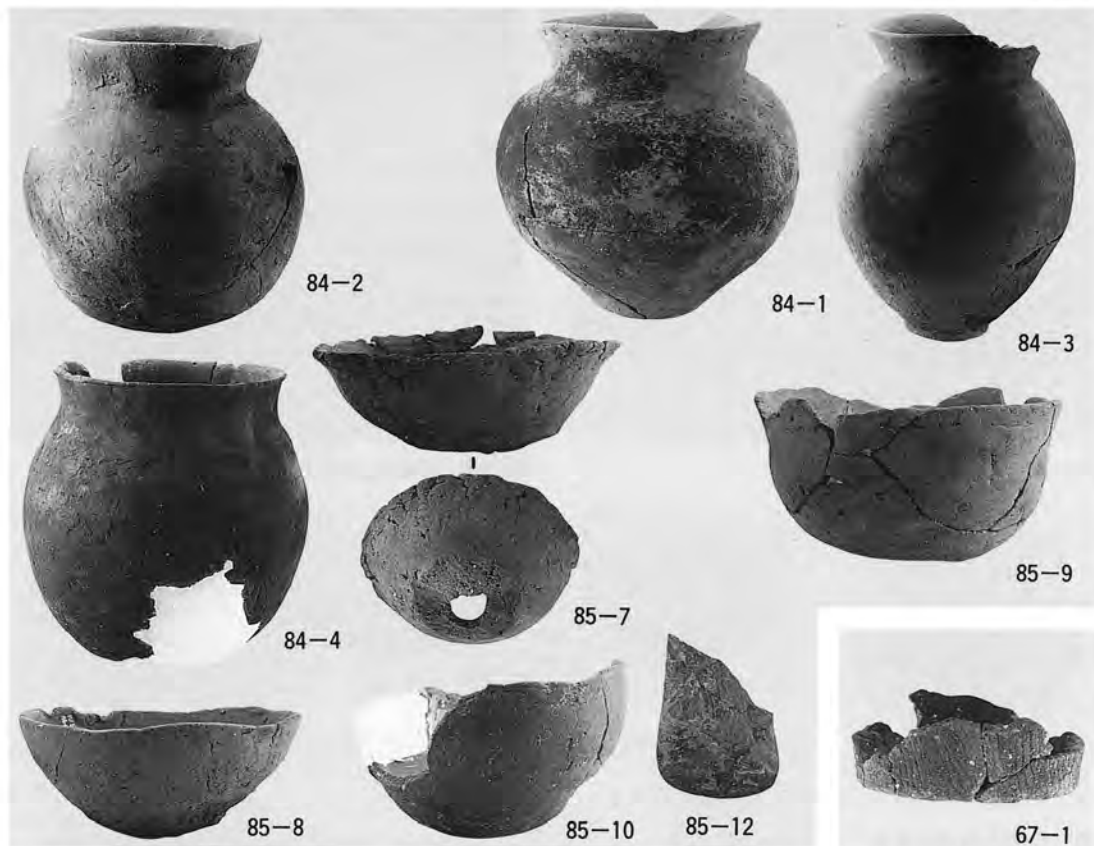
第11号住居跡



第11号住居跡遺物出土状況

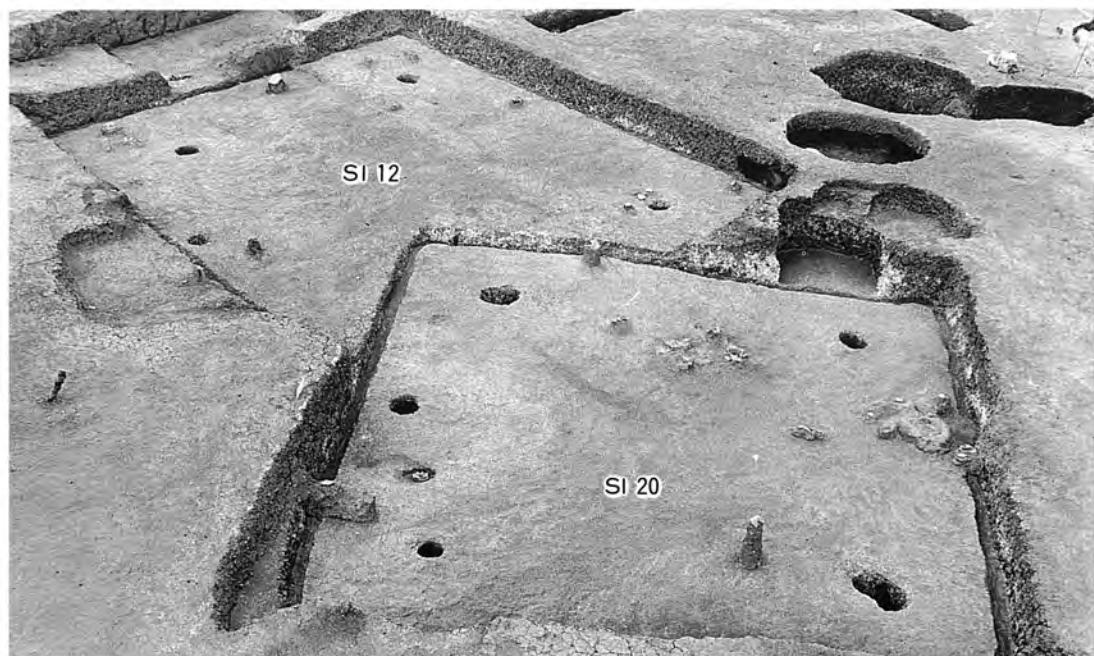


第11号住居跡出土土器



第11号住居跡出土遺物

第36号住居跡出土遺物



第12・20号住居跡



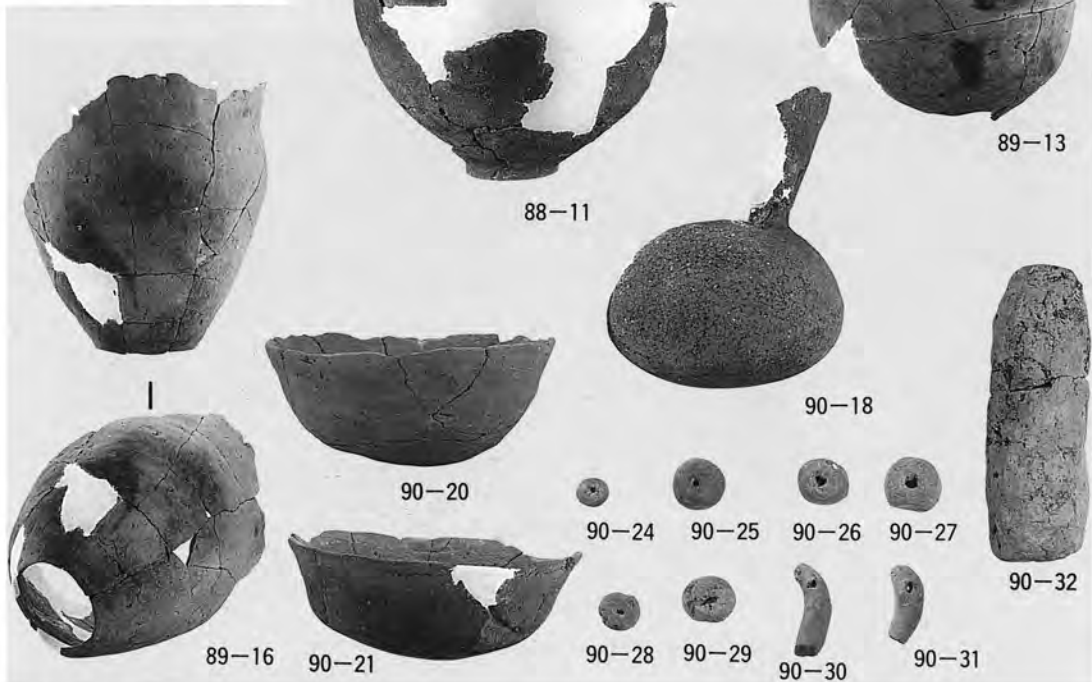
第20号住居跡遺物出土状況



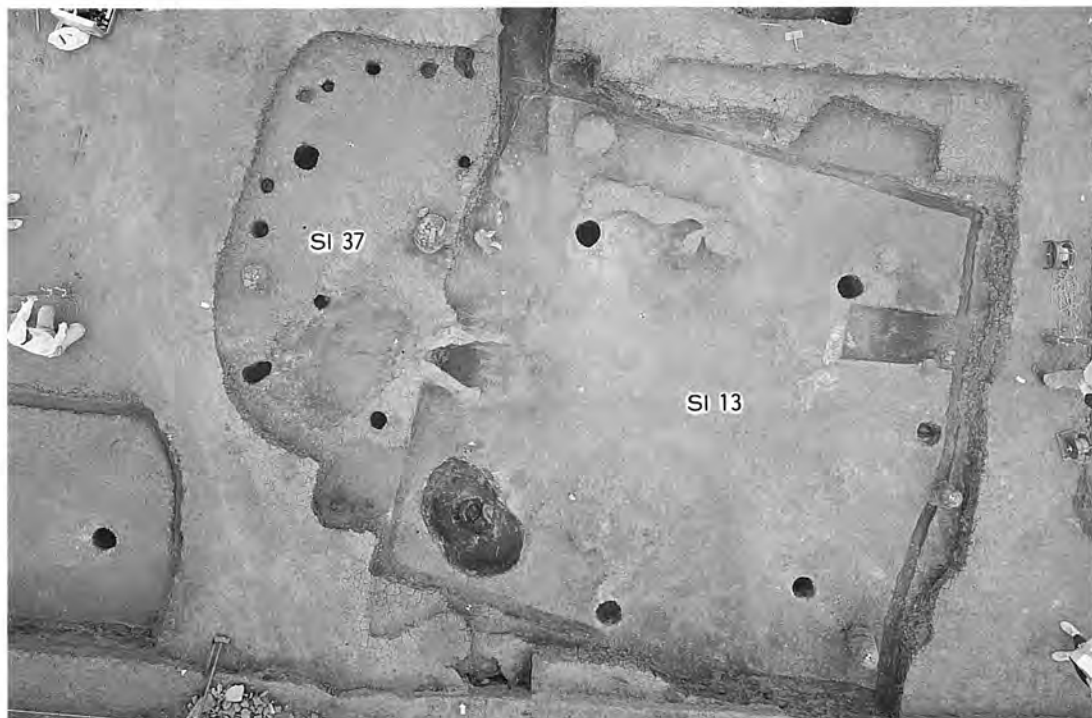
第20号住居跡竈遺物出土状況



第12号住居跡出土遺物



第20号住居跡出土遺物



第13・37号住居跡



第13号住居跡竈



第13号住居跡遺物出土状況



第13号住居跡出土遺物

第37号住居跡出土遺物



第14号住居跡



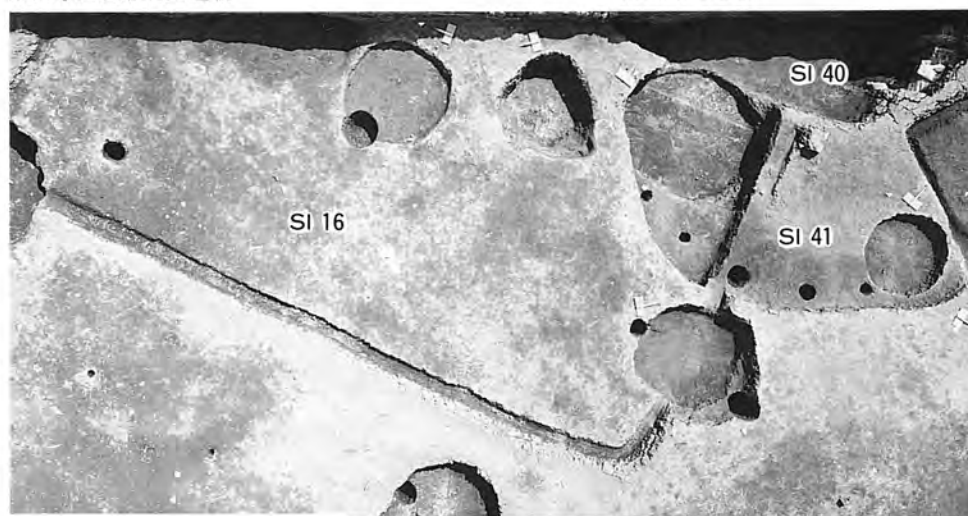
第14号住居跡遺物出土状況



第14号住居跡出土遺物



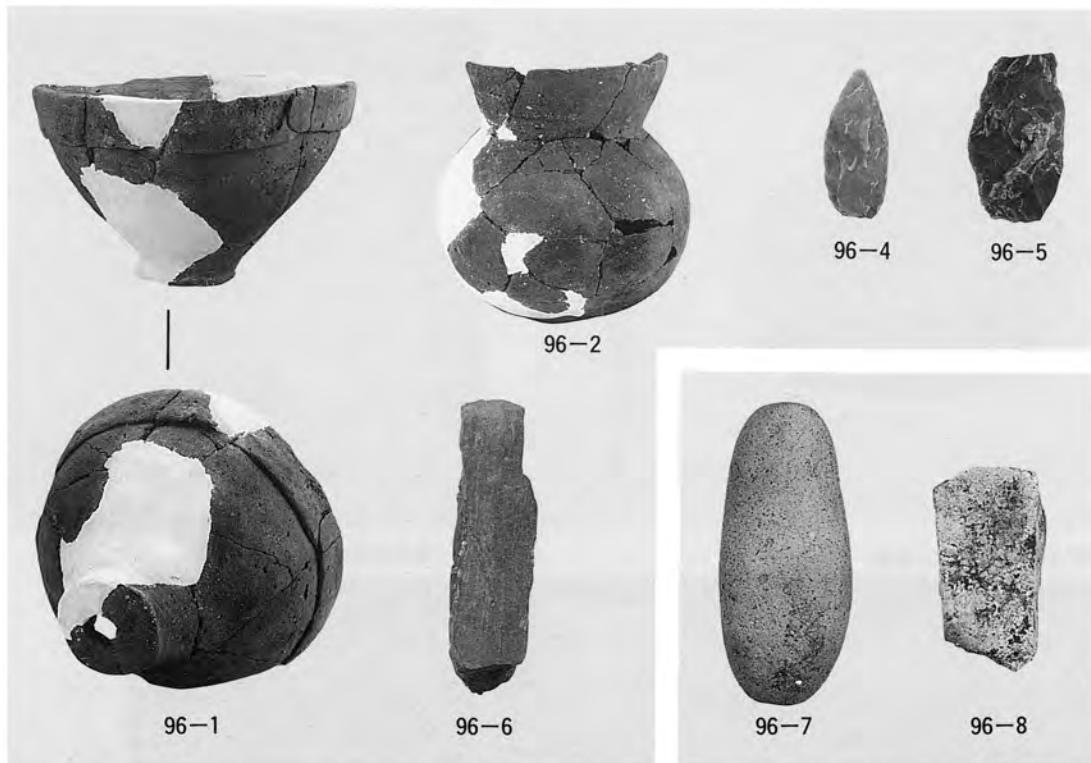
第15号住居跡



第16・40・41号住居跡



第16号住居跡遺物出土状況



第16号住居跡出土遺物

第40号住居跡出土遺物



第17号住居跡

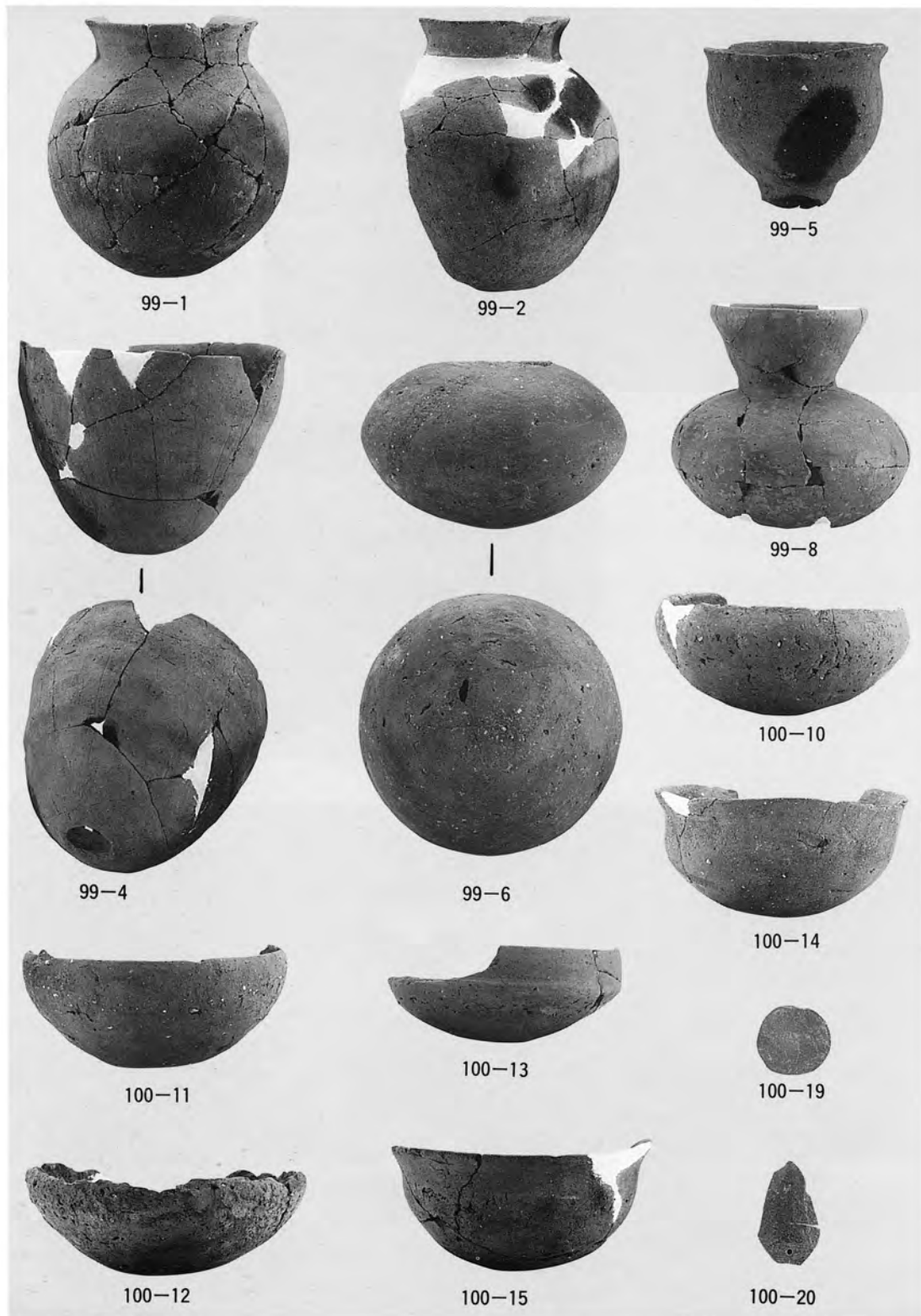


第17号住居跡遺物出土状況

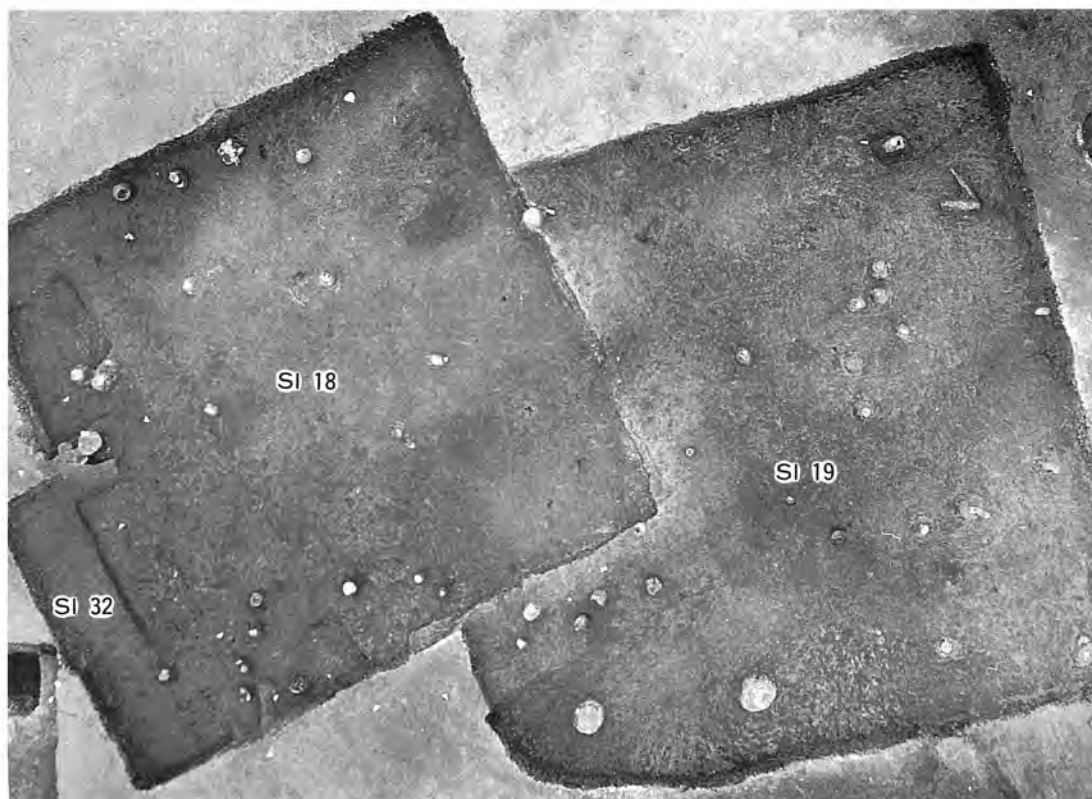
第17号住居跡遺物出土状況



第17号住居跡出土土器



第17号住居跡出土遺物



第18・19・32号住居跡



第18号住居跡竈



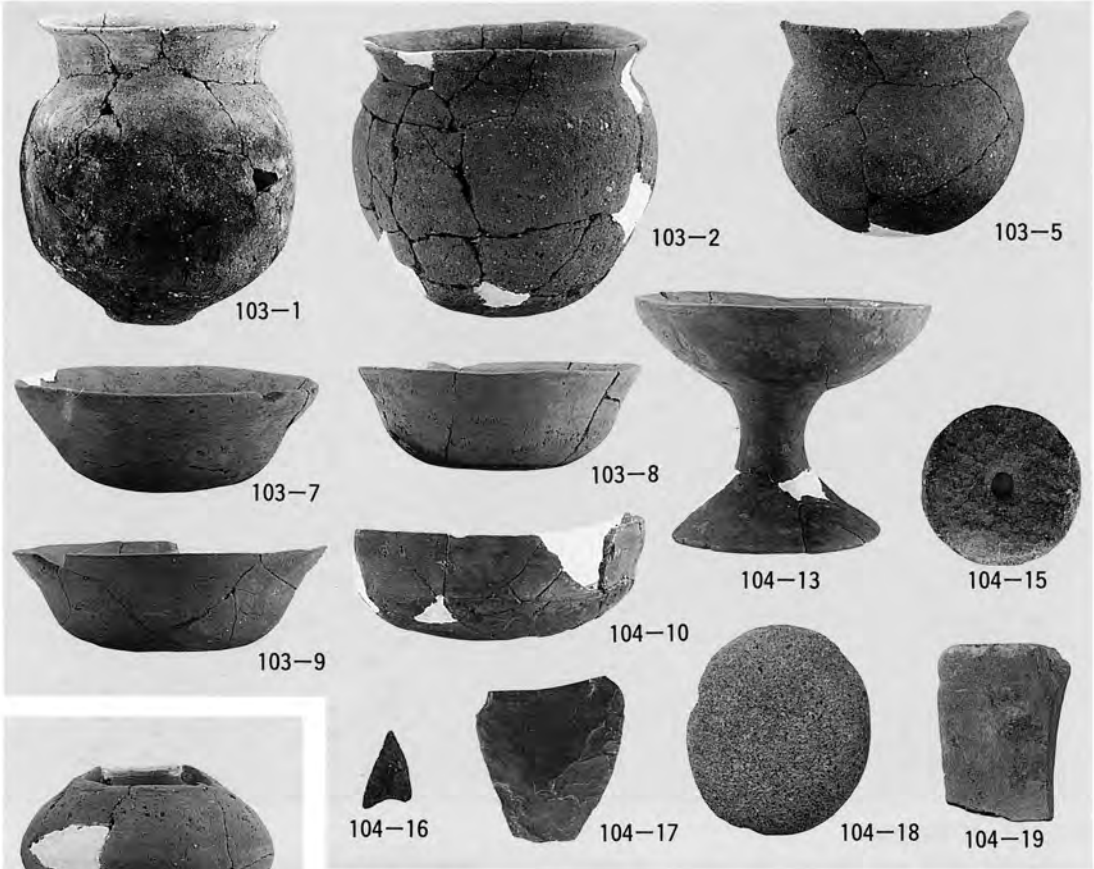
第19号住居跡遺物出土状況



第18・32号住居跡遺物出土状況



第32号住居跡竈

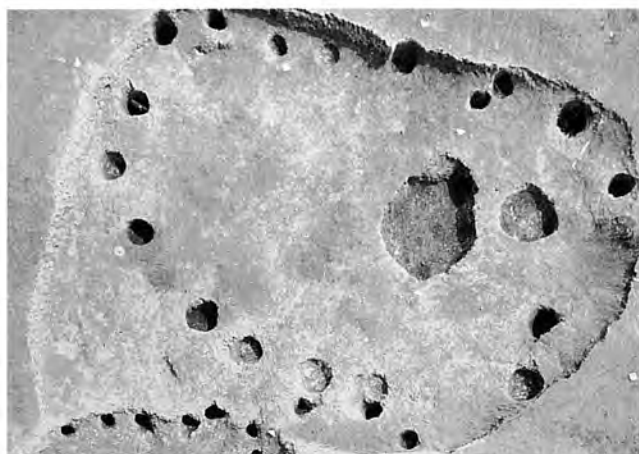


第18号住居跡出土遺物

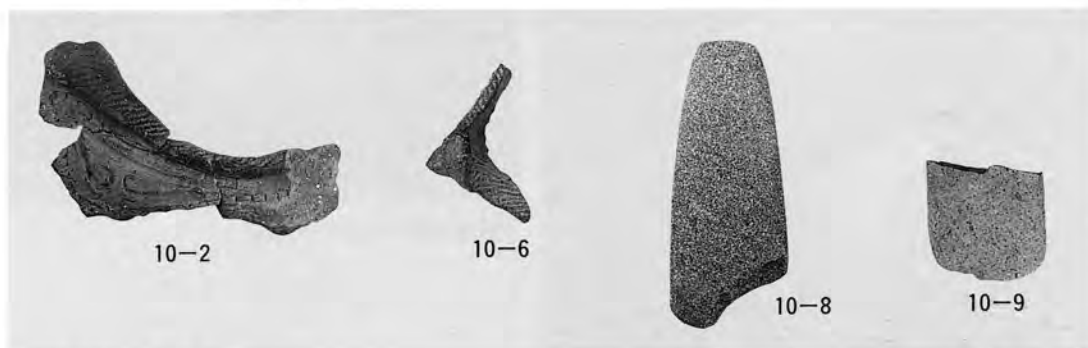


第19号住居跡出土遺物

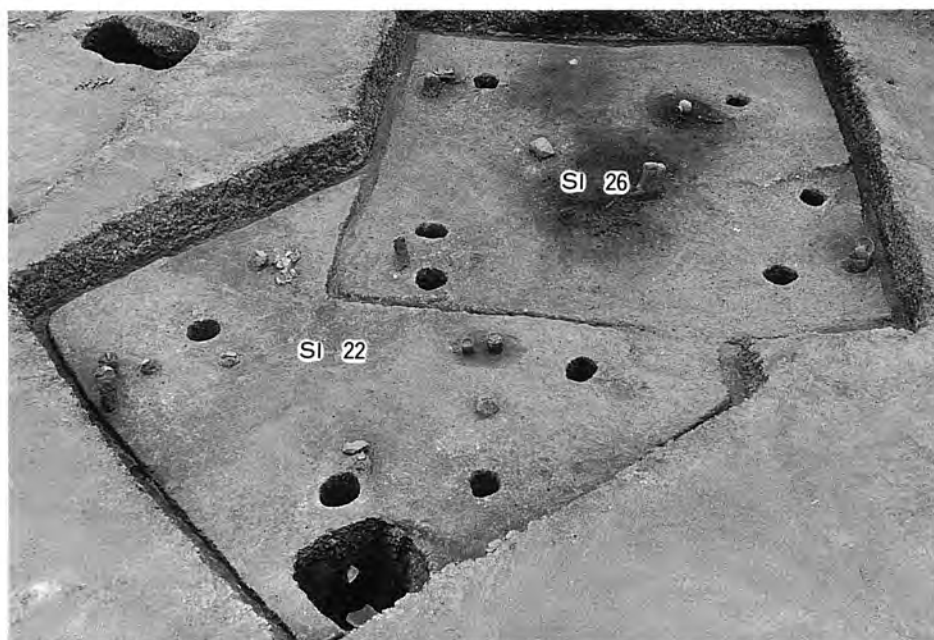
第32号住居跡出土遺物



第21号住居跡



第21号住居跡出土遺物



第22・26号住居跡



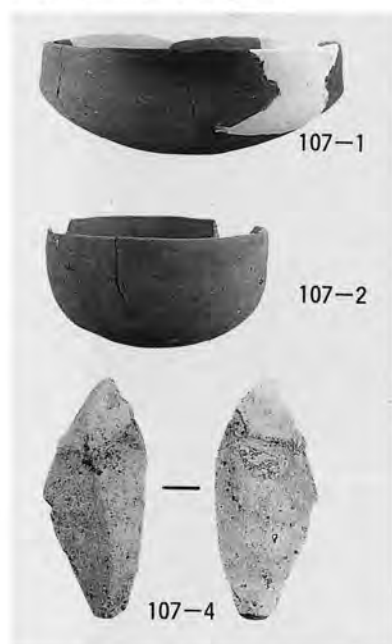
第22号住居跡遺物出土状況



第26号住居跡遺物出土状況



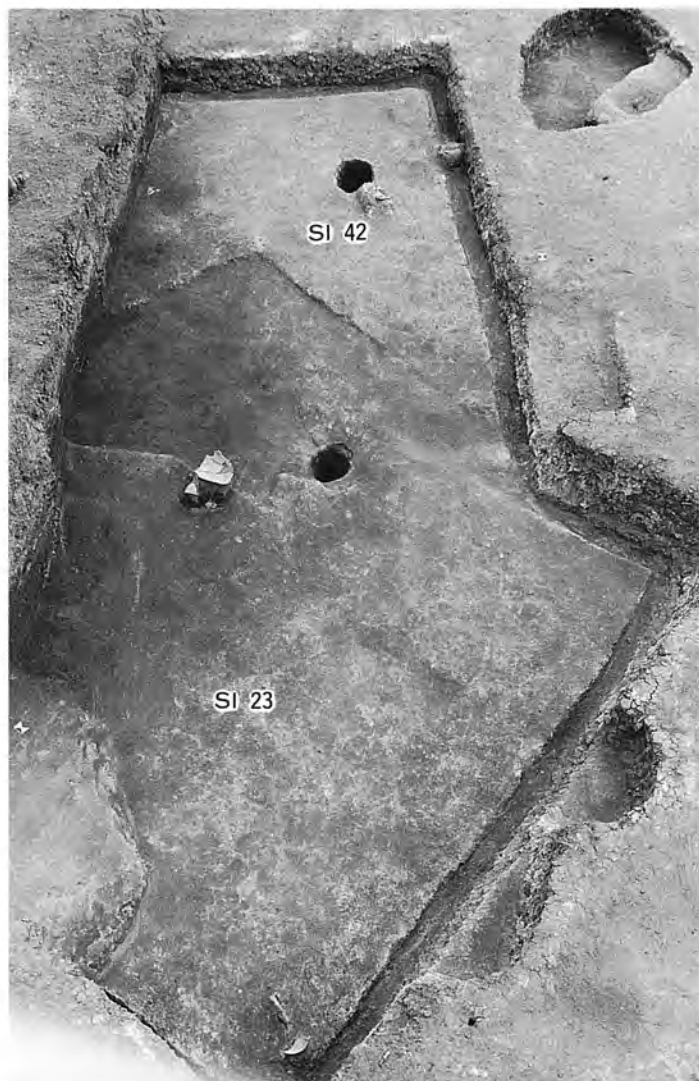
第26号住居跡遺物出土状況



第22号住居跡出土遺物



第26号住居跡出土遺物



第23・42号住居跡



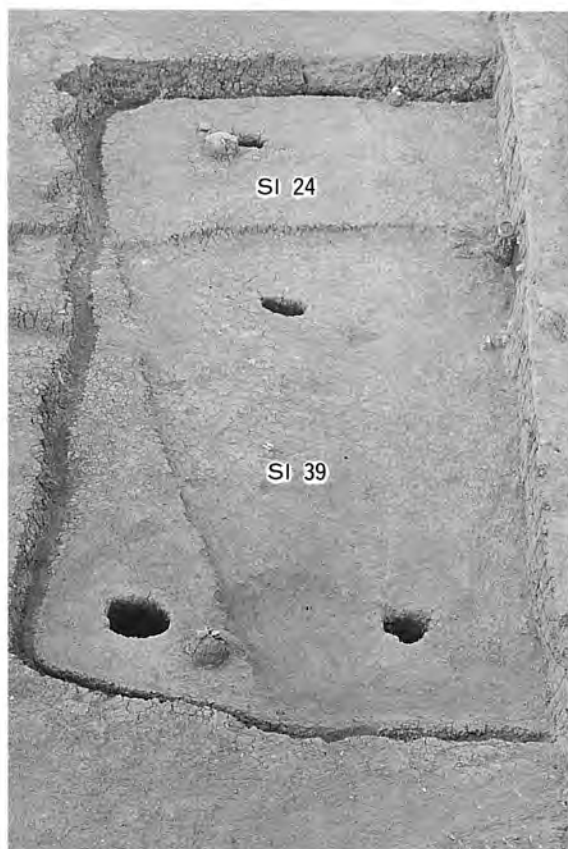
第23号住居跡竈遺物出土状況



第23号住居跡遺物出土状況



第23号住居跡出土遺物



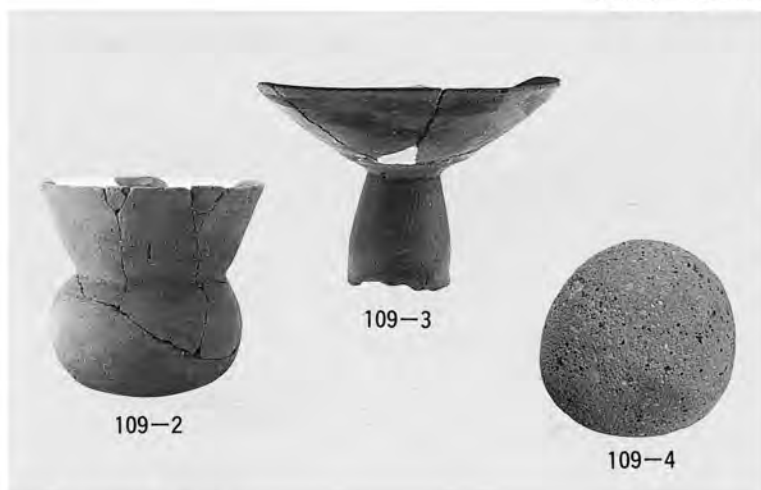
第24・39号住居跡



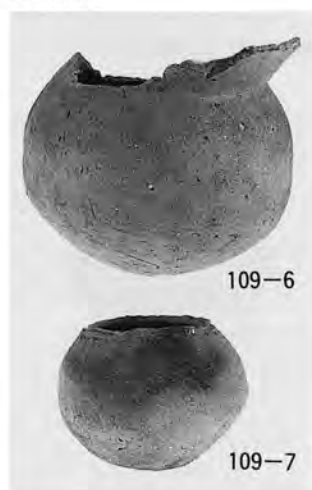
第24号住居跡遺物出土状況



第39号住居跡遺物出土状況



第24号住居跡出土遺物



第39号住居跡出土遺物



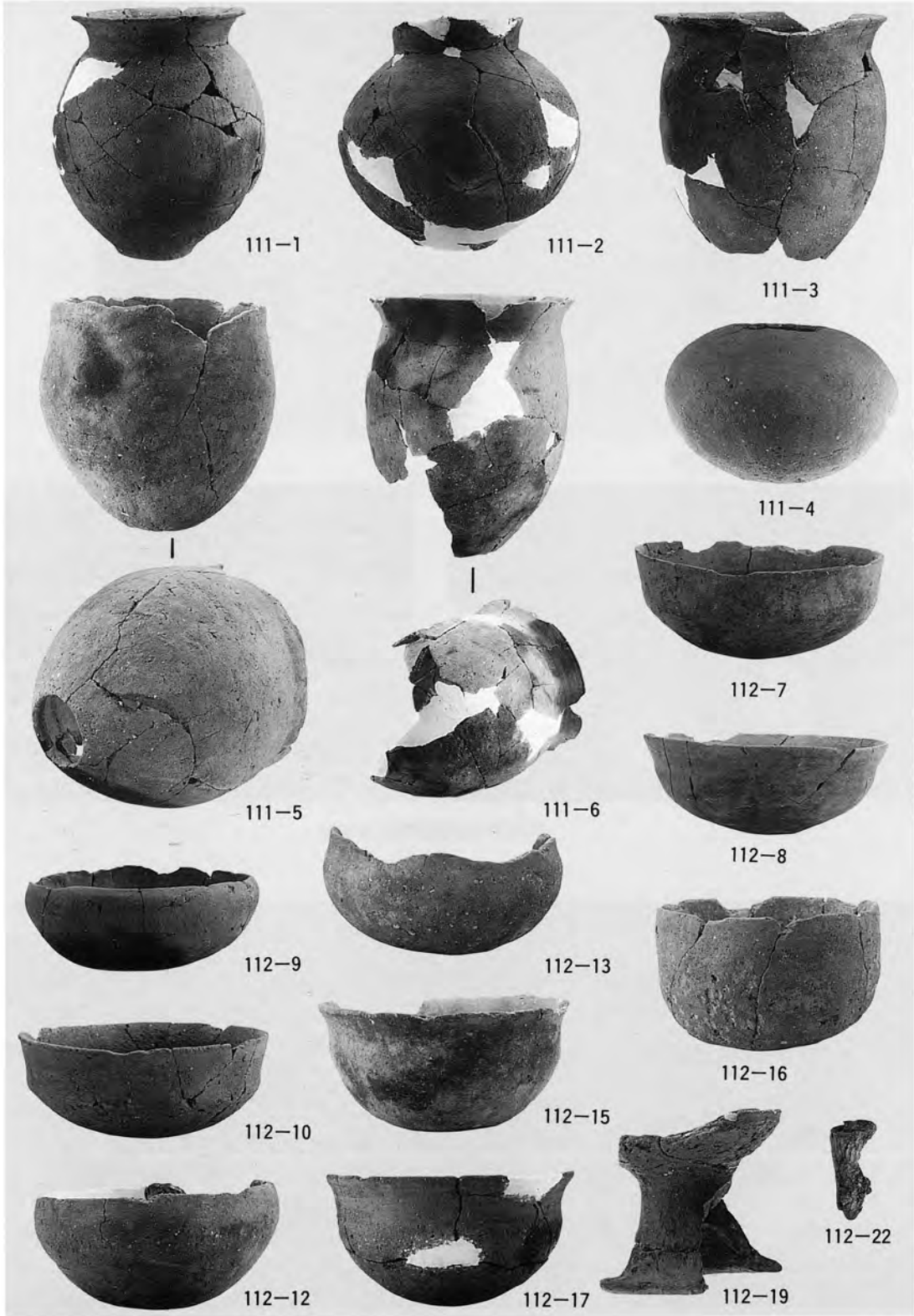
第25・43号住居跡



第25号住居跡遺物出土状況



第25号住居跡出土土器



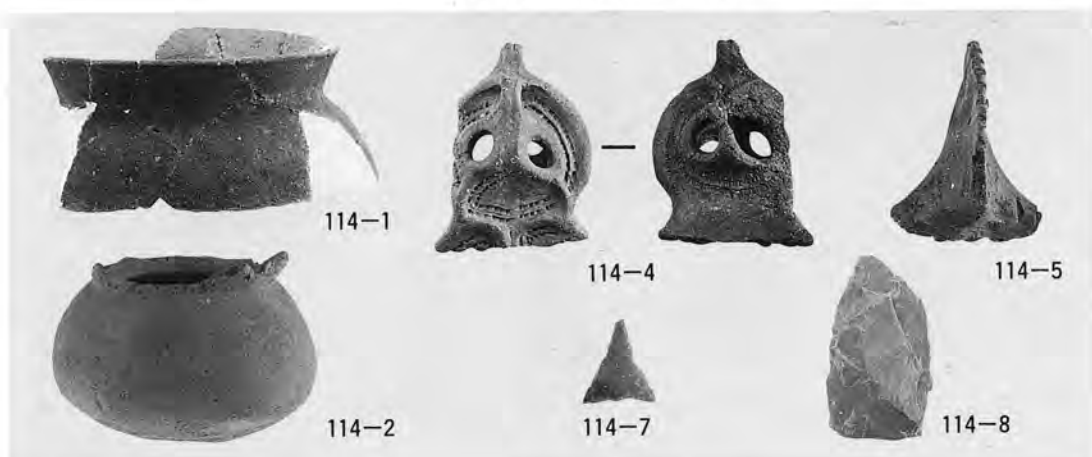
第25号住居跡出土遺物



第27号住居跡



第27号住居跡遺物出土状況



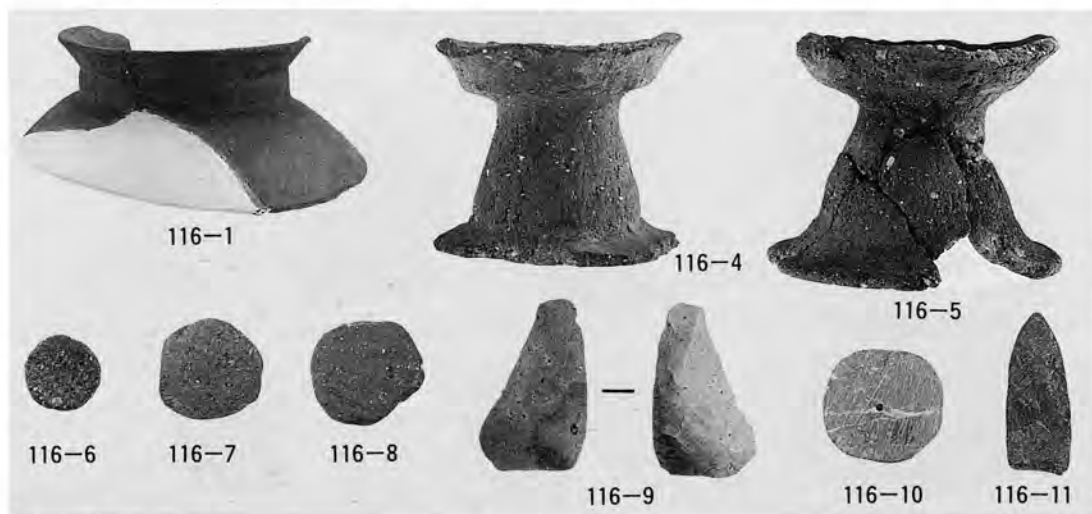
第27号住居跡出土遺物



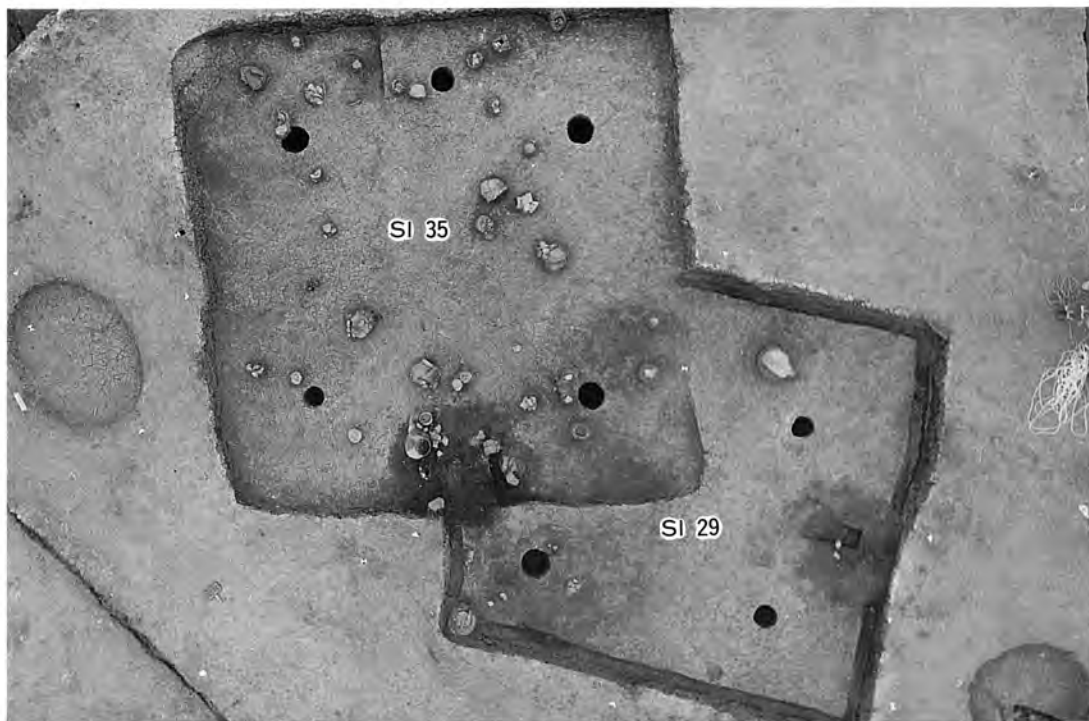
第28号住居跡



第28号住居跡遺物出土状況



第28号住居跡出土遺物



第29・35号住居跡



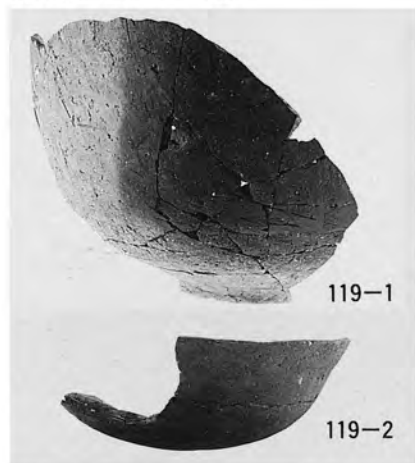
第35号住居跡遺物出土状況



第35号住居跡遺物出土状況



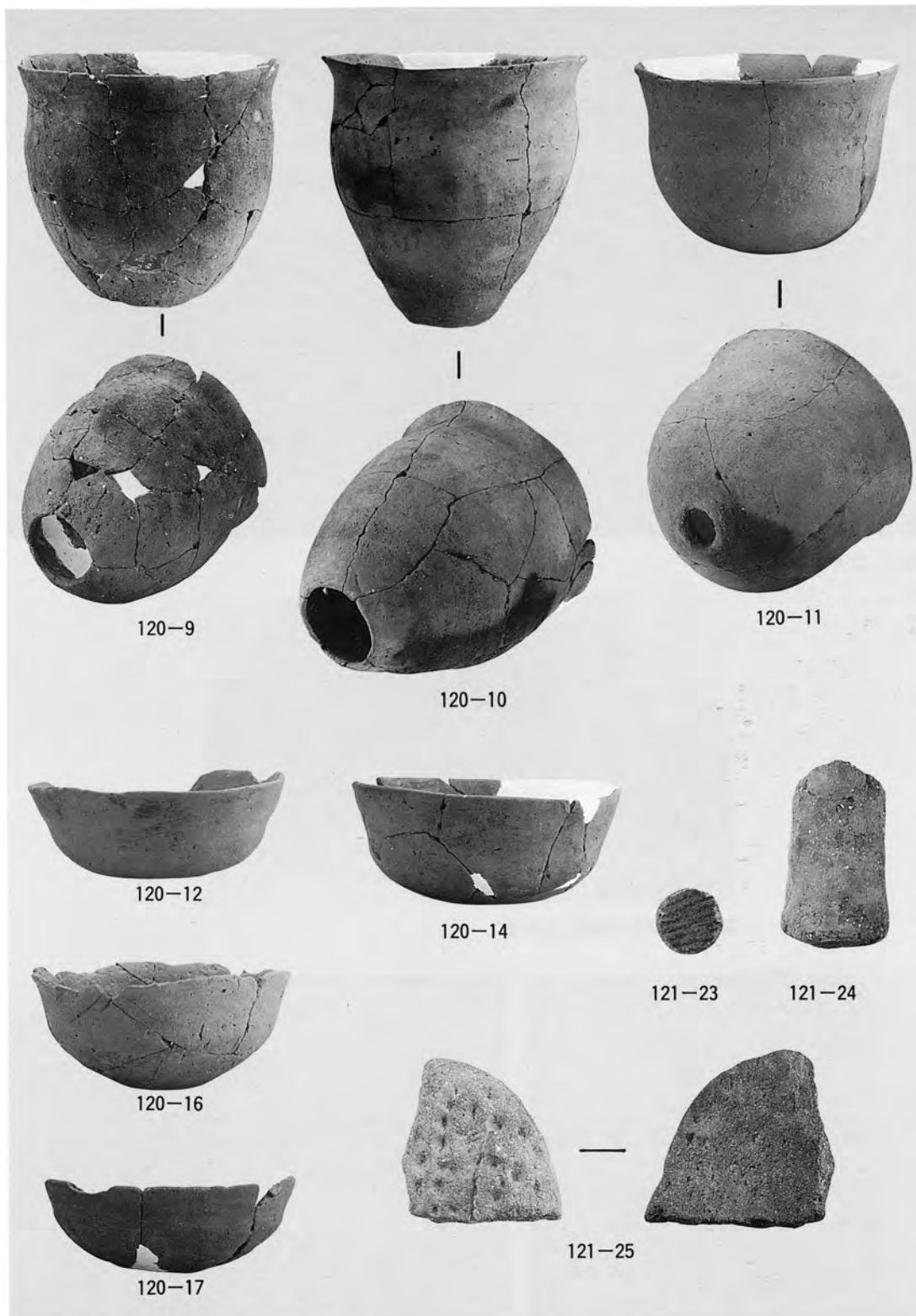
第35号住居跡出土土器



第29号住居跡出土遺物



第35号住居跡出土遺物



第35号住居跡出土遺物



第30・31号住居跡



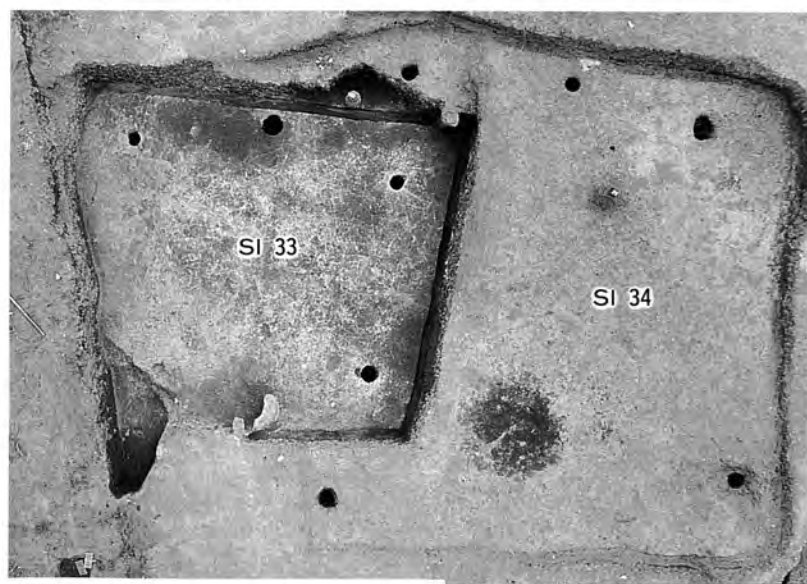
第31号住居跡遺物出土状況



第31号住居跡遺物出土状況



第31号住居跡出土遺物



第33・34号住居跡



第33・34号住居跡遺物出土状況



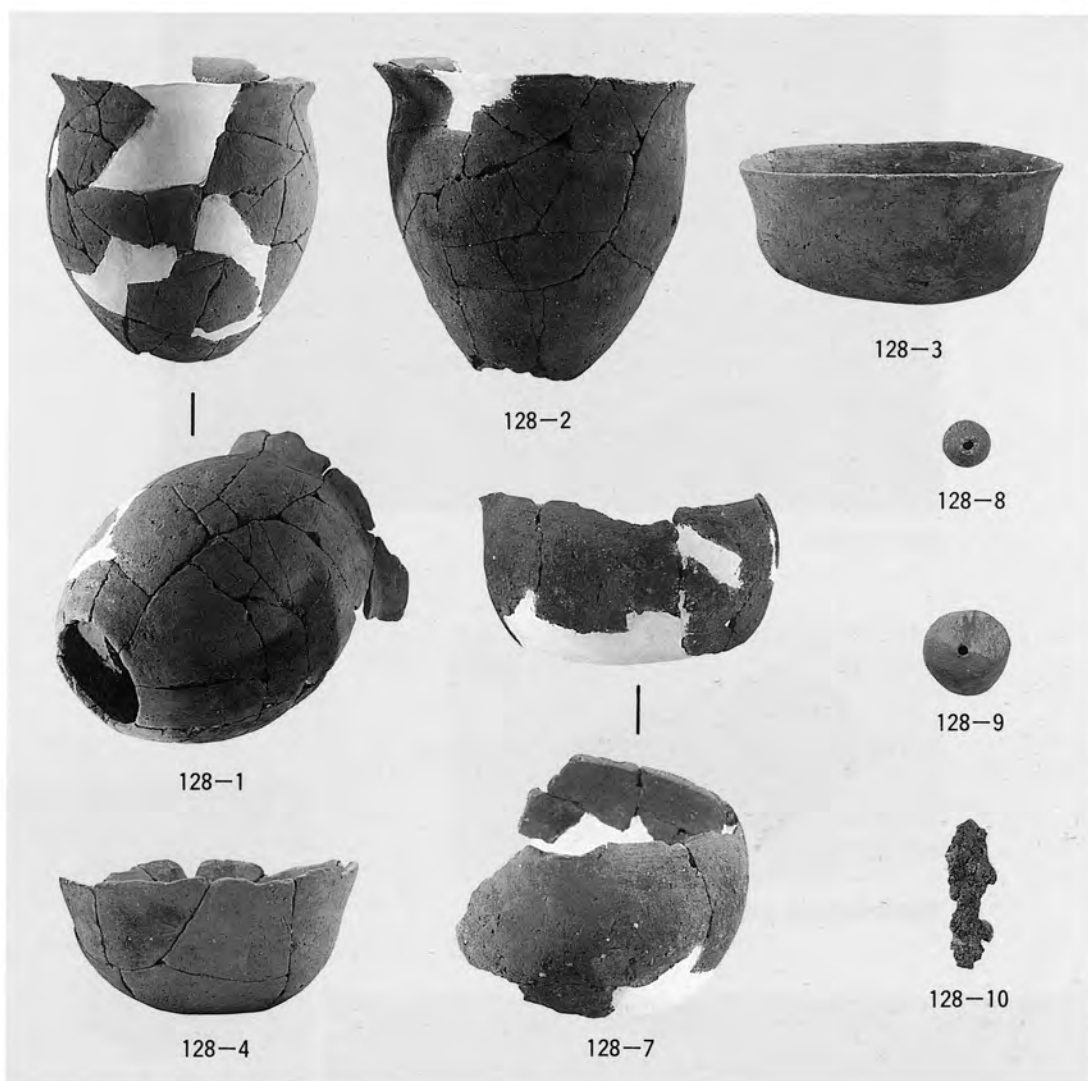
第33号住居跡遺物出土状況



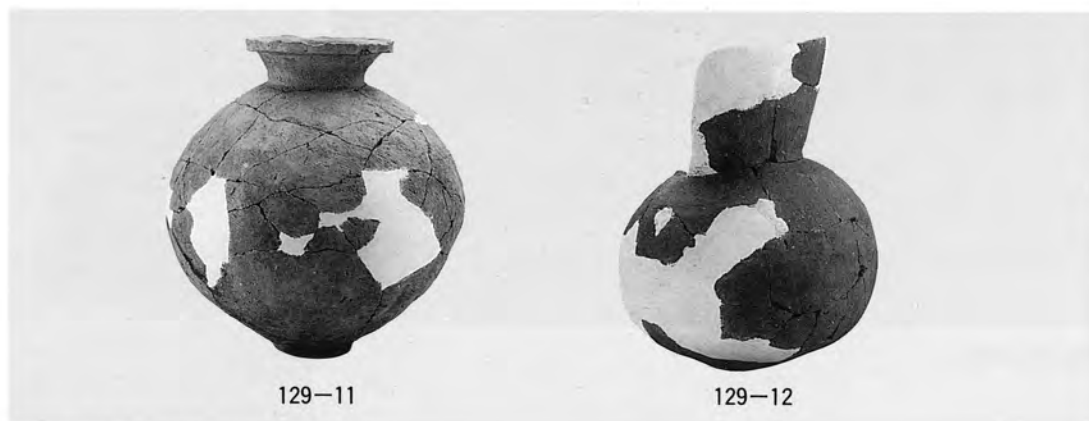
第34号住居跡遺物出土状況

第34号住居跡遺物出土状況





第33号住居跡出土遺物



第34号住居跡出土遺物



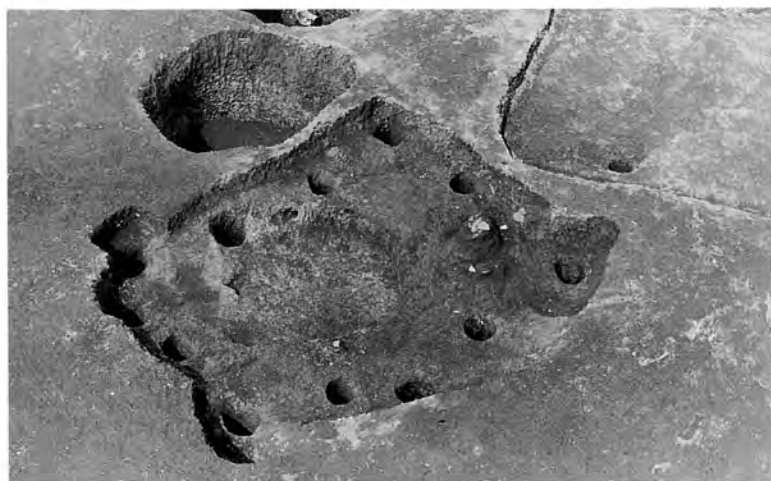
第38号住居跡



第38号住居跡出土遺物



第45号住居跡出土遺物



第45号住居跡



第1号土坑



第4号土坑



第5・6号土坑



第7号土坑



第7号土坑遺物出土狀況



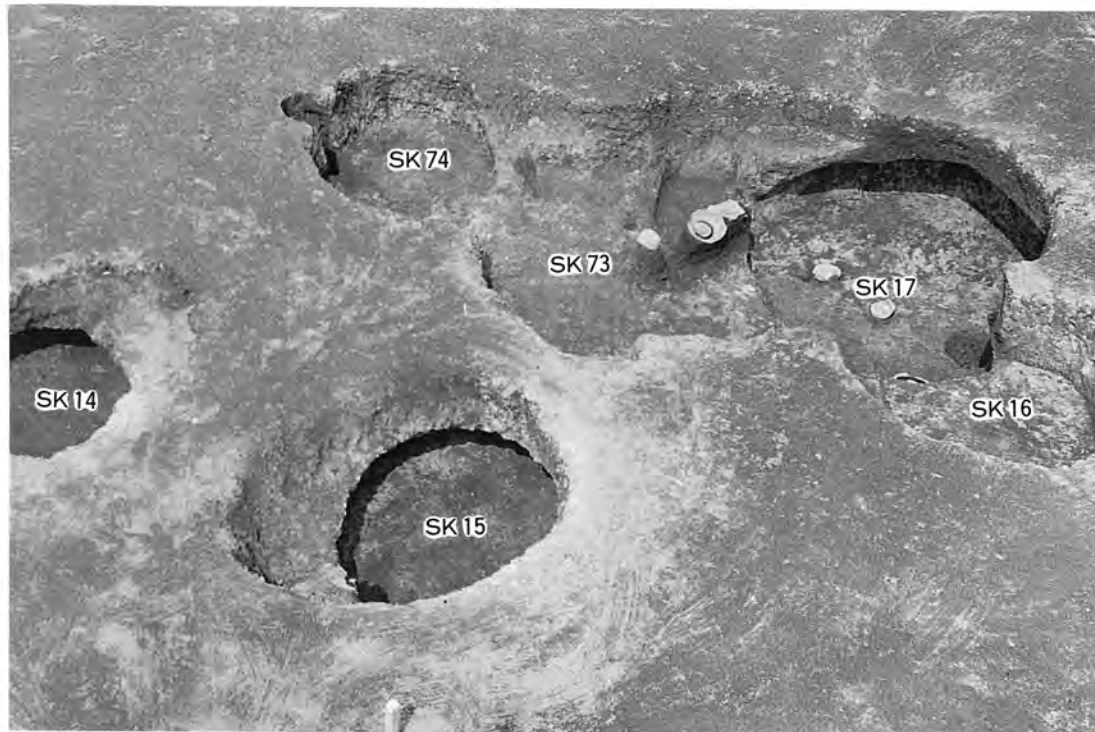
第10号土坑



第12・13号土坑



第14号土坑



第14・15・16・17・73・74土坑



第15号土坑



第19・20・153号土坑



第21号土坑



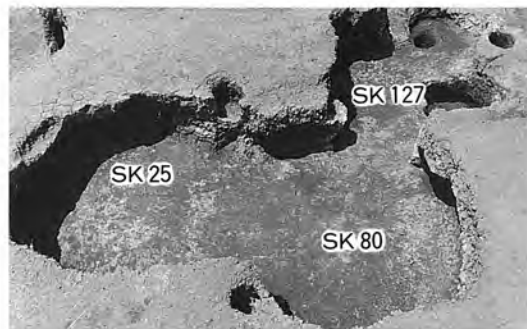
第22号土坑



第26・28・29・30・31号土坑



第23号土坑遺物出土状況



第25・80・127号土坑



第35・95号土坑



第36号土坑



第37号土坑遺物出土状況



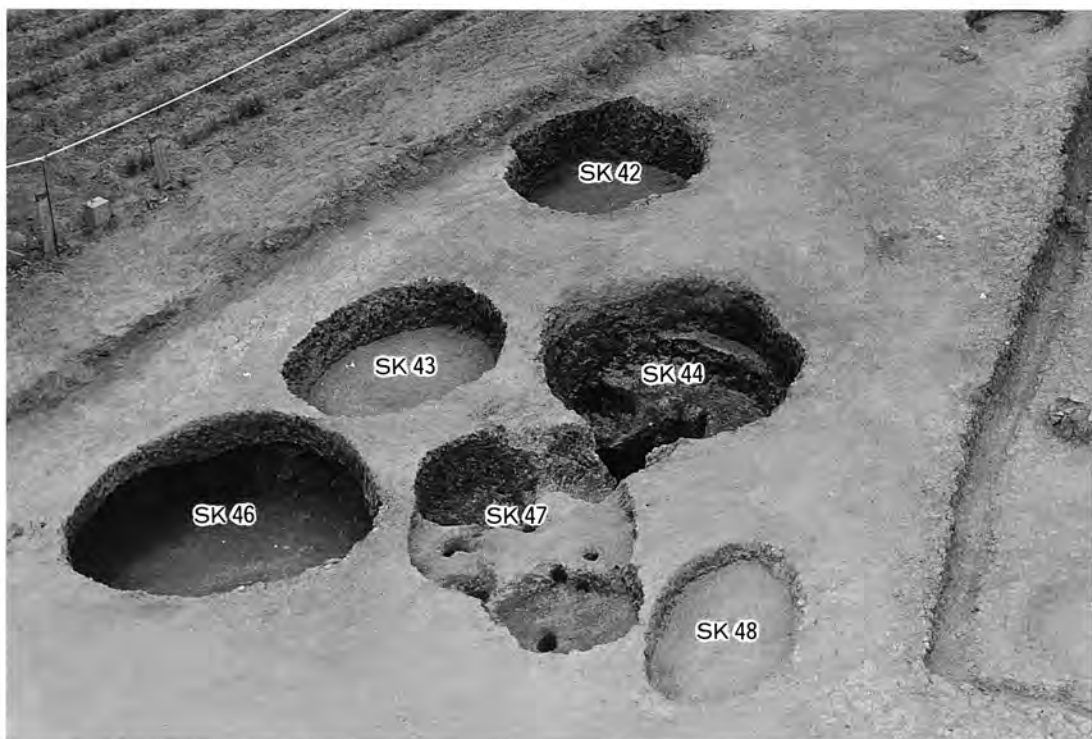
第39・40・41号土坑



第42号土坑



第45号土坑



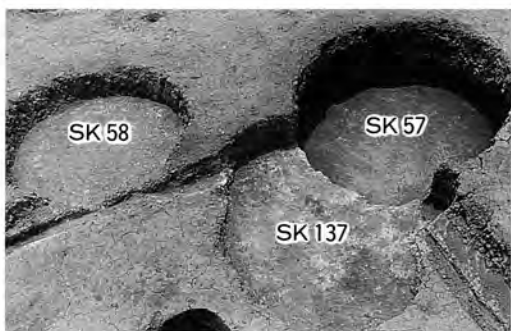
第42・43・44・46・47・48号土坑



第46号土坑遺物出土状況



第52号土坑遺物出土状況



第57・58・137号土坑



第59号土坑



第59号土坑遺物出土状況



第60号土坑



第61号土坑



第66号土坑



第65号土坑遺物出土狀況



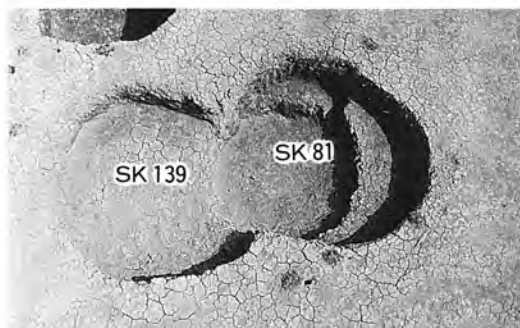
第68号土坑



第77号土坑



第78号土坑



第81・139号土坑



第88号土坑



第90号土坑



第91·149号土坑



第92号土坑



第94号土坑



第95号土坑



第99号土坑



第119号土坑



第120土坑



第121号土坑遺物出土狀況



第121号土坑



第122号土坑



第125号土坑遺物出土狀況



第103・106号土坑



第104号土坑



第105号土坑



第109号土坑遺物出土狀況



第110号土坑



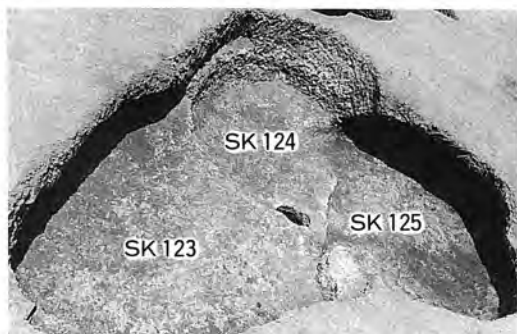
第114号土坑



第115号土坑



第115号土坑遺物出土狀況



第123·124·125号土坑



第126号土坑



第141·142号土坑



第144号土坑



第145号土坑



第151号土坑



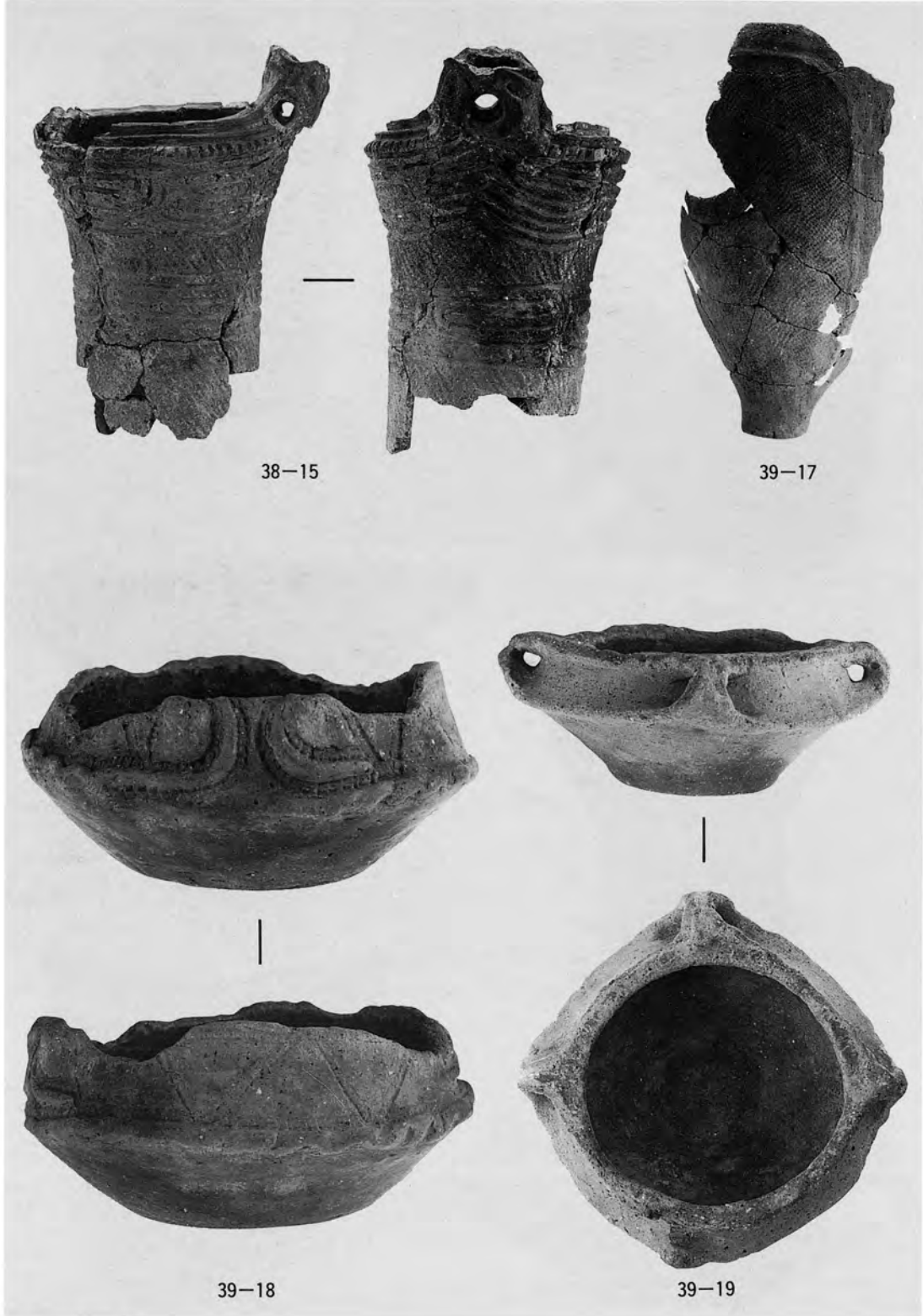
第161号土坑



第1号屋外炉



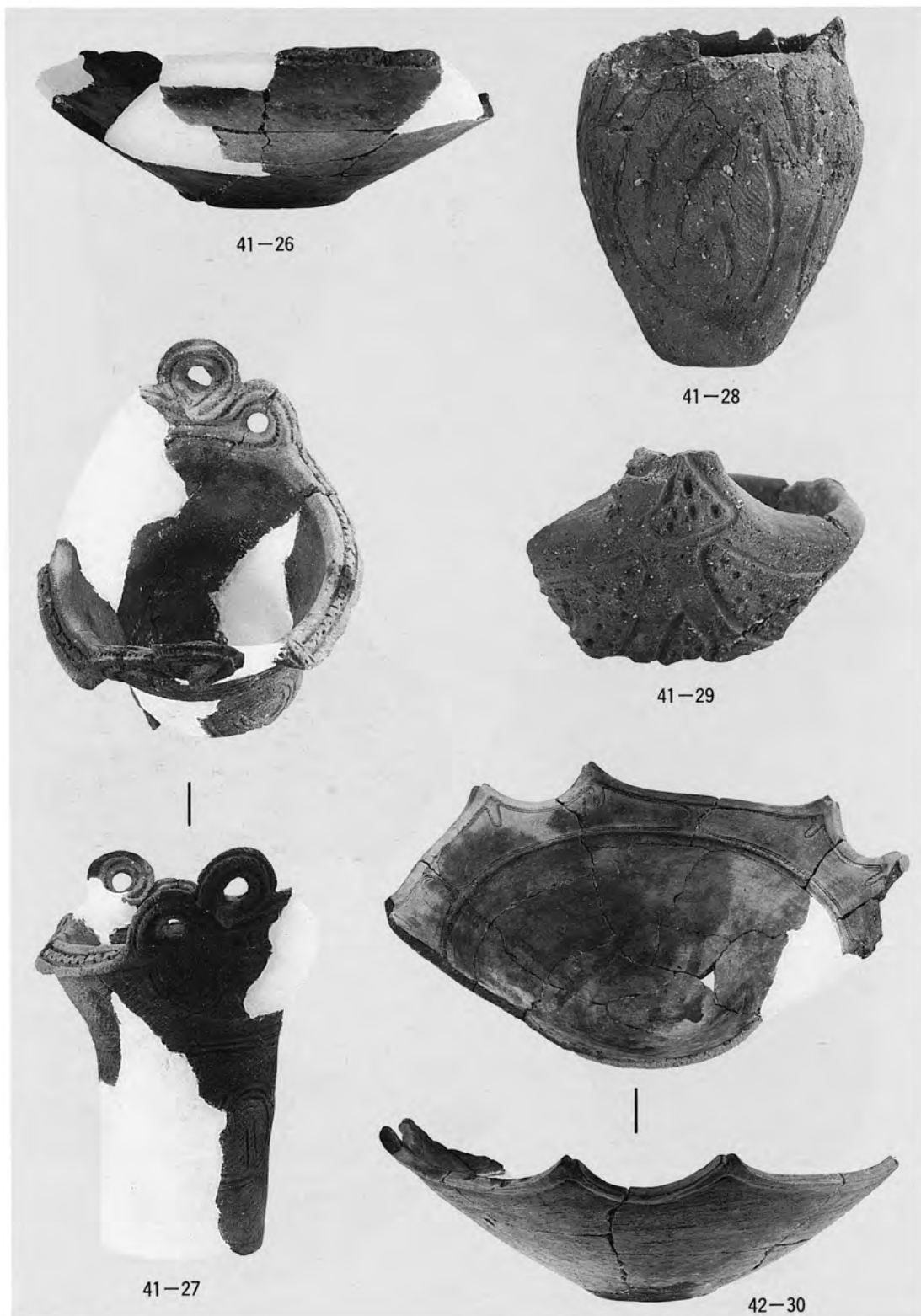
土坑出土土器(1)



土坑出土土器(2)



土坑出土土器(3)



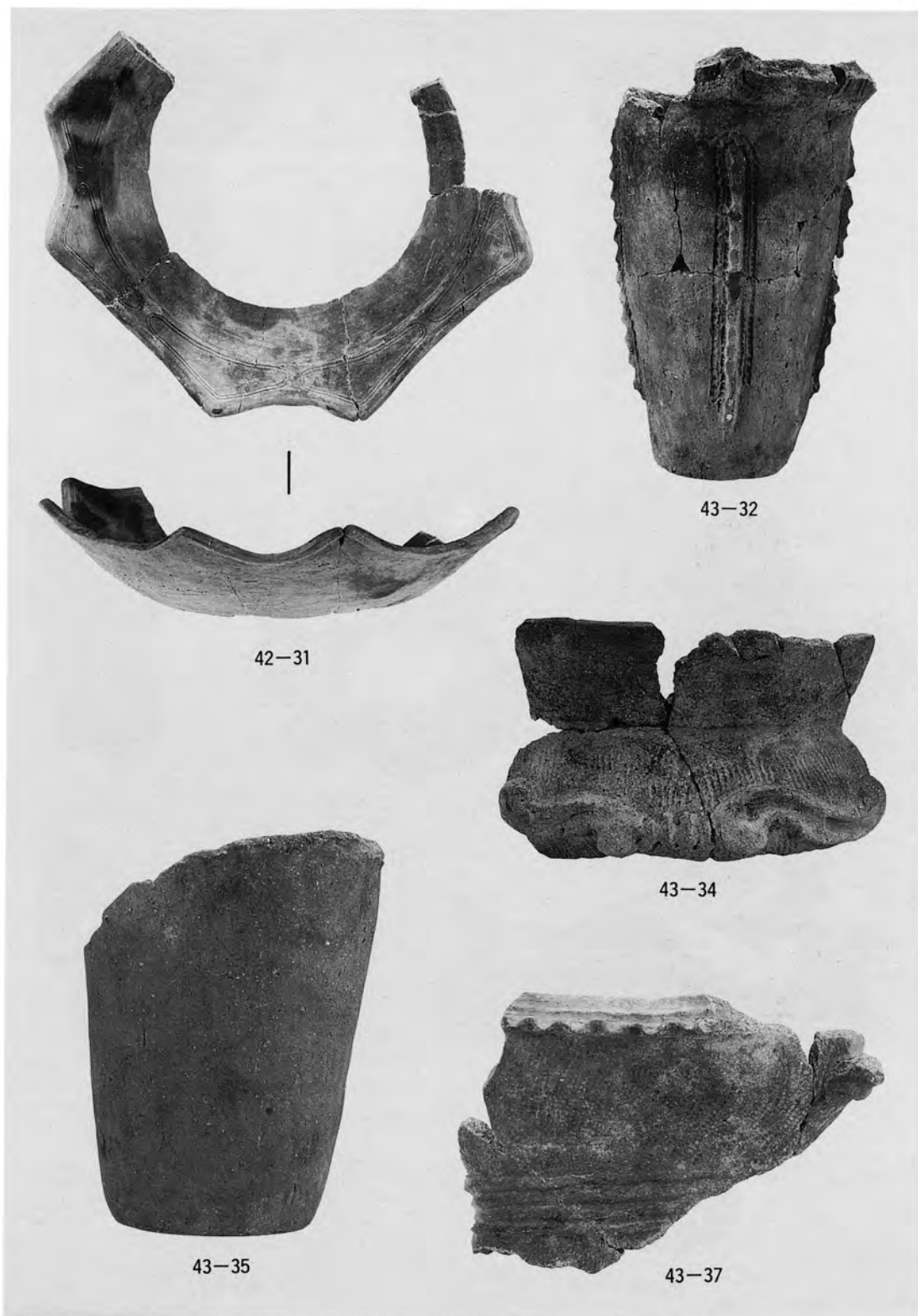
41-26

41-28

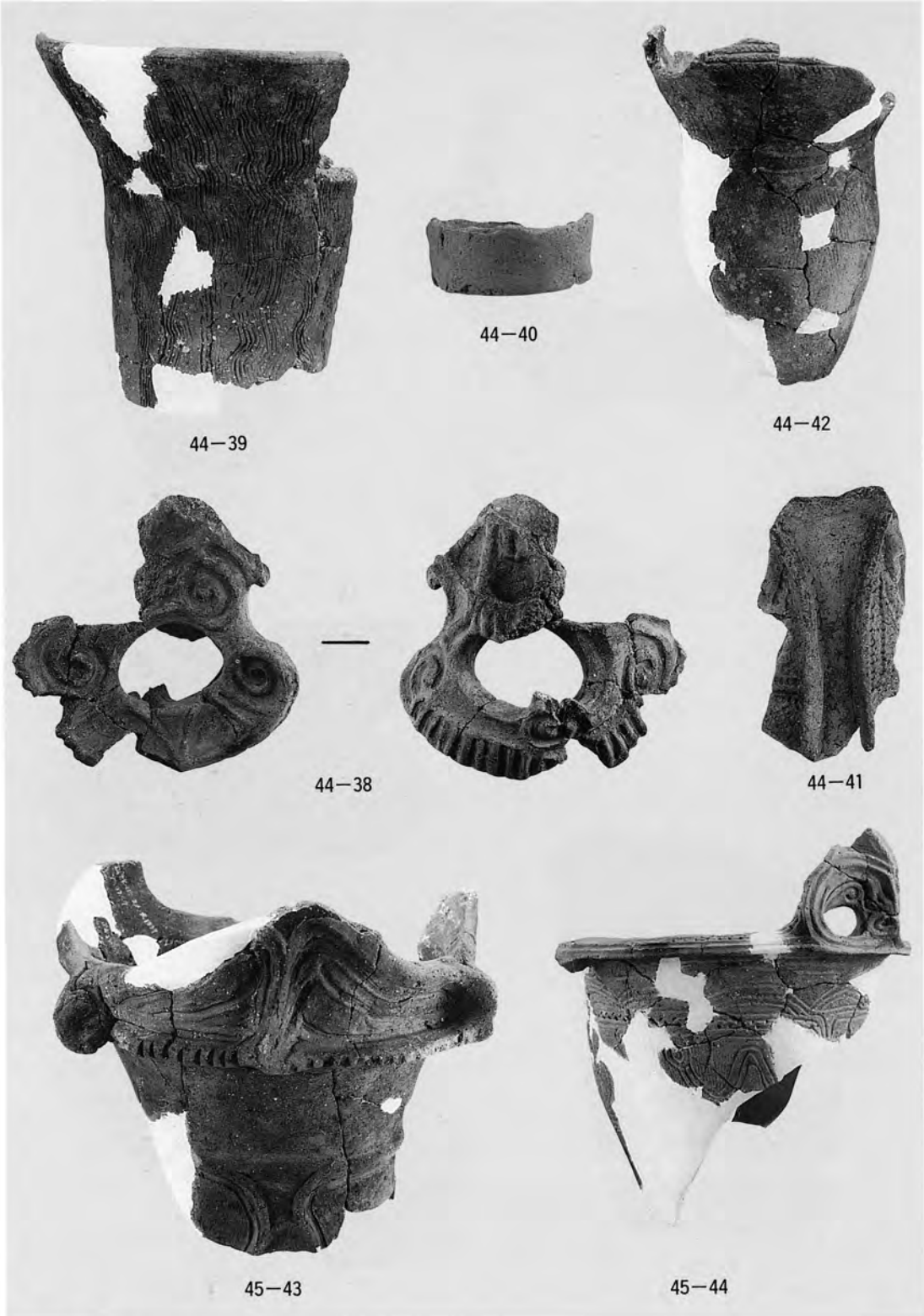
41-29

41-27

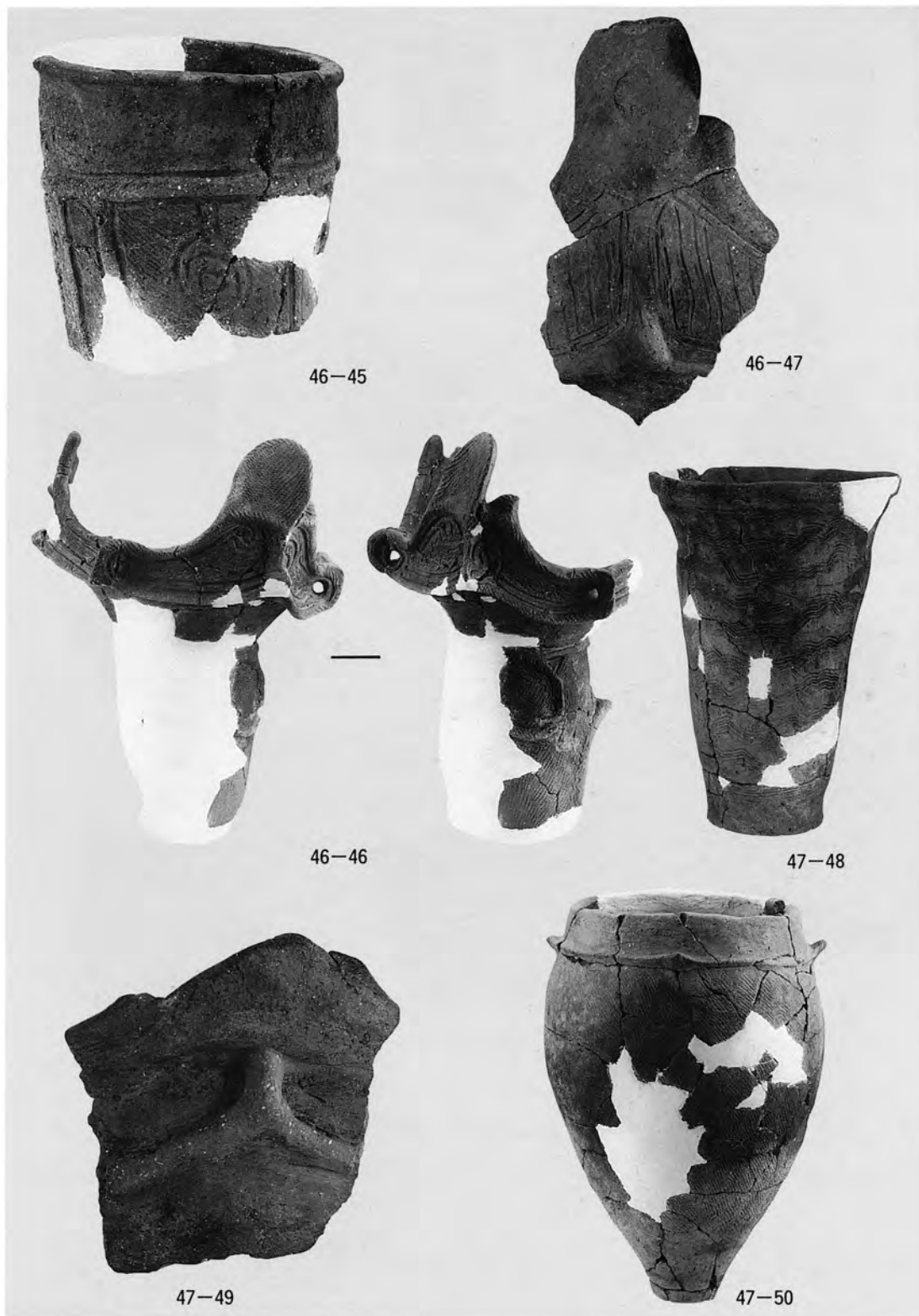
42-30



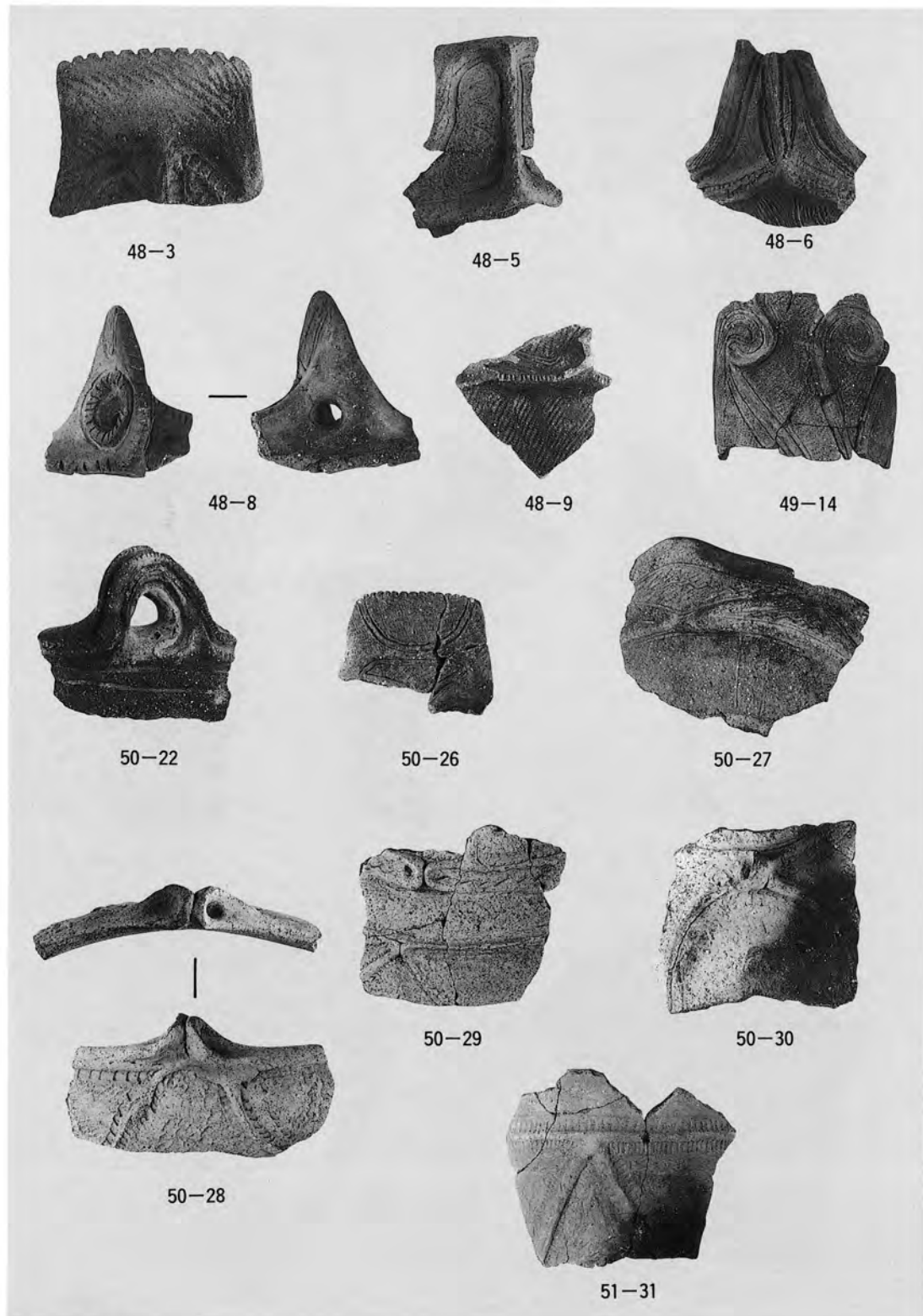
土坑出土土器(5)



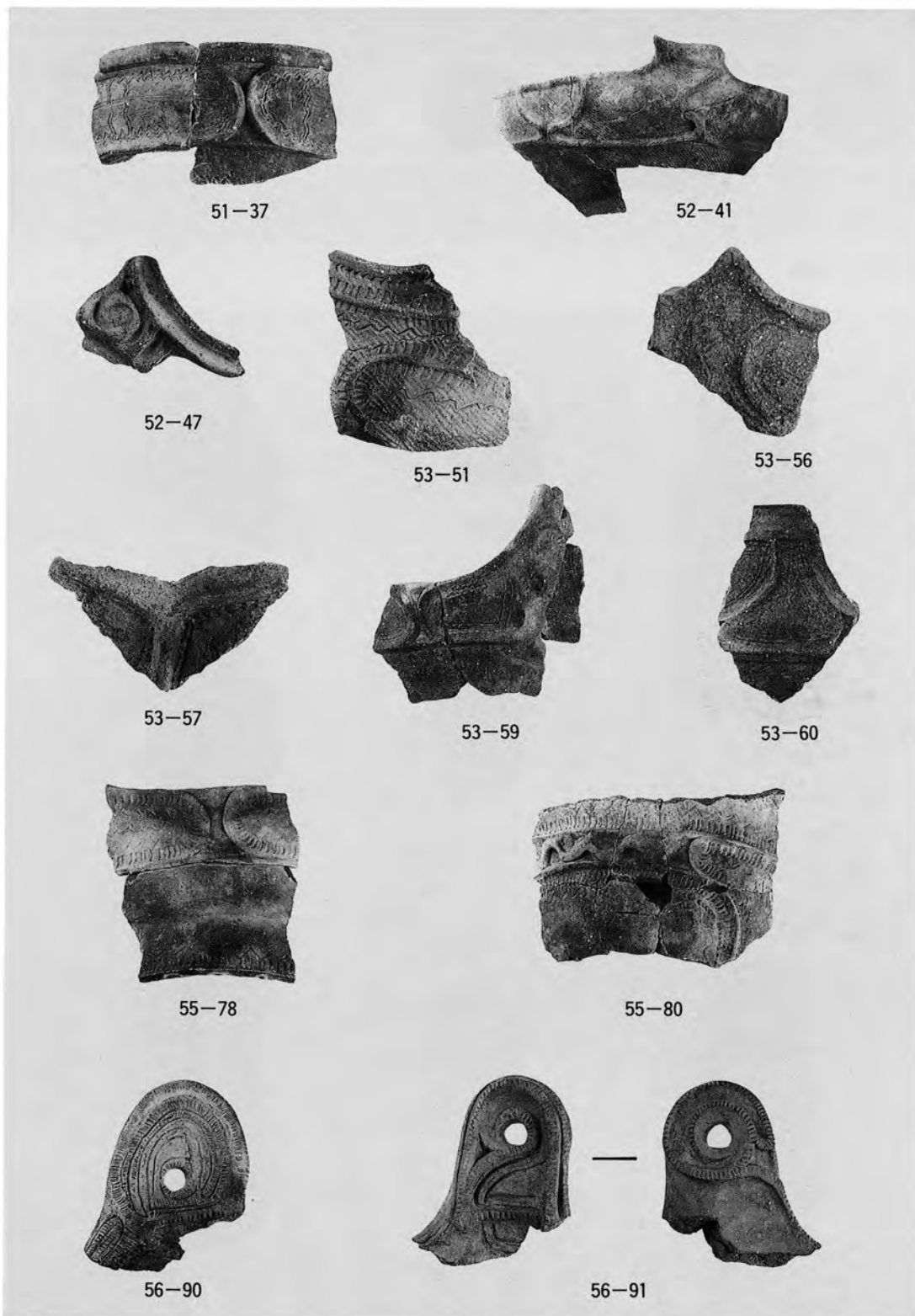
土坑出土土器(6)



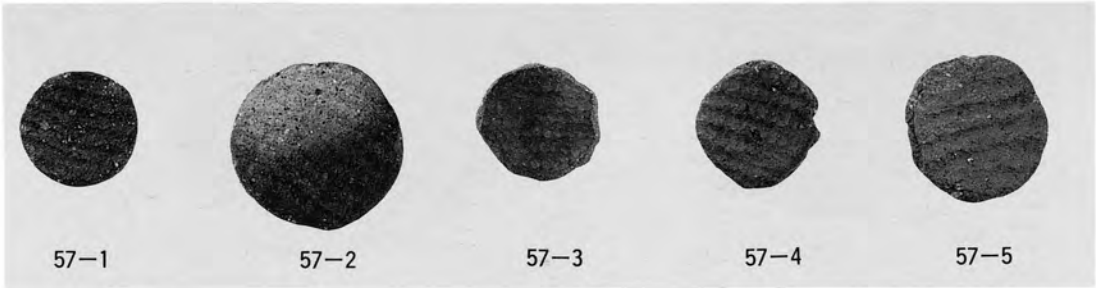
土坑出土土器(7)



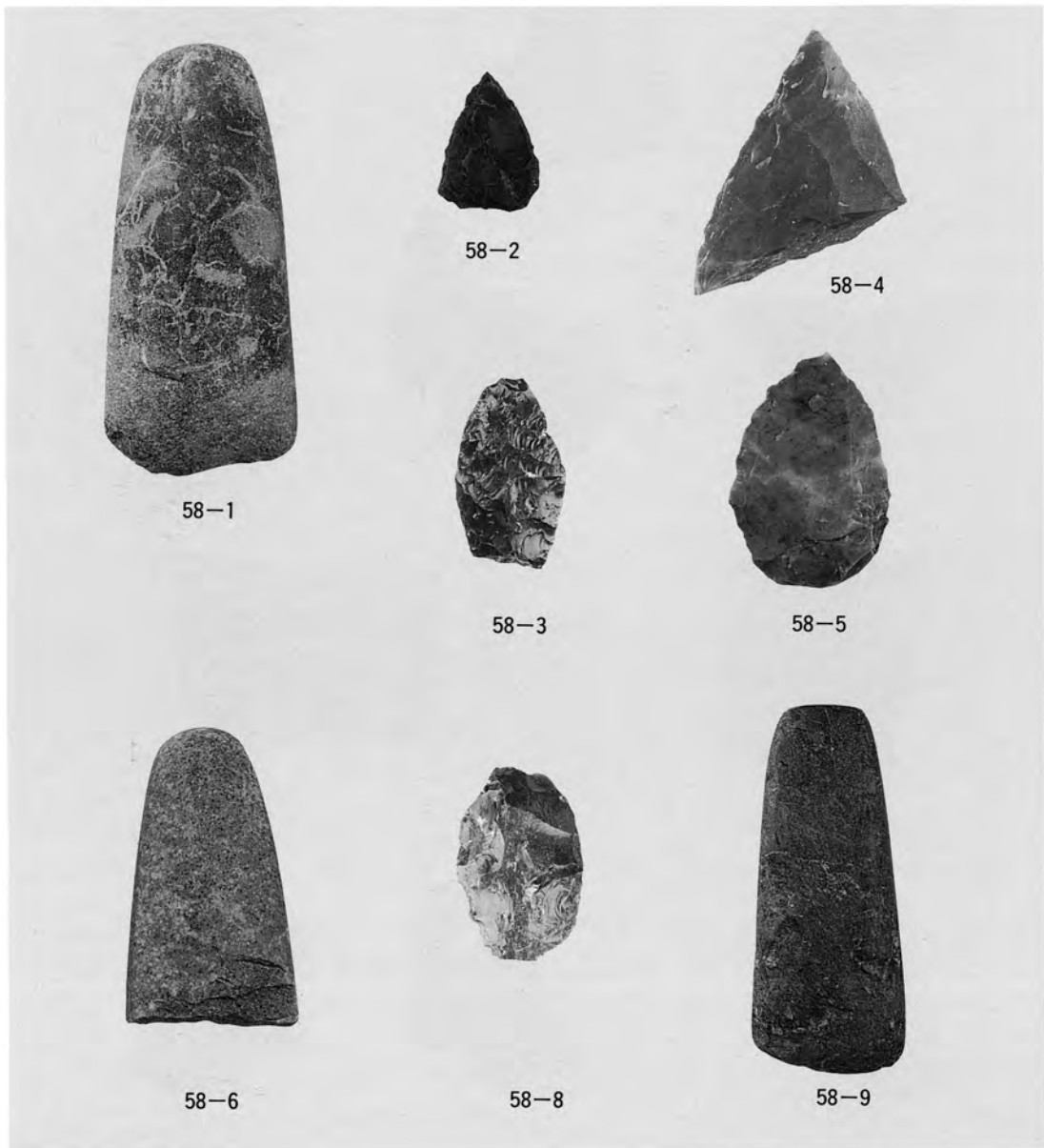
土坑出土土器(8)



土坑出土土器(9)



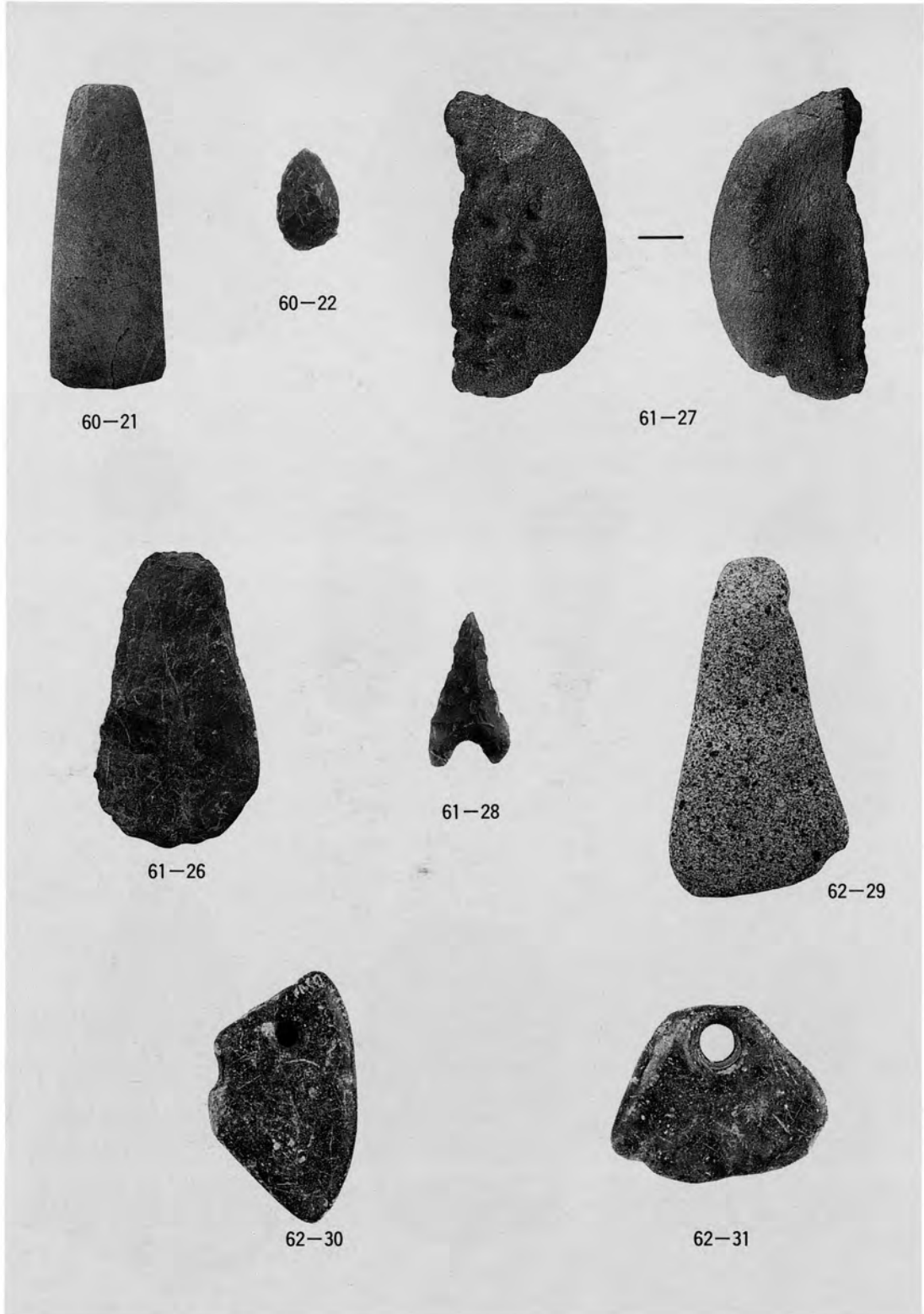
土坑出土土製品



土坑出土石器・石製品(1)



土坑出土石器・石製品(2)





第1号塚



第1号塚出土遺物



第1号道路跡



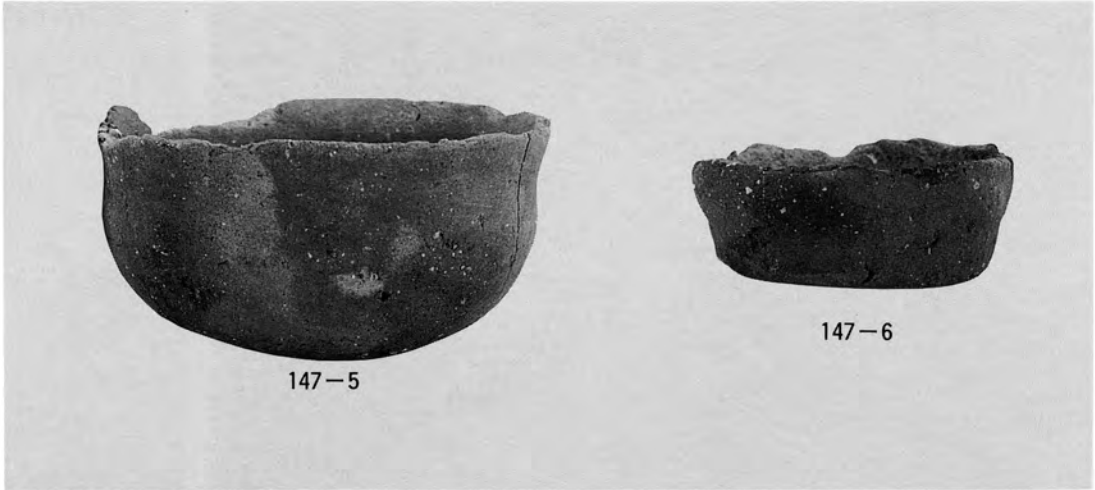
第1号道路跡
出土遺物



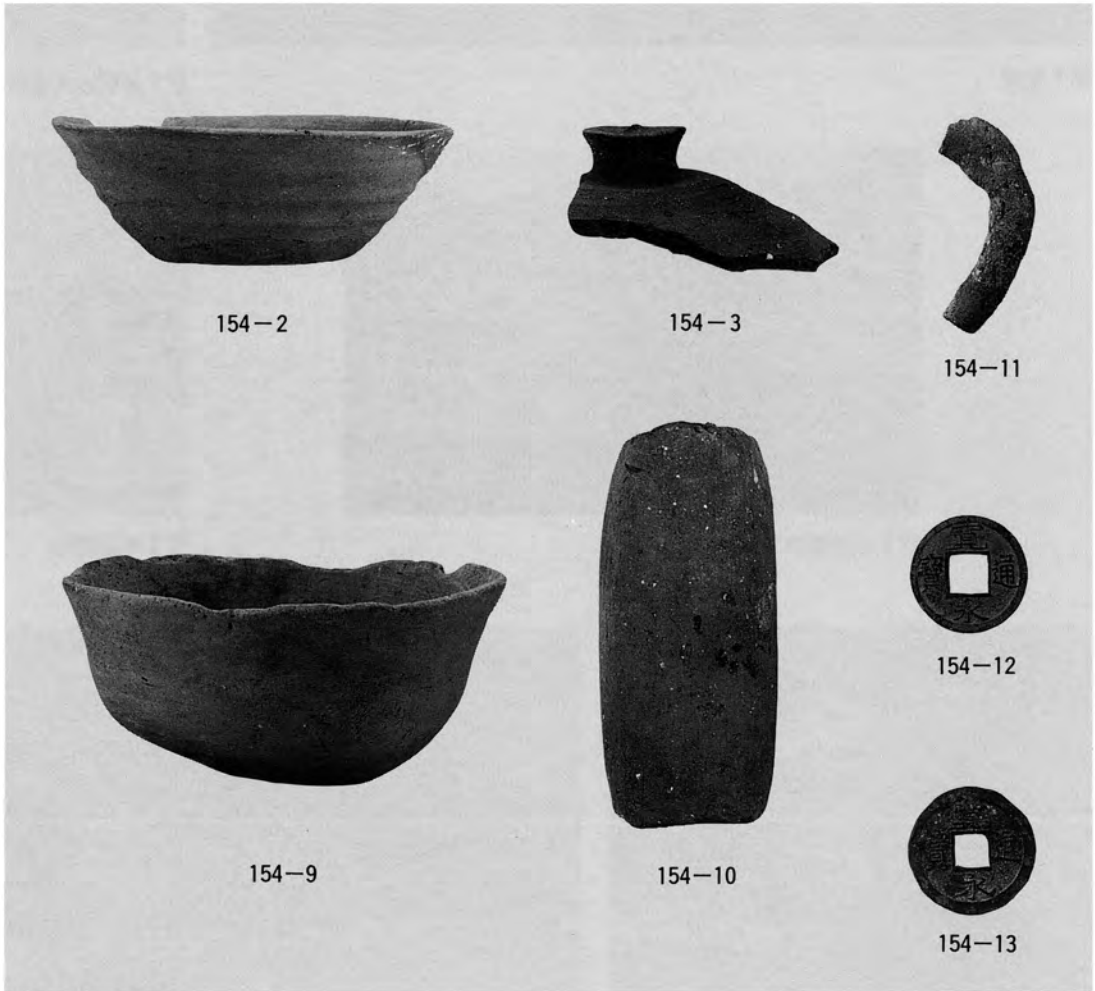
第1号掘立柱建物跡



第2号掘立柱建物跡



時期不明土坑出土遺物



遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第73集

一般県道西小埜真岡線道路改良
工事地内埋蔵文化財調査報告書

裏山遺跡

平成4年3月25日 印刷

平成4年3月31日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号

☎ 0292-25-6587

印刷 ワタヒキ印刷株式会社
水戸市城東1丁目5番21号

☎ 0292-21-4381

